EB
ENTERTAIMENT
BIBLE

エンターティメント
バイブルシリーズ

スペシャリティな世界を
追求するエンタティナー
それがＥ・Ｂシリーズ！

No2

ガンダム大図鑑Part2
グリプス戦争編



好評発売中

COVER IIIUSTRATION KENICHI ISHIBASHI

ENTERTAINMENT BIBLE .1
機動戦士ガンダム
MS大図鑑
【PART.1 一年戦争編】



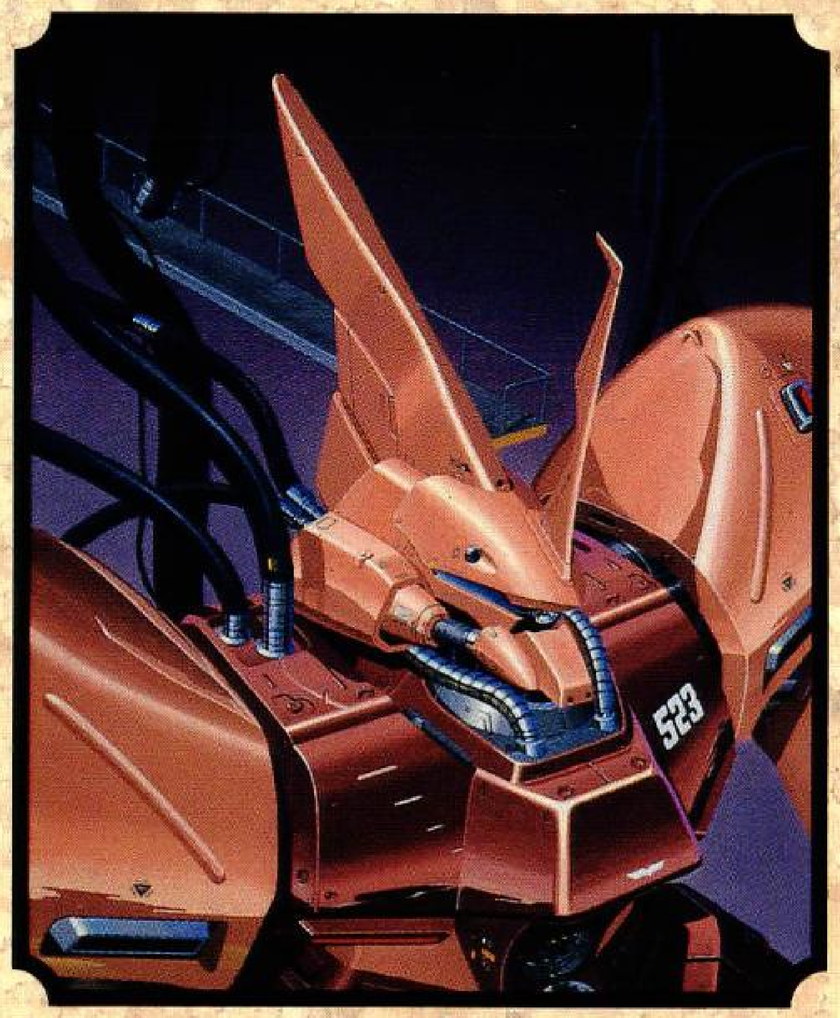
EB
ENTERTAINMENT BIBLE

EB
ENTERTAINMENT BIBLE
1
機動戦士ガンダム
MS大図鑑
【PART.1 一年戦争編】
BANDAI

機動戦士ガンダム

MS大図鑑

【PART.1一年戦争編】



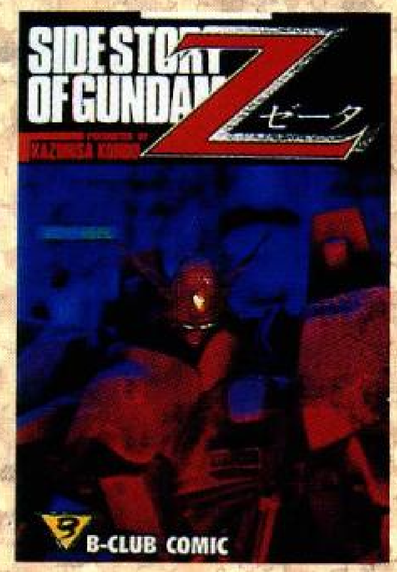
【Mobile Suit GUNDAM.】
【Mobile Suit Variation.】
【Mobile Suit -X(pezh)】
【Mobile Suit GUNDAM 0080】
【～War in the pocket.～】

定価700円
（本体680円）

ISBN4-89189-006-1 C0276 P700E

近藤和久

GUNDAM COMIC



Z（ゼータ）

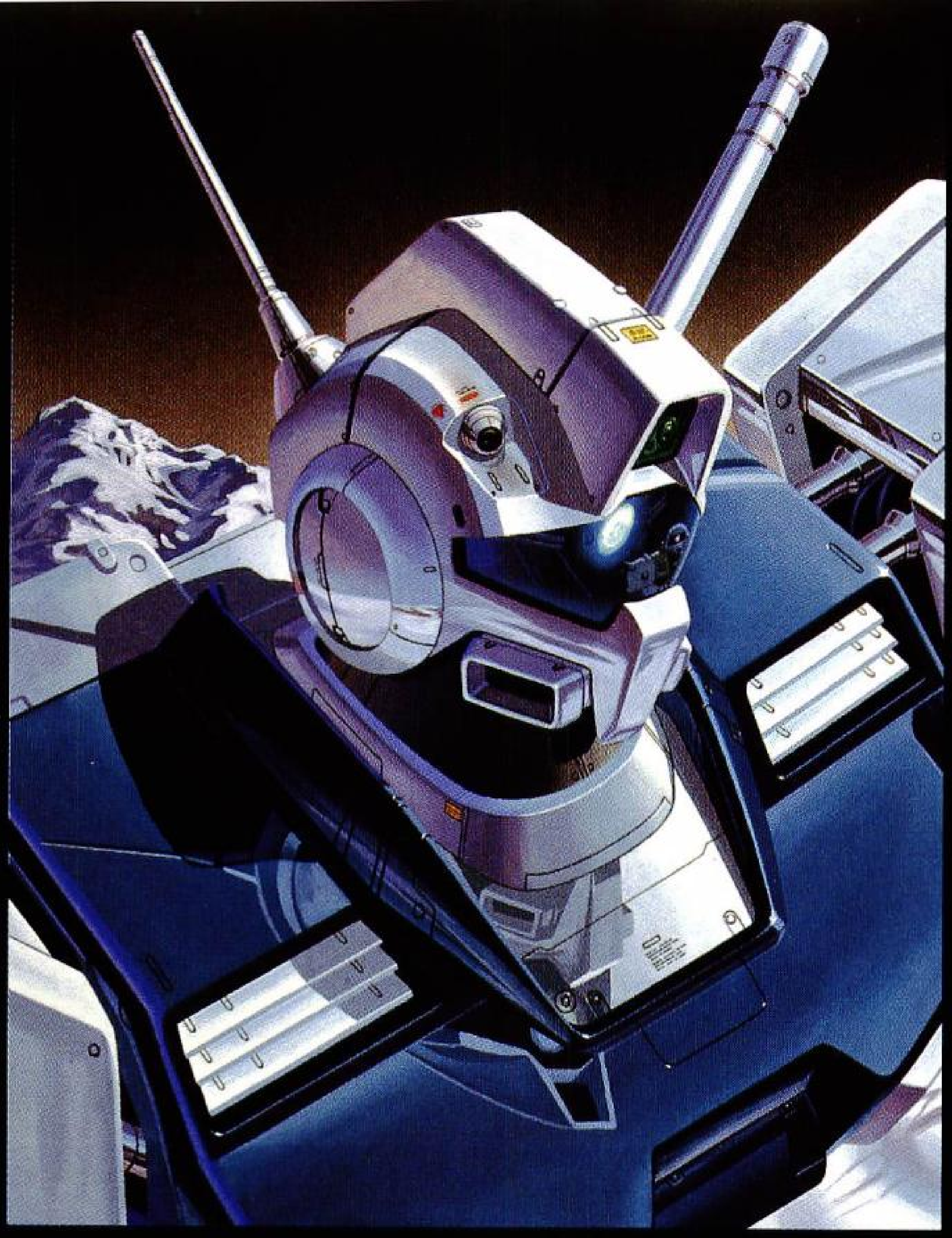


MS戦記



新MS戦記

好評発売中 各巻780円



機動戦士ガンダム

モビルスーツ

MS大図鑑

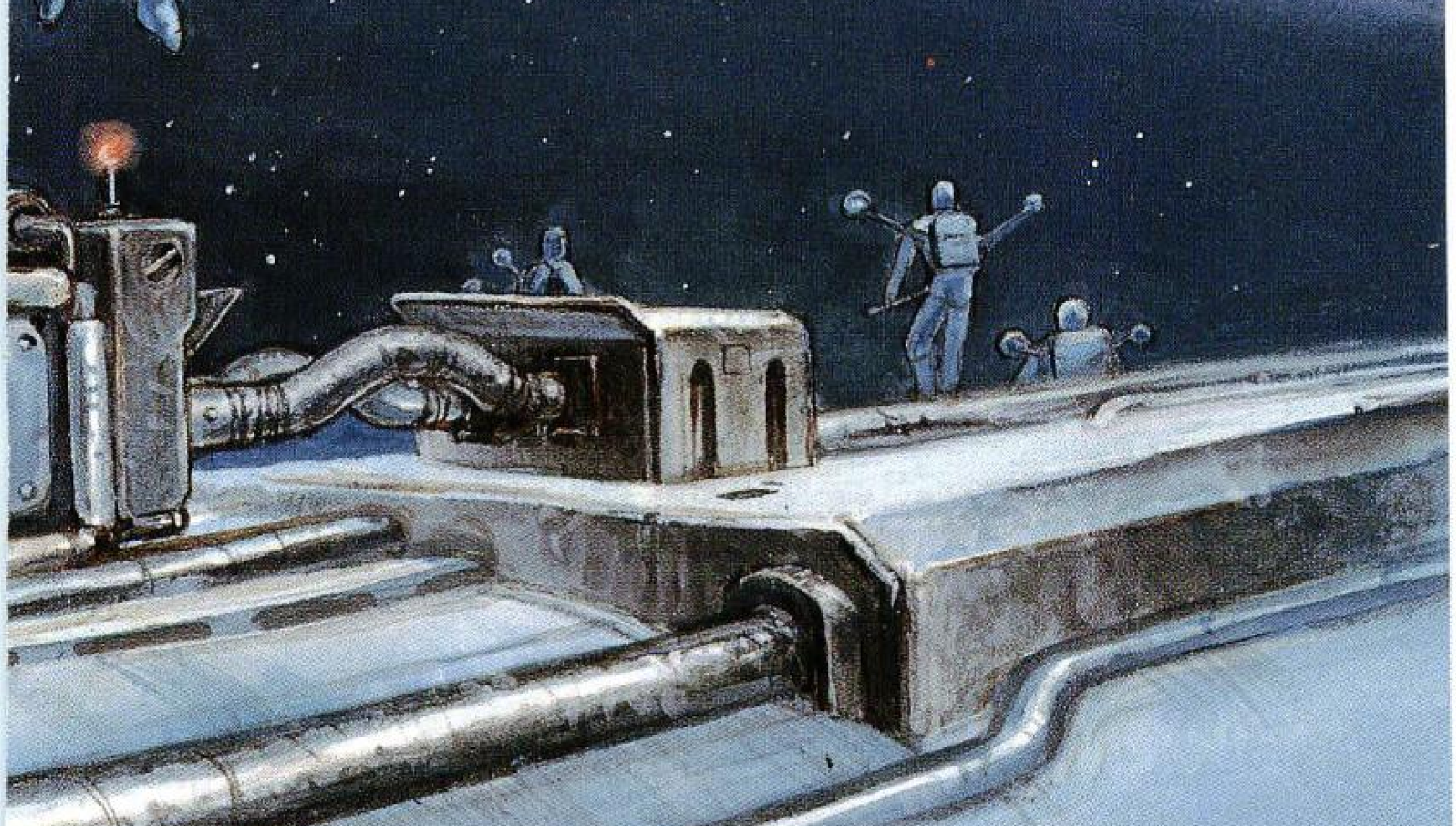
1

【一年戦争編】

Illustration by Kenichi Ishibashi

GUNDAM WAR HISTORY

……【ガンダム戦史】



1.開戦 ～一週間戦争～

宇宙世紀（ユニバーサル・センチュリー）0079年1月3日、地球から最も離れたスペースコロニー〝サイド3〟は、ジオン公国を名乗り地球連邦政府に対して独立戦争を挑んだ。（独立宣言は0069年。詳しくは62ページの年表を参照のこと）

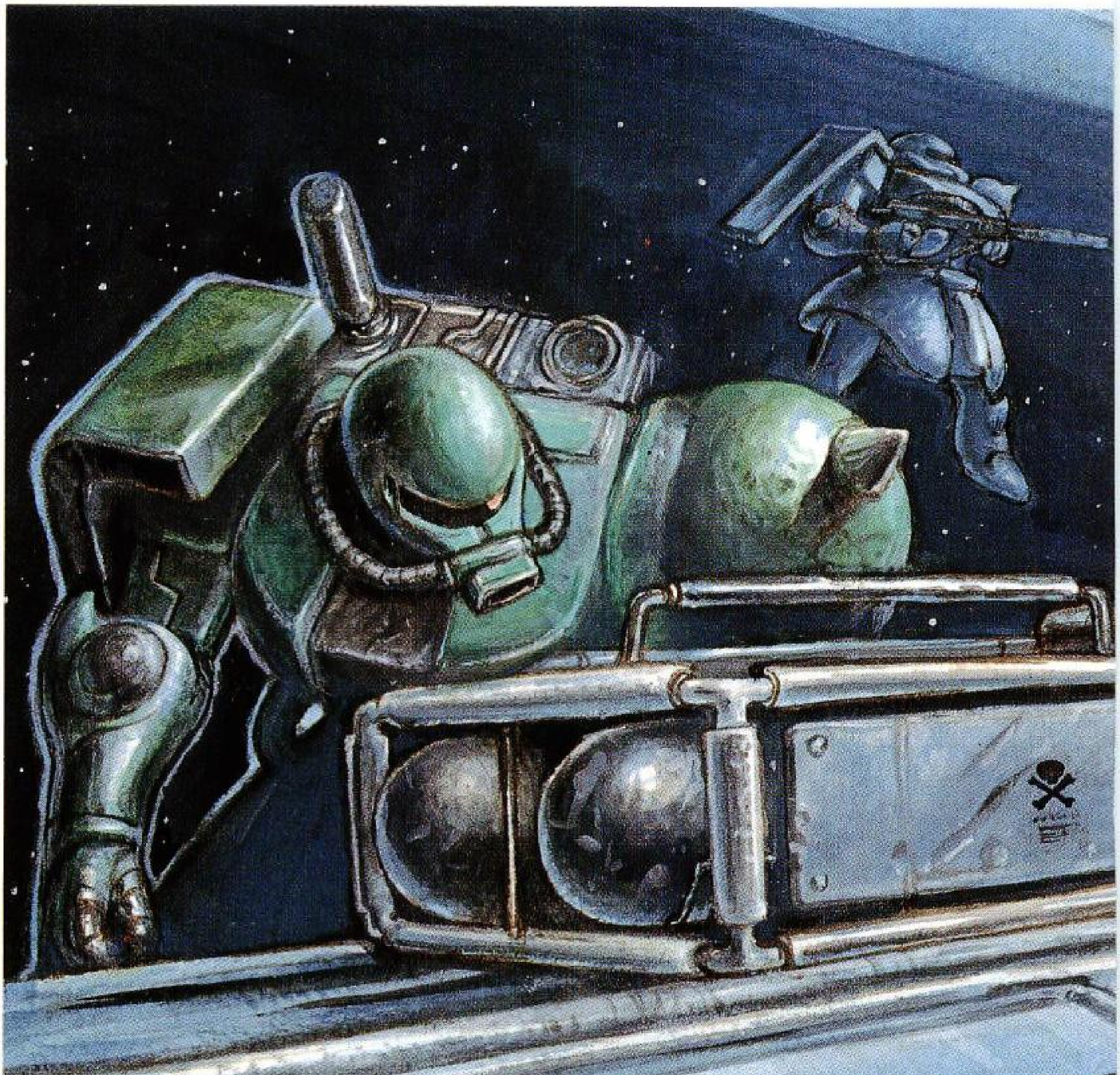
ジオン公国軍は、一方的な宣戦布告と同時にサイド1、2、4に奇襲攻撃を敢行し、BC兵器、熱核兵器により30億人を虐殺した。

さらにコロニー攻撃と平行して行われた〝ブリティッシュ作戦〟では、サイド2のコロニー1基が熱核ロケットによりラグランジェポイントか

一週間戦争において公国軍は、〝ザクを使用し、コロニー内にＧ３ガスを注入して〟大量殺戮を行った。また、コロニーを地球に向けて落下させる〝コロニー落し〟を決行した。

【第一章『一年戦争』】

イラスト 草彅 琢仁

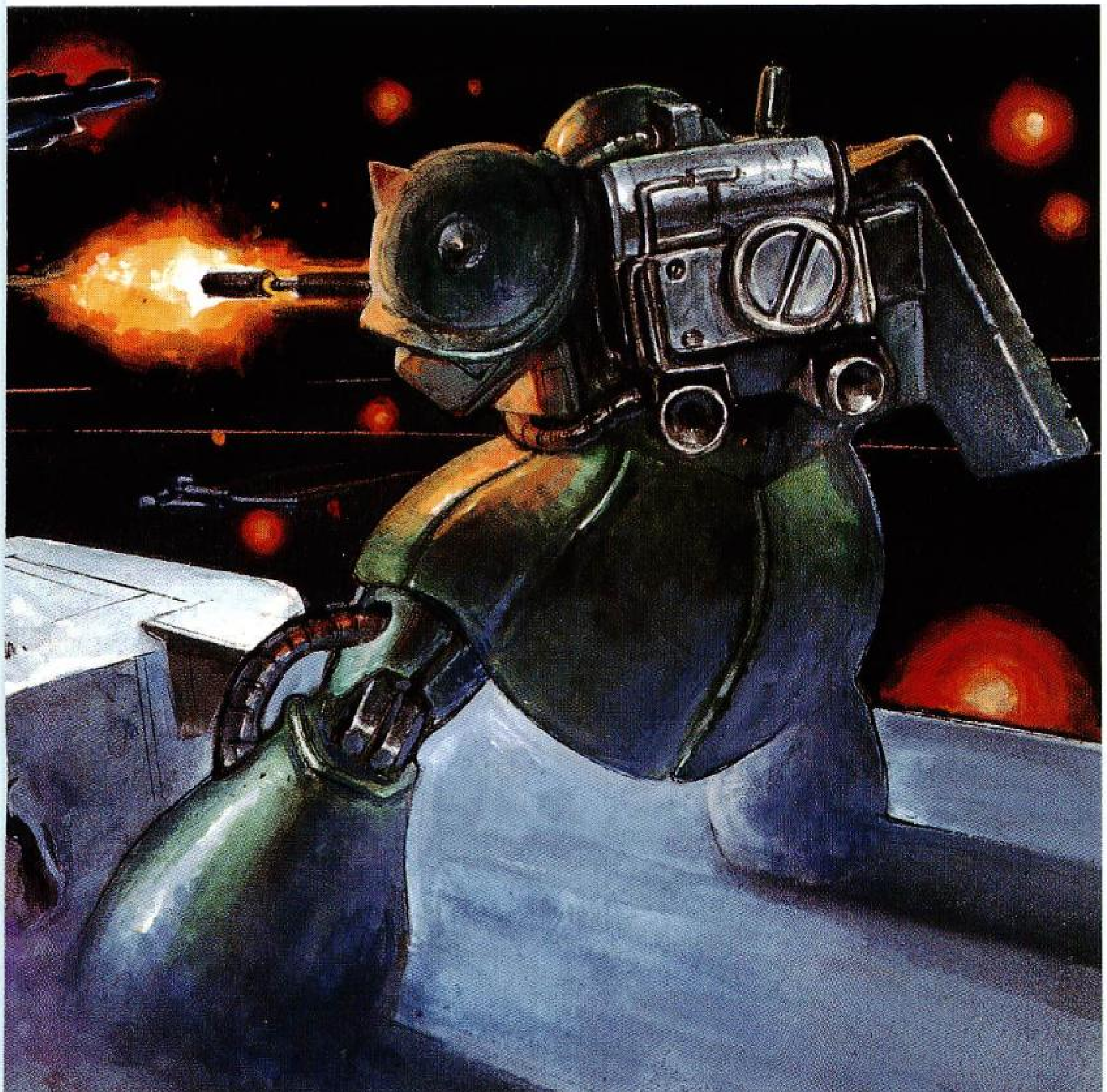


ら離され、地球南米に位置する連邦軍総司令本部〝ジャブロー〟に向けて落下させた。だが、大気圏突入時にコロニーの軌道がそれ、オーストラリア大陸のシドニーに落下し大陸の3分の1が、また落下中に分離したコロニーの破片により北米大陸の4分の1が壊滅した。第一次被害による死傷者、行方不明者は3億2千万人、気象変動などの第2次被害は地球上で20億人に至った。

この一週間戦争（1月3日から10日までの戦闘）において、公国軍は初めてモビルスーツ（以下MS）を投入。その高い作業能力を生かし、コロニー内へのガス注入、熱核ロケットの設置などを行った。MSの戦闘能力が発揮されるのは次のルウム戦役だった。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンダム戦史】

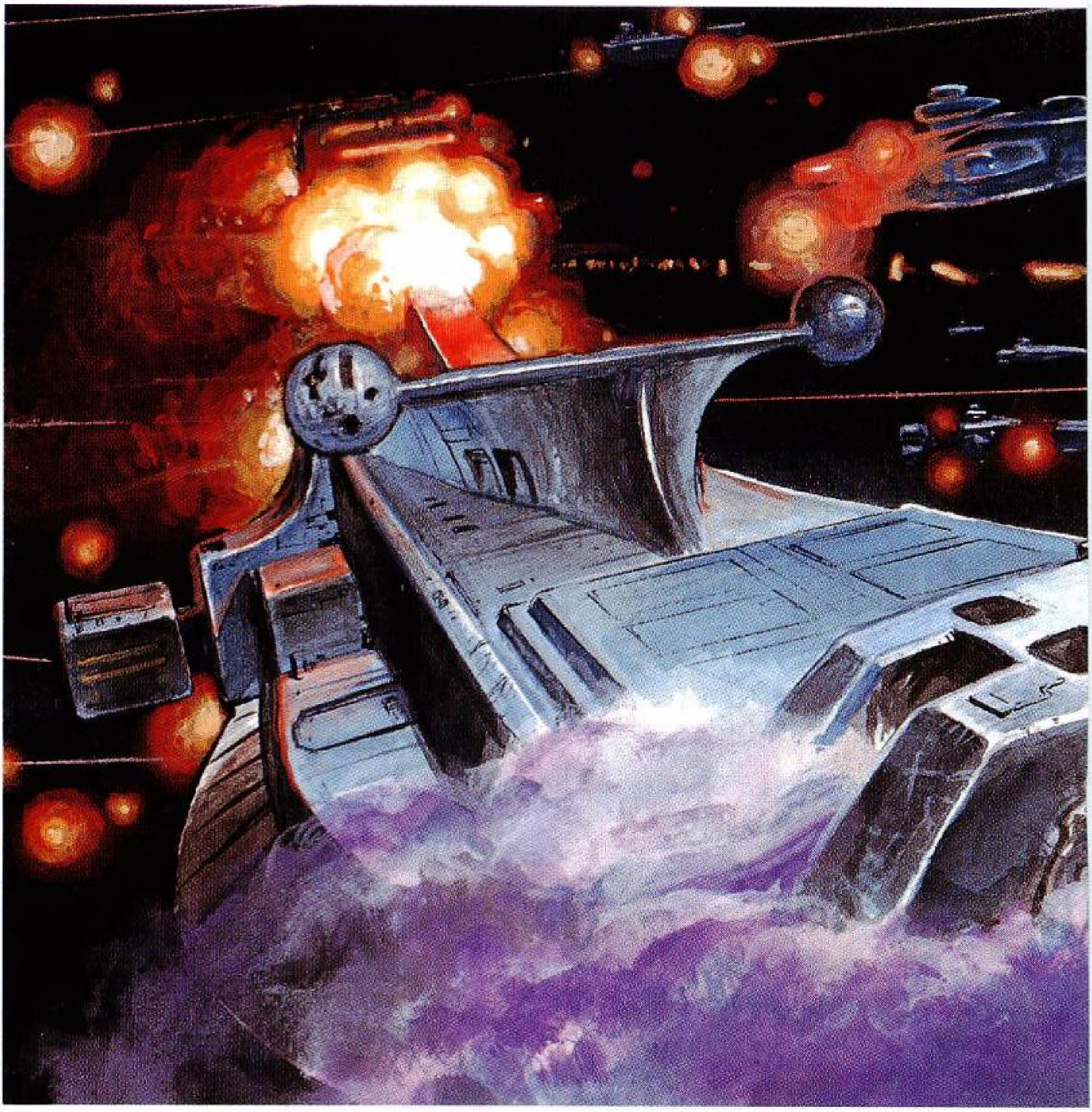


2.史上最大の宇宙艦隊戦
～ルウム戦役～

同年1月15日。サイド5（ルウム）宙域において艦隊戦が繰り広げられた。連邦軍のマゼラン級戦艦×12、サラミス級巡洋艦×61、補給艦他中小艦艇×201に対し、公国軍側はグワジン級戦艦×3、ティベ級重巡洋艦×12、ムサイ級軽巡洋艦×39、ドロス級空母×1、中小艦艇×87と、戦力差は歴然であった。だが、公国軍にはMS－05ザクIとMS－06ザクIIからなるMS部隊があった。

てのミノフスキー粒子下においてMSは、連邦軍の艦艇の弾幕を容易にかいくぐるだけの運

ルウム戦役においても新兵器〝モビルスーツ〟の活躍はめざましかった。公国軍のザク・パイロットの中には、この戦闘だけで5隻の戦艦を沈没させた者もいた。



動性を有していた。しかも、MSには核弾頭付のバズーカが装備されており、その威力たるや一発でマゼラン級戦艦を撃沈するものであった。(離脱が間に合わず爆発に巻き込まれたMSも多い)

このMSの多大なる戦果により、連邦軍艦隊は壊滅状態となり、艦隊司令のレビル将軍が捕虜となった。だが、勝利をおさめた公国軍側も多くの艦艇とMSを失い、次に予定されていた連邦軍唯一の宇宙基地〝ルナII〟の攻略を見送らざるを得なかった。

このルウム戦役の勝利によって、公国軍は制宙権を掌握した。そして、無傷であったサイド6は連邦軍政府に対する信頼を失い、同年1月17日に中立宣言を行った。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンタム戦史】



3.地球侵攻

同年2月7日。南極条約調印のわずか1週間後、公国軍は地球侵攻作戦を開始した。ムサイ級軽巡から離脱したHRSL（降下用カプセル）が北米、ヨーロッパ、アフリカ、東アジア世界各地の主要都市、連邦軍基地に降下した。カプセルから出現したのは、ルウム戦役で活躍したMSだった。条約によって核は使用できなかったが、ミノフスキー粒子の大量散布により、連邦軍のレーダーシステムは壊滅し、通信もままならない状況下で連邦軍の迎撃も個別につぶされていった。

地球侵攻作戦において公国軍はHRSLを用いて直接各地に降下部隊を送り込んだ。制宙権を失った段階で、連邦軍は丸裸になっていたのだった。(イラストはニューヨーク市に出現したザク部隊)



特にMSは移動力こそ低かったが、その攻撃力と防衛力は連邦軍の在来兵器を凌駕した。このMSを主軸とした第1次降下部隊の活躍により、2月18日には地球攻撃軍の本隊である第2次降下部隊が難なく降り立つことができた。

第2次降下部隊は、ガウ空母を主力とする航空部隊、Uコン級潜水艦を主力とする海洋部隊、ダブデ陸戦艇、マゼラ・アタック型戦車を主力とした陸上部隊を地球に降ろした。

2月から3月の間に公国軍は、全大陸の3分の2を勢力下におさめた。だが、この早急な侵攻作戦によって公国軍の消耗も著しく、伸び切った補給路を維持するのもやっとであった。ここにおいて戦局は膠着(こうちゃく)状態となる。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンダム戦史】

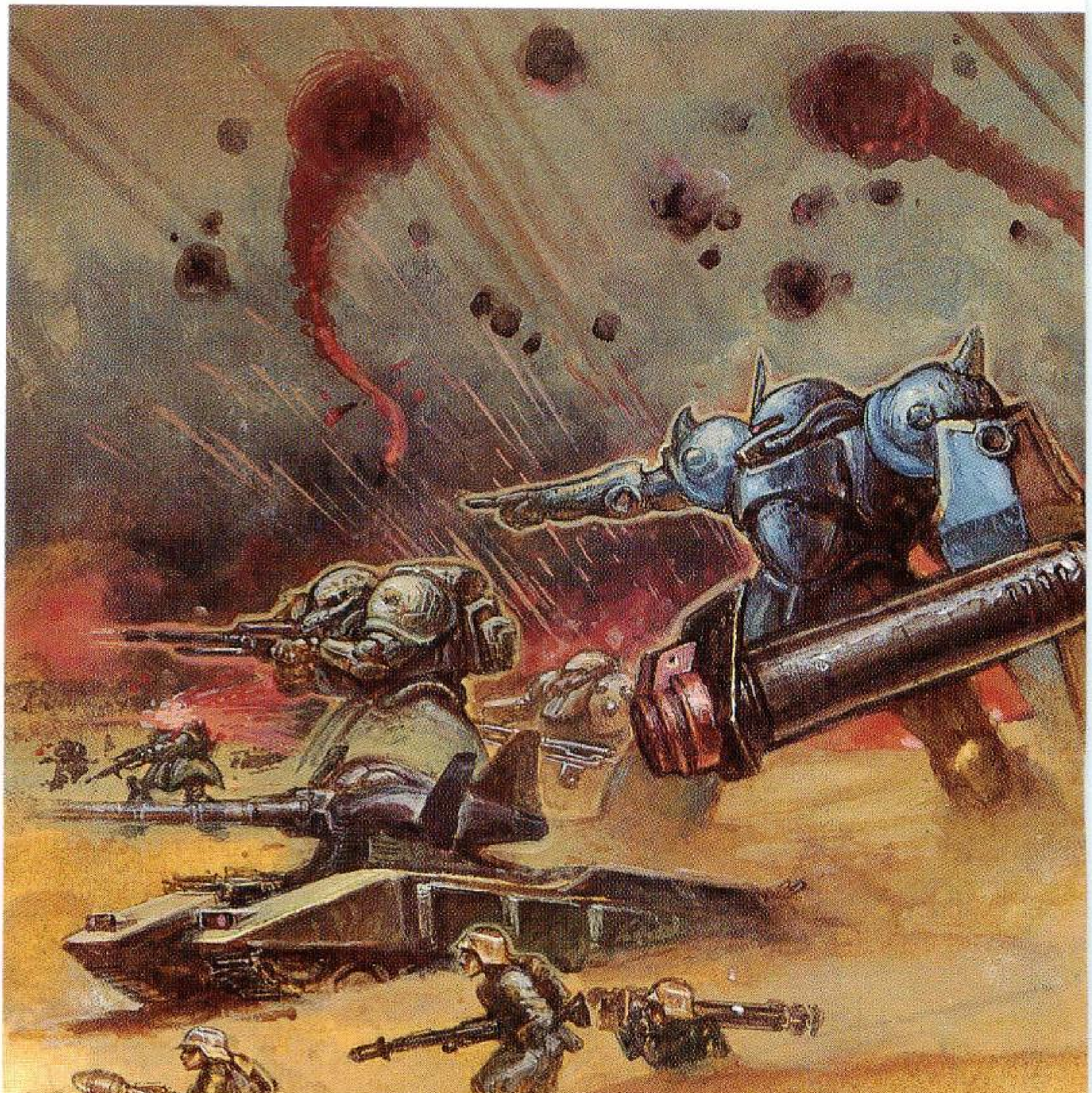


4.連邦軍反撃
～オデッサ作戦～

戦局の膠着状態から8カ月後、11月7日に連邦軍は〝オデッサ作戦〟を開始する。目的はユーラシア大陸黒海沿岸の公国軍基地を壊滅させ、地球からの鉱物資源の打ち上げを断つことであった。連邦軍はこの作戦に陸上兵力のおよそ3分の1を投入した。

この一大反抗作戦を可能としたのは、地球攻撃軍司令官、ガルマ・ザビの死であった。ジオン公国を支配するザビ家の末弟であるガルマは、同年9月にニューヨークにおいて連邦軍のホワイトベース隊と交戦し、ガウ攻撃空母とも

連邦軍のオデッサ作戦に対し、公国軍は新型陸戦用MS〝グフ〟と〝ドム〟を投入した。だが、連邦軍の侵攻を食い止めることはできず、一敗地にまみれた。

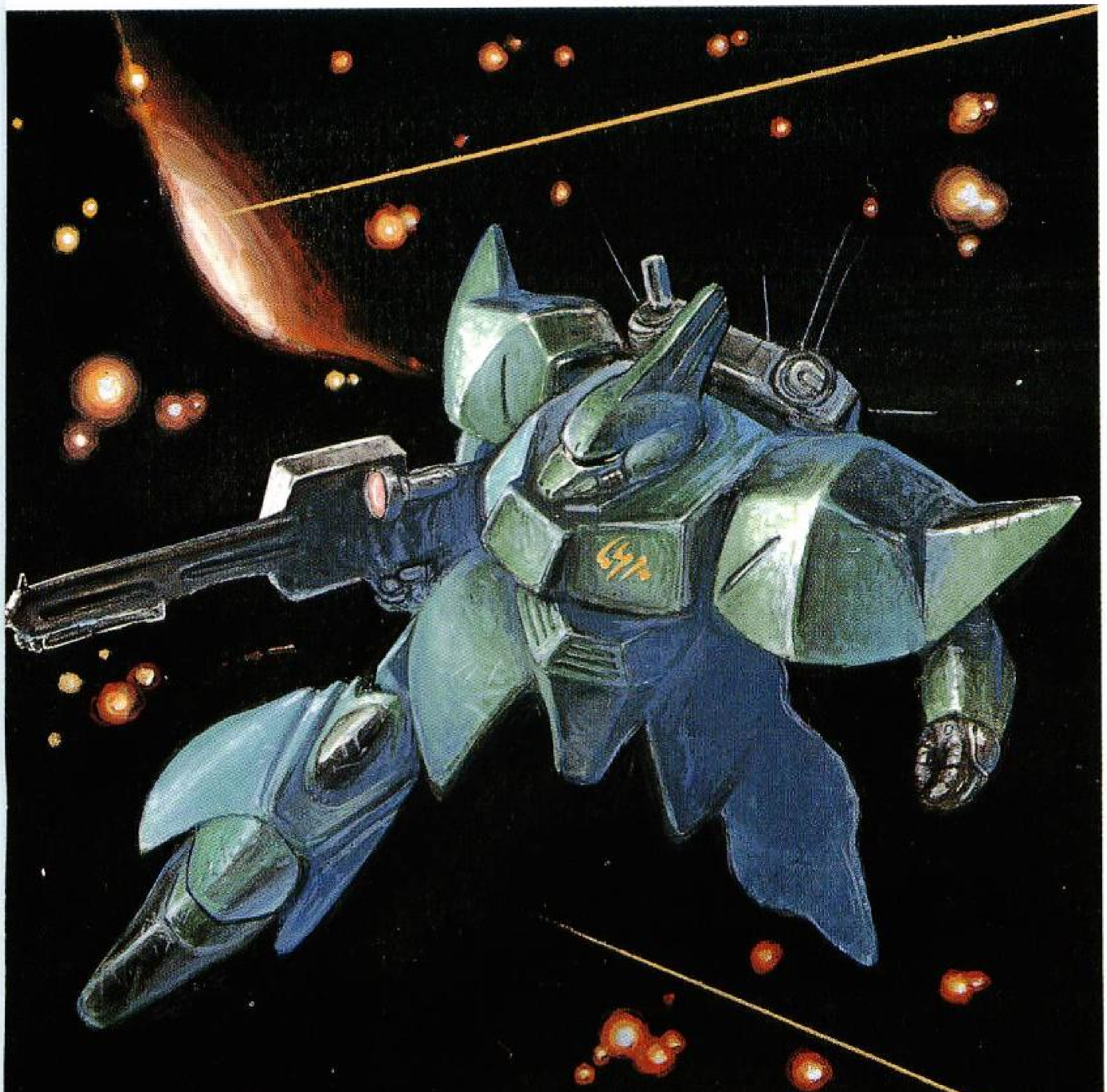


に戦死した。これによって、地球攻撃軍は指揮系統が混乱し、連邦軍の動きに対応できなかったのである。

3日間の激戦ののち連邦軍は勝利を治めた。この戦いを契機として、連邦軍は各地で反抗に転じ、ミリタリーバランスは一挙に連邦軍側へと傾いていった。また、公国軍は11月30日に連邦軍総司令本部基地〝ジャブロー〟の攻撃を敢行し、北米の拠点〝キャリホルニアベース〟の戦力の大半を消耗する結果となった。そして、12月にはこの重要拠点を失うこととなった。公国軍の中で最後まで抵抗したのはアフリカ方面軍であった。だが、翌年1月1日の公国軍の無条件降伏とともに、抵抗を止め、武装解除された。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンダム戦史】



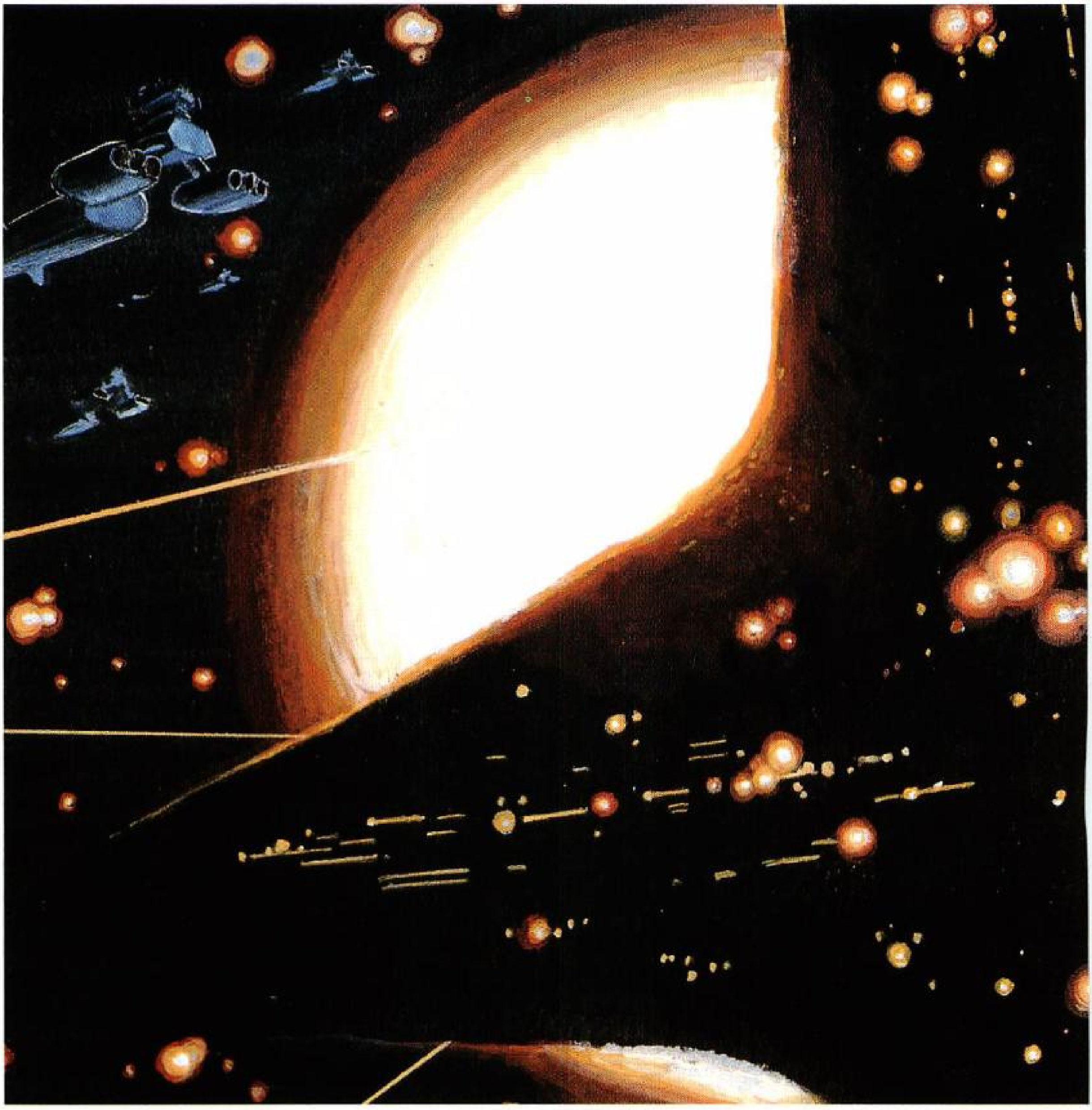
5.ジオン公国軍の敗北

～星一号作戦～

12月4日、公国軍の攻撃部隊を退けたジャブロー基地から多数の宇宙艦艇が打ち上げられた。宇宙においての大反抗作戦〝星一号作戦〟の発動である。地球から発進したレビル、ティアンム両艦隊は、ルナII艦隊と合流し、公国軍の宇宙要塞〝ソロモン〟に進路を向けた。この艦艇の中には連邦軍製のMS、RGM-79ジムが満載されていた。

12月27日、連邦軍はソロモンに攻撃を開始した。連邦軍は新兵器〝ソーラ・システム〟を投入し、集束された太陽光線により要塞の3分の1を焼きつくした。この戦いは9時

ソロモン攻略戦において連邦軍は、初めて〝ソーラ・システム〟を使用した。連邦軍側が〝ジム〟及び〝ボール〟を大量投入したことで戦力差は縮まり、結局はこの新兵器が勝敗を決した。



間で終了し、ソロモンは陥ち、ドズル・ザビ中将率いる宇宙攻撃軍は壊滅した。これによって、連邦軍の宇宙戦力は20%、公国軍は35%を消耗した。

12月30日、和平交渉におもむいたレビル艦隊が公国軍の新兵器〝ソーラ・レイ〟により消滅した。この攻撃でレビル将軍とジオン公国の前公王デギン・ザビが戦死。連邦軍の艦隊は作戦当初の40%に戦力が落ちた。

12月31日、公国軍の最終防衛ラインの一角をになう宇宙要塞〝ア・バオア・クー〟に対し、連邦軍艦隊は戦火を開いた。だが、レビル艦隊を欠いたことで劣勢はまぬがれず、要塞内に少数のMS部隊を突入させるのがやっとであった。

だが、公国軍側の指揮系統を混乱させる事件が生じた。

ア・バオア・クーの敗北により公国軍は事実上壊滅した。

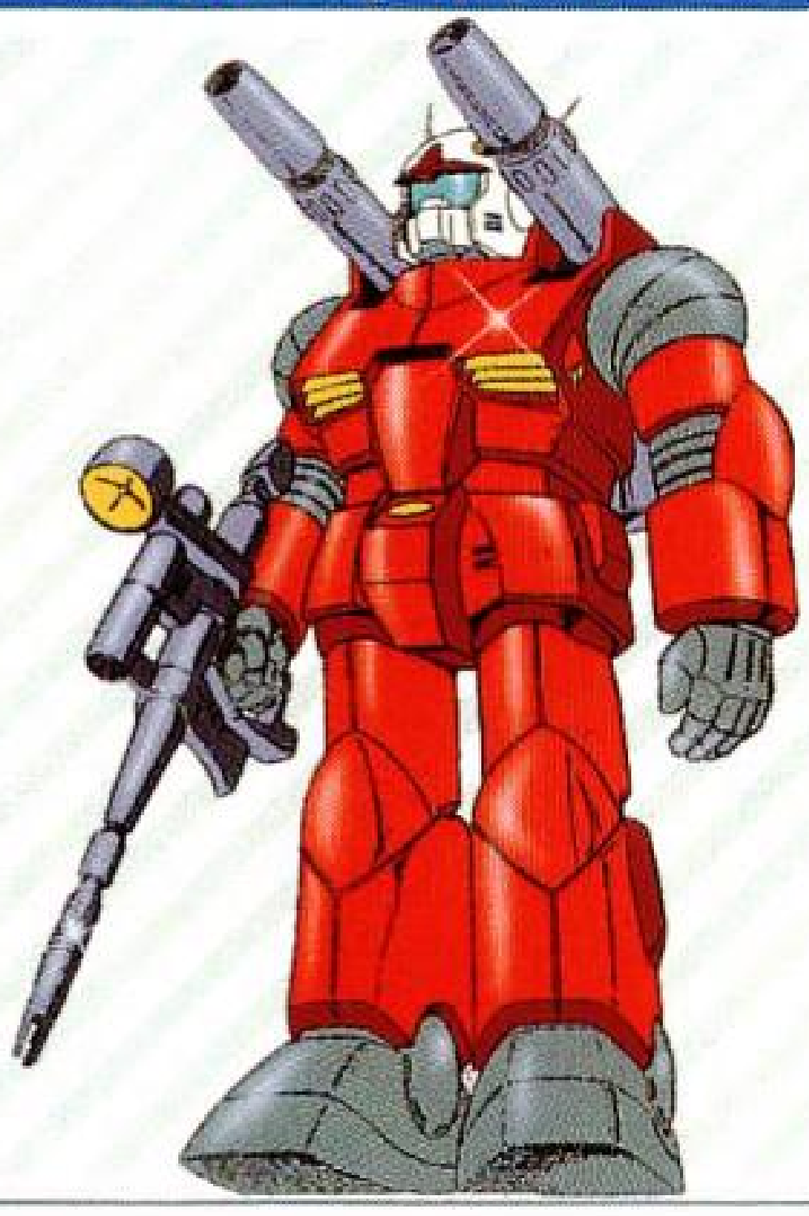


ア・バオア・クーを指揮していたギレン・ザビ総帥が戦死し、その直後、突撃機動軍司令キシリア・ザビが指揮を引き継いだ。だが、その隙をついて連邦軍の艦艇、ＭＳが次々に防衛ラインを突破し、要塞に直接攻撃をかけた。戦力を分断されたことで、キシリアは脱出を計るが、出港直後に艦が撃沈されてしまった。

ザビ家の滅亡により、ジオン公国のガルシア首相は議会を動かし、共和制へ移行させた。そして、００８０年１月１日、月面のグラナダにて連邦政府との間に終戦協定を結んだ。

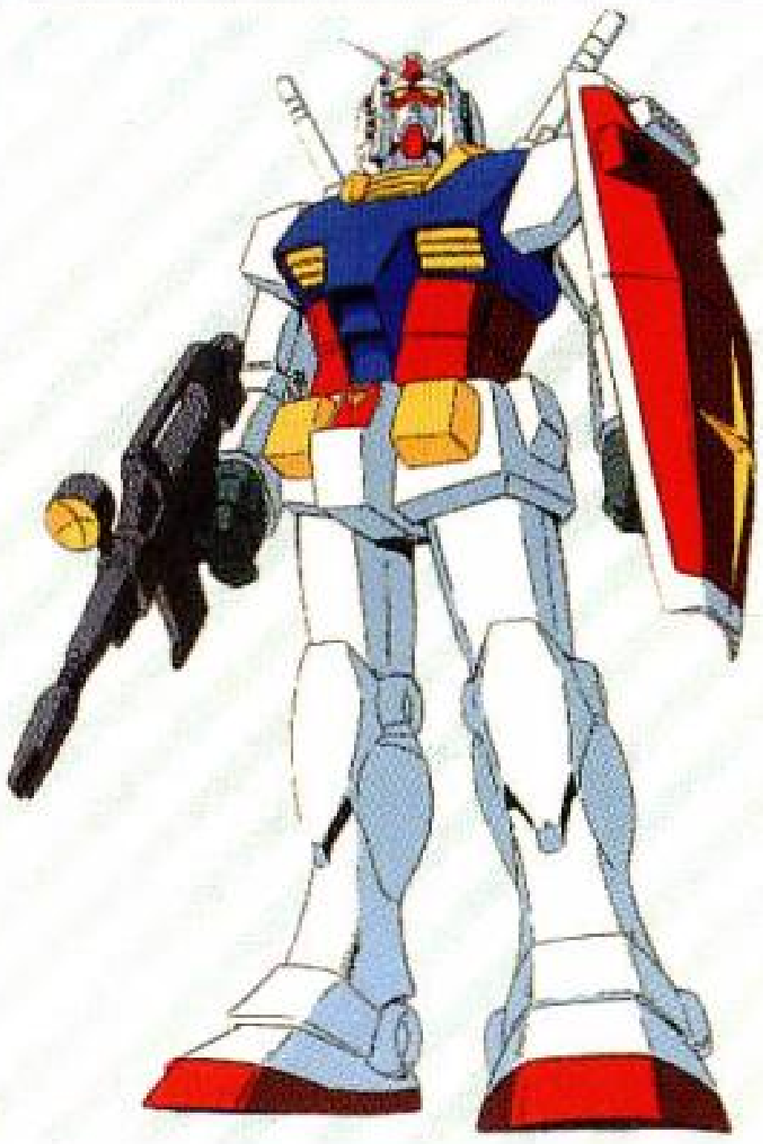
MS名鑑

RX-77-1 ガンキャノン



①砲撃戦用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144 1/250

RX-78-2 ガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/72 1/100 1/144 1/250

RGM-79 ジム



①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/144 1/100

RX-75 ガンタンク



①砲撃戦用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/144 1/250

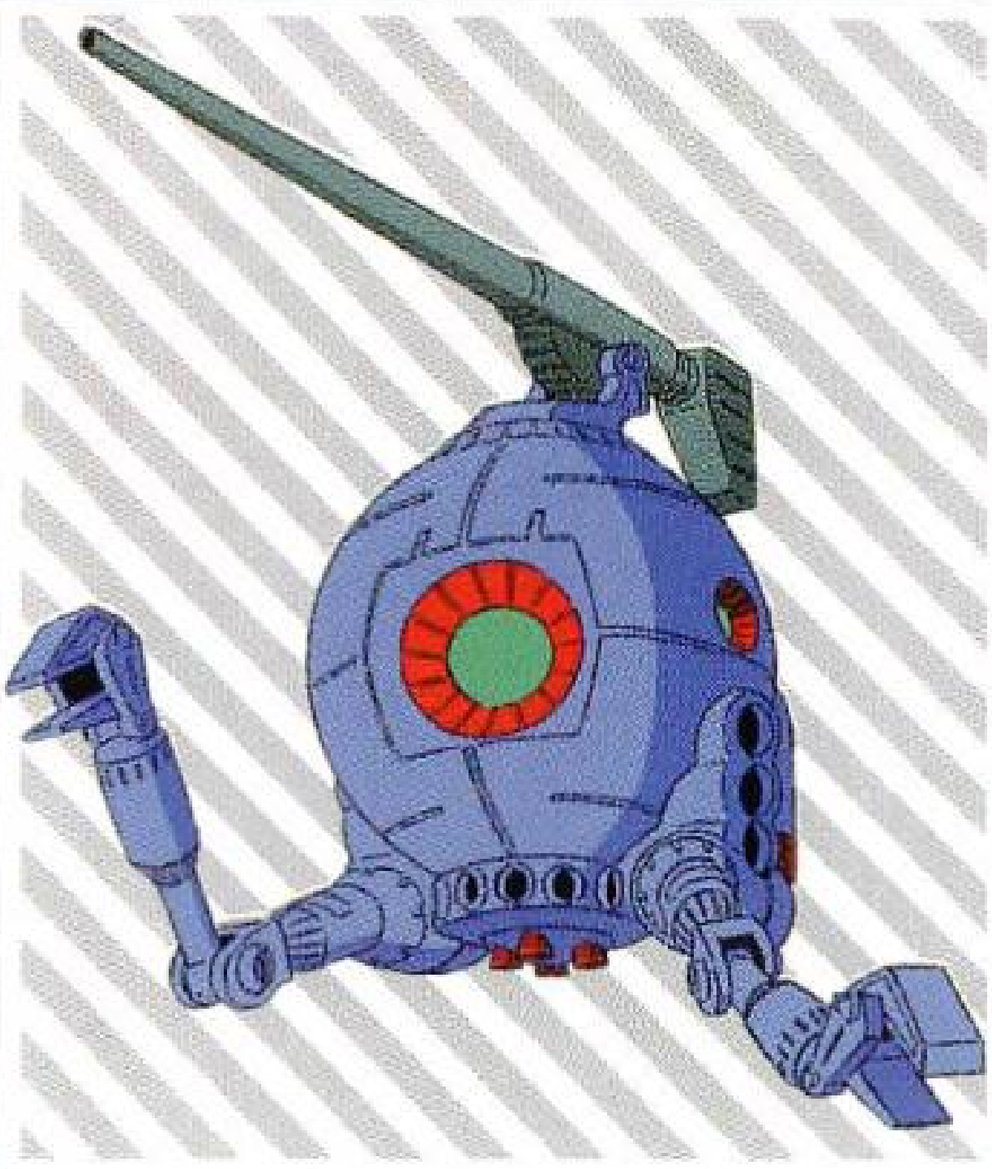
①分類、②所属、③登場シリーズ、④模型対応表

FA-78-2 ヘビーガンダム



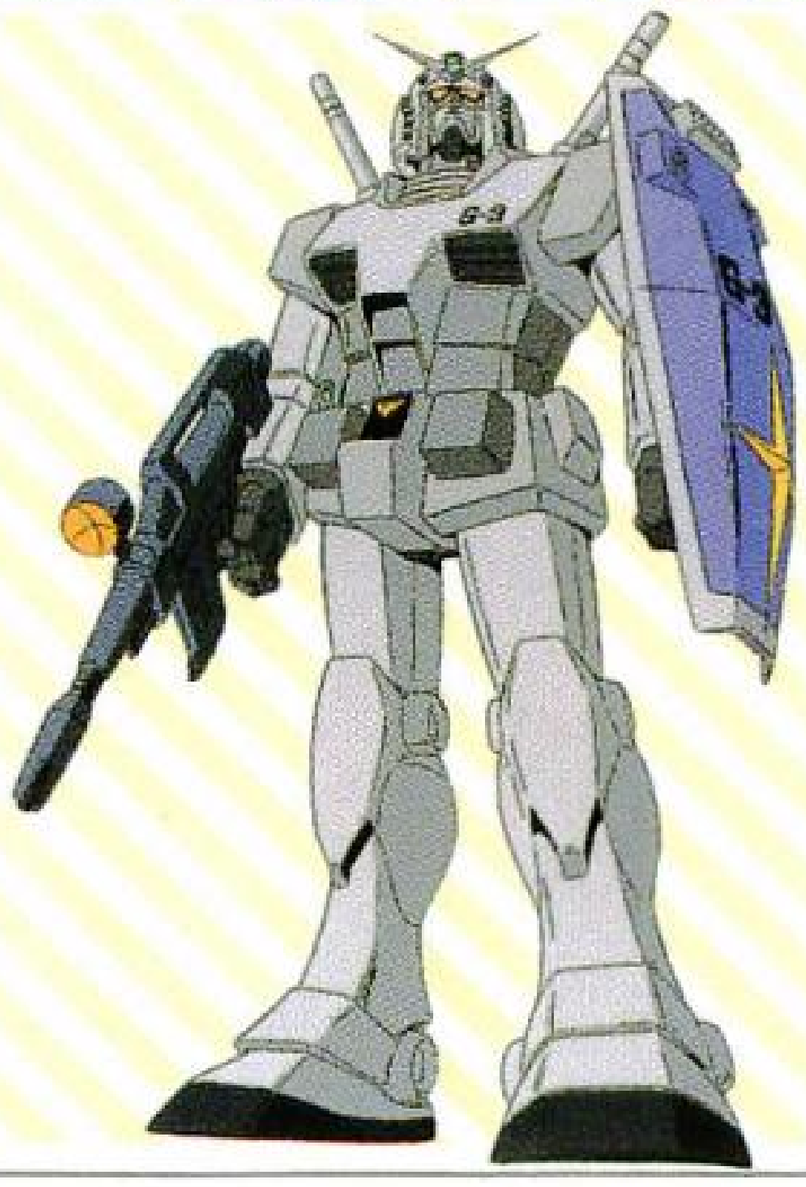
①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MS-X
④——

RB-79 ボール



①量産型モビルポッド
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/144

RX-78-3 G-3ガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

RX-78-1 プロトタイプガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

RX77-3 ガンキャノン重装型



①砲撃用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

FA-78-1 フルアーマーガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/60 1/100 1/144

RMV-1 ガンタンクII



①砲撃用量産型モビルビーグル
②連邦軍
③MSV
④——

RX-77-4 ガンキャノンII



①砲撃用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

TGM-79 ジムトレーナー



①訓練用モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

RGM-79(L) ジムライトアーマー



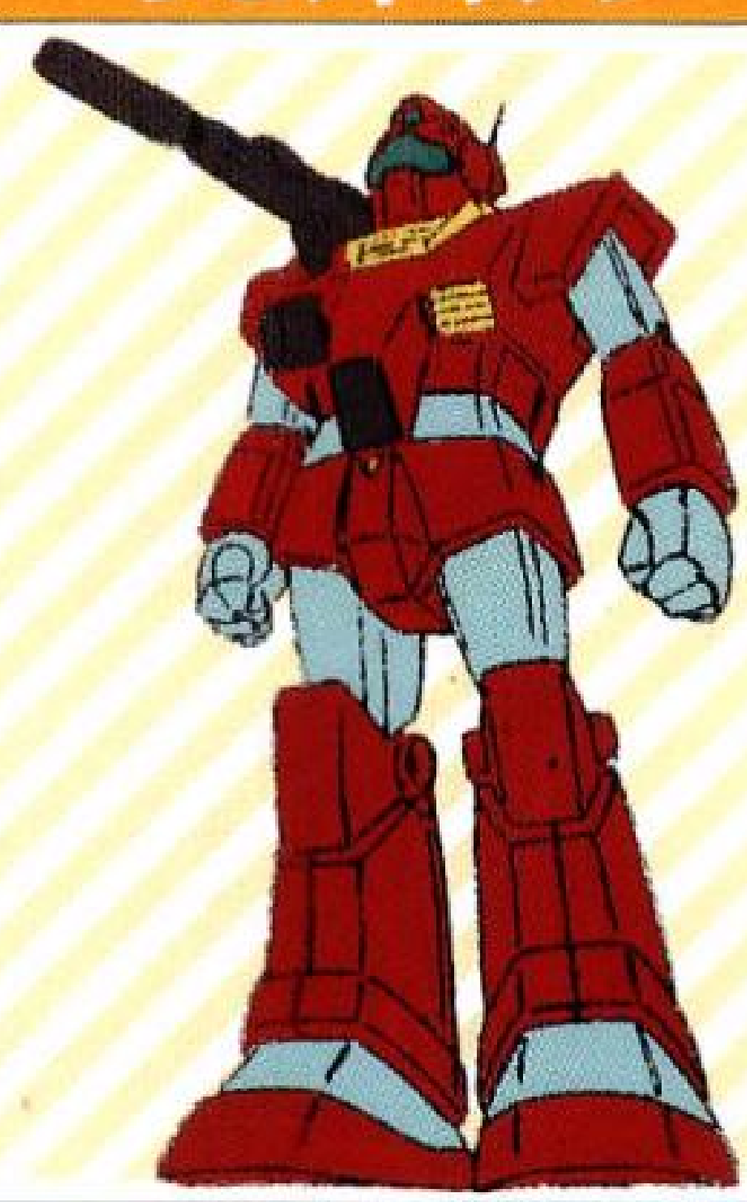
①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

RGM-79(SC) ジムスナイパーカスタム



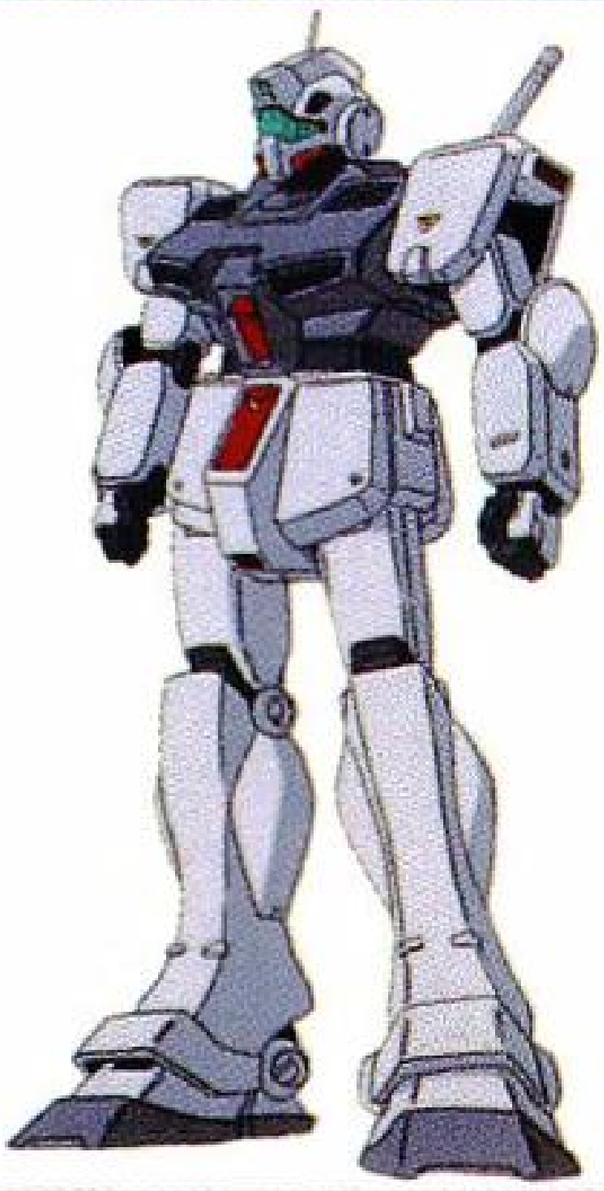
①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

RGC-80 ジムキャノン



①砲撃用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

RGM-79D 寒冷地戦用ジム



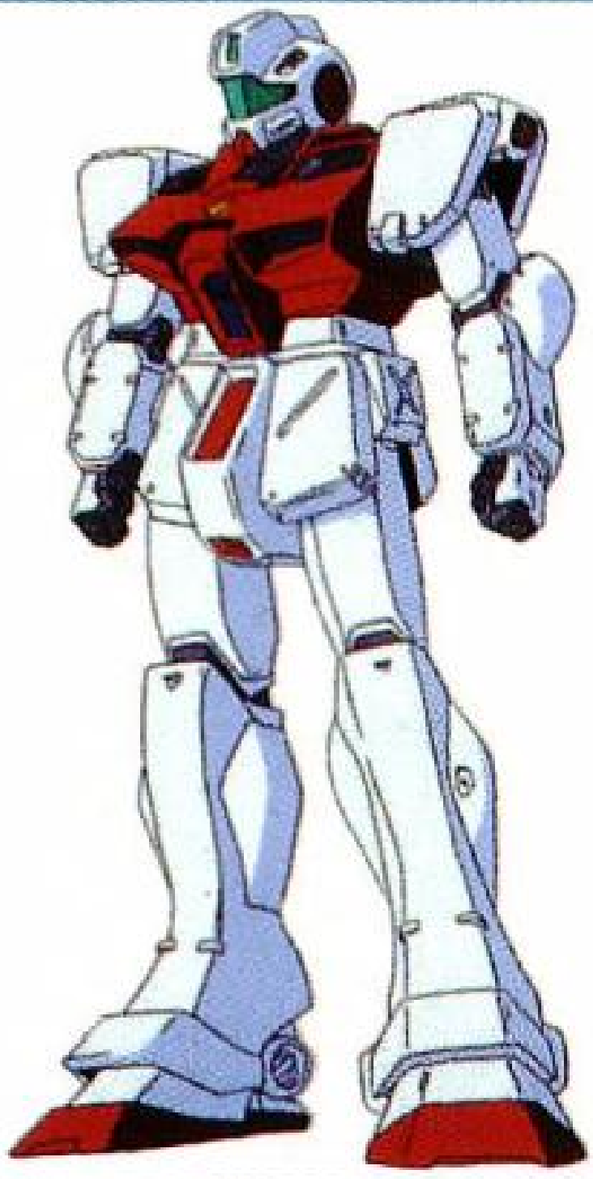
①寒冷地戦用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③ポケットの中の戦争
④ 未定

PF-78-1 パーフェクトガンダム



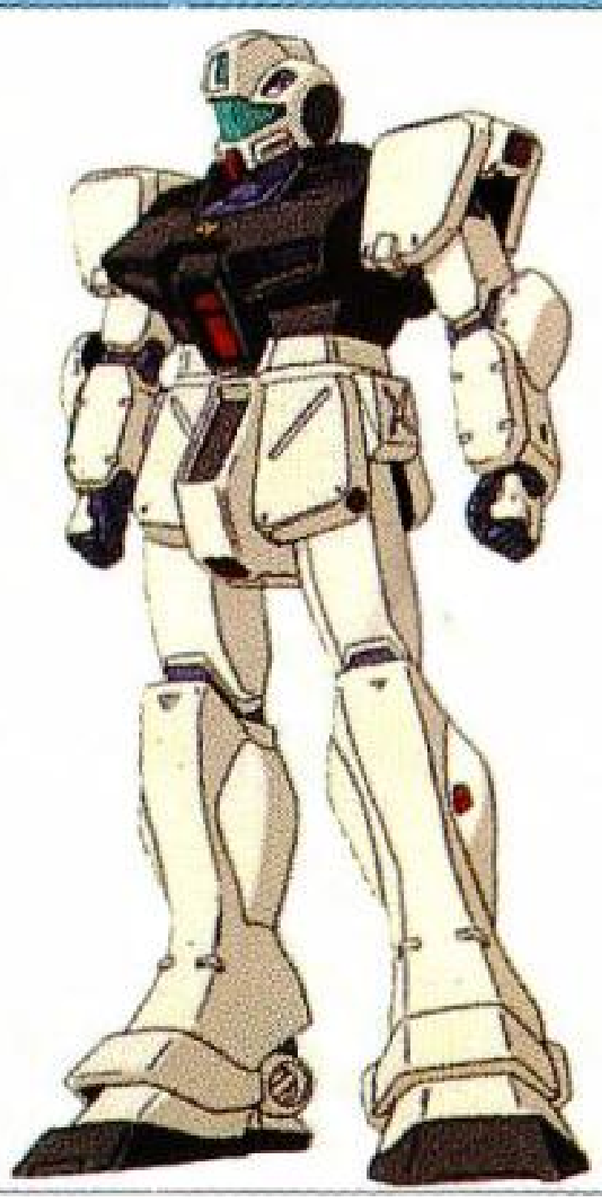
①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV プラモ狂四郎
④1/100 1/144

RGM-79G ジムコマンド(コロニー戦仕様)



①コロニー防衛用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

RGM-79GS ジムコマンド(宇宙戦仕様)



①宇宙戦用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-06F
ザクII



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144 1/250

MS-05
ザク(旧ザク)



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MS-07B
グフ



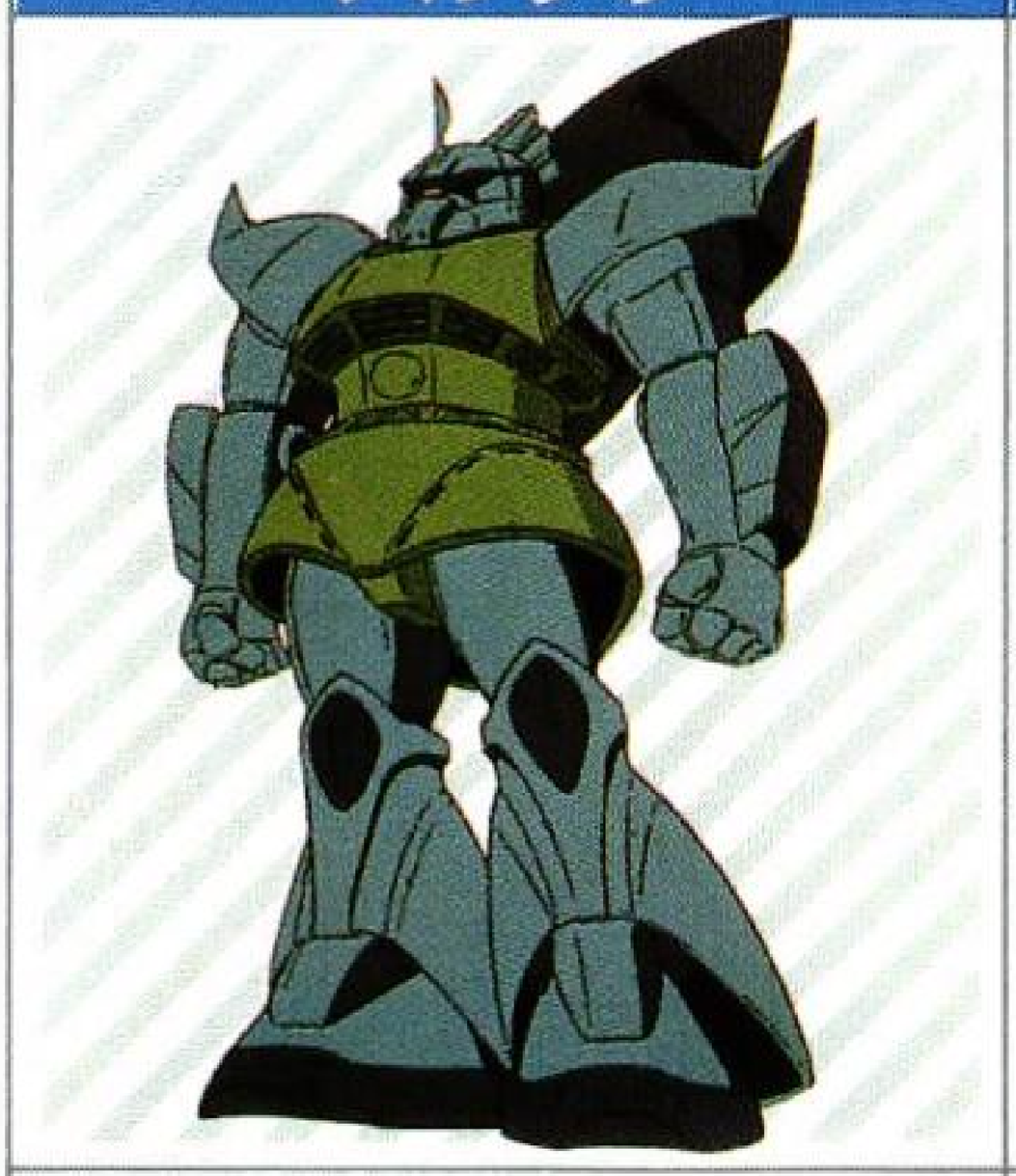
①陸戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144 1/250

MS-06S
ザクII(シャア専用)



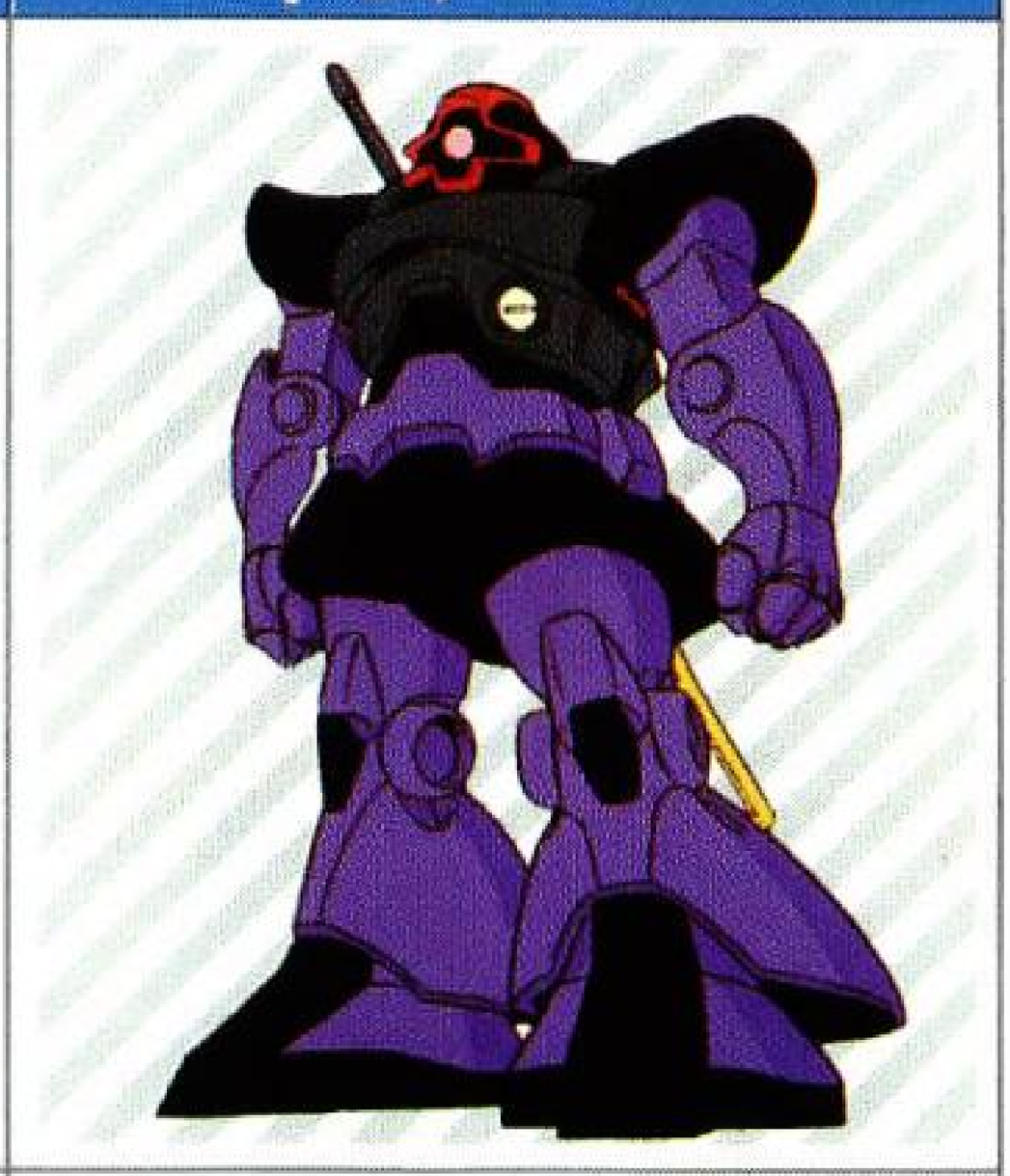
①汎用高性能量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/72 1/100 1/144 1/250

MS-14A ゲルググ



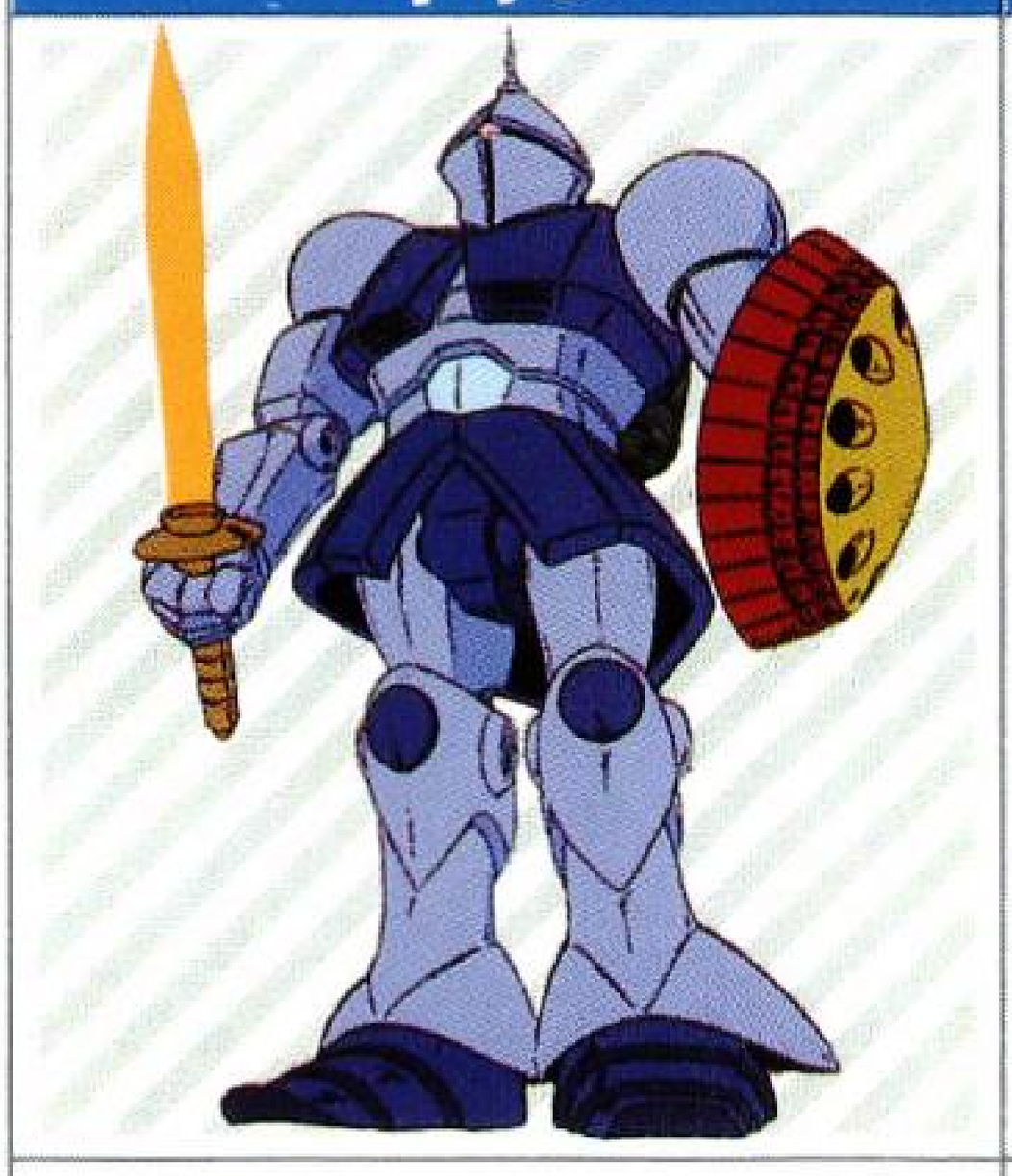
①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144

MS-09(MS-R09) ドム（リック・ドム）



①陸（宇宙）戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144

MS-15 ギャン



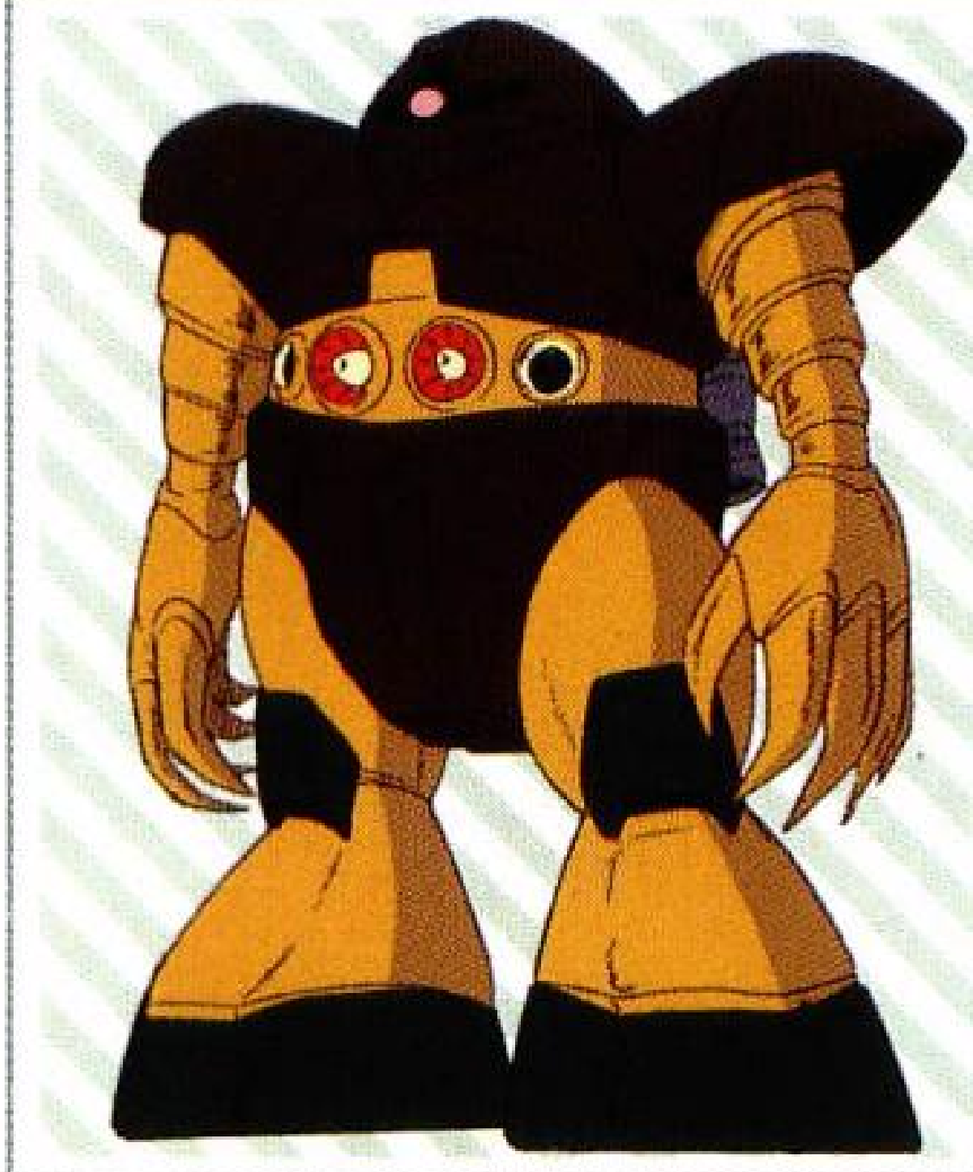
①汎用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MS-14S ゲルググ（シャア専用）



①汎用高性能量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144

MSM-03 ゴッグ



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MSM-07 ズゴック



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MSM-04 アッガイ



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MSM-07S ズゴック(シャア専用)



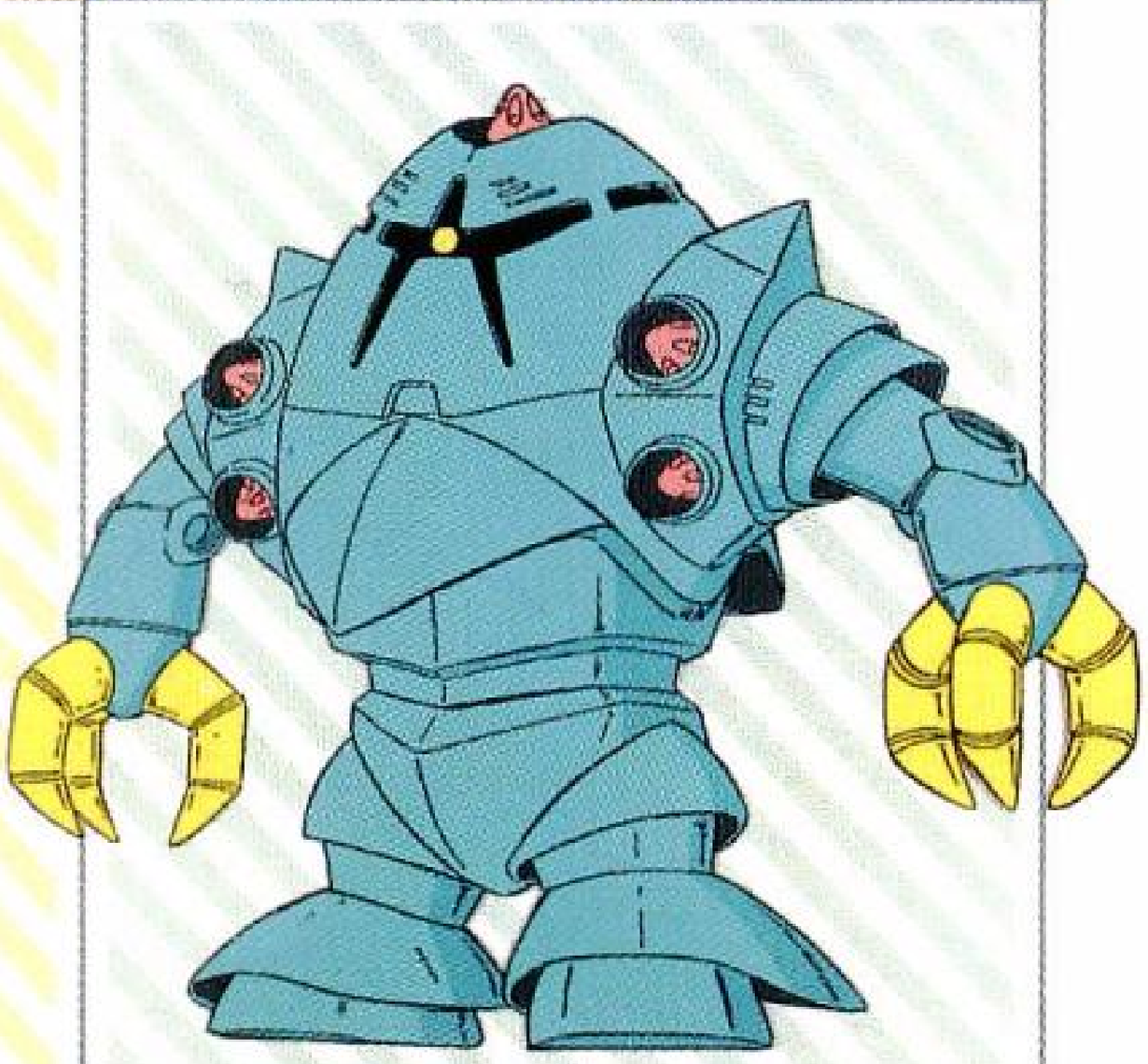
①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MS-06S
ザクII（ドズル専用）



①汎用高性能量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MSM-10
ゾック



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/144

MS-06R-2
高機動型ザク（J・ライデン専用）



①宇宙戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/60 1/100 1/144

MS-06FS
ザクII（ガルマ専用）



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-06D
サク・デザートタイプ



①砂漠戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06R-1A
高機動型ザク(黒い三連星)



①宇宙戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-06V
ザクタンク



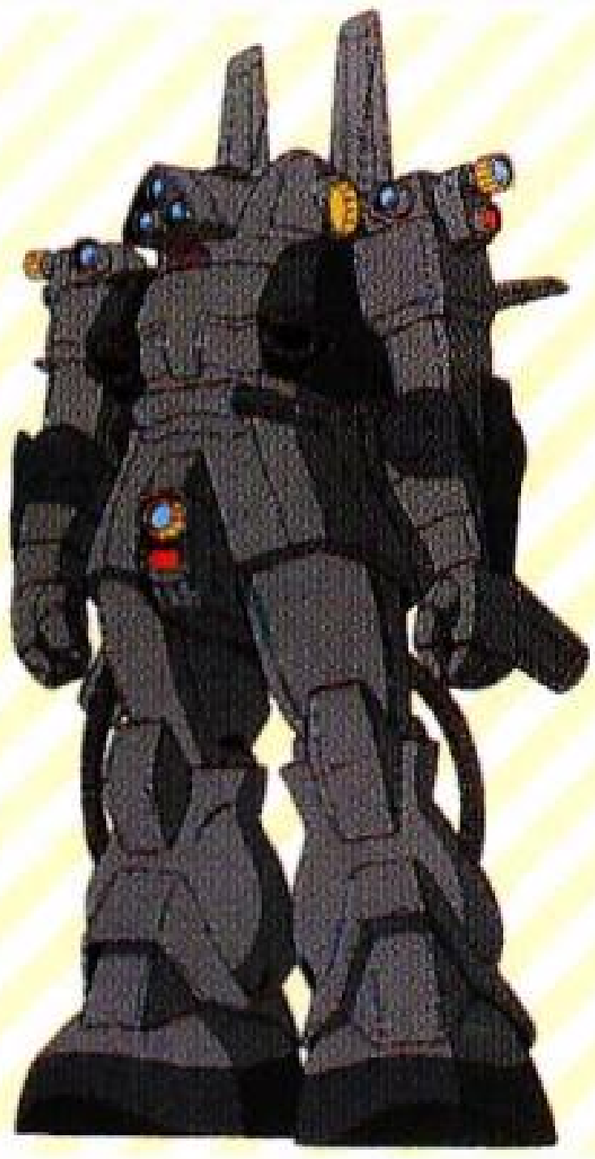
①作業用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06M(MSM-01)
サク・マリンタイプ



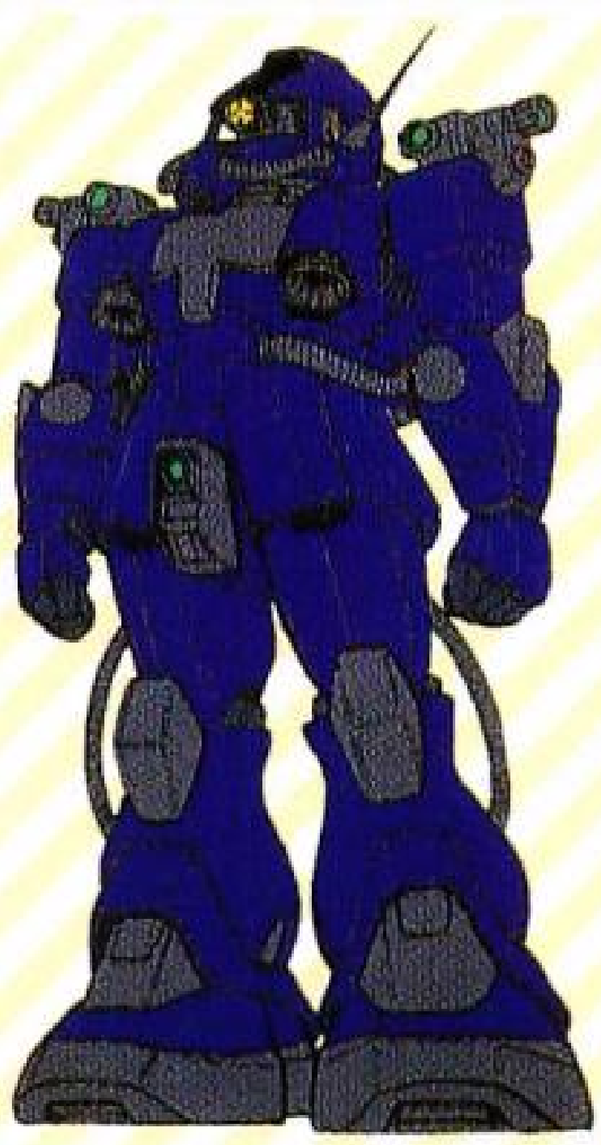
①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06E-3
ザクフリッパー



①偵察用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06E-1
ザク強行偵察型



①偵察用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06K
サクキャノン



①砲撃戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/100 1/144

MS-06W
一般作業用ザク



①作業用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

YMS-07 プロトタイプグフ



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-06Z-3 サイコミュ試験用ザク（Zタイプ）



①試験用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-07C-3 グフ重装型



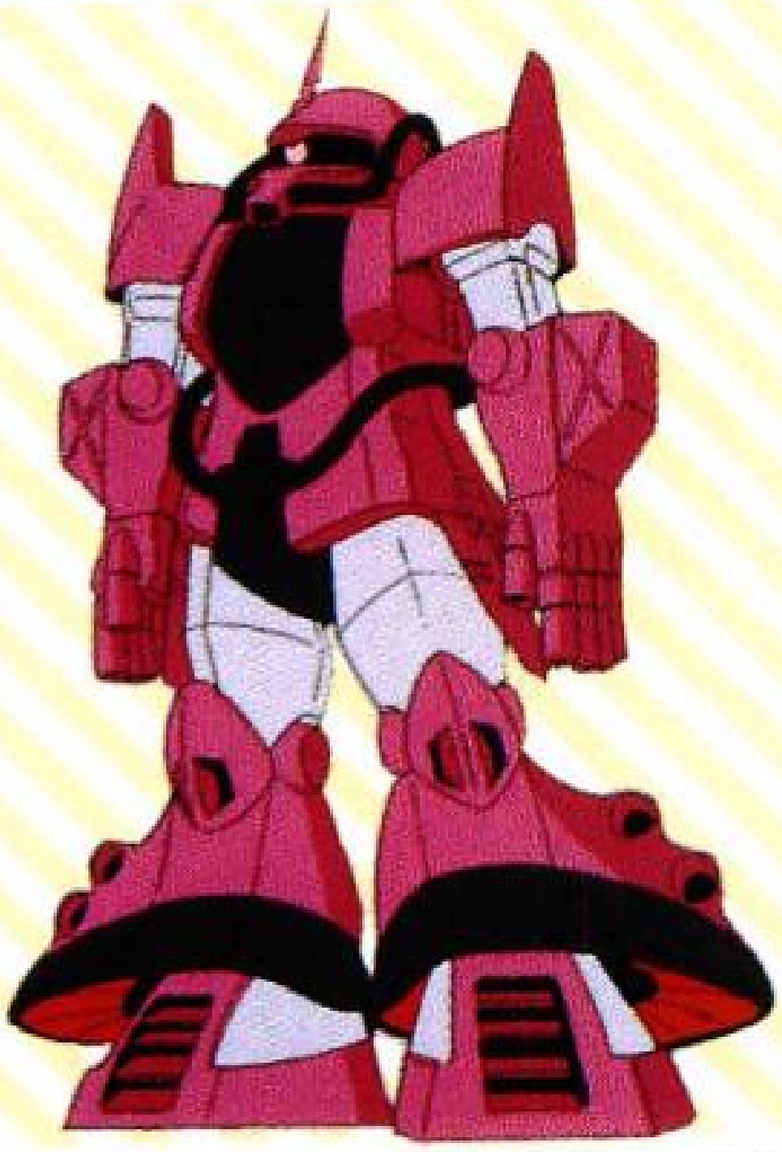
①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-07B グフ（マ・クベ専用）



①陸戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-07H-4 グフ飛行型



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-07H グフ飛行型



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

YMS-09 プロトタイプドム



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/100 1/144

MS-07C-5 グフ試作実験機



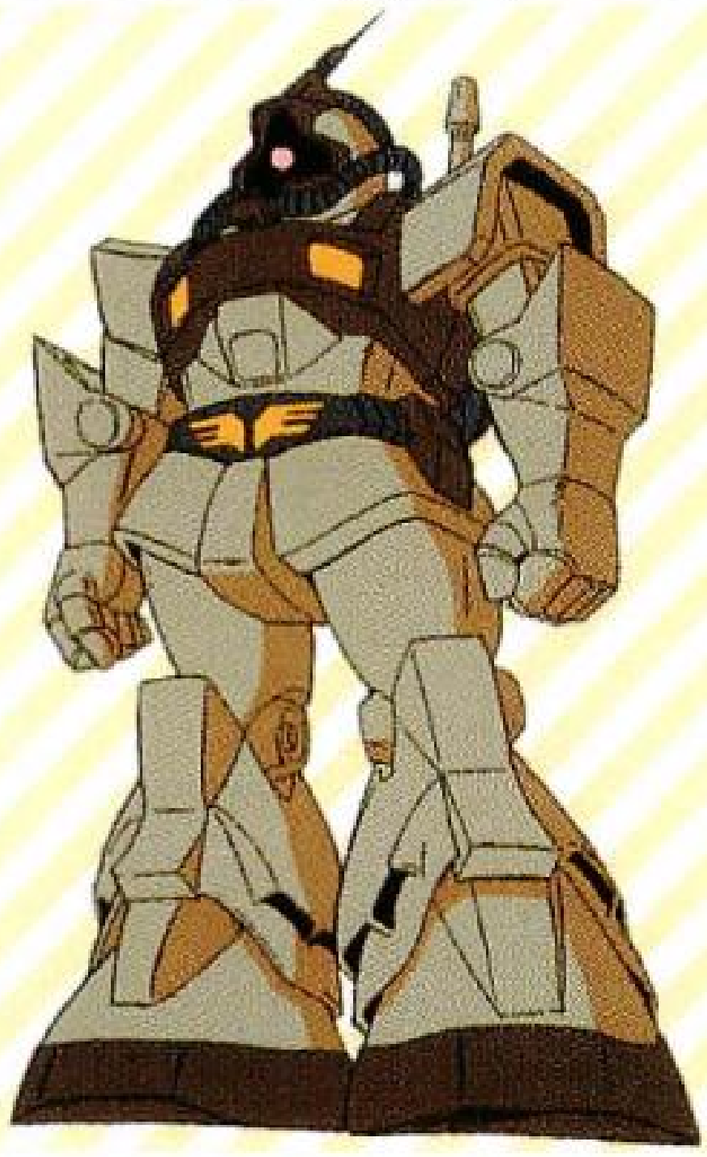
①試験用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-14C
ゲルググキャノン



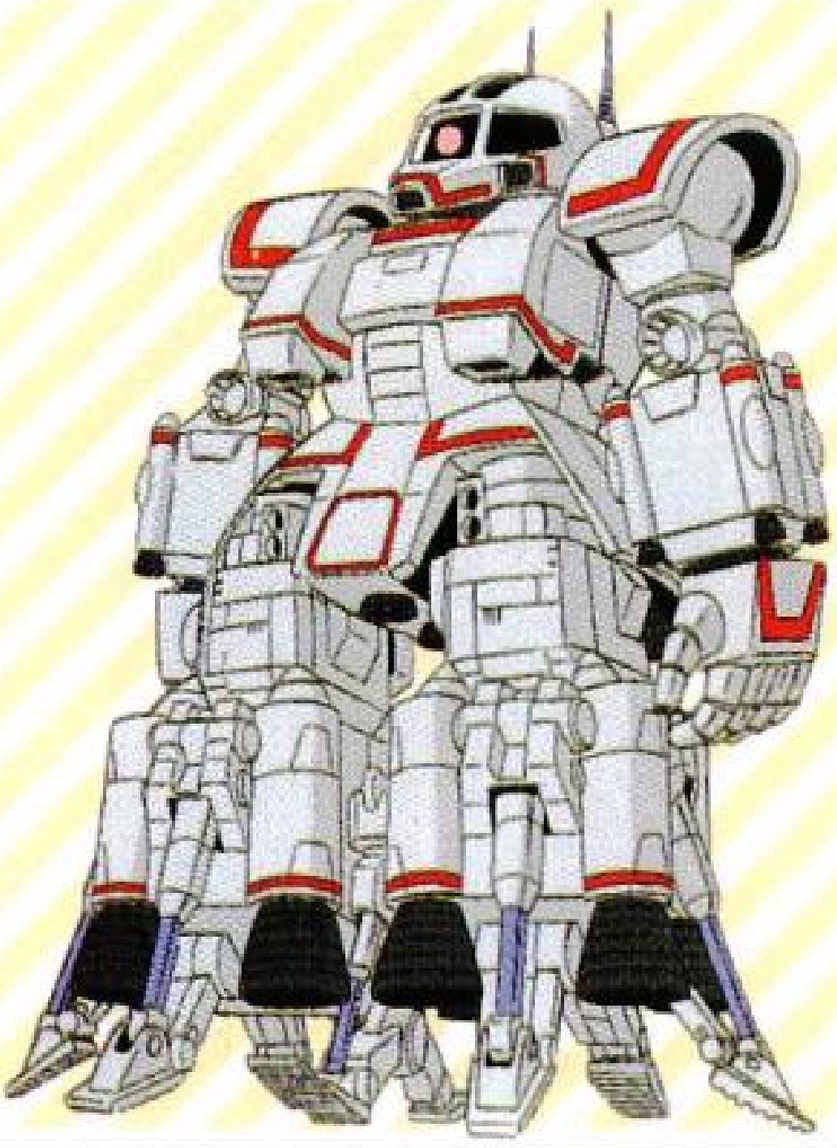
①砲撃戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/60 1/144

YMS-09D
ドム・トロピカルテストタイプ



①熱帯地仕様試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/100 1/144

MSN-01
サイコミュ高機動試験用ザク



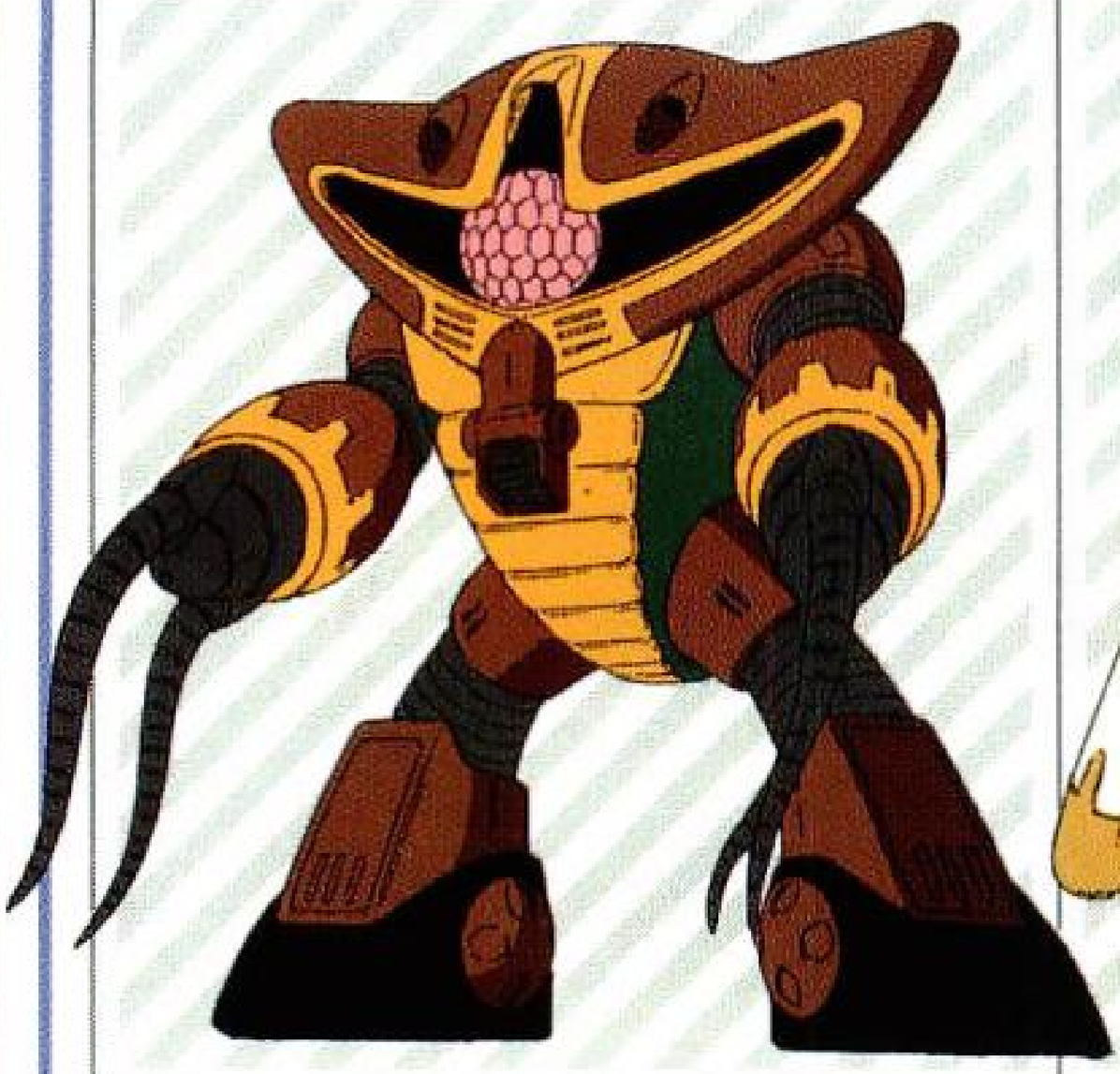
①試験用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-14B
高機動型ゲルググ（J・ライデン専用）



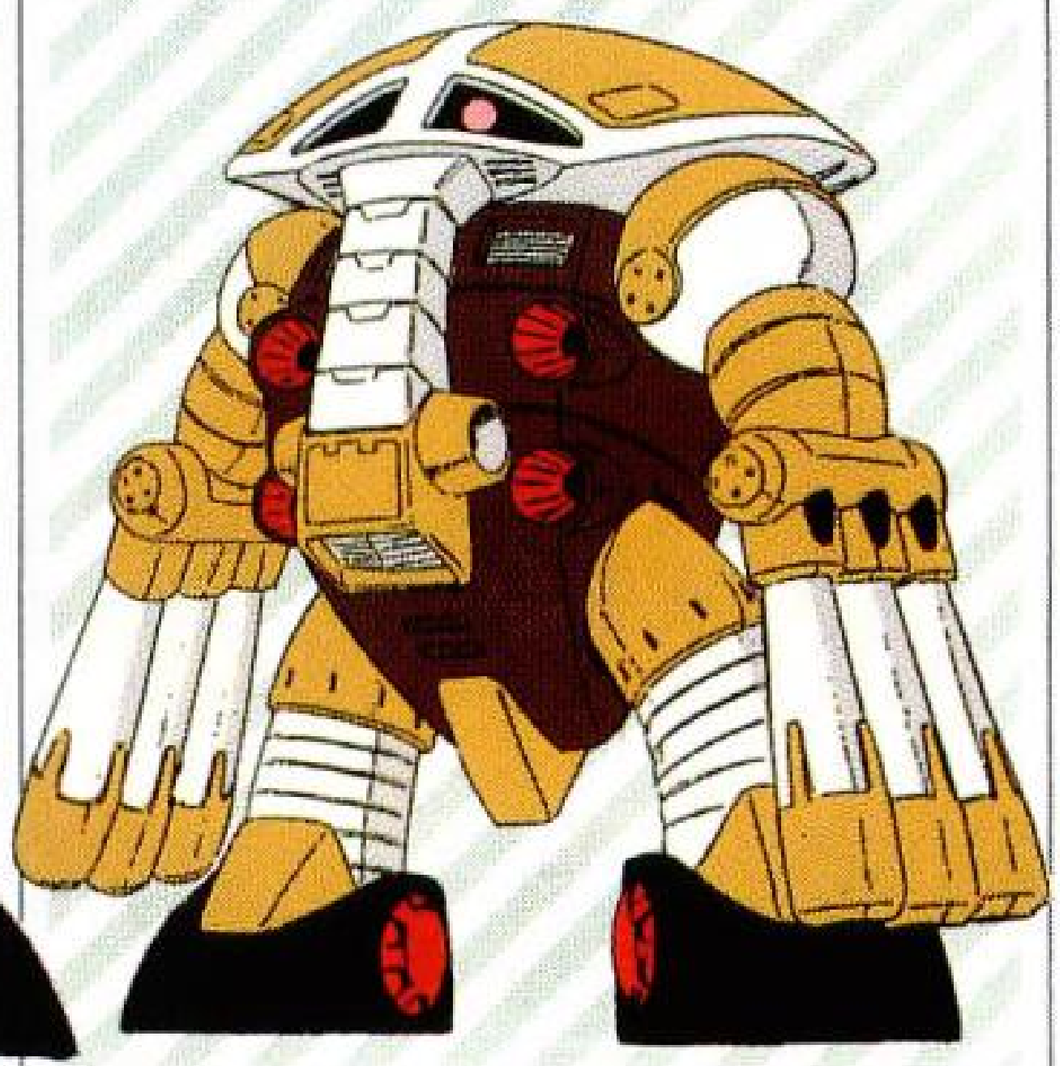
①宇宙戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MSM-04N アッグガイ



①水陸両用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/100 1/144

MSM-04G ジュアッグ



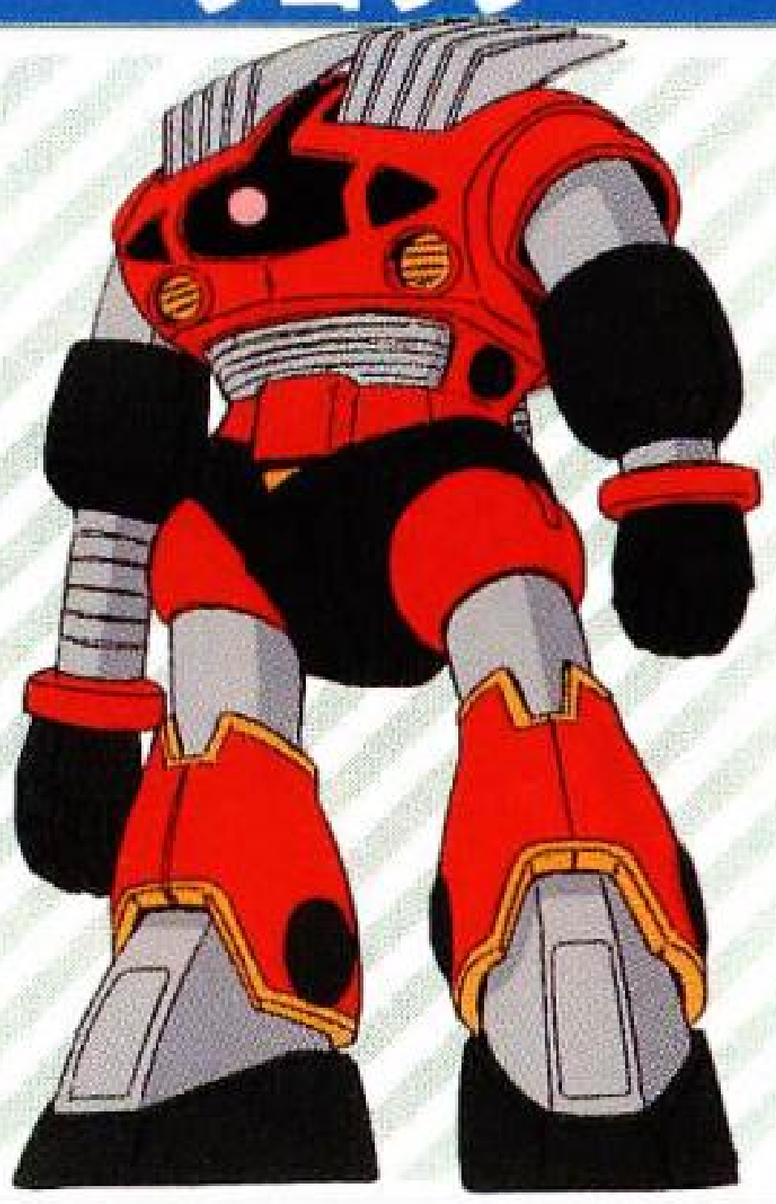
①水陸両用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/144

EMS-05 アッグ



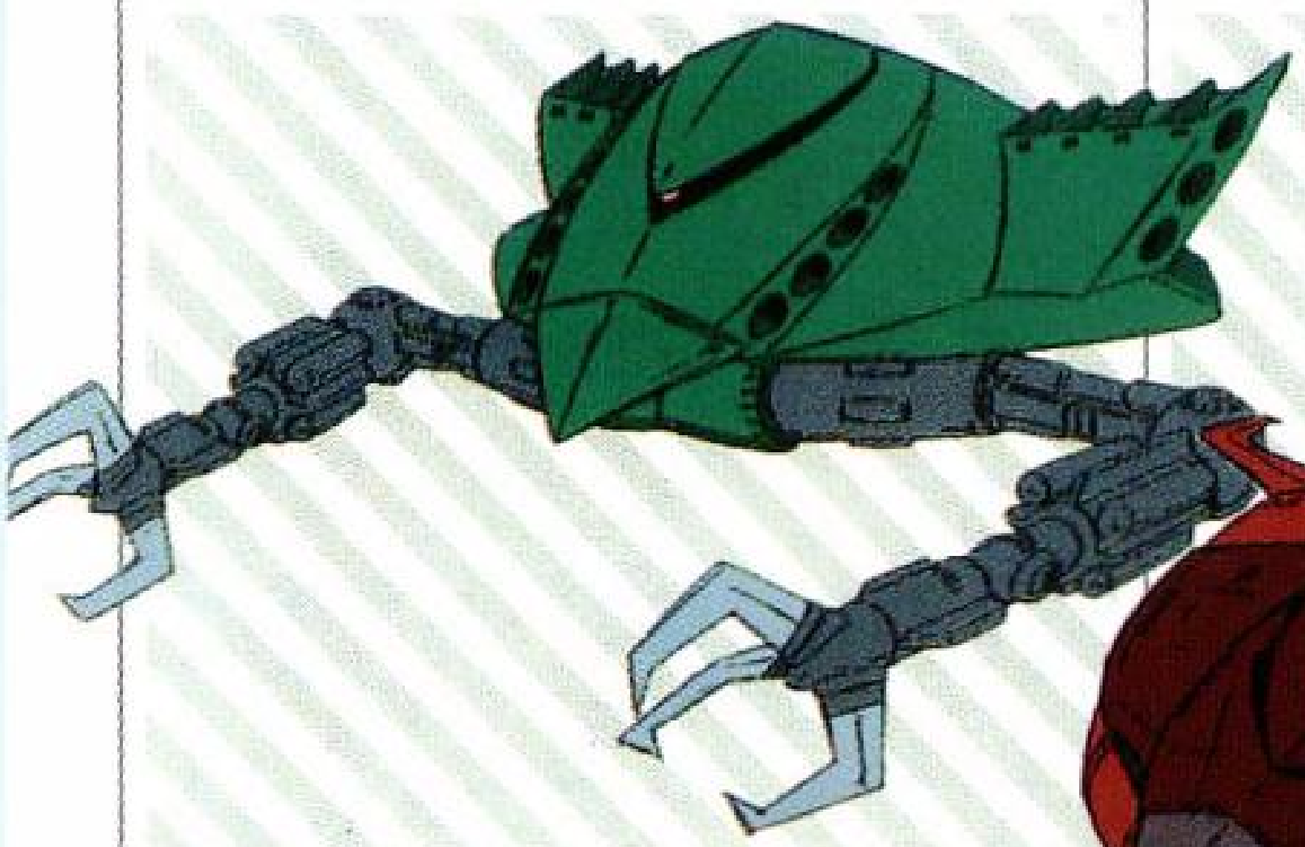
①特殊工作用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/100 1/144

MSM-08 ゾゴック



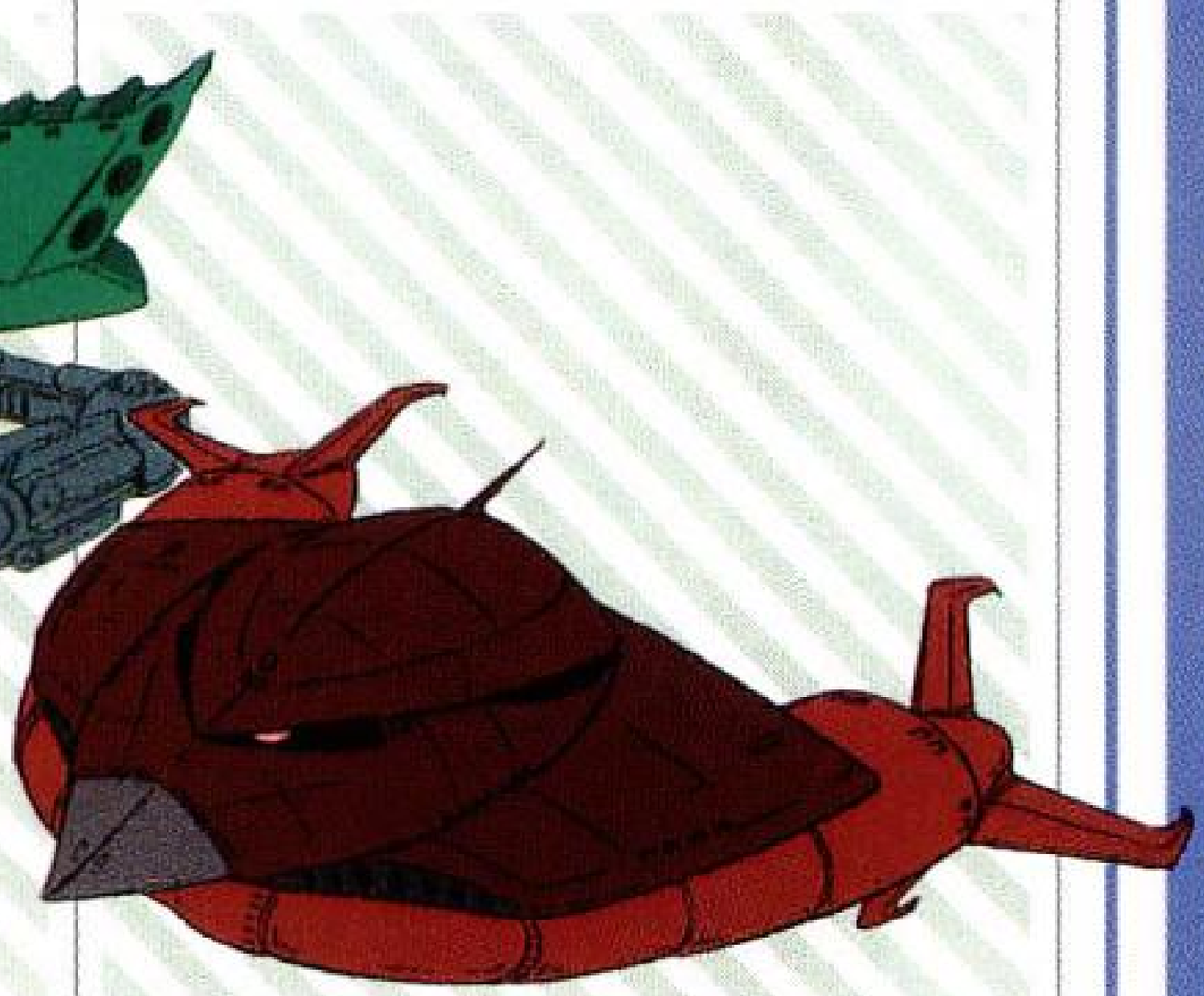
①水陸両用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/100 1/144

MA-05 ビグロ



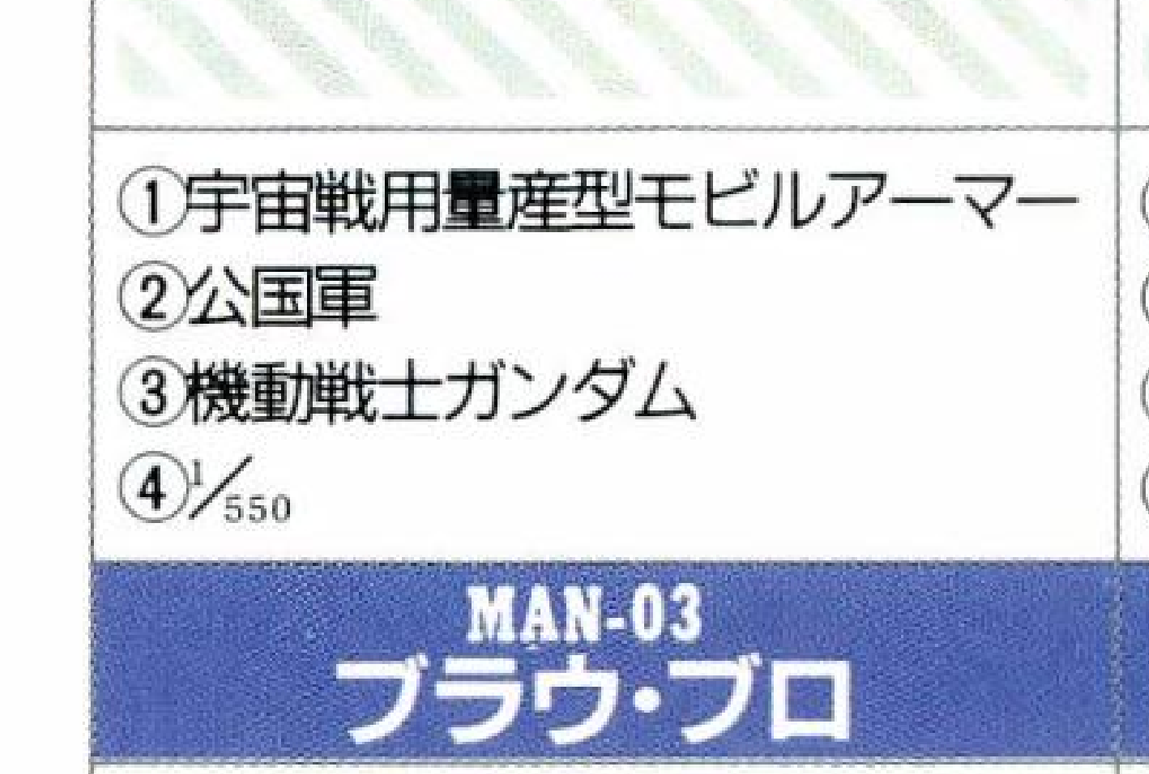
①宇宙戦用量産型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAM-07 クラブロ



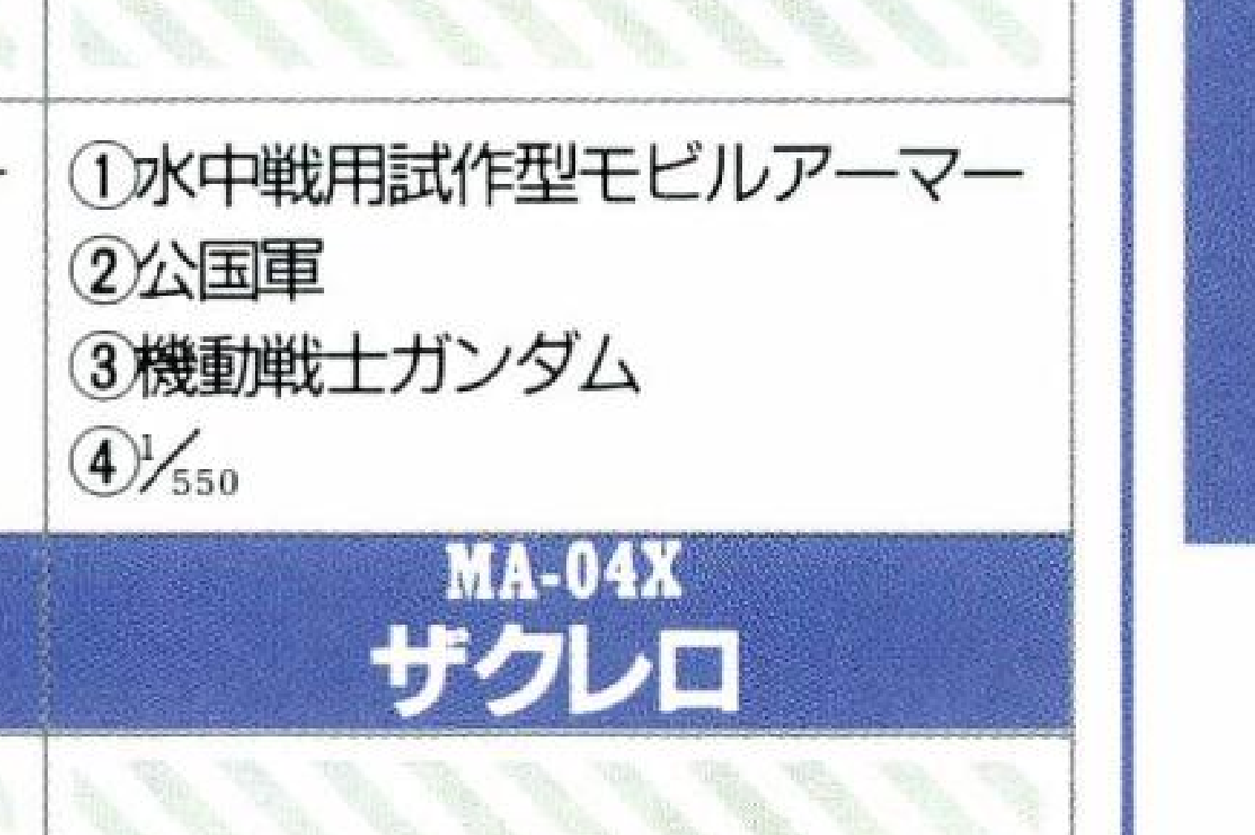
①水中戦用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAN-03 ブラウ・ブロ



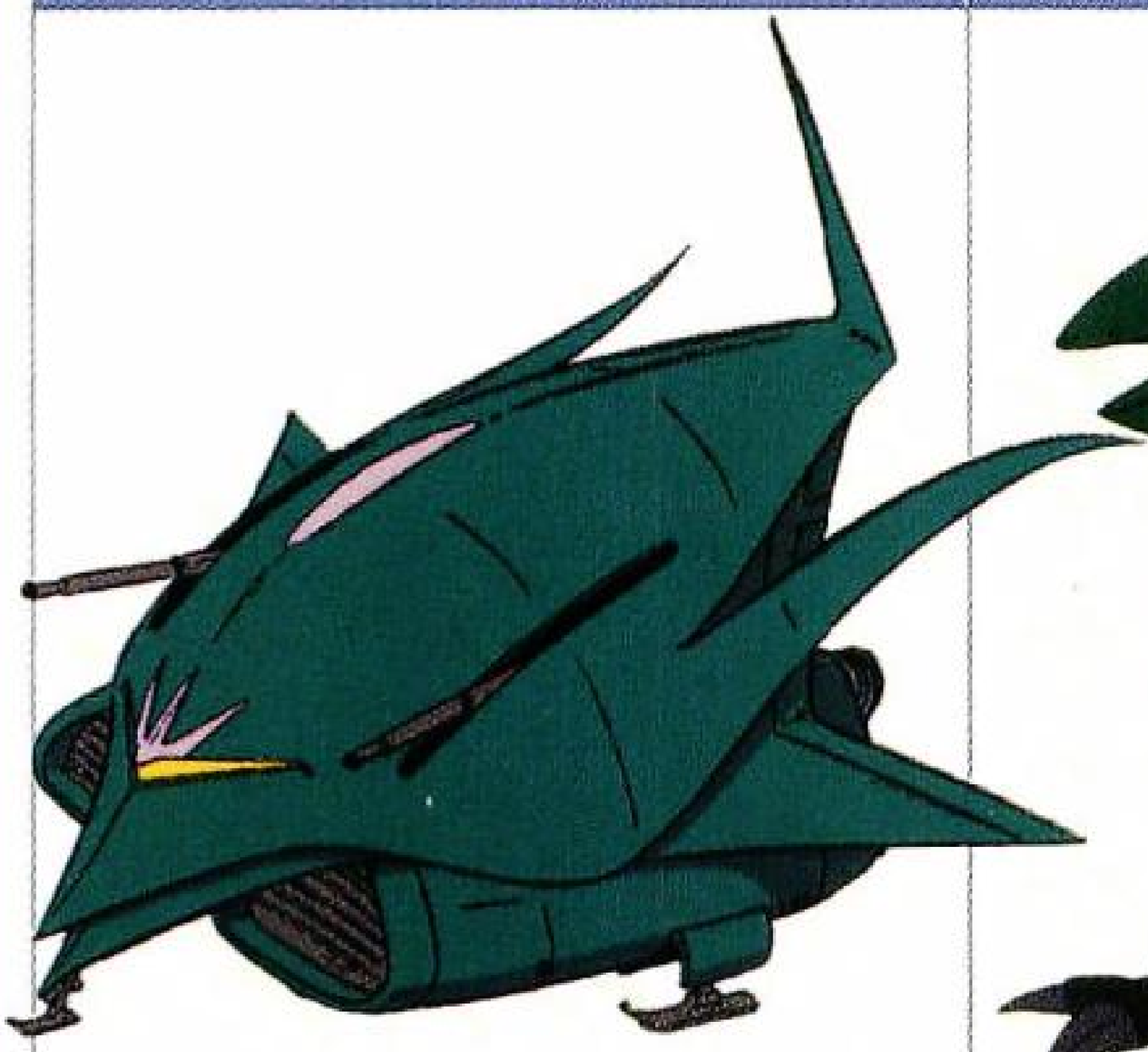
①NT（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MA-04X ザクレロ



①宇宙戦用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAN-08 エルメス



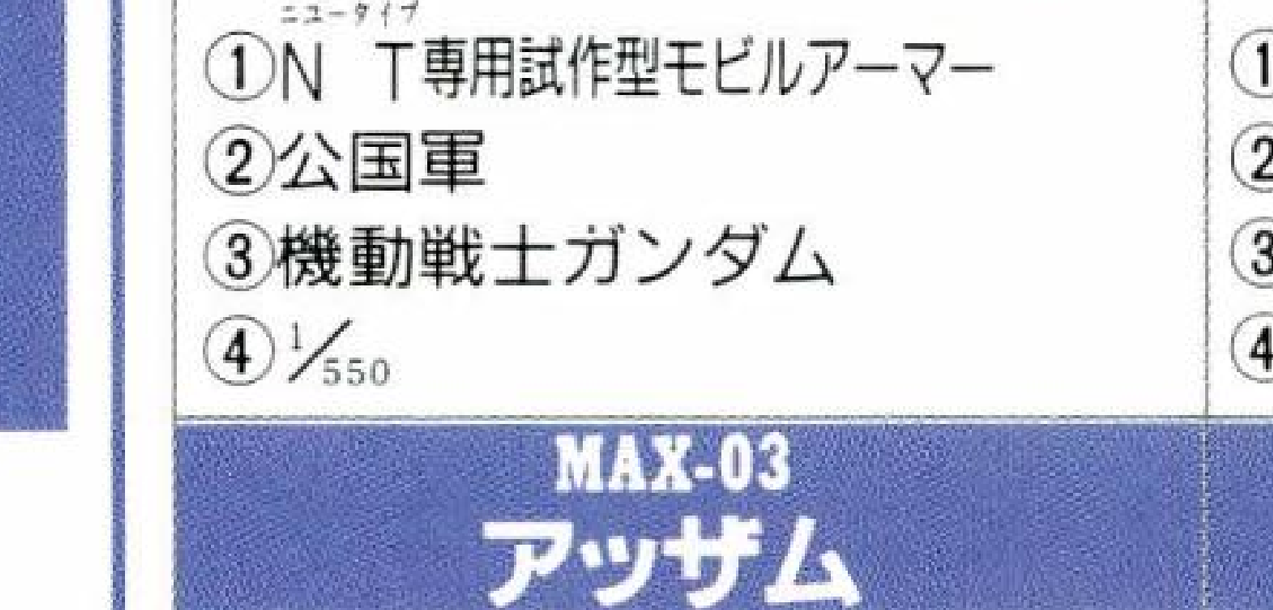
①NT（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MA-08 ビグ・ザム



①対艦／対要塞戦用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAX-03 アッサム



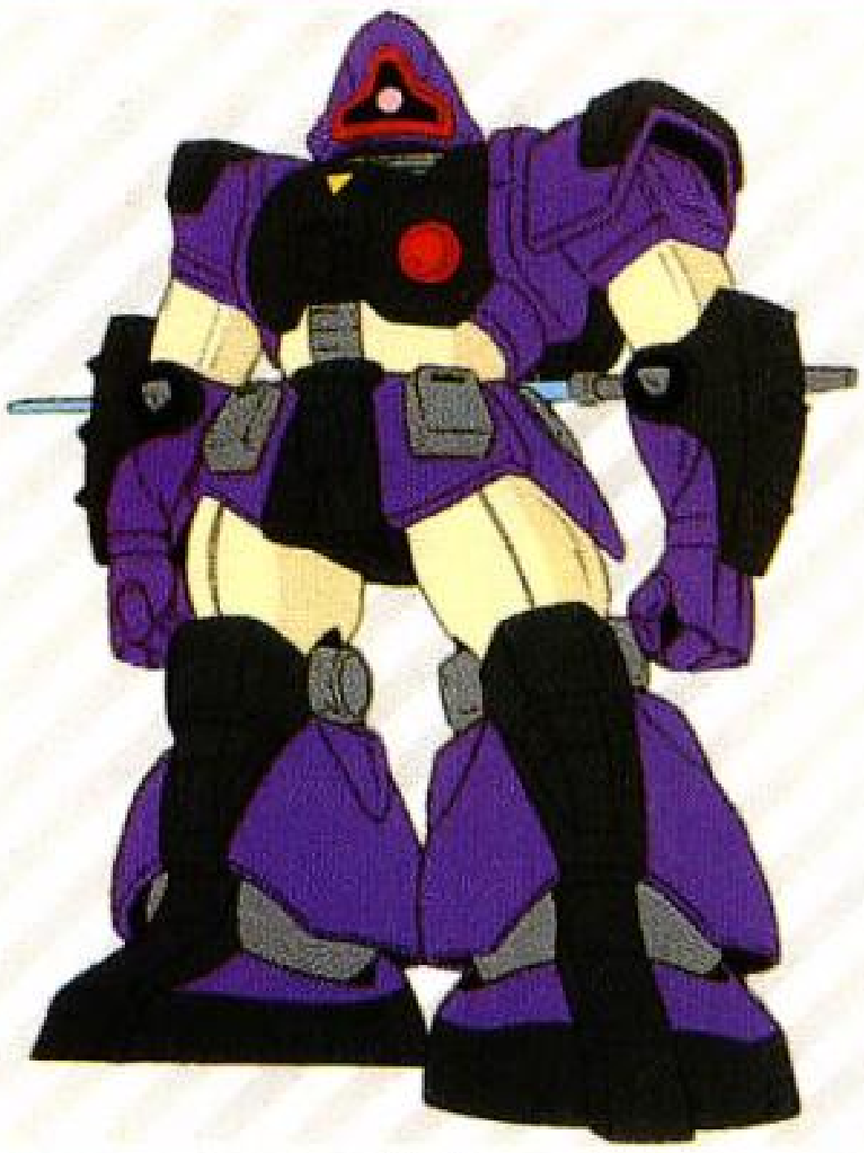
①試作型機動砲座
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MSN-02 ジオング



①NT（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/144

MS-10 ペズン・ドワッジ



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MSN-02 ジオング（完成機）



①N T（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③MSV
④1/250

MS-12 ギガン



①砲撃戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-11 アクト・ザク



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-17 ガルバルディα



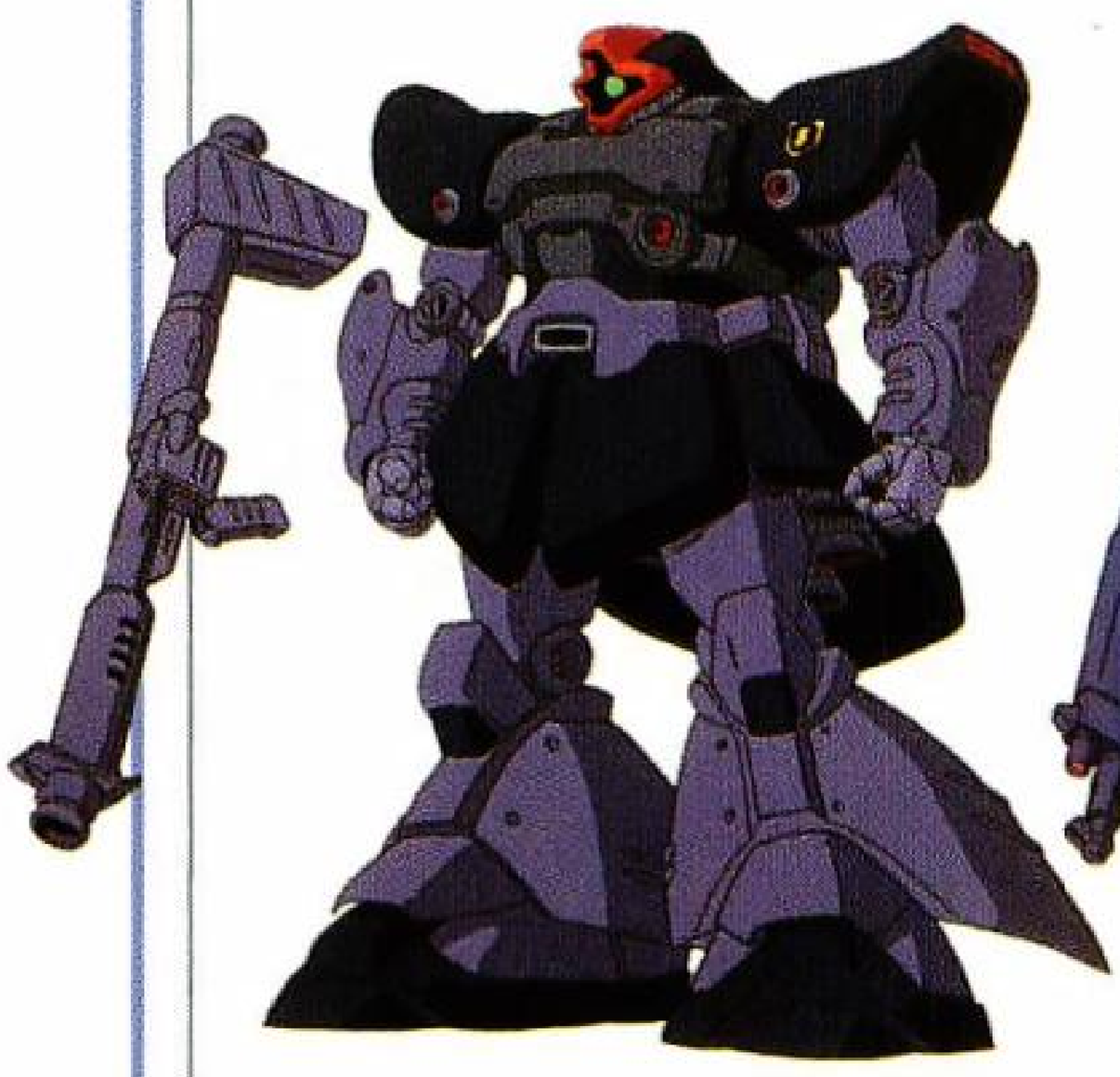
①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-13 ガッシャ



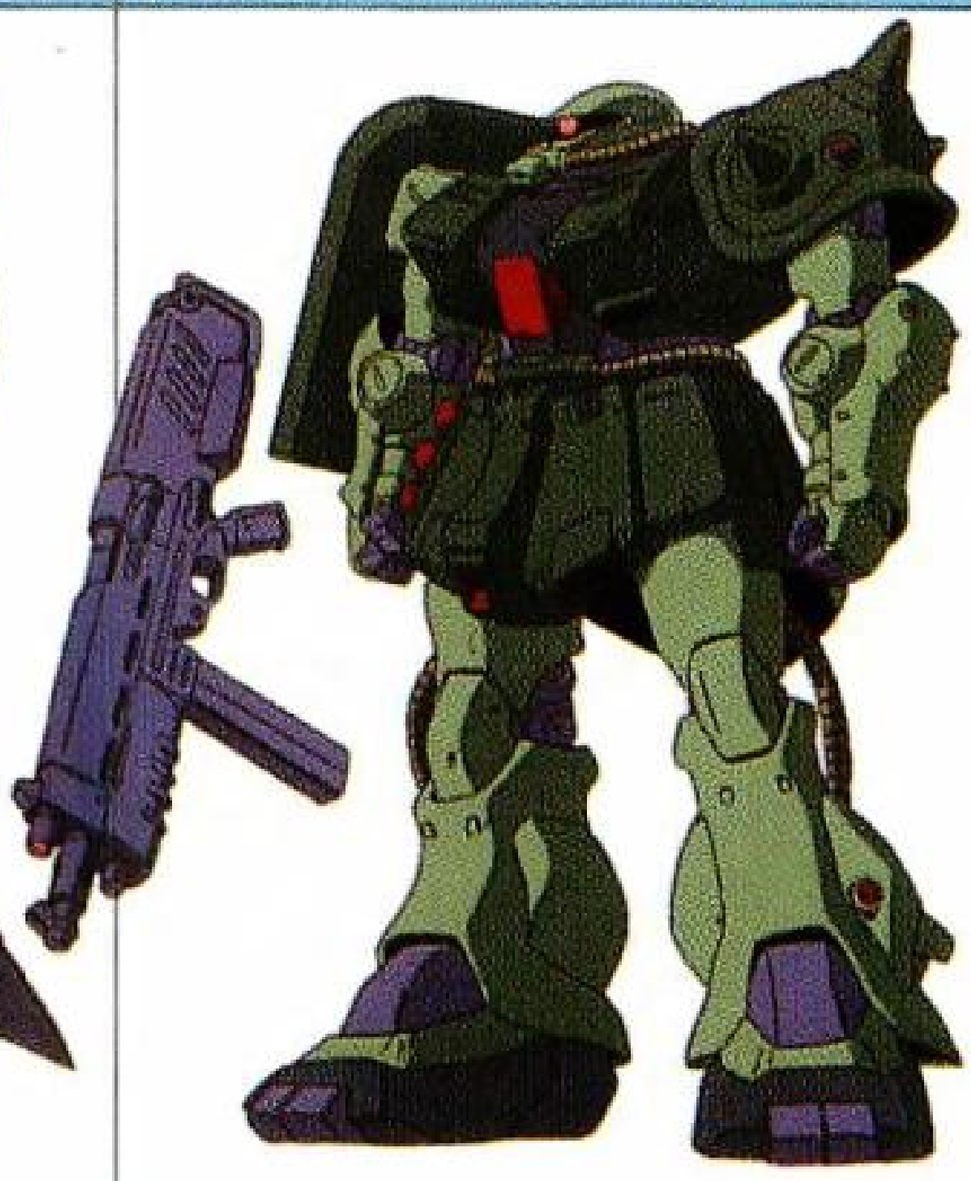
①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-09R II リック・ドムII



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-06FZ ザク改



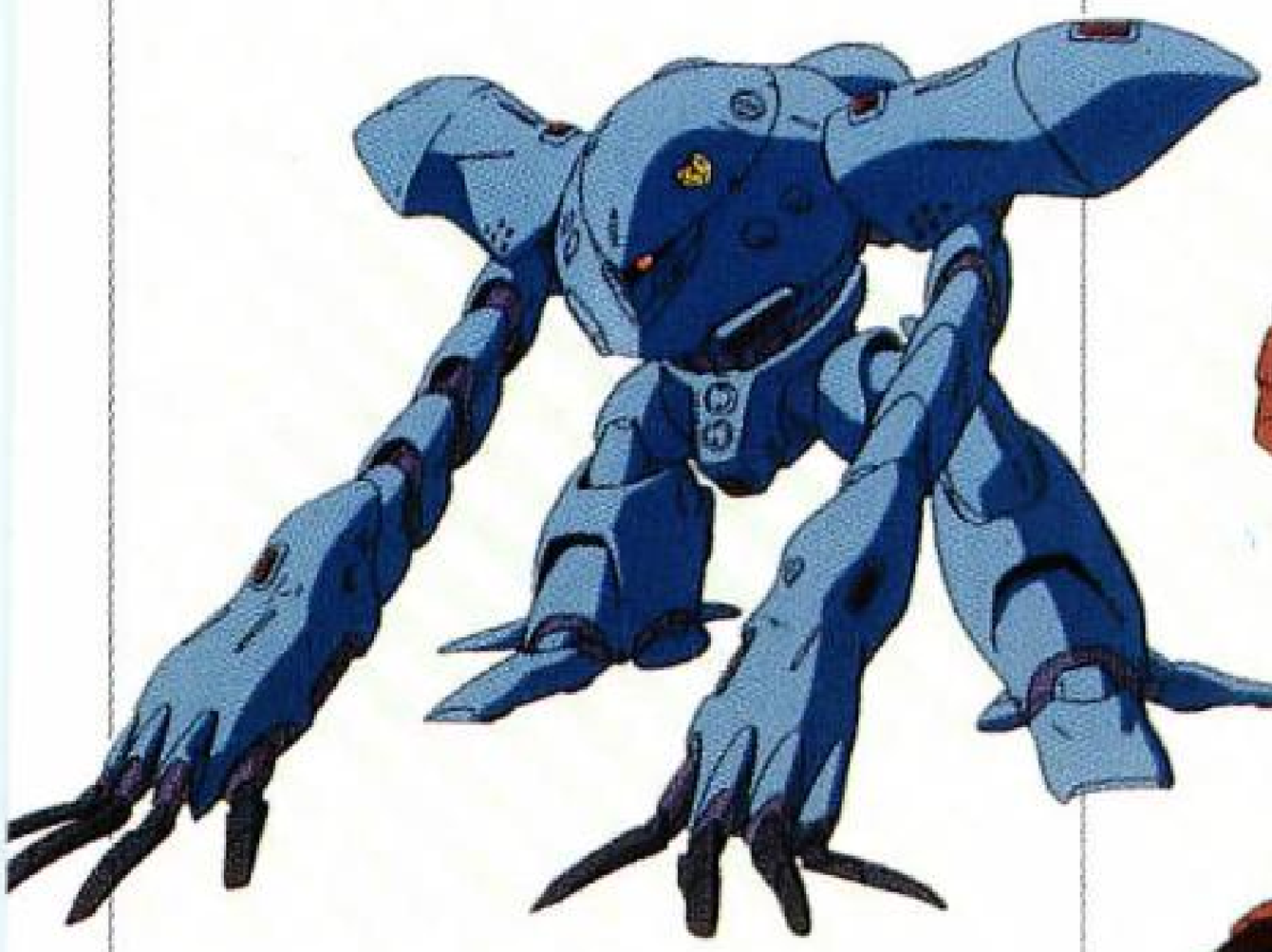
①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-14JG ゲルググJ



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MSM-03C ハイ・ゴック



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-09R II リックドムIIコロニー戦仕様

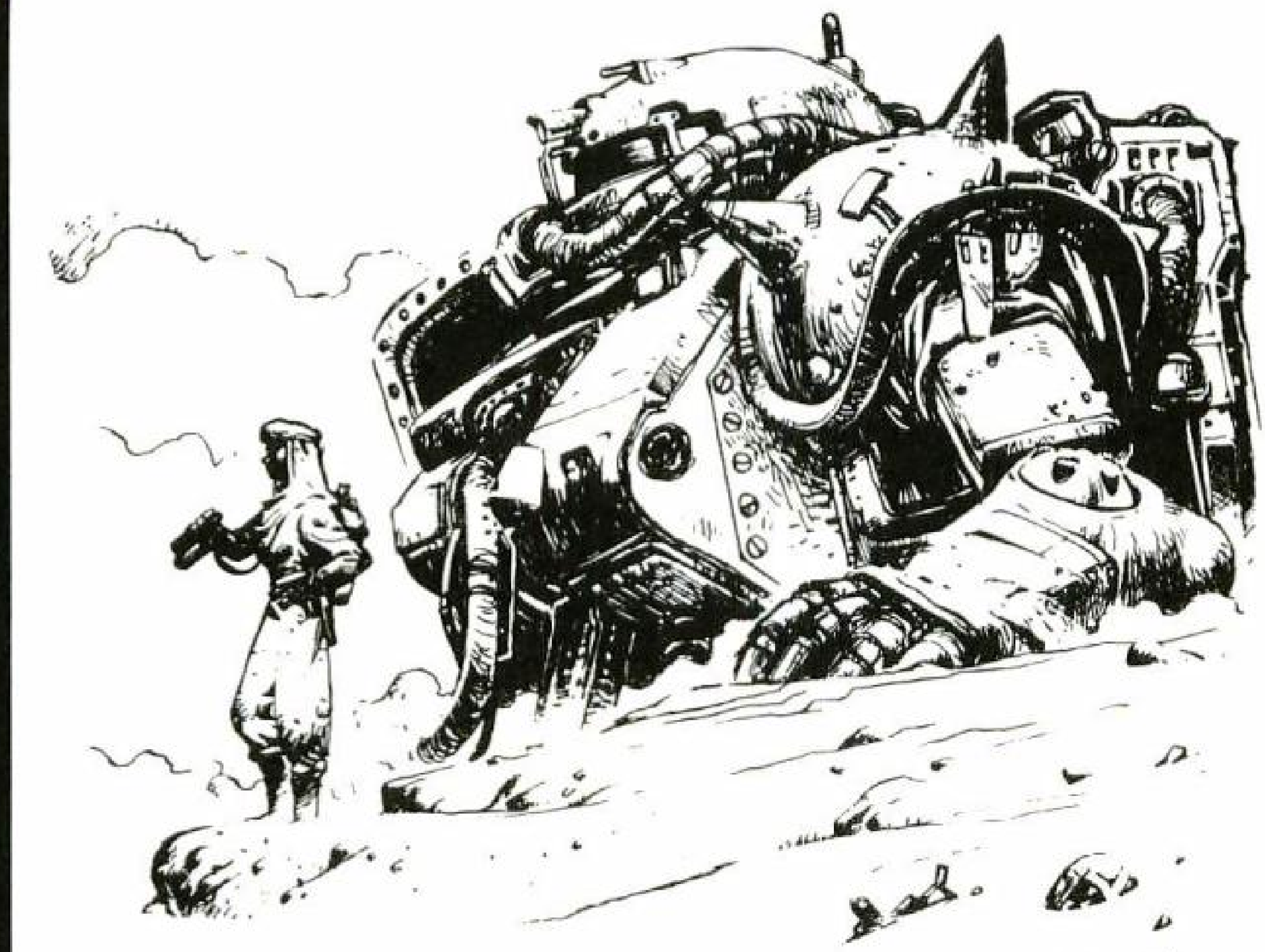


①陸戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MSM-07E ズゴックE



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144



MS開発史

MS Development History

●一年戦争に登場した主要MS（モビルスーツ）は、およそ10機種。だが、細かいバリエーション、試作機だけの機体を合わせれば80機種を超える。ここでは、MS・MA（モビルアーマー）の開発経由を解説していく。

Illustration by Takuhiko Kusanagi

1.モビルスーツの誕生

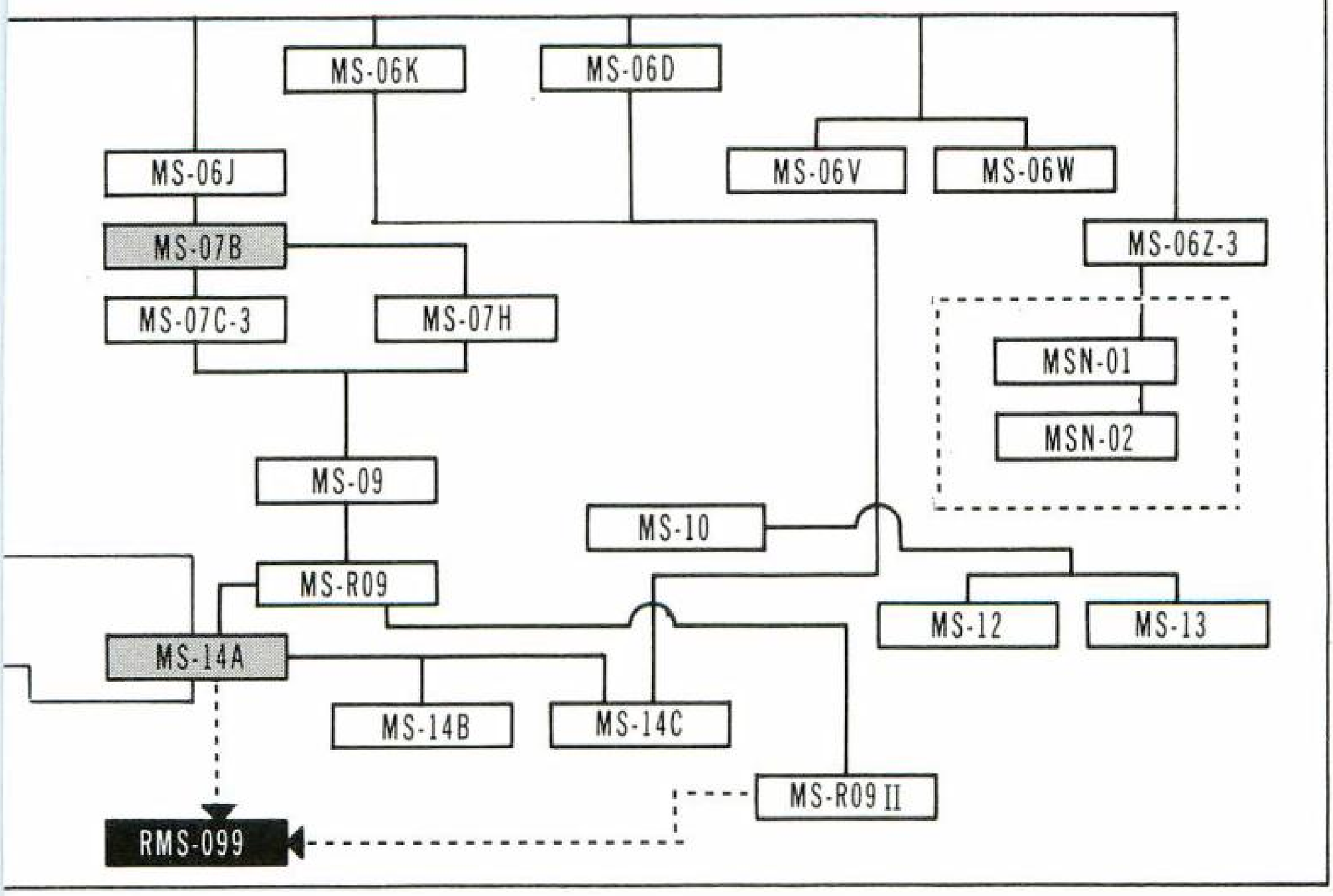
一年戦争においてジオン公国が、国力において地球連邦にほぼ互角に戦うことができたのは、MS（モビルスーツ）の存在があったればこそである。特に大戦初期にはMS機動部隊の活躍が、公国軍に一方的勝利をもたらした。

MSとは、MOBILE SUIT（Space Utility Instruments Tactical）＝戦術汎用宇宙機器、つまり宇宙空間においてのあらゆる戦術目的に使用できるように開発された兵器のことである。当然のことながら、この兵器はミノフスキー粒子とは切り離すことはできない。

ミノフスキー粒子は007年にジオン公国でその存在が確証された素粒子である。この粒子が散布されたフィールド内では電磁波の伝達が著しく阻害され、レーダーの精度が低下し、遠距離の無線通信も不可能となる。また、高濃度のミノフスキー粒子下では、電子回路にも機能障害が生じる。当然、平行して保護システムも開発されたが、非常に高価で重量もかさむため、ミサイルクラスの誘導兵器に搭載することは不可能だった。この粒子は在来兵器を一挙に過去のものにしてしまったのだ。

ジオン公国国防省は、月面アンマン市に本拠を置く、アナハイム・エレクトロニクス社と協力し、MSの開発を開

ジオン公国軍製モビルスーツ開発経路



MS Development History


MS-05ザクー

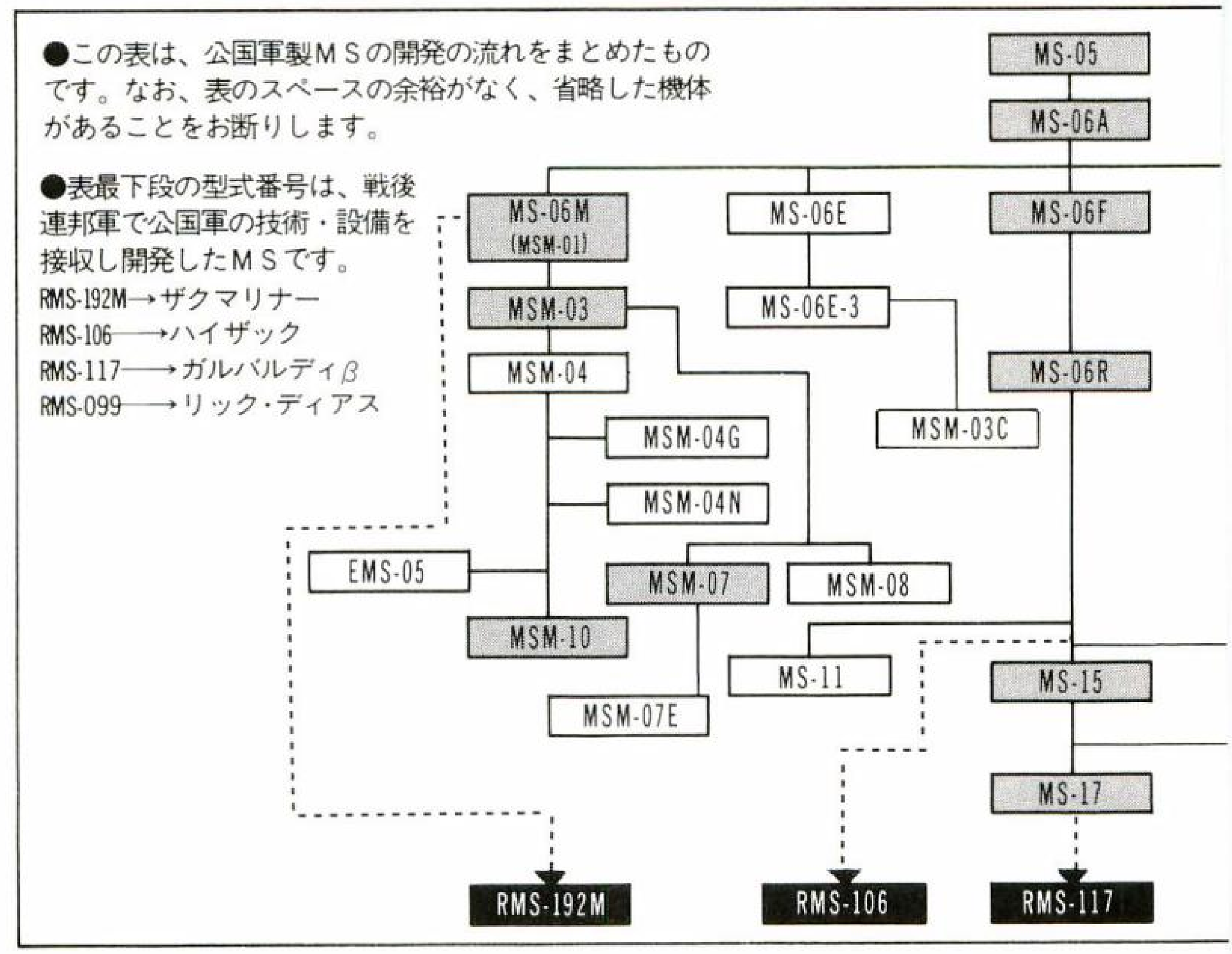
始した。もちろん表向きは非戦闘用の宇宙作業機としてである。

MS開発史上、初の量産機MS-05ザクーが生まれるまでさまざまな技術的困難があった。特に主機として採用が決定していた核融合炉は、小型軽量化が難しく、稼動時に生じる熱を機外に処理する問題も残されていた。しかし、当時開発されたミノフスキー物理学を応用した新型超小型核融合炉を搭載することにより、国防省が提示した要求性能にかろうじて達し、0075年7月に量産が決定した。

そして、同年11月にはキシリア・ザビ大佐（当時）の指導による実験的MS部隊、教導機動大隊が編成された。この部隊は、パイロットの育成と同時にMSの運用、戦術を確立させたのである。

●この表は、公国軍製MSの開発の流れをまとめたものです。なお、表のスペースの余裕がなく、省略した機体があることをお断りします。

●表最下段の型式番号は、戦後連邦軍で公国軍の技術・設備を接収し開発したMSです。
RMS-192M→ザクマリナー
RMS-106→ハイザック
RMS-117→ガルバルディβ
RMS-099→リック・ディアス



2.公国軍の陸戦用モビルスーツ

MS－05の運用テスト、及びパイロットの育成と平行して、公国軍はさらなる改良機の開発を急いだ。MSの基本設計はほぼ確立していたものの、有視界戦闘に欠くことのできないモノアイの精度、主機の出力、流体パルスモーター式アクチュエータの出力など実戦に投入するには、まだまだ性能向上を計らねばならないと判ってきたためだ。

そして、0077年8月には、MS－06Aザク‖の試作機がロールアウトした。この06A型は、大戦中最も製造台数が多かったF型と形状が似ていたが、両肩がスパイクのない球状のアーマーで、左肩のシールドも装備されていなかった。武装はMS－05の105ミリマシンガンより破壊力の大きい120ミリマシンガンに240ミリバズーカが用意された。基本性能はMS－05よりはるかに高く、量産がすぐに決定されたが、キシリア・ザビ大佐より連邦軍が対抗兵器としてMSを開発した場合を想定し装備の見直しを命じたため、急きょ量産を一部中断し、再設計に入ったのだ。そしてC型である。C型は、地球の表面積の7割を占める海での運用を考えた水陸両用型をベースに各種の局地戦用機が平行で開発された。

まず、冷却剤（エーテル）を必要としない空冷式冷却システムに換え、さらに宇宙戦用装備の一切を除去したJ型が生まれ、陸戦用機として新設計されたMS－07グフが作られることになる。また、対空砲を装備したK型、砂漠戦用のD型、水中用のM型などが続けて完成している。一方、宇宙戦専用機の研究も行われ、高機動戦闘用のR型、強行偵察用のE型など数多くのバリエーションが生まれた。事実、大戦中期まで開発されたMSは、全て〝ザク〟系の機体だったのだ。

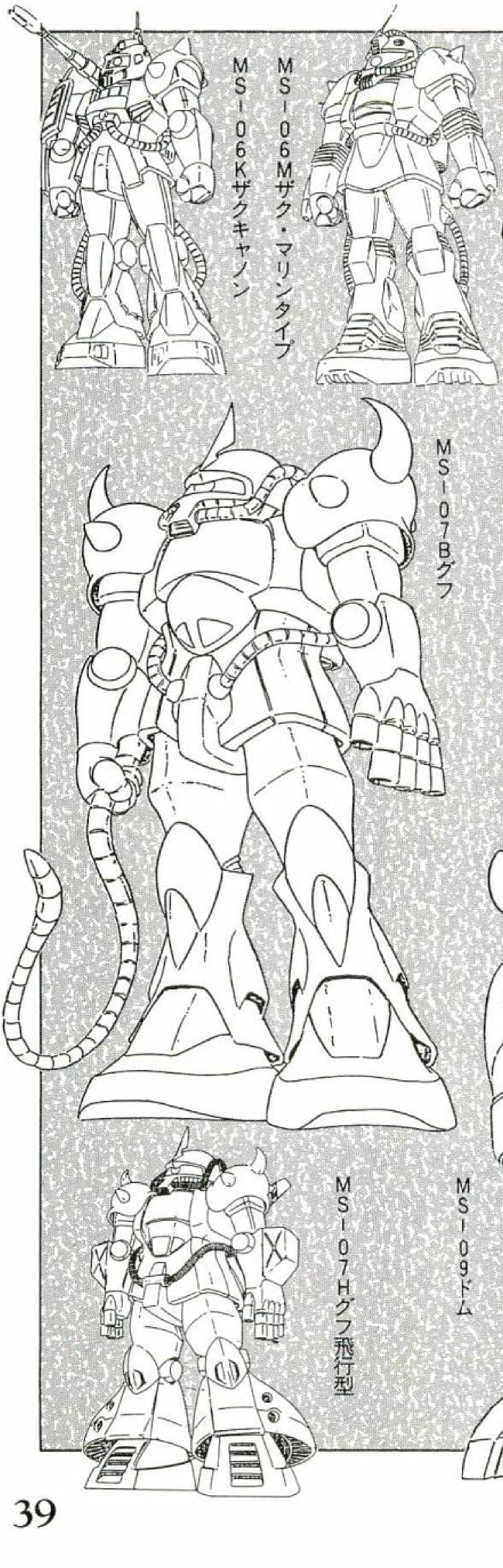
この設計から初めて離れた機体がMS－09ドムである。このMSは、脚部に熱核ジェットホバー（スラスター）を搭載し、J型や上移動力をホバー走行によって補った画期的な機体であった。

と移行していった。

0076年12月に国防省は地球侵攻作戦用の局地戦用MSの開発をアナハイム・エレクトロニクスに命じている。本来MSは地球重力下の陸戦にも対応するように設計されており、事実、月面やコロニー内でも模擬戦闘でも充分な性能を発揮している。だが、生産性を考えるなら、宇宙用の装備は高価で地上ではデッドウェイトになるため、局地戦仕様機はぜひ必要だった。

そして、C型の量産がスタート。公国軍はこの時点より本格的な戦時体制へ

MS Development History



MS-06Mザク・マリンタイプ

MS-06Kザクキャノン

MS-07Bグフ

MS-06J陸戦用ザク

MS-07Hグフ飛行型

MS-09ドム

3.公国軍の水陸両用モビルスーツ

ザク系の派生型のひとつである水中戦用のMS-06Mは、MS-09ドムとは別系統の機体を生み出した。それがMシリーズと呼ばれる水陸両用MSである。

MS-06Mは、ただ単にC型の改造機であり、宇宙戦用装備を除き、水流ジェットエンジンを内蔵したバックパックを搭載している。水中用MSの利点は、機外の水を冷却剤として使えるため、機体容積の大きい冷却システムを簡素化できることだ。その分の空間には代りにバラストタンクが設けられ、機体の浮沈や姿勢制御が行われる。問題点は防水処理であった。外装を流面形に近づけ、各関節にシールドを施したが、MS-06の構造そのものが耐圧性にとぼしく、100メートル程度の潜水で浸水が見られた。結果としてM型は河川や水深の浅い湾岸での運用に限定され、量産化には到らなかった。

だが、水冷式冷却システムにより高出力大型核融合炉の搭載が可能と判り、新たにMシリーズMS(水陸両用MS)の開発が始まった。MS-06Mは、MSM-01の型式番号が与えられ、実験機として地球侵略作戦の第3次降下部隊とともに地球のキャリホルニアベースに送られた。

キャリホルニアベースは、元は連邦軍の基地であったが、第2次降下部隊がほぼ無傷で制圧し、地球攻撃軍の最大基地となった。ここは軍港、空軍基地、シャトル打ち上げ場、各種兵器開発研究・試験場、生産工場などが集約された北米最大の軍事施設であった。ここが地球で運用されるMSの開発・生産基地となった。

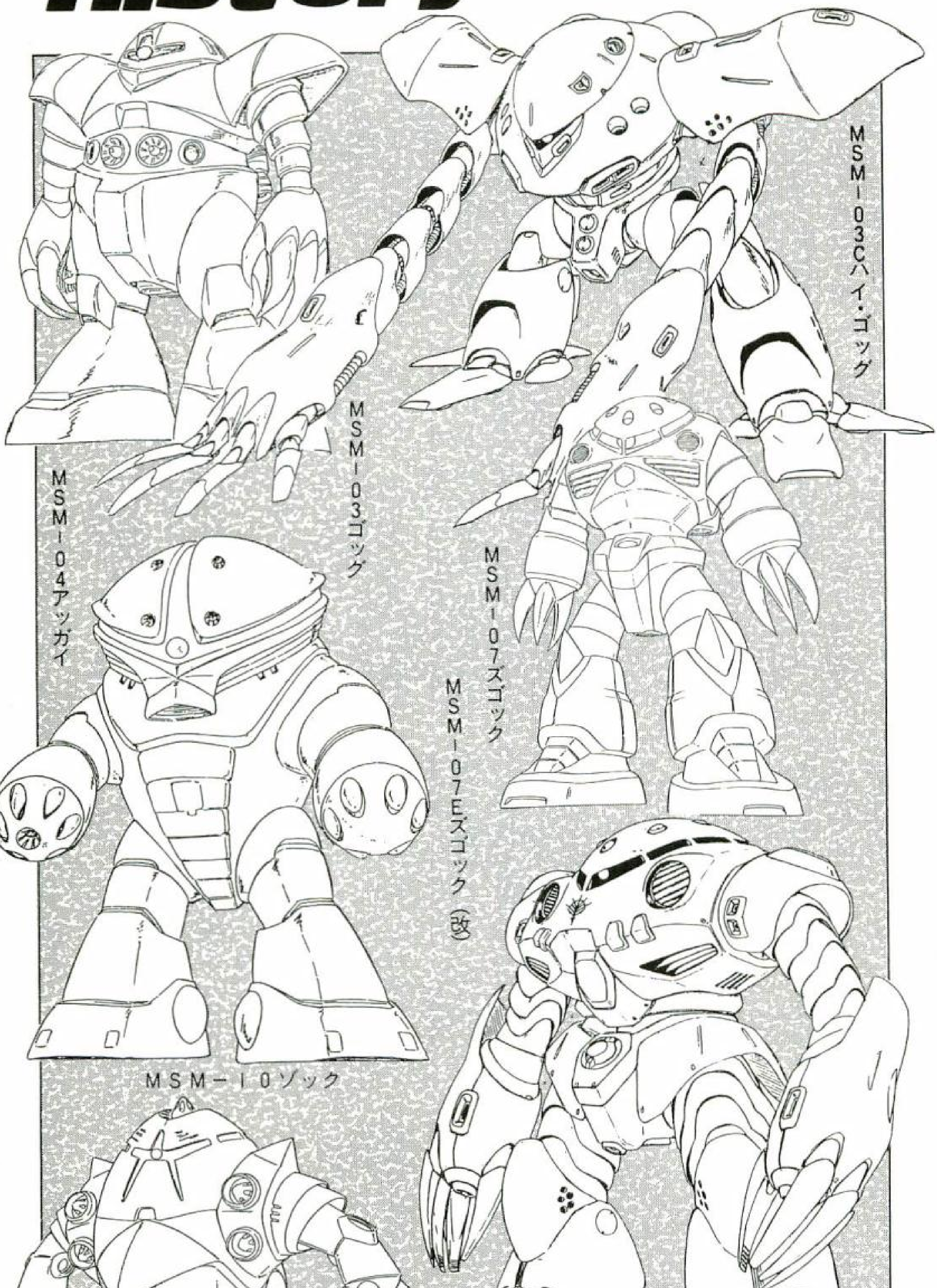
さて、Mシリーズ初の量産機は、MSM-03ゴッグである。この機体は高出力核融合炉を搭載したおかげで、公国軍初のメガ粒子砲を搭載したMSとなった。欠点は冷却上の制限から陸上の作戦行動時間は短いが、上陸作戦では多大なる戦果をもたらしている。

MSM-03とほぼ同時期にMSM-04アッガイ、MSM-07ズゴックが実戦配備されている。MSM-04は、簡易量産型というべき機体で、MS-06から部品を多く流用している。また、ステルス性が重んじられ、外装の塗料は電波及び赤外線吸収材が使用され、機体の廃熱も少なくなっている。さらにシンプルな形状のためソナーでは鯨と見分けがつかなかった。

MSM-07は、陸戦能力に主眼を置いた機体で、水冷式と空冷式ラジエータを併用している。また、熱核水流ジェットと共にジャンプ用の化学燃料ロケットを装備していた。

Mシリーズ最後の機体がMSM-10ゾックである。メガ粒子砲を計9門も搭載し、熱核ホバーのみで陸上を移動するという、MSとMA(モビルアーマー)の中間的存在となった。

MS Development History



4.公国軍の宇宙戦用モビルスーツ

地球上では陸戦用、水陸両用のMSの開発が進められたが、宇宙でもMS－06Cザクll以上の性能を持つ機体の研究が続けられた。まず、開戦初期の主力機であったザクIIのC型に代わり、改良機であるF型の量産が開始された。脚F型は中期から後期まで量産され、最も生産数が多い。宇宙戦用のR型は、その高い運動性が評価されていたが、操縦が極めて難しく、生産数は少ない。だが、脚部に大推力スラスターを搭載するというコンセプトは、のちの汎用MSに強い影響を与えた。

ザクIIに代わる主力汎用機の開発は遅れた。F型の完成度が高く、技術者の思考がそこから離れられなかったためだ。開発の遅れに業を煮やした国防省は、陸戦用に開発されたばかりのMS－09ドムを宇宙戦用に改修するように命じた。課題を与えられた技術者たちは、文字通り寝食を忘れてこのMSに熱中し、わずか2ケ月でMS－R09リック・ドムを作り上げた。脚部及び腰部スカート内の熱核ジェット推進器をロケット換装し、冷却システム他の宇宙用装備を加えていったMSは、高度のコンピュータを搭載し、パイロット観そのものは陸戦用と変らなかったが、増えた装備の分、推進剤の積載量は減り、自重が増して運動性が低下した。

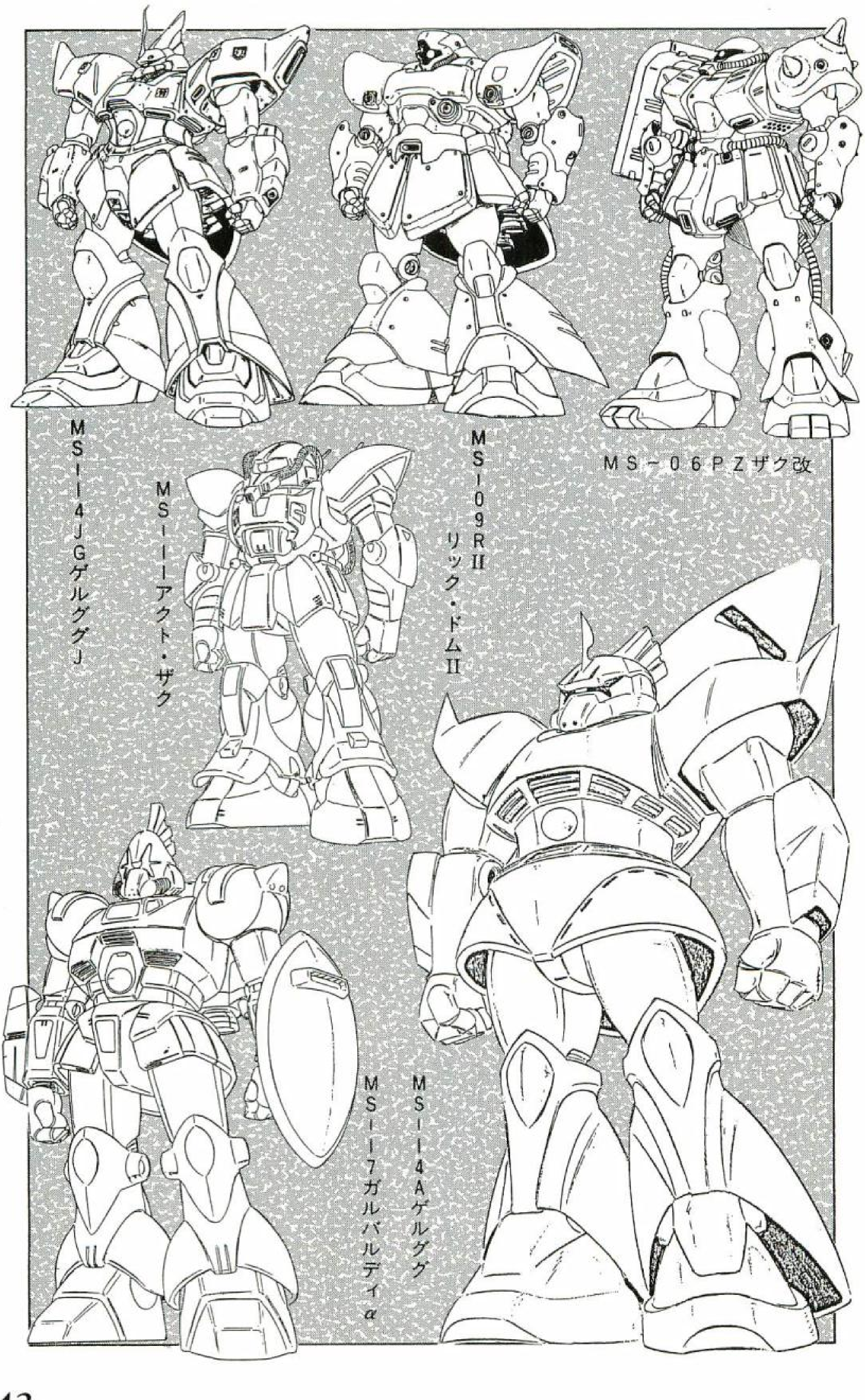
だが、それでもMS－06Fより高性能であった。

暫定的にMS－R09の量産が進められたが、新型の開発はさらに続行された。その後生まれた機体は――MS－10ペズン・ドワッジ、MS－11アクト・ザク、MS－14ゲルググ、MS－15ギャン、MSN－17ガルバルディα――である。それぞれ、特長のあるMSだが、連邦軍に遅れて開発されたエネルギーCAP技術を投入し、ビーム兵器を標準装備化したMS－14が次期主力汎用機に決定した。

だが、テンポの早い新鋭機の登場は、戦場において多くの混乱をまねいた。部品の大半は規格がまったく合わず、前線においては整備不良のため稼動できず、放置されるMSも多かった。また、パイロットにしても操縦システムが機体ごとにバラバラなため、新鋭機への転換に相当苦労したという。そのため、大戦末期には、MS－06F、MS－R09、MS－14の3機種を全面的に改修した機体を再生産型と呼ぶ。（地球でも水陸両用MSのMSM－03とMSM－07を改修している）

大戦後期に連邦軍もMSを開発したが、公国軍側のMSに性能的に劣っていた。だが、連邦軍製MSは、高度のコンピュータを搭載し、パイロットの経験不足を補っていた。それに対し、公国軍は熟練パイロットの多くを、ルウム戦役で失い、新鋭機を操る肝心の人材がいなかった。

MS Development History



5.モビルアーマーの登場

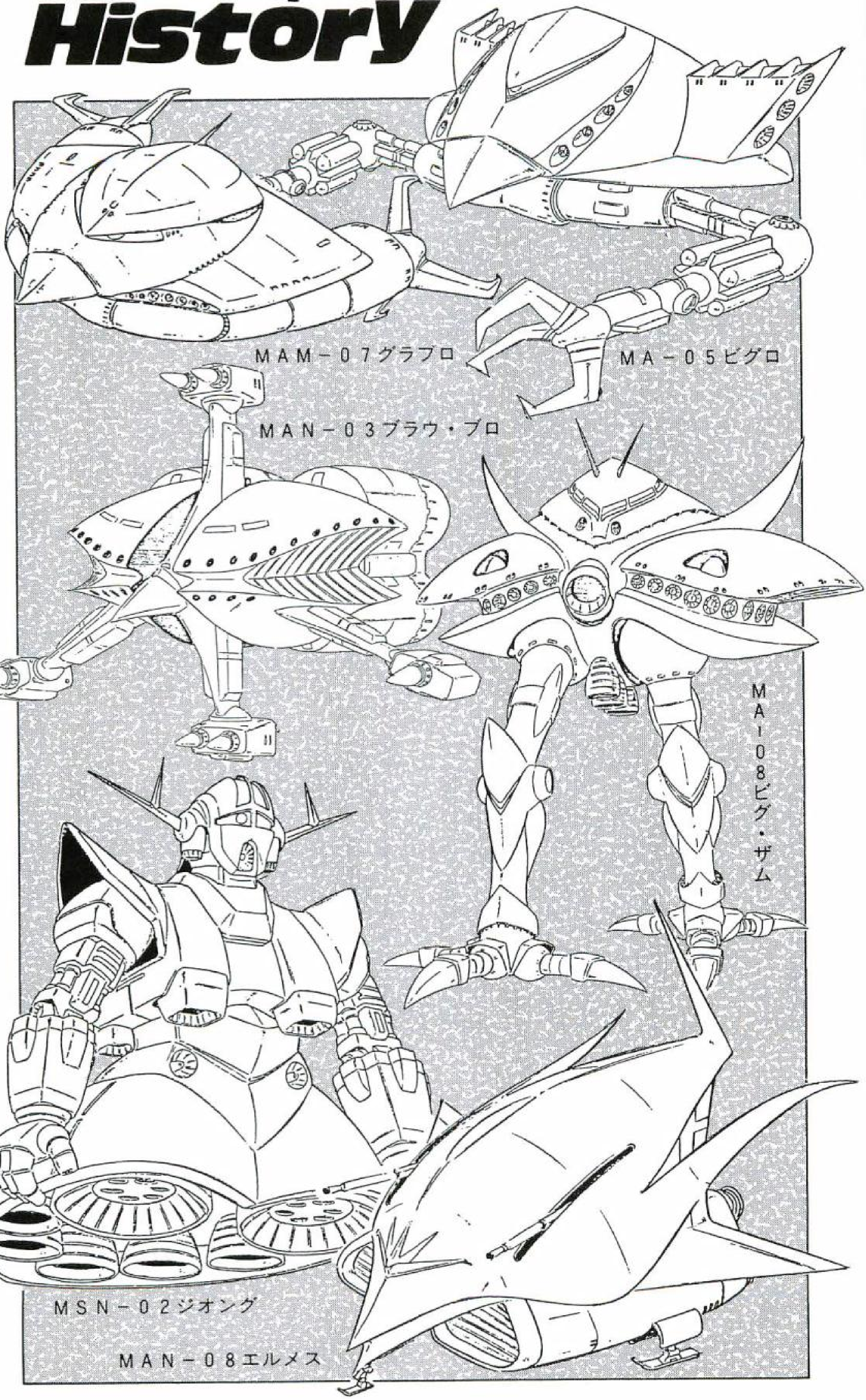
MSはその高い汎用性を持って今次大戦の公国軍の優勢を築いた。だが、戦局の進展と共に局地戦が多様化するにつれ、汎用兵器であるがゆえに状況に対応しきれないという事態が発生した。その解決策として汎用機の局地戦対応化（いわゆるMSV）があるが、この他に新たな支援兵器の開発が提唱された。

そこで開戦以前に検討されたMA（モビルアーマー）案が再浮上した。MAとは人型の形状に限定されない大型機動兵器のことで、試作第1号機は高速宇宙艇にマニピュレータが装備され、威力は低かったがメガ粒子砲までが搭載されていた。当時は汎用性、作業能力が強く望まれ、MA案はMS案に敗れた形になったが、戦局の変化と共に見直しが行われるようになった。

MAが生まれたもうひとつの背景としてサイコミュ・システムの存在があげられる。この装置はフラナガン機関と呼ばれるNT（ニュータイプ）研究所で開発されたマン&マシーン・インターフェイスである。簡単に解説すれば、機械が人間の思考を読み取り、端末である他の機械に伝達するという原理だ。脳波によって直接制御するだけに伝達速度は極めて速い。それが、MAN-05ビグロと呼ばれる宇宙戦用MAの完成後、このサイコミュを搭載した、MA-03ブラウ・ブロが開発される。まだ、実験機の域を出なかったが、有線制御式メガ粒子砲を4基装備し、通常3名の乗員を必要とするが、NT（ニュータイプ）パイロットとサイコミュによって1名で全ての砲を操作することができた。

さらにサイコミュ研究からNT（ニュータイプ）の影響（サイコウェーブ）をまったく受けない感（サイコ）応波である。その他、水中用のMA-07グラブロ、要塞防衛用でNT専用機のMA-08ビグ・ザムなどが登場したが、大戦末期で公国軍には量産する力が残っておらず、さらに訓練飛行も行わず、次々に出撃し、連邦軍のRX-78ガンダムに撃墜された。

MS Development History



6.V作戦発動！（RXシリーズの開発）

0079年3月、連邦軍はMS開発とその運用のための新造宇宙艦の建造を目的としたV作戦を発動させた。計画では、試作機の開発をサイド3から最も遠隔地にあるサイド7で行い、量産機はルナIIとジャブローで作られることになっていた。

連邦軍のMSは当初、格闘戦用機動歩兵、中距離支援用機動砲兵、遠距離支援用機動戦車の3タイプを開発・量産する予定であった。各タイプの部品はできる限り互換性を持たせ、操縦システムも共通にさせた。コア・ブロックは3タイプの完全共通ユニットで、操縦席と制御コンピュータのブロックに脱出機構を持たせ、脱出後は変形しコア・ファイターと呼ばれる汎用軽戦闘機となる画期的システムであった。問題は1機当りのコストがMS－06ザクIIの3倍近くかかる点で量産バージョンには採用されなかった。

また、ビーム兵器の標準装備が目標とされ、RX－78ガンダム、RX－77ガンキャノンにはエネルギーCAP技術による携帯式小型メガ粒子砲、通称ビームライフルが、RX－78のみに格闘戦用のビームサーベルが装備された。これはもちろん公国軍より優秀な核融合炉の搭載によって可能とされた。

3タイプの試作機は、装甲にガンダリウム合金を使用した3重（ハイブリッド）ハニカム装甲（アーマー）が採用された。耐弾性が高く、MS－06の120ミリ弾の直撃に耐えるが、主原料であるルナチタニウムが希少で、加工しにくいという欠点もあり、これも量産機には不採用となった。

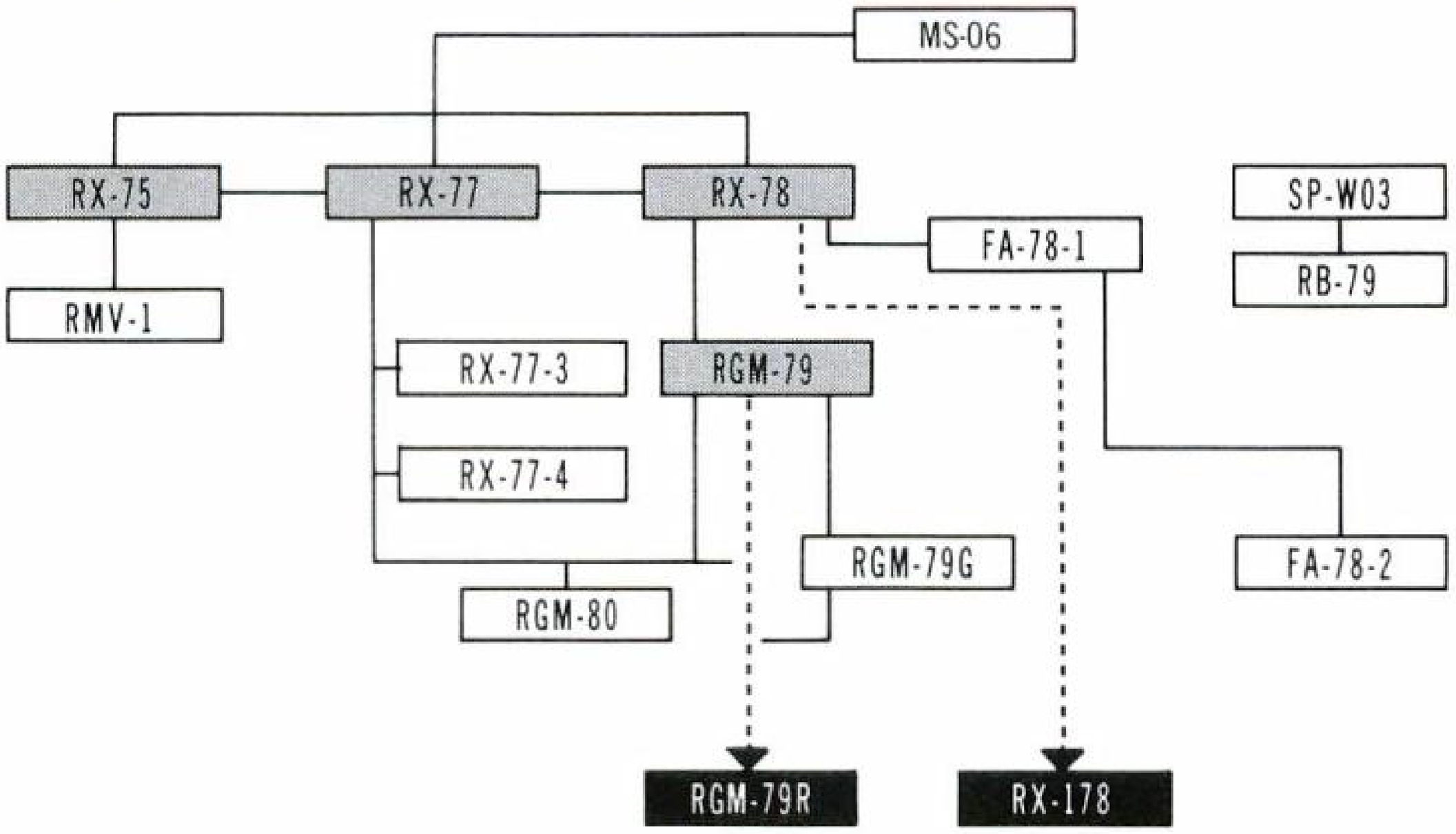
試作機のもうひとつの特長として、高性能自己学習型コンピュータの搭載が掲げられる。これはパイロットの養成が難しいという状況を打開するために考えられた策で、歩行、戦闘、作業といったさまざまなプログラムをケースに応じてコンピュータが独自に判断し、改良を加えていく。データが充分に蓄積されたプログラムを移植すれば新兵が操縦しても、ベテランパイロット並みに扱うことができた。

開発が最も早かった機体は、RX－75ガンタンクで、核融合炉の搭載に失敗した場合を想定し、駆動系はガスタービンエンジンと燃料電池を採用している。後はRX－77、RX－78という順で、それぞれ3機ずつ試作された。だが、公国軍のサイド7強襲により、RX－78－1（プロトタイプガンダム）が大破、RX－78－3（G－3）も小破、他の2機種も1機ずつ残して破壊された。

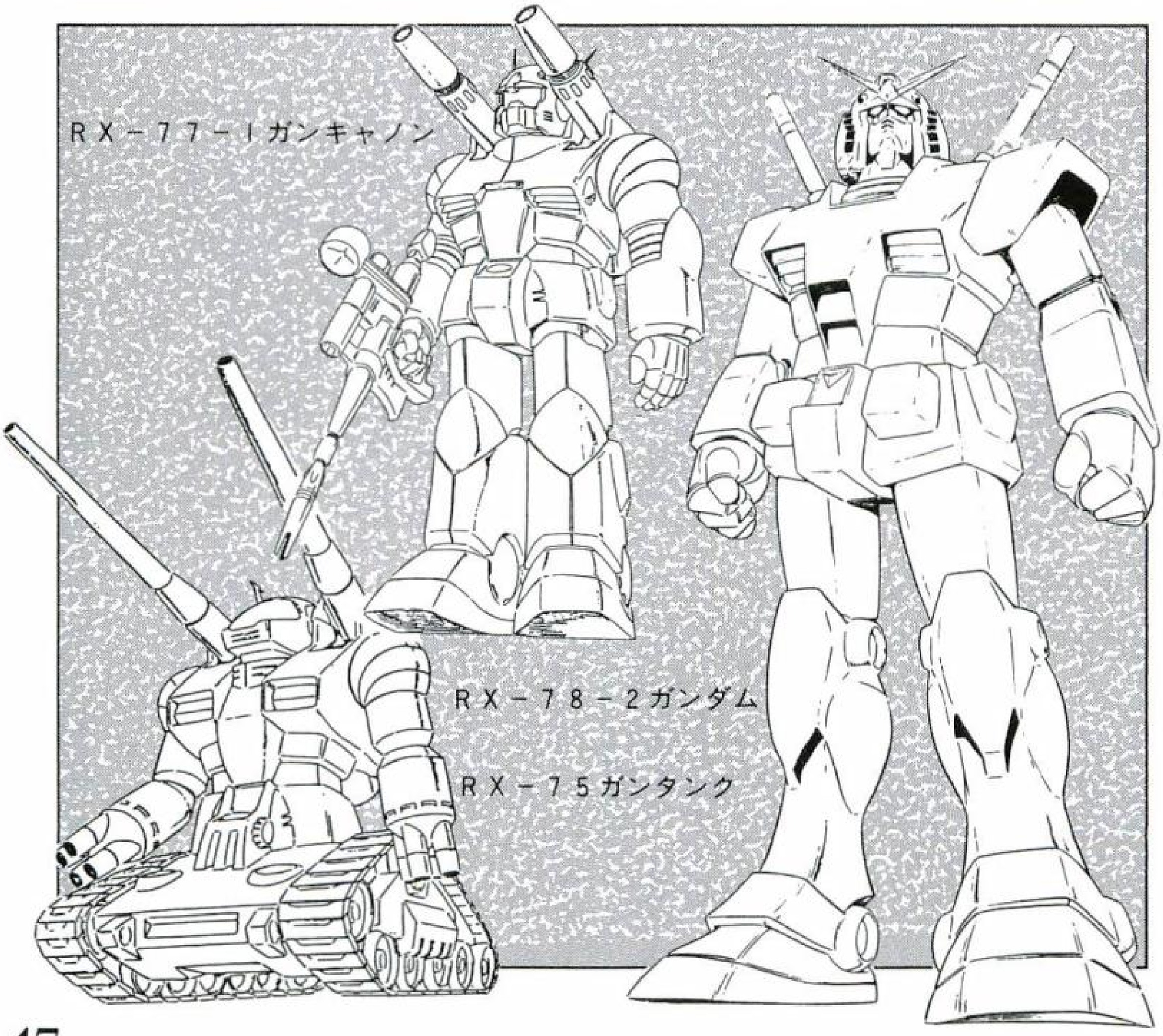
RXシリーズの残った3機は、追撃を退けながら、そのデータを地球の連邦軍基地に届け、同年12月には星一号作戦に参加した。また、破損が軽微だったRX－78－3は、途中のルナII基地に残され、MAC（マグネット・コーティング）実験機となった。

MS Development History

地球連邦軍製モビルスーツ開発経路



●表最下段の型式番号は、戦後連邦軍で開発された機体です。
RGM-79R——→ジムII　RX-178——→ガンダムMK-II



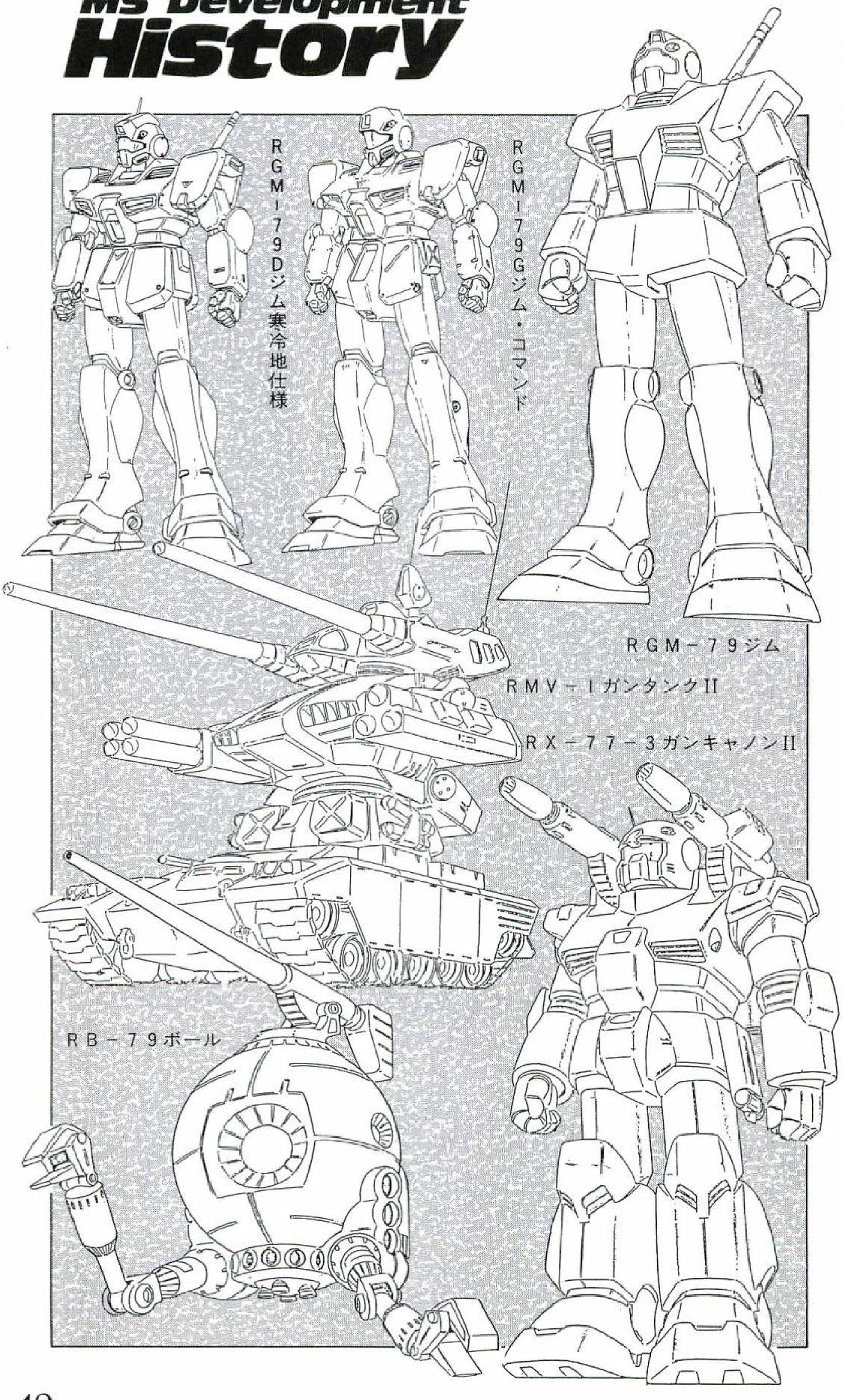
7.連邦軍の量産型モビルスーツ

0079年11月、RXシリーズの3機は、南米のジャブロー基地に到着した。だが、戦闘データ及び機体データは、その2ケ月前には、補給部隊を通じて届けられていたため、この時点では量産計画はすでに達成されていた。

連邦軍の量産型MSは、当初の予定から大きく変更され、格闘戦用機動歩兵、RGM-79ジムに主力を置いていた。これはRX-78の異常に高い戦績によるもので、宇宙戦での支援兵器は、戦闘ポッドのRB-79ボールが決定していた。なお、陸戦用としてはRX-77-3ガンキャノン重装型、RMV-1ガンタンクIIの量産もすでに開始されていた。

さて、RGM-79は、公国軍のMS-06シリーズ並みに局地戦仕様機が生み出されている。配備は大半が大戦末であり、大きな戦績はなかったが、0080年に入り、公国軍が無条件降伏した後、地球及び宇宙での残存部隊の処理に役立った。代表的な機体を掲げると、寒冷地戦仕様のD型、コロニー戦用のTGM-79ジム・トレーナーなどがあり、RX-77(ジムコマンド)、さらに宇宙戦用のバックパックによ

MS Development History



MS【MS用語辞典①】

アーマー〜コアブロックシステム

アーマー【armor】 装甲。MSの装甲は高張チタン合金の間にセラミックスをサンドイッチした複合装甲（ハイブリッドアーマー）が主流である。MS－05やMS－06の初期型（スペースド・アーマー）は超高張力鋼を用いた多重空間装甲であったが、耐弾性の向上と軽量化のため前者に転換された。RX－78の装甲材に使用されたガンダリウムは、ルナチタニウムと呼ばれる希少金属（レアメタル）を用いた超硬合金である。この合金で作られた3重ハニカム装甲は、他の装甲よりはるかに耐弾性が勝るが、材料がとぼしく、加工が難しいため量産性が低いという欠点がある。そのためRGM－79では採用されなかった。

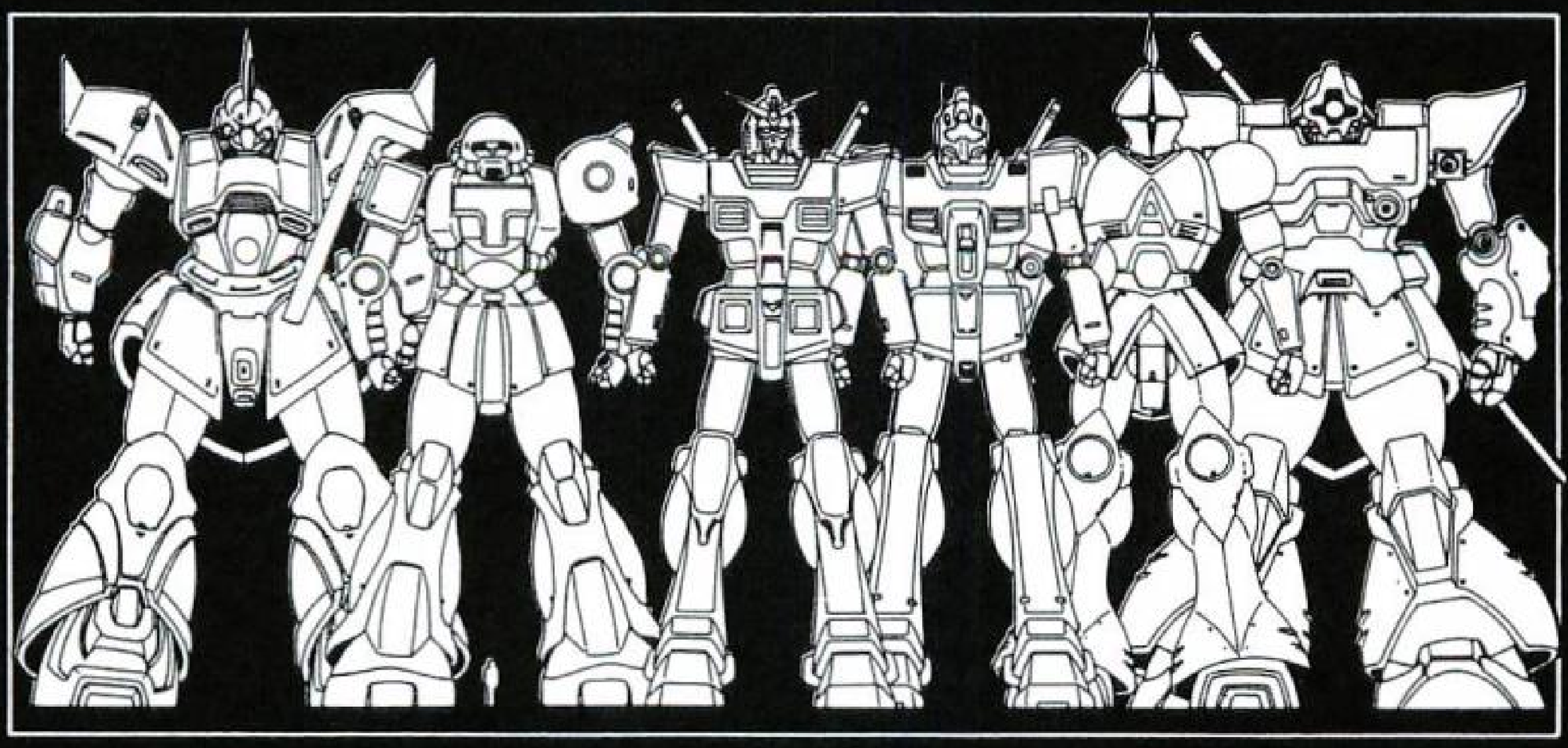
アポジモータ【apogee motor】 MS、宇宙船などに組み込まれているロケットモータのこと。姿勢制御の補助に用いられている。公国軍の初期型MSでは固体モータが用いられていたが、後期型では液体ロケットによる高性能の推進系に変わっている。同バーニア

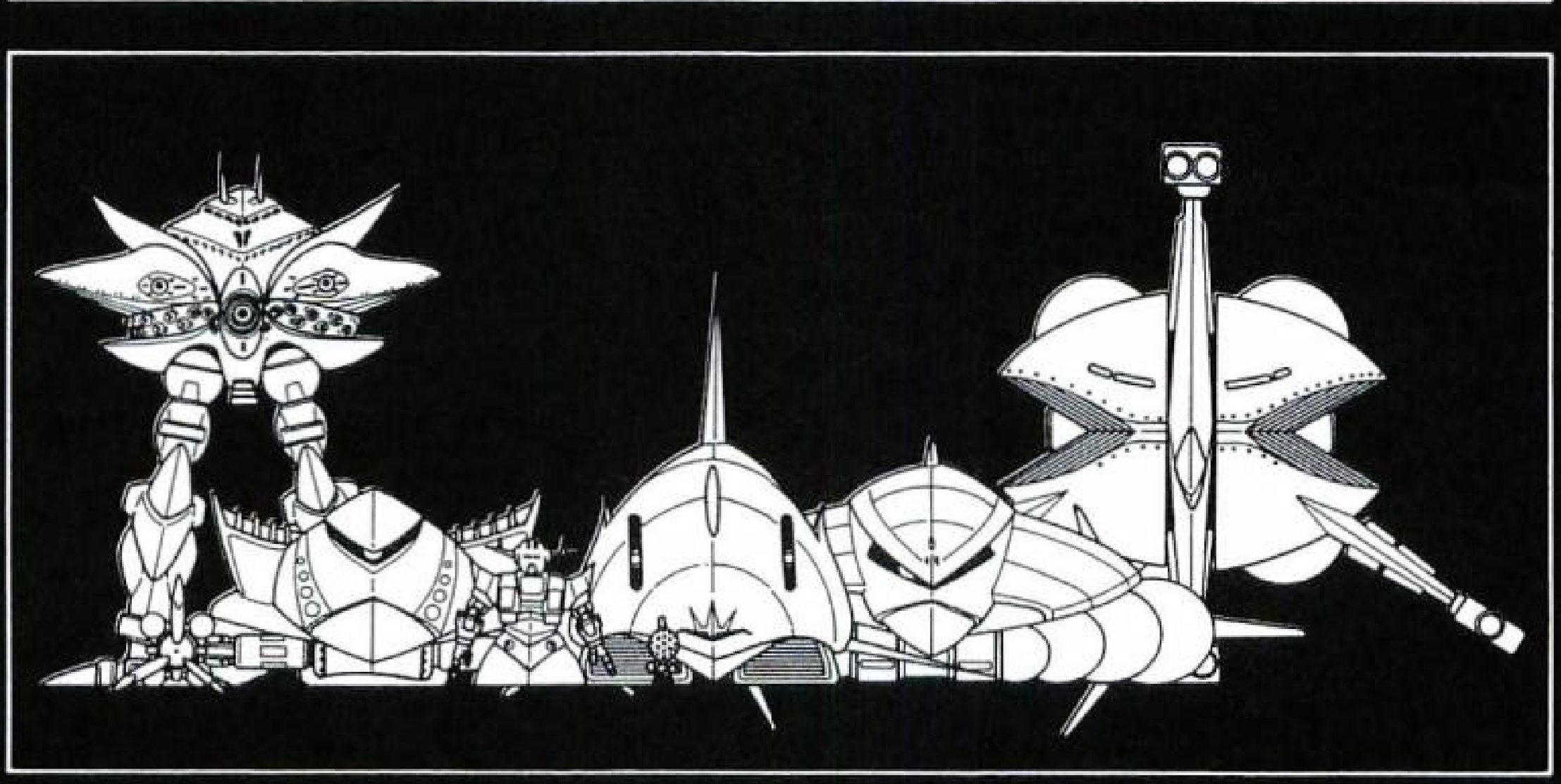
オールレンジ攻撃【all range attack】 ニュータイプ専用MAだけが可能とする特殊戦術。サイコミュによって同時に複数の攻撃ユニット（有線メガ粒子砲、ビット）を操作し、標的の全周囲から攻撃する。

核融合炉【nuclear tusion reactor】 この世界ではミノフスキー物理学の応用により実用化された。MSを初め各種艦艇の主動力源として用いられている。MSでは単にジェネレータと呼称することが多い。

グレネイド【grenade】 通常は歩兵用の手榴弾（しゅりゅうだん）をさすが、MSの武器としても用いられる。それ自体に推進力はなく手投げ（ハンドグレネイド）、もしくは銃床にマウントされたランチャーの炸薬（さくやく）の爆発力で飛ばされる。また、中にはクラッカーと呼ばれる分裂弾頭型の手投げ弾もある。

コアブロックシステム【core block system】 RXシリーズに採用された脱出システム。コクピットブロックを含む胴体部が本体と切り離され、脱出ポッドになる。しかも、ポッドは変形してコア・ファイターと呼ばれる汎用戦闘機となる。移動力と攻撃力が付与された分、パイロットの生残性が高まったが、コストが非常に上がり、RGM－79では採用されていない。RX－78の強化システムであるGアーマーはこの発展応用版といえよう。





MS性能比較

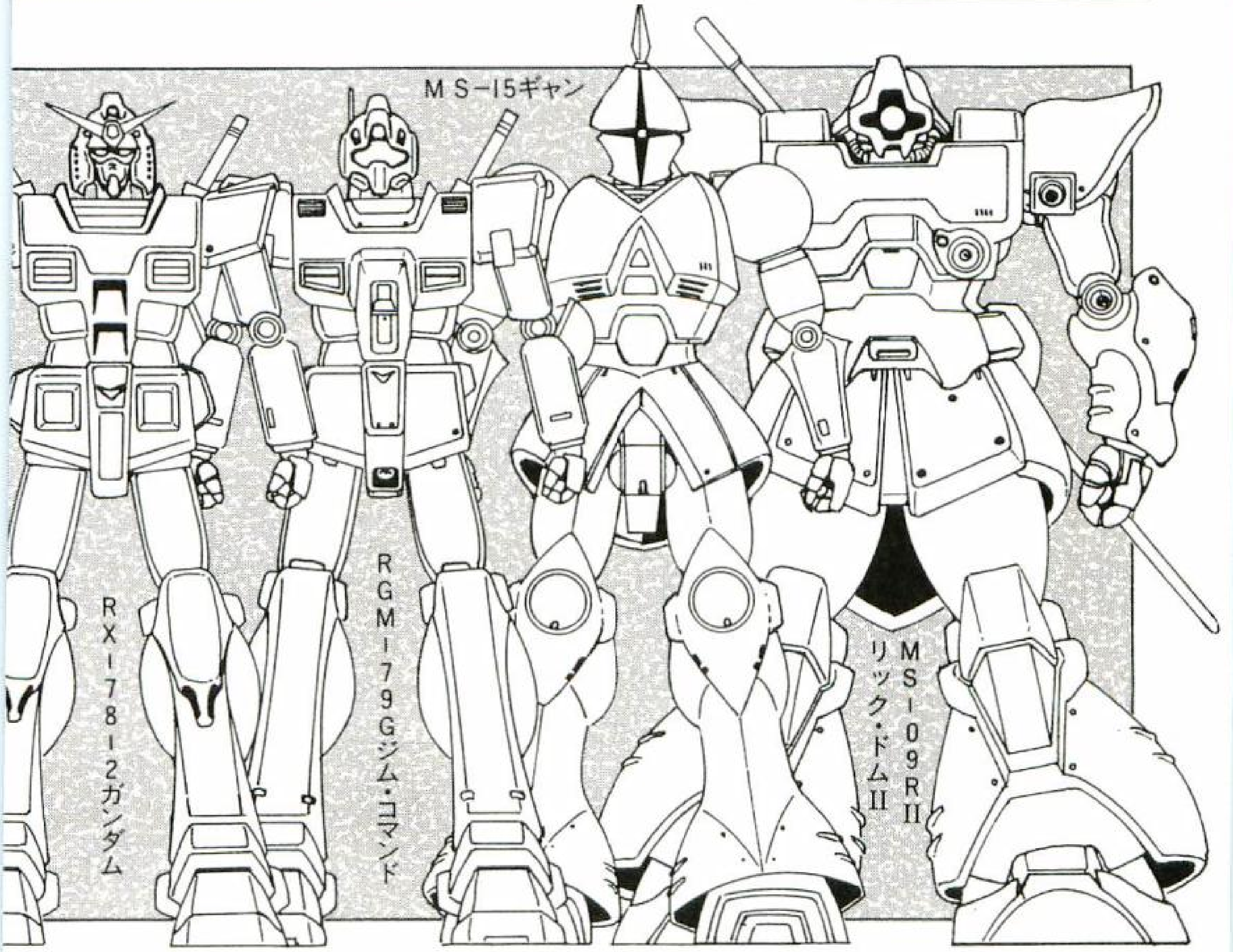
An abiliy symmetry of M.S.

●一年戦争時代のMS・MAは、これまで詳細な性能データスペックが発表されていなかった。編集部はサンライズの旧データ表、および各種資料から、ここに主要MS・MAの新データスペックを発表する。

Illustration by Hideki Hoshino.

1.汎用(宇宙戦用)モビルスーツ

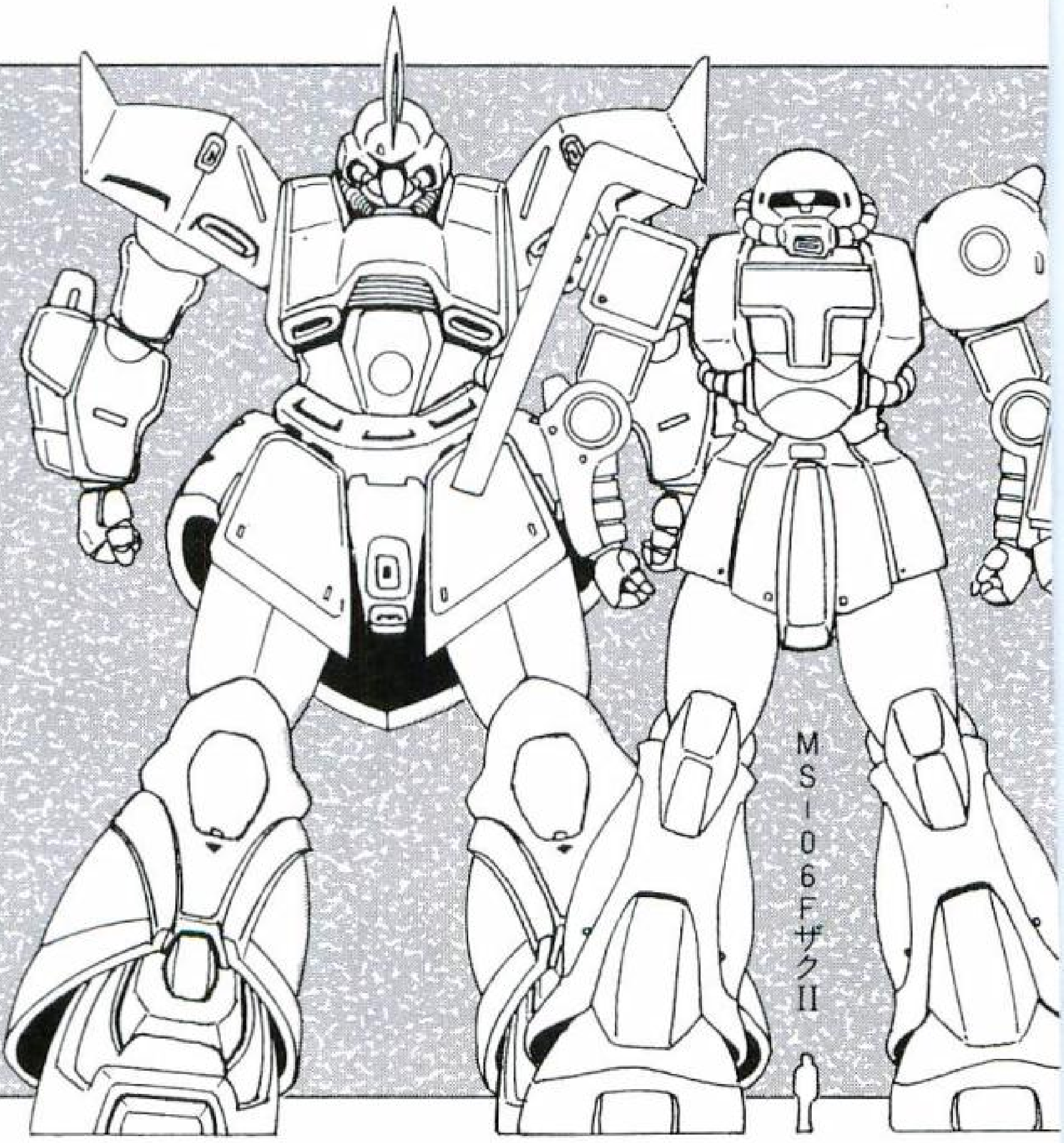
	スラスター総推力 (kg)	センサー有効半径 (m)	武　　装
	40,700	2,900	105mmマシンガン、他
	43,000	3,200	120mmマシンガン、240mmバズーカ、ヒートホーク、他
	79,500	3,200	120mmマシンガン(グレネイドランチャー付)ハンドグレネイド×3、他
	49,800	3,200	120mmマシンガン、240mmバズーカ、ヒートホーク、他
	53,000	5,400	360mmバズーカ、ヒートサーベル、他
	110,000	5,400	360mmバズーカ、拡散ビーム砲×1、スツルムファウスト、他
	61,500	6,300	ビームライフル、ビームソード、他
	79,900	6,300	ビームライフル、ビームソード、他
	178,500	6,300	大口径ビームマシンガン、他
	56,200	4,400	ビームサーベル、シールド(ミサイル×56、ハンドボンブ×12)
	55,500	5,700	ビームライフル、ビームサーベル、270mmバズーカ、60mmバルカン砲×2、他
	55.500	6.000	ビームスプレーガン、ビームサーベル、60mmバルカン砲×2、他
	74,000	6,000	ビームガン、ビームサーベル、60mmバルカン砲×2、他



MS・MA性能比較

愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)	
ザクⅠ（旧型ザク）	MS-05	17.5	17.5	50.3	65.0	899	
ザクII（ザク）	MS-06F	18.0	17.5	58.1	73.3	951	
ザク改	MS-06FZ	18.0	17.5	56.2	74.5	976	
高機動型ザク	MS-06R-1A	18.0	17.5	61.8	76.8	1,012	
リック・ドム	MS-R09	18.6	18.6	43.8	78.6	1,199	
リック・ドムII	MS-09RII	18.6	18.6	45.6	79.9	1,219	
ゲルググ	MS-14A	19.6	19.2	42.1	73.3	1,440	
高機動型ゲルググ	MS-14B	19.6	19.2	53.5	76.8	1,440	
ゲルググイェーガー	MS-14JG	19.2	19.2	40.5	80.3	1,490	
ギャン	MS-15	19.9	19.9	52.7	68.6	1,360	
ガンダム	RX-78-2	18.0	18.0	43.4	60.0	1,380	
ジム	RGM-79	18.0	18.0	41.2	58.8	1.250	
ジム・コマンド（宇宙戦仕様）	RGM-79GS	18.0	18.0	44.6	76.5	1,390	

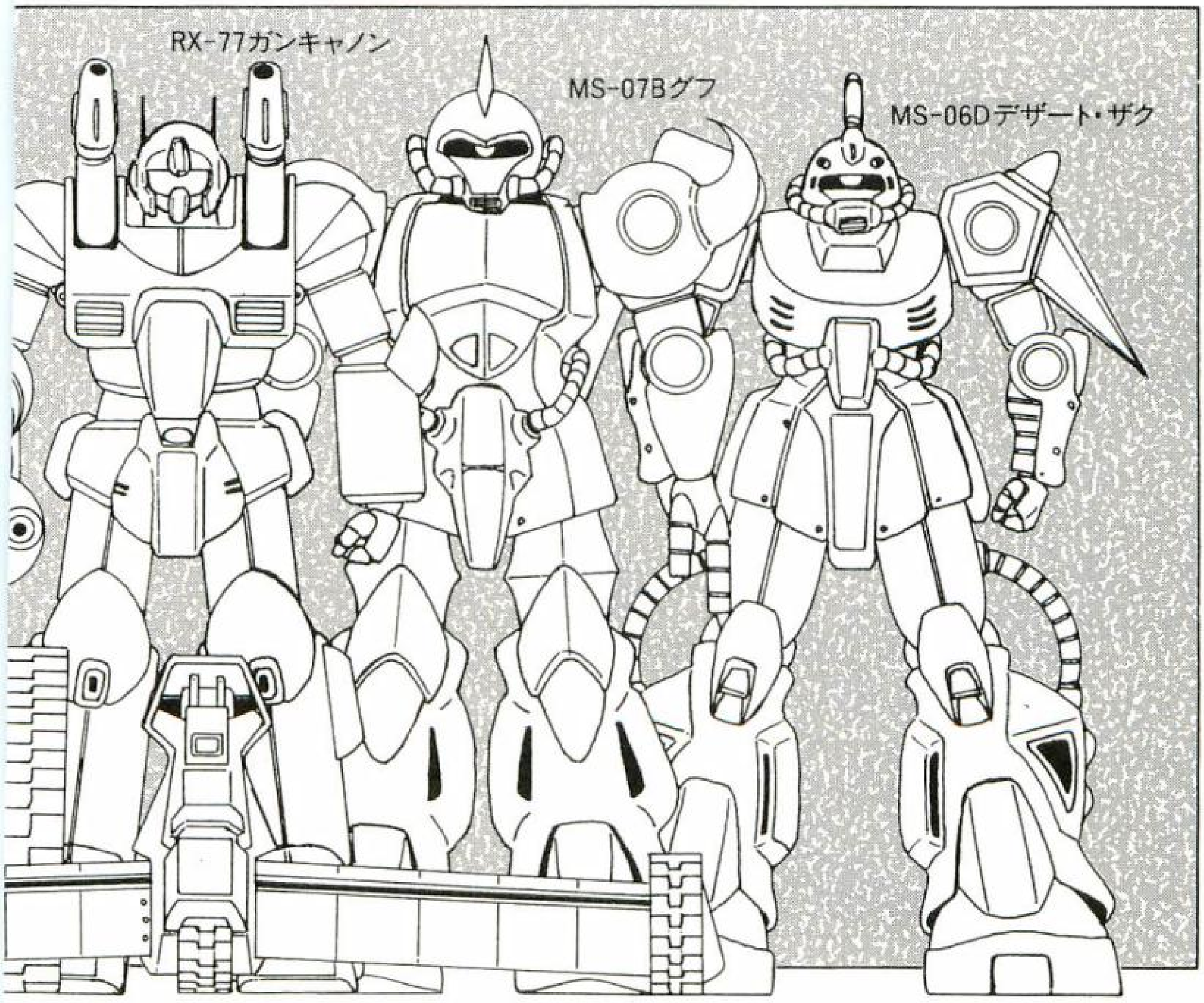
汎用MS対比図



イラスト／星野秀記

2. 陸戦用モビルスーツ

	スラスター総推力 (kg)	地上最高速度 (km/h)	武　　装
	45,400	85	120mmマシンガン、240mmバズーカ、3連装ロケット弾ポッド、他
	42,900	80	105mmマシンガン、3連装ロケット弾ポッド、クラッカーポッド、他
	41,000	73	180mmキャノン砲、2連装スモークディスチャージャー、2連装ロケットランチャー×2
	40,700	99	5連装75mm機関砲、ヒートロッド、ヒートサーベル、他
	58,200	90(240)	360mmバズーカ、拡散ビーム砲、他
	48,000	90	180mm無反動砲、4連装120mm機関砲
	42,900	55	4連装180mmミサイルランチャー、特殊ハンマーガン、他
	51,800	78	240mmキャノン×2、ビームライフル、60mmバルカン砲×2、他
	62,200	69	240mmキャノン×2、ビームライフル、60mmバルカン砲×2、他
	88,000	70	120mm低反動キャノン×2、40mm 4連装ガンランチャー×2
	——	75	120mmライフル砲×2、180mm 4連装ロケット弾ポッド、3連装ミサイルランチャー
	63,500	83	240mmキャノン、ビームライフル、60mmバルカン砲×2、他

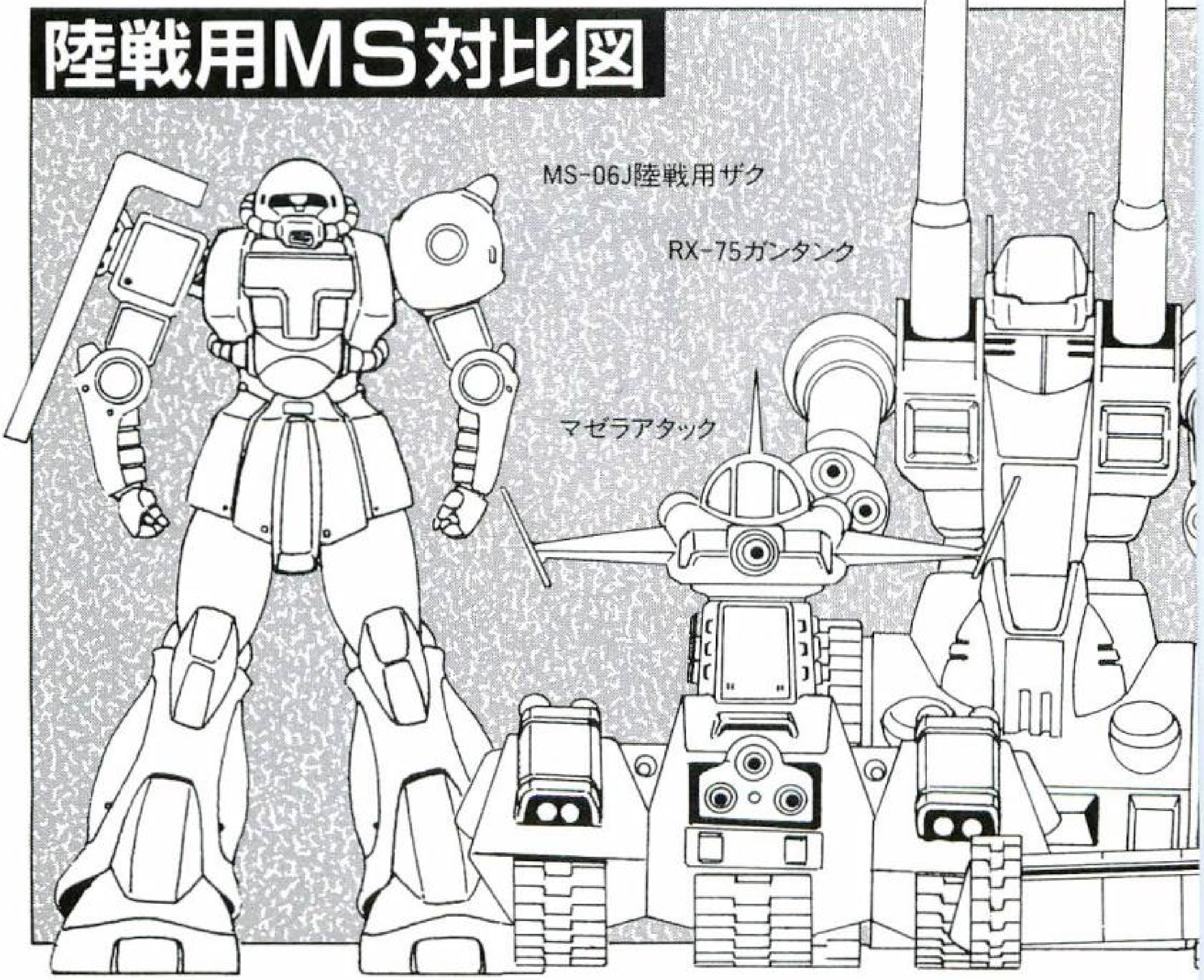


キュイ

MS・MA性能比較

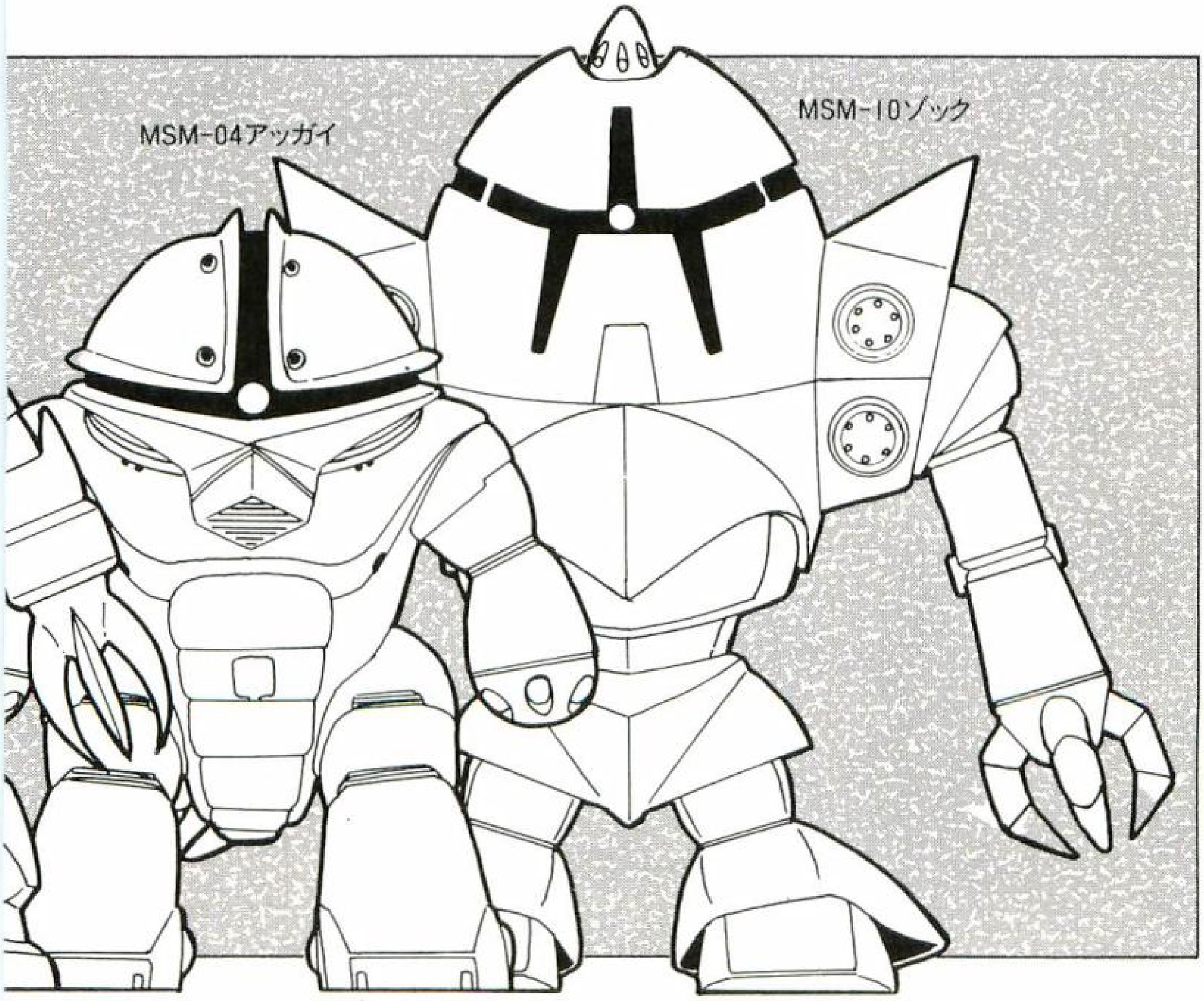
愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)	
陸戦用ザク	MS-06J	18.0	17.5	49.9	70.3	976	
ザク・デザートタイプ	MS-06D	18.2	17.5	61.3	79.4	976	
ザクキャノン	MS-06K	18.4	17.7	59.1	83.2	976	
グフ	MS-07B	18.7	18.2	58.5	75.4	1,034	
ドム	MS-09	18.6	18.6	62.6	81.8	1,269	
ギガン	MS-12	16.2	13.9	71.1	101.3	736	
ガッシャ	MS-13	17.5	15.1	89.7	116.5	1,076	
ガンキャノン	RX-77-2	18.1	17.5	51.0	70.0	1,380	
ガンキャノン重装型	RX-77-3	18.1	17.5	58.6	79.1	1,380	
ガンタンク	RX-75	15.6	15.0	56.0	80.0	878	
ガンタンクII	RMV-1	16.9	15.2	98.4	123.7	211	
ジムキャノン	RGC-80	18.4	17.8	49.9	65.3	976	

陸戦用MS対比図



3.水陸両用モビルスーツ

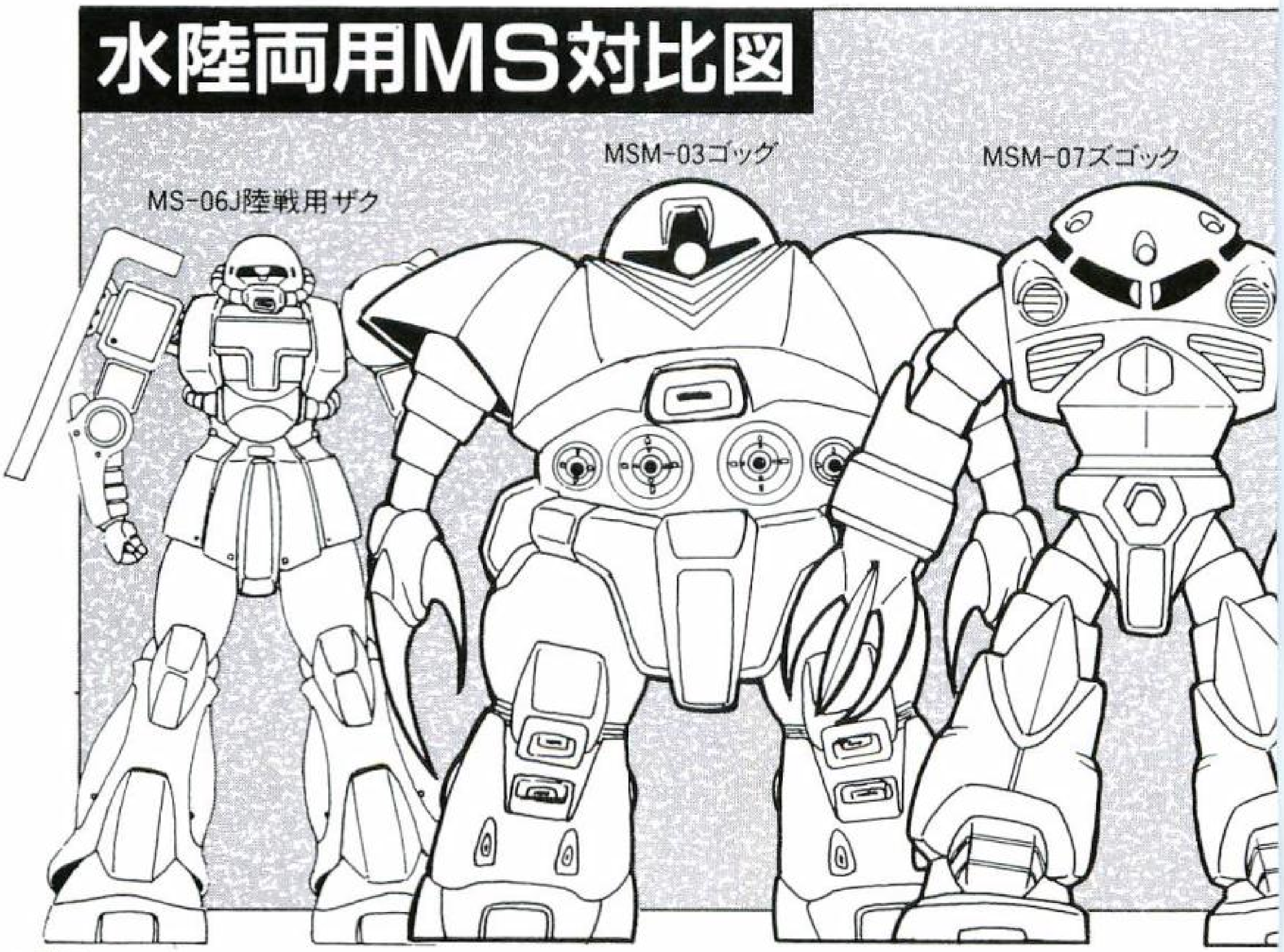
	スラスター総推力 (kg)	水中最高速度 (kt)	武　　装
	66,000	45	240mm4連射ロケット弾ポッド、サブロックガン
	121,000	75	メガ粒子砲×2、魚雷発射管×2
	86,000	89	ビームカノン×2、魚雷発射管×4、ハンドミサイルユニット
	109,600	53	105mmバルカン×4、ロケット弾ランチャー
	97,900	55	3連装320mmロケット弾ランチャー
	109,000	50	ヒートロッド×4
	83,000	103	240mmロケット弾×6、メガ粒子砲×2
	112,000	118	ビームカノン×2、魚雷発射管×6
	97,400	47	ワイドカッター×10
	253,000	63	フォノンメーザー砲、メガ粒子砲×8



MS・MA性能比較

愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)	
ザク・マリンタイプ	MS-06M (MSM-01)	18.2	17.5	43.3	60.8	951	
ゴッグ	MSM-03	18.3	18.3	82.4	159.4	1,740	
ハイ・ゴッグ	MSM-03C	15.4	15.4	54.5	79.2	2,735	
アッガイ	MSM-04	19.2	19.2	91.6	129.0	1,870	
ジュアッグ	MSM-04G	17.4	17.4	137.3	198.7	2,660	
アックガイ	MSM-04N	19.0	19.0	113.7	171.6	2,010	
ズゴック	MSM-07	18.4	18.4	65.1	96.4	2,480	
ズゴックE	MSM-07E	18.4	18.4	69.5	88.9	2,570	
ゾゴック	MSM-08	18.8	18.2	77.4	107.3	1,688	
ゾック	MSM-10	23.9	23.9	167.6	229.0	3,849	

水陸両用MS対比図



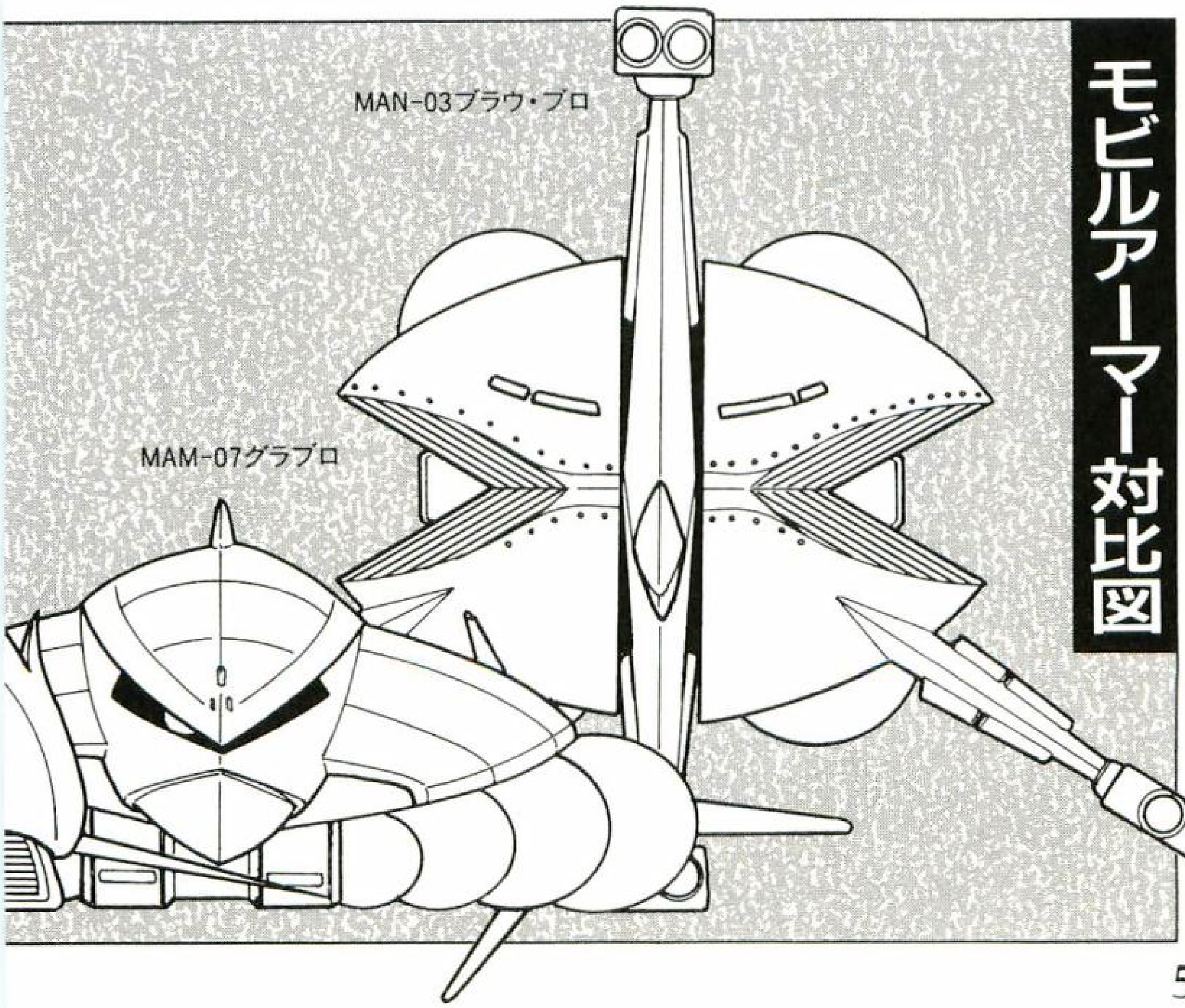
4.モビルアーマー

	スラスター総推力 (kg)	センサー有効半径 (m)	武　　装
	――	――	6連装水中ミサイルランチャー×2、対空・対艦ミサイルセンチャー×2
	136,100	111,000	大型メガ粒子砲、4連装ミサイルランチャー×2
	580,000	134,000	大型メガ粒子砲、対空メガ粒子砲×28、105mmバルカン×2
	1,760,000	156,000	有線制御式メガ粒子砲×4
	645,200	245,000	メガ粒子砲×2、ビット
	187,000	81,000	有線制御式メガ粒子砲×2、メガ粒子砲×3

スペックリスト解説

1、型式番号／公国軍のMS
はモビルスーツの、MAはモビ
ルアーマーの略号。先頭につく
Yは実験機を、末尾につくMは
水陸両用を、Nはニュータイプ
専用であることを示す。連邦軍
はRが連邦軍製MSであるこ
とを示し、試作型はその後にX
を入れ、量産型は愛称の略字
を入れる。（例、ジムキャノン＝
GC）
2、全高／アンテナ、頭飾を含
む高さ。
3、頭頂高／アンテナなど付属
物を除いた本体の高さ。
4、本体重量／武器、推進剤、
潤滑剤、その他の付加物を除い
た重さ。
5、全備重量／右の付加物全
てを含む重さ。一般に本体重量
が軽く、全備重量が重い機体

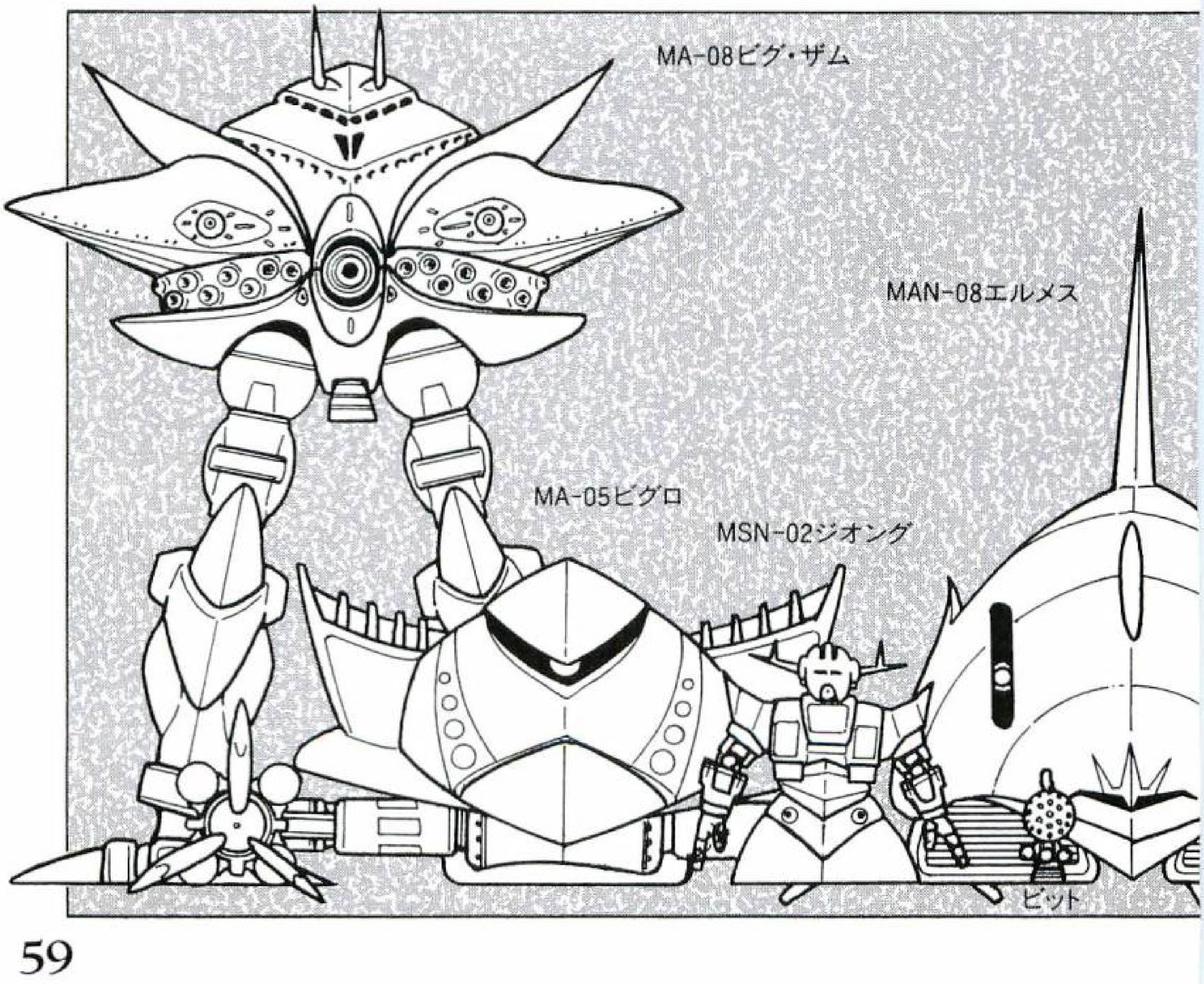
モビルアーマー対比図



MS・MA性能比較

愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)
グラブロ	MAM-07	26.1	40.2	324.1	793.7	11,000
ビグロ	MA-05	23.6	45.5	125.5	229.8	17,800
ビグ・ザム	MA-08	59.6	——	1,021.2	1,936.0	140,000
ブラウ・ブロ	MAN-03	62.4	60.2	1,735.3	2,602.6	74,000
エルメス	MAN-08	47.7	85.4	163.7	291.8	14,200
ジオング	MSN-02	17.3	——	151.2	231.9	9,400

が高性能といえる。
6、ジェネレータ出力／核融合炉の最大発電力。
7、スラスター総推力／推進力の最大値。ただし、値が大きいからといって優秀とはいえない。第2期生産型のMS、（ザクII、リック・ディアス、ゲルグの改修型）は最大値が旧型の倍近いが、CMP（戦闘最大推力）時間は半分である。
8、センサー有効半径／メインカメラの索敵限界距離を示す。大気圏内では極端に低下している。
9、陸上（水中）最高速度／わざわざ解説の必要もないが、Kはノットのこと。ゴックの7.5ノットは時速138・9キロのこと。
武装／装備可能な武器のこと。専用武器が多い。



MS【MS用語辞典②】

シールド～ヒートロッド

シールド【shield】 この場合はMS用の盾をさす。原始的なようだが、パイロットの熟練度によっては効果的な防御装備となる。装甲が厚い（＝防御力が高い）MSは装備しない。

ジェットパック【jet pack】 水陸両用MSであるMSM－03CとMSM－07Eに装備されている離水および滑空用の補助推進器。化学燃料式ロケットで使用後切り離される。

スパイクアーマー【spike armmer】 公国軍製MSに多いトゲ付きのショルダーアーマーのこと。体当りで敵の装甲を破壊する格闘戦用の装備。

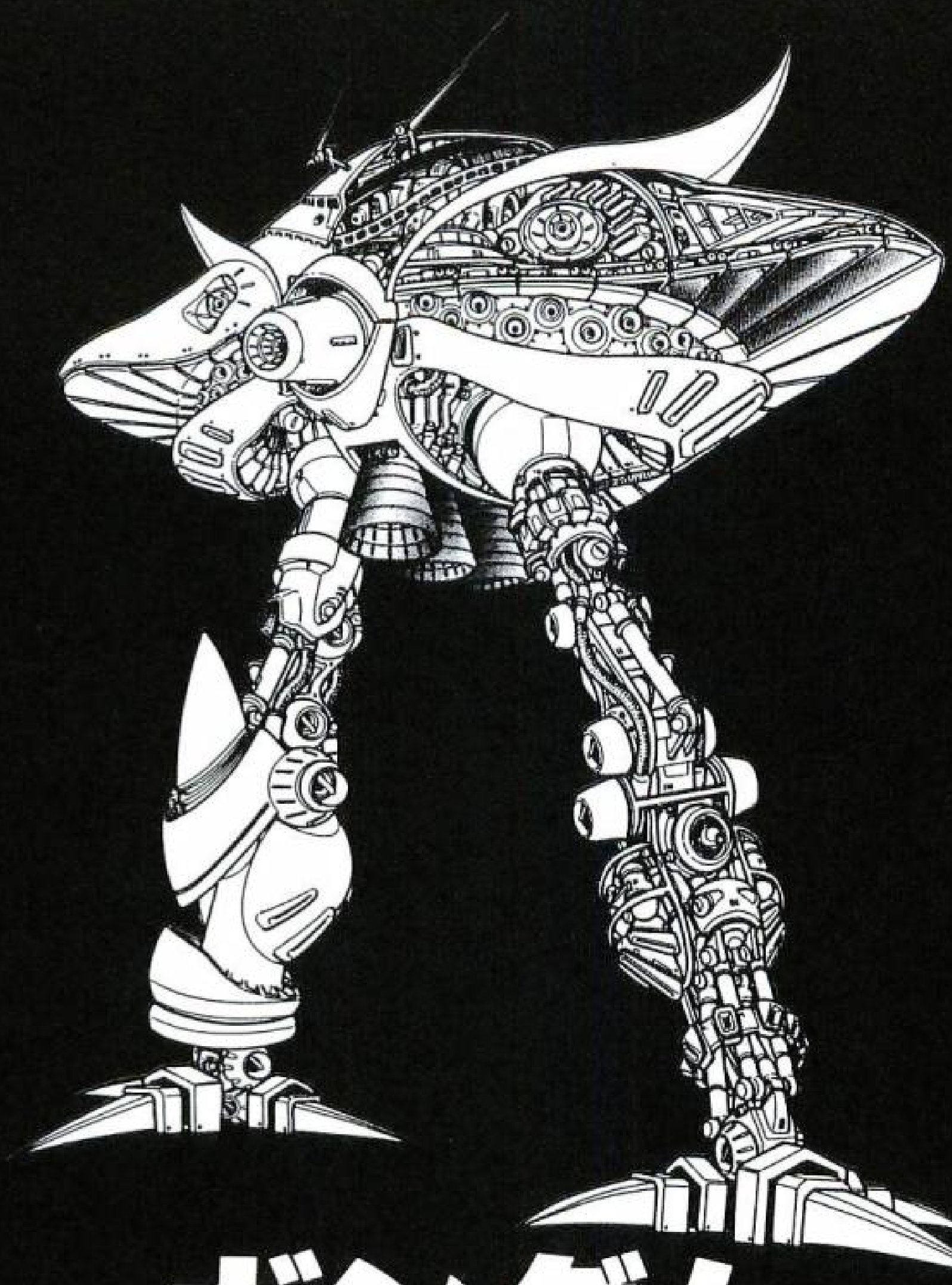
耐熱フィールド【heatproof field】 RX－78だけが装備する大気圏突入時の摩擦熱をエアフィールドによって遮断する装置。バリュートの原理と同じである。ただし、熱の遮断は完全ではなく、同時に機体冷却が必要だ。

熱核推進システム【thermonuclear react thruster system】 MSや各種艦艇に用いられる推進システム。核融合炉（同）熱核反応炉【thermonulear reactor】の熱エネルギーを利用して推力を得る。宇宙用の熱核ロケット、大気圏内用の熱核ジェット、水中用の熱核水流ジェットといった3方式がある。熱核推進のメリットは従来のシステムと比較して大推力が得られ、かつ推進剤の消費量を抑えられるという点にある。汎用（宇宙戦用）MSは、MS－R09以降化学燃料ロケット方式からこのシステムに転換している。

バルカン【vulcan】 MSや戦闘機が装備する機関砲のこと。単銃身だが複数の薬室を持ち、回転する薬室内に弾頭と液体炸薬が別々に送り込まれ、発射される。MSの場合60㎜口径が一般的。RX－78は装弾数が600発と少なく1分弱の連射で撃ちつくしてしまう。対MS戦用火器としては威力も弱く、命中精度は低い。近接防御あるいは索制用と見るべきだろう。

ヒートホーク【Heat hawk】 MS－06用の格闘戦用装備。刃を高熱化させ、敵を切断する。同様の兵器としてMS－07用のヒートサーベル、MS－09用のヒート剣などがある。

ヒートロッド【Heat rod】 MS－07用の格闘戦用装備。通常は右腕内に収納されている。最長時で17・5mまで伸びて、敵に高圧電流による衝撃を与える。



ガンダム オフィシャル レポート

GUNDAM Ofticial Report

●〝ガンダム・ワールド〟にはさまざまなSF用語・軍事用語が続出している。また、TVや劇場のスクリーンには出てはいないが、歴史上の事実として存在する事柄も多くある。このコーナーでは、〝ガンダム〟を深く理解できるように分野別に解説する。

Illustration by Hideki Hoshino.

ガンダム・オフィシャル・レポート.1

歴史

History

U.C.0001~0080

宇宙時代

人類は宇宙移民開始と共に宇宙世紀（ユニバーサルセンチュリー）に移行した。

すでに地球の総人口は90億を突破し、50年後には110億に達すると予測されていた。しかも地球は大気汚染と化石燃料の長年に渡る消費により砂漠化が進行し、近い将来地球の生態系は熱死するという結論がでていた。これを防止するには人類の少なくとも9割を宇宙へ送り出すしかなかった。

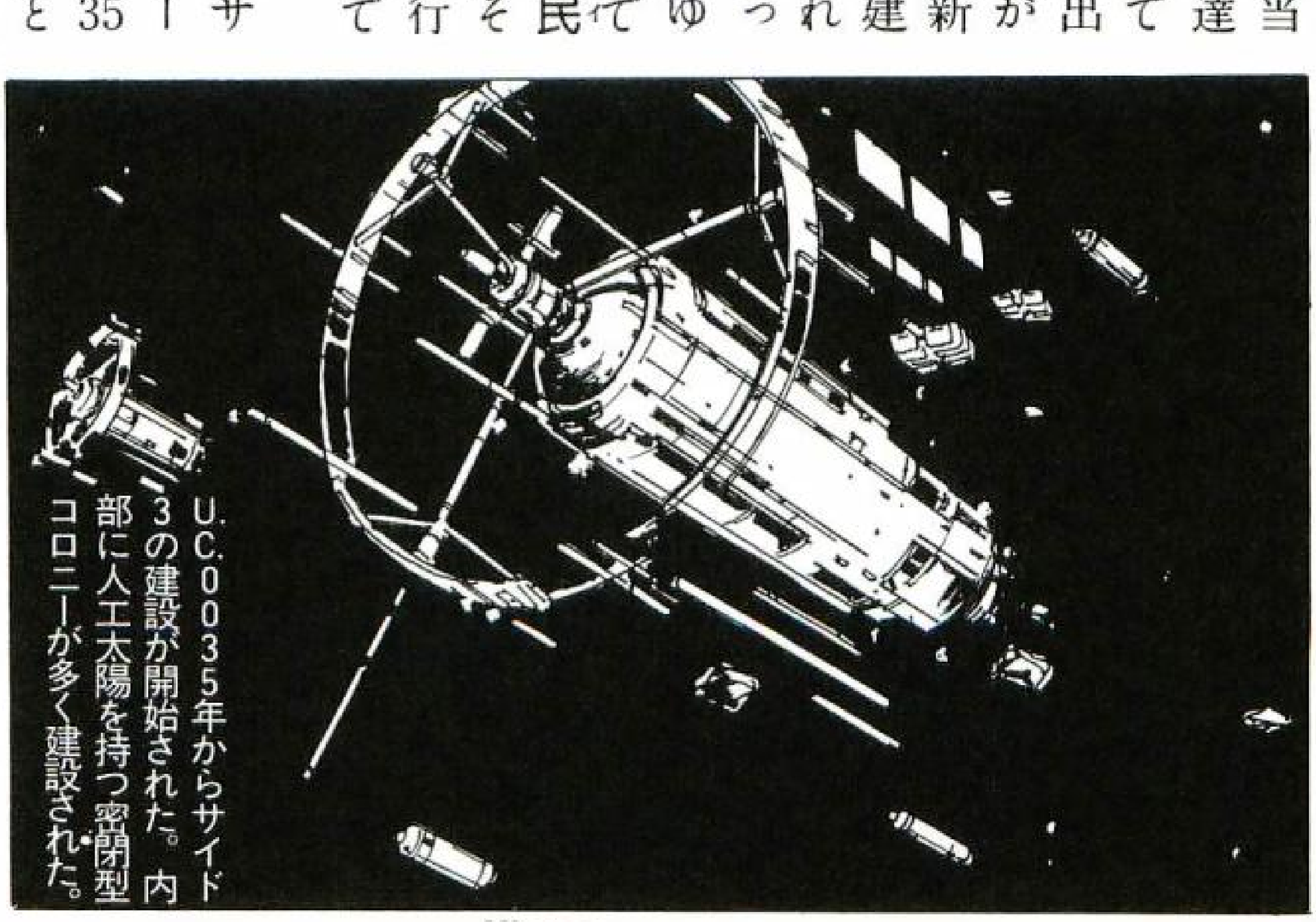
方法が残されていなかった。

宇宙植民地の建設がキリスペースコロニー

ト歴21世紀後半から開始されU.C.0050年までに20余りの円筒型人工天体が建造され、90億人が移住を完了した。また、月面にも多くの恒久都市が築かれ、約10億人が居住するようになった。

だが、計画当初の目標数が達成された時点で地球から送り出される移民者が急速に減り、新たなコロニー建設も中断された。地球に残った人々はいわゆるエリート上流階級層であり、宇宙移民者（ドム）から見ればそれは、裏切り行為以外の何物でもなかった。

この頃からサンバーをつけイド（コロニーに地球を聖地の行政単位。35～40基を1群として建設順にナンバーをつける）の国家主義という考えが合体し、コントリズムという思想が生まれ、急速にスペースノイド間に広まっていった。



U.C.0035年からサイド3の建設が開始された。内部に人工太陽を持つ密閉型コロニーが多く建設された。

イラスト／福地 仁

歴　史

ガンダム年表 I　A.D. 1961～U.C. 0078

年・月・日	事　　柄
AC1961・10・4	人類初の人工衛星、打ち上げに成功(ソ連)
1969・7・20	アポロ11号、月面着陸に成功(アメリカ)
1969	アメリカのプリンストン大学教授、G・K・オニール博士らのグループが、スペースコロニー構想を発表
1993	世界各地で局地戦争多発。第3次世界大戦の危機感が強まる。
1999	地球連邦政府樹立。人類宇宙移民計画発表。
2005	太陽発電衛星第1号機の打ち上げに成功。
2009	地球連邦軍設立。
2026	木星エネルギー船団、月軌道上より発進。
2045	第1号コロニーの建造が開始される。
UC0001	宇宙移民開始をもって宇宙世紀に移行。地球総人口、90億突破。
0027	初の月面恒久都市、フォンブラウン市が完成。
0040	総人口の40%(約50億人)が、宇宙への移民を完了。
0045	小惑星ユノー(後のルナII)、月軌道上に定着。サイド3にミノフスキー物理学会設立。
0050	総人口は110億に達し、そのうち90億が宇宙に移民。
0062	ジオン・ズム・ダイクン、サイド3独立宣言。ジオン共和国樹立。サイド3国防隊発足。
0063	連邦政府、サイド3に対して経済圧力を加える。
0064	連邦軍、60年代軍備増強計画発動(特に宇宙艦隊の統制に力を注ぐ)。ルナIIの軍事基地化が行なわれる。
0067	ジオン国防隊、国軍へ昇格
0068	ジオン・ズム・ダイクン死亡(暗殺の可能性あり)。次期首相はデギン・ソド・ザビ。
0069・8・15	ジオン公国宣言。デギン・ソド・ザビ、初代公王に。ザビ家独裁体制のため、ジオン派は追放。
0070・3	公国軍、ミノフスキー粒子散布による電波妨害などの特殊効果～ミノフスキー効果～確証実験に成功。
0070・5	公国軍、メガ粒子砲を完成。
・9	連邦軍、70年代軍備増強計画によるサラミス、マゼラン級の新型宇宙鑑艇就役。
・12	サイド7建設のため、ルナIIを月軌道の反対側へ移動。
0071	ジオン公国軍兵器開発局、ミノフスキー粒子散布における新型兵器の開発に着手。ミノフスキー物理学応用による小型核融合炉の1号機完成。
0072	ジオン公国、アステロイドベルトに小惑星基地アクシズを建設。目的は鉱物資源の採掘と地球圏に宇宙要塞となる小惑星を移動させるため。
0073	公国軍、新型兵器1号機完成。MS-01の形式番号と、モビルスーツ(MS)という呼称を与えられる。
0074・2	公国軍、ミノフスキー型核融合炉搭載のMS-05ザクIの試作型ロールアウト。
0075・5	公国軍、MS-05ザクIの実戦型ロールアウト。
7	公国軍、ムサイ級軽巡洋艦の一番艦就役。
0076・12	公国軍、地球侵攻作戦を前提とした局地戦用MSの開発に着手。
0078・1	公国軍、ザクの強化型、MS-06ザクIIの量産を開始する。
5	サイド7第1号コロニー(グリーンノア)、未完成ながら移民が開始される。
10	ジオン公国、国家総動員令発令

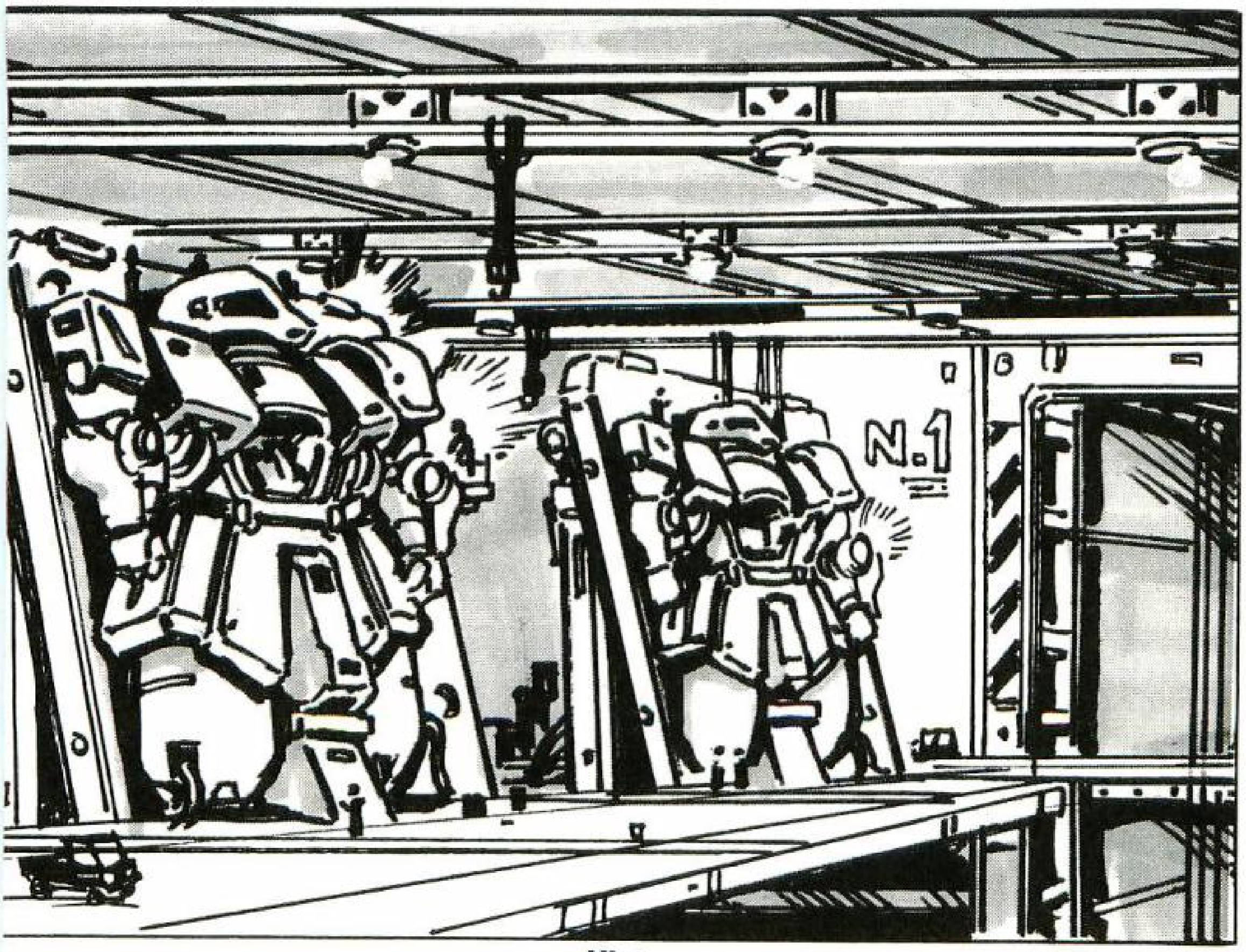
独立運動

コントリズムの提唱者、ジオン・ズム・ダイクンは、0052年にサイド3に渡り自らの理論の実践を開始した。そして、0062年サイド3は独立を宣言。ジオン共和国を樹立した。同時に他のサイドにおいても地球連邦政府からの離反の動きが活発化した。

連邦政府はただちにサイド3に対して経済圧力を加え、さらに連邦宇宙軍の軍備増強、ルナIIの軍事基地化などの武力圧力も加え始めた。サイド3も独立宣言時に設立した国防隊を国軍に昇格させ、また、月の企業に協力を取り付けるなど水面下の政治・経済的攻勢に転じた。だが、初代首相であるジオン・ダイクンはあくまでも外交によって共和国を承認させ、連邦議会の参政権を得、最終的にはスペースノイド全体の自治権を獲得しようとしていた。

0068年、突然ジオン・ダイクンが病死する。次期首相にはデギン・ソド・ザビが就任した。この政権交代劇は暗殺説も出たが、真相は判らずじまいであった。しかし、デギン・ザビはジオン派の政治家を追放してザビ家による独裁体制に乗り出し、翌年には公国制へと移行させた。さらに武力による独立を求める、これまでとは180度方向を転じた軍事国家建設を開始した。

また、連邦もジオン・ダイクンの死の混乱に乗じ、政治的ゆさぶりをかけ、サイド3の孤立化を計った。両国の関



歴　史

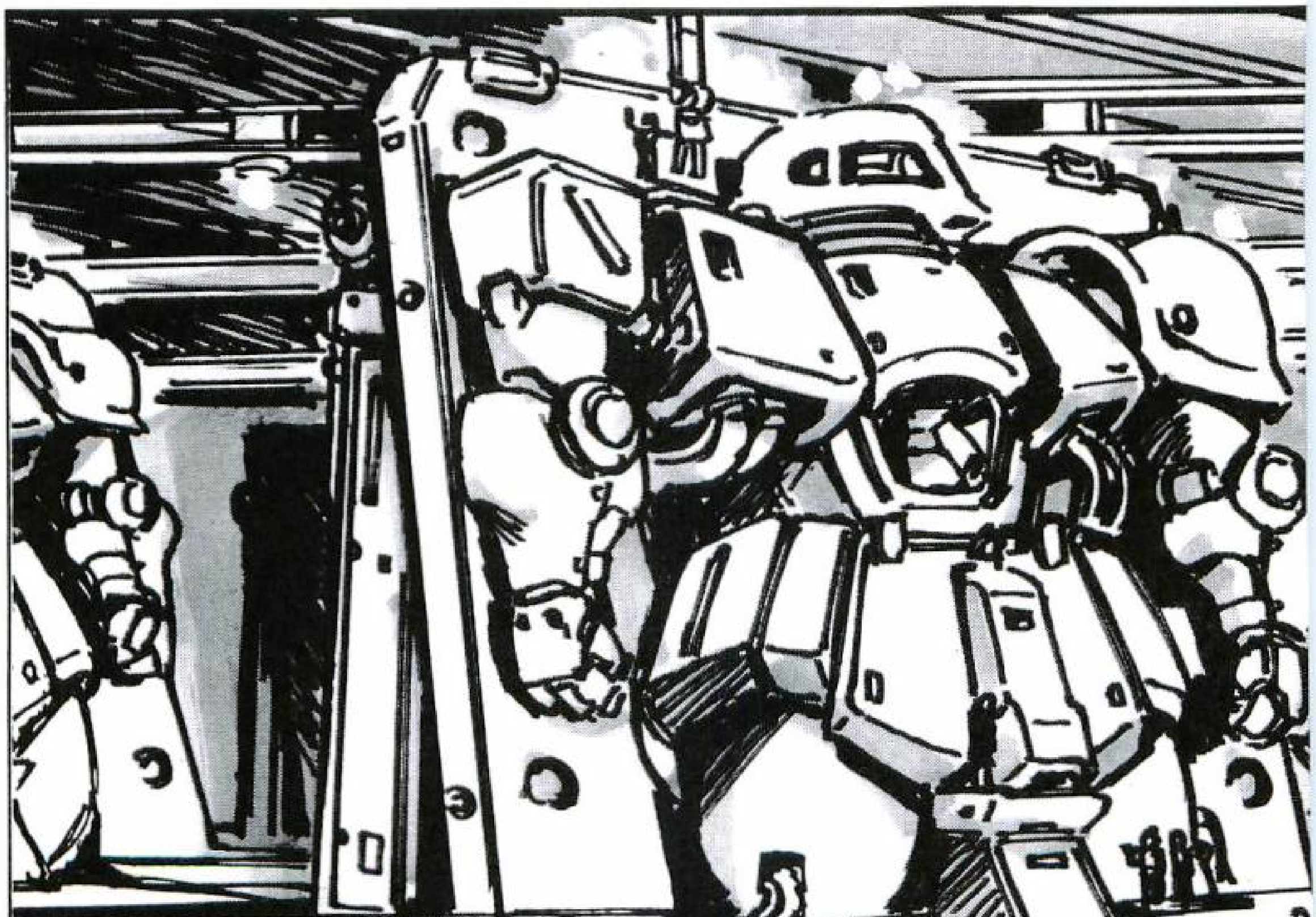


人類史上最大の愚挙と呼ばれる0079年の〝コロニー落し〟。オーストラリア大陸の地形を変え、23億人以上の被害者を生み出した。

0075年5月から翌年2月までに史上初の量産MSザクIの大量生産が続けられた。この兵器こそが国力で劣るジオンを開戦に踏み切らせた〝力〟そのものであった。

係は急速に悪化し軍事的衝突はもはや避けられない情勢であった。だが、連邦側は国力の劣るジオン公国が開戦に踏み切るとは思わず、他のサイドが呼応しないようにコロニー警備を命目とした駐留艦隊を各サイドに配備した。

だが、ジオン公国は、秘密兵器であるミノフスキー粒子（モビルスーツ）とMS（モビルスーツ）の開発に総力をかけていたのだった。



大戦勃発

ザビ家の長男、ギレン・ザビは老いた父親に代わり実権を掌握し、総師の地位を得た。彼はジオン・ダイクンのコロニーのスペースノトリズムを歪め、スペースノイドによる地球管理の正統性を説き、国民に選民思想を植えつけた。彼にとっては連邦に荷担する他のサイドも敵であった。

0079年1月3日、ジオン公国は、連邦政府に対し宣戦を布告し、同時に待機させていた宇宙艦隊にサイド1、2、4の攻撃を命じた。この一週間戦争において、公国軍はMSを投入し、BC兵器や熱核兵器によってコロニー住民を大量虐殺した。さらに太陽発電衛星を破壊し、地球への送電を断った。加えてサイド2のコロニーを熱核ロケットで本来の軌道から引き離し、地球に落下させた。このわずか1週間の戦闘で総人口の5割に当たる55億人が死亡、地球圏の居住システムの基盤がいかにもろいものなのかを全人類に知らしめた。

同年1月15日、ルウム戦役によって公国軍は連邦軍の宇宙艦隊を壊滅させ、戦場となったサイド5の住民を虐殺した。

残ったサイド6は1月17日に中立宣言を行い、難を逃れた（開戦以前にジオン公国府との間に密約が結ばれていたといわれる）。また、月面都市群は元よりジオン公国に好意的で直接的に参戦はしなかったものの物資面で協力した。

同年1月31日、南極連邦基地において、ジオン公国は初めて対等の立場で連邦と同じテーブルについた。名目は講和会議であったが、事実上ジオン公国の降伏勧告であった。会議におもむいたギレン・ザビ総師は、連邦政府の高官に対し「必要ならばコロニーをいくつでも落とす」とおどしをかけた。だが、会議は物別れに終り、公国軍は2月7日より地球侵攻作戦を開始したのである。

0079年1月3日。連邦軍の南極基地で開戦後初めて今次大戦に関する条約が締結された。当初、公国軍側が軍事的優勢を背景に連邦軍の降服をせまるが、ルウム戦役のおり捕虜となった連邦軍のレビル将軍が希跡的に脱出生還し、有名な〝ジオン に兵なし〟という連邦軍の徹底抗戦を訴える演説を行ったことで、両軍の兵器使用制限などをとり決めた軍事条約にとどまった。



歴　史

ガンダム年表２　U.C. 0079～ 0080

年・月・日	事　柄
0079・1・3	一年戦争勃発。ジオン公国、地球連邦政府に対し独立戦争をしかける。 宣戦布告と同時に、サイド1、2、4へ奇襲攻撃。BC兵器と熱核兵器の無差別投入、さらにコロニーを地表に落下させ、大規模な気象変動をもたらす。 （1・3～1・10までの戦闘を一週間戦争と呼ぶ。この期間の戦闘で総人口の5割に相当する55億人が死亡）
1・15	ルウム戦役。連邦軍宇宙艦隊の敗北に終わる。公国軍は艦隊司令のレビル将軍を捕虜とする。サイド5 壊滅。
1・17	サイド6 中立宣言。
1・31	南極条約締結。
2・7	公国軍、地球侵攻作戦開始。北米、中米、東アジア、ヨーロッパの各都市に衛星軌道上から直接降下部隊を送り込む。 （2～3月の期間に公国軍は前大陸の3分の2を勢力下に置く。だが、両軍ともに戦力衰退。戦局は膠着状態に陥る）
3	公国軍、占領した地域の施設を使い戦力を増強。
4	連邦軍、新型ＭＳと専用強襲母艦の開発・建造を目的としたＶ作戦、失われた宇宙鑑艇の量産を目的としたビンソン計画を同時に発動させる。
6	公国軍、宇宙要塞ア・バオア・クー、ソロモン、月面基地グラナダを結んだ本土防衛ライン完成。フラナガン機関の設立。
7	連邦軍、ビーム兵器の小型化に成功。連邦軍の新造艦ホワイトベース（ＷＢ）進宙。RX-78ガンダム試作第１号機、サイド７内の開発工場でロールアウト。
8	連邦軍製試作型ＭＳ、サイド７で最終テスト開始。北米オーガスタ連邦軍基地において、RX-78-NT-1の開発が開始。
9・18	公国軍の特務部隊、サイド７を強襲。コロニー内部で史上初のMS同士の戦闘が行なわれる。WB、破壊を免れたMSを収容し南米のジャブロー基地に向けて出港。
9・20	ニューヨーク市において地球攻撃軍司令官ガルマ・ザビ大佐、戦死。
9・22	ギレン・ザビ、全地球規模の大演説を展開。
10	連邦軍の各工場でMSの量産体制が始まる。公国軍、連邦軍のMSに対抗するための新型機を次々に実戦配備。 MS用ビームライフル、公国軍側でも実用化に成功。 フラナガン機関、サイココミュニケーターシステムの試作型を開発。
11・7	連邦軍、オデッサ作戦始動。3日間の戦いの末、連邦軍の勝利に終わる。これによって地球上のミリタリーバランスは一変する。 （連邦軍、11月後半から量産型MS、RGB-79ジムの実戦配備を開始する）
11・30	公国軍、ジャブローを攻撃するが失敗に終わる。これを機に、ジオン軍地上戦力の崩壊に拍車がかかる。
12・15	連邦軍、アフリカ、北米で公国軍掃討戦を展開。
12・21	公国軍、連邦軍北極基地襲撃。
12・27	連邦軍、星１号作戦発動。ソロモン攻略。公国軍敗退。宇宙攻撃軍司令官ドズル・ザビ中将戦死。
12・30	デギン公王、自国のソーラ・レイ・システムによって死亡。連邦軍はレビル艦隊を失う。
12・31	ア・バオア・クー攻防戦。要塞内において、ギレン・ザビ総帥、キシリア・ザビ少将ともに戦死。連邦軍の勝利に終わる。
0080・1・1	一年戦争終結。同日、月面のグラナダにて終戦協定が結ばれる。

ガンダム・オフィシャル・レポート、2

通常兵器

Weapon

U.C.0079~0080

連邦軍の宇宙戦力

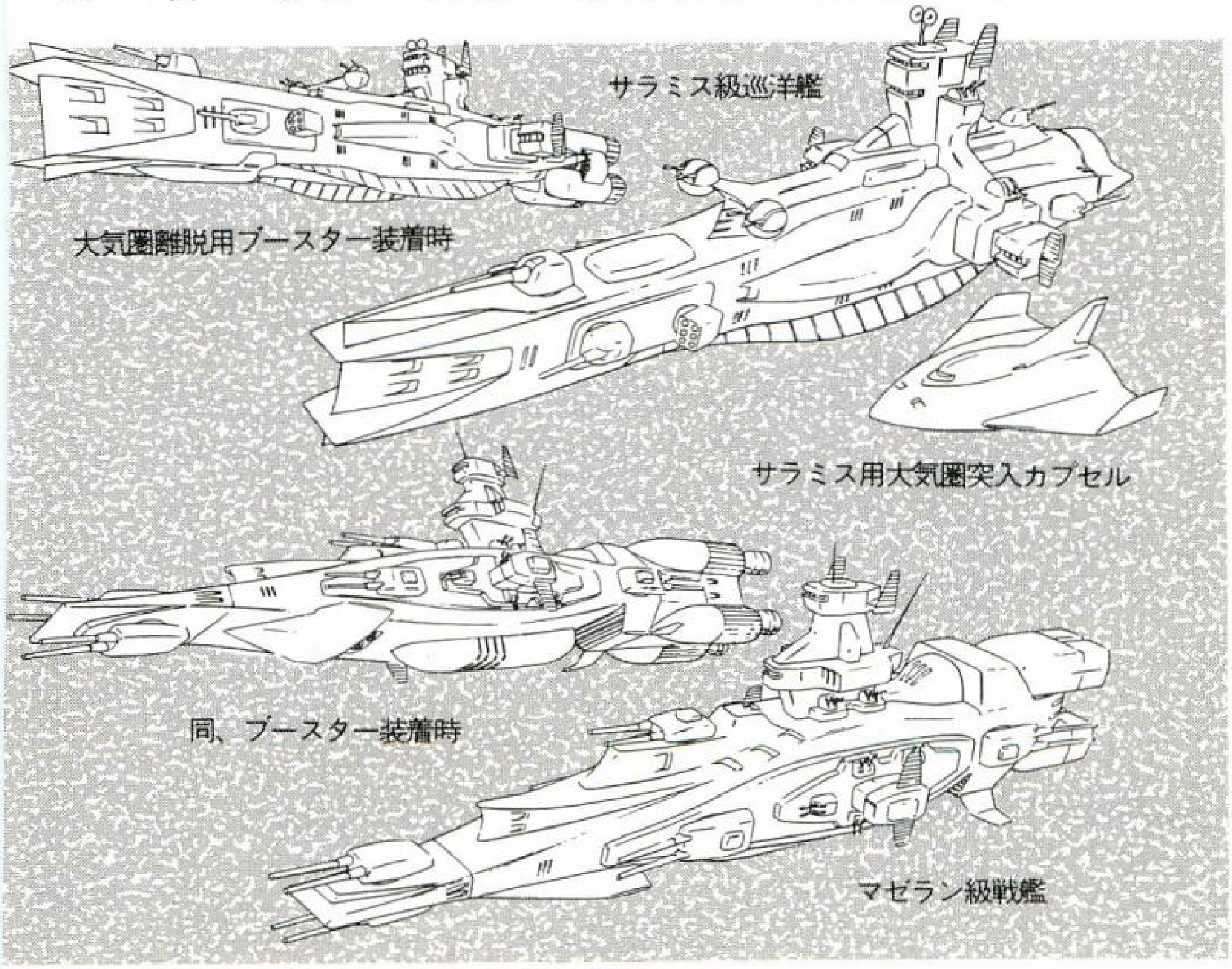
地球連邦軍は0059年にコロニー建設によって拡大した地球圏の治安維持を目的とした宇宙軍を設立した。

60年代に建造された初期の軍用艦艇は、プラズマ推進を巡航用に、化学燃料ロケットを戦闘機動用にした併用推進方式を採用していた。兵装はミサイルが中心で、他に対空用として機銃を装備する程度であった。

建造は宇宙空間にある通称浮きドックで行われ、地球大気圏突入・離脱能力はなかった。艦載機は小型のランチ程度で戦闘機などは搭載されなかった。

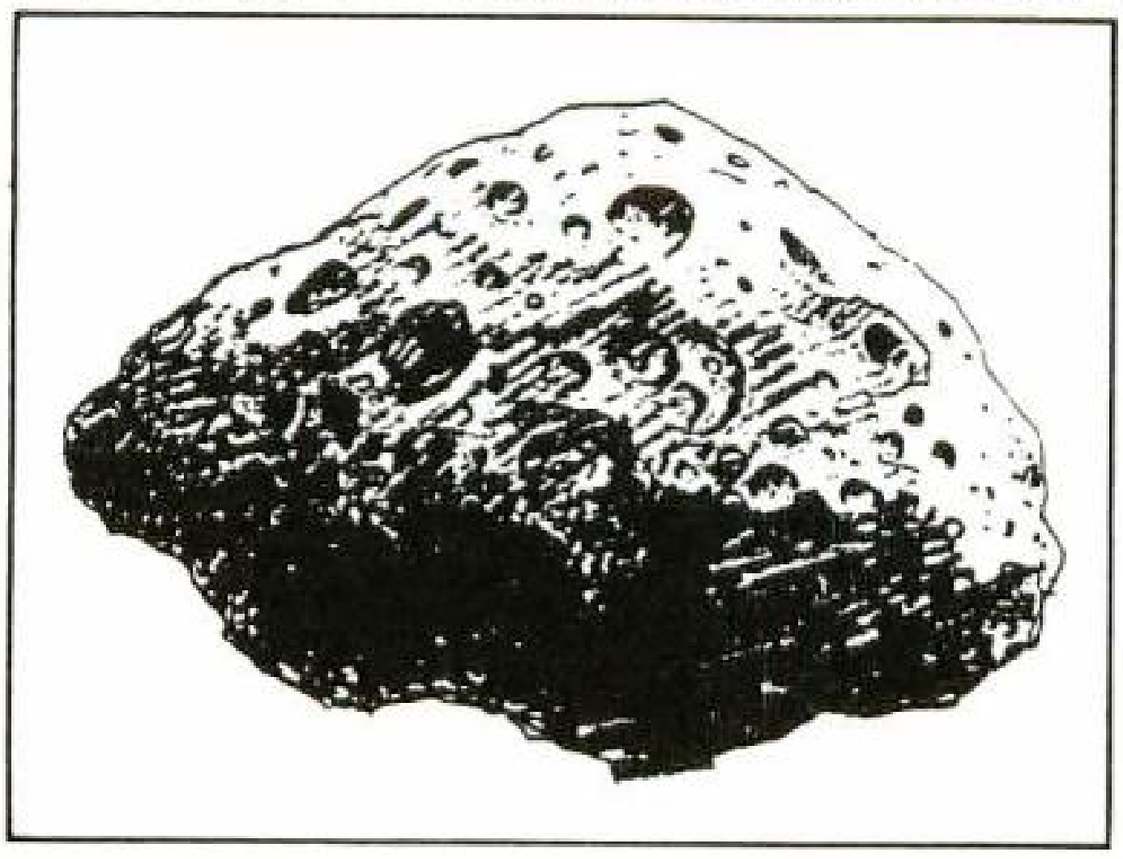
70年代に入り、軍用宇宙艦艇は新技術の導入が行われ、全面的に刷新された。すなわ

連邦軍 宇宙戦力



通常兵器

一年戦争中、唯一の連邦軍宇宙基地だった〝ルナⅡ〟



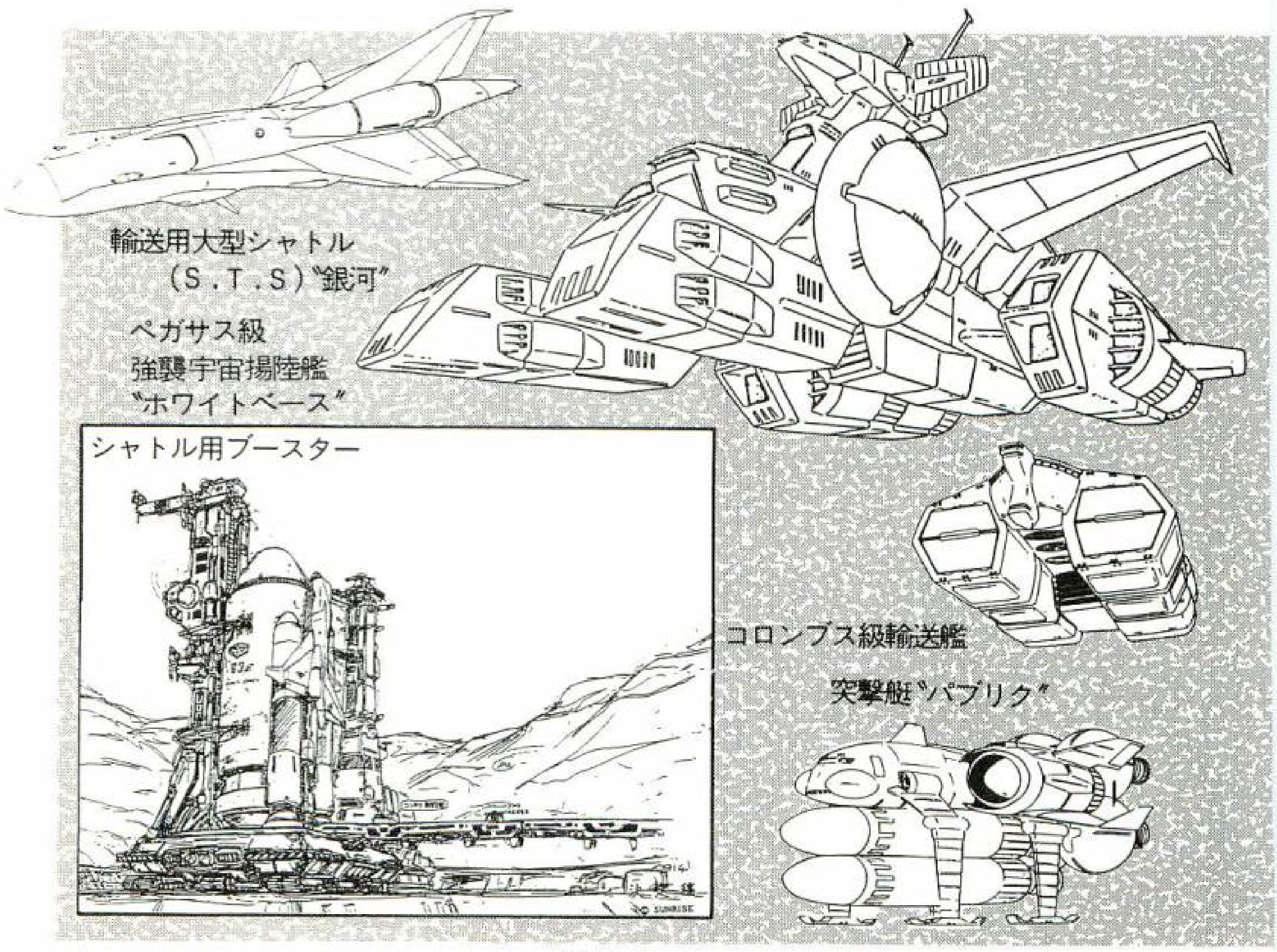
ちミノフスキー物理学応用による熱核ロケット推進と、メガ粒子砲である。熱核ロケット推進は、プラズマ推進に比べ高い推力を持ち、化学燃料ロケットに比べて推進剤の消費量が少なくてすんだ。また、メガ粒子砲は、従来のレーザー砲に比べてエネルギーロスも廃熱も少なく冷却効率が悪い宇宙での運用に適していた。

しかも、ミサイル防御用にアランクス・システム（コンピュータ制御によってミサイルを機銃で迎撃するシステム）が導入されていたため、主砲として採用が決定した。

こうして建造されたのが、サラミス級巡洋艦とマゼラン級戦艦であった。両艦は無補給で各サイドを回るだけの巡航能力を有していた。

だが、一年戦争が始まり史上最大の艦艇数では公国軍のウム戦役の際、新造艦サラミス、マゼランを擁する連邦軍宇宙艦隊は、公国軍に大敗を喫した。艦隊戦といわれるルの戦力を有していたものの、ミノフスキー粒子散布下の戦術に対応できず、公国軍のMSを中心とした機動戦に敗れたのだ。

このルウム戦役で連邦軍の

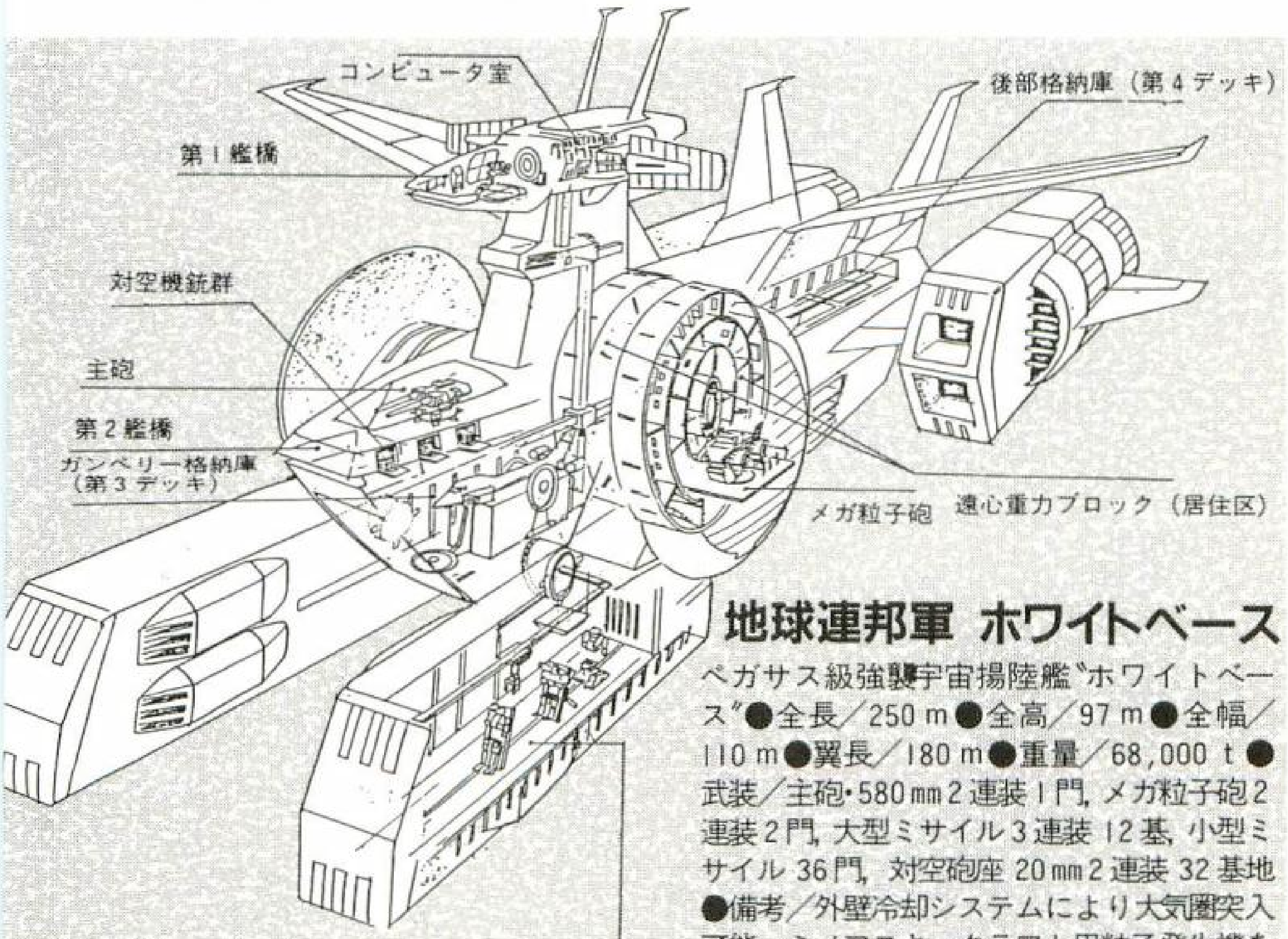


宇宙戦力は激減し、ルナIIの連邦軍基地を守護する艦隊のみとなった。

0079年4月、連邦軍はMS開発とそれを運用する新造艦を建造するV作戦と、失われた宇宙艦艇を再建造するビンソン計画を発動させた。両計画ともに公国軍のMSを中心とした機動戦に対抗したもので、特にV作戦で開発されたペガサス級は、これまでの艦艇とは一線を画す斬新な設計思想が導入されていた。

また、ビンソン計画では大艦巨砲主義の反省から、各種艦載機の開発が行われた。そのひとつがRGM-79ジムの支援機となったRB-79ボールである。この機体は宇宙作業用ポッドSP-WO3をベースに戦闘ポッドとして開発したもので、化学燃料ロケットを推進システムに採用し、180ミリ低反動砲を搭載していた。

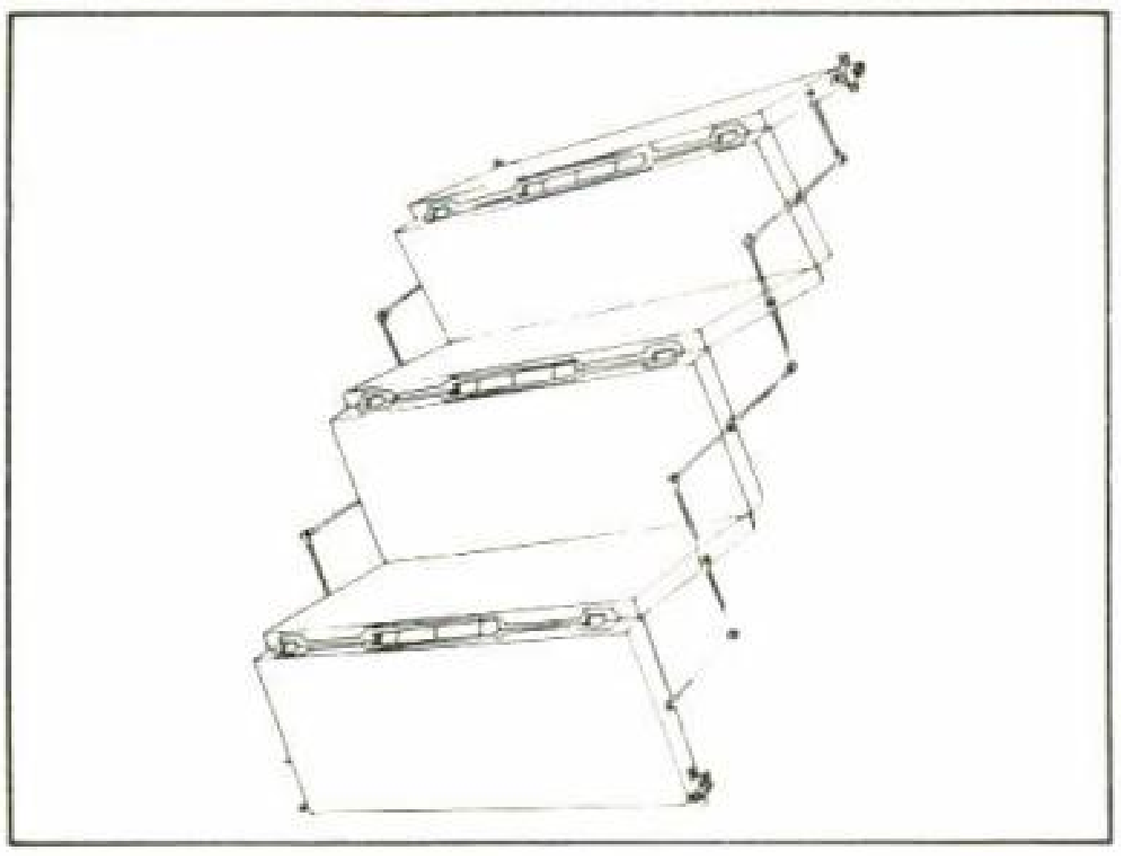
両計画は、ルナIIとジャブローの2つの基地で同時にスタートし、0079年12月にはレビル、ティアンム、ルナIIの3艦隊を再建した。もちろん、連邦軍製MSであるRGM-79と支援兵器RB-79を満載していた。さらに公国軍の2大宇宙要塞であるソロモンとア・バオア・クーを攻略するために2つの兵器を用意した。1つはビーム攪乱幕を形成する特殊ミサイルを4発搭載した突撃艇、パブリクである。もう1つはアポジモーターを装備した400万枚のミラーによって太陽光を集光するソーラーシステムである。このソーラ兵器は原始的であったが、ソロモンの



地球連邦軍 ホワイトベース

ペガサス級強襲宇宙揚陸艦〝ホワイトベース〟●全長／250m●全高／97m●全幅／110m●翼長／180m●重量／68,000t●武装／主砲・580mm2連装1門，メガ粒子砲2連装2門，大型ミサイル3連装12基，小型ミサイル36門，対空砲座20mm2連装32基地●備考／外壁冷却システムにより大気圏突入可能。ミノフスキークラフト用粒子発生機を2基搭載

連邦軍〝ソラーシステム〟用ミラー

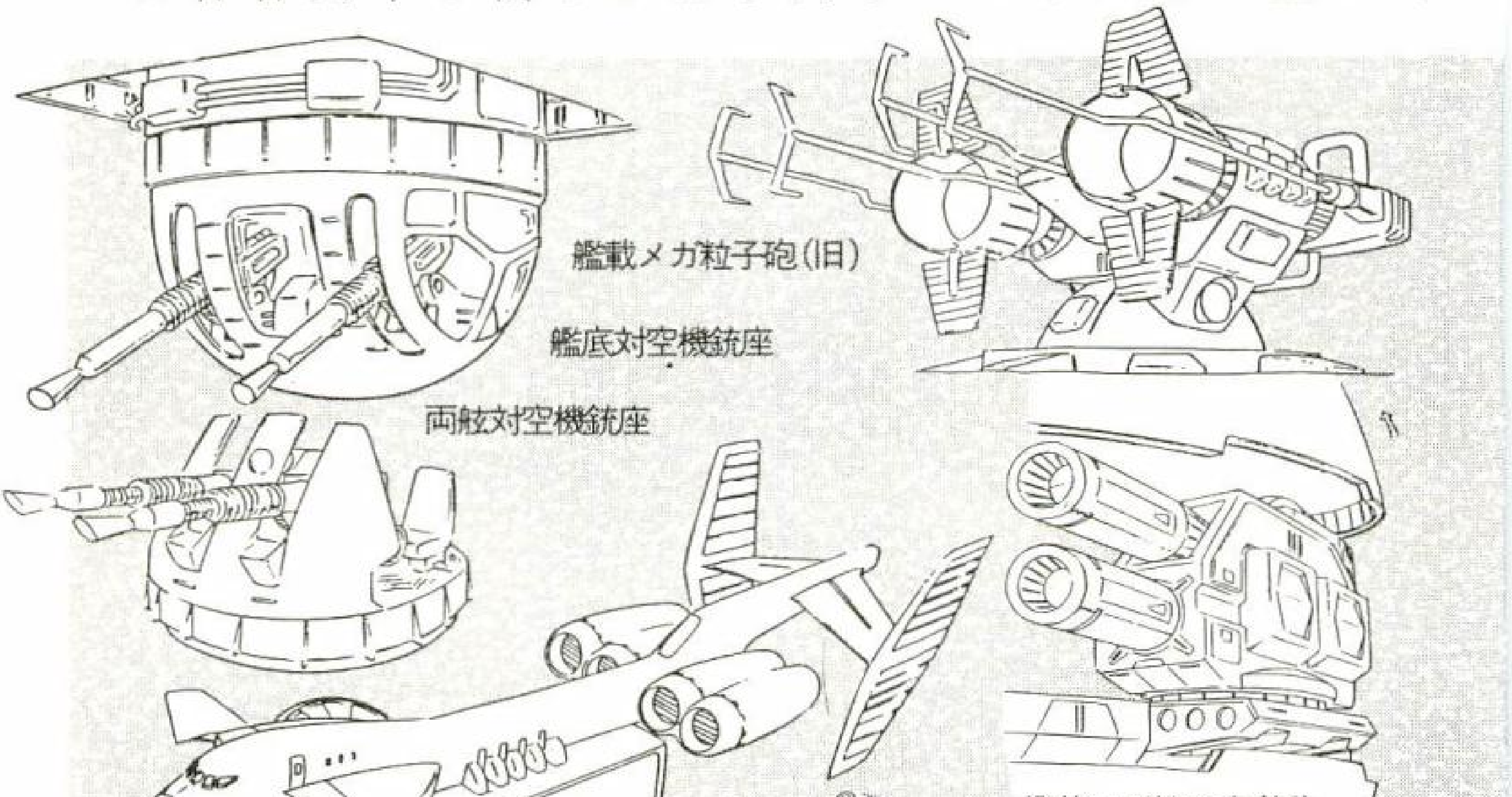


公国軍の衛星ミサイルに破壊され、ア・バオア・クー戦では投入できなかった。

●ホワイトベース

V作戦の一環として建造されたペガサス級強襲宇宙揚陸艦の1番艦。公国軍はその形状から「木馬」というコードネームをつけていた。

艦体は戦術・戦略に応じて武装・推進器を換装するという設計思想に基き、分離が可能であった。前足はMSデッキで発進カタパルトの他、整備用のベッドを備えていた。後足は熱核ロケット方式による主推進ユニットで、ミノフスキー・クラフトとの併用で大気圏離脱・突入能力がある。胴体には遠心重力ブロック、艦載機用デッキ、整備工場などがあり、主砲である火薬式2連装大型砲1門とメガ粒子砲2門が搭載されていた。翼は太陽電池板で、頭には艦橋がある。艦載機は大気圏内MS輸送機であるガンペリー1機と、移動用のランチ2隻、さらに汎用戦闘機コア・ファイターG機である。MSは最大3個小隊（各タイプ3機、合計9機）で、艦載機全てを合わせた総合戦力は機動大隊に匹敵した。



連邦軍の航空戦力

連邦軍の航空戦力の中核に
コア・ファイターがあった。
この戦闘機の歴史は、００５
０年代に始まる。当時は宇宙
への軍事拡張が始まり、空軍
体系も宇宙空間まで含むよう
になった。そのため、宇宙戦
闘機、高々度戦闘機の開発が
必要となり、最終的にはそれ
ら全てを含めた汎用戦闘機の
開発が行われることになる。

●ＴＩＮコッド（ティン）

防空用に開発された高々度
戦闘機で、００６２年に試作
機がロールアウトしている。
武装は２５ミリ機関砲４門に
空対空ミサイル２基を装備し
た。

●セイバーフィッシュ

００７１年に完成した汎用
戦闘機。宇宙では化学燃料ロ
ケットを、大気圏内ではジェ
ットエンジンを用い、さらに
高々度戦闘時にはブースター
としてロケットを使用する。
武装は２５ミリ機関砲を４
門、内装式３連装ミサイルラ
ンチャーを４基装備する。当
初はマゼラン級宇宙戦艦の艦
載機として開発されたが、宇
宙軍側が反発したため、高々
度戦闘機として用いられた。

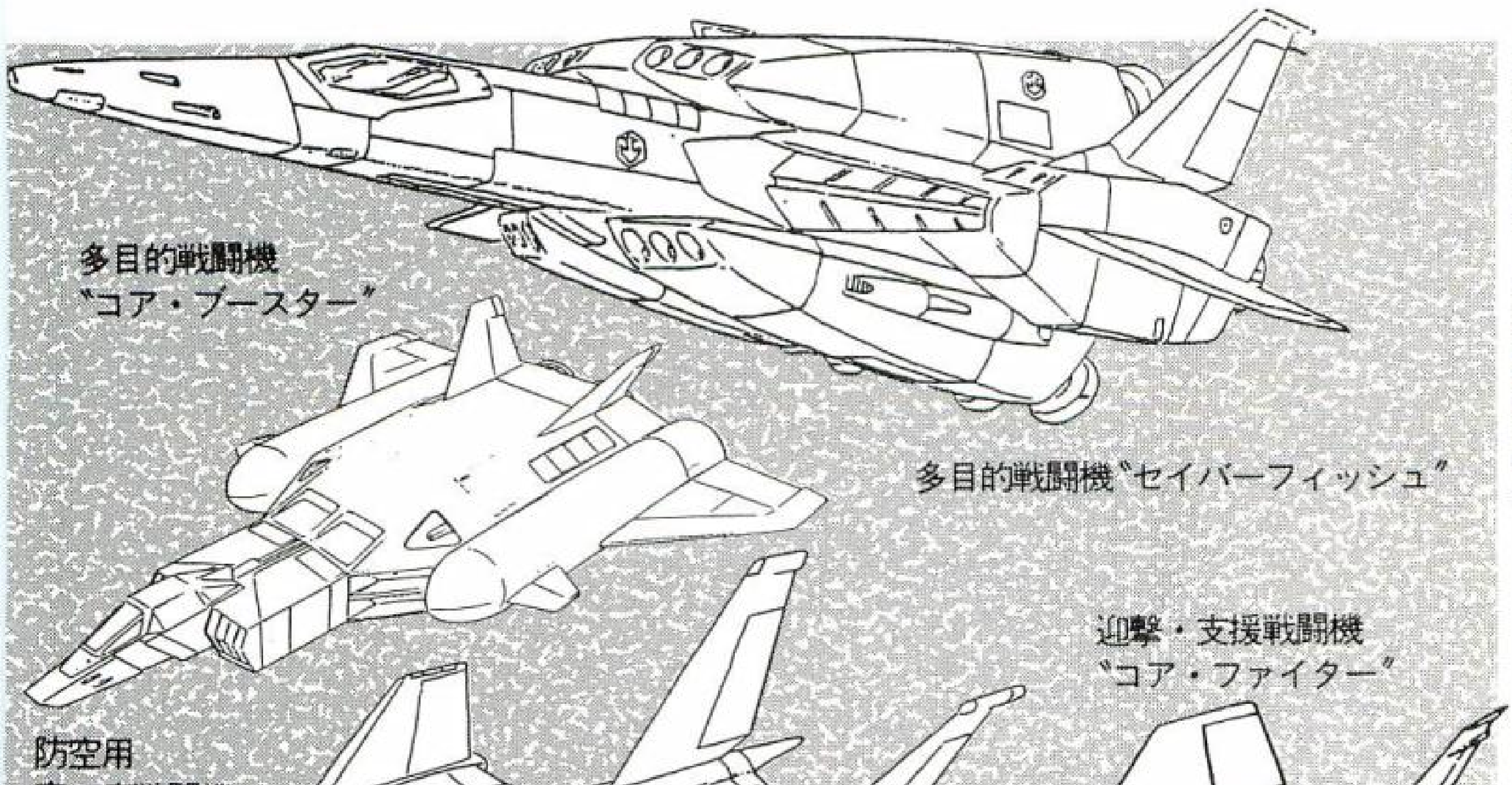
●トリアーエズ

空軍と宇宙軍初の共同開発
機。小型の汎用戦闘機で、宇
宙ではルナⅡやサイド駐留軍
に配備された。武装は２５ミ
リ機関砲２門と貧弱であった。

●コア・ファイター

一年戦争時に開発された高
性能汎用戦闘機。本来はＶ作
戦によるＭＳ開発にあたっ
てパイロット保護のため組み
こまれた脱出カプセルを、戦

連邦軍 航空戦力



闘機として運用できるように改修したものだ。この機体は軍の垣根を越えた特別編成スタッフにより開発が行われた。開発当初はRGM－79にもコア・ブロックシステムが採用される予定で、支援戦闘機として運用されるはずであったが、生産数の製造に回したため、生産性の問題から不採用になり、さらに工場をMS用になり、さらに工場をMSは少なかった。

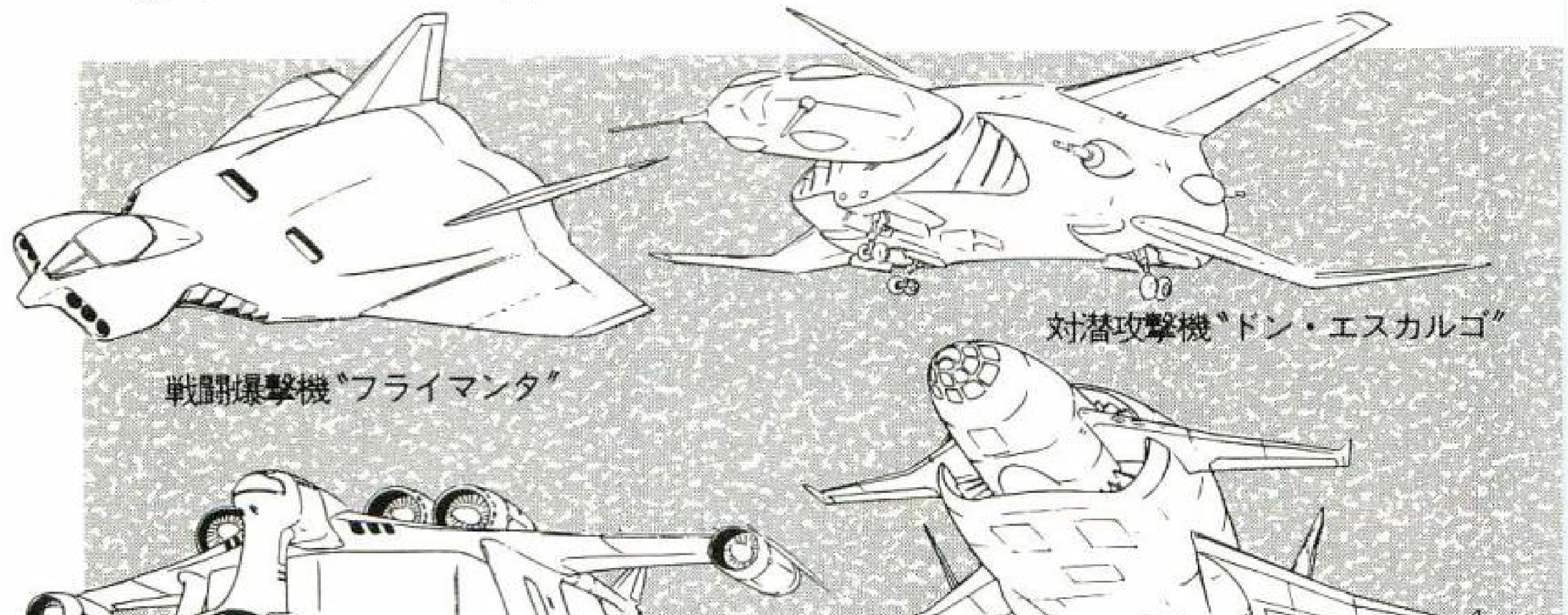
武装は25ミリ機関砲4門に内装式ミサイルランチャー2門と小型機としては重武装であった。また、ミノフスキー粒子散布下の使用に対応しており、コンピュータ他の電子回路には全て光伝達方式が採用されていた。

●Gファイター

RX－78のサポートシステムとして開発された汎用戦闘機。初めて核融合炉が搭載され熱核ロケット推進が導入された。機体を2ブロックに分割し、RX－78をはさみこんで輸送するシステムであった。また、RX－78のブロック機構を応用して、Gカイ（重戦闘機）、Gブル（機動戦車）といった2種類の兵器に分けることもできた。ビーム砲が搭載されていたが、システムとしての無駄も多く、量産戦闘力は高かったためか採用されていない。

●コア・ブースター

Gファイターの運用・設計データを元に開発されたコア・ファイター用のブースター。熱核ロケットが採用され、メガ粒子砲が2門搭載されている。この機体の完成によって真の汎用戦闘機と呼べる兵器が生まれたといえる。



連邦軍の陸上・海上戦力

連邦軍の陸上戦力は、公国軍のMSに対抗できなかった。頼みの航空戦力が、ミノフスキー粒子散布下の影響でその威力を封じられ、誘導兵器も近距離用有線誘導型しかできなかった。

●ビッグトレー

一年戦争中に開発された陸戦艇。陸上戦艦とも呼ばれ、熱核ホバーで水上も移動可能だった。砲は火薬式で、その長大な射程によりMSの接近を許さなかった。艦橋には作戦司令部が置かれている。

●61式戦車（M.B.T.）

150ミリ2連装砲を備えた連邦軍の主力戦車。MSに対しては火力が不充分で、オデッサ作戦では残存機は2割以下であった。

●60ミリバルカン重装甲車

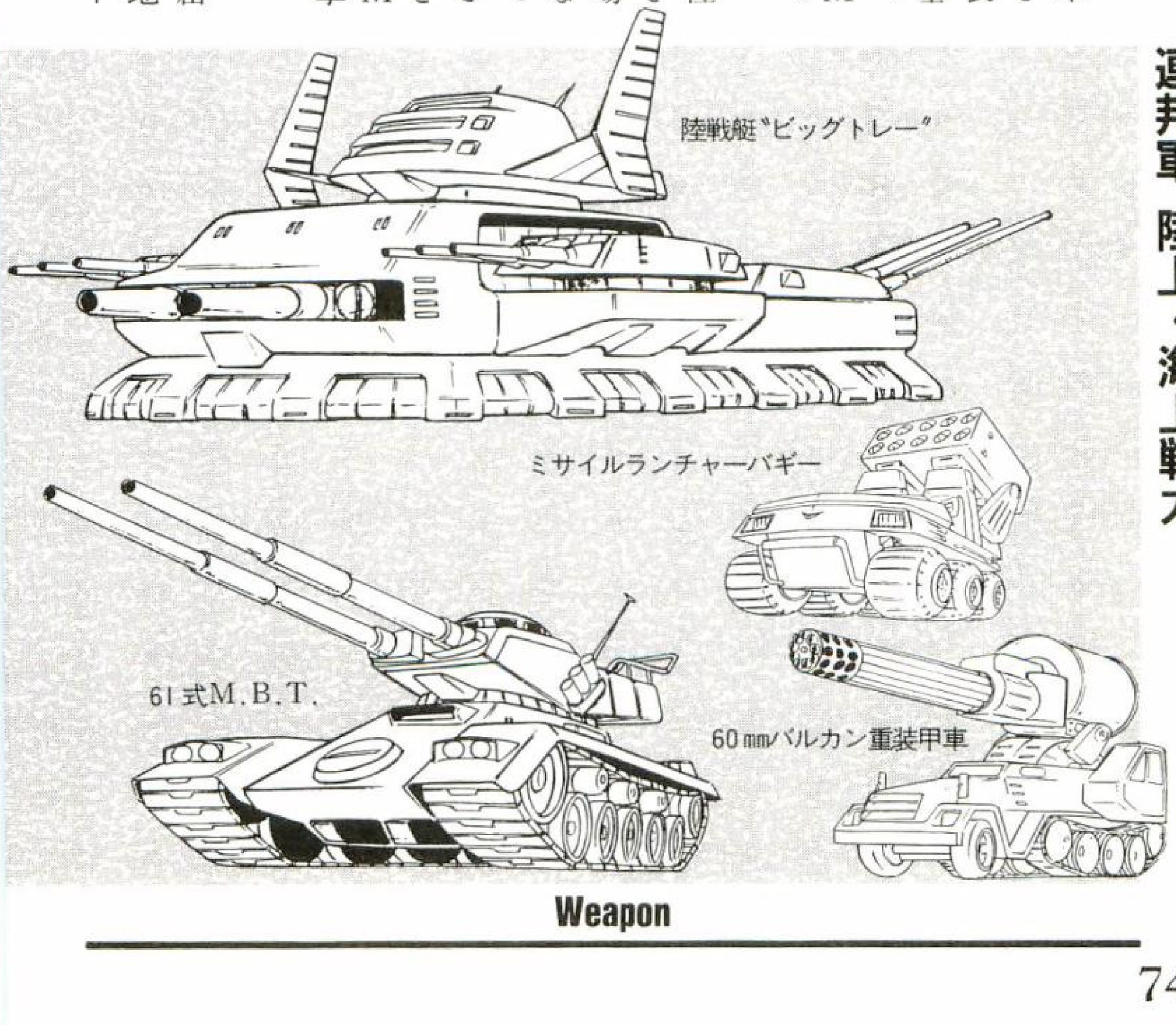
対空用に開発された車両であるが、MS-06ザクの装甲を破壊する威力があり、基地防衛用に配備された。だが、公国軍の重装甲の水陸両用MSに対しては効果がなかった。

●ミサイルカー

陸上用とコロニー用の2種類がある。前者の方が大型で射程も長い。コロニー用の場合、排ガスで大気を汚染しないようにバッテリー駆動のモーター車であり、車体も小さく搭載火器も小型である。どちらにしろ、機動力が高いMSに対しては、たいした攻撃力を持たない。

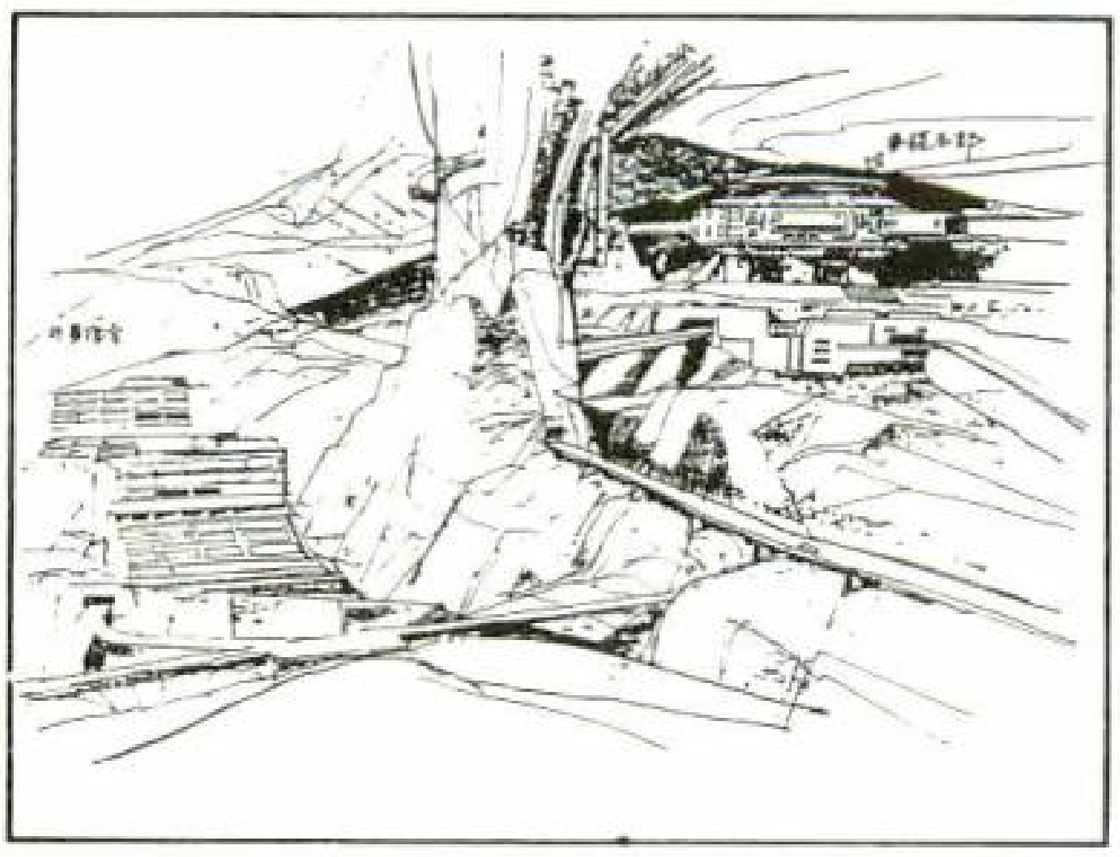
●ファンファン

南米アマゾン川の地下洞窟に建設されたジャブロー基地の防衛用に開発されたホバー



通常兵器

地球連邦軍総司令本部〝ジャブロー〟

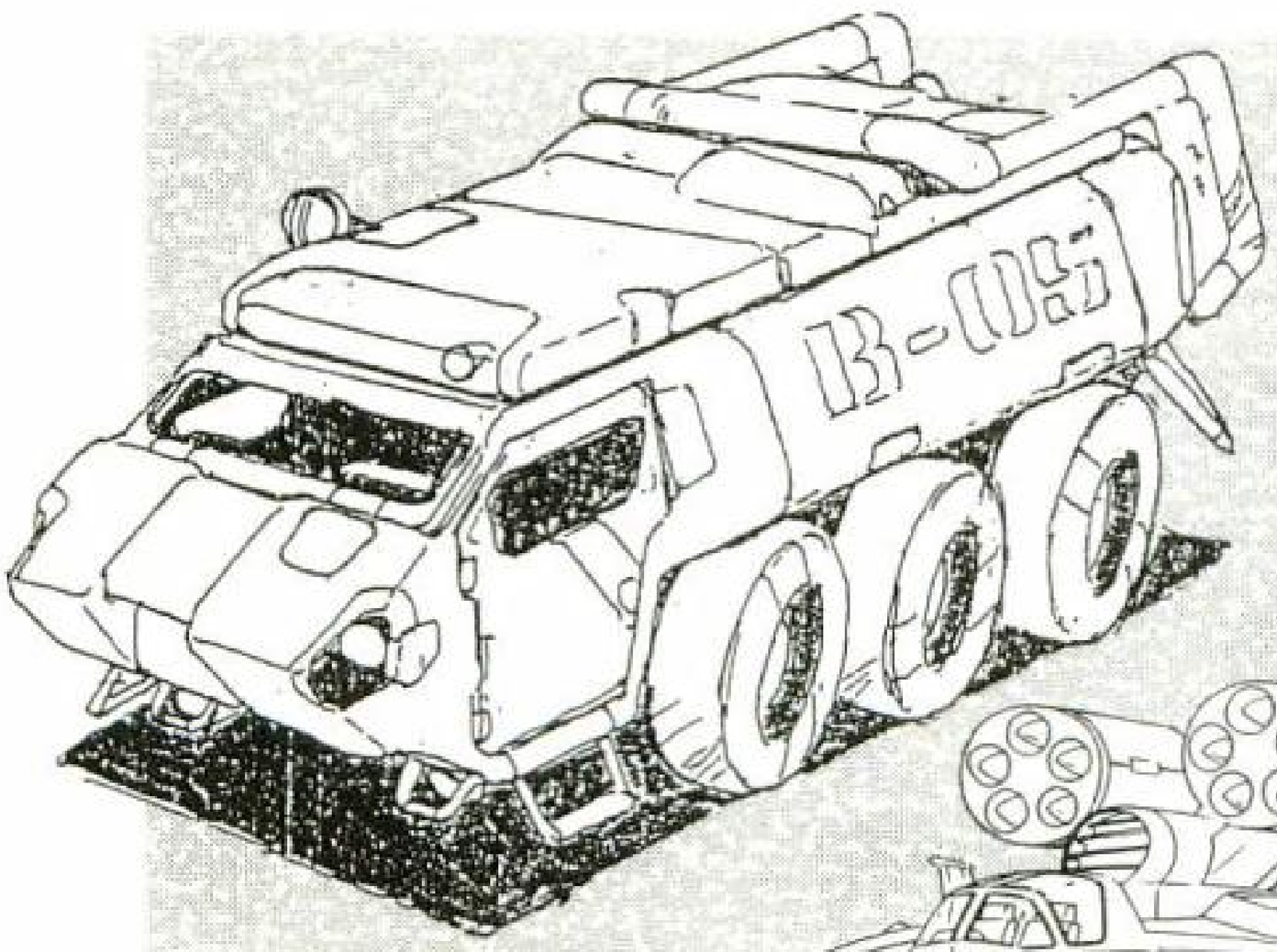


へり。基地内に潜入した敵を攻撃する。戦車など戦闘車両より、移動力が高く、武装として4連装ミサイルランチャー2基が装備されていた。ジャブロー内ではミノフスキー粒子が散布されていないので、誘導兵器が使用できた。

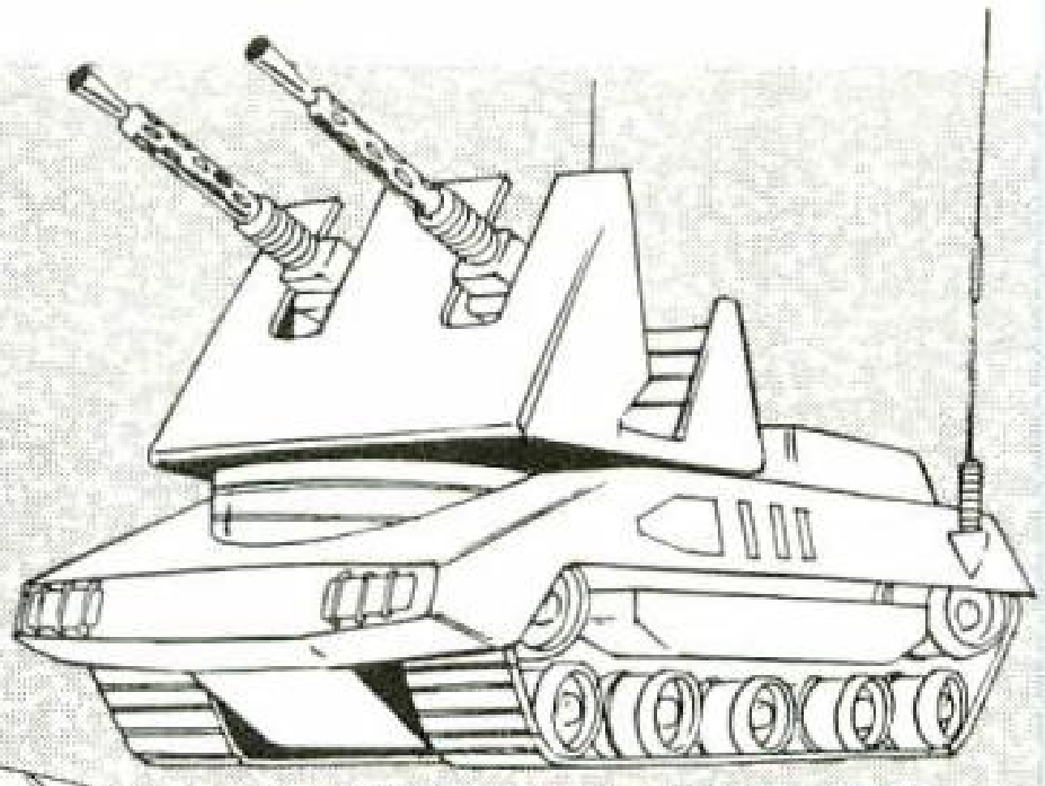
☆

海上戦力は大戦当初、連邦軍の方が上だった。コロニーには海がなく、有効な兵器を開発することは困難だったからだ。しかし、公国軍はキャリホルニアベースを無傷で制圧し、連邦軍の次期主力潜水艦であったユーコン級とマドアングラー級をおさえ、さらに水陸両用MSを開発し投入したことで、その立場はほぼ互角とされてしまった。

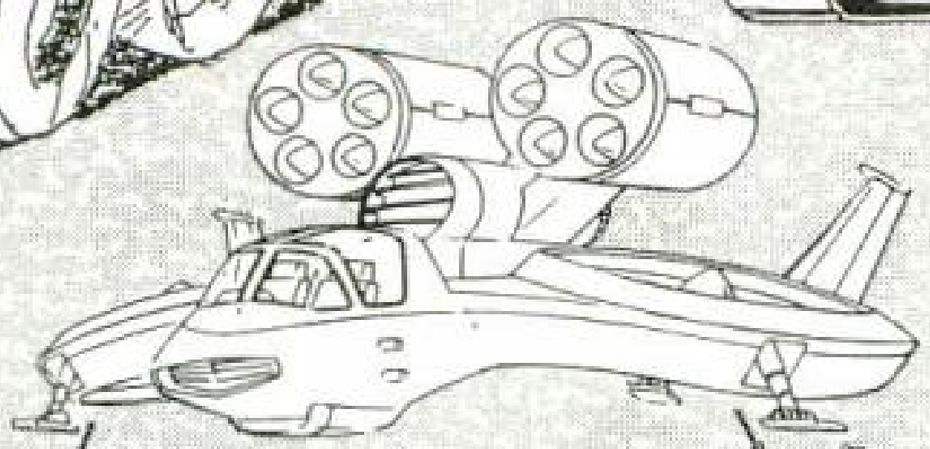
連邦軍の主力は、対潜哨戒機ドン・エスカルゴを艦載機とする戦闘空母であった。対潜哨戒機に対して、MSM－03ゴッグなどは、よい標的となった。そのため、公国軍はMSM－07ズゴックに長い射程のメガ粒子砲を、MM－07グラブロに対空ミサイルを装備させた。



寒冷地用A.P.C.
(Type B)

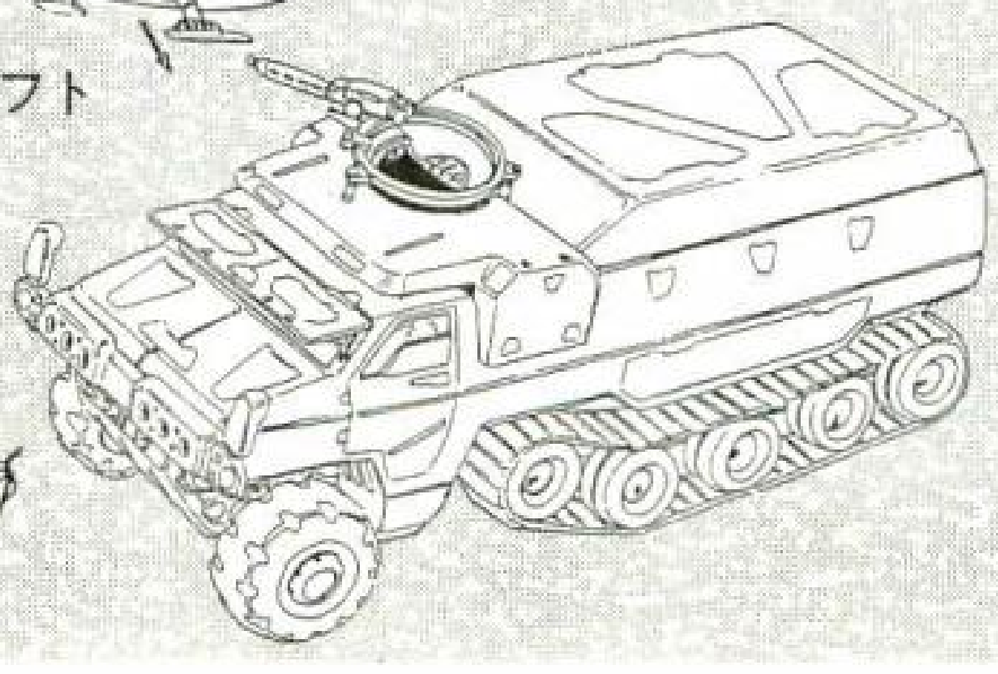


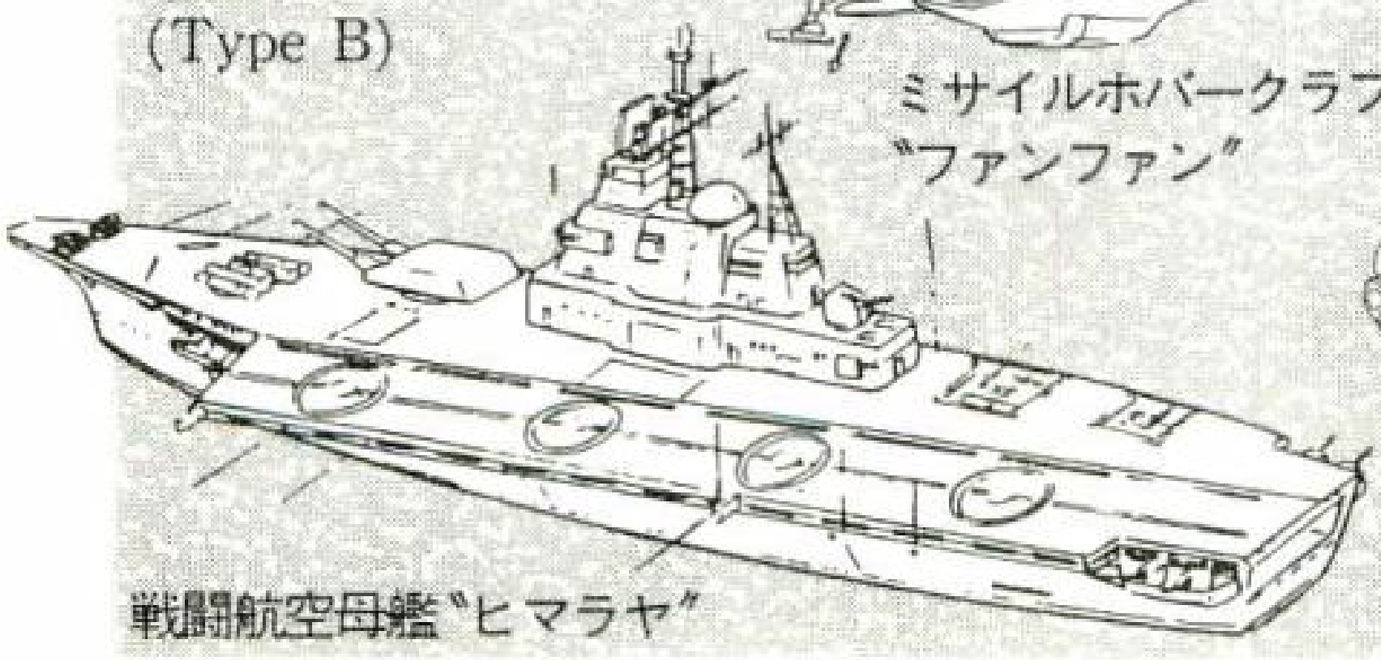
対ザク用タンク型自走砲
（コロニー内迎撃用）



ミサイルホバークラフト
〝ファンファン〟

寒冷地用A.P.C.
(Type A)





戦闘航空母艦〝ヒマラヤ〟

公国軍の宇宙戦力

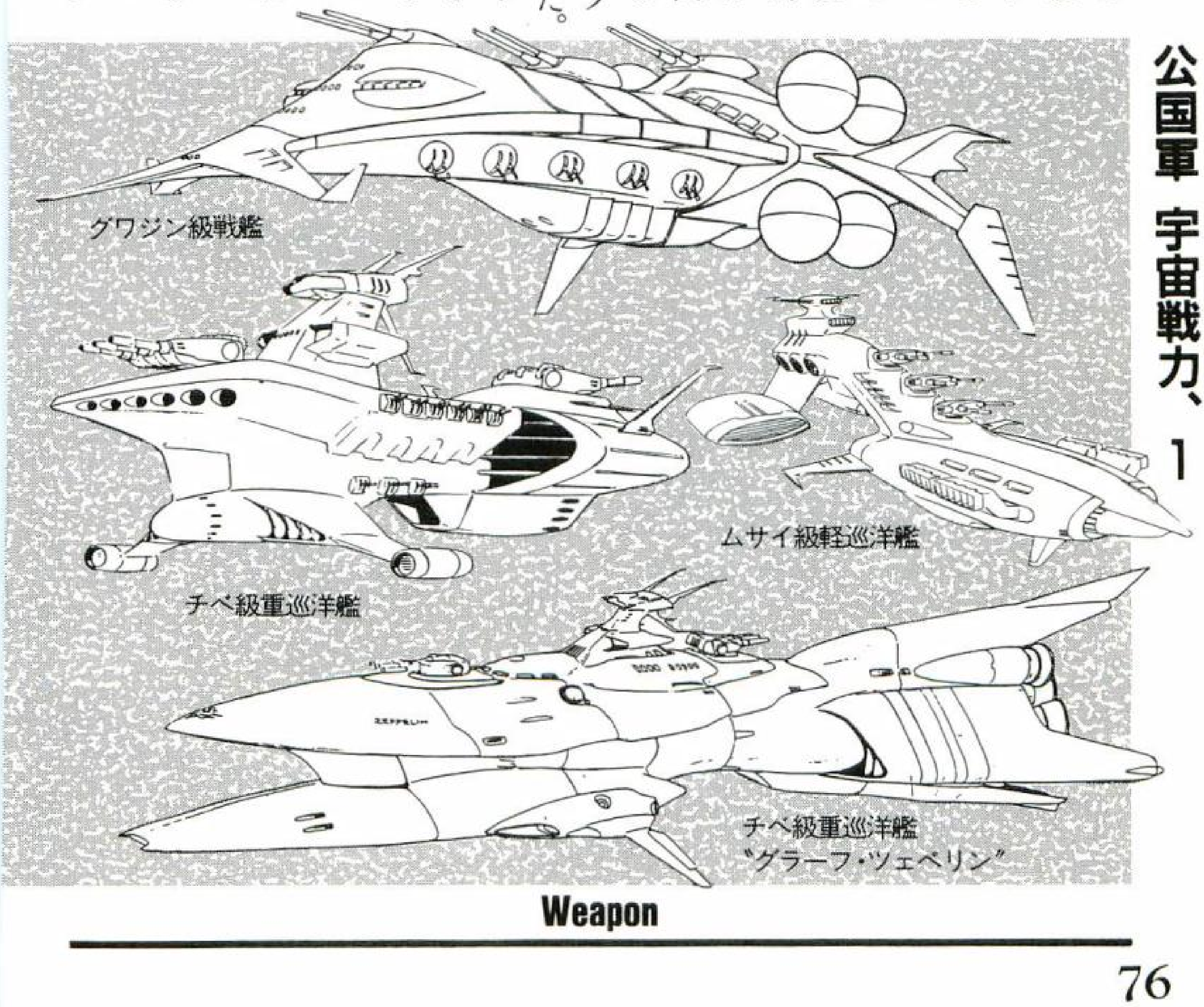
宇宙艦艇に関しては、公国軍の方が勝っていた。ジオン共和国の樹立と同時に国防隊が組織され、チベ（あるいはティベ）級重巡とパプア級補給艦を建造した。だが、当時MSを中心とした機動戦の構想はなく、推進システムも旧式の化学燃料／プラズマ併用式で、砲も火薬式であった。

0070年代に入り、ジオン公国ではミノフスキー物理学とその応用技術が長足の進歩をとげ、MSと宇宙艦艇の開発に導入された。さらに、0074年にMS-05ザクIが開発に成功するとともに、機動戦構想が生まれ、宇宙艦艇もMSの搭載を前提とした設計となった。

ムサイ級軽巡洋艦は、その構想にのっとり、MS5機を搭載運用できる初の宇宙艦艇となった。また、推進システムを熱核ロケット、主砲に2連装メガ粒子砲3門となった。さらにレーダーを無力化するミノフスキー粒子発生器を装備していた。地球侵攻作戦用に開発された大気圏再突入カプセルを推進モジュールの間に装備可能で、艦首にはMSを搭載可能な小型再突入カプセル、コムサイを装備していた。

ルウム戦役では、このムサイ級、チベ級の両巡洋艦は、大戦末期に近代化したチベ級が主力艦であった。

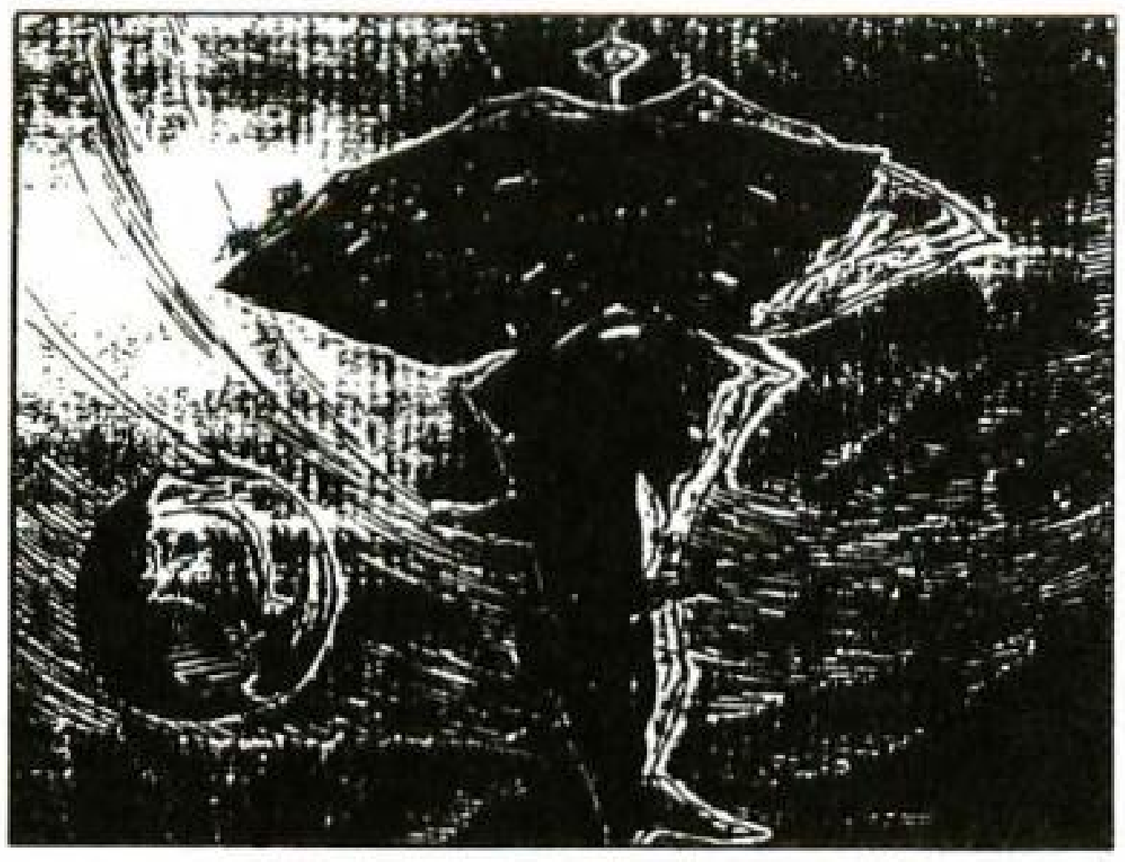
なお、このムサイ級重巡洋艦の新型艦として再設計された。そのムサイ級重巡洋艦の第1番艦がジークフリート、チベ級戦艦の第1番艦がグラーフ



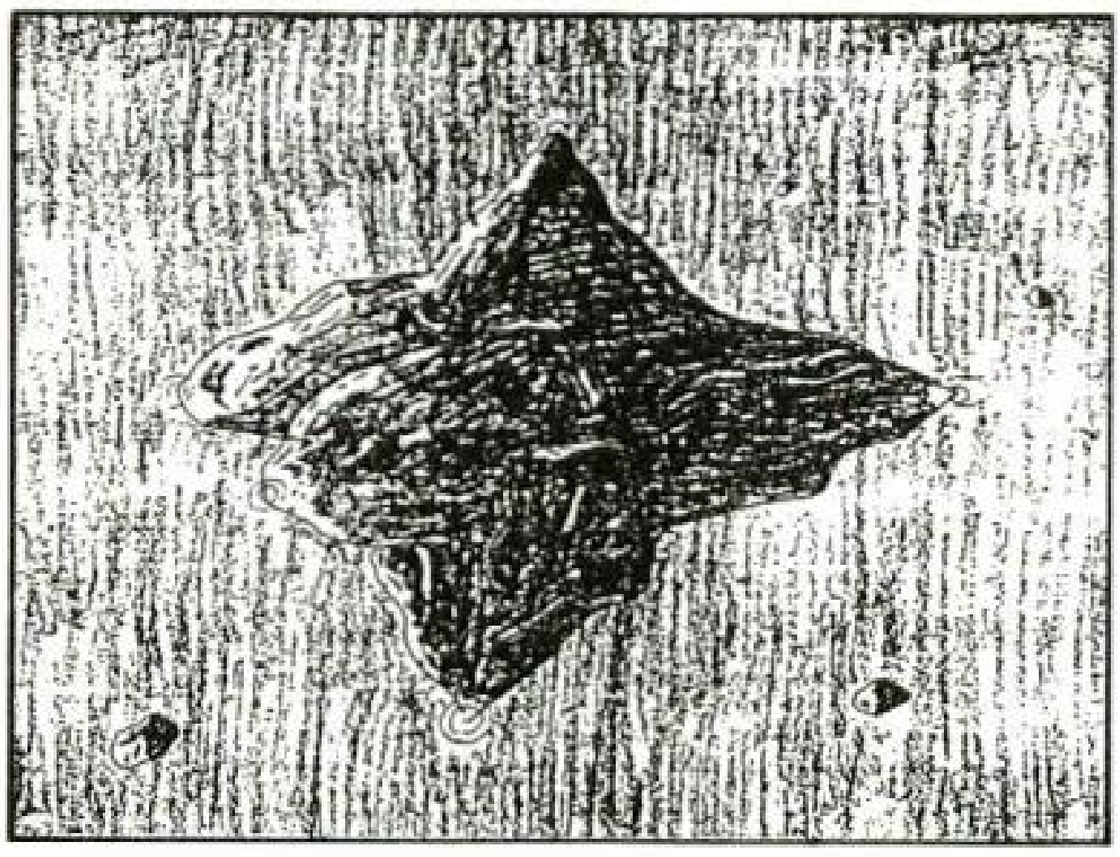
公国軍 宇宙戦力、1

通常兵器

ジオン公国軍宇宙要塞〝ア・バオア・クー〟

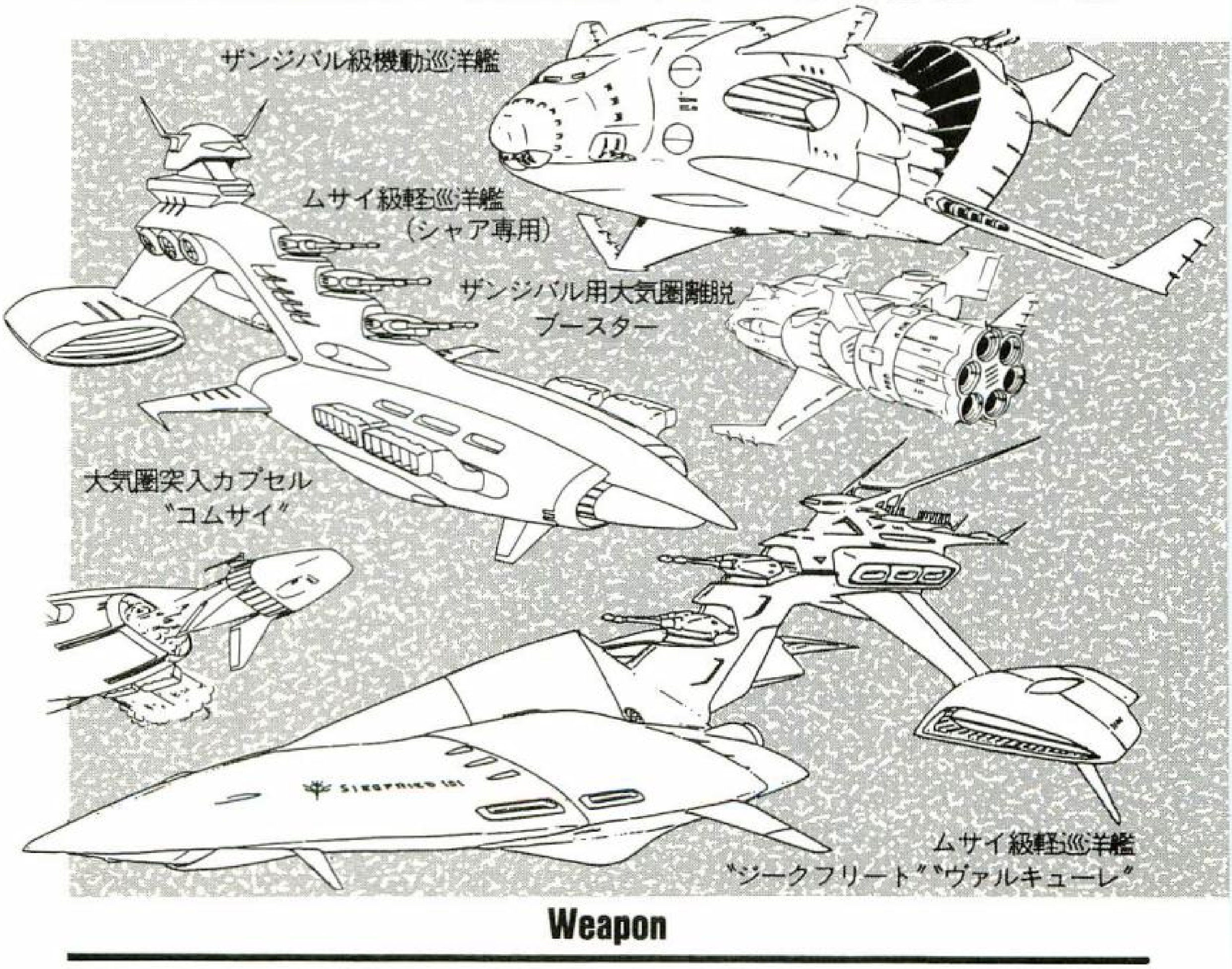


ジオン公国軍宇宙機動要塞〝ソロモン〟

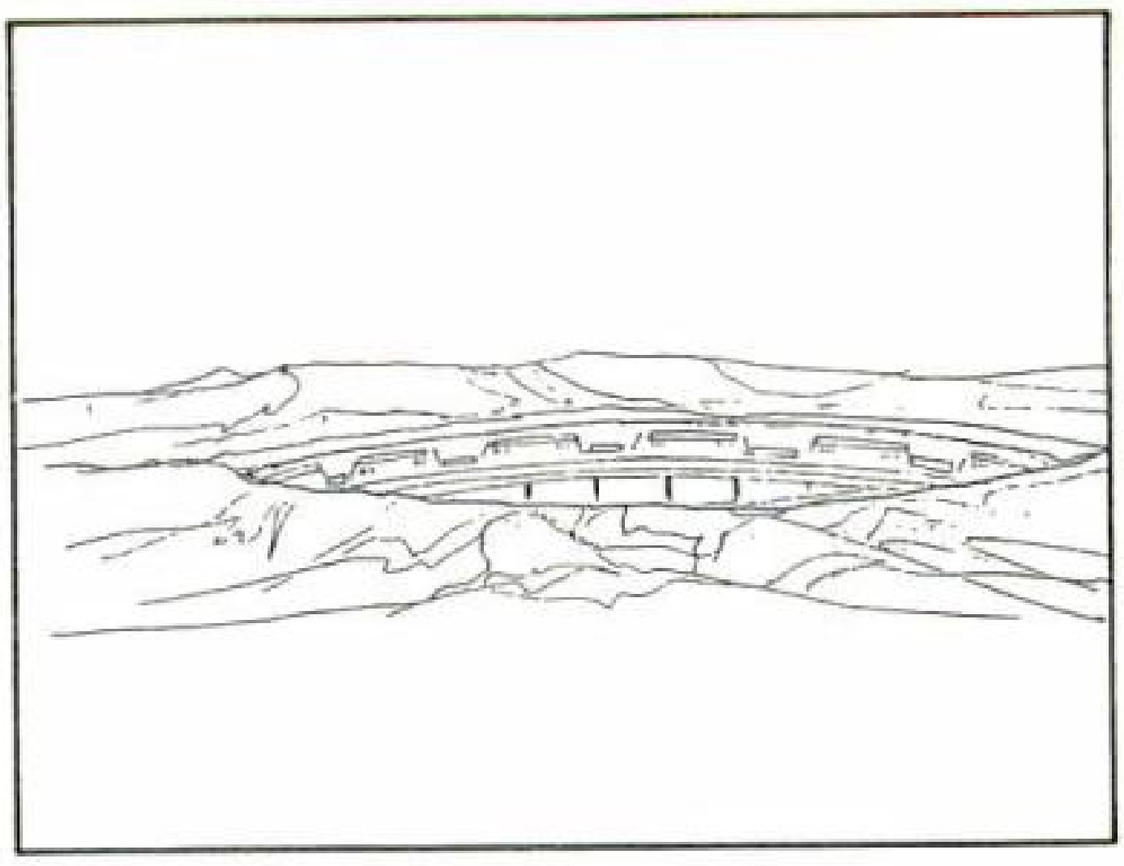


ツエッペリンであった。いずれも大型化してMS搭載数も増大したが、末期のことでもあり、戦果は少なかった。

公国軍はキリシア・ザビ少将が指揮する突撃機動軍と、ドズル・ザビ中将が指揮する宇宙機動軍があった。そして、デギン・ザビ公王直轄の親衛隊を含めて3軍にそれぞれ旗艦となる大型戦艦が建造された。これが連邦軍のマゼラン級に匹敵するグワジン級戦艦である。火力も強力であったが、最悪のケースを予測して、火星と木星の中間にある小惑星帯までたどり着くだけの巡航能力を持たせた。この3隻のうち、デギン公王の乗った1番艦グレート・デギンは、友軍の放ったソーラ・レイにより誤って沈められ、キリシ



ジオン公国軍月面要塞〝グラナダ〟



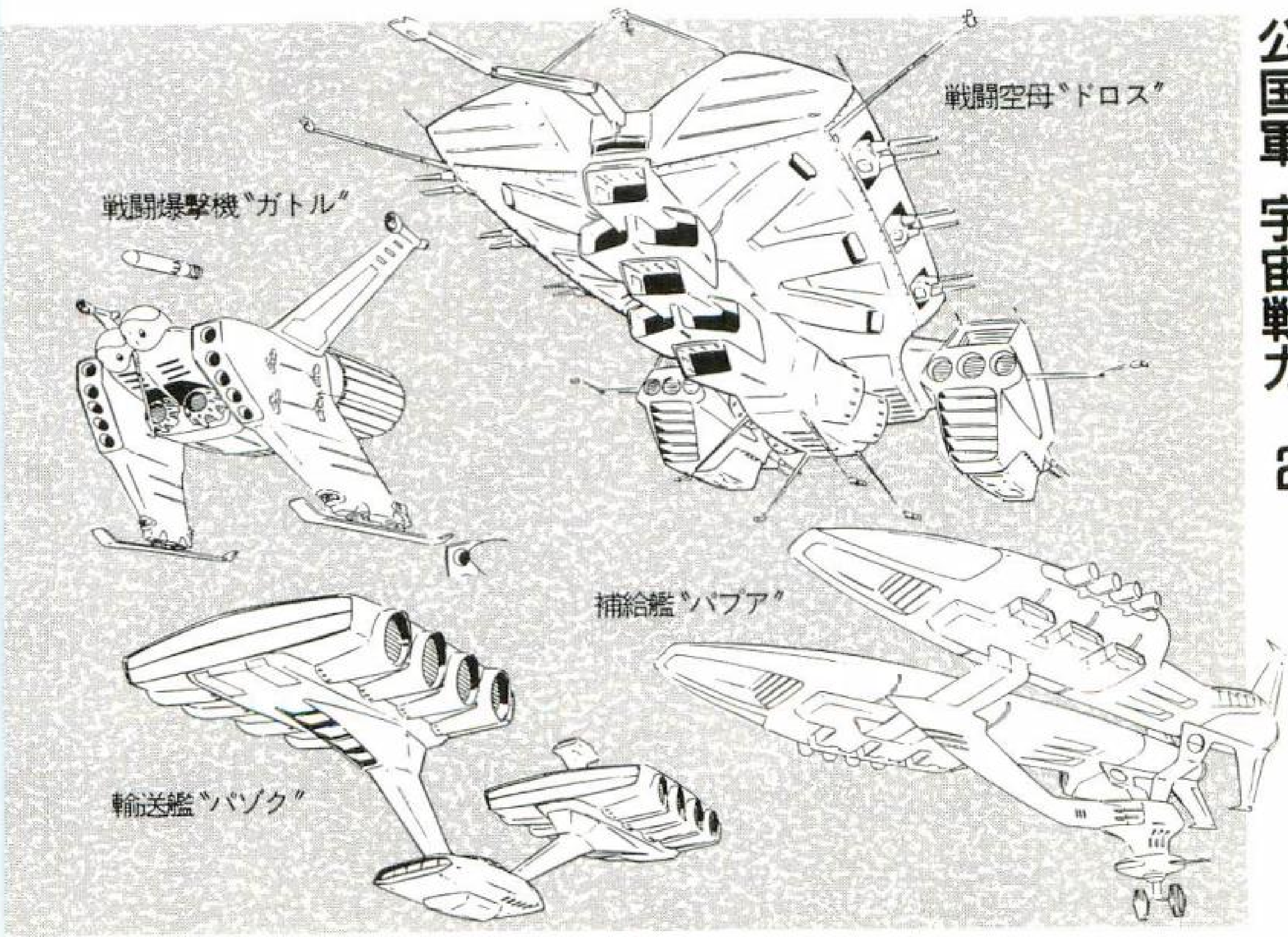
ア少将の3番艦もア・バオア・クー戦で撃沈された。なお、2番艦は行方不明である。（小惑星基地アクシズに逃げたという説もある）

地球侵攻作戦の成功により公国軍はサイド3～地球という長大な補給線を維持せざるを得なかった。そこで、大気圏突入能力を持つ機動戦艦が必要となった。そこで建造されたのがザンジバル級である。この艦はリフティングボディを採用し、大気圏内の航続性能も高かった。大気圏離脱時には化学燃料ロケットによる1段式ブースターを使用した。

また、公国軍はMS機動戦構想の最終段階として、ドロス級超大型宇宙空母を建造した。全長は492メートルに達し、搭載MS数は182機であった。武装は2連装メガ粒子砲が6門で、戦力もバカにはできなかった。同時に7機のカタパルト発進が可能であった。

その他、小型機として宇宙戦闘機ガトル、突撃艇ジッコが開発された。これらは艦載機ではなく、ア・バオア・クーやソロモン、グラナダといった公国軍最終防衛ライン上の要塞の防空用である。ジッコは連邦のパブリクと同じよ

公国軍 宇宙戦力、2



うに対ビーム攪乱用の特殊爆弾を3発装備していた。

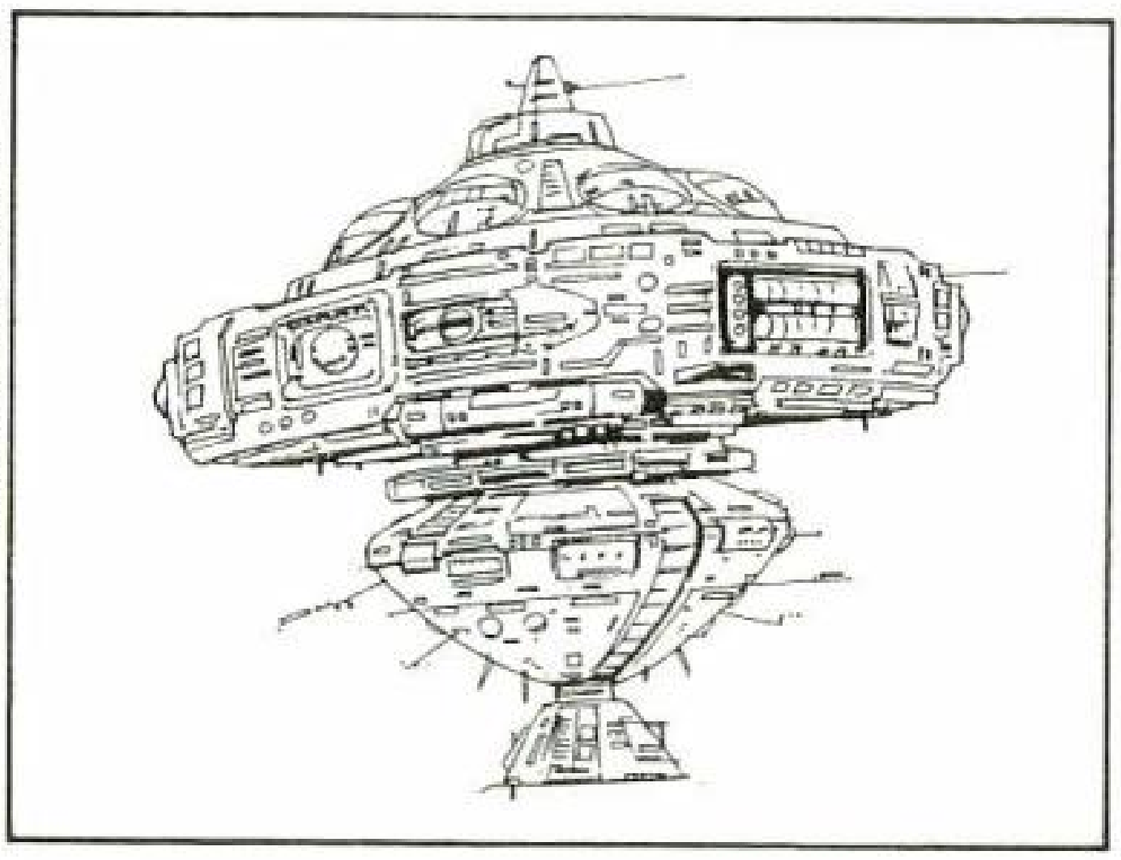
また、変り種としては、MS用の浮遊砲座スキウレがある。MA－05ビグロのメガ粒子砲を搭載し、下面のスラスターノズルによって月面でも使用できた。グラナダ防衛用に開発されたが、結局使われなかった。

☆

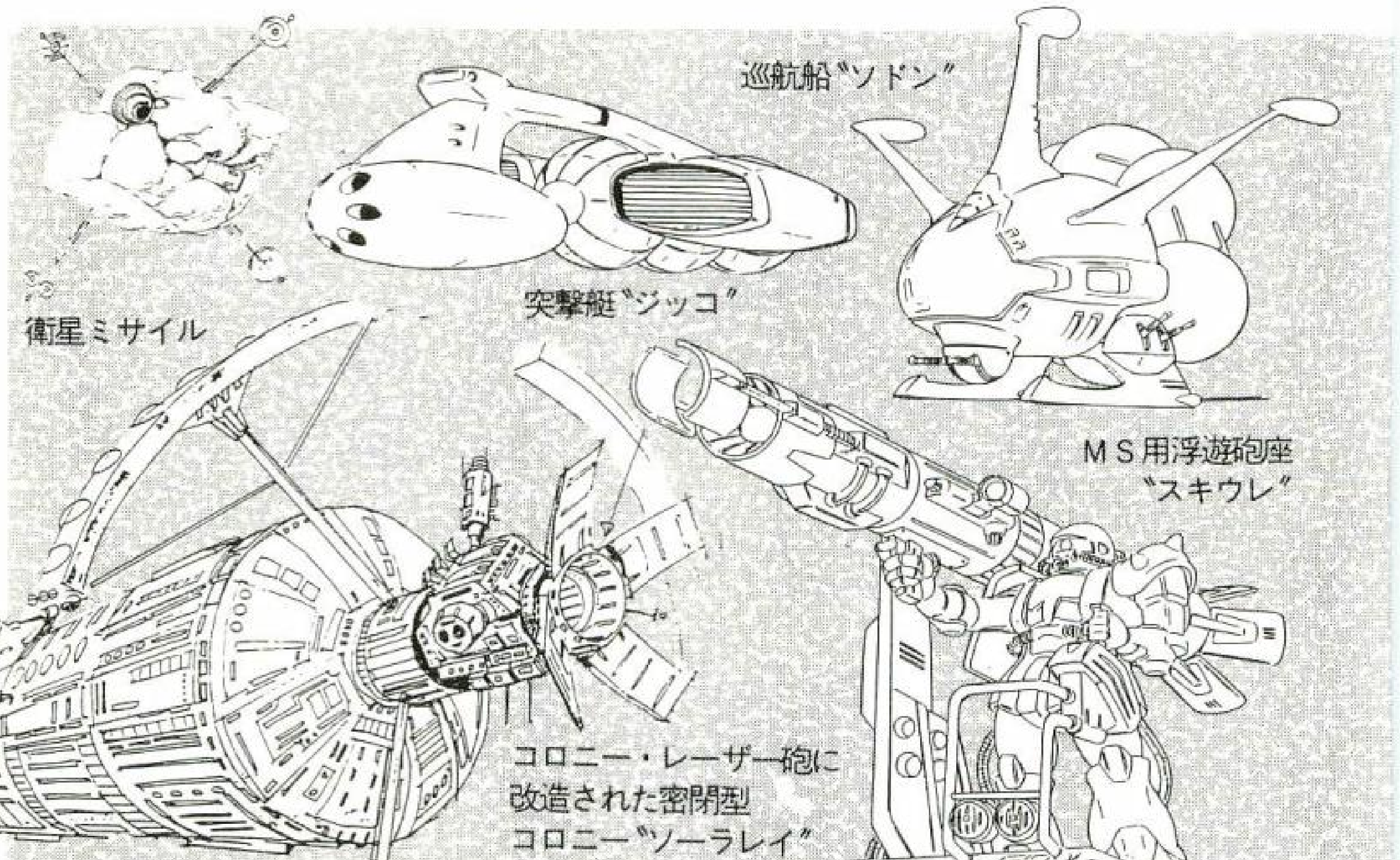
南極条約によって使用が禁じられた核兵器の代わりに2つの超兵器が開発された。

その1つが衛星ミサイルである。これは直径30メートル程度の岩塊にスラスターを装備したという原始的なものだったが、迎撃ができず、直撃すればマゼラン級戦艦すら撃沈できた。

もう1つが究極兵器と呼ばれるソーラ・レイだ。これは密閉型コロニー1基をレーザー砲にしてしまうというもので、直径6・5キロメートルのレーザーがわずか3秒間の照射で連邦軍のレビル艦隊を全滅させた。ただし、エネルギー消費量が膨大で、サイド3の全電力を数時間要し、さらに発射後、冷却のために最低1週間が必要なため、結局1度の使用で終った。



ジオン公国軍前進基地



公国軍の航空戦力

公国軍が地球で使用した航空機は、全て在来機のデータをもとにコンピュータ・シミュレーションして設計された。これはコロニー内では充分な飛行テストができない、サイド3の特別な事情によるものだが、そのためか在来機にない特殊な形状の機体が多い。理論のみが先行した結果、実際の飛行時には、さまざまな欠陥が生じたが、公国軍は宇宙技術を導入することでそれに対処した。

●ガウ

陸上での移動力が低いMS輸送に運用された攻撃空母。3機のMSと8機のドップを搭載可能であった。武装は2連装メガ粒子砲3門で、熱核ジェットエンジンも搭載していた。あまりの重量のため揚力の30パーセントを下方ジェット噴射に頼っていた。

●ドップ

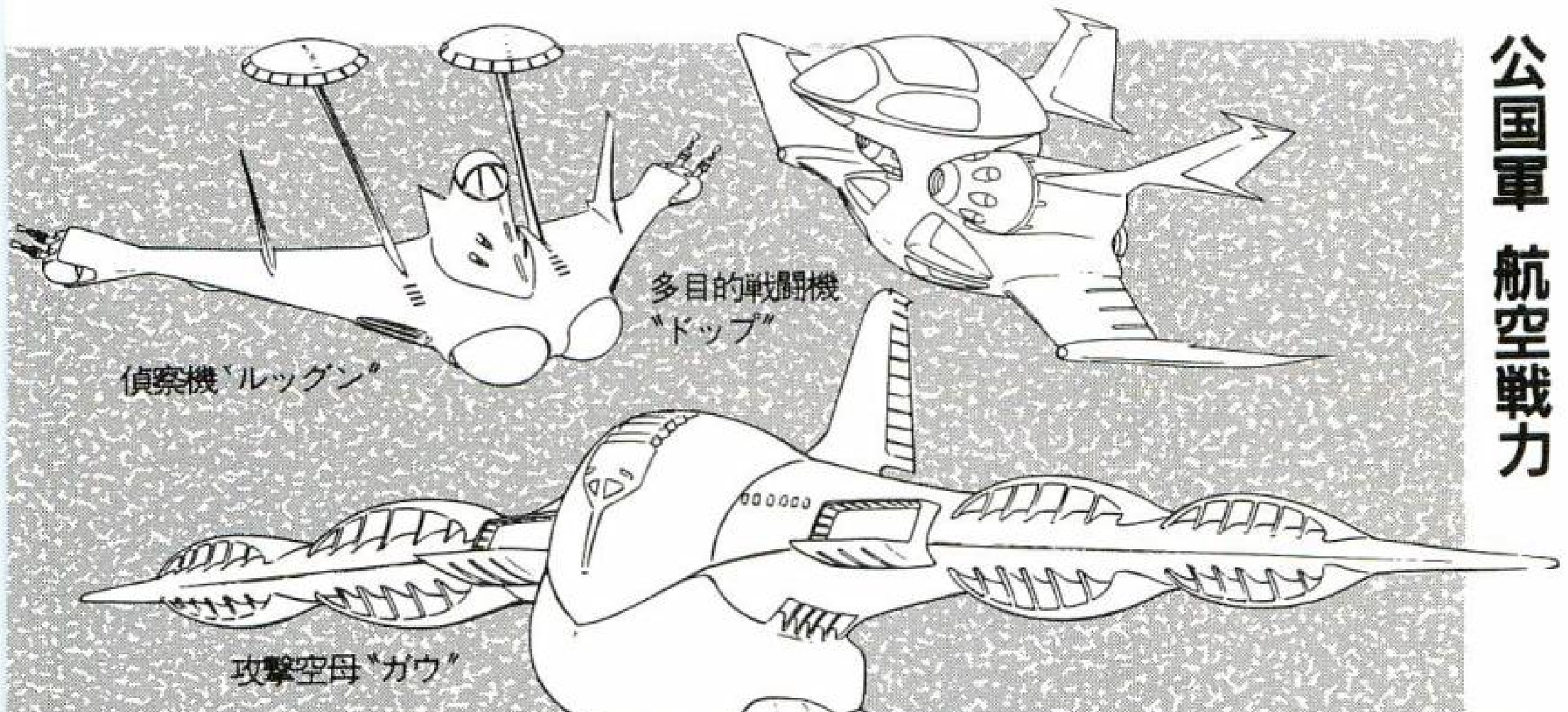
大気圏内戦闘機。運動性を高めるため、MS同様にアポジモーターを併用していた。全長9・2メートル、全幅12・1メートルと小型なのも運動性を重視した結果であった。

●ルッグン

偵察機。円形型レーダー2基を備えているが、ほとんど乗員の視認に頼っていたといわれている。

●ドダイYS

爆撃機として開発されたものだが、熱核ジェットの推力にかなりの余裕があり、MSを乗せて飛行することが可能であった。武装は8連装空対地ミサイルランチャー。



公国軍 航空戦力

公国軍の陸上戦力

公国軍の陸上兵力は、MSに依存していたため種類は少ない。MSの輸送も大半は、ガウにまかせ一部を陸戦艇やトレーラーが受け持っていた。

●ダブデ

陸戦艇。地上走行速度は遅いが、2連装大型砲を2門備えている。連邦軍のビッグレー同様に移動司令部として運用された。

●ギャロップ

小型陸戦艇。火力よりも移動速度やMSの輸送を主眼としていた。熱核ホバーで浮上し、ジェットエンジンで推進する。搭載MSは3機。

●マゼラアタック

公国軍の主力戦車。上部が分離飛行する能力を持つが、175ミリ無反動砲の精度が極端に低下するため、戦後の評価悪い。飛行時間も5分程度と短かった。MSの後方支援に用いられた。

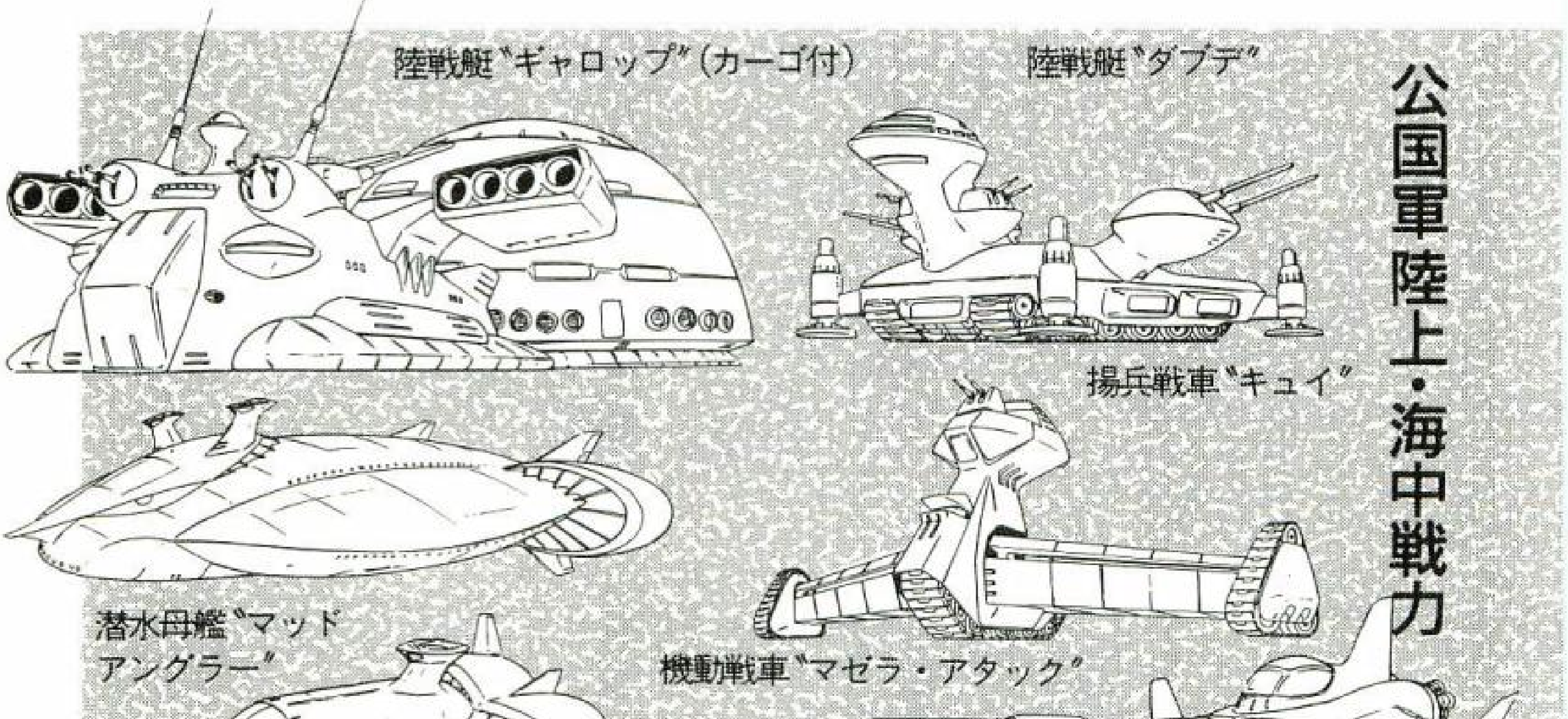
●キュイ

揚陸戦車。パーソナルジェットを装備した歩兵を輸送する目的で作られたが、はっきりいって無駄。

☆

海中戦力に関しても、ほとんどを水陸両用MSに頼っていた。マッドアングラー級、ユーコン級も連邦軍製潜水艦を改装して使用している。改装点は、大陸間弾頭弾のスペースを水陸両用MSの格納庫としたことで、ユーコン級でMSM-03ゴックを3機、MSM-07ズゴックを1機搭載できた。

公国軍陸上・海中戦力



ガンダム・オフィシャル・レポート、3

機動兵器

Mobile Weapons

U.C0079～0080

汎用モビルスーツ

MSの駆動系は流体パルスシステムを採用している。これは核融合炉から発生したエネルギーをパルス・コンバータでパルス状圧力に変換し、流体チューブによって各部のアクチュエータに伝達される。MS－06は流体チューブを数千本束ねた動力パイプを部分的に露出させている。

冷却システムは、He（ヘリウム）を冷却剤に使用し、推進時に放出してしまう。陸戦用のJ型は空冷式ラジェータを併用しているため、冷却剤の量は少なくてすむ。

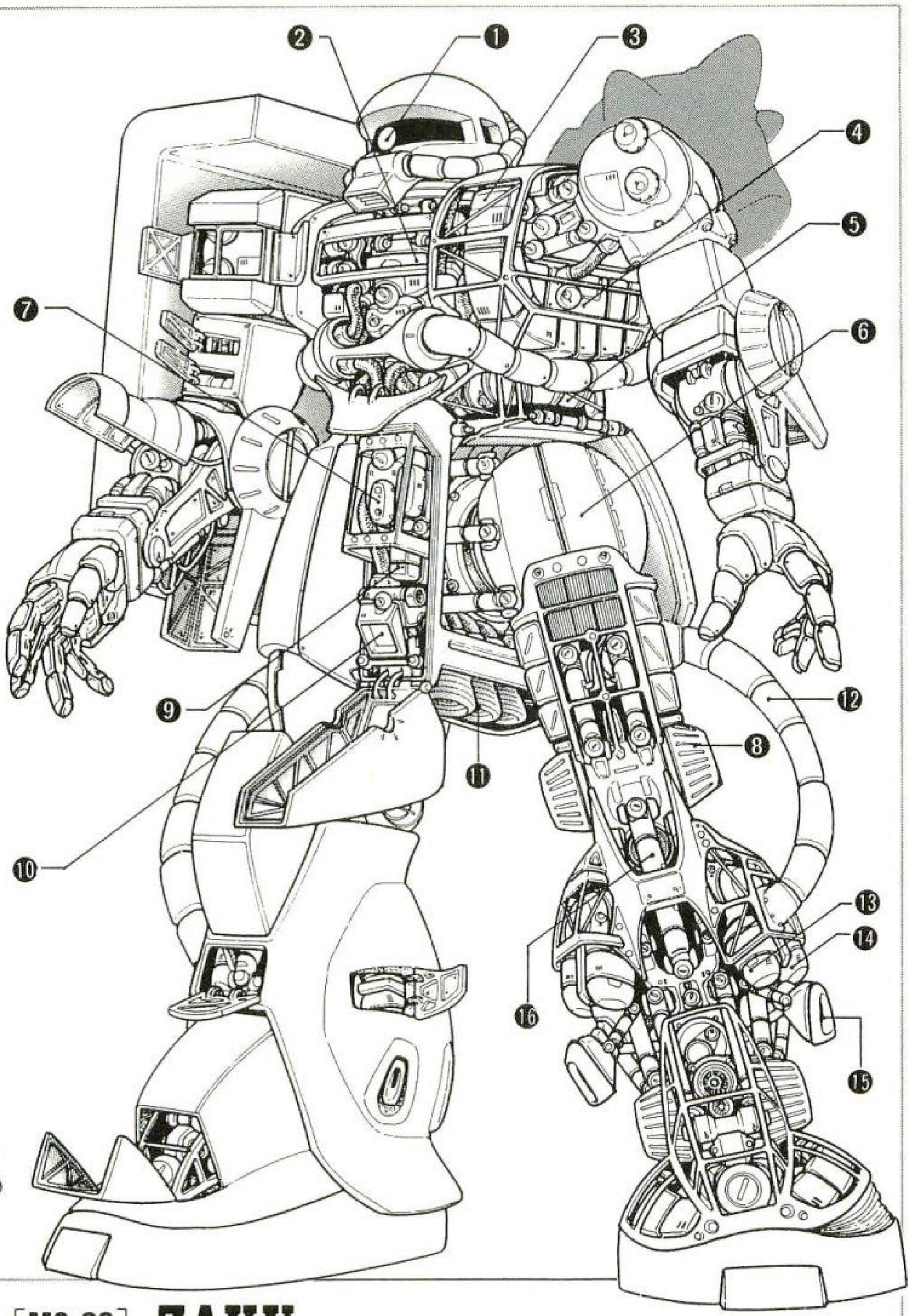
推進システムは、化学燃料ロケットで、MS－09以降は熱核ジェット、もしくは熱核ロケットが採用されている。後期の機種ほどロケットモーターの性能は向上し、最大推力及びCMP（戦闘最大出力）時間はよくなっていった。

また、姿勢制御用のアポジモーターは機種によって異なるが、6～12基搭載されている。複雑な動きを可能とするMSとしては少なく思われがちだが、各間接の自由度が高く、四肢を動かすことによって質量移動させ、姿勢制御を行っているため、アポジモーターは少なくてすむのだ。

装甲は公国軍の場合、チタン（アーマー）系の超硬合金による多重空（スペースド）間装甲で、初期型であるMS－06Cは、その装甲の隙間に放射線遮断液が充塡されている。これは核弾頭のバズーカを使用することから用意された対放射線対策だが、南極条約の締結後は、より耐久度が高く、軽量な装甲が求められた。

探知システムは、モノアイに組み込まれたレーザー及び赤外線センサーで、ミノフスキー粒子散布下であっても、正確な射撃が可能であった。また一応レーダーも装備されていたが、反対にミノフスキー粒子の濃度をチェックするために用いていたといわれる。（濃度が薄い空域ではMSは不利であった）メインカメラは首の回転を含めて左右薬2 60度の走査が可能で、機種によっては上下の旋回機能もあった。また、モノアイだけでは死角が多いため、機体の各部に10数基のサブカメラが設置されていた。

以上が公国軍製汎用MSの構造概念である。連邦軍製MSも構造的には大きな違いはない。



イラスト／星野秀記

[MS-06] ZAKU

【各部名称】❶モノアイ❷コクピットブロック❸補助装甲❹バッテリーパック❺超小型核融合炉❻三自由度アクチュエータ❼ジャイロバランサー❽ロータリーアクチュエータ❾燃料電池❿サブカメラ⓫スラスターノズル⓬動力パイプ⓭H2タンク⓮O2タンク⓯アポジモーター⓰リニア・アクチュエータ

Mobile Weapon

水陸両用モビルスーツ

水陸両用MSは陸戦用機などと比べ、汎用機と構造が大きく異なっている。機体の形状は突起物が少なく、全体的に流線形になっている。これは水の抵抗を少なくするためだ。MSM－03ゴックは水中航行時には腕部と脚部を格納し、さらに抵抗軽減をはかっている。腕部のマニピュレータは、伸縮式のフレキシブルアームで、多重関節構造だ。

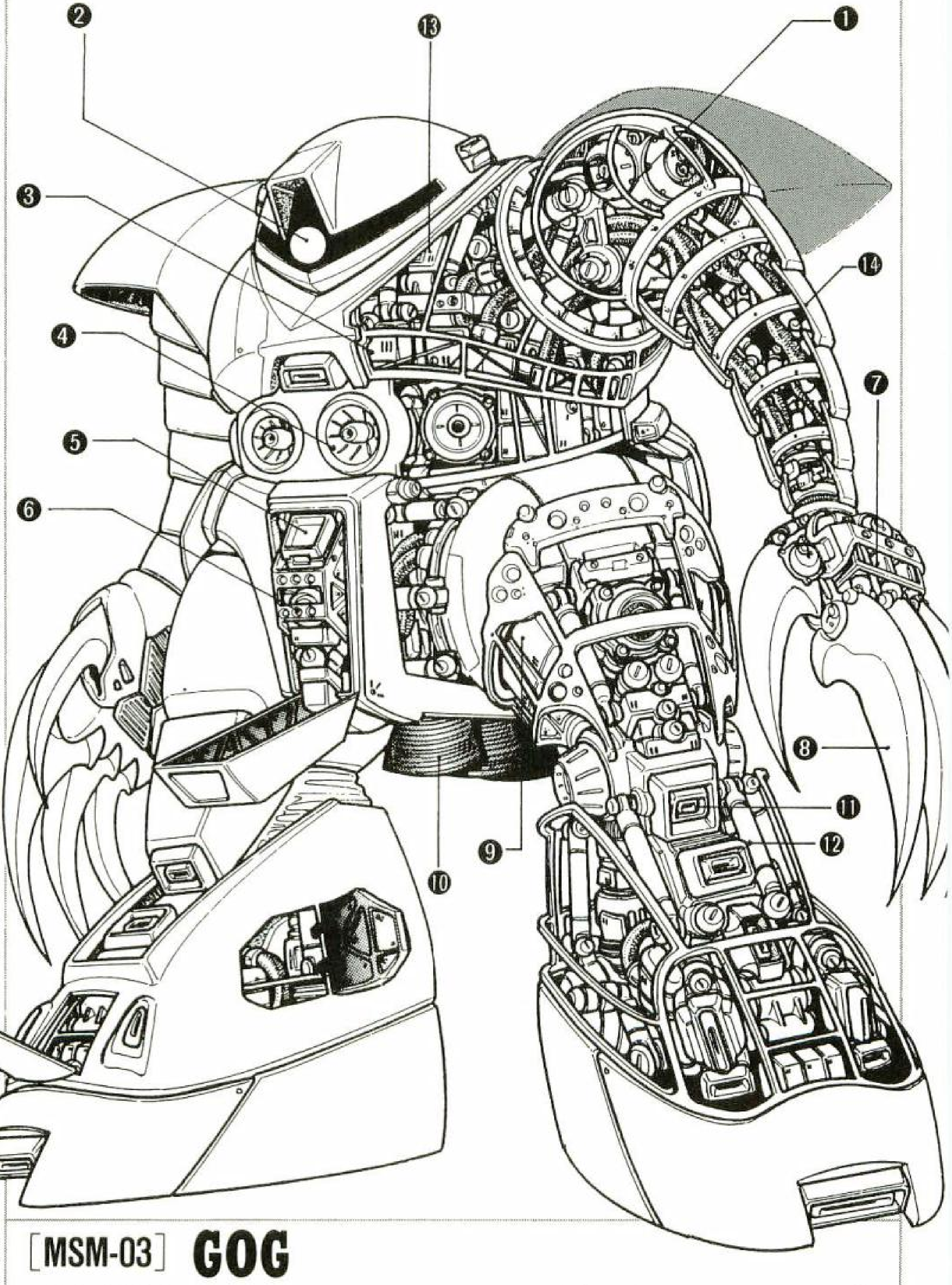
核融合炉は汎用機に比べ大型で出力も高い。これは冷却が機外の水を冷却水として吸入する水冷ラジェータを採用しているためだ。ただし、陸戦時には機内のバラストタンクに取り込んだ水を使っているため、1～2時間しか活動できない。だが、その代わり核融合炉の大出力によってメガ粒子砲を稼動することができる。MSM－03は腹部にメガ粒子砲を2門搭載している。エネルギーCAP技術を応用せずにMSにビーム兵器を搭載した初めての機体だった。

推進システムは、熱核水流ジェットである。航続距離は極めて長く、作戦行動半径は水中行動が可能ならば陸戦用機とは比べものにならないほど広かった。また、化学燃料ロケットを陸戦時のジャンプ用に装備するが、陸上での運動性は陸戦用機に劣っていた。MSM－07ズゴックは、高出力メガ粒子砲を両腕に装備しており、ビーム集束度も高く、低空で飛ぶ航空機を海上から撃墜した例も多く見られる。しかし、最も特異な機体は、MSM－10ゾックである。頭頂部に大型フォノンメーザー砲、両肩前後に計8門の偏向メガ粒子砲を搭載するという砲撃戦主体の超重MSだった。(水陸両用MSには、MSM－04アッガイもあったが、MS－06ザクIIの低出力核融合炉を流用しているため、メガ粒子砲を稼動させる出力はなく、主砲はロケット弾ランチャーであった)

武装は前出の通りメガ粒子砲が主砲となっているが、機種によって性能にバラつきがあった。MSM－03は偏向メガ粒子砲で稼動に要する出力は高かったが、MS用バズーカ弾程度の威力しかなかった。MSM－07ズゴックは、高出力メガ粒子砲を両腕に装備しており、ビーム集束度も高く、低空で飛ぶ航空機を海上から撃墜した例も多く見られる。しかし、最も特異な機体は、MSM－10ゾックである。頭頂部に大型フォノンメーザー砲、両肩前後に計8門の偏向メガ粒子砲を搭載するという砲撃戦主体の超重MSだった。(水陸両用MSには、MSM－04アッガイもあったが、MS－06ザクIIの低出力核融合炉を流用しているため、メガ粒子砲を稼動させる出力はなく、主砲はロケット弾ランチャーであった)

また、水陸両用MSの共通の武装はアイアンネイルと呼ばれる格闘戦用の爪である。アクチュエータのパワーが高く超硬合金製の爪は、厚い空母の艦底をも容易に裂いたといわれる。その他、古典的な魚雷なども搭載されている。

探知システムは、やはりモノアイだが、頭部の回転機構を省略した機種が多く、また、あっても回転範囲が狭いため、大半の機種はカメラのターレットの可動範囲は広く設計されている。



[MSM-03] GOG

【各部名称】❶ロータリーアクチュエータ❷モノアイ（ＪＦＭ－３型）❸コクピットブロック❹偏向メガ粒子砲（2.8ＭＷ３門）❺サブカメラ❻サブソナー（頭部内にメインソナー）❼ハイパワーアクチュエータ❽アイアンネイル❾バラストタンク❿熱核水流ジェットエンジン用ノズル⓫熱交換システム⓬リニアクチュエータ⓭ジャイロバランサー

機動兵器

モビルアーマー

MA（モビルアーマー）は規格が存在しないため、共通項を見い出しにくい兵器である。機種によって運用場所も、サイズもまちまちで性能を比較しにくい。マニピュレータも歩行システムも絶対的条件ではなく、必要としない機種は全て省略されていた。その理由は、この兵器がMSのような汎用性を捨て、それぞれの目的に合わせた機体として開発されたためである。MS開発史で記述されている通り、MAの原型は宇宙戦闘艇であり、MSと違い人型の形状にまったくこだわっていない。NT（ニュータイプ）専用機であるMAN－03ブラウ・ブロやMAN－08エルメスなどは特異な形状だが宇宙艇そのものである。

あえて共通項を掲げるなら、MSをはるかに上回る大型核融合炉を搭載し、水中戦用のMAN－08を除けば、高出力のメガ粒子砲を持ち、さらにそれぞれの運用場所（りょうが）でMSを含む在来兵器を凌駕する機動力を有するという点であろう。もちろん、開発にはMSから生まれた新技術ノウハウが投入され、ある意味でMSの発展版、あるいは大型版といえなくもない。

ではMAの1機種に絞って機体構造を解説しよう。要塞防衛要に開発されたMA－08ビグ・ザムである。この機体は、円盤状の胴体に2本の歩行ユニットが付いている。脚部は質量移動による姿勢制御システムの一部だが、緊急離脱時には切り離すことも可能だ。

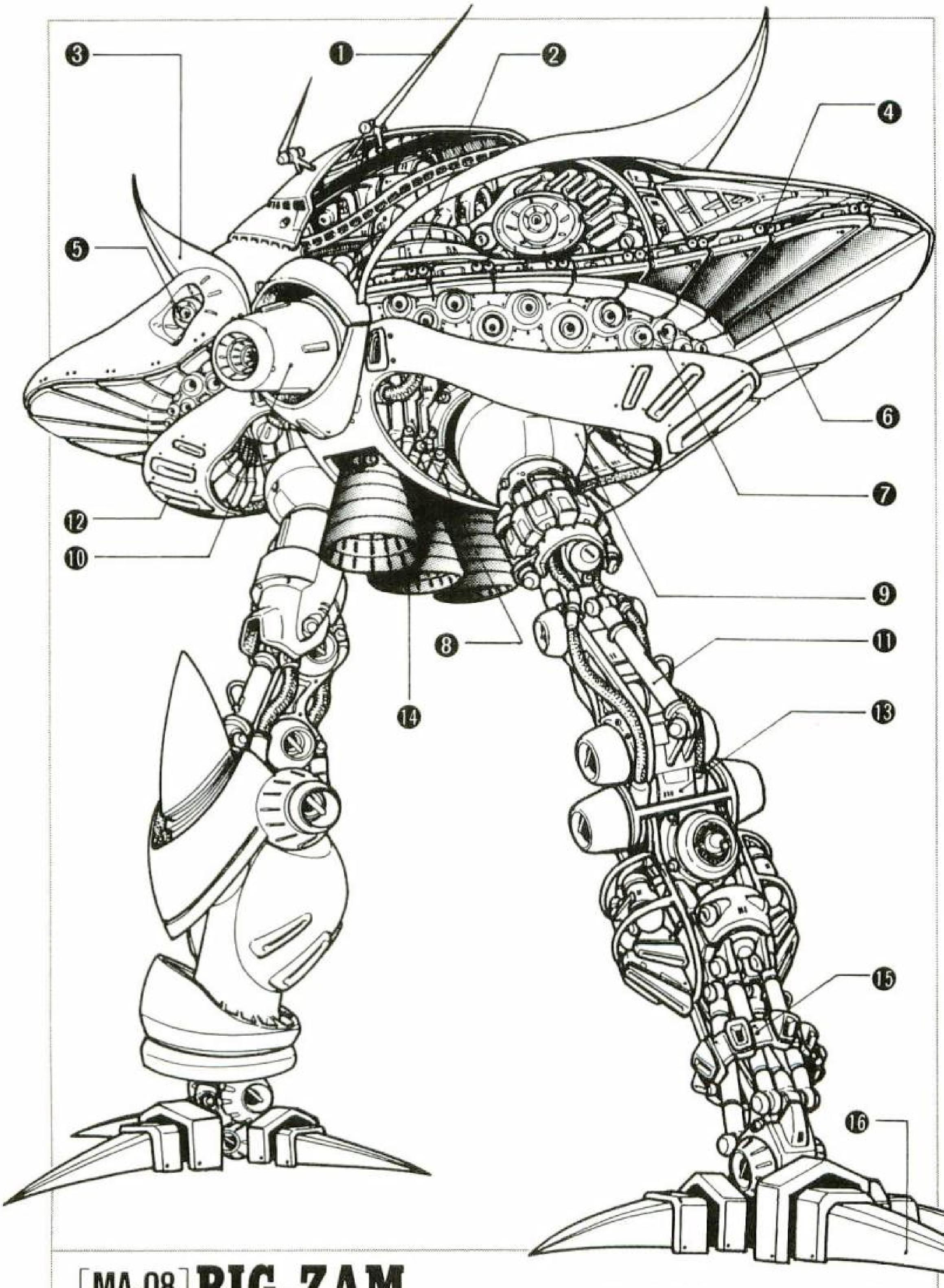
主砲は胴体前面に突き出た大型偏向メガ粒子砲で、一撃でマゼラン級戦艦を撃沈する威力がある。また、胴体全周に対空用偏向メガ粒子砲が並び、MSの接近を拒む。特筆すべき点は、強磁界（エフイールド）により敵のビームを偏向させる防御バリアーを搭載していたことだ。これらの砲を稼動させるために出力35000キロワットの大型核融合炉を4基搭載していた。だが、高出力のメガ粒子砲を全て稼動するには、ミノフスキー物理学を応用したメガコンデンサーに充塡する必要があり、さらに冷却の問題から全力戦闘の継続時間は20分以下であった。

コクピットブロックは胴体上部にあり、操縦手1名、索敵手1名、射撃手1名、計3名を必要としたが、コンピュータの補佐により1名でも戦闘は可能だった。

MA用の装備として、サイコミュ・システムと、それに付随する有線制御式メガ粒子砲、さらに無人随伴攻撃機（ニュータイプ）ビットがある。これらはNT専用MAだけに搭載された新機軸の攻撃システムである。事実上対抗手段がなく、究極兵器とさえいわれた。

なお、MAは宇宙戦用が多かったが、ミノフスキー・クラフトを搭載すれば、大気圏内での運用も充分可能で、MA－08やMSN－02ジオングなどは量産型では陸戦仕様機の開発も検討されていた。また、ミノフスキークラフトを搭載した例としては、MAX－03アッザムという、重移動砲座があった。

Mobile Weapon



[MA-08] BIG-ZAM

【各部名称】❶オールレンジアンテナ❷核融合炉❸放熱板❹全周アポジモーター❺メガ粒子砲（4.8ＭＷ２門）❻ビーム偏向フィールド発生システム❼対空メガ粒子砲（2.1ＭＷ 44門）❽スラスターロケットエンジン❾三自由度アクチュエータ❿メガ粒子砲（13.9ＭＷ１門）⓫リニアアクチュエータ⓬アポジモーター⓭ロータリーアクチュエータ⓮ロケットノズル⓯アポジモーター兼投棄用化学ロケット⓰対空防御ミサイル

先端技術

High-Technology

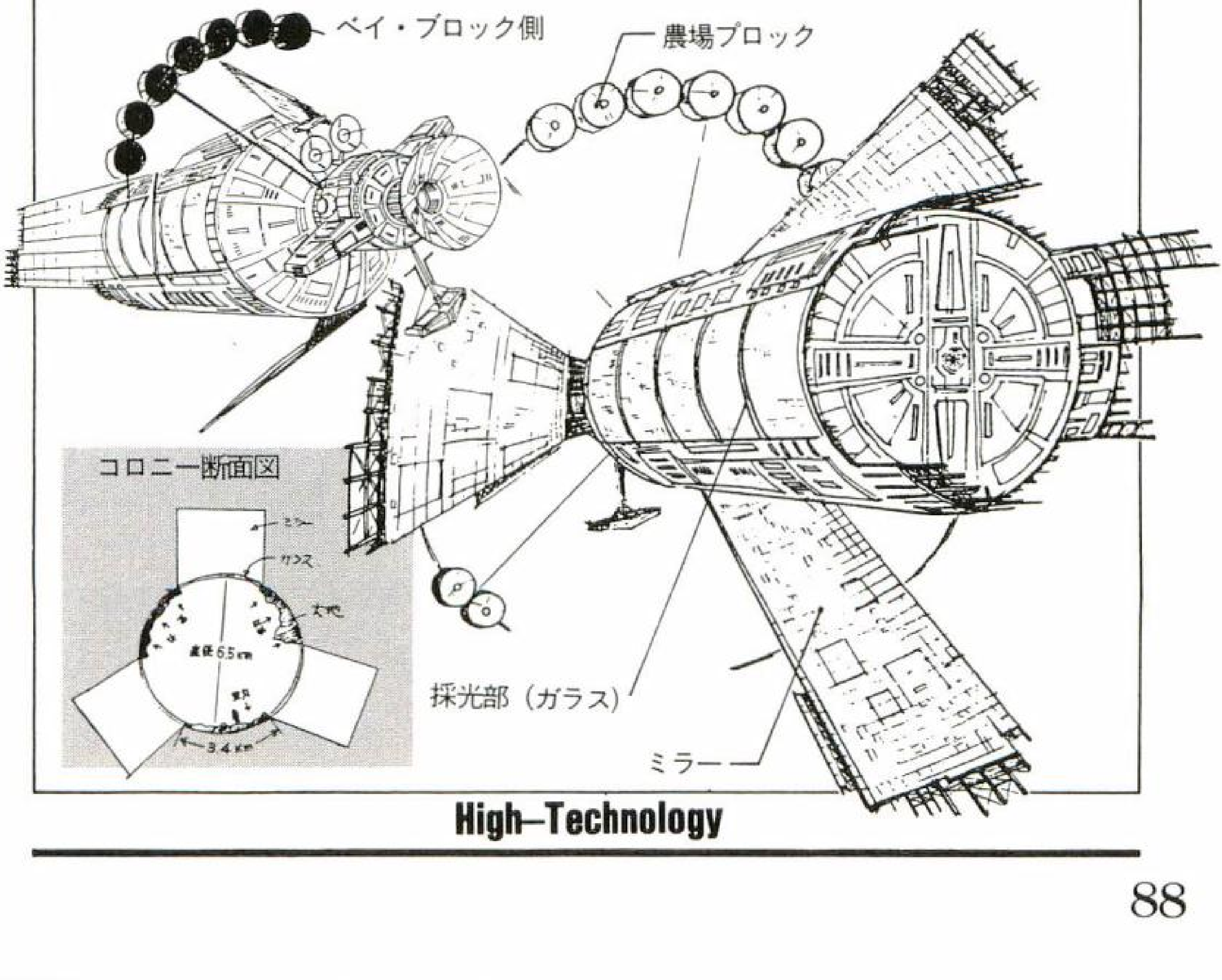
U.C.0001〜0080

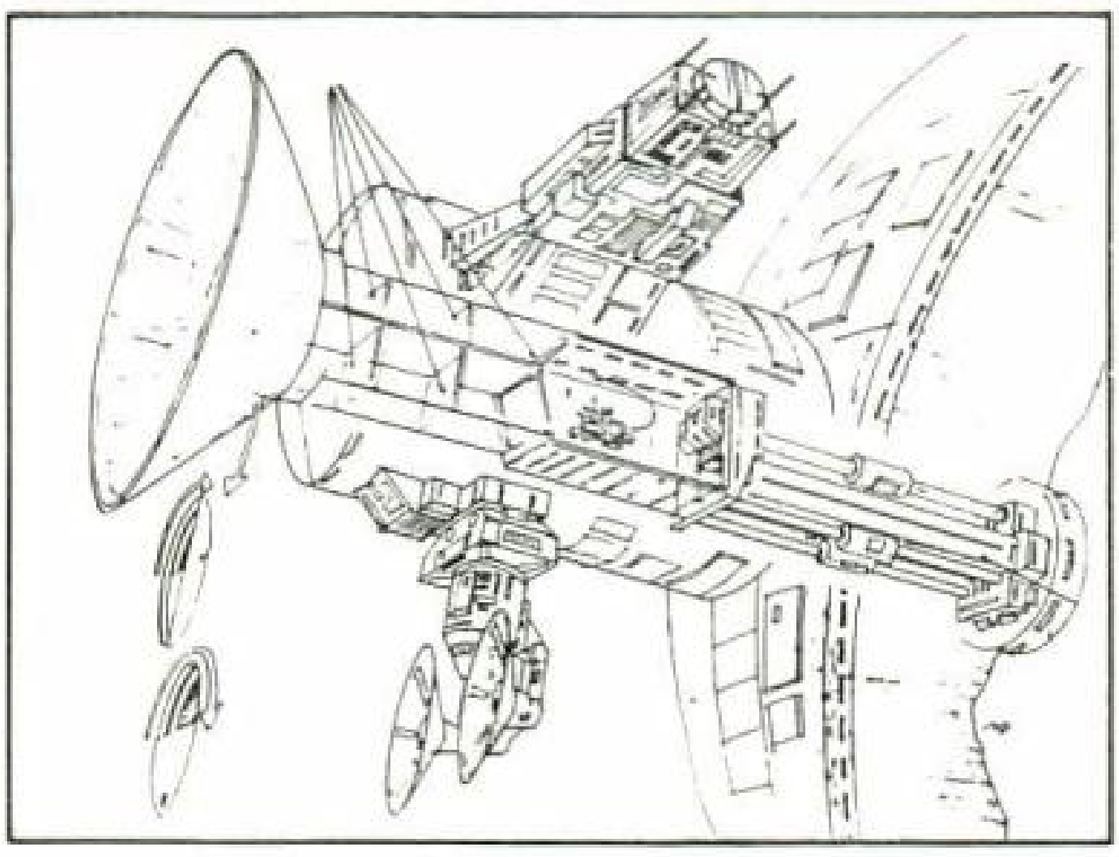
スペースコロニー

宇宙植民地（スペースコロニー）は地球と月のラグランジェ点に建設された人工天体である。一般的な解放型コロニーは、全長32キロメートル、直径6、3キロメートルの円筒の中に3600万人を収容できる人工の居住空間が作られている。円筒には巨大な鏡（ミラー）が付けられ、太陽光を内部に注ぎ込む。コロニーは2分間に1回転して遠心力による人工重力を生み出す。農場ブロックは円筒外に設置されている。

密閉型コロニーは、採光面も鏡もなく、代わりに太陽電池板を周囲に配置し、マイクロウェーブに変換されたエネルギーを再び電気にして、円筒内に設置された人工太陽を稼動させている。この型は開

開放型スペースコロニー





放型に比べて建設コストがかかるが、採光面がないため、敷地面積を多く取れ、収容人数が倍になる。

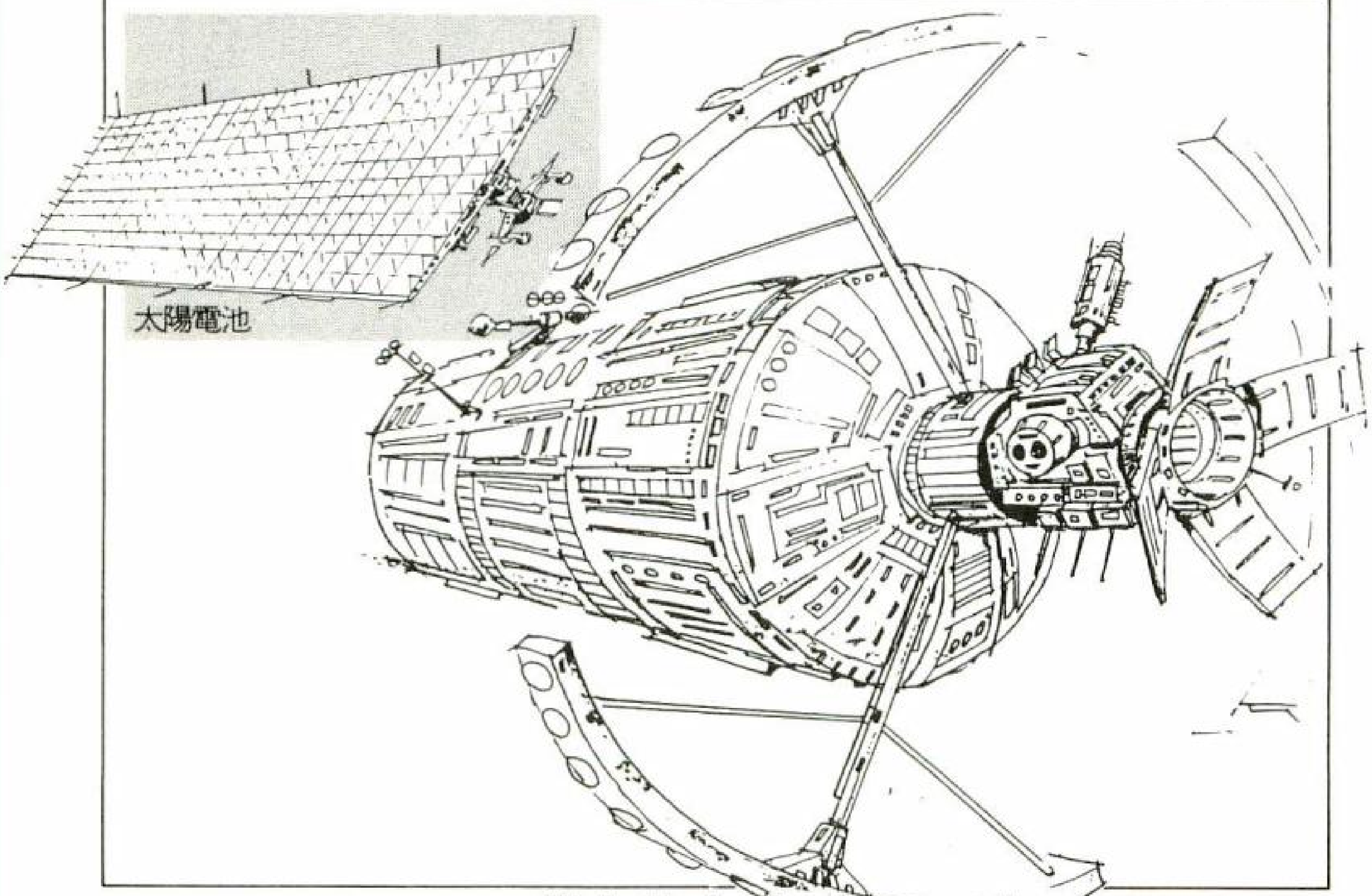
両型共に太陽光のエネルギーに依存した自給自足が可能だ。1コロニーは1バンチとして36～40バンチでサイドには13億昇格する。1サイドには建設が中人が居住する。

コロニーの建設は月の資源が使用される。月には原材料となる岩塊をマスドライバー（電磁カタパルト）によって建設宙域まで打ち出される。また、サイド7以降の建設のため小惑星帯から核パルス推進によって直径680キロメートルの小惑星が運ばれ、資源用の衛星ルナIIとなった。

なお、サイド7は建設が中断され第1号バンチ（しかも完成していない）のみがあるだけで、正式にはサイドではない。

最後にサイドの名称を記す。サイド1／ザーン、サイド2／ハッチ、サイド3／ムンゾ、サイド4／ムーア、サイド5／ルウム、サイド6／リア、サイド7／ノア。なお、コロニーごとに個有名がつけられる場合もある。㊟サイド1第1号バンチ→シャングリラ。

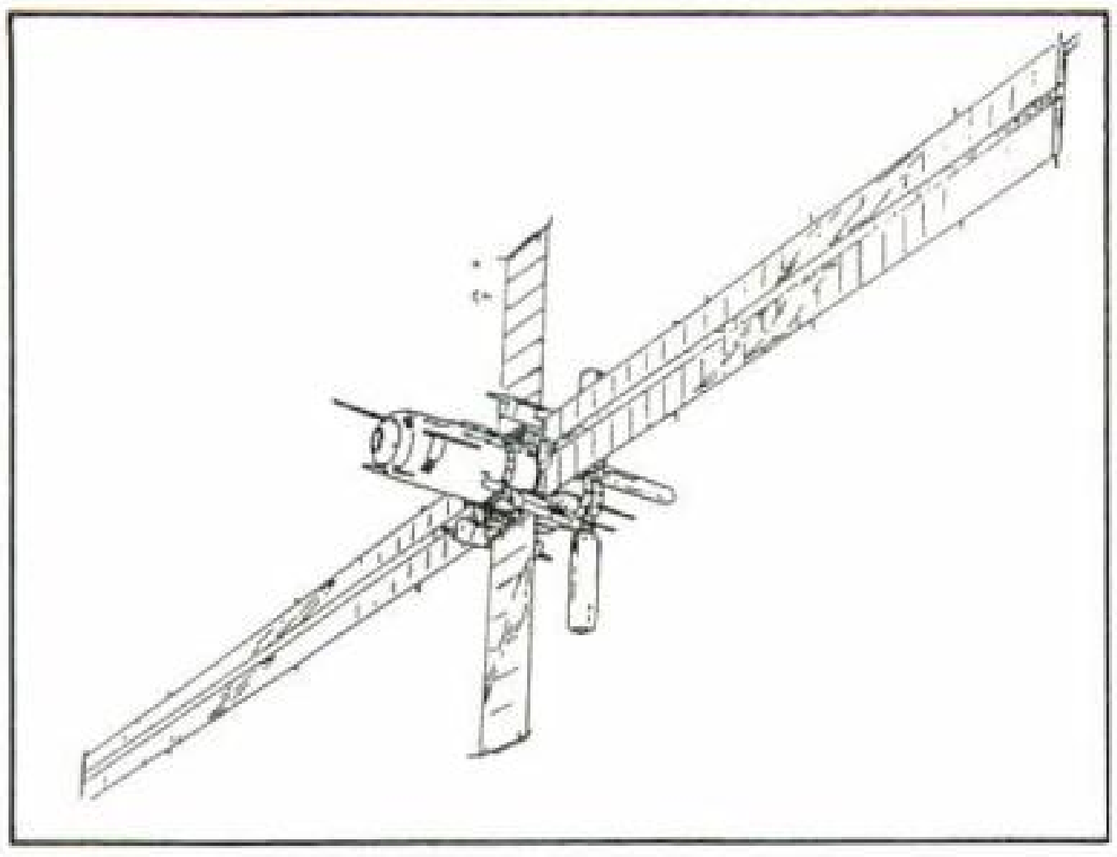
密閉型スペースコロニー



太陽発電衛星

地球上で消費される電力の大半は、衛星軌道上に設置された太陽発電衛星によってまかなわれている。太陽光を太陽電池によって直接電気エネルギーに変え、マイクロウェーブに転換し地上の受信施設に送り、再び電力に変えるというシステムだ。

太陽発電衛星



ニュータイプ

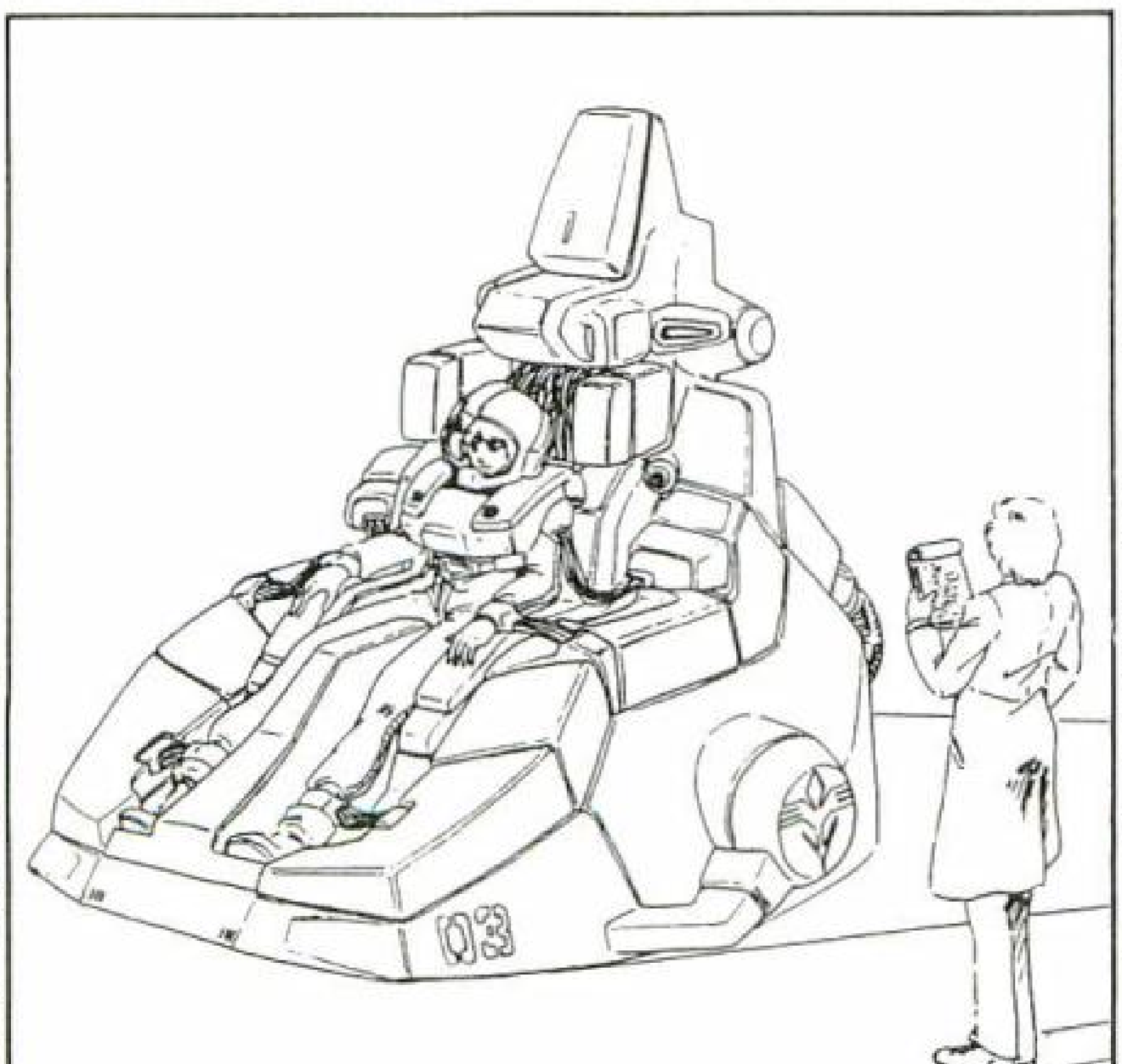
人が宇宙で生活するスペースノイドとなった時、宇宙空間での生活に適応するための柔軟な思考力や、より広い認識力が必要となる。このような宇宙への対応した人類の進化を予言したのが、ジオン・ズム・ダイクンである。それゆえ、彼は人類の宇宙への移住を提唱した。

具体的にはニュータイプとは相手の意志や感情を認識する洞察力が常人よりも優れている人々を指す。ジオン公国ではMSパイロットの中に異常に高い戦績、生還率を持つ者が確認され、フラナガン機関でその特性が科学的に証明された。戦闘時の緊張が引き金となって、能力が異常に高くなり、一種の予知も行われる。

サイコミュ

サイコミュは正式にはサイコ・コミュニケーターという。フラナガン機関がニュータイプの研究中に被験者の脳から感応波が検出されたことからこの装置の開発が始まった。

感応波（サイウェーブ）を原理としてはこの感応波をコンピュータ言語に翻訳するインターフェイスである。考えたことをダイレクトにマシンへ伝達するため、反応速度が極めて速く、試験的にMAに搭載した結果、従来の操縦方式よりも機体を円滑に操ることができた。また、同時に多数の機器を操作可能で、有線制御式メガ粒子砲と無線誘導方式の無人随伴攻撃機、ビットを多数操り、オールレンジ（全周囲）攻撃が可能となる。



サイコミュ連動システム〝据え置き型試作第3号機〟

イラスト／星野秀記

ミノフスキー粒子

この粒子は静止質量がほとんどゼロの正か負に帯電した素粒子で、立方格子状に整列し、フィールドを形成するという特性を持つ。発見者はミノフスキー物理学の祖、トレノフ・Y・ミノフスキーである。ミノフスキー物理学は、ミノフスキー粒子の物理学とその応用技術で、核融合炉の実用化、電波妨害、メガ粒子砲、反重力（ミノフスキー・クラフト）など軍事技術の発展を促した。

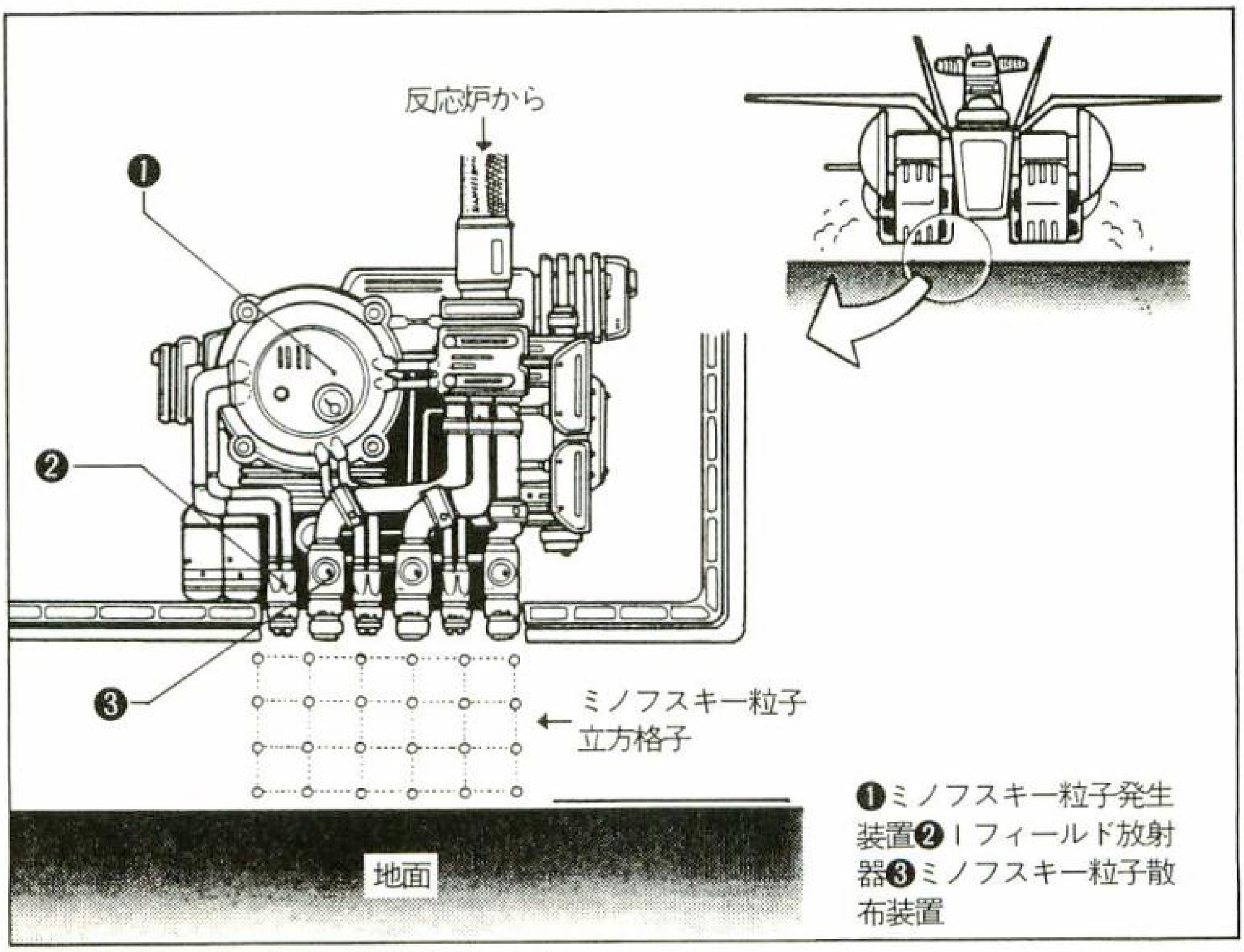
サイド3のミノフスキー物理学会で応用技術が研究されたが、0072年ミノフスキー氏は戦争を防止するため、連邦に亡命し、その技術を伝え、さらにエネルギーCAP技術などを開発した。

ミノフスキー・クラフト

ミノフスキー物理学の応用技術による暫定的反重力システムである。ミノフスキー粒子が形成する立方格子の場（Iフィールド）に対する反発場によって空中浮揚を可能とする。兵器に使用された例としては公国軍のMAX-01、3アッザムと連邦軍の強襲揚陸艦ホワイトベースがある。まだ、完成された技術ではなく、通常の推進システムの併用が不可欠である。

ホワイトベースはこの反重力推進システムにより、単独で大気圏突入・離脱が可能であった。

システムの欠点としては、ミノフスキー粒子発生装置が小型化できないことでMSクラスの機体では搭載不可能だ。



ミノフスキー・ジェネレータ（クラフト用）

ビーム兵器

従来の荷電粒子兵器（PBW;Particle Beam Weapon）に変わる強力な新兵器が、ミノフスキー粒子兵器（MBW;Minovsky Beam Weapon）である。

MBWにはメガ粒子砲、ビームサーベル、電波攪乱、ミノフスキークラフト等々多数知られているが、中でも最も典型的な攻撃兵器であるメガ粒子砲について、その原理を構造と照らし合わせながら解説すると、次のようになる。

メガ粒子砲は大別して発生区間、蓄積区間、成長区間、射出区間の部分から成り、その発射過程を構造と対応させながら解説すると次のようになる。

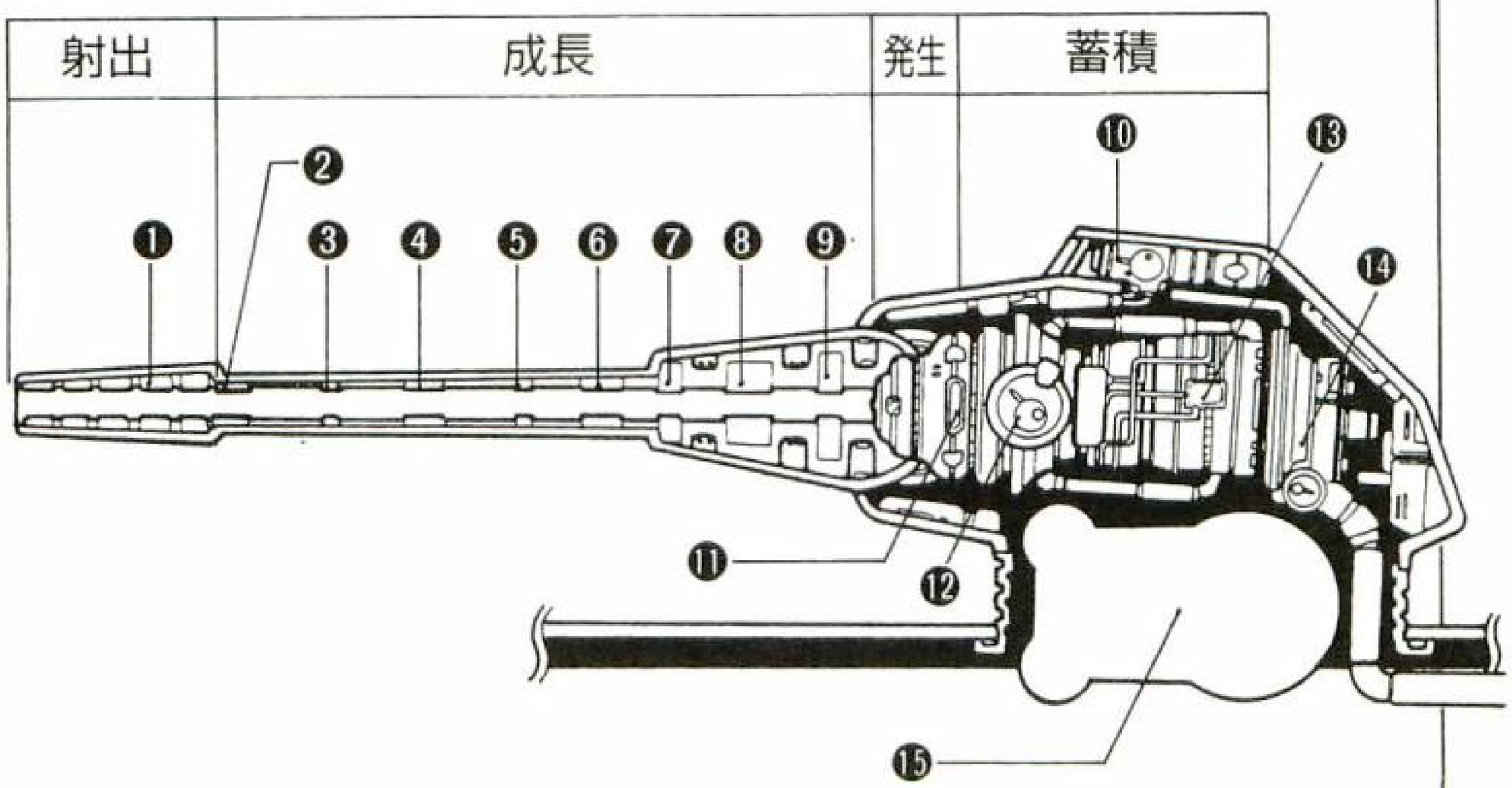
発射の信号が、本体CPMから腕部のコネクタを通してビーム砲内CPMに送られると、エネルギーコンデンサで強力なIフィールドにより、発生区間でミノフスキー粒子は圧縮され縮退・融合してメガ粒子となる。その際に、その質量の一部が運動エネルギーに変化する。

高エネルギー状態となったメガ粒子は蓄積区間へ送られ一定値になるまで貯えられる。その値を越えたメガ粒子はビーム発生装置へ送られ開放される。

その結果ビーム状態となったメガ粒子は、成長区間で数個の加速リングと収束リングを通過する過程で、到達地点で最大の破壊力を発揮できるように調整されていく。

そして発射区間で弾道が安定するよう調整され目標に向

艦載メガ粒子砲（ムサイ・タイプ）



❶ガイドライン❷第1加速リング❸第1収束リング❹第2加速リング❺第2収束リング❻第3加速リング❼第3収束リング❽第4加速リング❾第4収束リング❿照準用光学センサー⓫ビーム発生装置⓬メガ粒子発生装置⓭エネルギー：コンデンサー⓮動力コネクター⓯砲塔動力系

けて発射される。
これがメガ粒子砲の構造原理概論である。
このようなしくみを持つメガ粒子砲は、種々の大掛かりな装置を必要とするため、エネルギーCAP(Energy Capacitor)が開発されるまでは戦艦の主砲などにしか用いることができなかった。
エネルギーCAPとは、Iフィールドにより圧縮され高エネルギー化したミノフスキー粒子を発生させるエネルギーコンデンサーを省略でき、MSに装備しうる大きさまで小型軽量化が可能となった。
ちなみに、ミノフスキー粒子をメガ粒子に縮退させるためのエネルギーは主部のコネクターを通して本体より供給されるシステムをとっている。
ビームサーベルやビームジャベリンの原理は、メガ粒子の直接放出時に出る熱エネルギーを用いたものである。これにも小型メガ粒子砲と同様に、エネルギーCAPが用いられ同一原理でメガ粒子を発生している。

対ビーム・バリア

ミノフスキー粒子の極性を応用した防御兵器。機体の周囲に強力なIフィールドを発生し、それによってビームの弾道を変え、機体への直撃を回避するものだ。
膨大なエネルギーと大規模な装置を必要とするため、あまり広くは用られていない。

MS用メガ粒子砲（RX－78タイプ）

❶ガイドライン❷第1加速リング❸第1収束リング❹第2加速リング❺第2収束リング❻第3加速リング❼第3収束リング❽照準用光学センサー❾ビーム発生装置❿メガ粒子発生装置⓫エネルギーCAP⓬補助動力系コネクター⓭制御系コネクター⓮補助センサー⓯補助グリップ駆動用モーター

MS【MS用語辞典③】

9 Mossary

ビット〜モビルスーツ

ビット【Bit】 MAN-08に装備された無人随伴攻撃機。サイコミュと増幅されたニュータイプ・パイロットの感応波によって遠隔操作される。機体内にジェネレータを搭載し、メガ粒子砲を稼動させている。

プロペラントタンク【propellant tank】 燃料（推進剤）タンクのこと。ここでは外部取り付け式のものをさす。主にMSの行動範囲や戦闘時間を延長するため付加的に装備される。タンクは2層構造で推進剤と冷却剤が入っている。

マグネットコーティング【magnet coating】 RX-78-2の駆動系（主にアクチュエータ）の摩擦抵抗を軽減するために施した磁気被膜処理のこと。これによって機体の反応速度は従来の3倍に向上した。

マニピュレータ【manfpulate-】 広義な意味では人工の腕。ここではMSの腕をさす。本来、MSは搭乗者の能力を拡大する宇宙用強化服という概念があった。汎用MSに見られる高い作業性はまさにその具現化といえる。MSのマニピュレータは人間の腕と変わりない動きを再現できると同時に、各所に触覚センサーを備え、コンピュータとの相互フィードバックにより精密作業も可能となった。

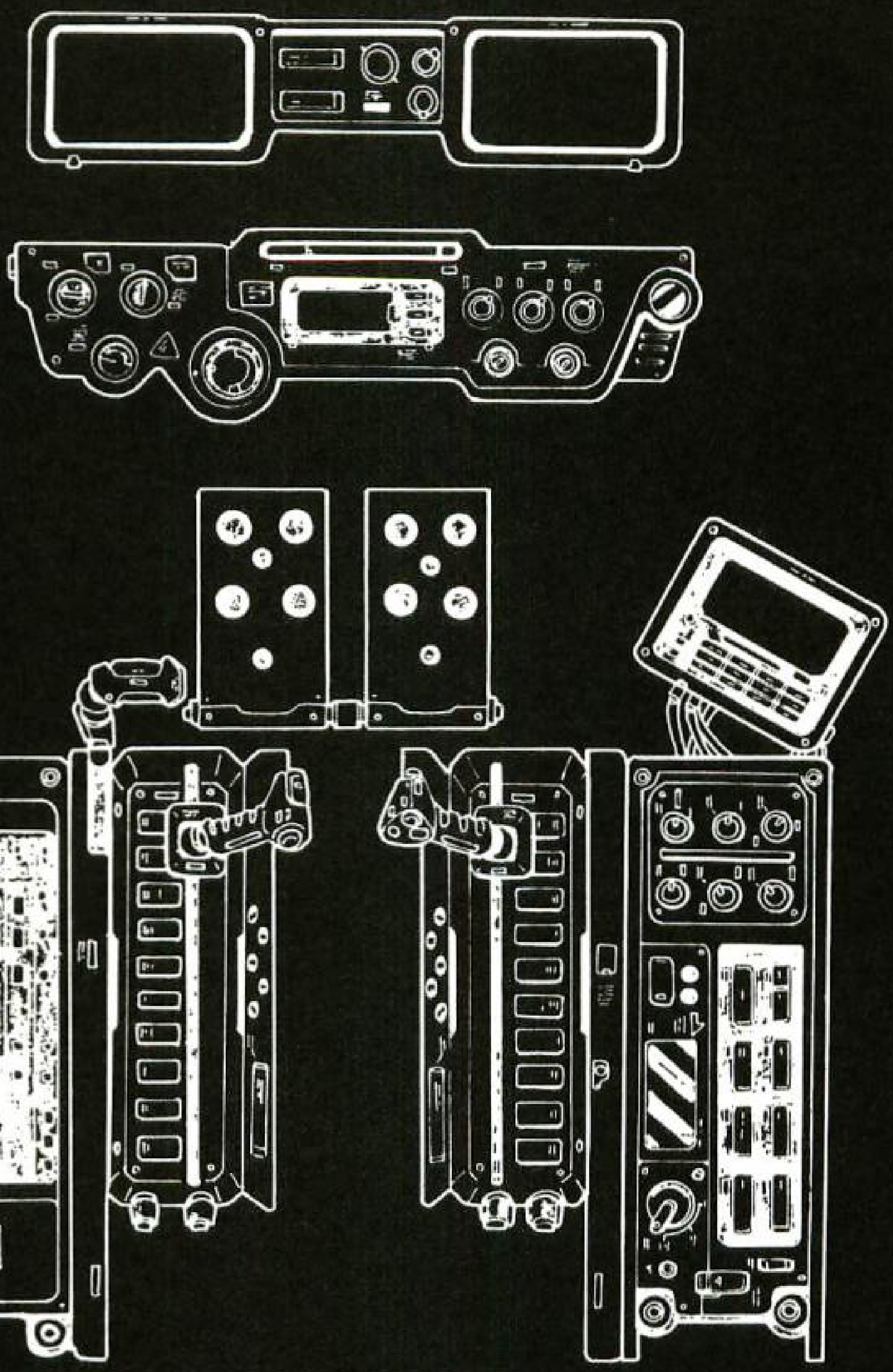
メガ粒子砲【Mega particle beam gun】 この世界のビーム兵器の主流を占める。開戦当時は宇宙艦艇の主砲として用いられていたが、RX-78からMSにも装備可能となった。この兵器の欠点はエネルギー消費量が激しいため、在来砲のような連射ができず、また一度炉の出力を落とすと砲の再射撃まで時間がかかるという欠点がある。だが、エネルギーCAP【Energy Capacitor】を採用したビームライフルではその欠点が補われつつある。

⬇P92『メガ粒子砲』

モノアイ【Mono eye】 公国軍製MS、MAのメインカメラ。電子光学カメラを中心にレーザー系、赤外線系センサーを周囲に配した複合センサーである。このモノアイ以外にも外部カメラが機体各所に装備されている。なお、RX-78のメインカメラはツインアイと呼ばれている。

モビルアーマー【Mobile armmer】 ⬇P44『モビルアーマーの登場』

モビルスーツ【Mobile suit】 ⬇P36『モビルスーツの誕生』



MS操縦マニュアル

M.S. Pilot Manual

●このコーナーは正確な意味での"マニュアル"ではない。500とも1000ともいわれるパイロットワークの全てを少ない紙面で説明することは不可能だ。そこで基本的な操縦の概念を伝えるだけにとどまった。だが、それだけでもMSに新たな魅力を憶えるだろう。

Illustration by Hitoshi Hukuchi.

MS操縦マニュアル

1. コンソール解説

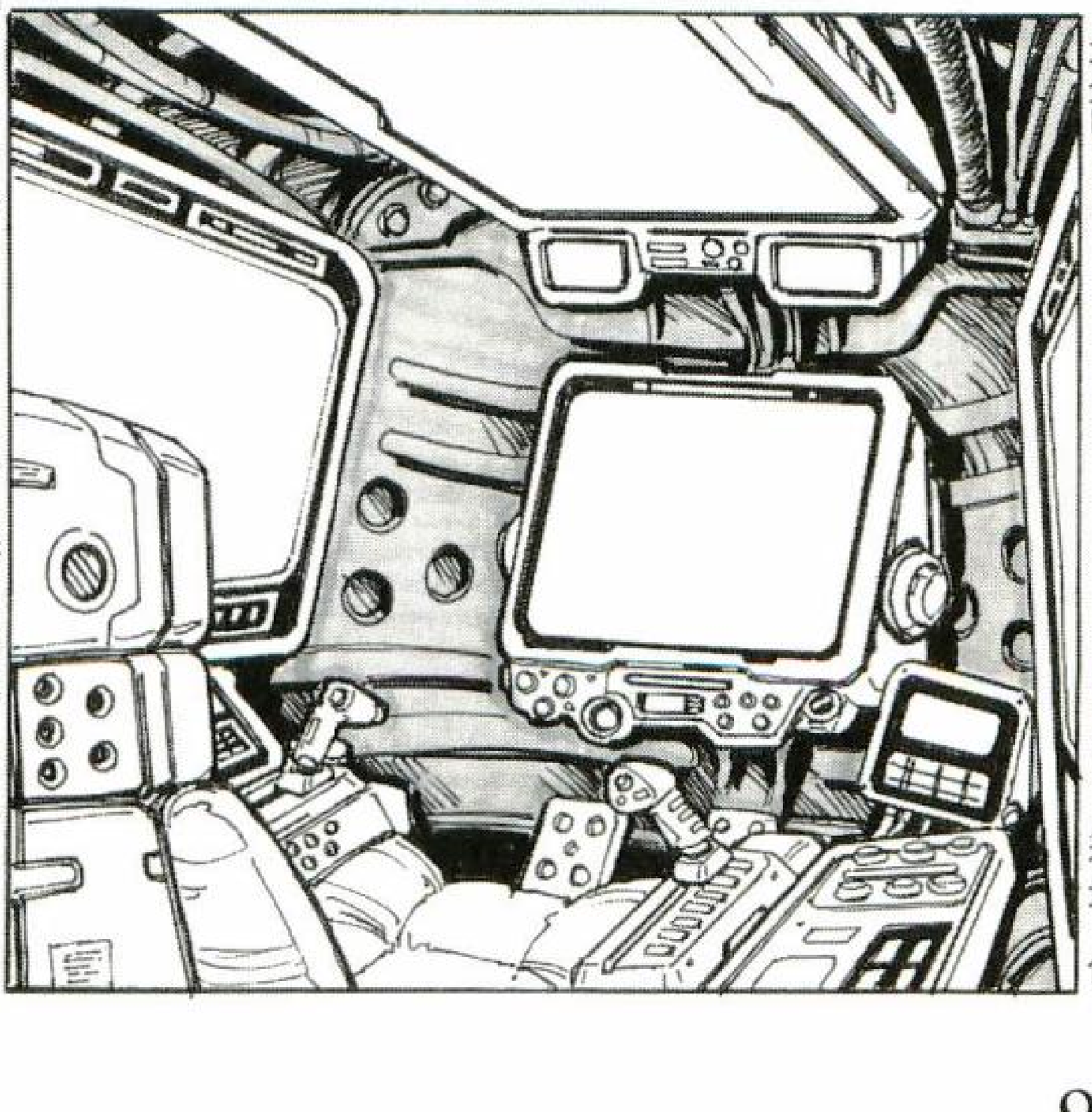
今、君が座っている場所はMS（モビルスーツ）のコックピットだ。機体はジオン公国軍製MS、型式番号MS－14JG、愛称〝ゲルググJ（イエーガー）〟である。まぎれもなく公国軍最新鋭機だ。

君が目の前にしている数々のモニターとコンソールは、第2期生産型MSの共通操縦装置だ。もし、君がこのゲルググを乗りこなすことができるならば、MS－06FザクII、MS－R09IIリック・ドムにも乗れるということだ。

では初めに操縦装置の役割を教えよう。まず、4方向にあるモニター。頭部のモノアイを始めとする機体12ヵ所にあるカメラが機体外部の映像を写し出してくれる。カメラの視点はMSの頭に設定されているから、コクピットよりずっと上にあるということだな。通常戦闘の場合は気にしないでよいが、MSとの格闘戦の場合、つい正面にくる敵の武器を避けようとMSの腕を上げてしまう。間違えるなよ。君のいる位置は頭より下なんだ。最も重要な場所はコクピットだということを忘れちゃいかんぞ。

トップモニター（頭の上）の下に2つの小さなモニターがある。右が通信用で左が後方警戒用だ。母艦の格納庫内（そら）ならいざ知らず、宇宙に出たらミノフスキー粒子のせいで、近距離でも映像など届きはしない。音声だけでがまんしろ。後方用のモニターは、敵が後方に回り込むと警戒音を出して教えてくれる。機外のカメラを切り換えたい時は、左サイドコンソールの⑭のスイッチを使え。戦闘でカメラが壊れた場合は自動で切り換わるぞ。

次は操縦装置の中で使用頻度が高いスティックとフットペダルだ。まずスティックは機体の飛行方向を制御する役割がある。同時に戦闘時のトリガー、武器セレクターがついている重要な装置だ。フットペダルは右がスロットル、左が逆噴射及びブレーキだ。MSは動作の大半をコンピュータが代行している。従って、基本操縦は戦闘と変らない。このスティックとペダル操作を誤らない限り、小学生でも動かすことはできるぞ。



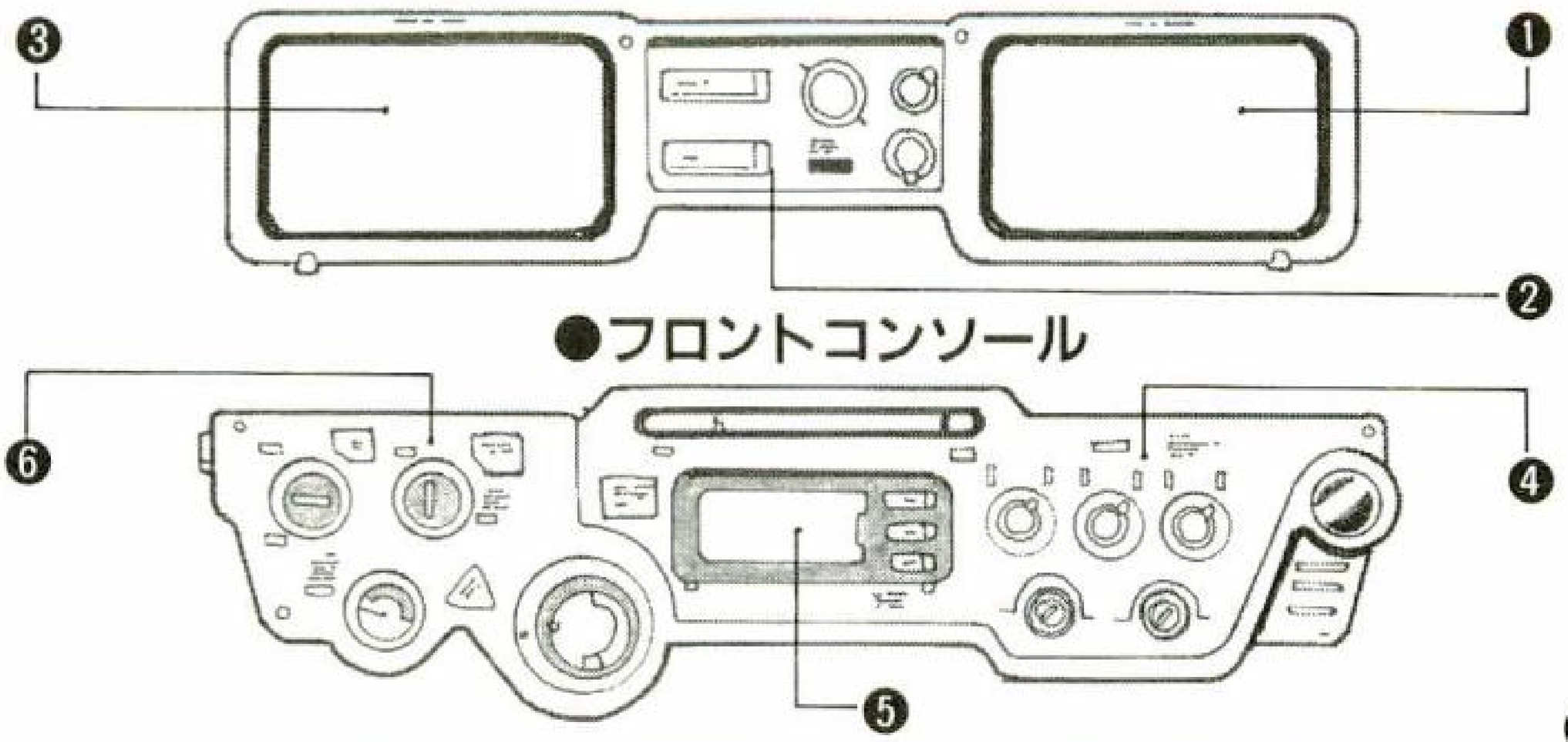
コクピット

イラスト／福地 仁

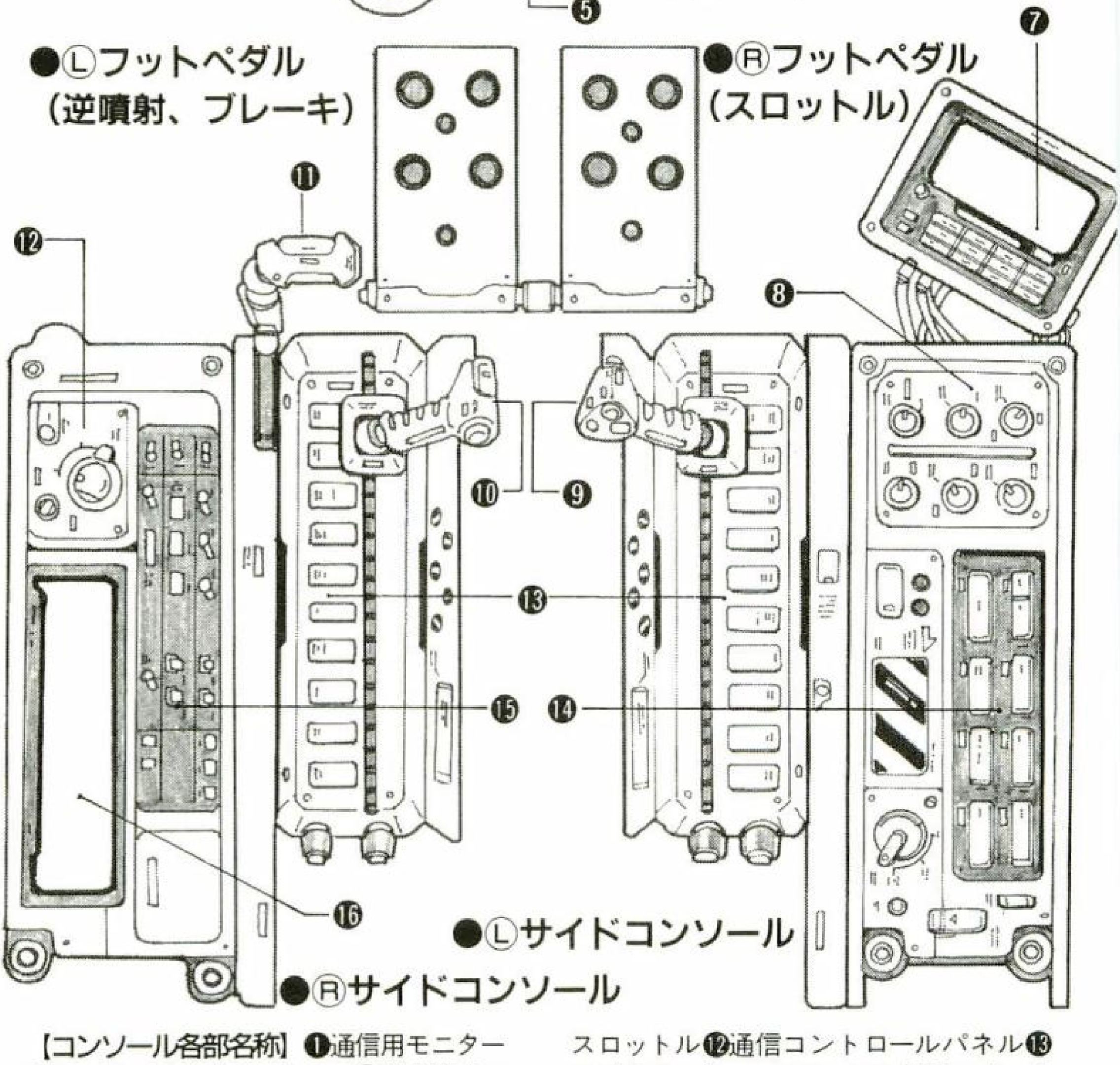
MS.PILOT MANUAL

パネル＆コンソール展開図

●トップコンソール



●フロントコンソール



【コンソール各部名称】❶通信用モニター❷センサーモードセレクター❸後方警戒モニター❹モニター切り換えスイッチ類❺脅威警戒パネル❻ジェネレータ起動系❼インデックス・サブコンソール❽駆動系・燃料系モードセレクター❾Ⓡコントロールスティック❿Ⓛコントロールスティック⓫スロットル⓬通信コントロールパネル⓭アポジモーター・マニュアル超動スイッチ⓮ワーニングモニター⓯外部モニター用モードセレクター⓰予備パネル（機体ごとに異なる）

2. 発進シークエンス

さて君たちには実際にMSを操縦して宇宙に出てもらおう。君の発進は一番最後にする。

☆

よし、君の機体は良好な状態にある。⑧の駆動系モードセレクターを『歩行』に合わせて、右フットペダルをゆっくり踏み込め。機体が前に歩き出す。強く踏むと走り出してしまうぞ。オペレーターの指示に従いカタパルトに向かえ。方向転換はスティックで、止まる時は右ペダルを戻し、左ペダルを踏め。

カタパルトに接続したら、スラスターのアイドリングを開始しろ。⑧の駆動系・燃料系モードを共に『カタパルト射出（シュート）』に合わせ、⑪のスロットルレバーのロックを解除し、アイドリング位置（ポジション）に合わせる。この段階でもう一度ワーニングモニターをチェックしろ。燃料系はアイドリング状態でないとチェックが充分ではないぞ。

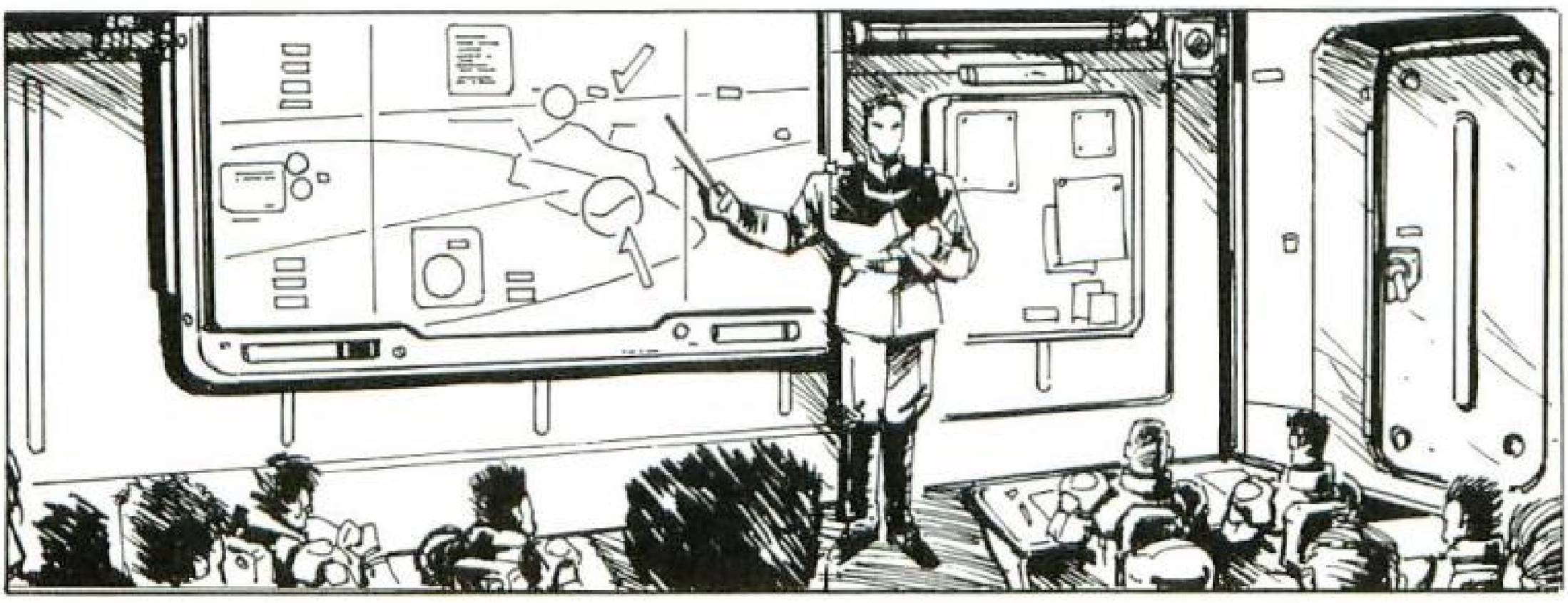
次はスロットルをタキシング位置（ポジション）へ。カタパルトを使った発射の場合、スラスターは使わないが、緊急時はカタパルト始動と共にスロットルを押し込むように。

カタパルト発進はオペレーターの指示を待つ。発進許可が降りたら左ブレーキを解除。するとカタパルトが作動し、宇宙へ射出される。

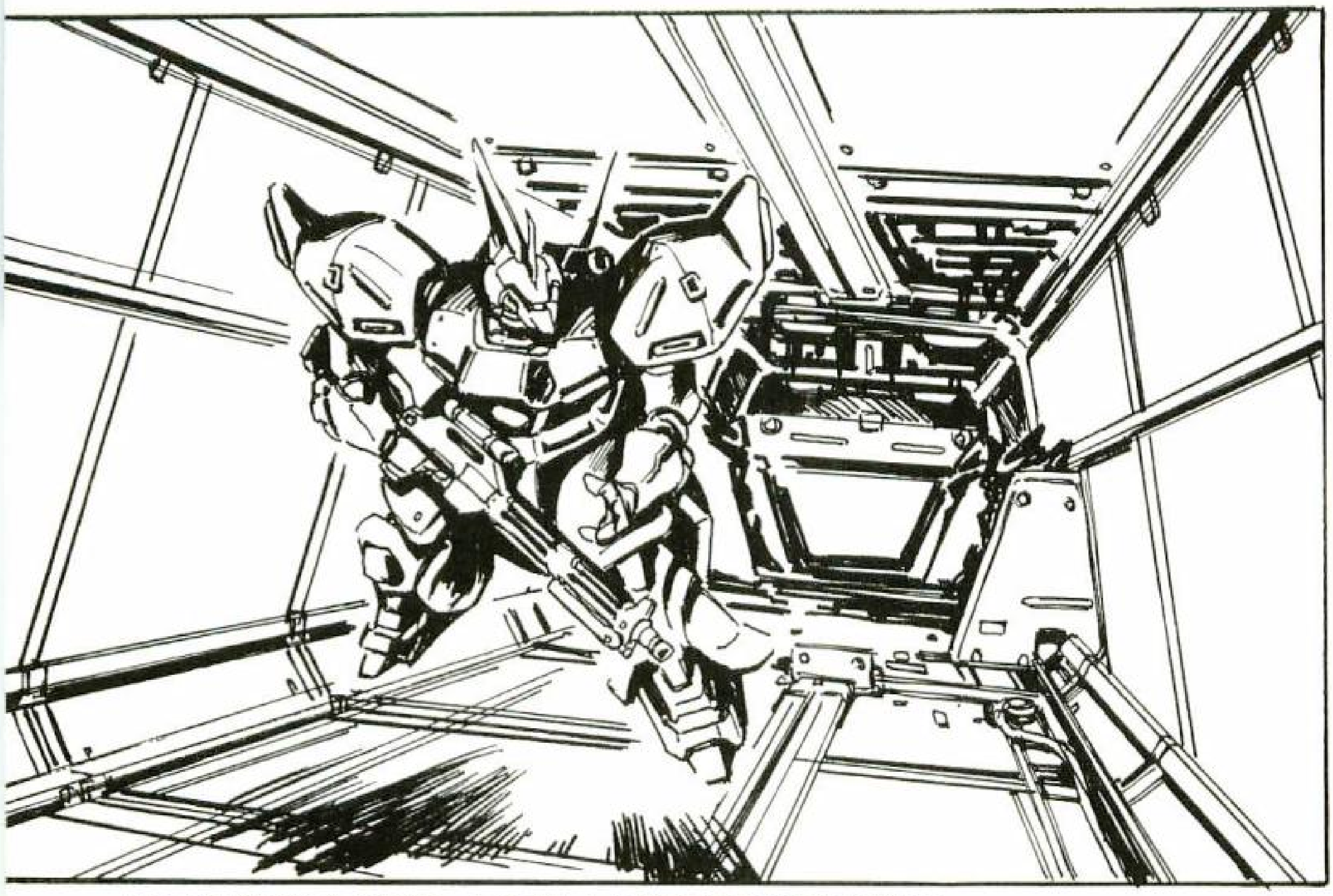
「いきまーす」なんていってると舌を噛むぞ。

スティックを使って機体の方向を設定し、修正機とフォーメーションを組む。機体の慣性を利用し、スラスターはで

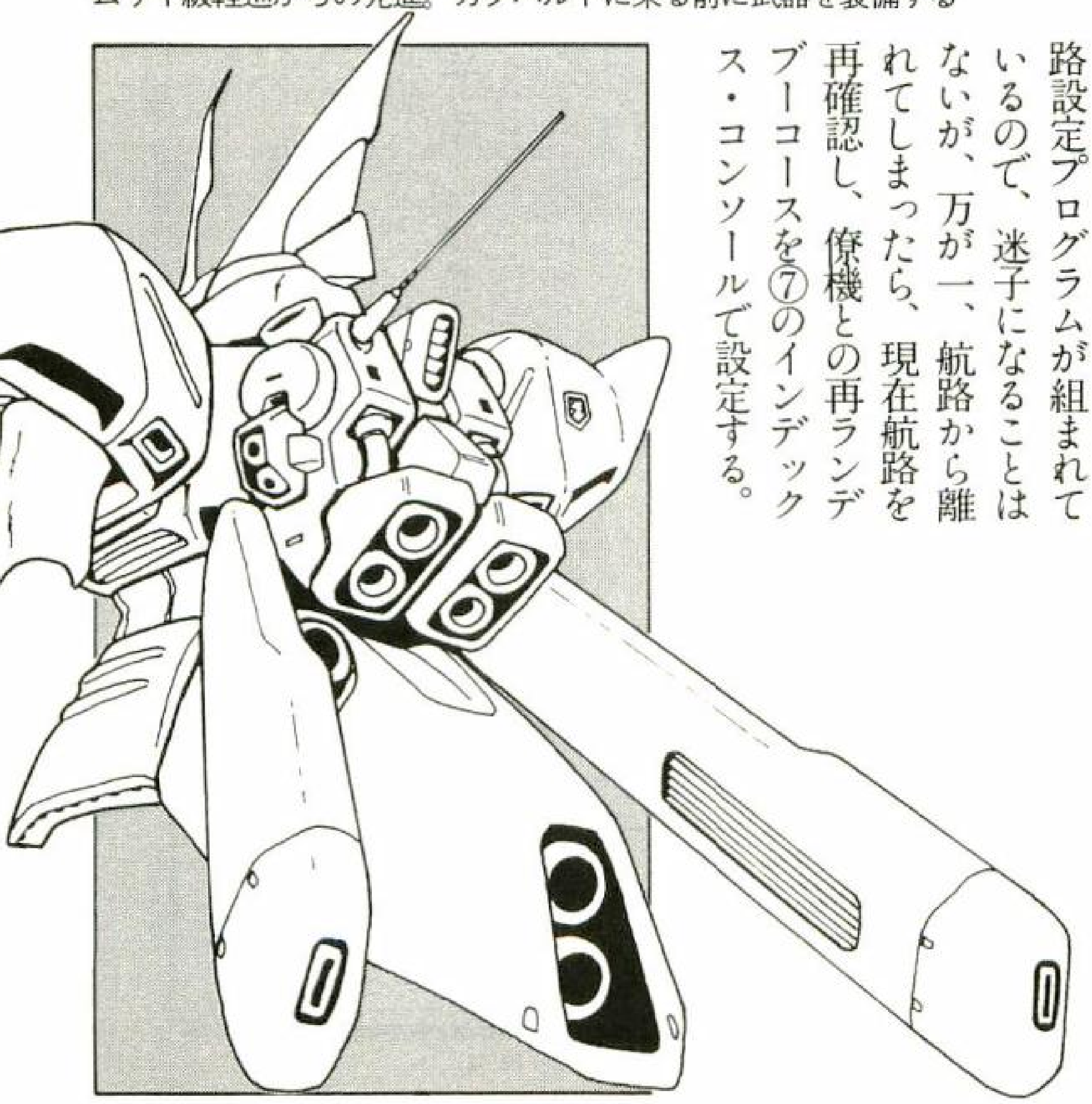
プリフライト・ブリーフィング風景



MS.PILOT MANUAL



ムサイ級軽巡からの発進。カタパルトに乗る前に武器を装備する



きる限り使用しない。僚機の位置は友軍のビーコン光を探してつかむ。無線はあてにしてはいけない。

通常のミッションでは、航路設定プログラムが組まれているので、迷子になることはないが、万が一、航路から離れてしまったら、現在航路を再確認し、僚機との再ランデブーコースを⑦のインデックス・コンソールで設定する。

作戦によってはプロペラントタンクの追加装備を必要とする

3. 戦闘シークエンス

⑤の警戒パネルにある小モニターが点灯しているぞ。モノアイの赤外線センサーがロケットの噴射光をキャッチしたのだ。②のセンサーモードを『索敵（スキャン）』に変えろ。モノアイが自動的に敵を求めて施回するぞ。

再度、警戒パネルがシグナルを出したな。捕捉した敵影がメインモニターに拡大して写し出されるはずだ。

友軍機ではない――連邦のジムだ！

戦闘経験（クルージング）のない君では無理だ。『巡航』モードから『戦闘機動（バット）』モードに切り換え、敵の射程から全力で脱出しろ。逃げるのは嫌だって!?

しかたない。サポートしてやるからしっかりやれ！

☆

駆動系・燃料系モードセレクターを確認しろ。『戦闘機動』だぞ。右スティックにある戦闘モードセレクターを『射撃戦』モードへ。トリガーロックを解除すると同時に、メインモニターにレティクル（照準）が表示される。センサーは敵機の発する噴射熱をとらえ続け、シンボル表示している。レティクルとシンボルを重ね合わせるようにスティックを動かすのだ。

ロックオン！

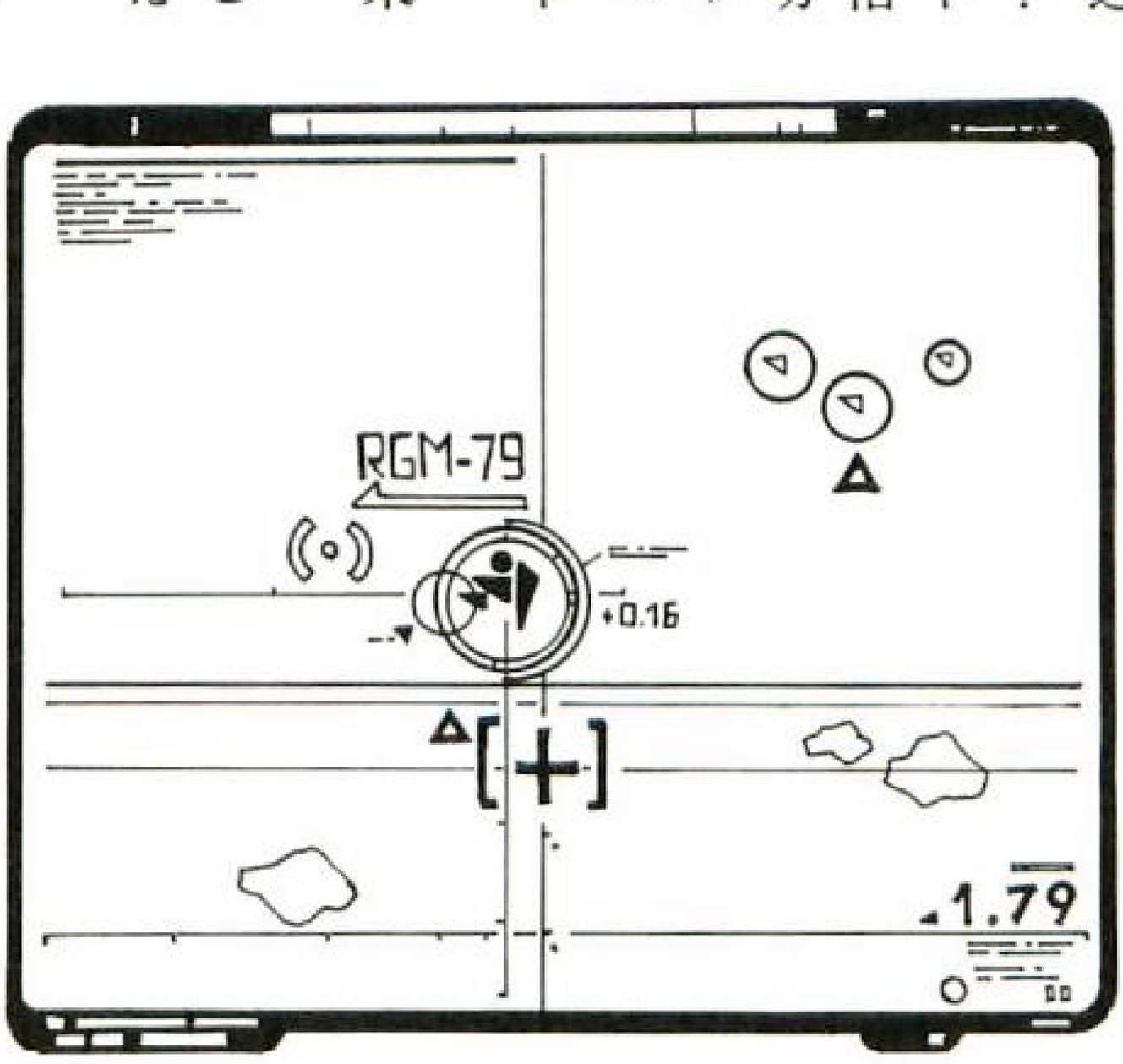
トリガーを引け！

☆

大丈夫か？　敵の先制攻撃をくらったな。機体チェックと敵機の位置の確認を同時にやれ。右マニピュレータが肩から消えているようだな。他には異常なしと……。敵機が接近してくるだと！　すぐに戦闘モードセレクターを『格闘戦』モードに切り換え、インデックスコンソールで、アームズセレクト面を呼び出して、ビームソードの条件設定を変えろ。それで左腕でもビームソードが使える。

よし、スロットル全開（フル）！　3秒でいい！　噴かし過ぎると推進剤がなくなる。

格闘戦モードでは、右ステイックのトリガーがビームソードの打ち込みスイッチになる。



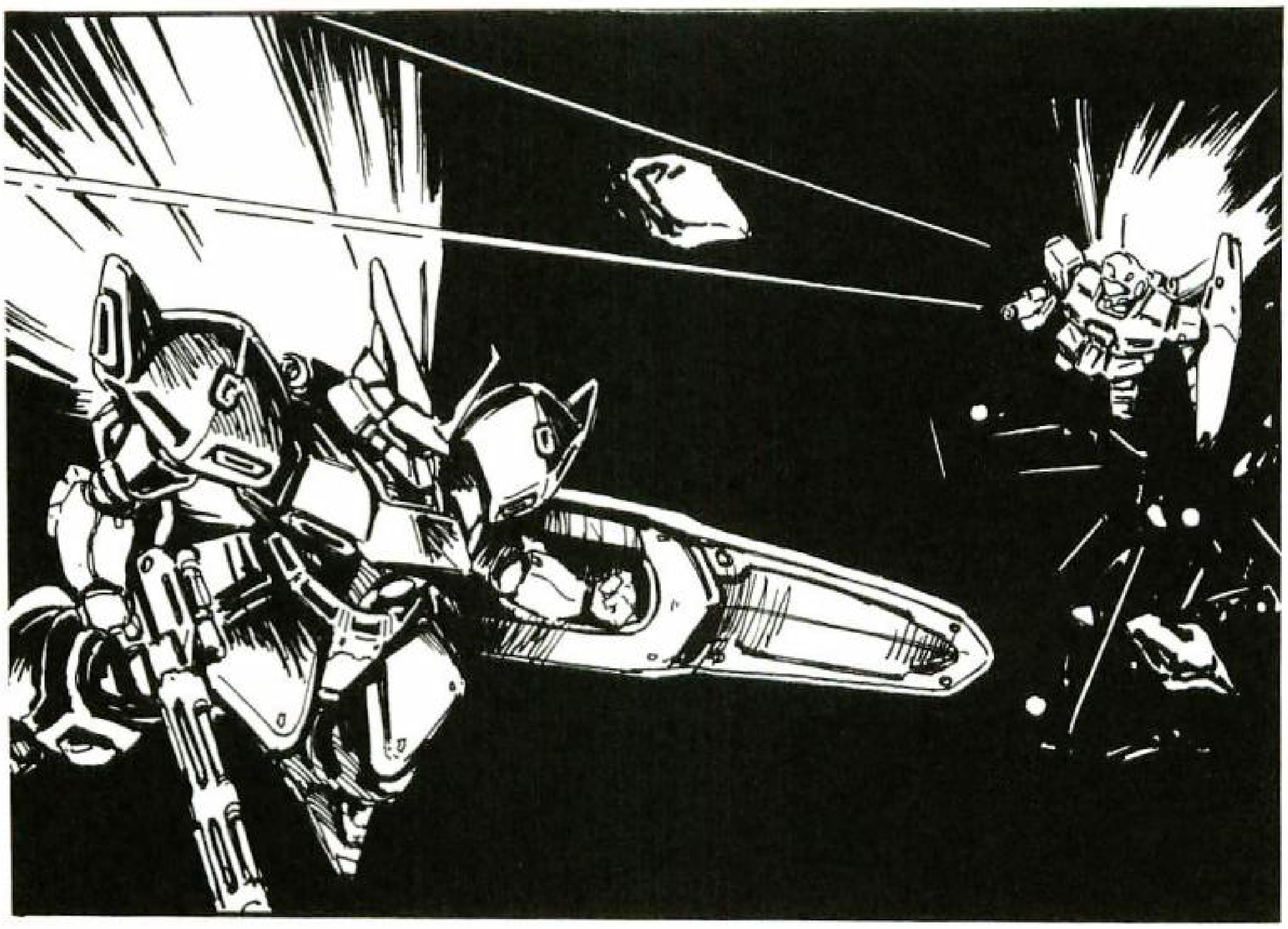
メインモニターに表示されるレティクル（照準）

敵機もビームサーベルを抜いた。超高速ですれ違う際に、トリガーを引け。

よし！　敵機の左腕を飛ばした。止めをさせ。機体を反転させ、フルスロットル。追撃しろ。

MS.PILOT MANUAL

ドッグファイト！　CMPを多用するとあっという間に推進剤が底をつく



警戒（ワーニング）！

スティックを引いて上昇しろ！　60ミリバルカン砲だ。

☆　☆

バカ者！　スロットルを踏み込みすぎだ。高Gによってお前は数秒だが気絶していたのだ。狙い撃ちされなかったのは幸運だった。

ジムは逃げていった。早く減速して、航路設定をやり直せ。モードを『巡航』に戻し、推進剤の残量チェック。機体損傷チェック。やることは山ほどあるぞ。

アポジモーター2基が不調だと？　⑬のマニュアル起動スイッチを押して見ろ。正常に作動すれば青いランプがつく。しなければ赤いランプだ。

1基は完全に故障しているな。あきらめろ。他のアポジモーターで補正できるだろう。

航路プログラムが修正できたら、再発進だ。推進剤が少ないのでスロットルは50パーセントまで。

センサーモードは『警戒（ワーニング）』へ。まだ、先程の敵がどこかに潜んでいるかもしれんからな。

巡航速度に達したら慣性飛行に移る。スロットルをアイドリングに。

先程の戦闘だが、敵機はビームガンを持っていなかった。別の戦闘で失ったのだろう。先制攻撃はバルカンの直撃弾をちょうど肩のジョイントに受けた。ゲルググの装甲は強固だが、無装甲部の着弾では耐えられるものではない。お前も狙うならジョイントにしろ。

4. 脱出シークエンス

では脱出について教えよう。機体の損傷が激しく、操縦不能になった場合は、脱出装置によって機外にシートごと射出される。

ではその手順を解説する。

まずシート下のボックスを開き、内部の脱出リングを引く。今までの例ではコンピュータによる自動システムで射出されることが多いが、あまり機械に依存してはいかん。機械は常に故障する危険性があるのだ。

リングを引くと腹部の装甲がはね上り、宇宙ではコクピット内の空気が一挙に放出される。ヘルメットのバイザーをいつも閉めておく習慣を身につけておくように。また、減圧する時間がないので、装甲が開くと同時にコクピット中の空気が一挙に放出される。

脱出装置が作動して0・2秒でシートが射出される。この時の最大加速度は16Gで、シートのロケットモーターは最長30秒間作動を続ける。射出5秒後には機体から1キロは離れるため、搭乗機の爆発に巻き込まれる心配はほとんどないぞ。

戦闘宇域からの脱出後は、減速して友軍の作戦行動半径から離れ過ぎないようにする。

シートにはアポジモーターが装備されスティックの操作で点火される。生命維持装置や救難信号用の通信器やビーコンはバッテリーとシート下の太陽電池板によって稼動する。また、シートにはエアーボンベ、食品、飲料水、信号

脱出パターン．1／強制装甲排除

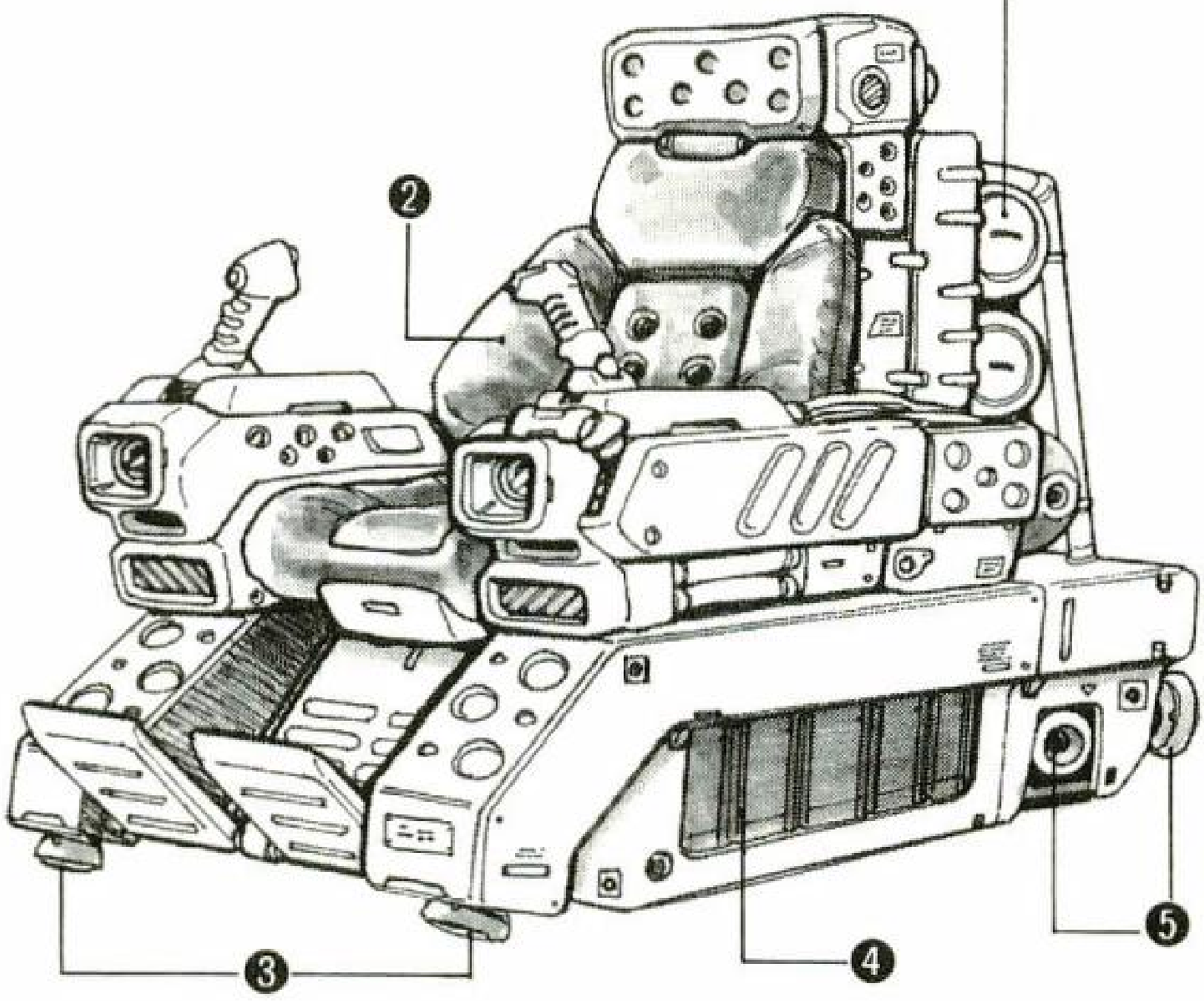


MS.PILOT MANUAL

ジオン公国軍第2生産型MSイジェクションシート／各部名称

❶エアーボンベ
❷耐Gシート
❸アポジモーター
❹太陽電池パネル

●単独の宇宙機として使用できる脱出シート。パイロットの生命にかかわるため、エアボンベ、食料、飲料水は1ヶ月ごとに交換、チェックが義務付けられている。



銃、ワイヤー射出機などが装備されている。

脱出後は救難信号を出し続け、ひたすら待つしかない。空気が5日分、食料と水が3日分しかないが、友軍が必ず助けに来ると信じて待て。

友軍が救助に来たら、おちついて対処しろ。アポジモーターの推進剤が残っていればゆっくりと接近して救助隊の指示に従え。たとえ空気の残量が少なくてもあわててはいかん。彼らはなすべきことを理解しており、最短の時間で君を救助しようと努力しているのだ。

また、敵軍が来た場合も同じように救助を受けろ。生存者の救出は敵味方を問わず義務づけられている。捕虜の扱いは南極条約で決められており、虐待を受けることは少ない。

☆

ここまでは宇宙空間での脱出方法を述べたが、コロニー内、月面、地球でもこの脱出システムは作動する。

まず、コロニー内は回転軸に近いほど人工重力は低くなる。従ってMSの空中戦は可能だ。その際、脱出する場合はシートのアポジモーターの推力で着地する。可能ならば回転軸にそってシートを射出することで飛行距離を稼ぐことができる。宇宙と違って空気の抵抗があり、下手をすると爆発にまきこまれる危険性もあるからな。

月面、地球では着地したあとシートから出て全力で逃げ遮蔽物を探し隠れろ。シートの移動能力は低いから、機外への脱出程度に考えるのだ。

☆

5. 帰投・着艦シークエンス

さて任務は完了した。君は傷付いた機体を何とか母艦まで持っていくことができた。機体の異常を伝えるワーニングランプは点灯しっぱなしだ。通信も音声なら通りそうだ。オペレーターに現状を伝えて1番に着艦させてもらえ。

そうか、ダメだったか。仕方ない。炉を停止させて、救助を待て。なに！　絶対自力帰還するって。強情な奴だ。

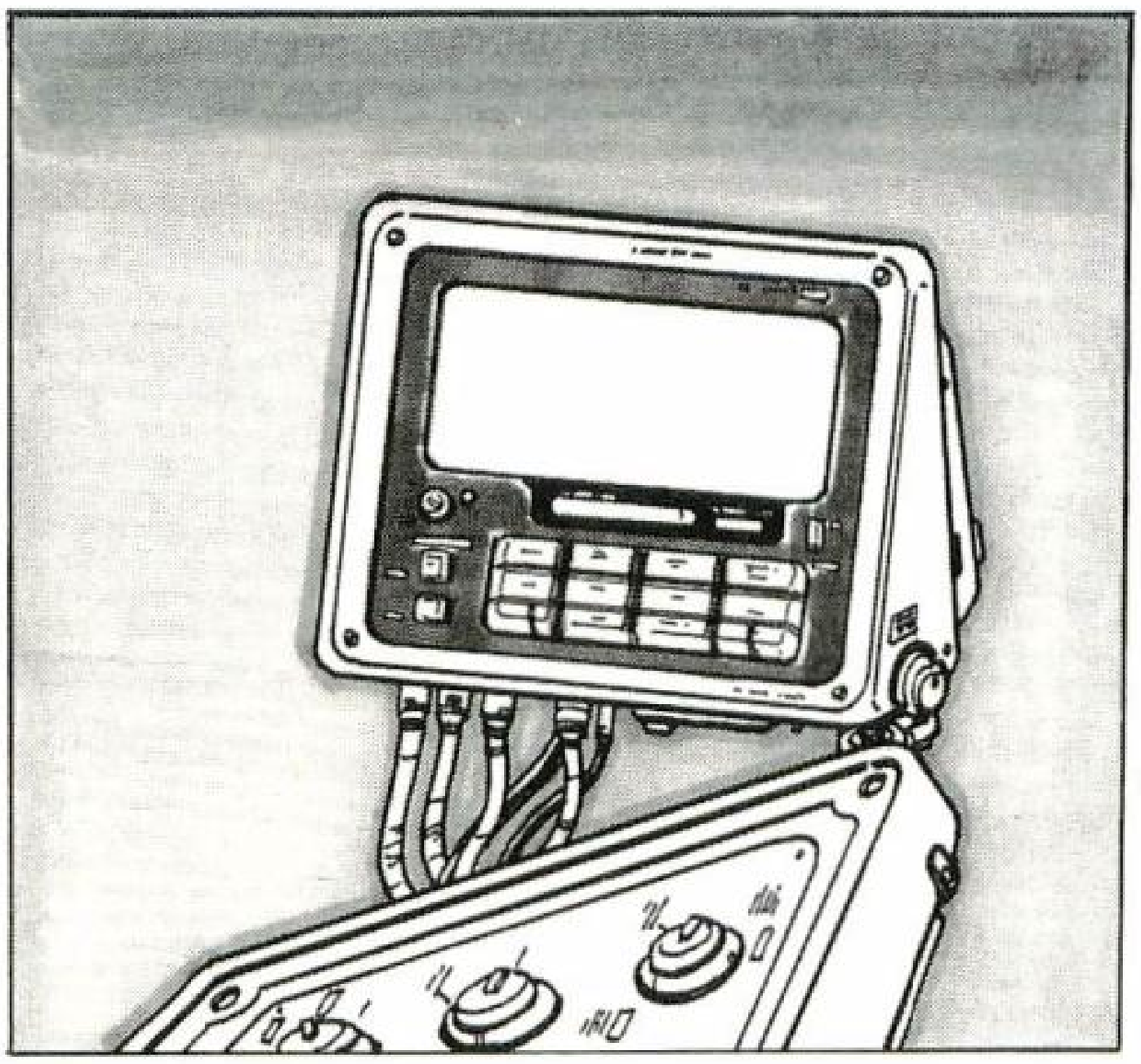
☆

甲板に接地後、脚部のマグネットをONにして、固定する。スロットルはアイドリングに戻し、『歩行』モードに換える。

ハンガーについたら、モードを『整備』へ。これで自動的にスラスターは停止し、各

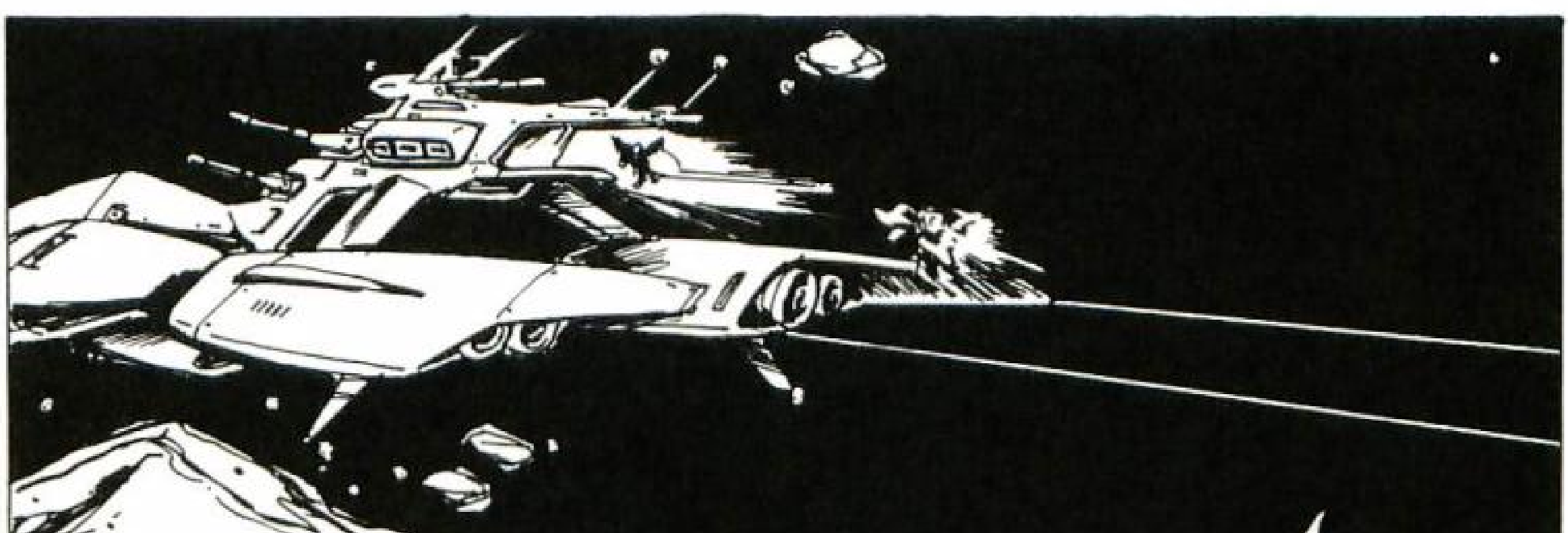
駆動系はロックされる。最後にジェネレータを停止させて機外に出ろ。

生還おめでとう。君はよくがんばった。



帰還時にはインデックス・サブコンソールを引き出し、航路設定する

着艦時には艦管制官の指示に従い、着艦コースに乗る



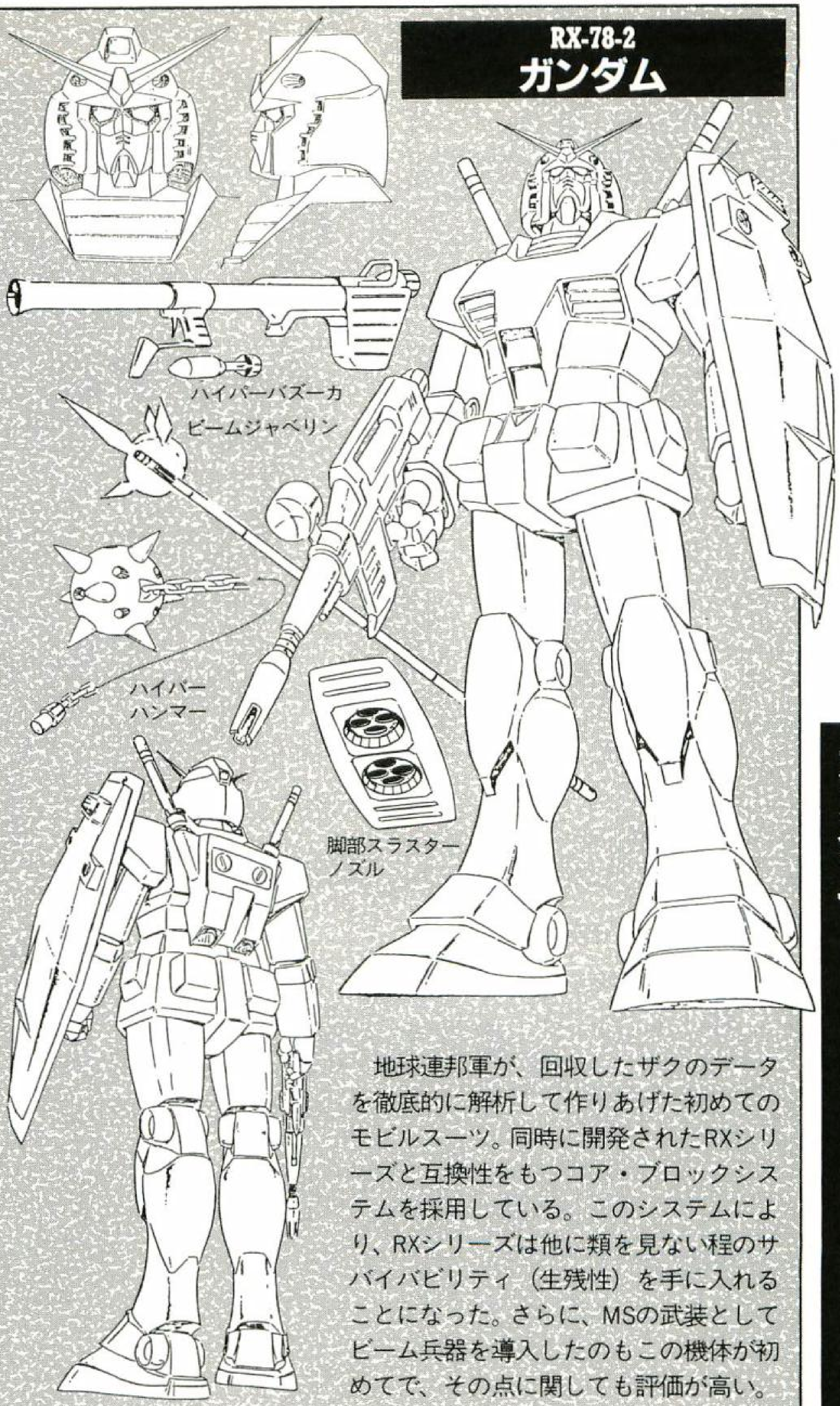


MS設定資料集

M.S. Design collection.

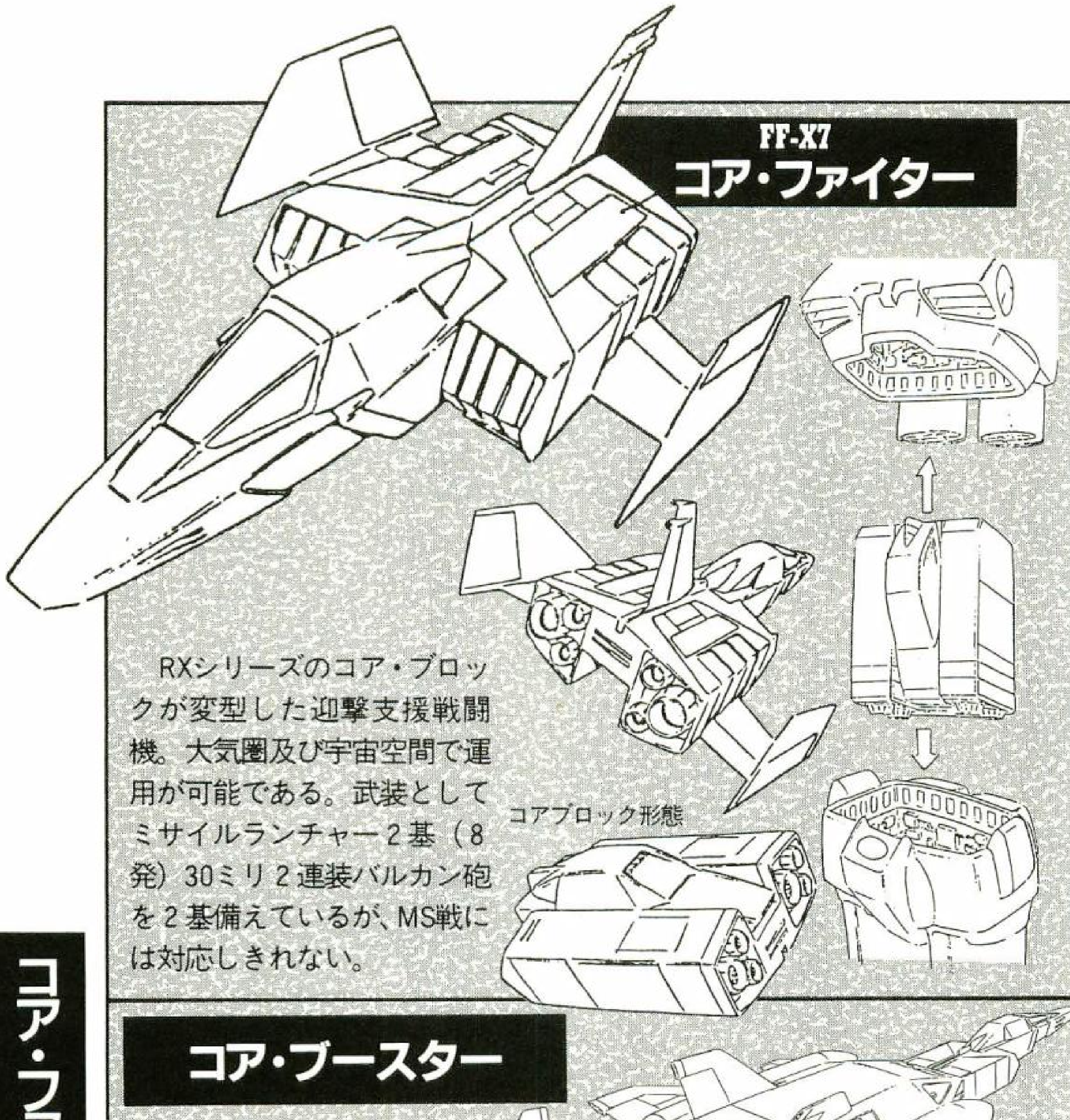
●「機動戦士ガンダム」、MSV、MS-X、「機動戦士ガンダム0080～ポケットの中の戦争」に登場するMS・MAのデザイン画を解説付きで紹介する。

RX-78-2 ガンダム



地球連邦軍が、回収したザクのデータを徹底的に解析して作りあげた初めてのモビルスーツ。同時に開発されたRXシリーズと互換性をもつコア・ブロックシステムを採用している。このシステムにより、RXシリーズは他に類を見ない程のサバイバビリティ（生残性）を手に入れることになった。さらに、MSの武装としてビーム兵器を導入したのもこの機体が初めてで、その点に関しても評価が高い。

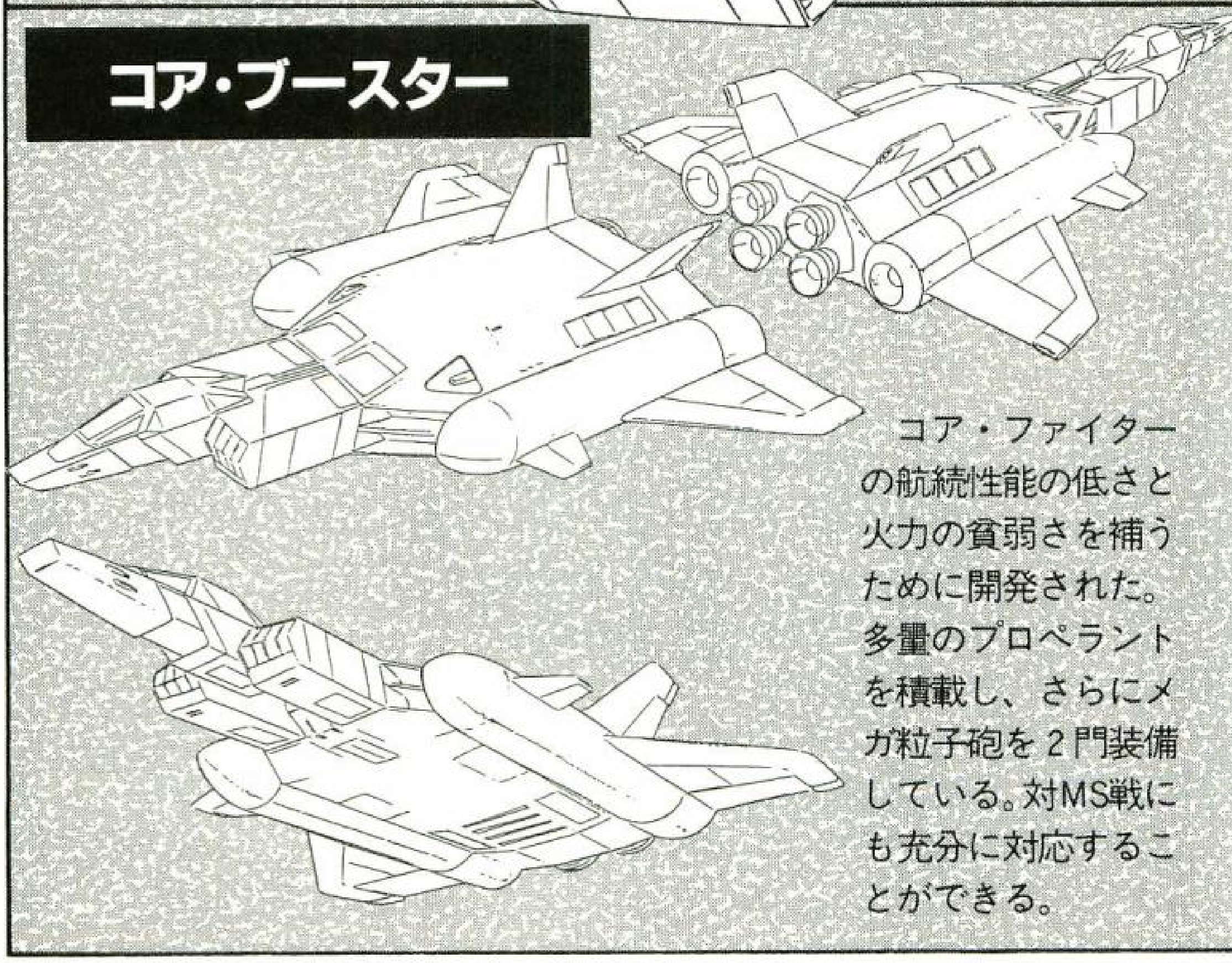
FF-X7
コア・ファイター



RXシリーズのコア・ブロックが変型した迎撃支援戦闘機。大気圏及び宇宙空間で運用が可能である。武装としてミサイルランチャー2基（8発）30ミリ2連装バルカン砲を2基備えているが、MS戦には対応しきれない。

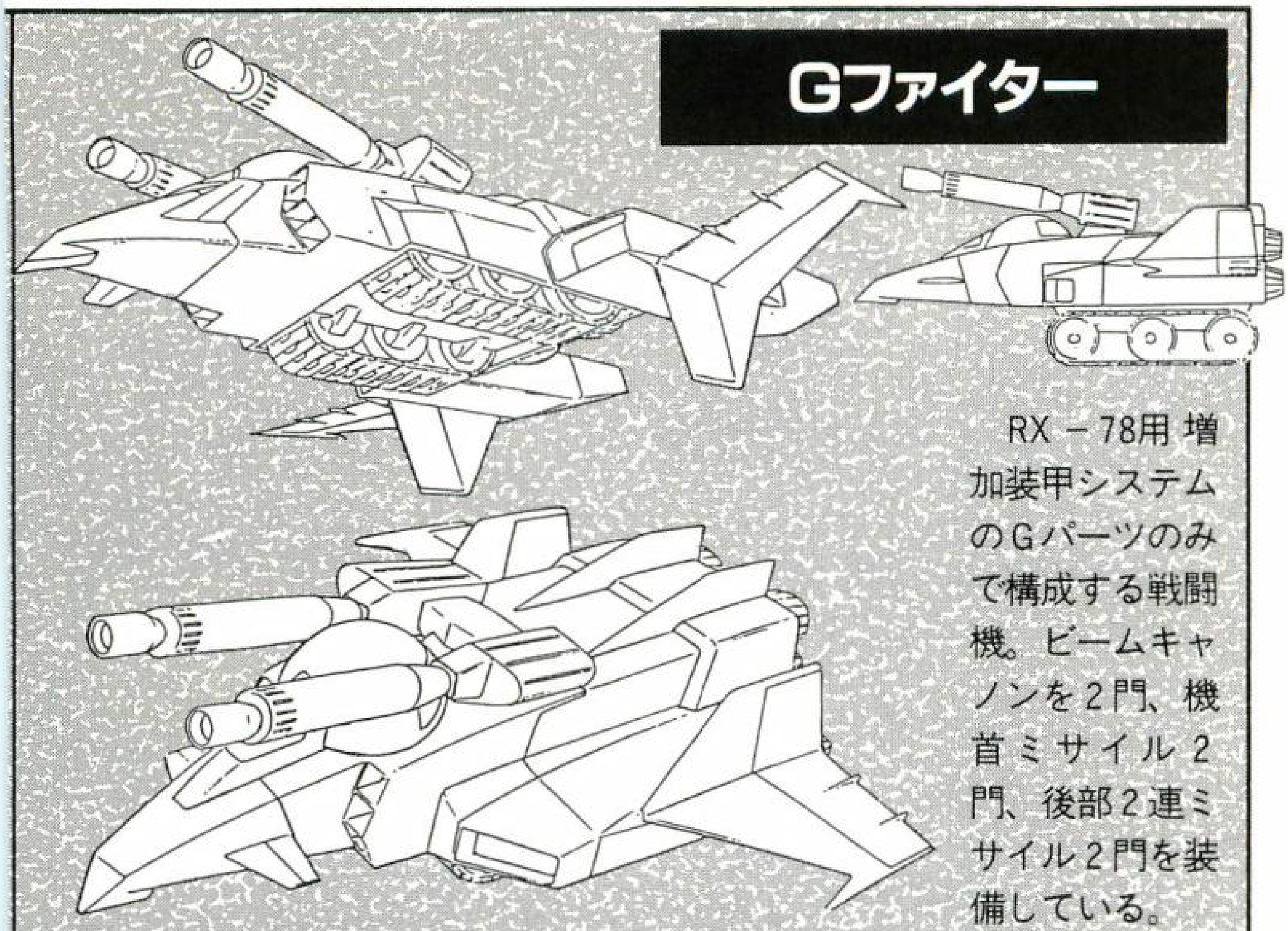
コアブロック形態

コア・ブースター



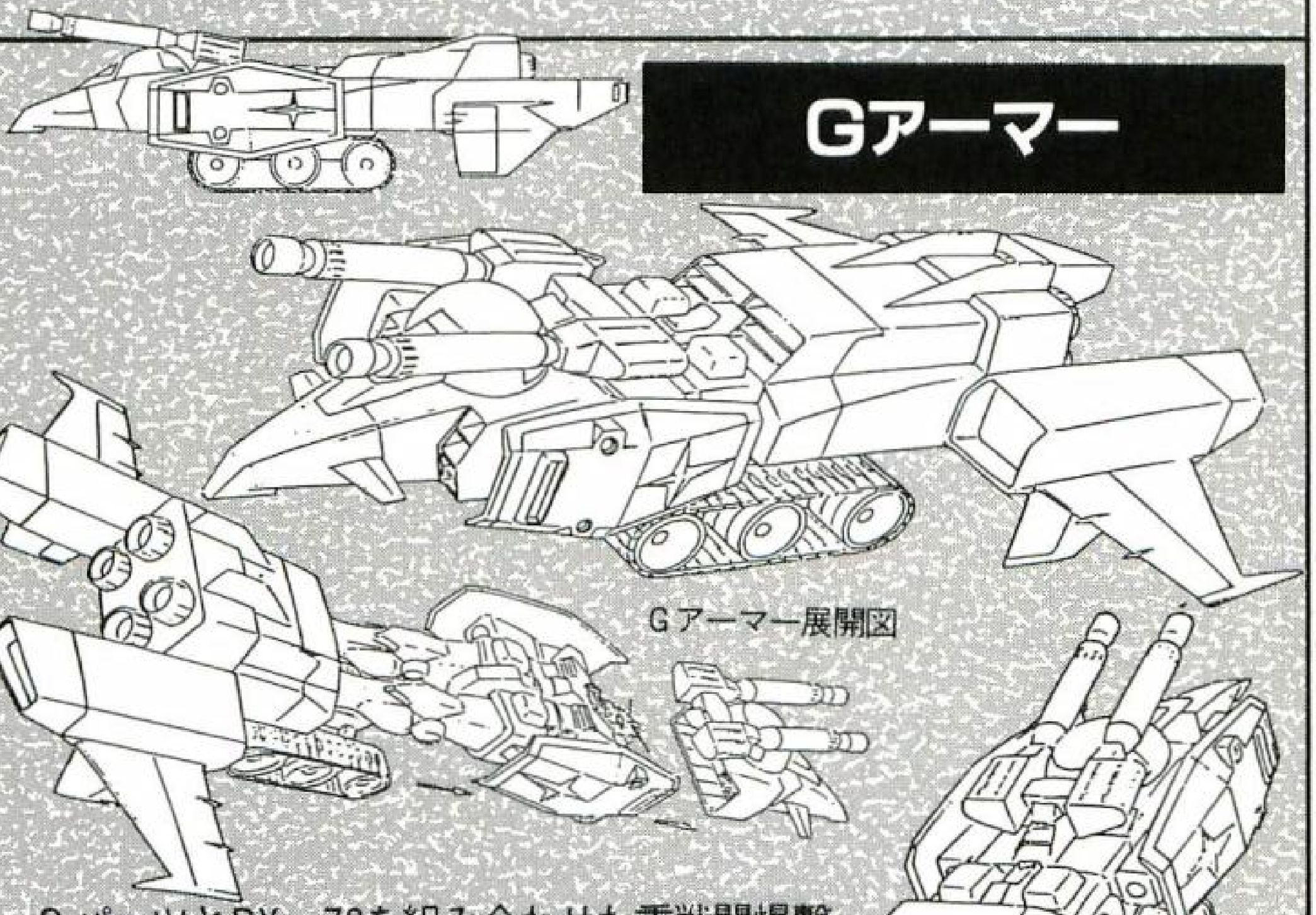
コア・ファイターの航続性能の低さと火力の貧弱さを補うために開発された。多量のプロペラントを積載し、さらにメガ粒子砲を2門装備している。対MS戦にも充分に対応することができる。

Gファイター



RX－78用 増加装甲システムのGパーツのみで構成する戦闘機。ビームキャノンを2門、機首ミサイル2門、後部2連ミサイル2門を装備している。

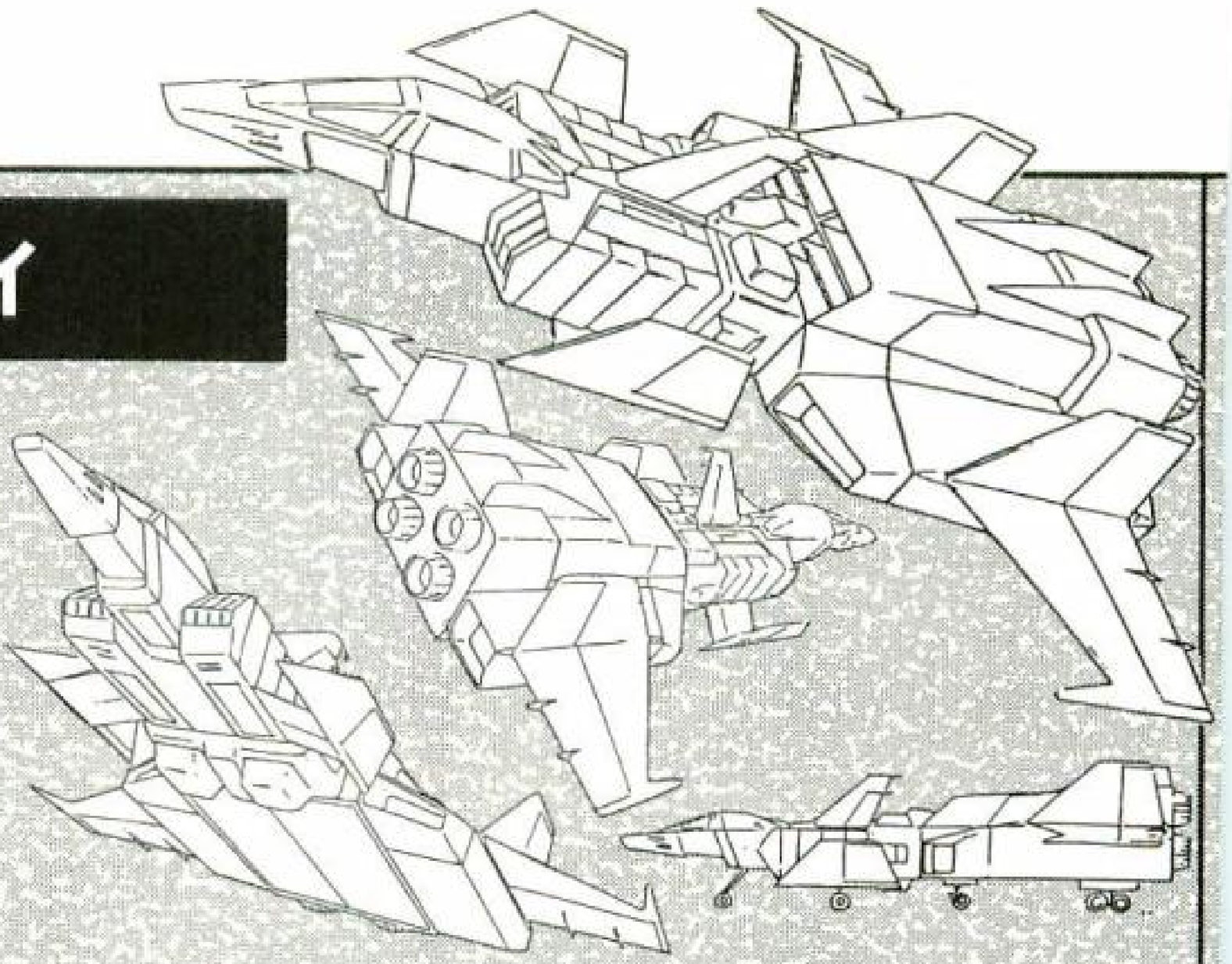
Gアーマー



Gアーマー展開図

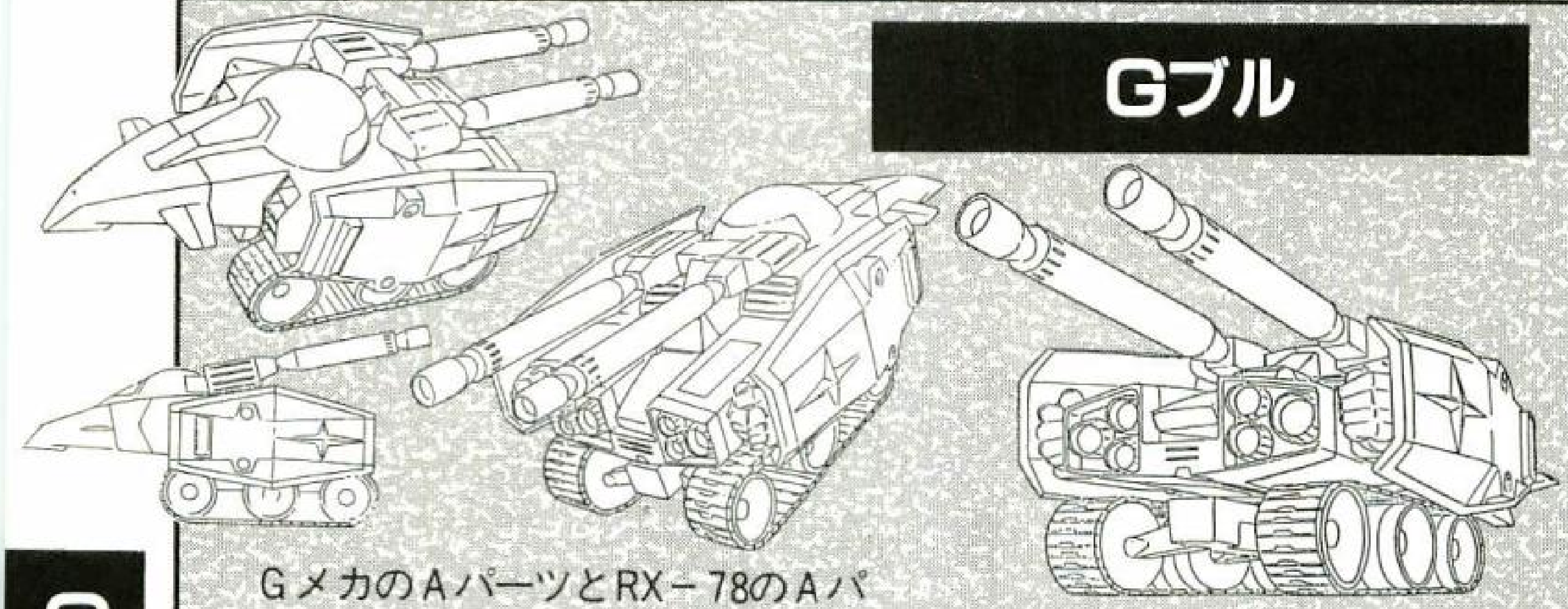
GパーツとRX－78を組み合わせた重戦闘爆撃機。これにより、RX－78の機動力は飛躍的に向上する。コア・ブロックシステムの規格に準じているので、戦況に応じた柔軟さを発揮し、RX－78を充分にバックアップした。

Gスカイ



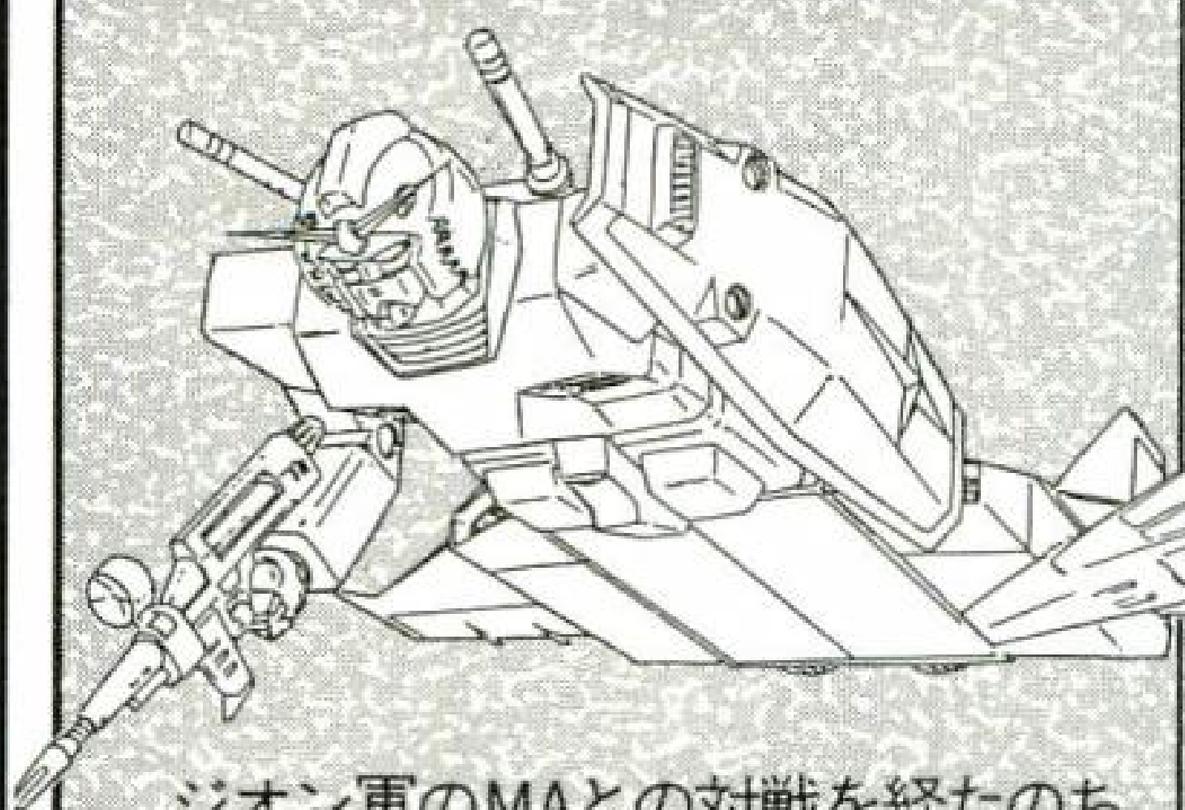
Gメカの Bパーツと RX－78の Bパーツ、コアファイターで構成される支援戦闘機。この形態での武装は、Gメカの後部ミサイルを除けばコアファイターと大差がない。

Gブル



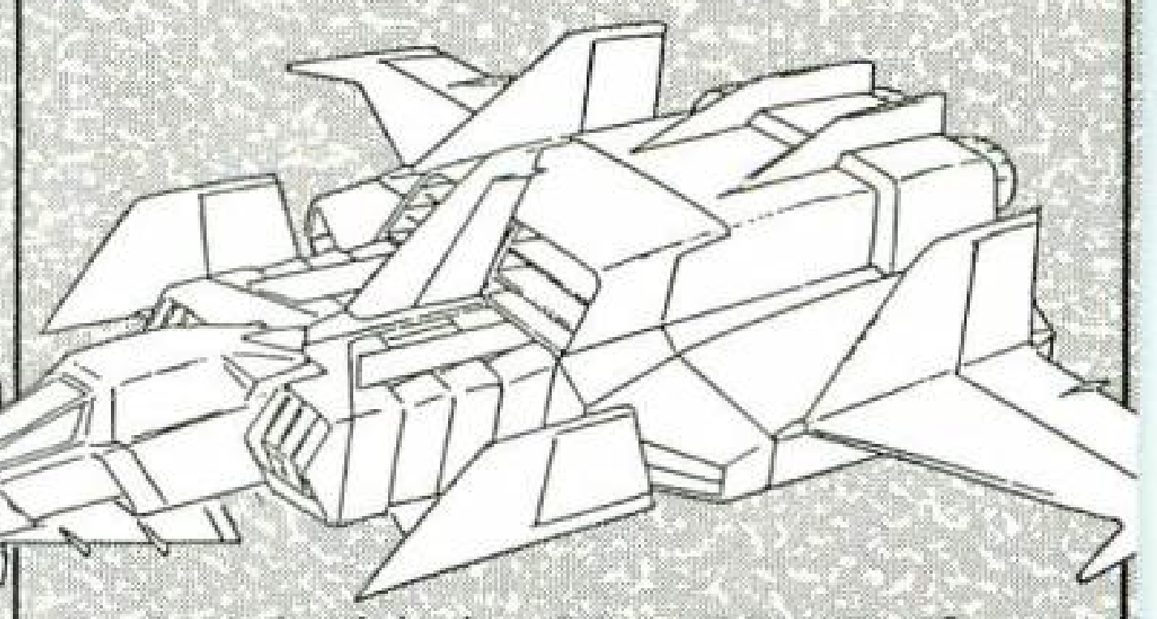
Gメカの Aパーツと RX－78の Aパーツ、コア・ファイターで構成される重戦車。この場合のコクピットはコア・ファイターに、武装はビームキャノンのみとなる。

ガンダム MA（モビルアーマー）モード



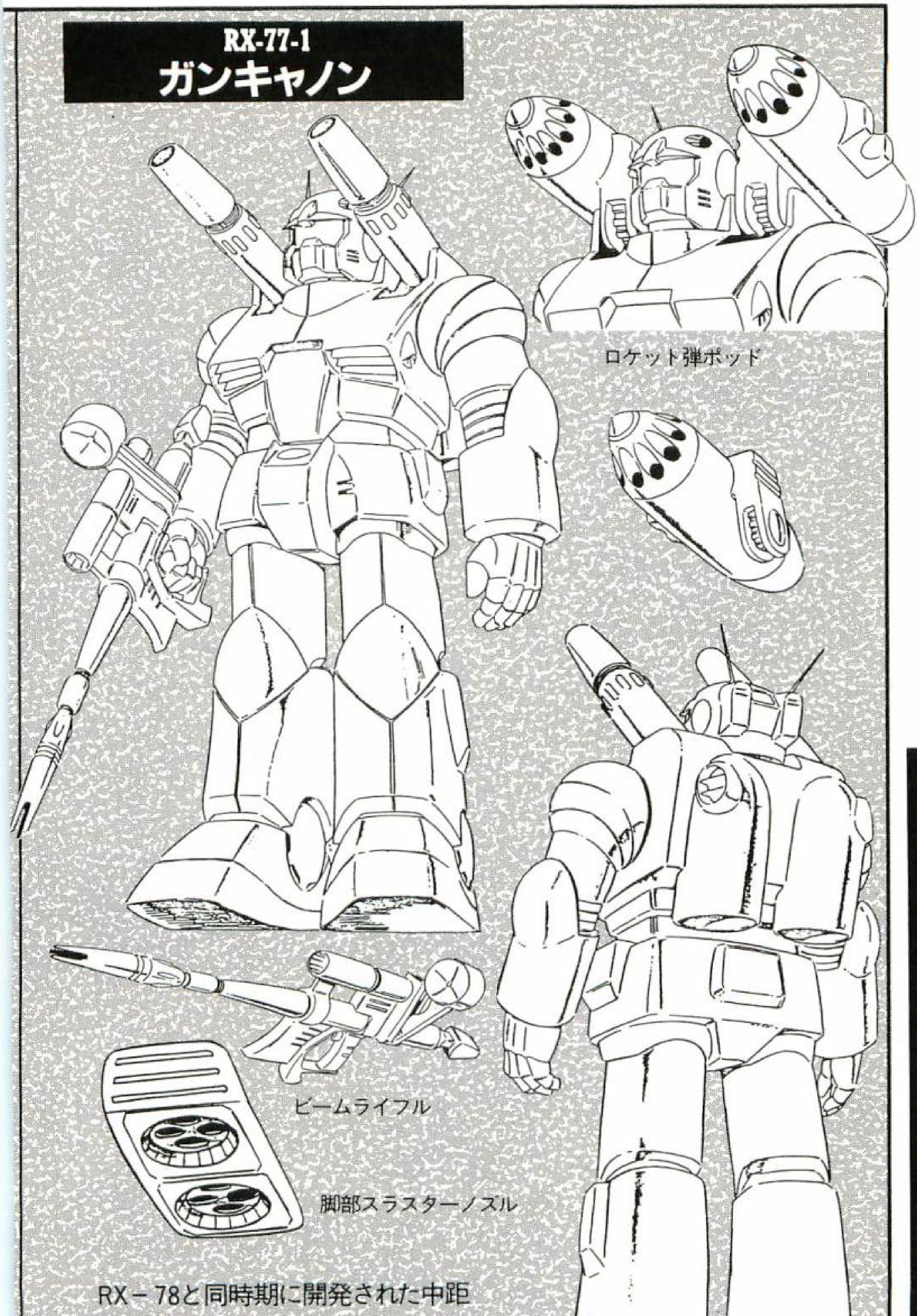
ジオン軍のMAとの対戦を経たのちに考案され、試験的に使用された形態である。MSとしての戦闘力を保ちながら、MAクラスの機動力を得ることができる。

Gスカイ・イージー



Gスカイから、RX－78の Bパーツを除いたものが、この機体である。Gパーツのフレキシビリティを物語るもので、RX－78の稼動状況に影響を与えずに行動することが可能となった。

RX-77-1 ガンキャノン



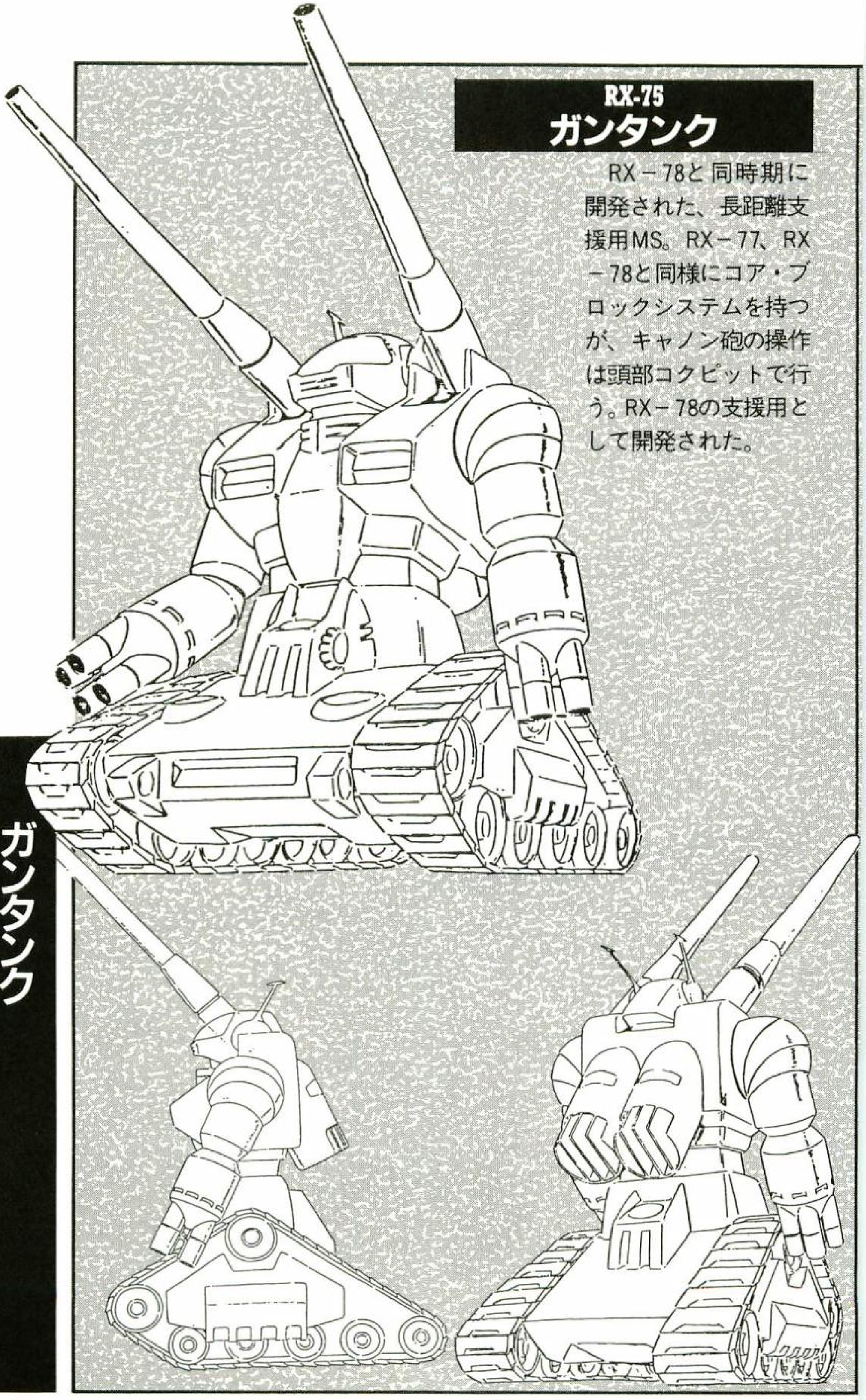
ロケット弾ポッド

ビームライフル

脚部スラスターノズル

RX－78と同時期に開発された中距離支援用MS。この機体もコア・ブロックシステムを採用している。運動性はRX－78に劣るものの、装甲が厚く、シールドを必要としない。

ガンキャノン

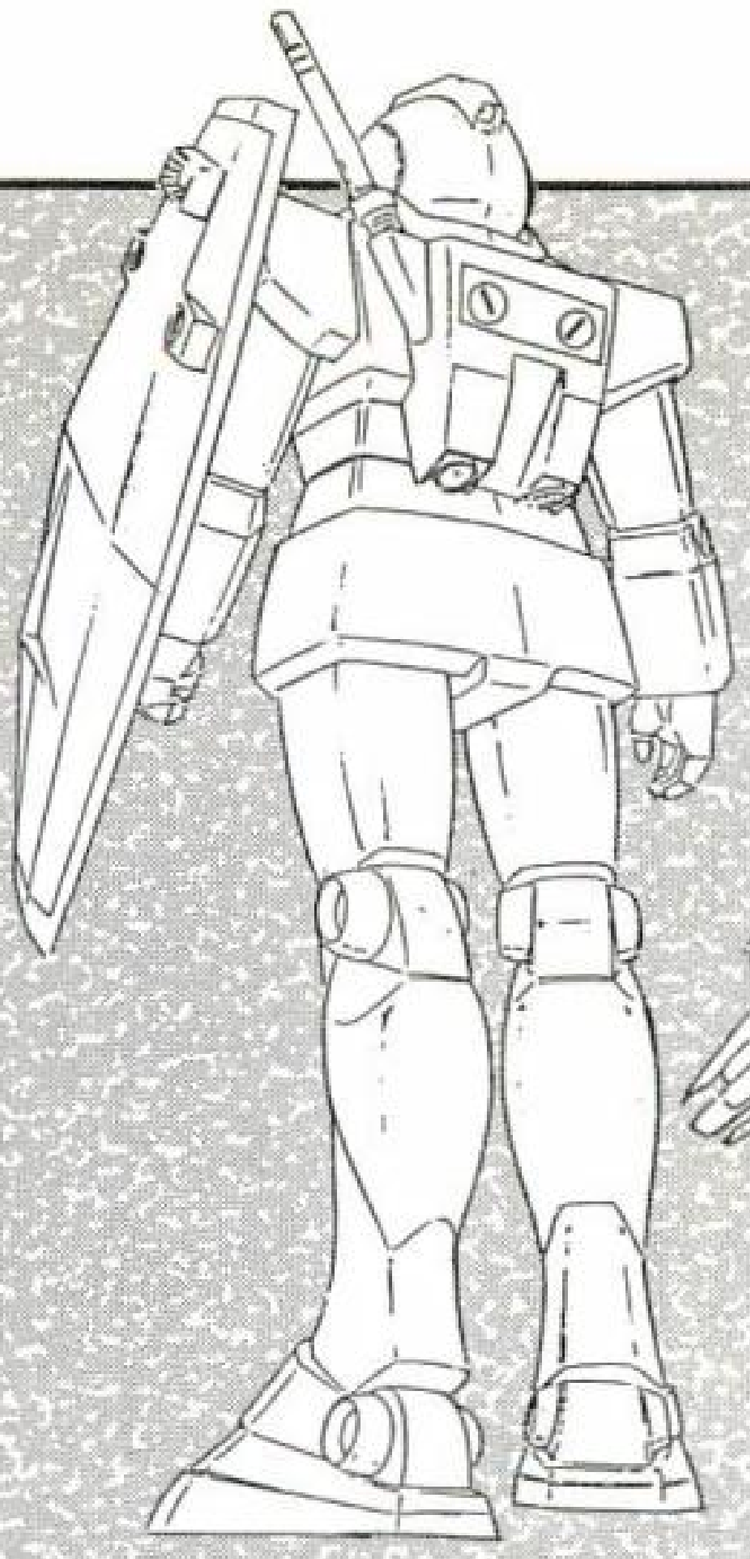


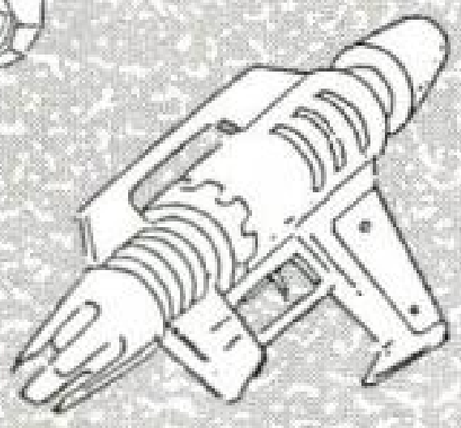
RX-75
ガンタンク

RX－78と同時期に開発された、長距離支援用MS。RX－77、RX－78と同様にコア・ブロックシステムを持つが、キャノン砲の操作は頭部コクピットで行う。RX－78の支援用として開発された。

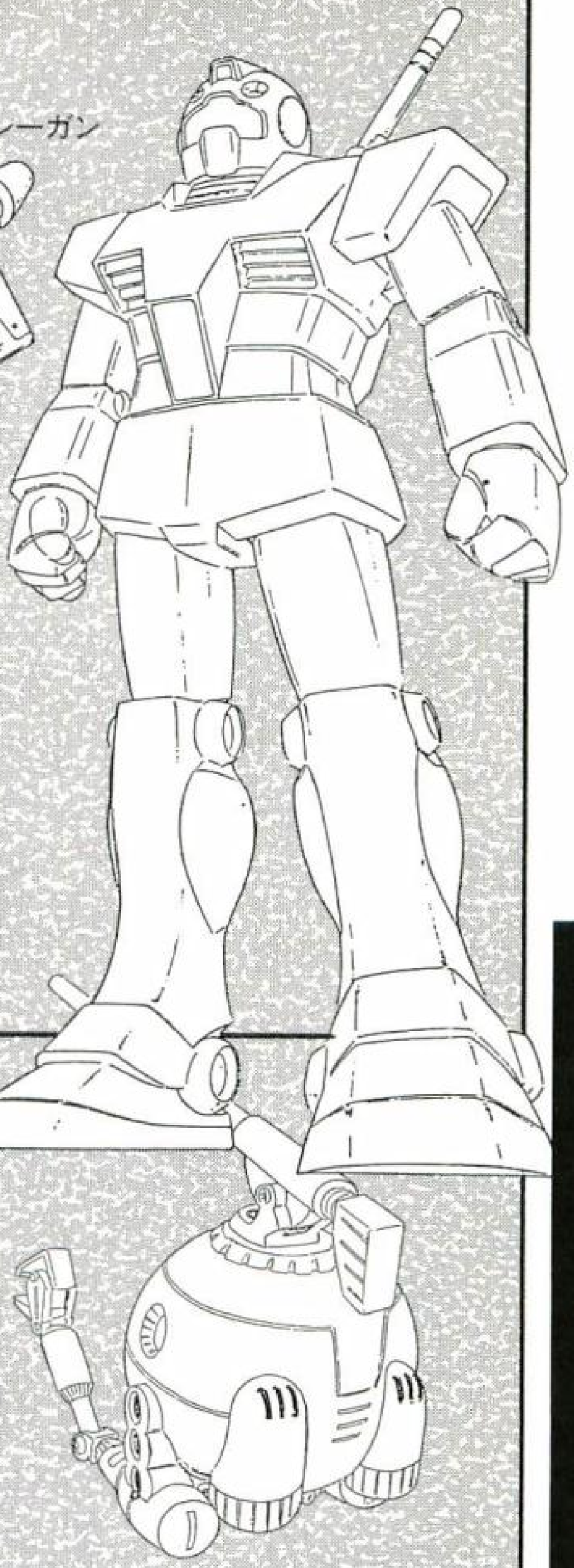
ガンタンク

RGM-79
ジム



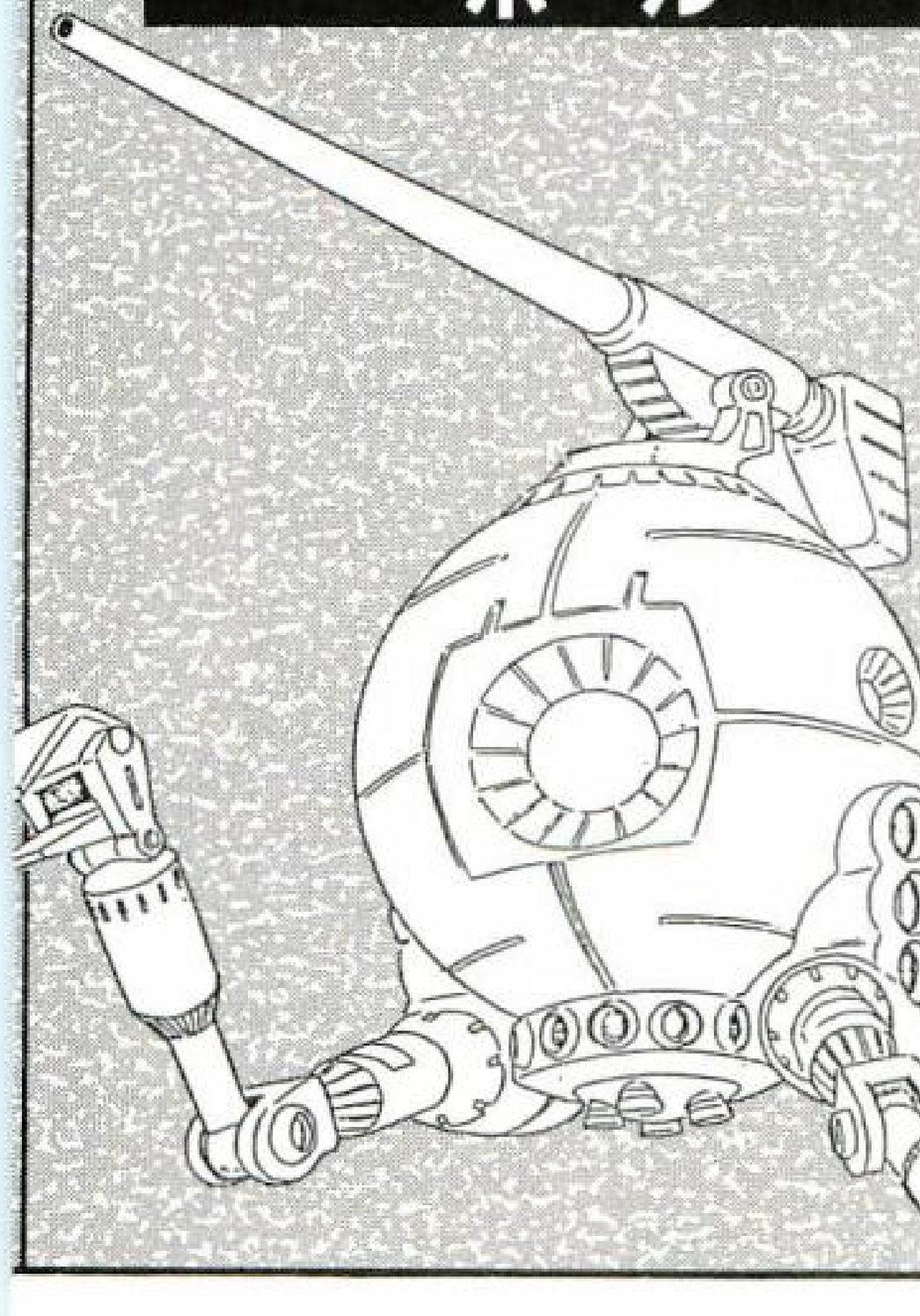


ビームスプレーガン



RX－78の量産型。コア・ブロックは、RXシリーズによる基礎的な情報収集が完了したことと、構造が複雑でコストが高くなることによりとり除かれている。RX－78の基本的な性能をコンスタントに受け継いでおり、後に様々なバリエーションを生み出す佳作機といえる。

RB-79
ボール

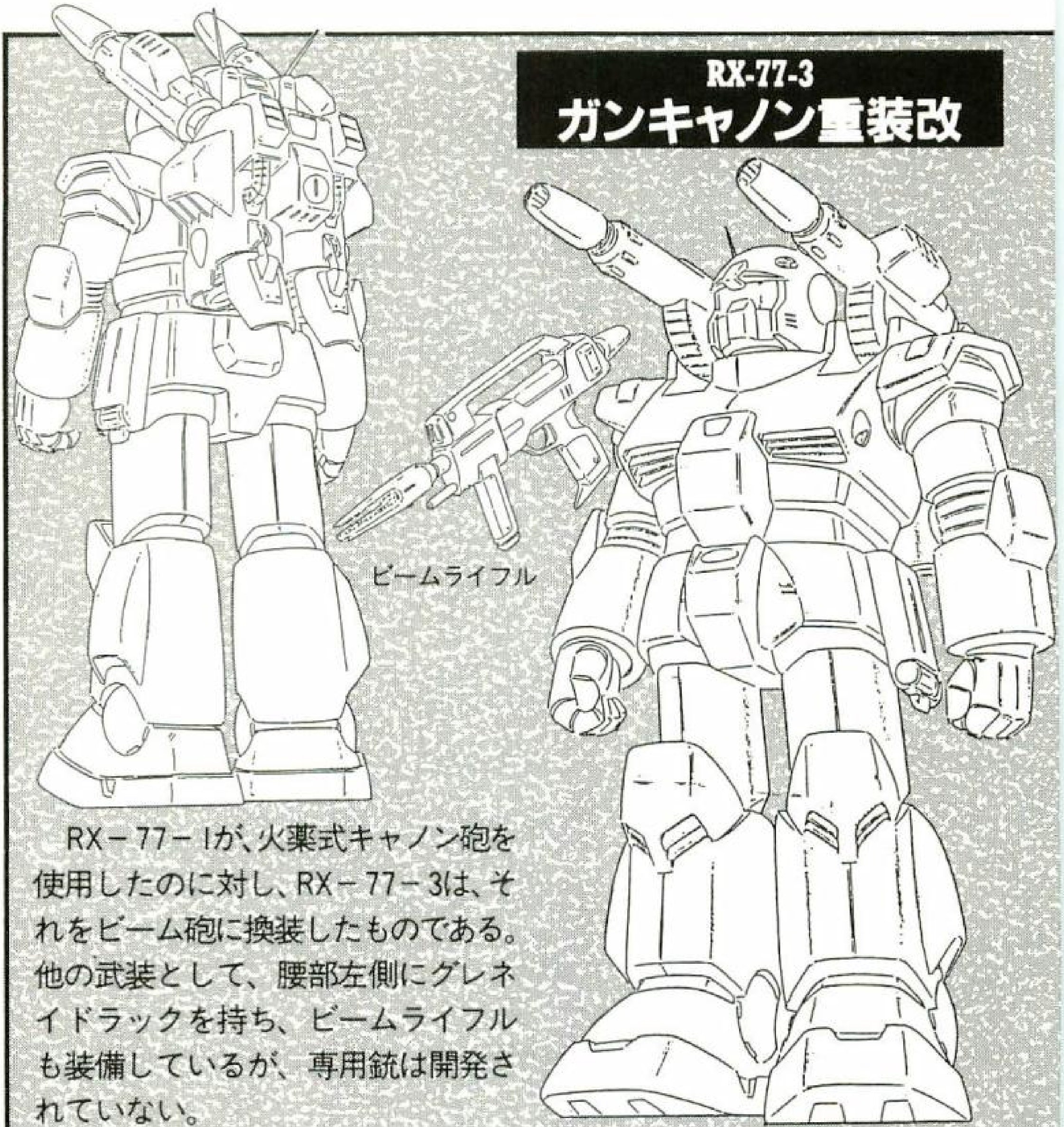




RGM－79の支援用に量産された戦闘ポッド。軍、民間で使用されていた一般作業用のスペースポッドSP－W03の装甲に手を加え、RX－75の主砲を改修して搭載した。

ジム～ボール

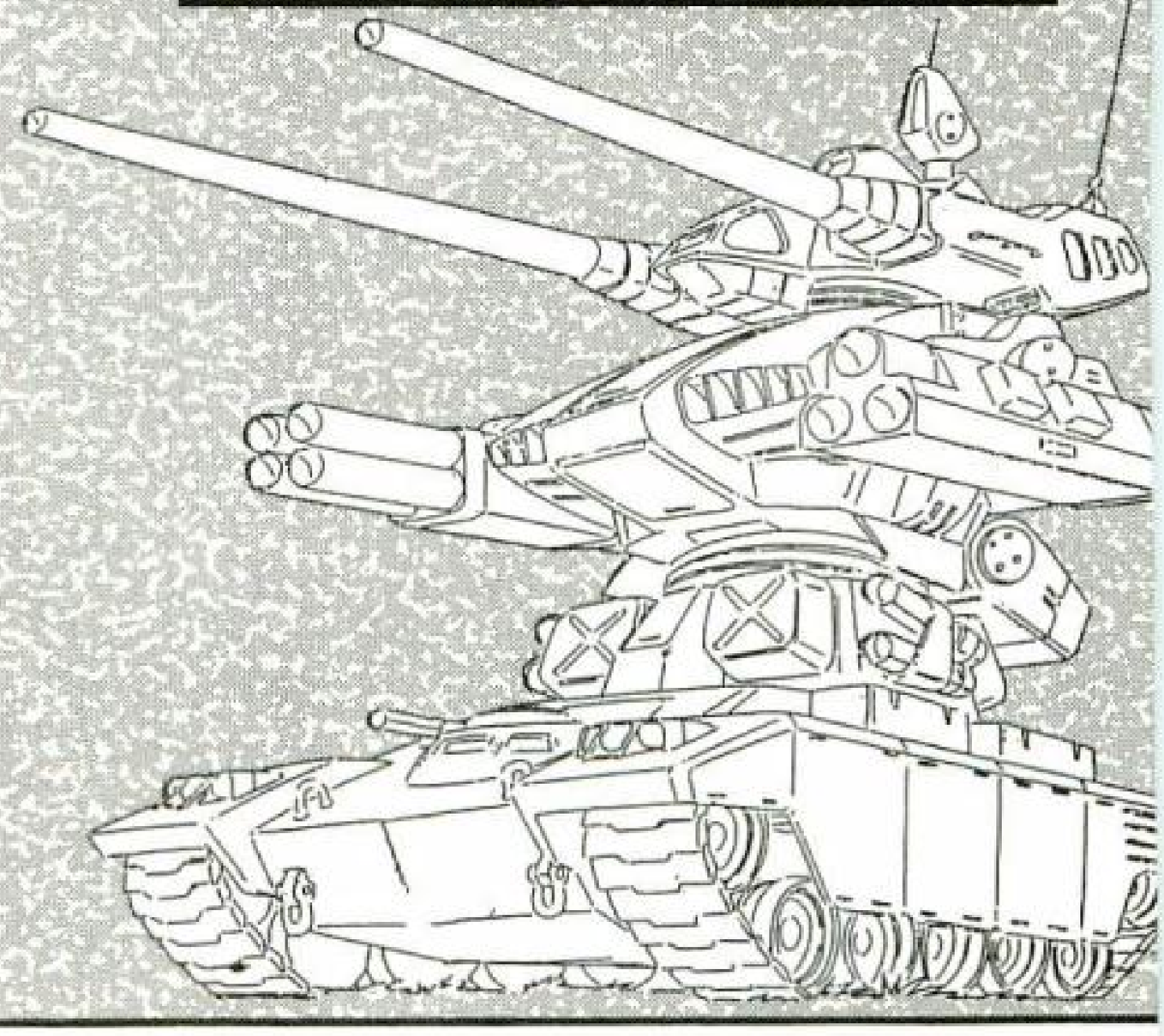
RX-77-3
ガンキャノン重装改



RX－77－1が、火薬式キャノン砲を使用したのに対し、RX－77－3は、それをビーム砲に換装したものである。他の武装として、腰部左側にグレネイドラックを持ち、ビームライフルも装備しているが、専用銃は開発されていない。

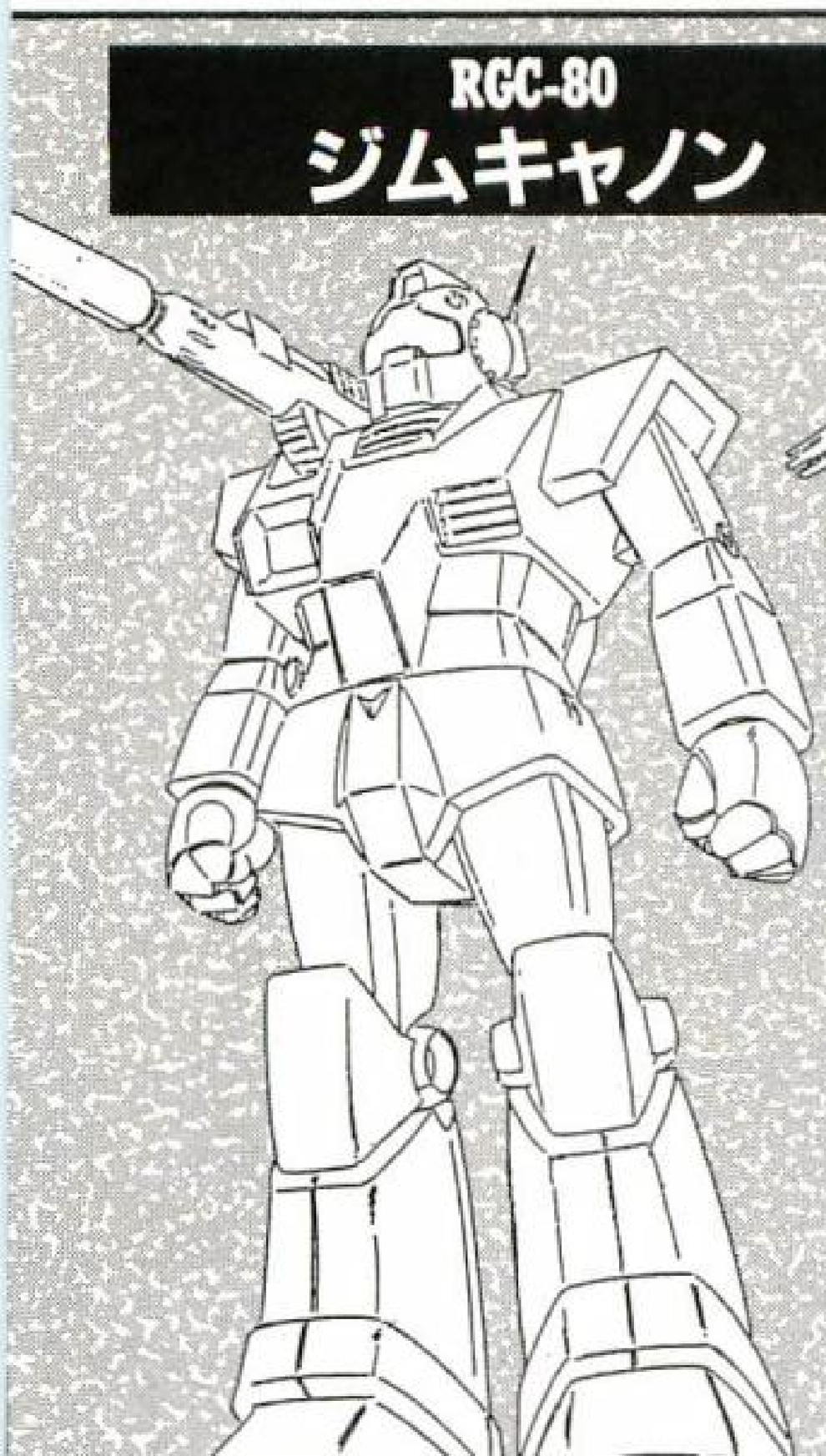
ガンキャノン重装型～ガンタンクII

RMV-1
ガンタンクII



MSとしては問題の多いRX－75を、局地防衛用戦闘車両として再開発した機体。戦闘車両に徹したことで問題点も少なく、ただちに量産が決定した。武装はRX－75より強力で、120ミリライフル砲2門、180ミリ4連装ロケット弾ポッド、3連装ミサイルランチャー、80ミリ機関砲、2連装スモークディスチャージャー2基。乗員は操縦者と砲手の2名。

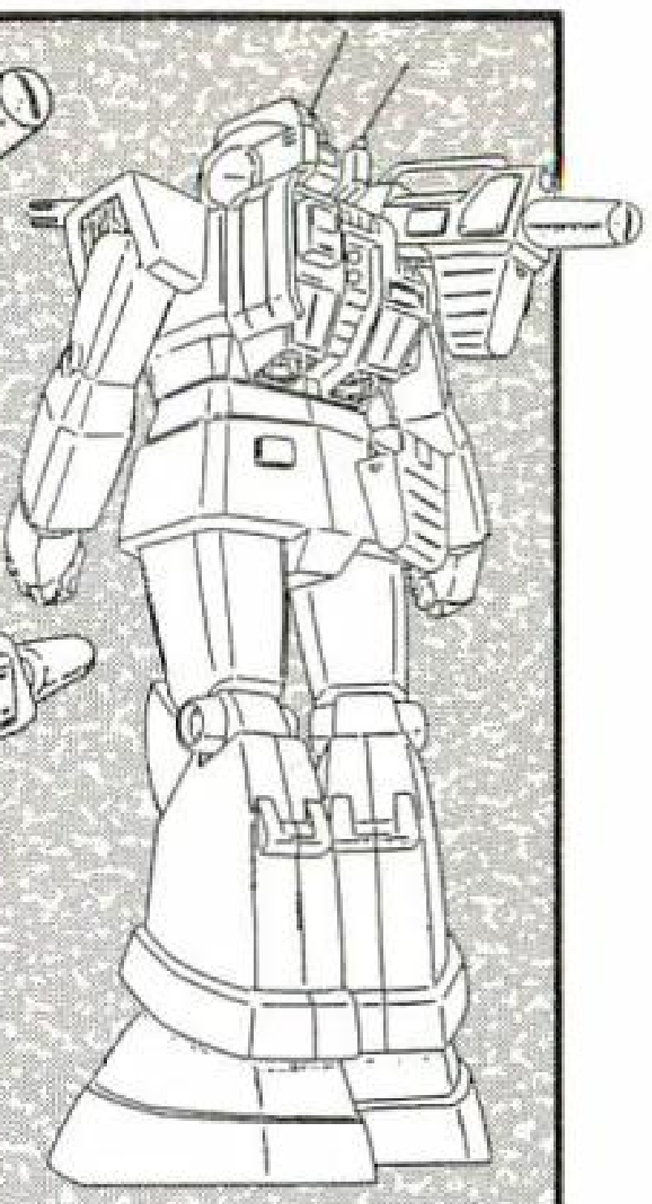
RGC-80 ジムキャノン





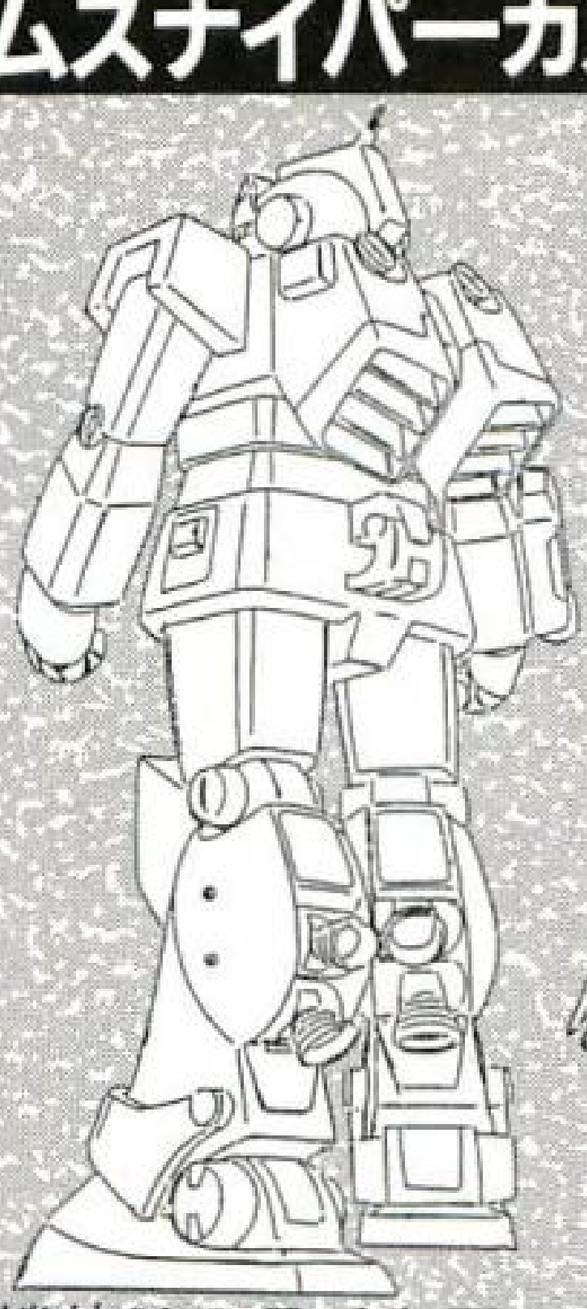
キャノン砲

ビームライフル

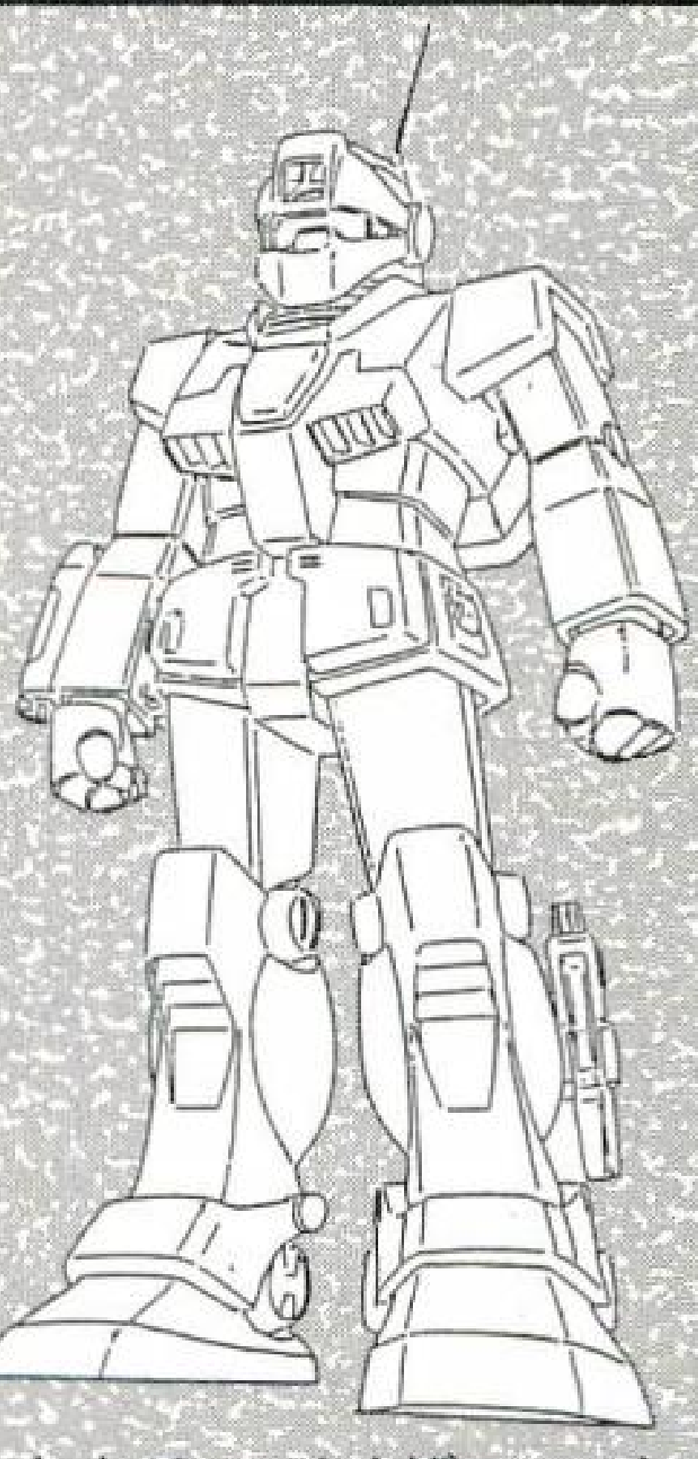


RGM－79をベースに、砲撃戦仕様として再設計された機体。右肩にキャノン砲を装備し、装甲を強化している。本来、砲撃戦用の量産機はRX－77－３型とされていたが、当時の物資や開発期間等の問題により、このRGC－80が量産機となった。

RGM-79(SC) ジムスナイパーカスタム



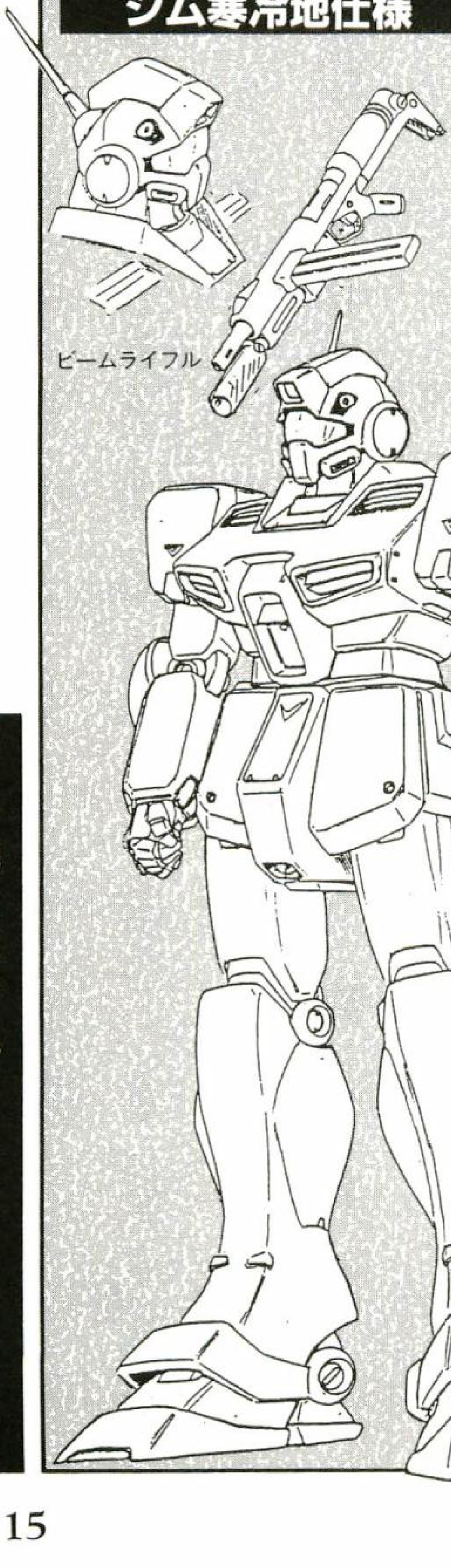




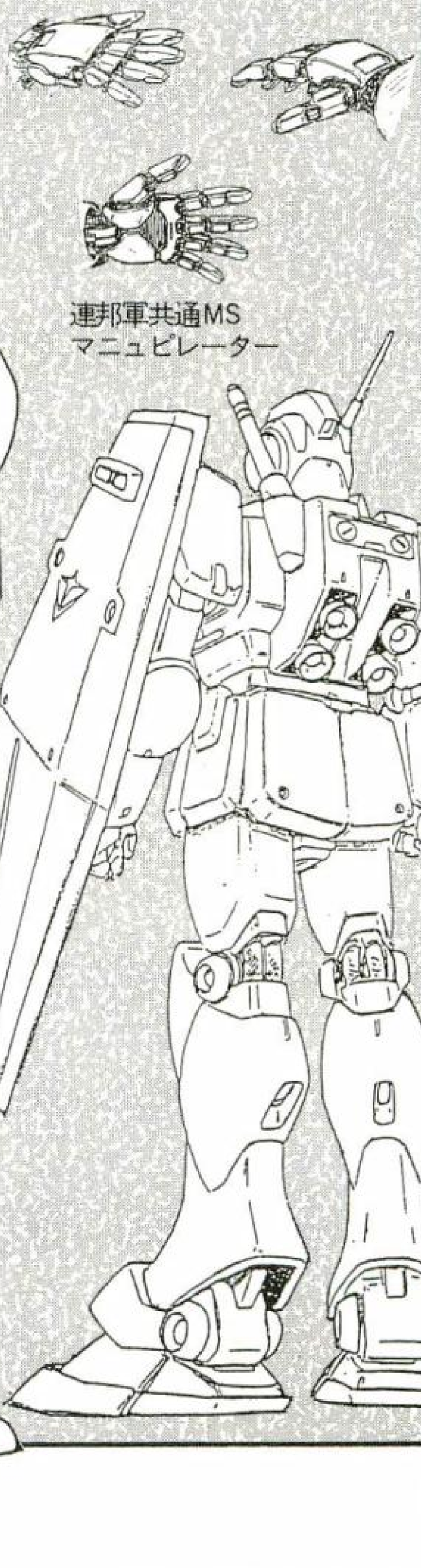
この機体は、ライトアーマーと同様に、熟練パイロット用として開発された。ライトアーマーが軽量化により機動力をあげたのに対し、総合性能を向上させ、バイザー、バックパック強化、バーニア、スラスターの追加等が行なわれた。武装もRX－78と同程度の火力をもつ。

RGM-79D
ジム寒冷地仕様

この機体は、RGM－79の生産も後期に入ってからのもので、技術的にはRGM－179とMSA－003に分派する直前の機体である。性能的には通常のRGM－79と大きな差はなく、寒冷地に対応したパーツとの換装を行った程度で、武装をマシンガンに変えてあるのが主な特徴である。



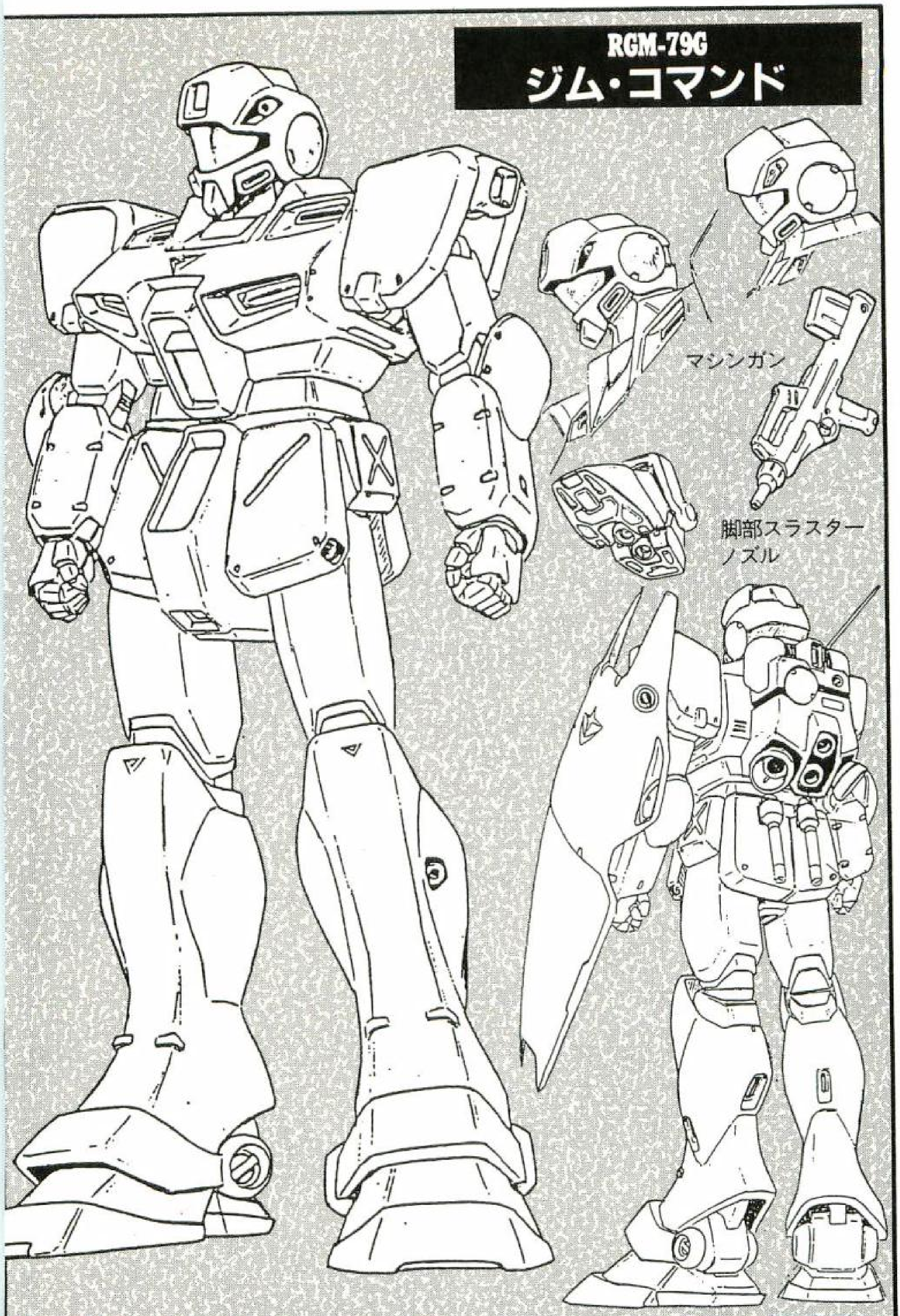
ビームライフル



連邦軍共通MS
マニュピレーター

寒冷地仕様ジム

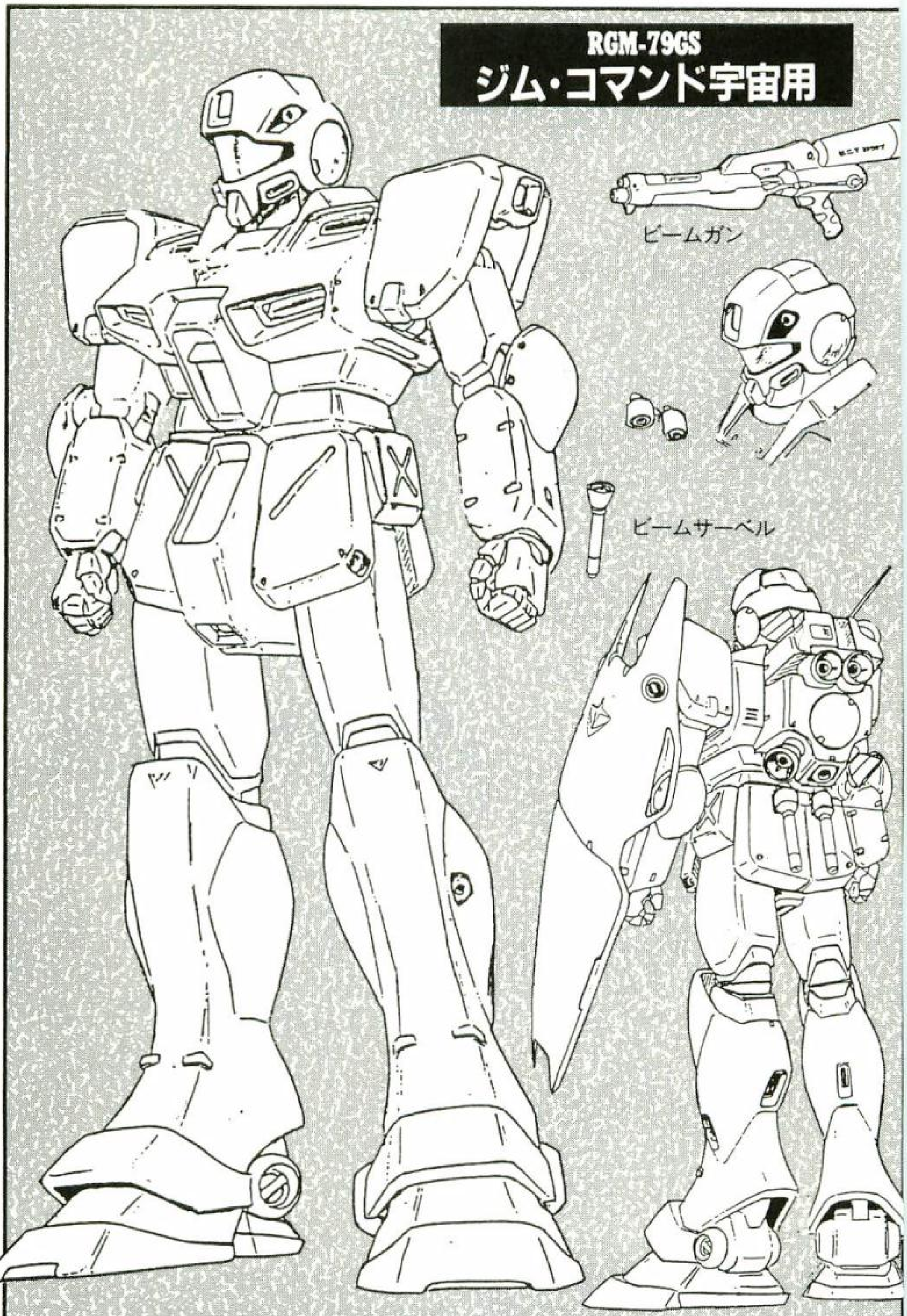
RGM-79G
ジム・コマンド



量産型のRGM－79系のMSは、汎用性にすぐれていたため、多様な任務に対応することができた。この機体はコロニー戦用の装備を施してあるだけで、性能等に決定的な差はない。

しかし、RGM－79シリーズ自体がかなりのバリエーションを生み出していた時期と重なるため、本来のノーマルバージョンとは仕様、外観、武装等が異なる。

RGM-79GS
ジム・コマンド宇宙用

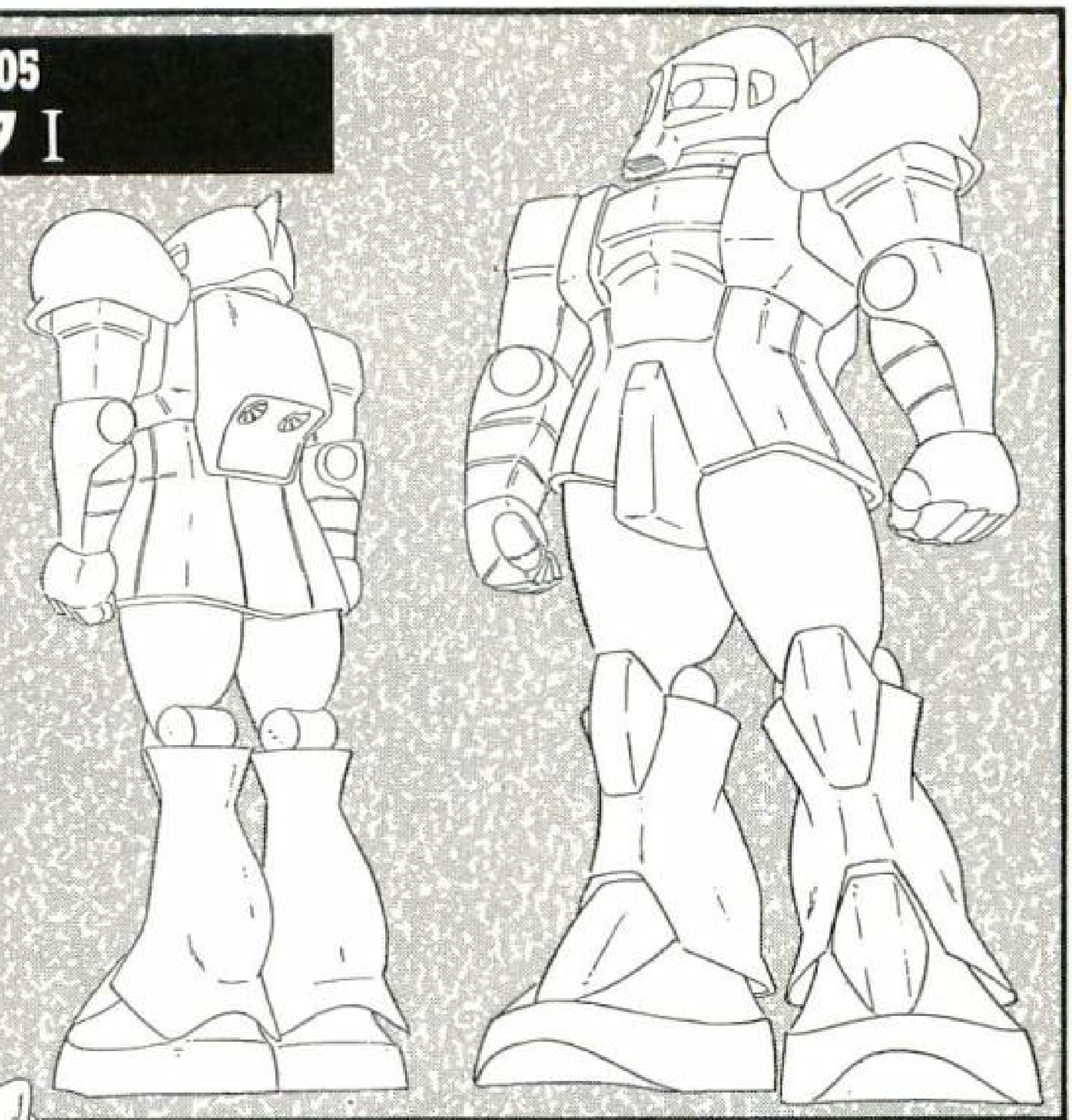


ジム・コマンド宇宙用

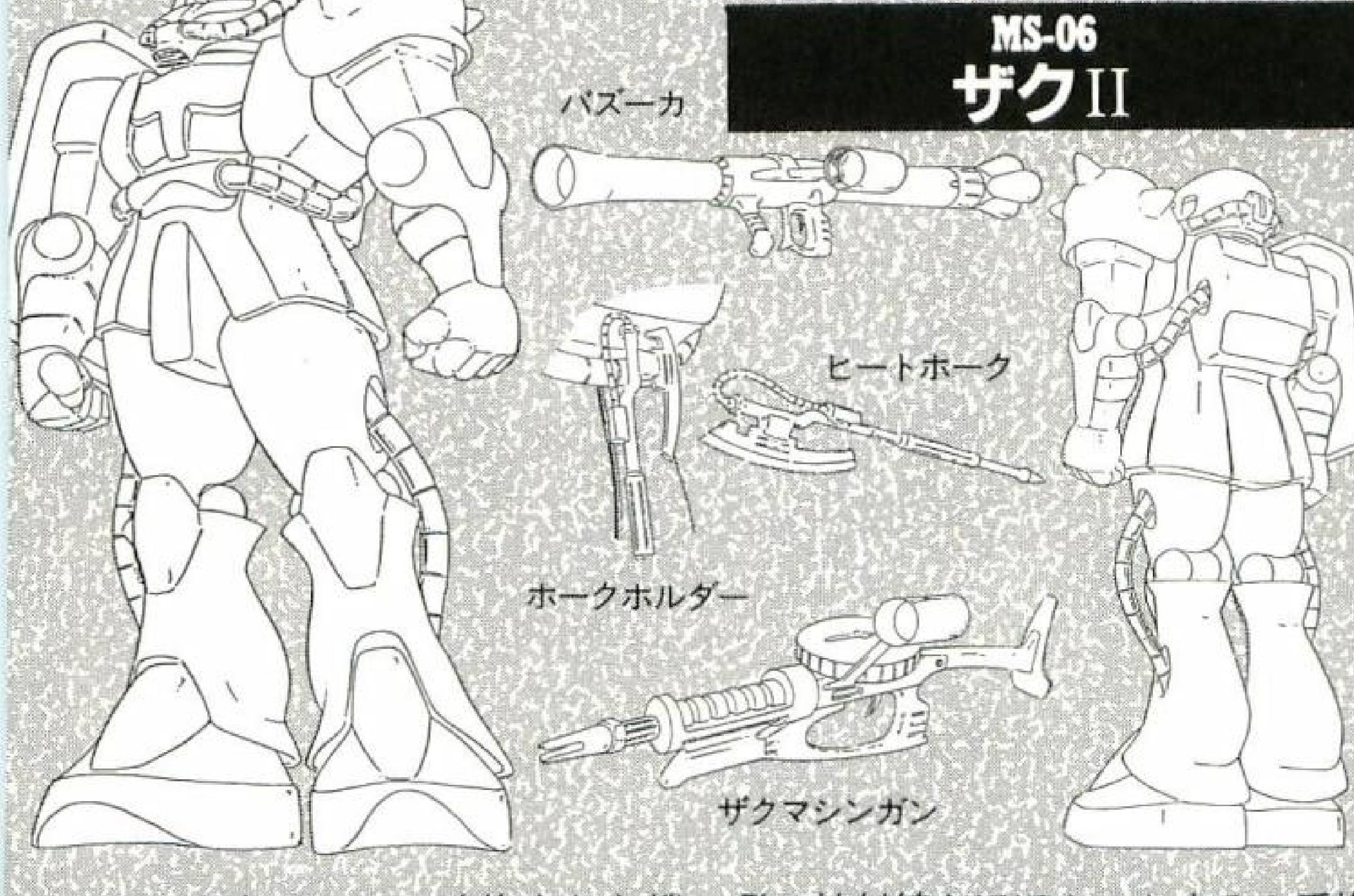
このRGM－79GSは、RGM－79の性能向上機で、ライトアーマー、スナイパーカスタムのように特定の機能や装備を追求したものではなかった。この時期には、バリエーションに対応するためのノウハウも確立され始めており、この機体においても、宇宙戦用の装備を施しただけで、武装と外観以外に特別な改修は受けていない。

MS-05 ザクⅠ

公国軍初の量産型MS。大戦初期のブリティッシュ作戦で活躍した。だが、MS－06の量産が進むにつれ前線から退き、輸送隊へ配属されていった。

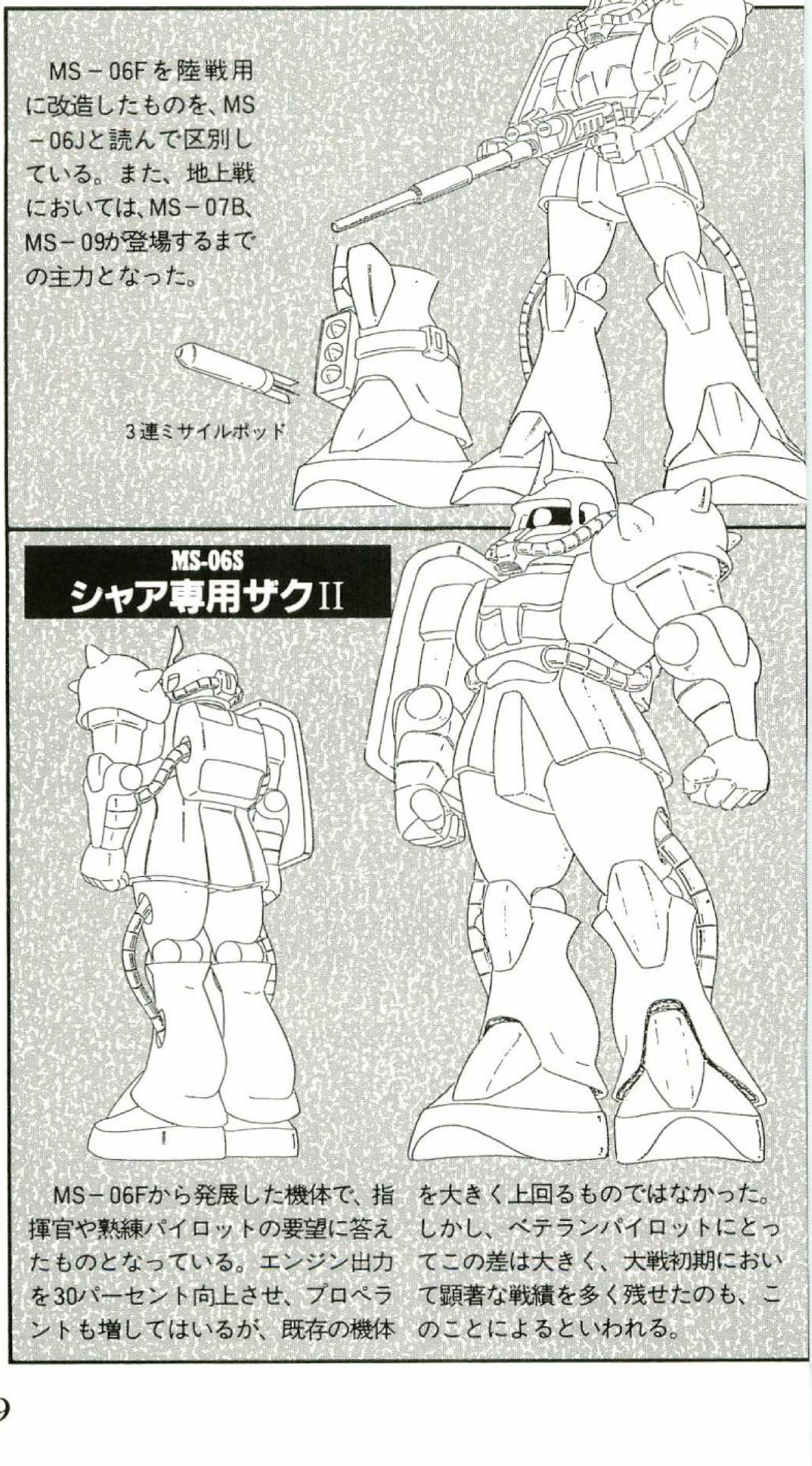


MS-06 ザクⅡ



MS－05をベースに改修された機体。バリエーションを含めた生産台数は両軍を通じて最も多い。連邦軍のRXシリーズもこの機体を参考に開発した。武装は120ミリマシンガンで、大戦初期の作戦では核弾頭の240ミリバズーカも使用した。装甲は核爆発の放射線をほぼカットする3重複合装甲で、そのため自重は72tに達した。南極条約締結後に製造されたF型は放射能対策が設計から外され、装甲を軽量化し、ジェネレータも高出力型に換装した。このF型がザクⅡの中で最も生産台数が多い。

MS－06Fを陸戦用に改造したものを、MS－06Jと読んで区別している。また、地上戦においては、MS－07B、MS－09が登場するまでの主力となった。



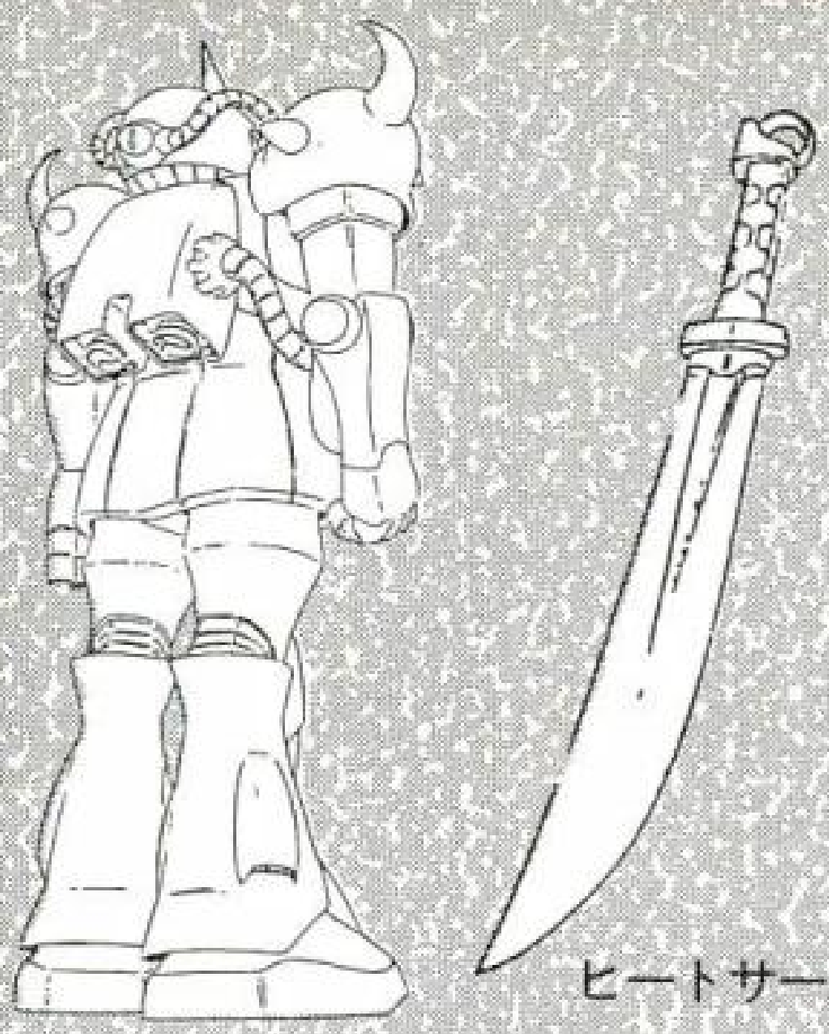
3連ミサイルポッド

MS-06S
シャア専用ザクII

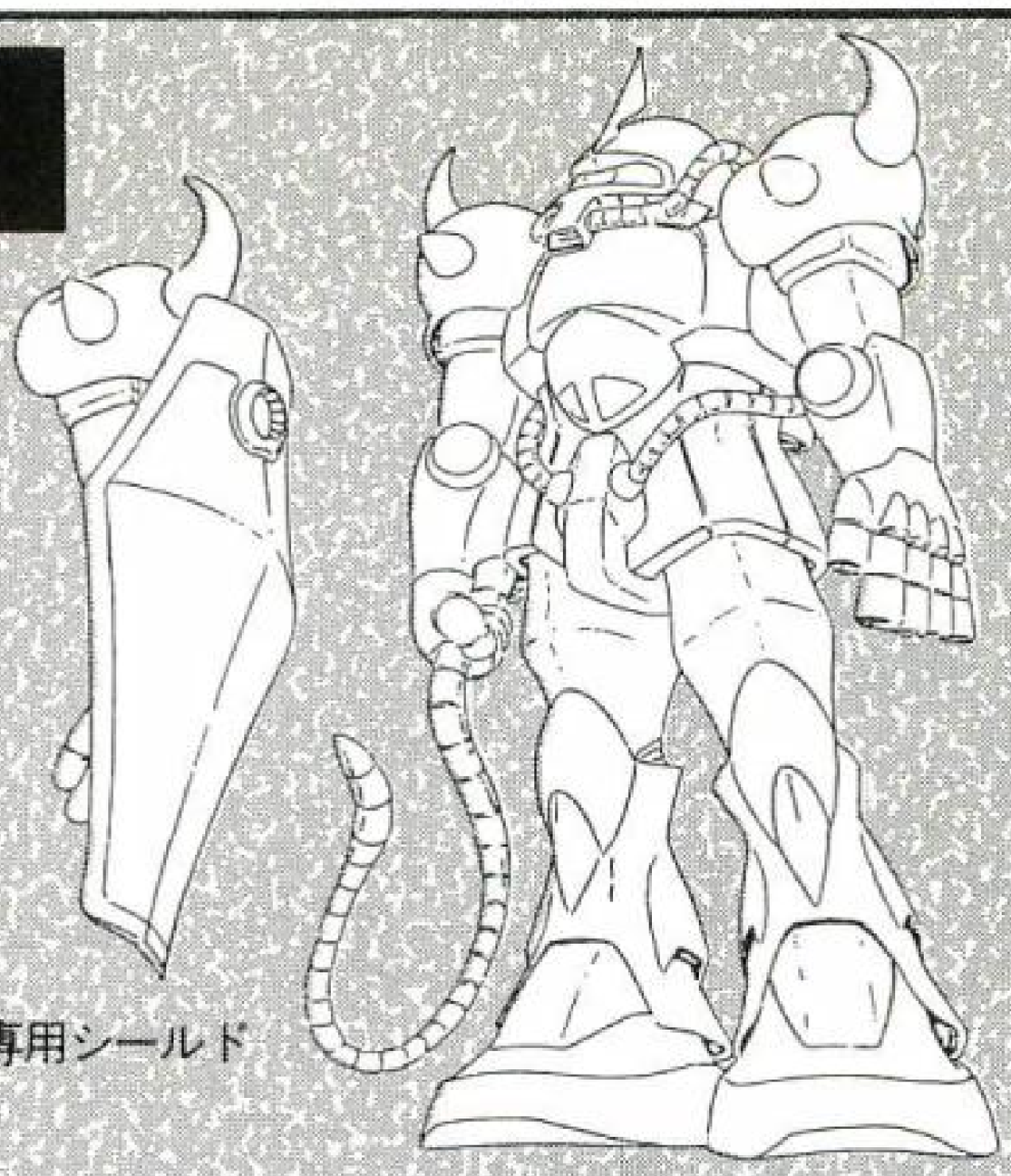
ザクII～シャア専用ザクII

MS－06Fから発展した機体で、指揮官や熟練パイロットの要望に答えたものとなっている。エンジン出力を30パーセント向上させ、プロペラントも増してはいるが、既存の機体を大きく上回るものではなかった。しかし、ベテランパイロットにとってこの差は大きく、大戦初期において顕著な戦績を多く残せたのも、このことによるといわれる。

MS-07B グフ



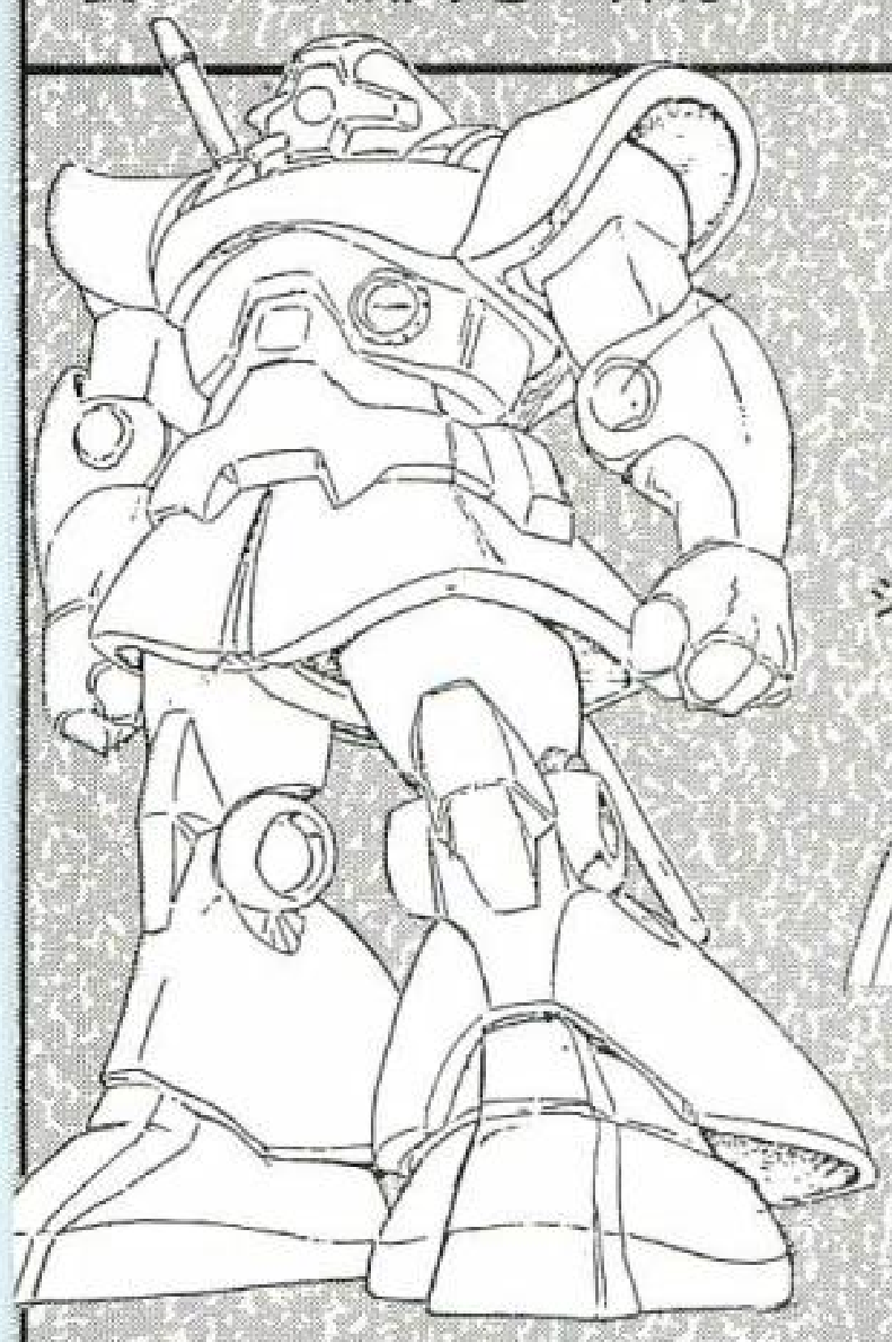
ヒートサーベル



専用シールド

陸戦用ザクII（J型）の後継機として開発された機体である。公国軍側は大戦の後期に連邦軍もMSを開発することを予測しており、この新型機を対MS戦仕様とした。左腕の5連装75ミリ機関砲と右腕のヒートロッドが固定武装となり、格闘戦用のシールドとヒートサーベルも装備された。また、バックパックのスラスターも大型化し、機動性・運動性とも に向上している。ザク程ではないが、改造型も多く確認されている。

MS-09(R09) ドム(リック・ドム)



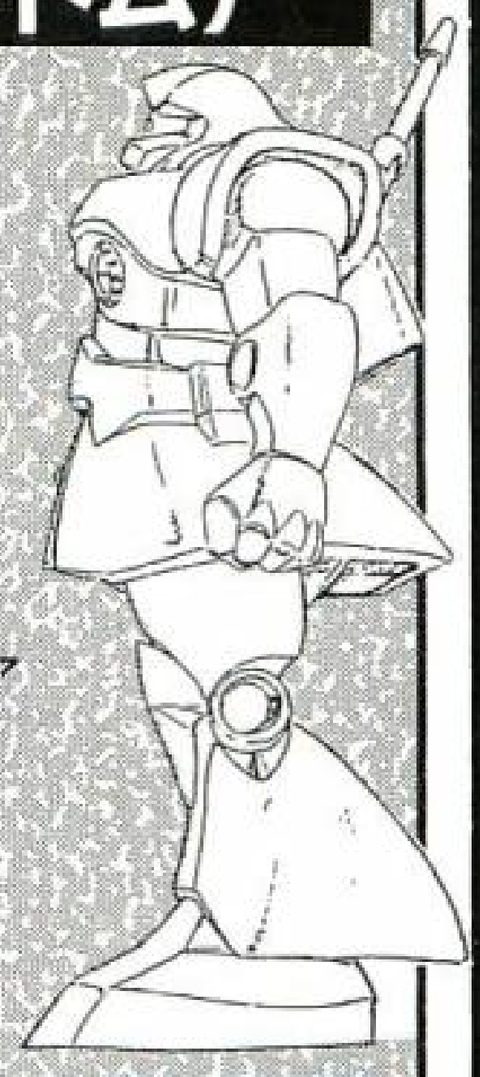


ジャイアント・バズーカ

リック・ドム
腰部バーニア



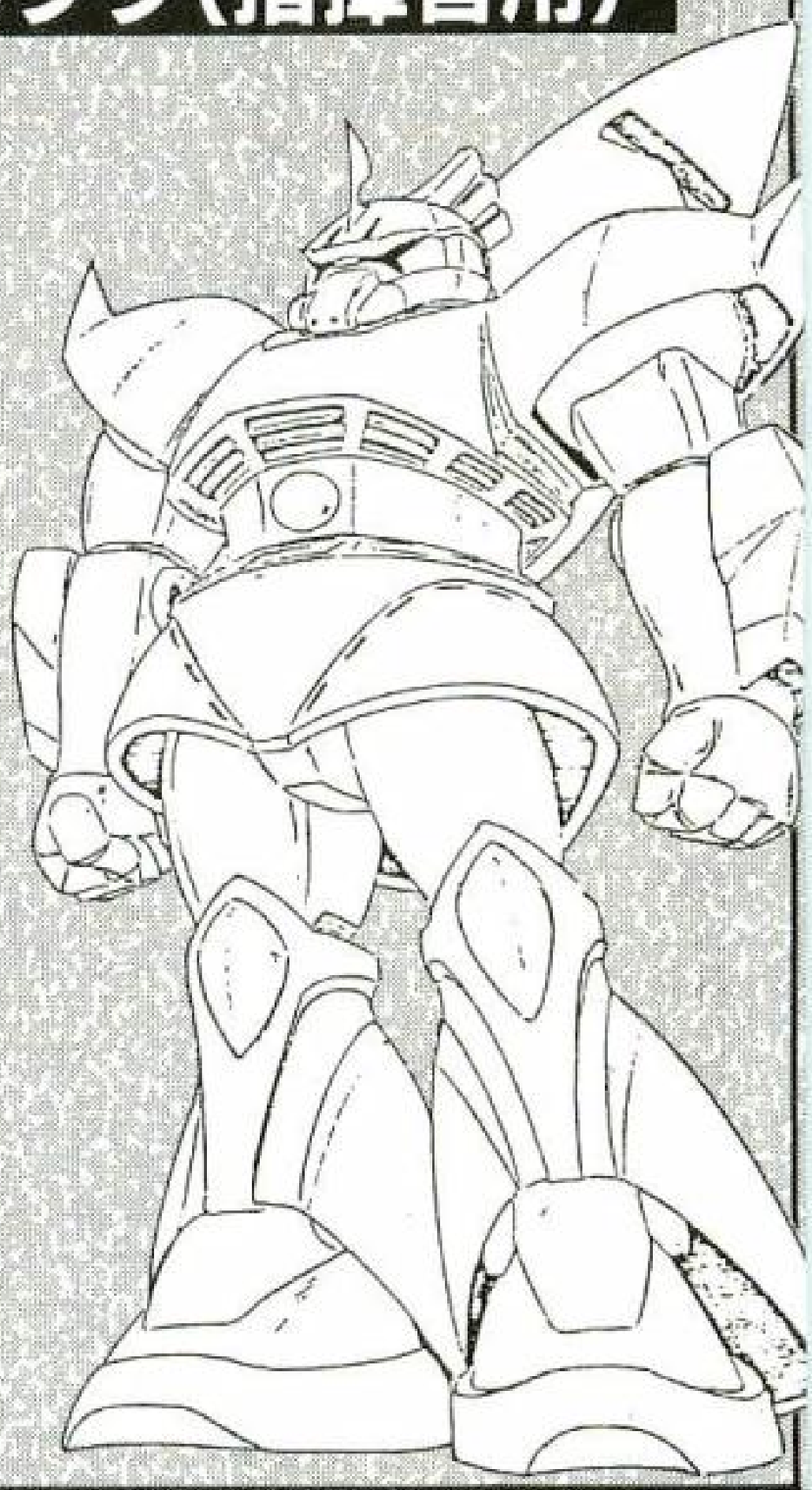
脚部バーニア

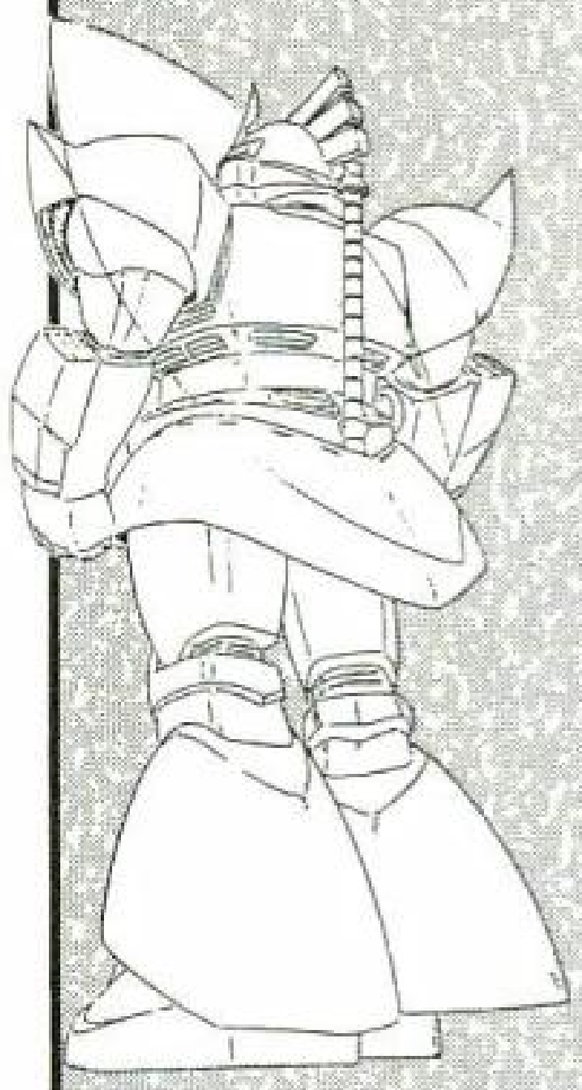


MS－07Bまでのモビルスーツの最大の問題点である地上での移動能力を解決した機体である。熱核ジェットと化学ロケットの複合推力でホバー走行し、MS単独での行動半径を飛躍に向上させた。さらに、地球攻略のためにおくれていた宇宙用MSの開発の空白をうめるためこの機体を改修し、MS－R09リック・ドムとして、MS－14Aが量産されるまで暫定的に主力モビルスーツとして活躍した。

MS-14A
ゲルググ（指揮官用）

大戦末期に登場した汎用機。水陸両用MSを含めた全てのMSのノウハウが結集し、公国軍初の携帯式ビーム兵器を搭載した機体となる。MS－R09以上の大型機となるが、運動性は機体の追従性、アポジモーターの推力向上によりむしろ向上している。

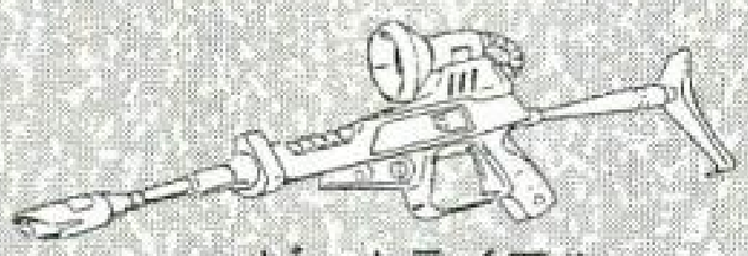






専用シールド

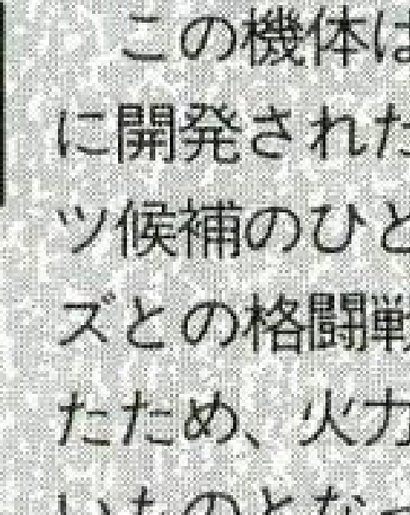
ビームソード



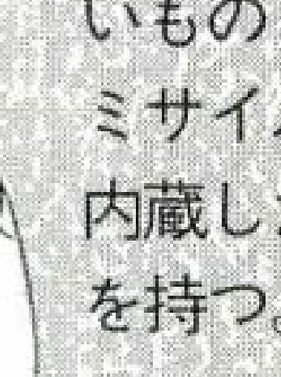
ビームライフル

MS-15
ギャン

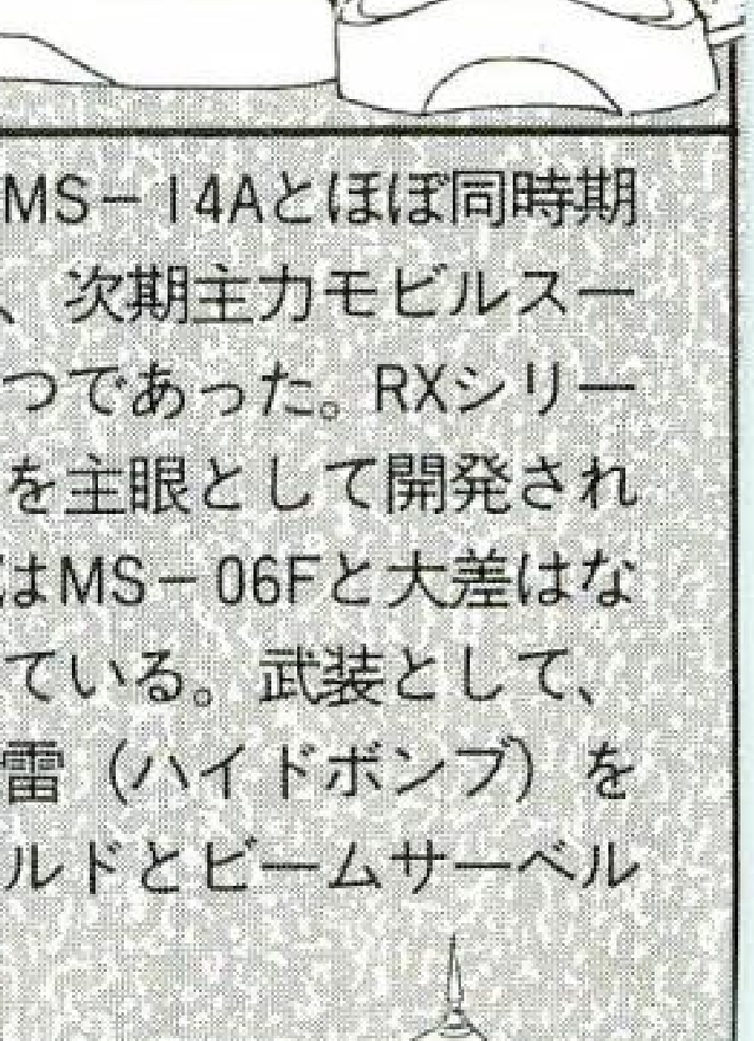
この機体はMS－14Aとほぼ同時期に開発された、次期主力モビルスーツ候補のひとつであった。RXシリーズとの格闘戦を主眼として開発されたため、火力はMS－06Fと大差はないものとなっている。武装として、ミサイルや機雷（ハイドボンブ）を内蔵したシールドとビームサーベルを持つ。



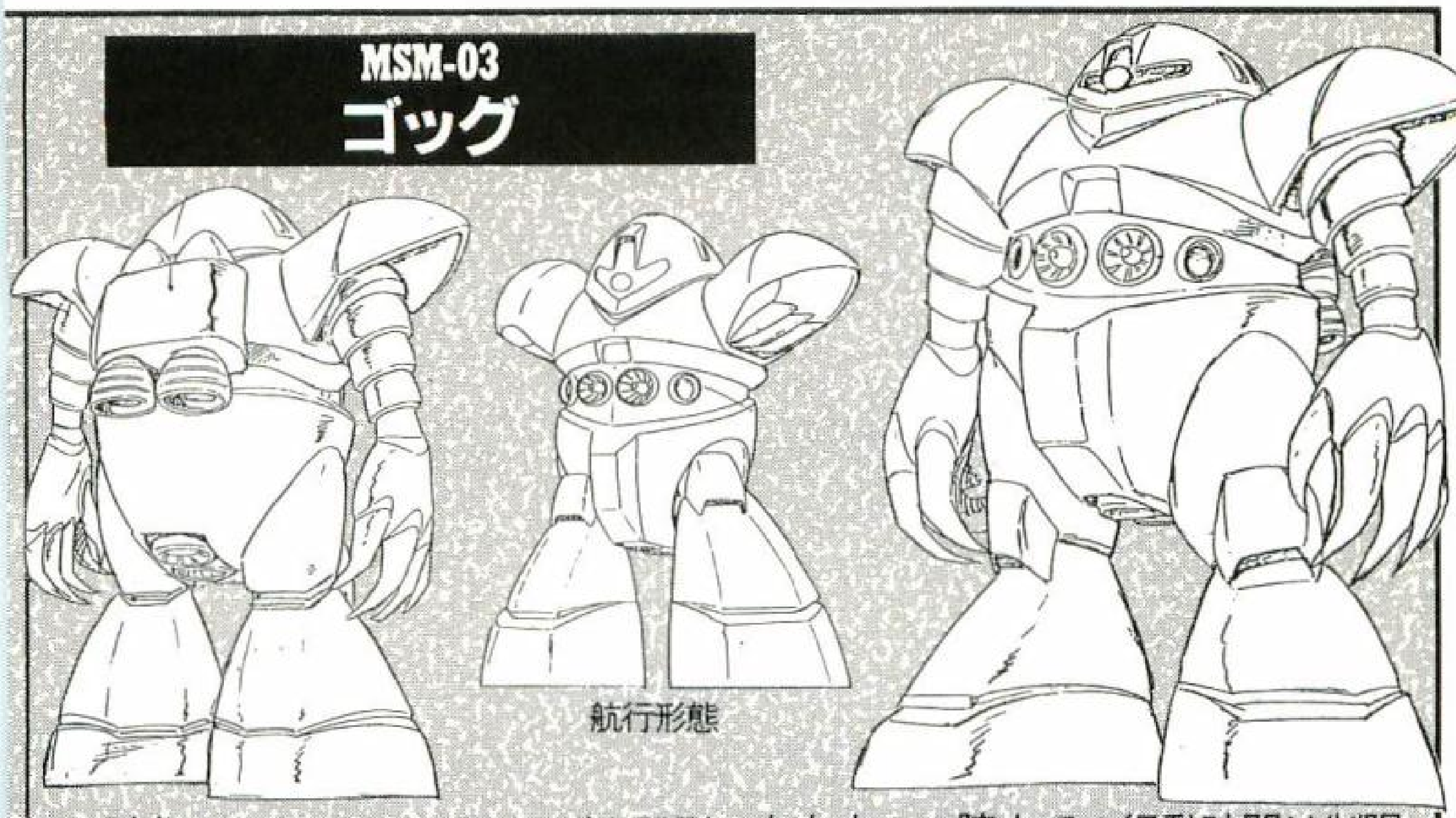
シールド内ミサイル



ハンドボンブ

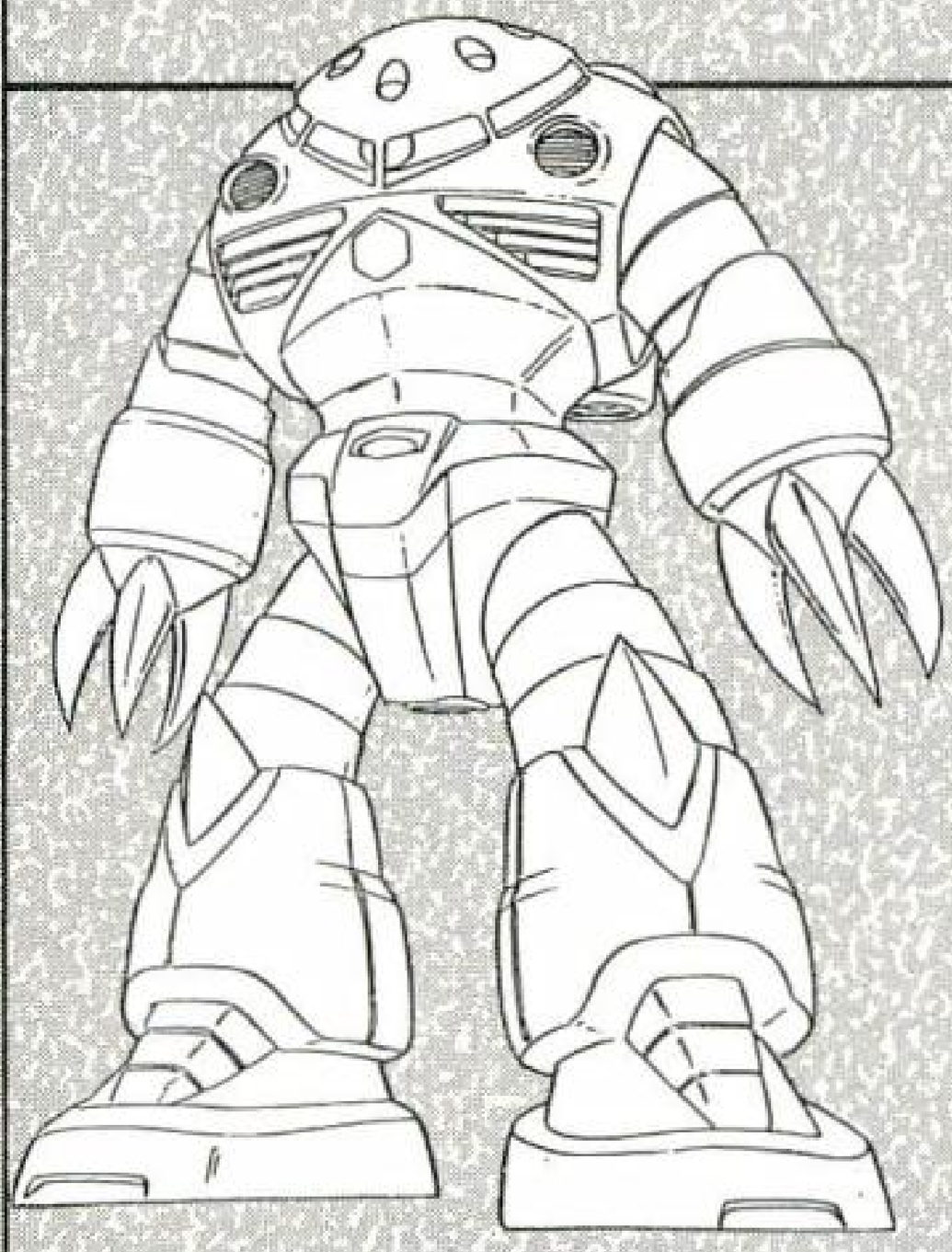


MSM-03
ゴッグ

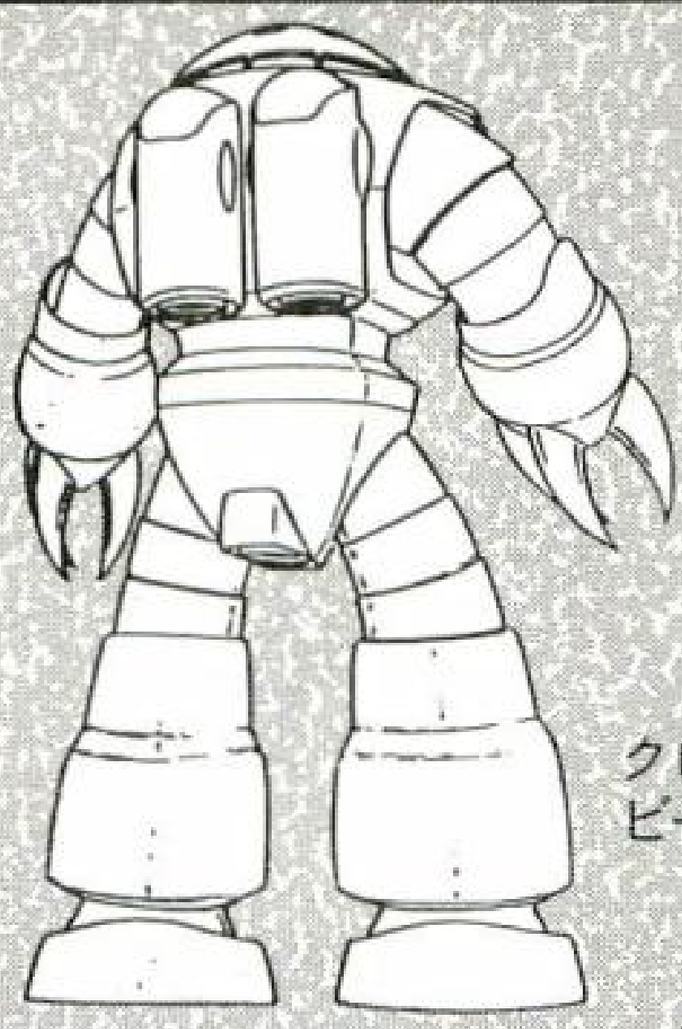


航行形態

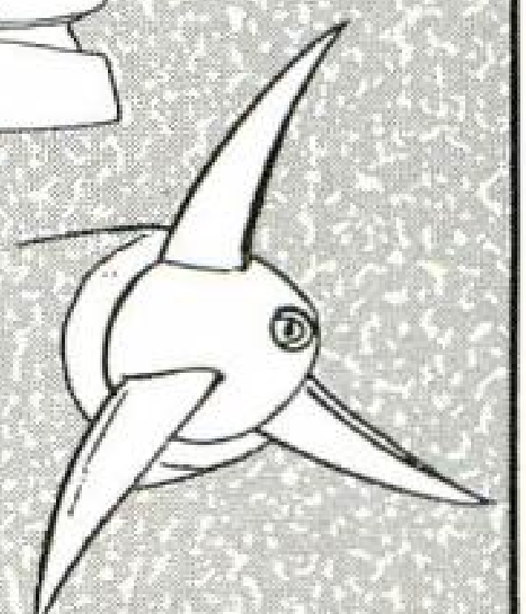
試作されたMS－06Mは、ザクII型モビルスーツを水中用として改造したものだったが、性能的な問題を解消できず、中止されてしまった。その後を受けて開発されたのがこの機体である。水陸両用機として開発されたものの陸上での行動時間は制限されていた。しかし、フリージーヤードによる対潜兵器の無力化と2門のメガ粒子砲と2基のミサイルランチャーを装備したこの機体は、上陸作戦等で多くの戦績を残している。



MSM-07(07S)
ズゴック(シャア専用)

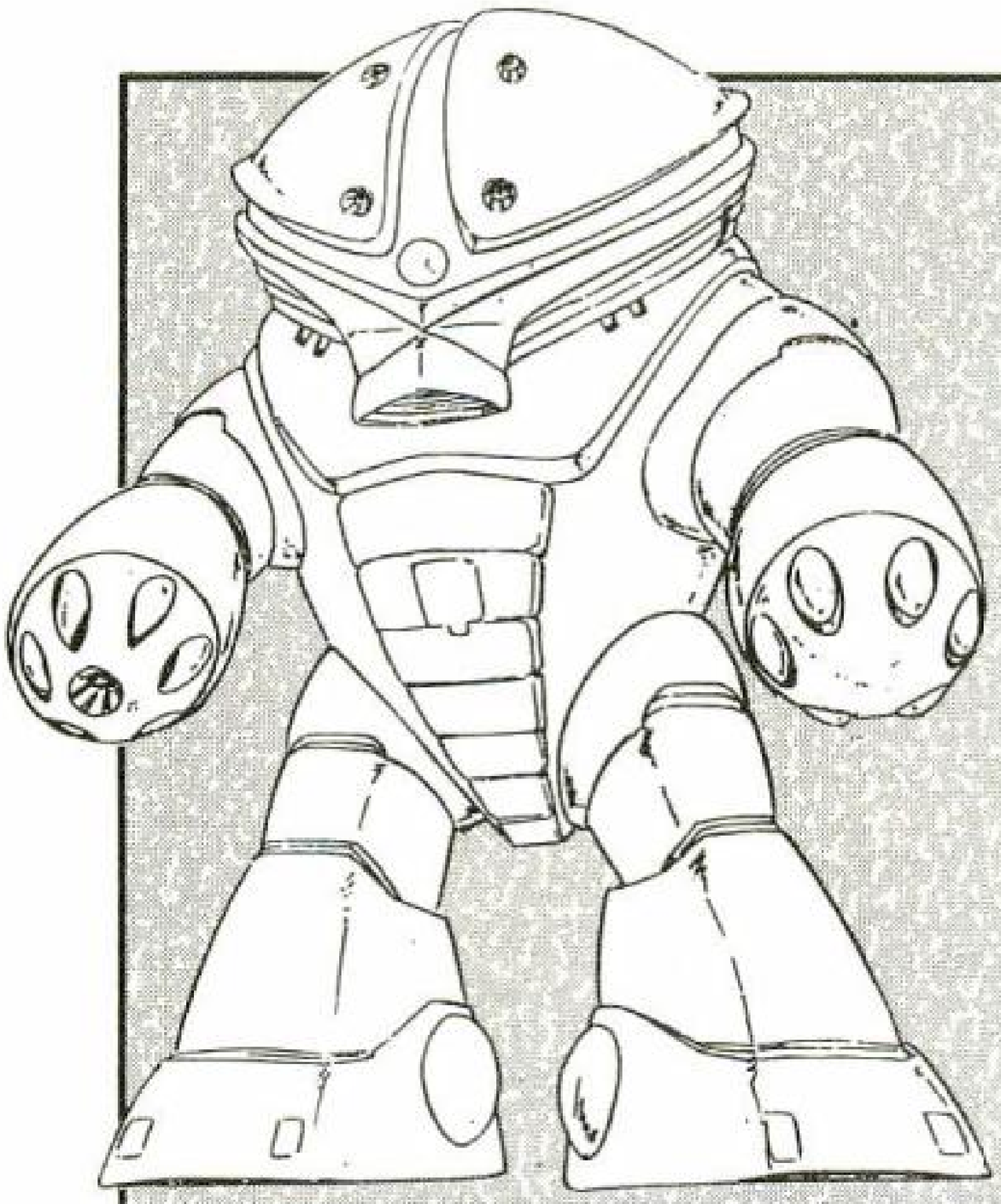


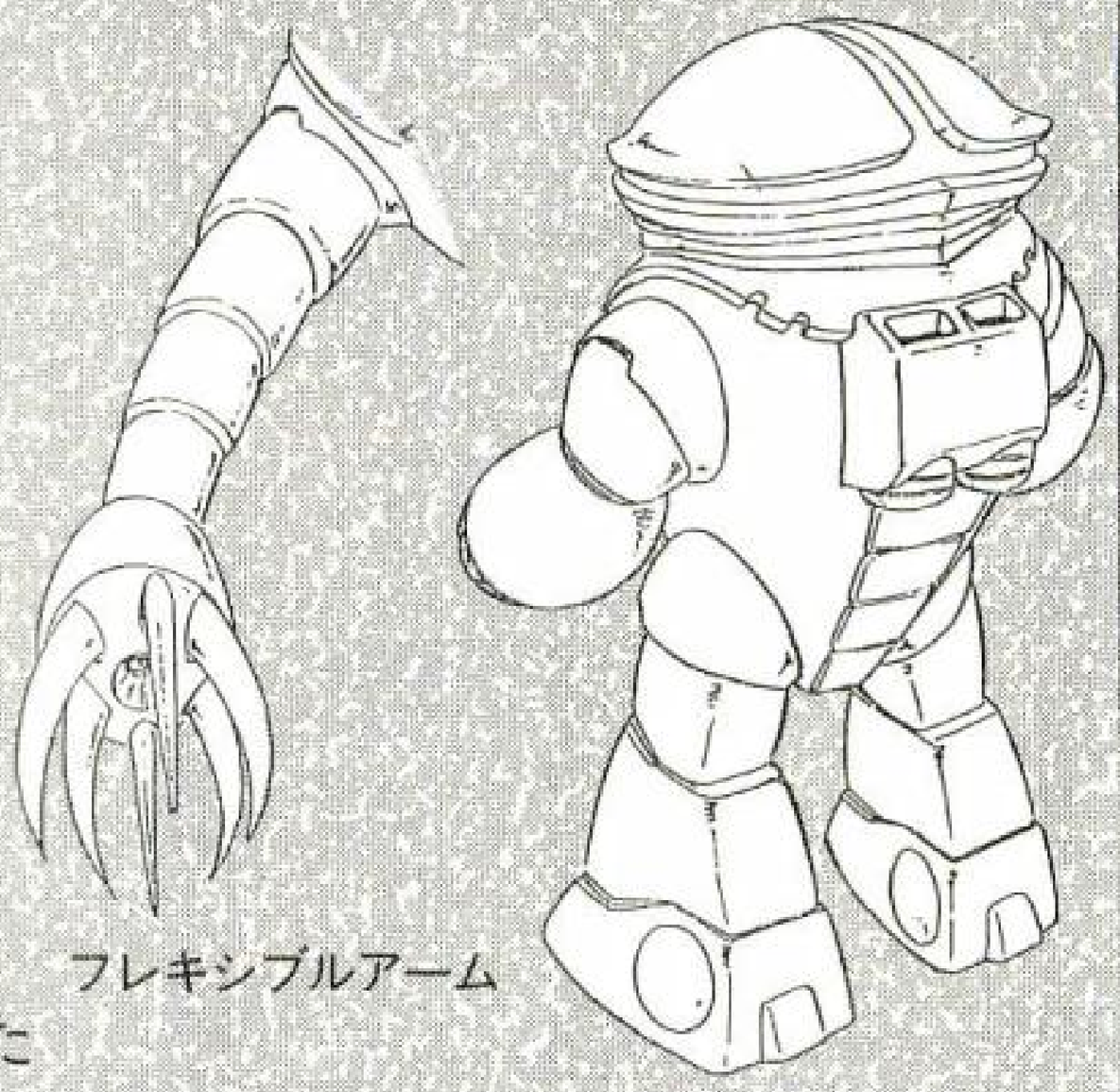
クローバイス
ビーム砲



この機体は水陸両用型として開発されたものだが、陸戦能力も極めて高く、武装もメガ粒子砲2門、ロケット砲6門、格闘戦用クローと充実している。さらにこの改良型のMSM－07Sは反応炉の出力、運動性、装甲の材質等が改善されていて、指揮官用のみならず後期生産時にはすべてS型にきりかえられている。

MSM-04
アッガイ

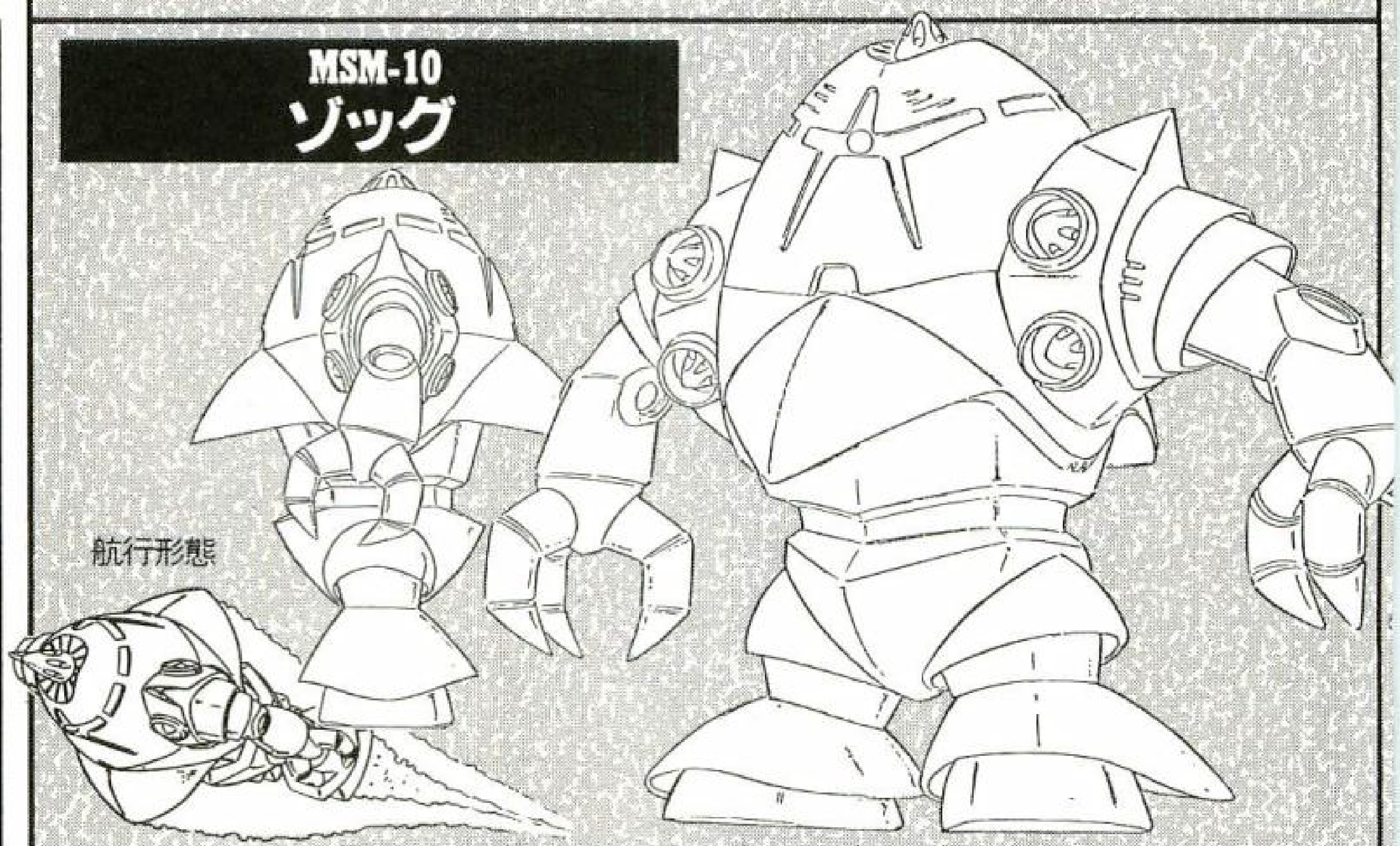




フレキシブルアーム

MSM－07の後に開発が開始されたが、同機が改良を重ねている間に、MS－06シリーズのパーツの流用が可能だったせいもあって完成にこぎつけ、実戦配備された機体である。この機体は放出する熱量が少なかったために、装甲等にも手を加えてステルス性を向上させ、隠密作戦や偵察にも多用された。フレキシブルアーム、両腕のクロー、右腕のメガ粒子砲が装備されている。

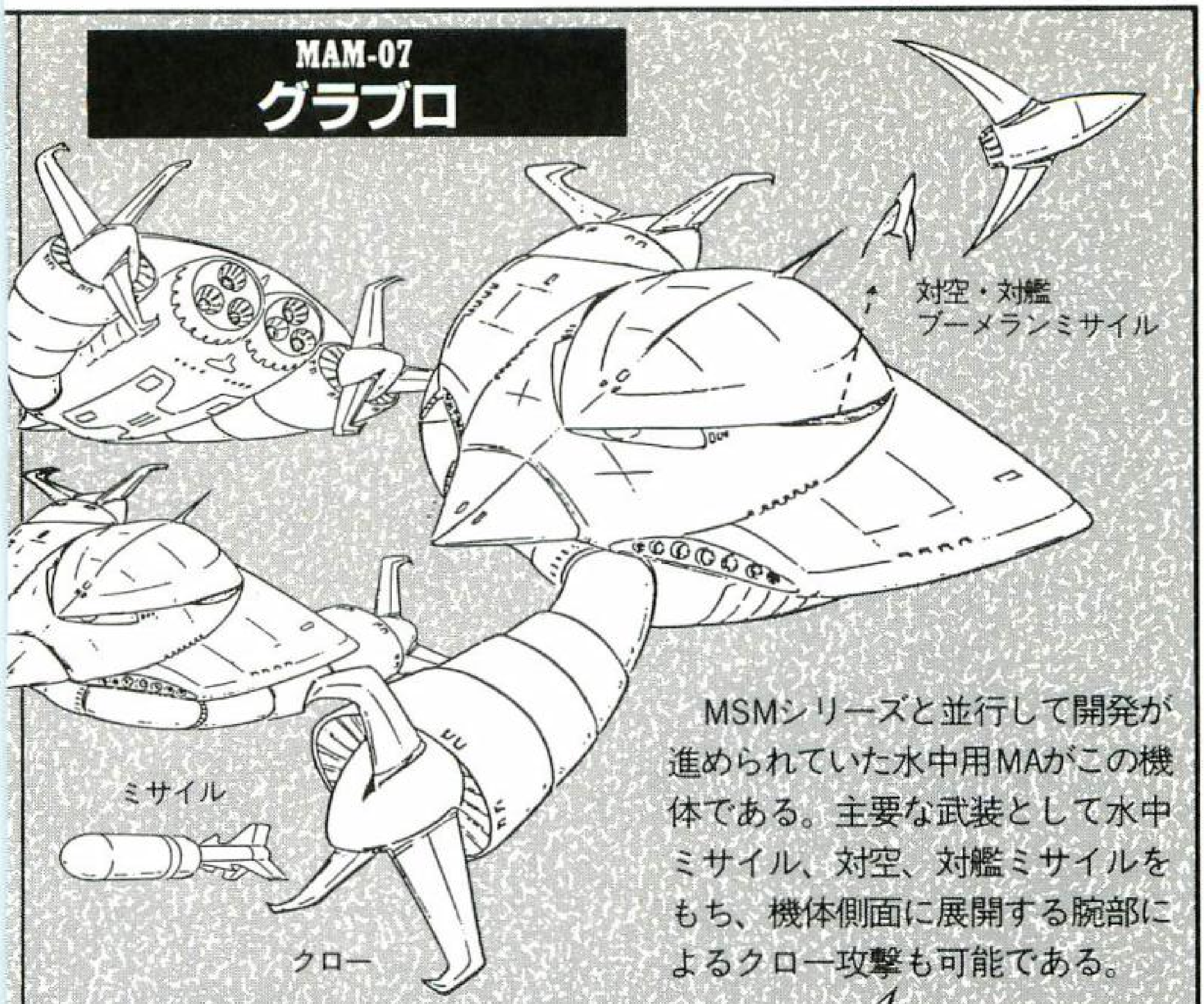
MSM-10
ゾッグ



航行形態

この機体は公国軍の水陸両用モビルスーツの中でも特異な存在で、モビルスーツとモビルアーマーの過渡期に制作されたため、独特の形状をしている。脚部も歩行が不可能な構造で、陸上の移動はロケットエンジンで行うというものだった。通常の2～3倍の出力の反応炉をもち、9門あるメガ粒子砲を連射するという移動砲座並みの火力を誇る。

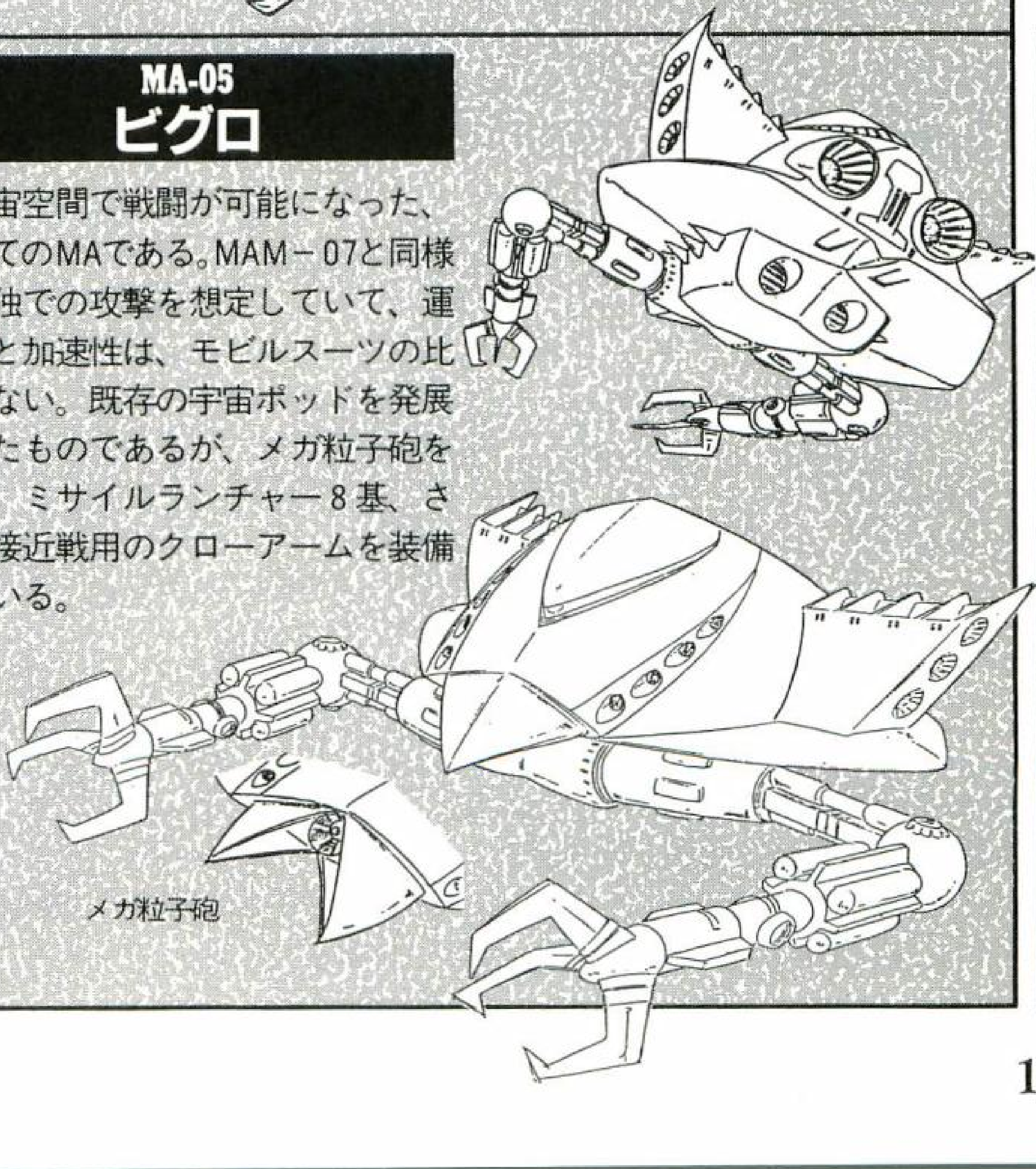
MAM-07 グラブロ



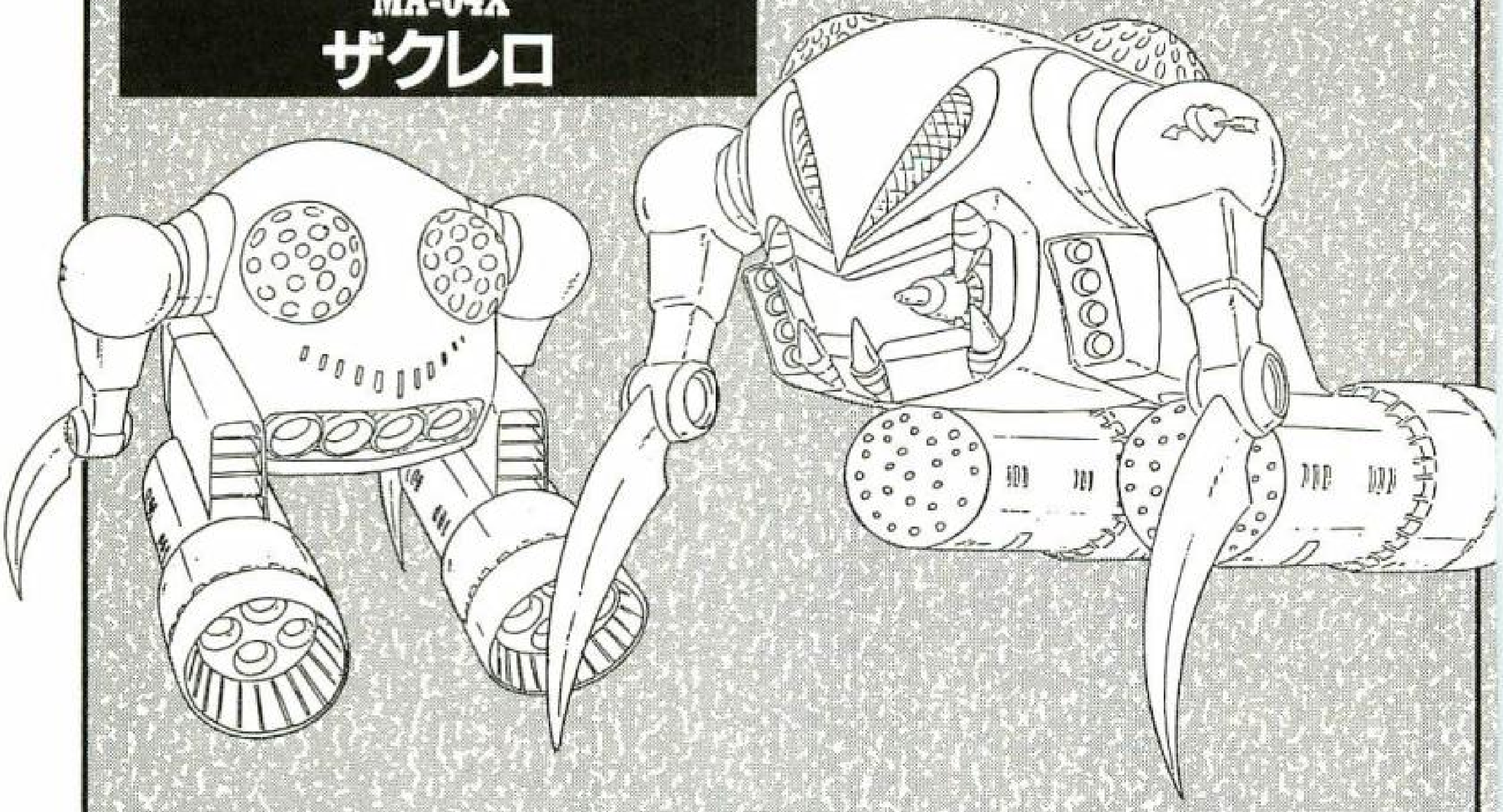
MSMシリーズと並行して開発が進められていた水中用MAがこの機体である。主要な武装として水中ミサイル、対空、対艦ミサイルをもち、機体側面に展開する腕部によるクロー攻撃も可能である。

MA-05 ビグロ

宇宙空間で戦闘が可能になった、初めてのMAである。MAM－07と同様に単独での攻撃を想定していて、運動性と加速性は、モビルスーツの比ではない。既存の宇宙ポッドを発展させたものであるが、メガ粒子砲を1門、ミサイルランチャー8基、さらに接近戦用のクローアームを装備している。

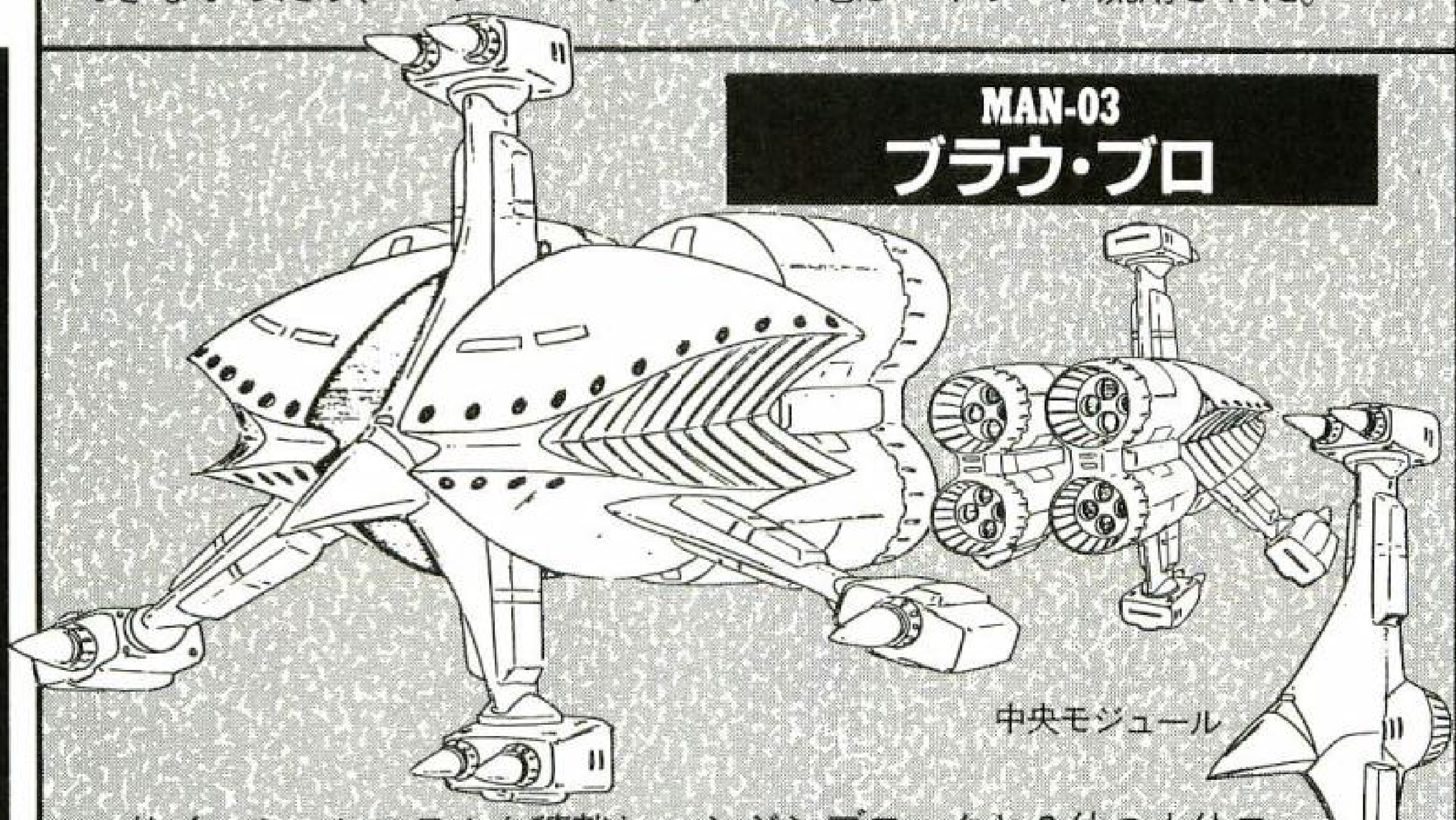


MA-04X
ザクレロ



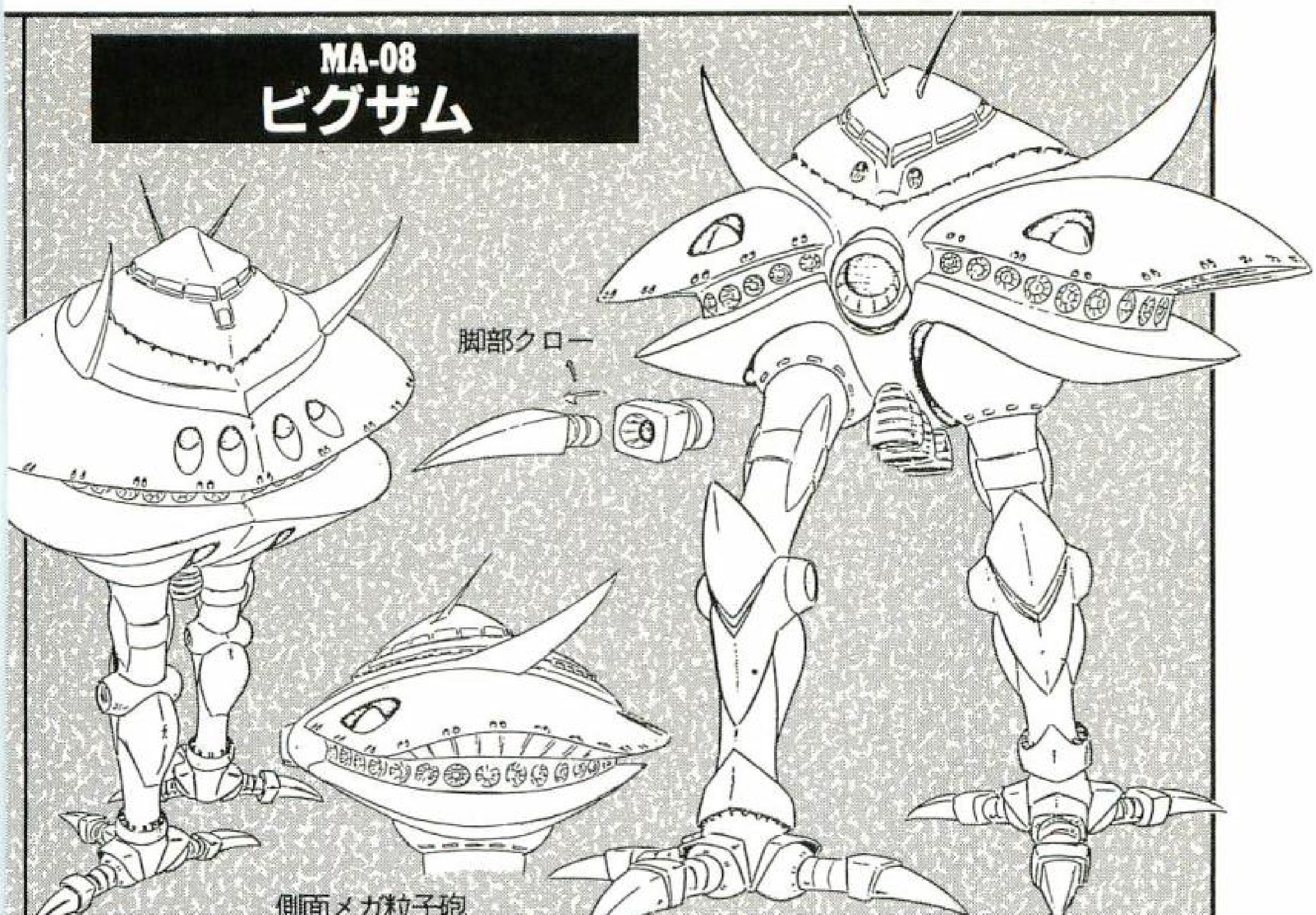
この機体はMAM－07やMA－05以前に開発が始まっていたものの、中途で放棄されたものである。運動性や加速性能で計画通りのものを達成できなかったが、パワーコンデンサーは良好で、ビーム兵器の長時間使用に耐えられる。拡散ビーム砲の搭載が大きな特長であり、これだけでもこの機体の価値がある。このビーム砲はスキウレに流用された。

MAN-03
ブラウ・ブロ



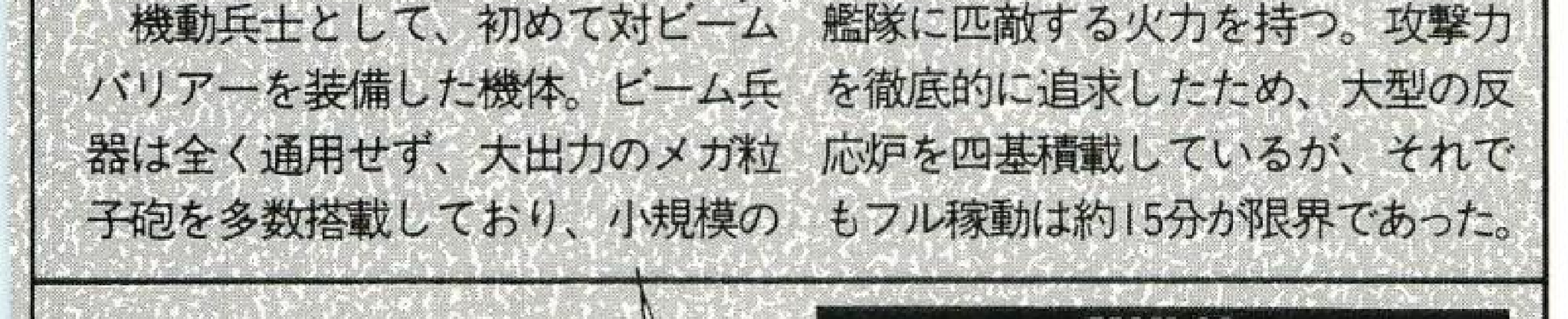
サイコミュシステムを積載しているため、本体は大型の突撃艇なみの大きさをもっている。サイコミュ兵器としても初めてのものであり、MAN－08やMSN－02はこの機がなければ開発できなかったとされる。２基のエンジンブロックと３体の本体モジュールで構成され、２連装２門、単装２門の有線サイコミュ式メガ粒子砲を使ったオールレンジ攻撃が可能。本体モジュールは、それぞれが各個に航行戦闘できる。

MA-08 ビグザム



機動兵士として、初めて対ビームバリアーを装備した機体。ビーム兵器は全く通用せず、大出力のメガ粒子砲を多数搭載しており、小規模の艦隊に匹敵する火力を持つ。攻撃力を徹底的に追求したため、大型の反応炉を四基積載しているが、それでもフル稼動は約15分が限界であった。

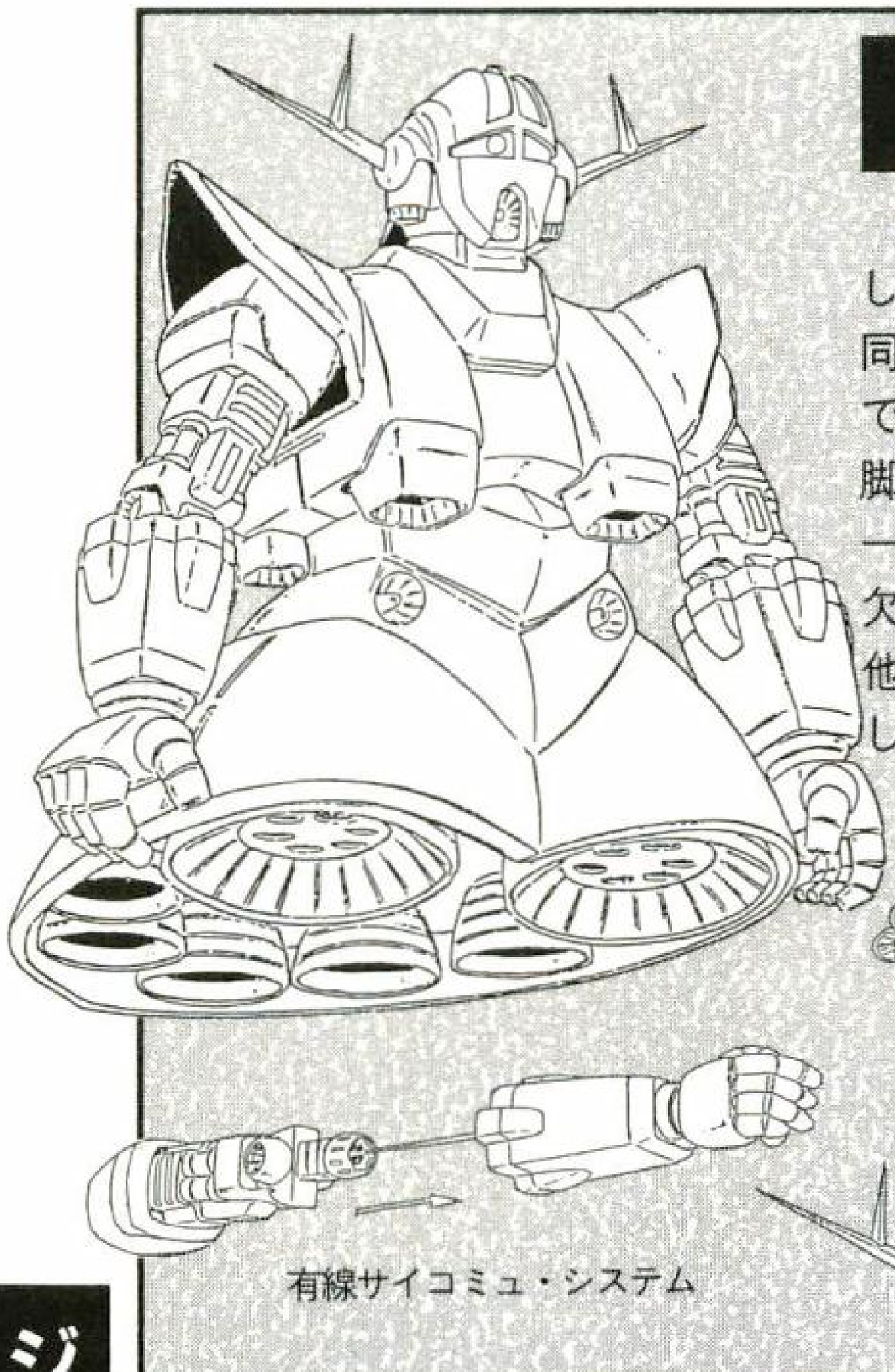
MAN-08 エルメス



ほとんどの操作をサイコミュで行なう、本格的なニュータイプ専用MA。本体に2門のメガ粒子砲を搭載しているが、攻撃の主体は本体から射出される無人随伴攻撃機“ビット”である。ビットは機体の後部に10機搭載されており、モノアイが装備されている。距離や電波状態の干渉を受けずに遠隔操作によるメガ粒子砲での攻撃が可能である。

MSN-02
ジオング

有線制御式メガ粒子砲を2基搭載したニュータイプ専用MA。MAN－02同様に機体を分離させ個別に戦闘ができるように設計されていた。だが、脚部の完成が遅れ、ア・バオア・クー戦では脚なし、腕部装甲の一部を欠いたまま出撃した。メガ粒子砲は他にも腹部に2門、頭部に1門搭載している。

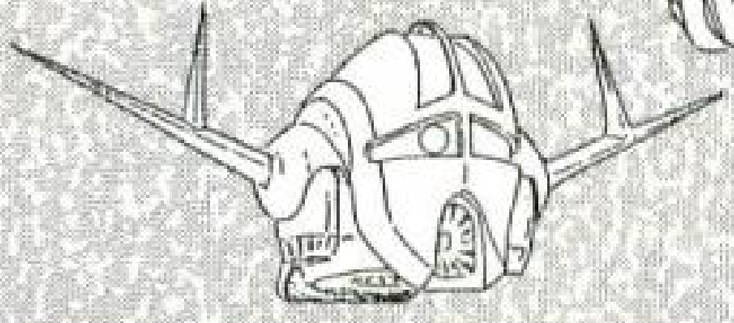


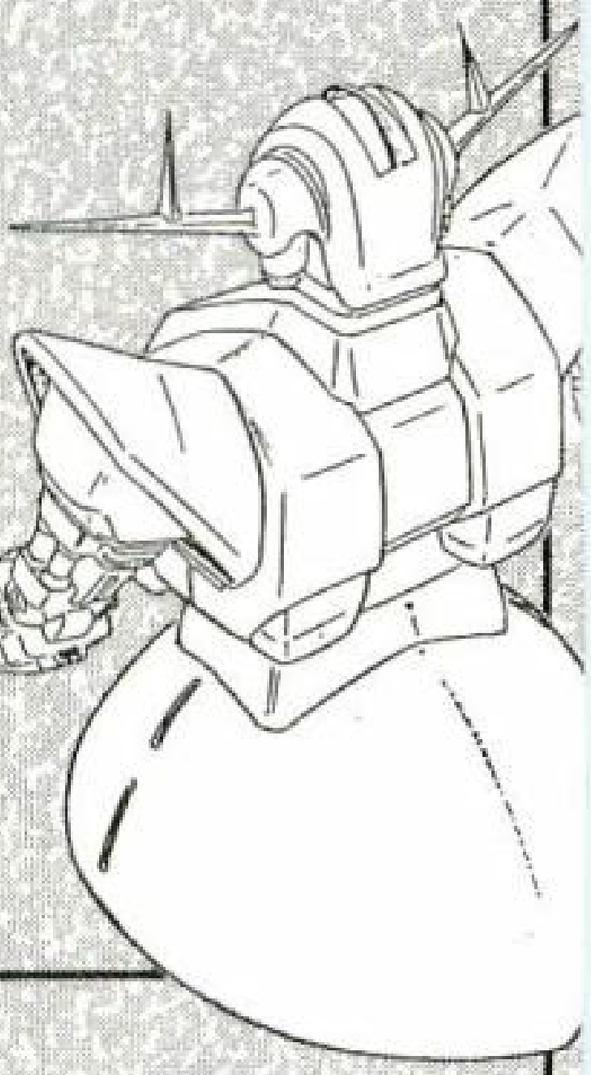
腕部5連装ビーム砲



有線サイコミュ・システム

頭部モジュール

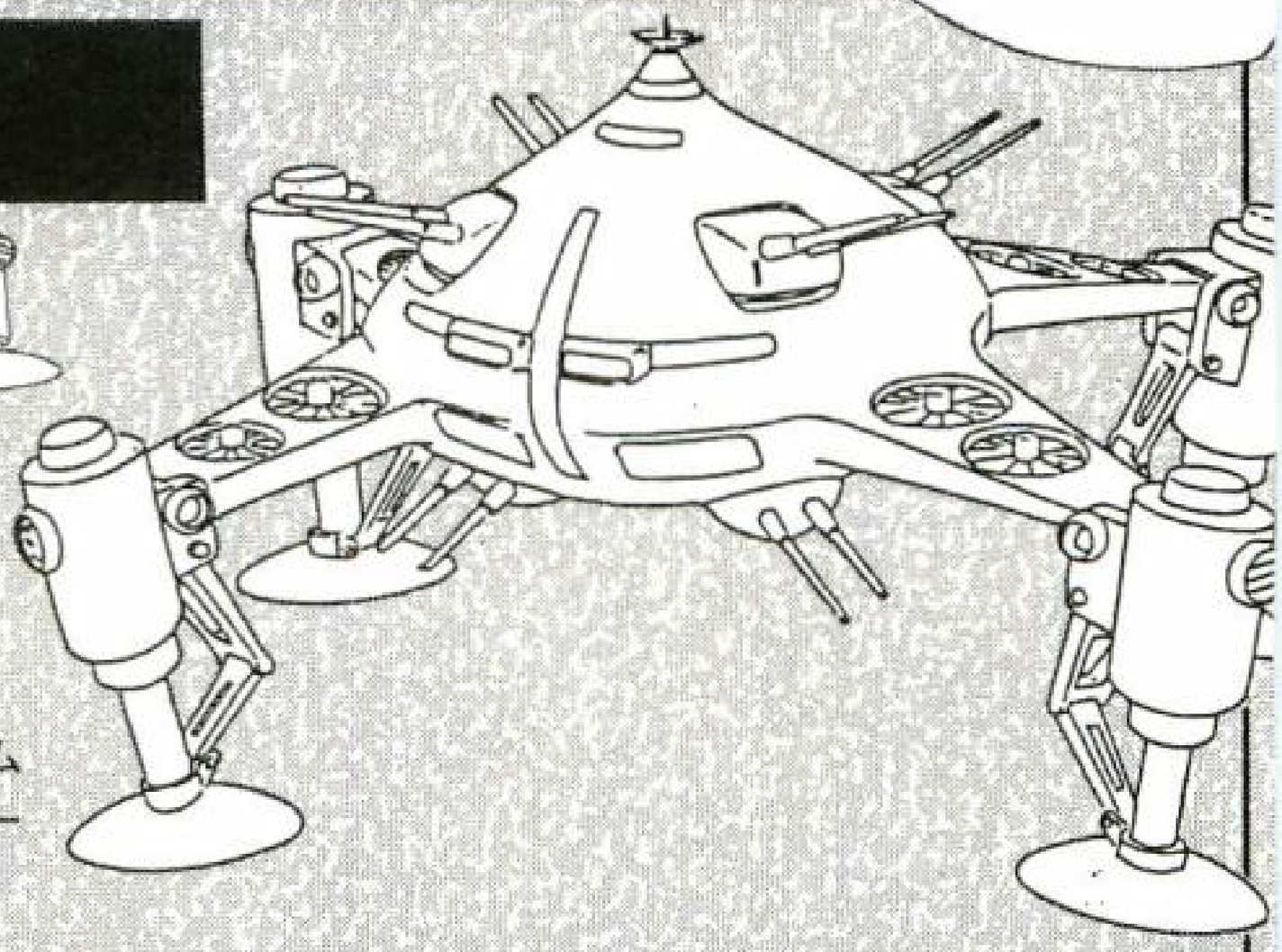




MAX-03
アッザム



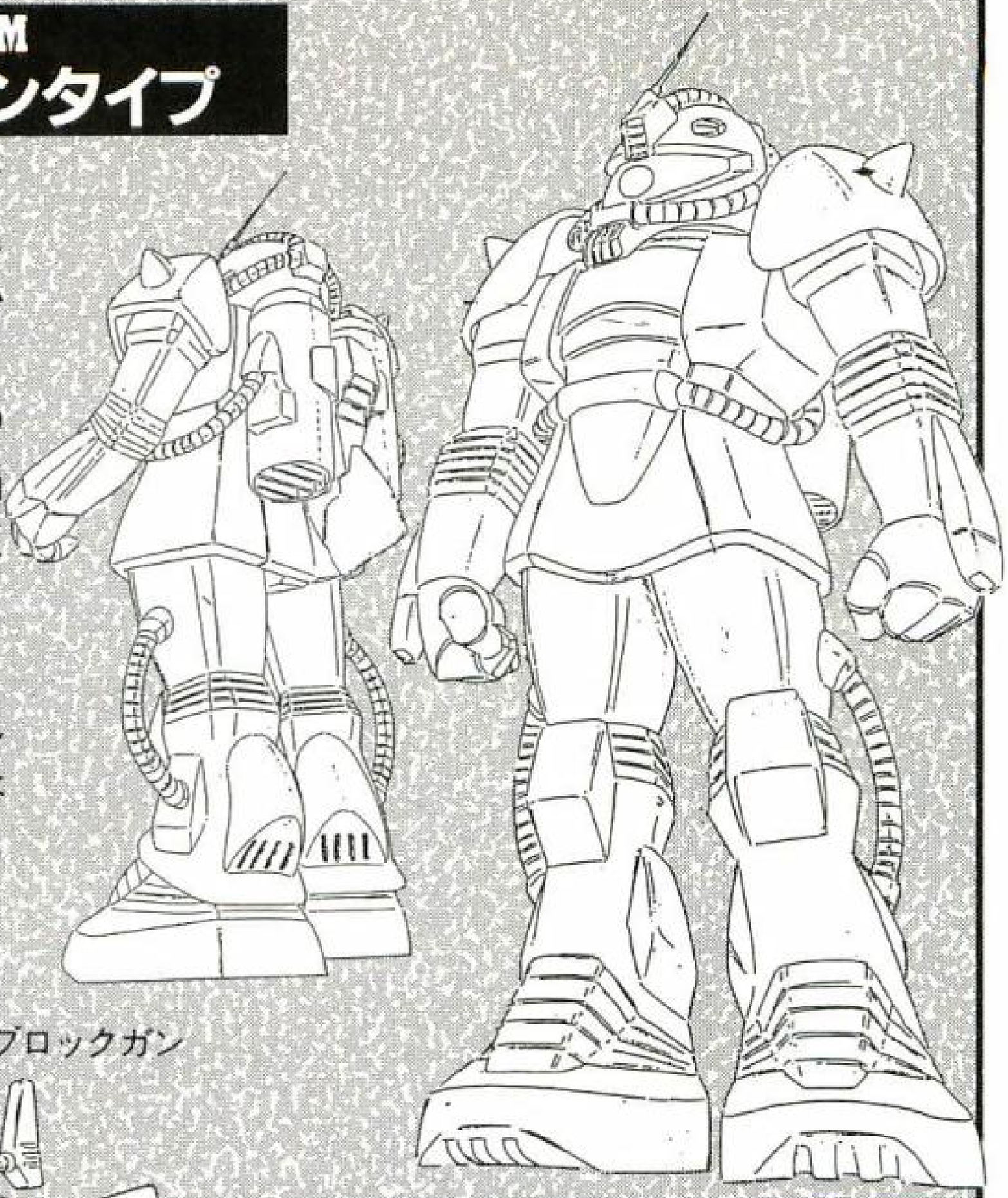
アッザム
リーダー

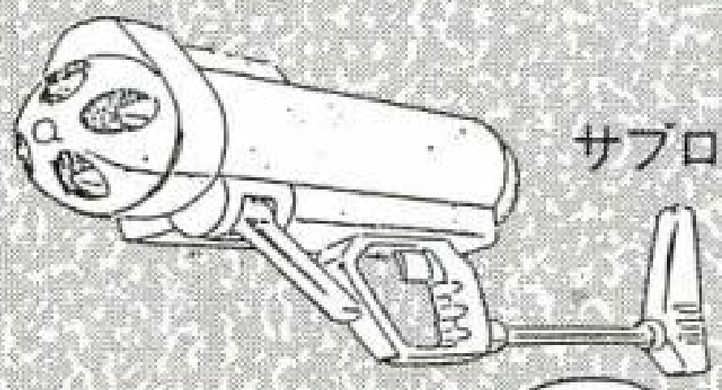


モビルアーマーという概念が確立する以前の機体。便宜上試作機といえないこともないが、原型機である移動式対地攻撃兵器G87ルナタンクを地球用に改造し、武装を改修しただけなので、移動砲座の域は出ていない。短時間のミノフスキークラフトによる飛行が可能で、2連装メガ粒子砲2門、さらに敵に触某を散布し、高周波による高熱でダメージを与える特殊兵器アッザムリーダーを装備している。

MS-06M
ザク・マリンタイプ

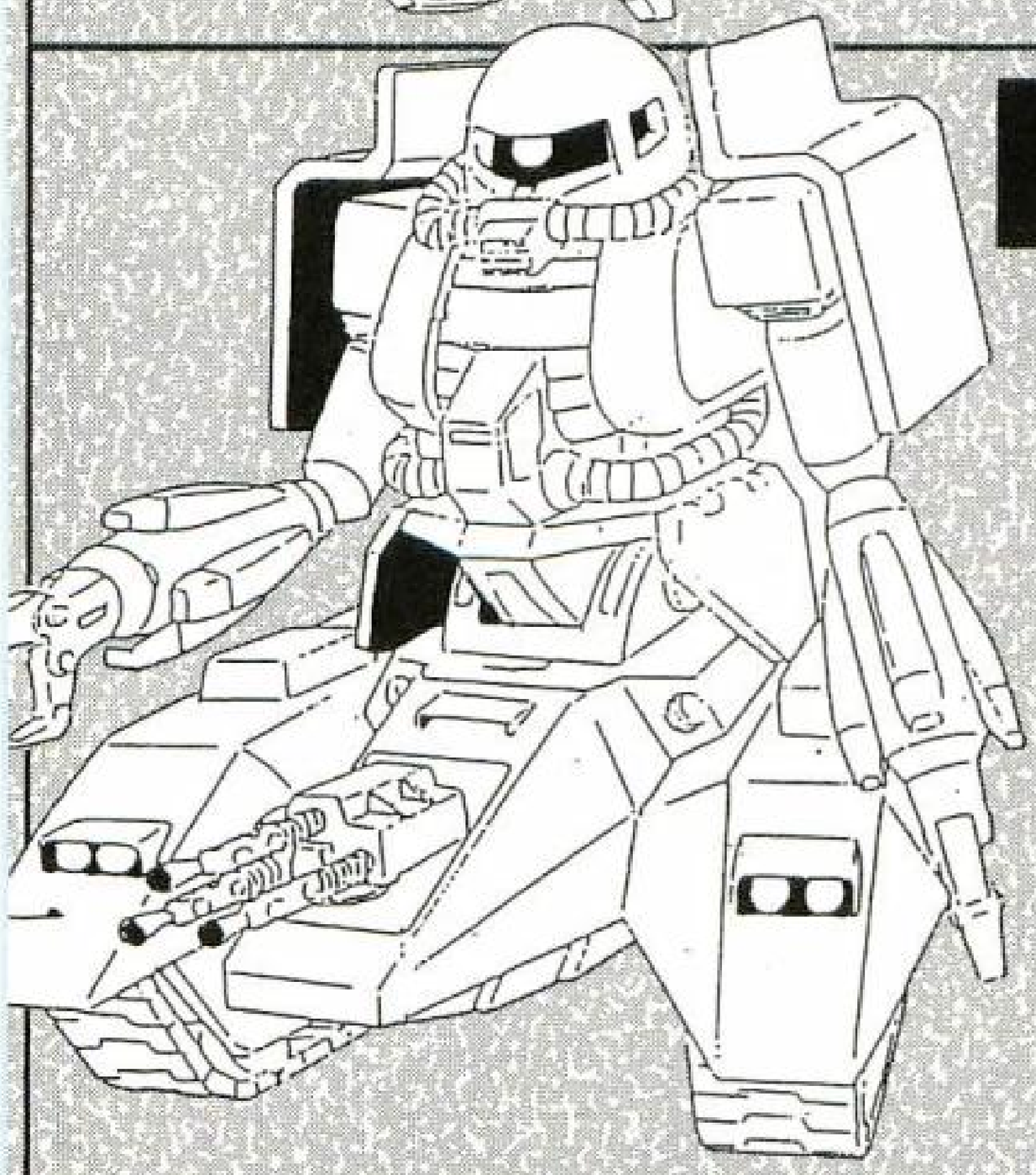
MS－06Fタイプをベースに開発された水中用MSである。いわゆるザクⅡのバリエーションのうちのひとつであるが、当初期待されていたほどの性能は得られず、新型水中用モビルスーツ開発が着手されたこともあり、数体が作られただけである。

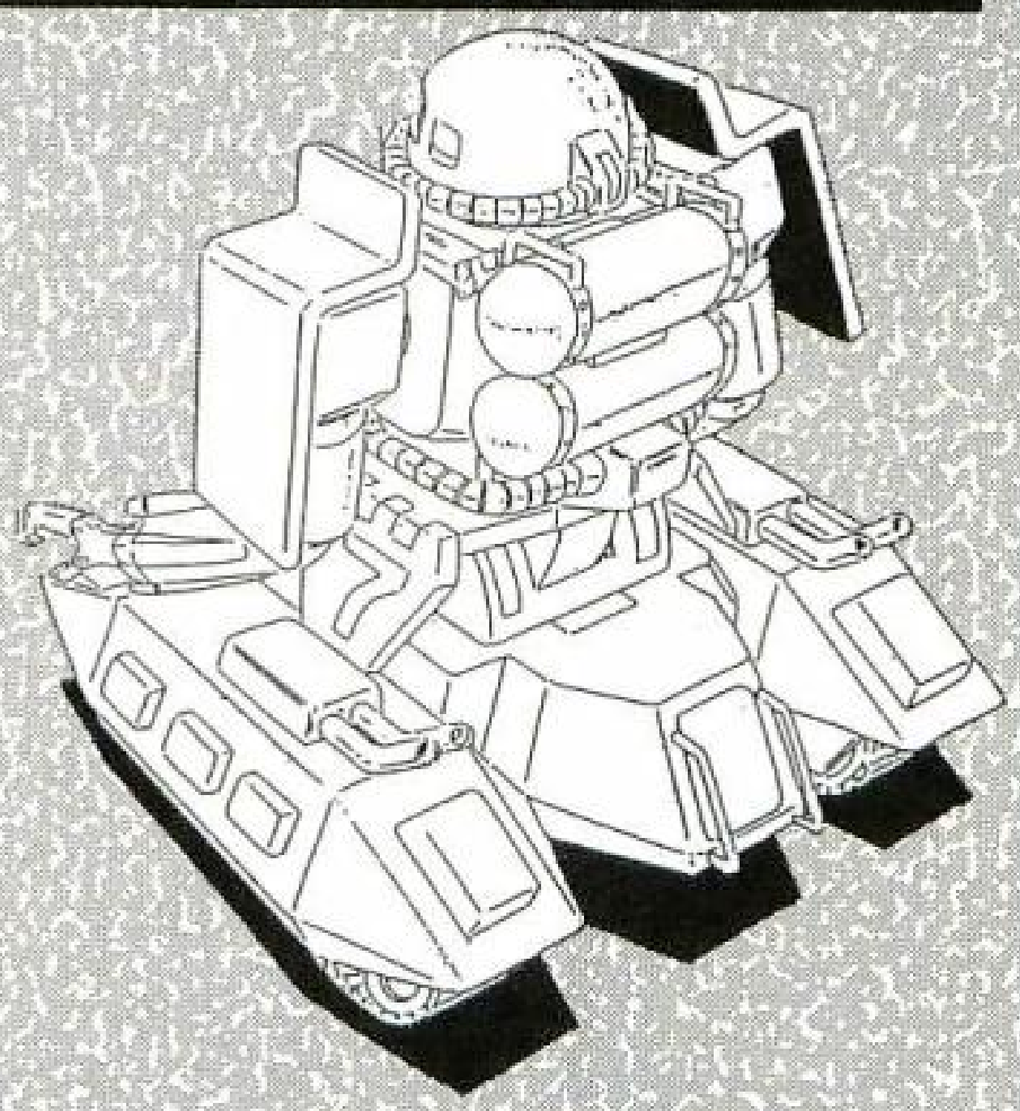




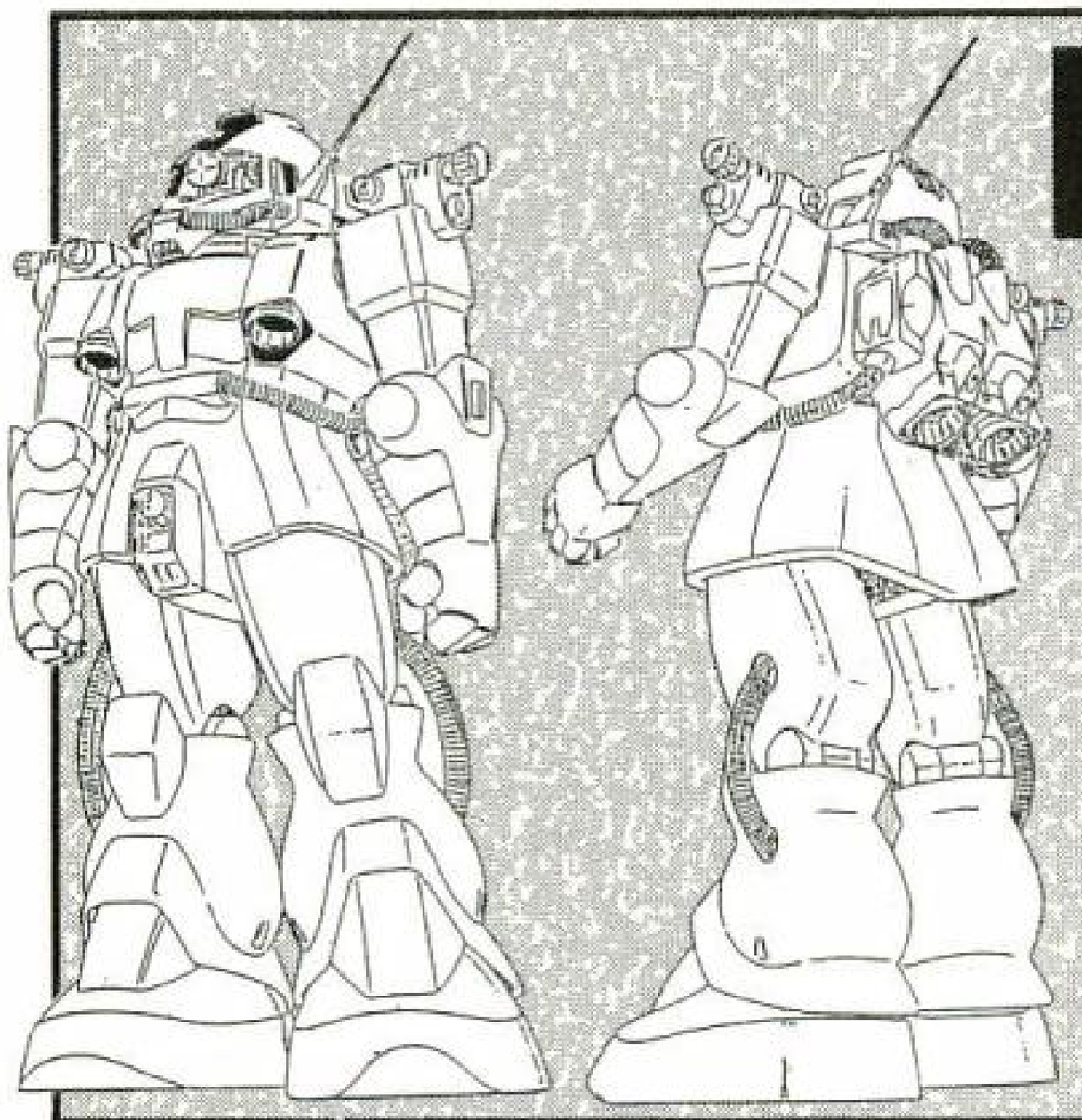
サブロックガン

MS-06V
ザク・タンク





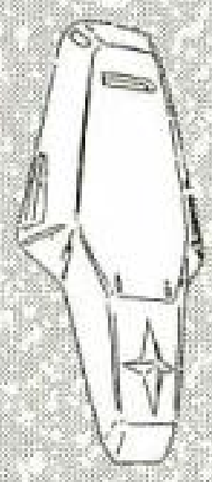
最前線ではMSはおろか消耗部品の補給すら間に合わなかった。そのため、破損をまぬがれた部品を組み合わせた再生機が多かった。このV型はマゼラベースを脚部としたもので偶然だが連邦軍のRX－75に似たものとなった。さまざまな武装を施し実戦に投用した部隊も多かったものの、基本的に作業用として分類されている。



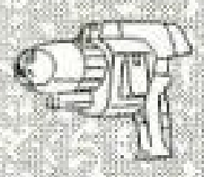
MS-06E
ザク強行偵察型

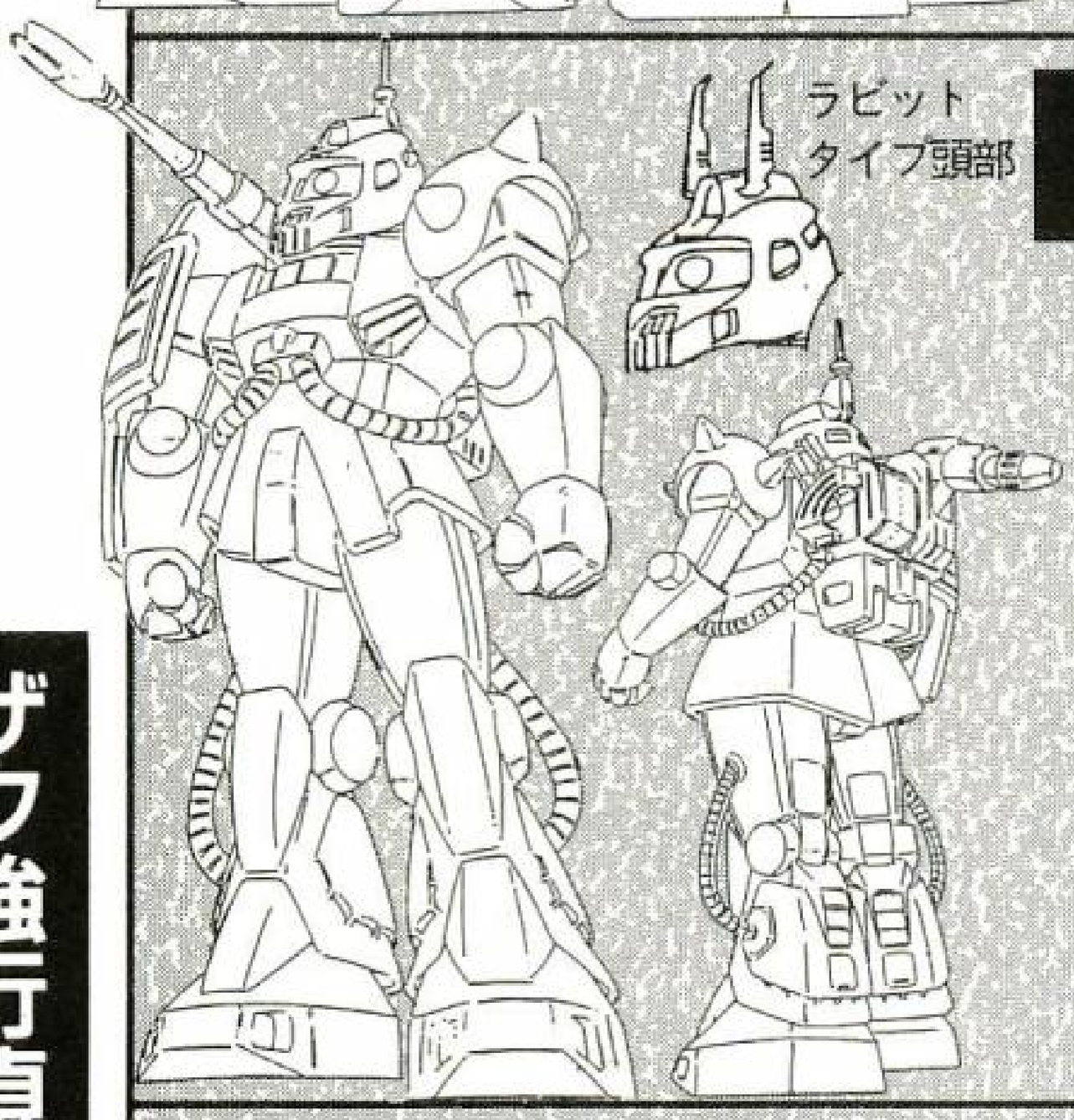
強行偵察機としてMS－06Fを改造した機体。改造点としては頭部モノアイの可動範囲を拡げ、サブカメラも増設、さらに緊急離脱用スラスターを装備させている。目的はあくまで偵察であり、戦闘には参加しない。

シールド



カメラガン





ラビットタイプ頭部

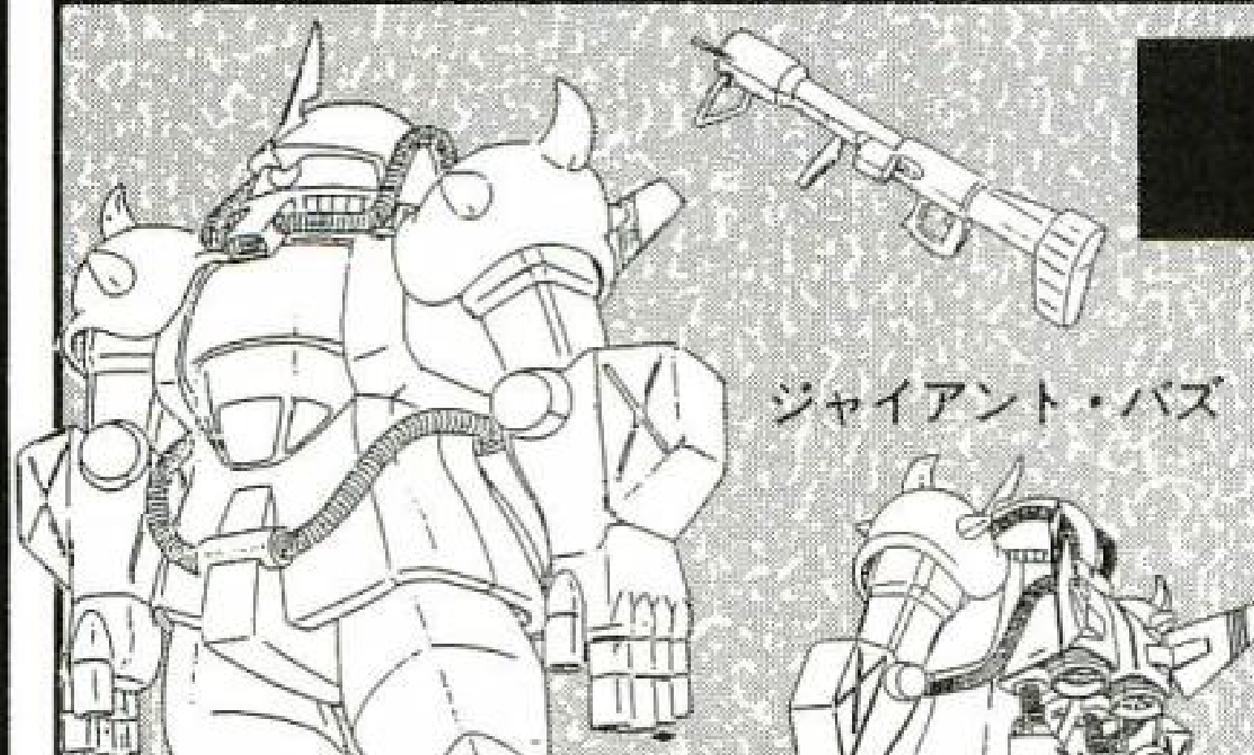
MS-06K
ザク・キャノン

この機体は当初対空防御用として開発されていたが、連邦軍のRX－77タイプの情報を得たことにより、対MS戦の支援用として再設計されたものである。その過程において、モノアイは全周型となり、オプション装備として考えられていたキャノン砲もランドセルと一体化され、他の機体への換装も可能となっている。

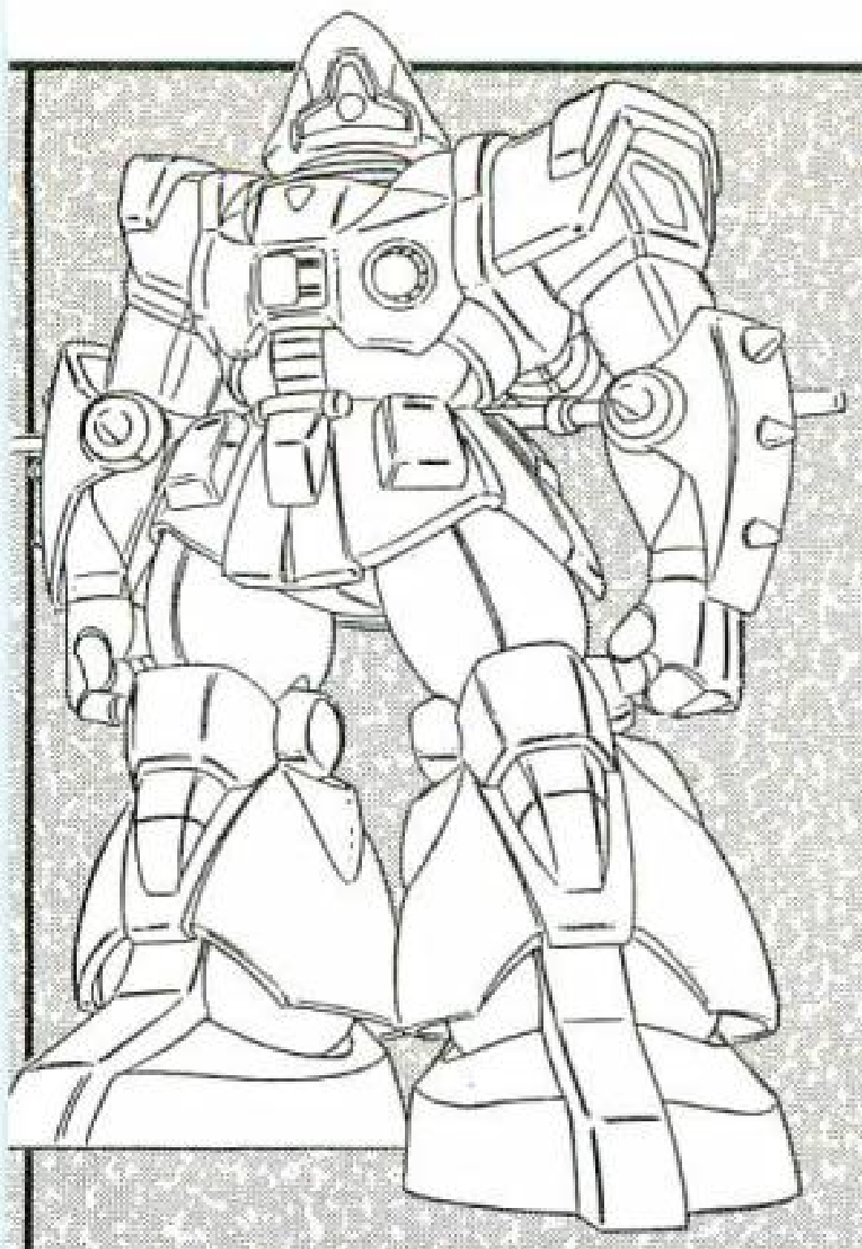
ジャイアント・バズ

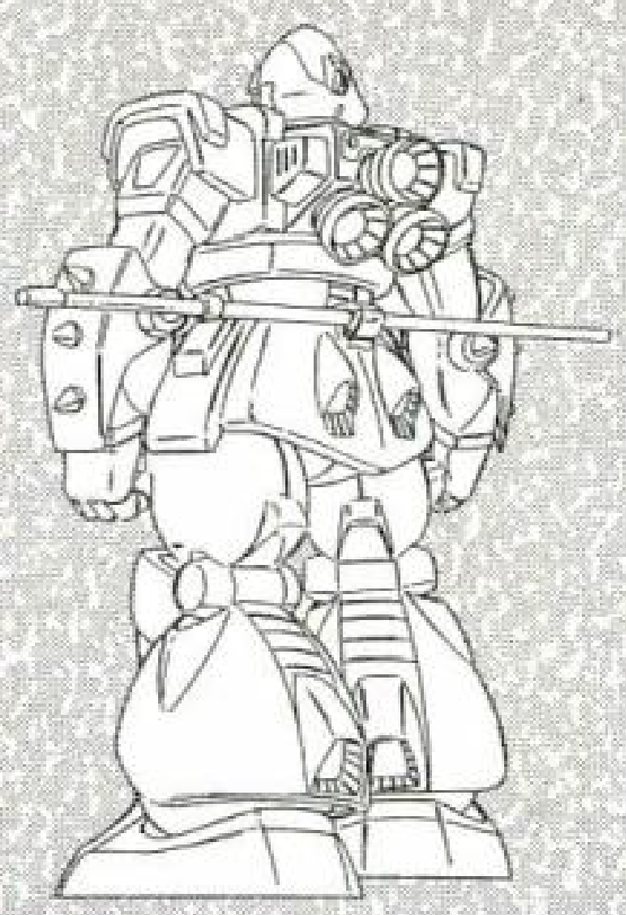
MS-07H
グフ飛行試験型

陸戦用MSに飛行能力を持たせるために試作された実験機。MS－07Bをベースに徹底的な軽量化と熱各ジェットエンジンの搭載が行われた。だが、推力が根本的に不足しており、4号機が失敗した段階で計画を断念している。だが、その副産物としてMS－09のホバー走行が生み出された。



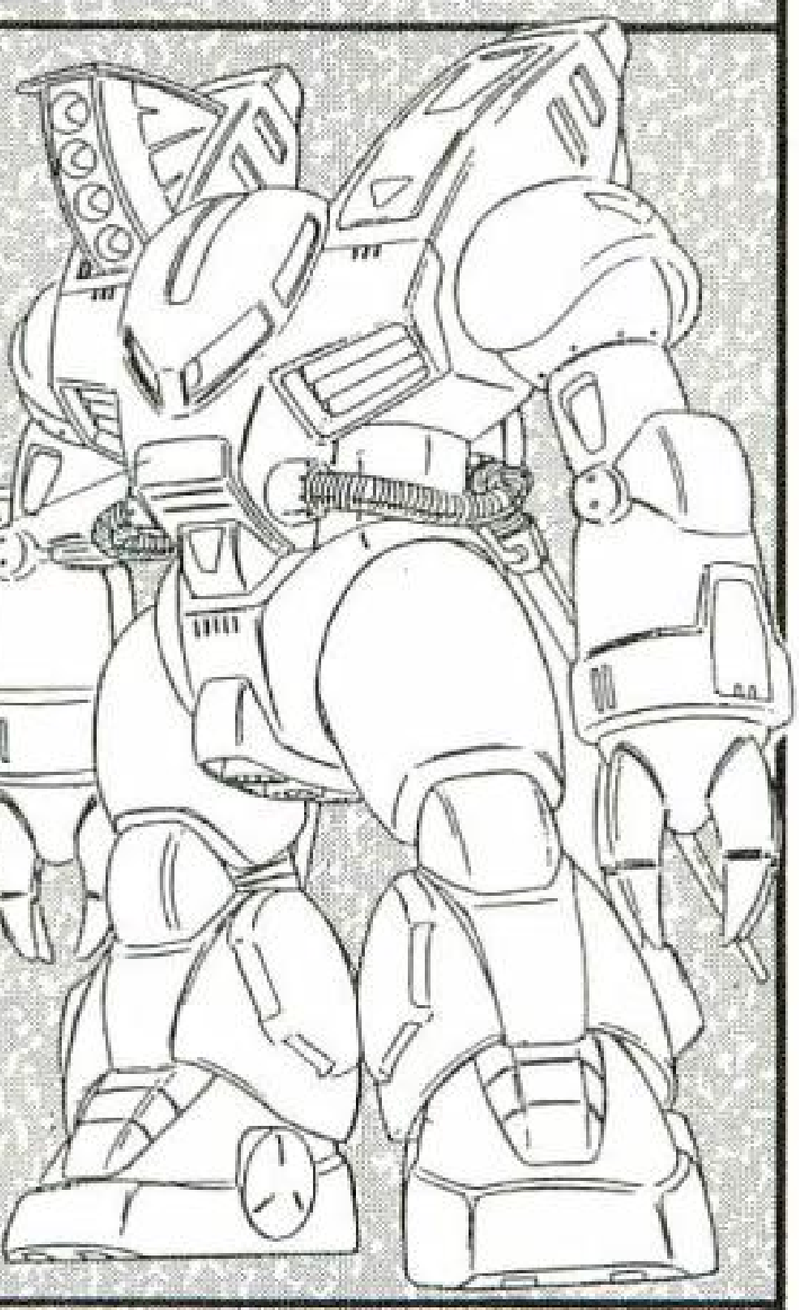
MS-10
ペズン・ドワッジ

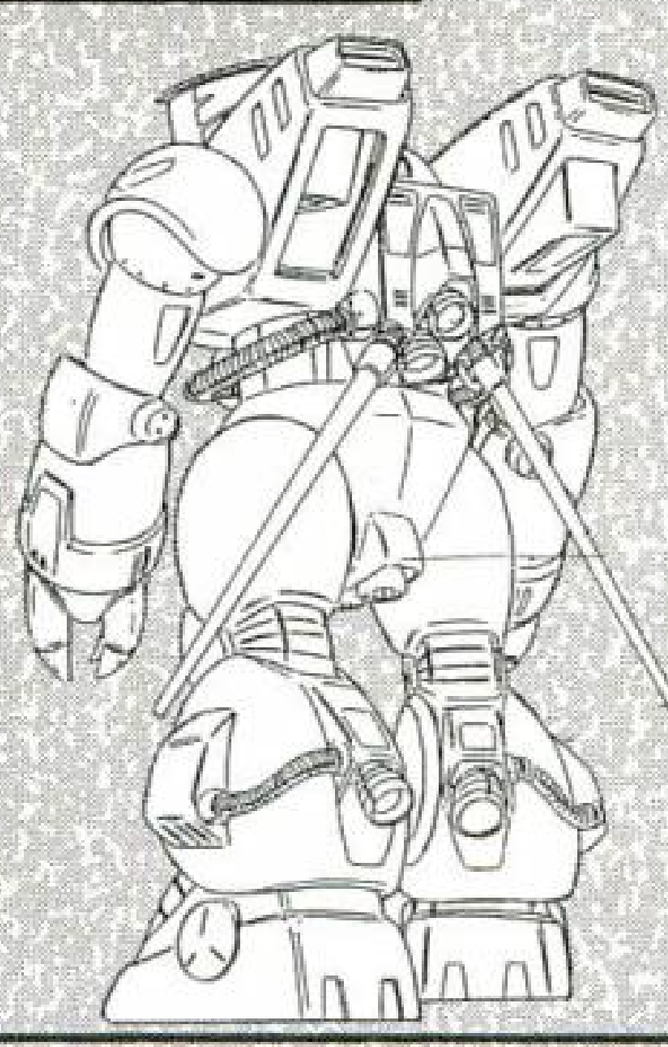




MS－09をベースにした発展型。局地戦用MS開発計画により作られた機体である。ホバー走行が可能で、改造型ジャイアントバズ、ヒートサーベルを装備している。

MS-13
ガッシャ





汎用型のモビルスーツにMSM－07のコンセプトを導入した機体である。クローに準じたコンバットネイル、４連装収能式ミサイルポッド２基、背面には２本の対地センサーを装備している。

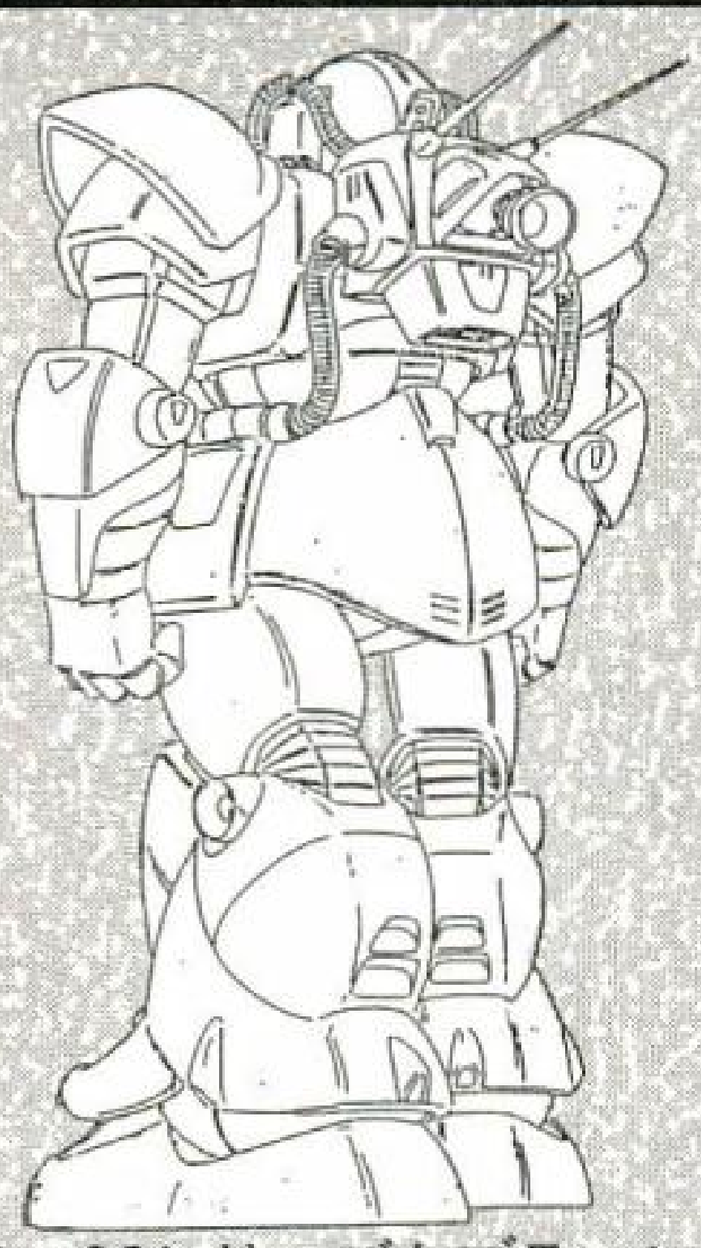
MS-12
ギガン

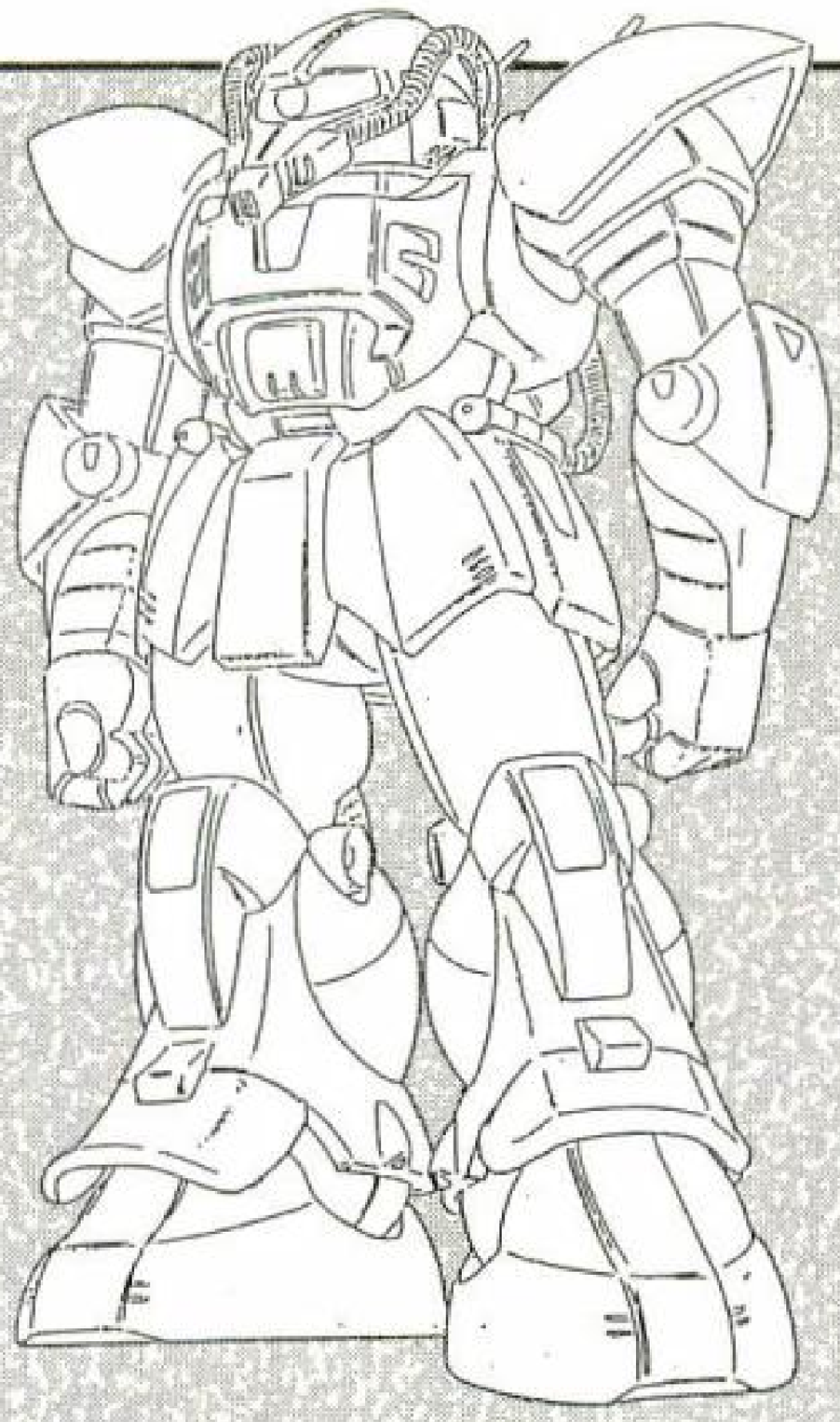




この機体は、対空防衛用として開発されたMSである。走行ユニットはなく、３輪の走行ユニットと４基のサポートスラスターによって移動する。180ミリ無反動砲と４連装120ミリ砲を装備している。

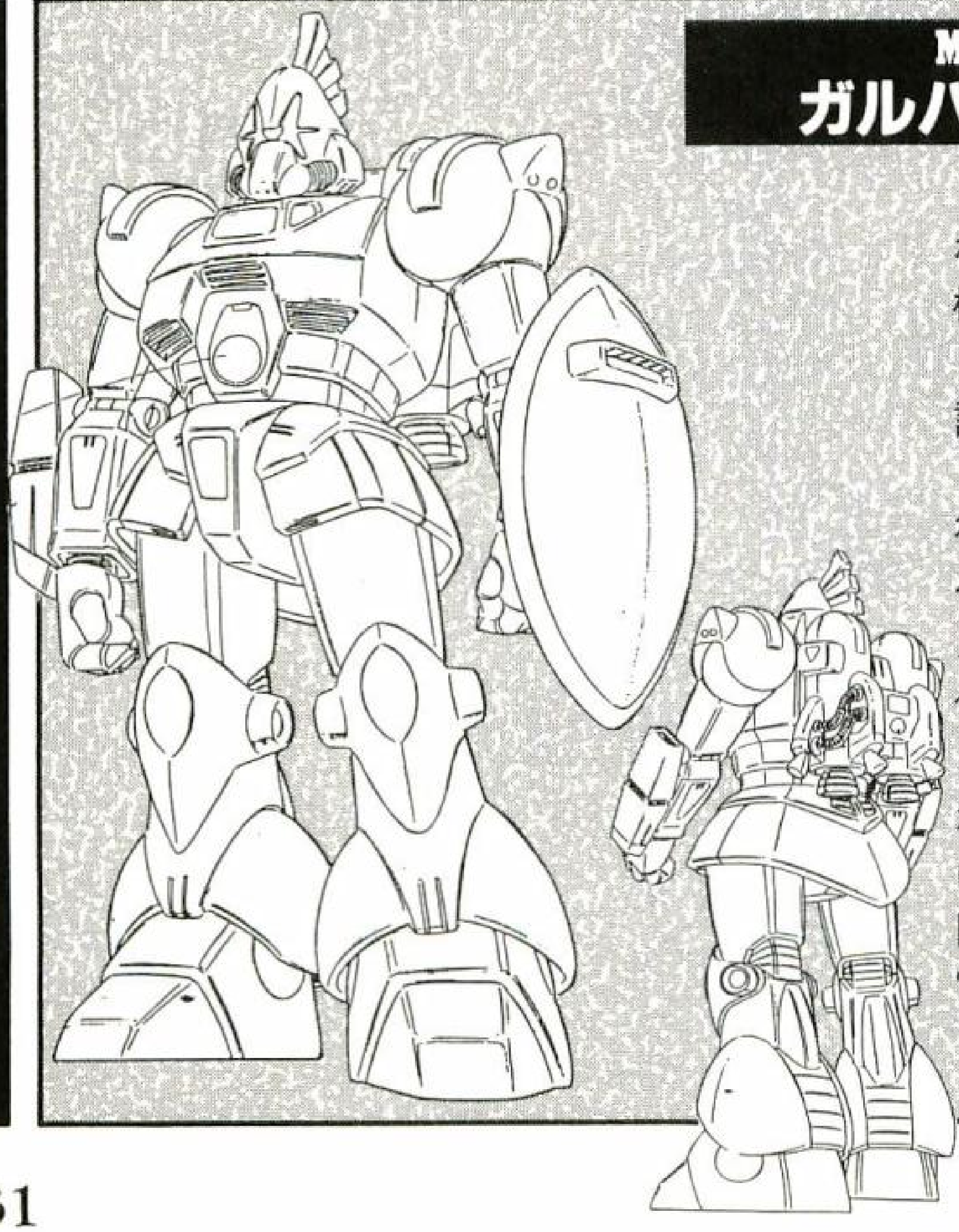
MS-11
アクト・ザク





MS－06シリーズをブラッシュアップし、総合的な運動性の向上を目的として設計された機体。実験的だが、関節部にマグネットコーティング処理を施しており、その優秀な性能のため、大戦終結後に、施設を押収した連邦の手で量産されることになる。

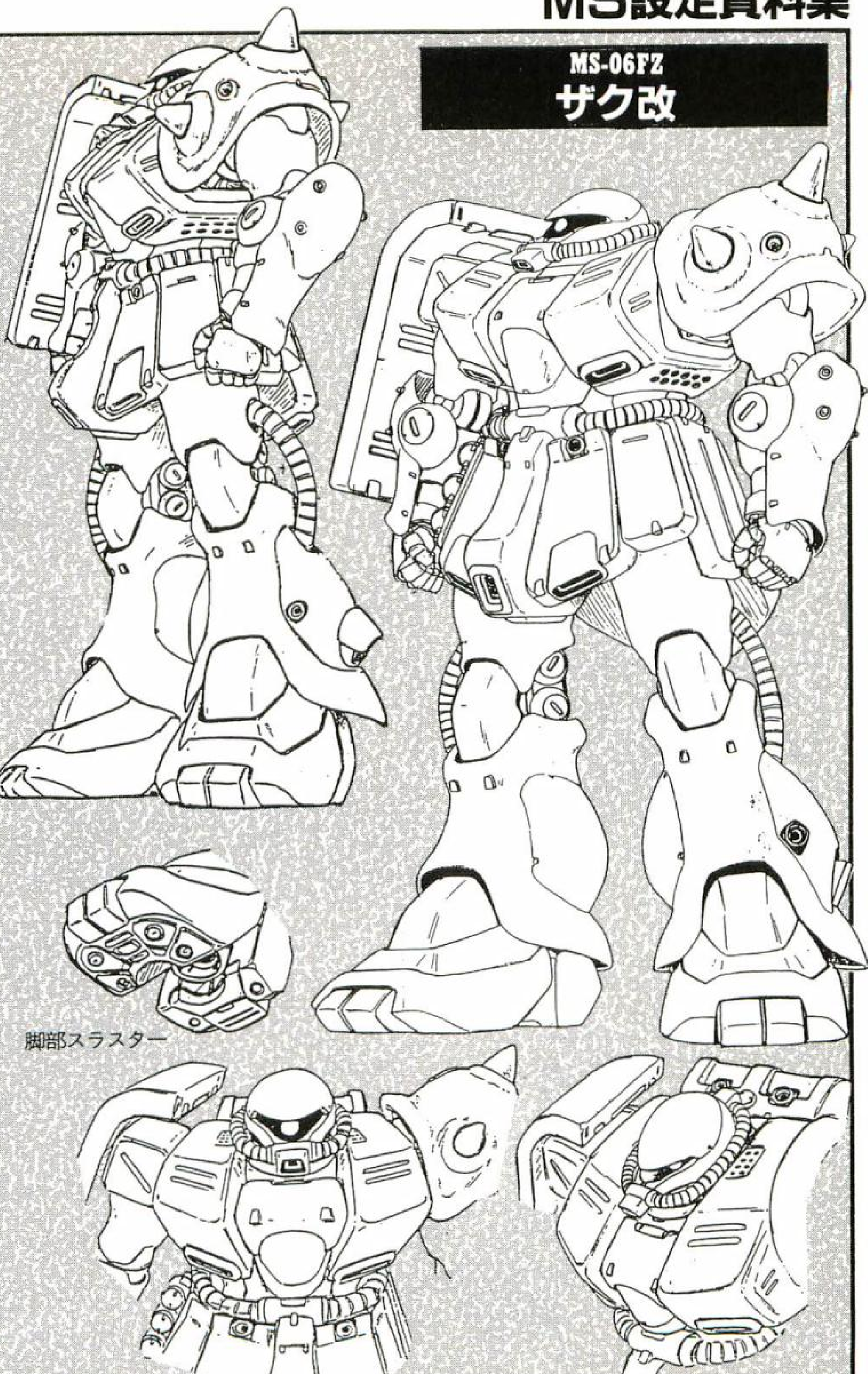
MS-17A
ガルバルディα



格闘戦用に開発されたMS－15の後継機であるが、MS－14との中途妥協的な設計といえよう。中断していた大気圏内飛行能力を実現させるべく、機体の軽量化、スラスターの大推力化、腕部の熱核ジェットエンジンの増設が行われたが、結局は失敗した。だが、開発は続行され、宇宙戦専用のＢ型が生まれた。

MS-06FZ

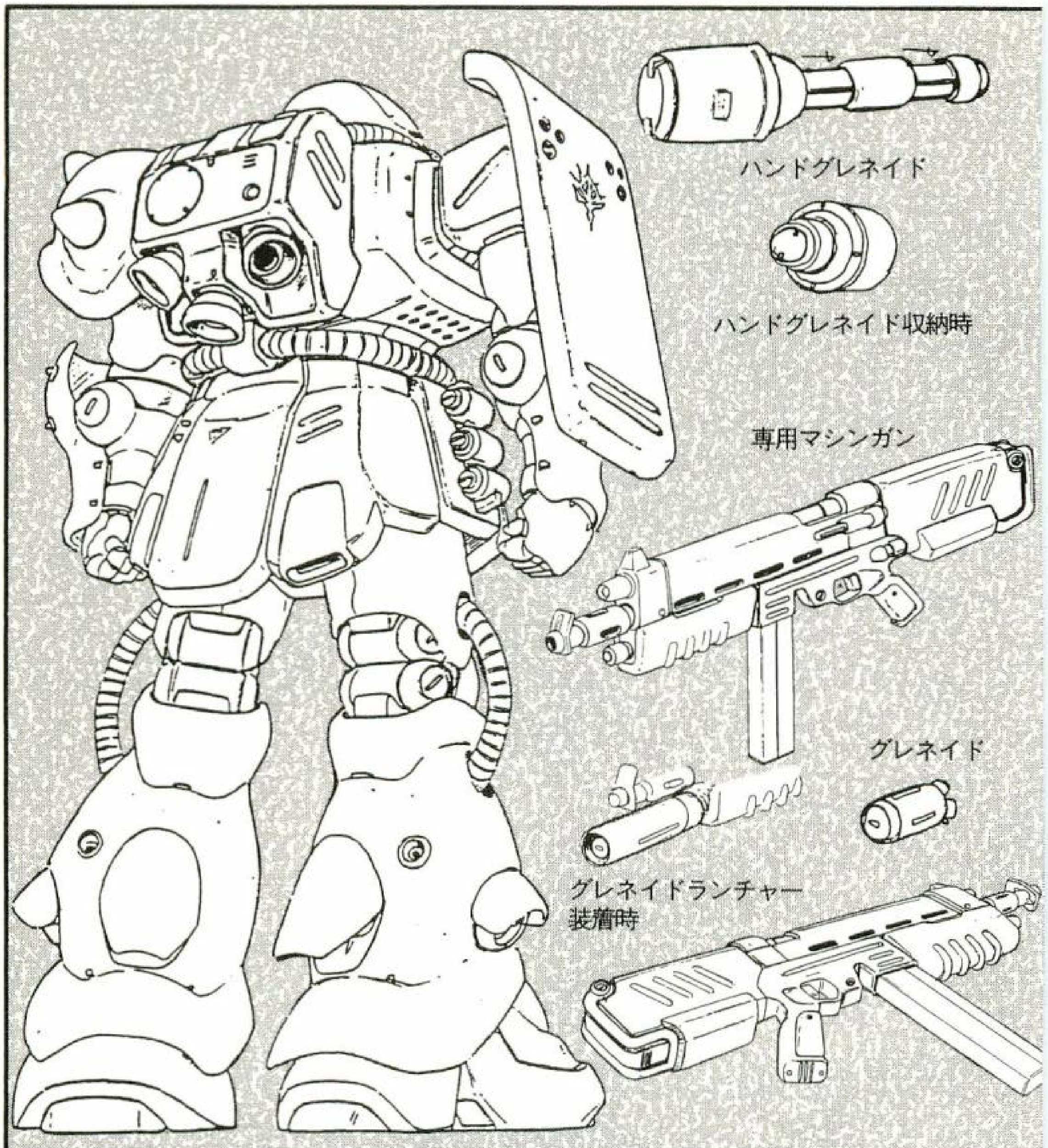
ザク改



脚部スラスター

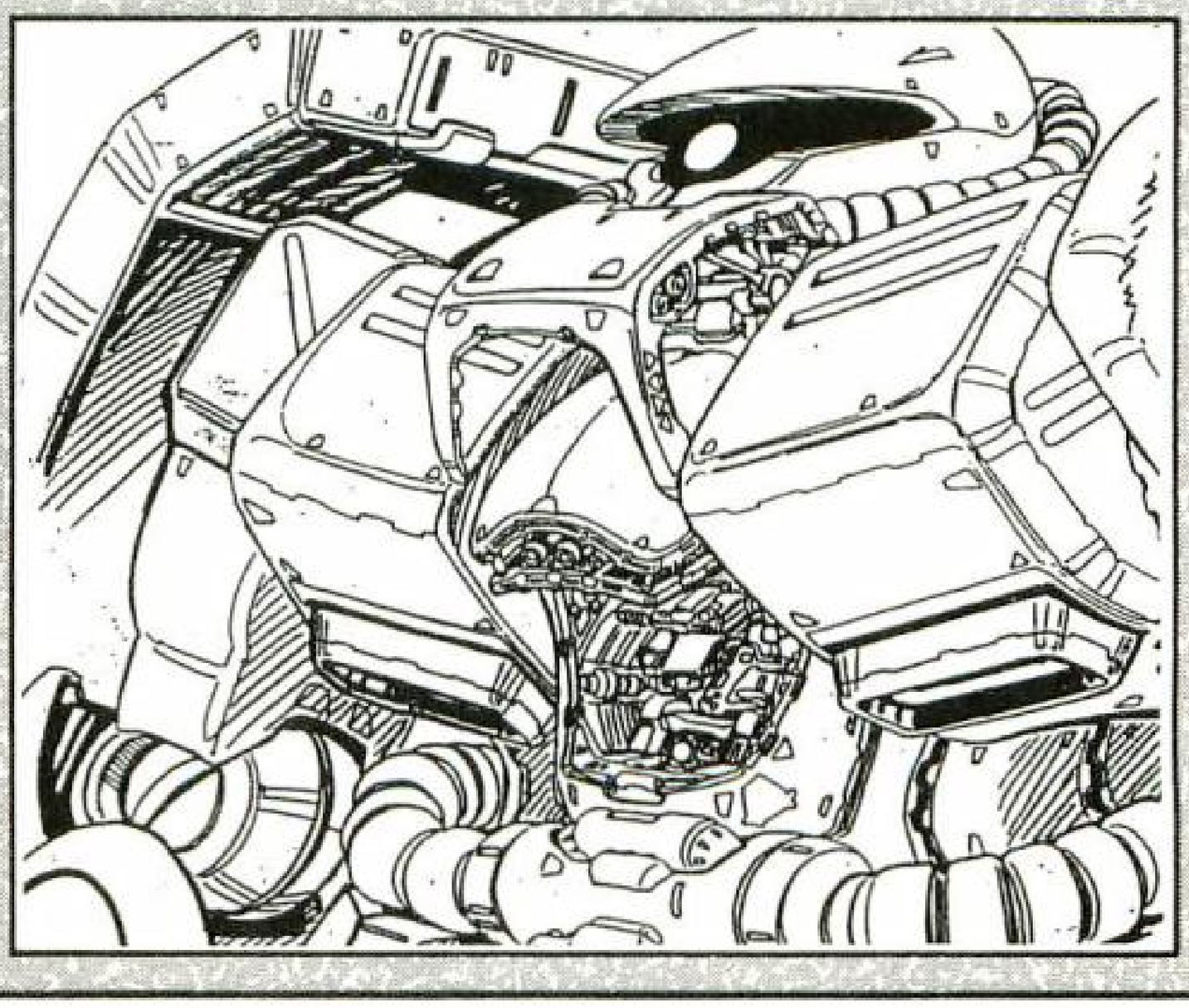
この機体はMS－09RII、MS－14Dと同様に統合整備計画により改修された第2期生産型MSである。だが、他の機種と異なり製造台数が多かったので、全て改修機で型式番号も変更されていない。

ザク改



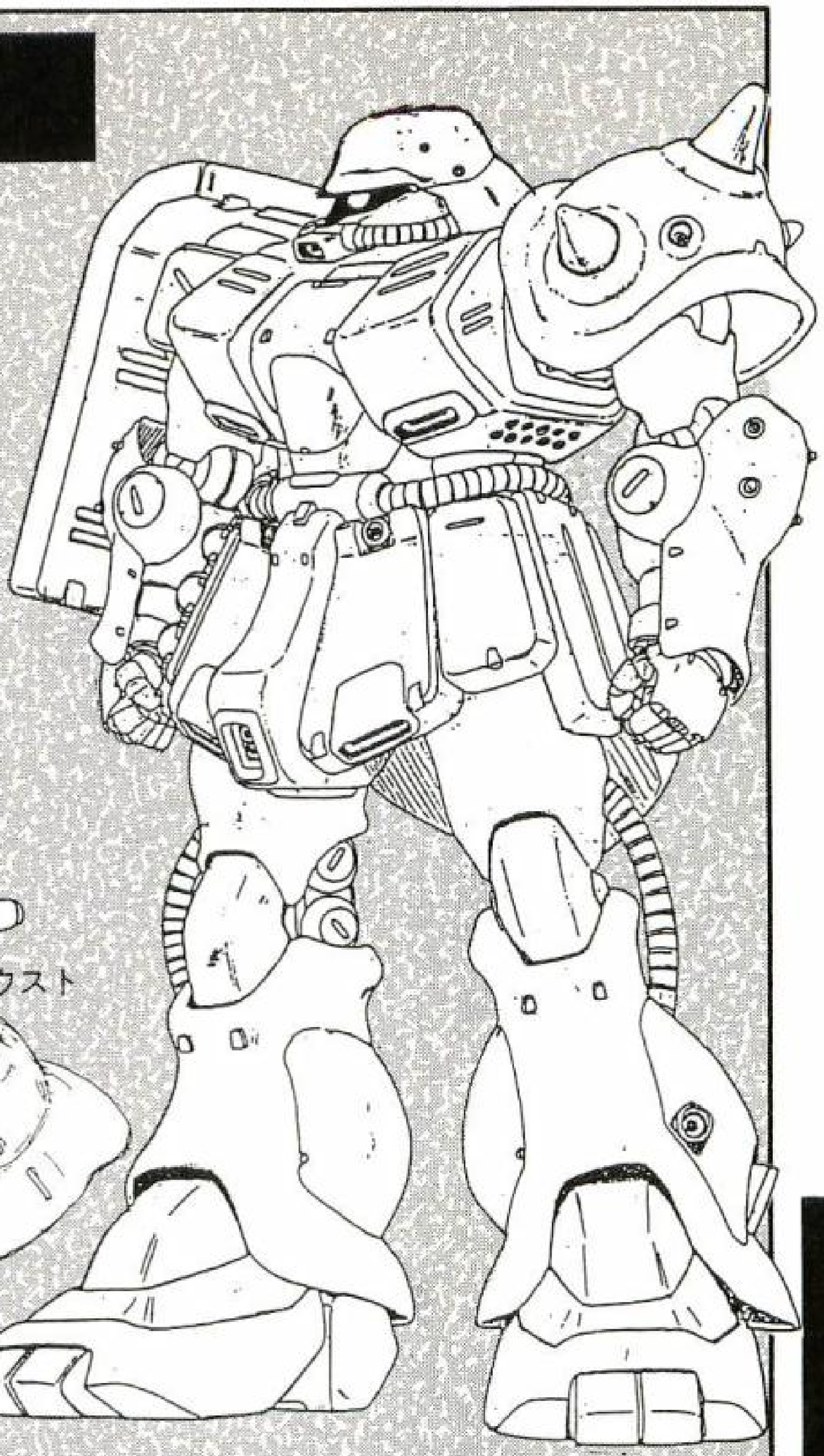
改修点はコクピットの他に機体各所のアポジモーターを大型化し、バックパックのスラスターも大型化させた。総推力は改修前より70%増しになっているが、推進剤の総量は変らず、戦闘最大推力時の限界時間は半分に落ちている。また、武装も一新され、連邦軍のRGM－79に遅れをとることはない。

ザク・コクピットハッチ

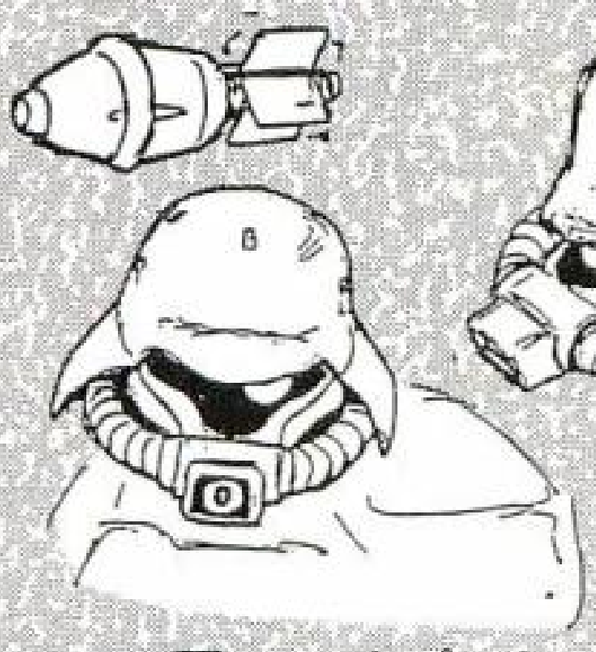


MS-06FZ
サクタイプB

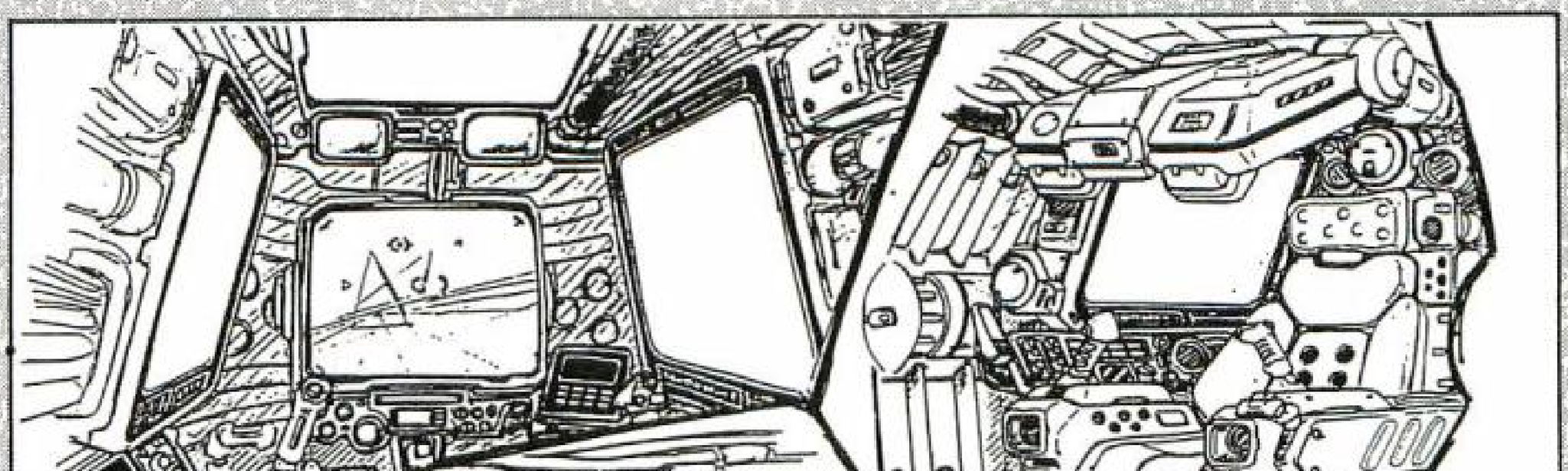
この機体は、現地での修理、あるいは改造の際に、パイロット等の要請による設計を受け入れたものである。大戦末期、機体に明らかな支障をきたさない限りは、マーキングやディテールアップ等は、各部隊の責任で行なわれていた。逆にその結果、MS－06シリーズは数々のバリエーションを生み出し得たと言える。



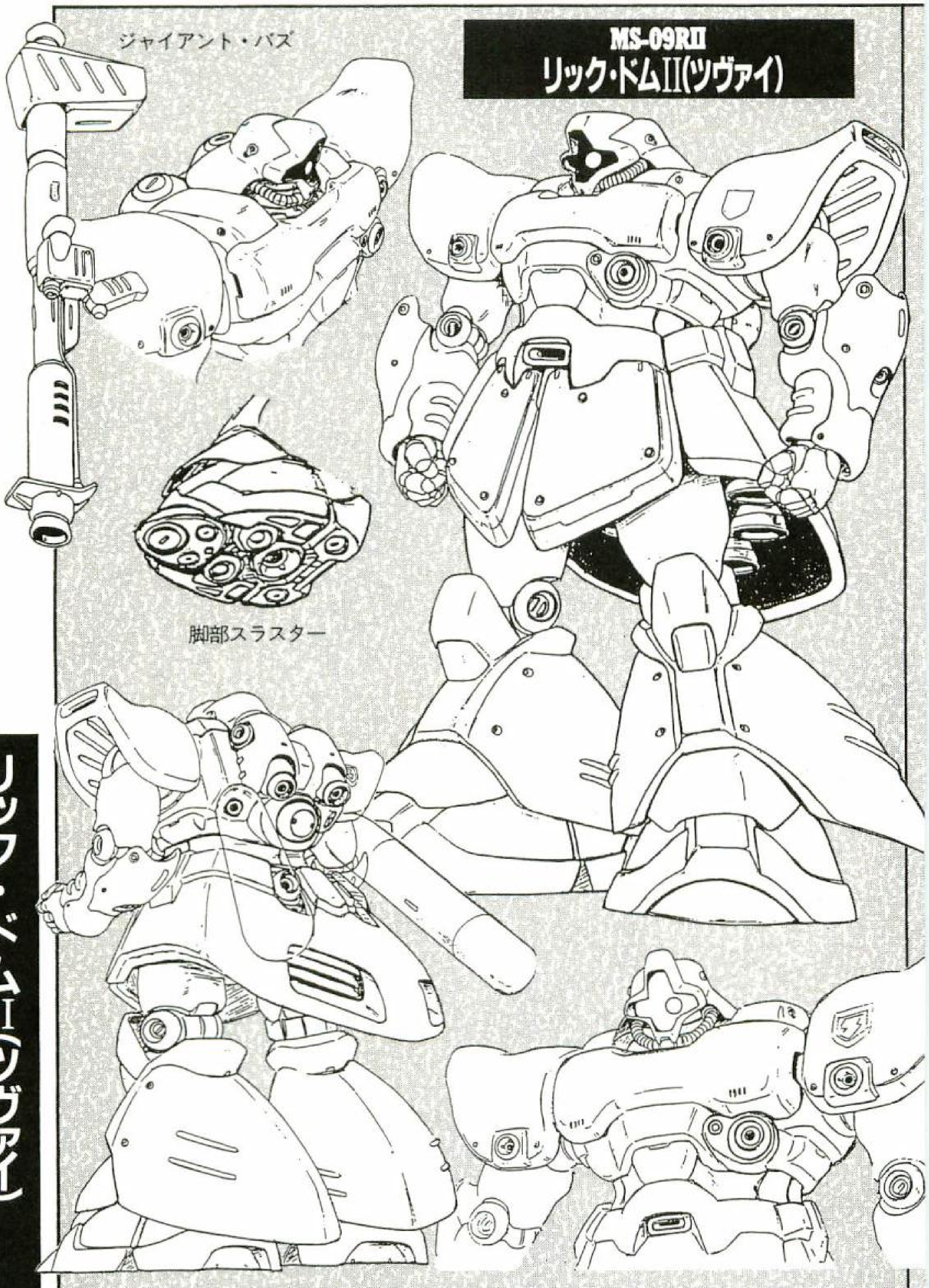
スツルムファウスト



ジオン軍MSコクピット



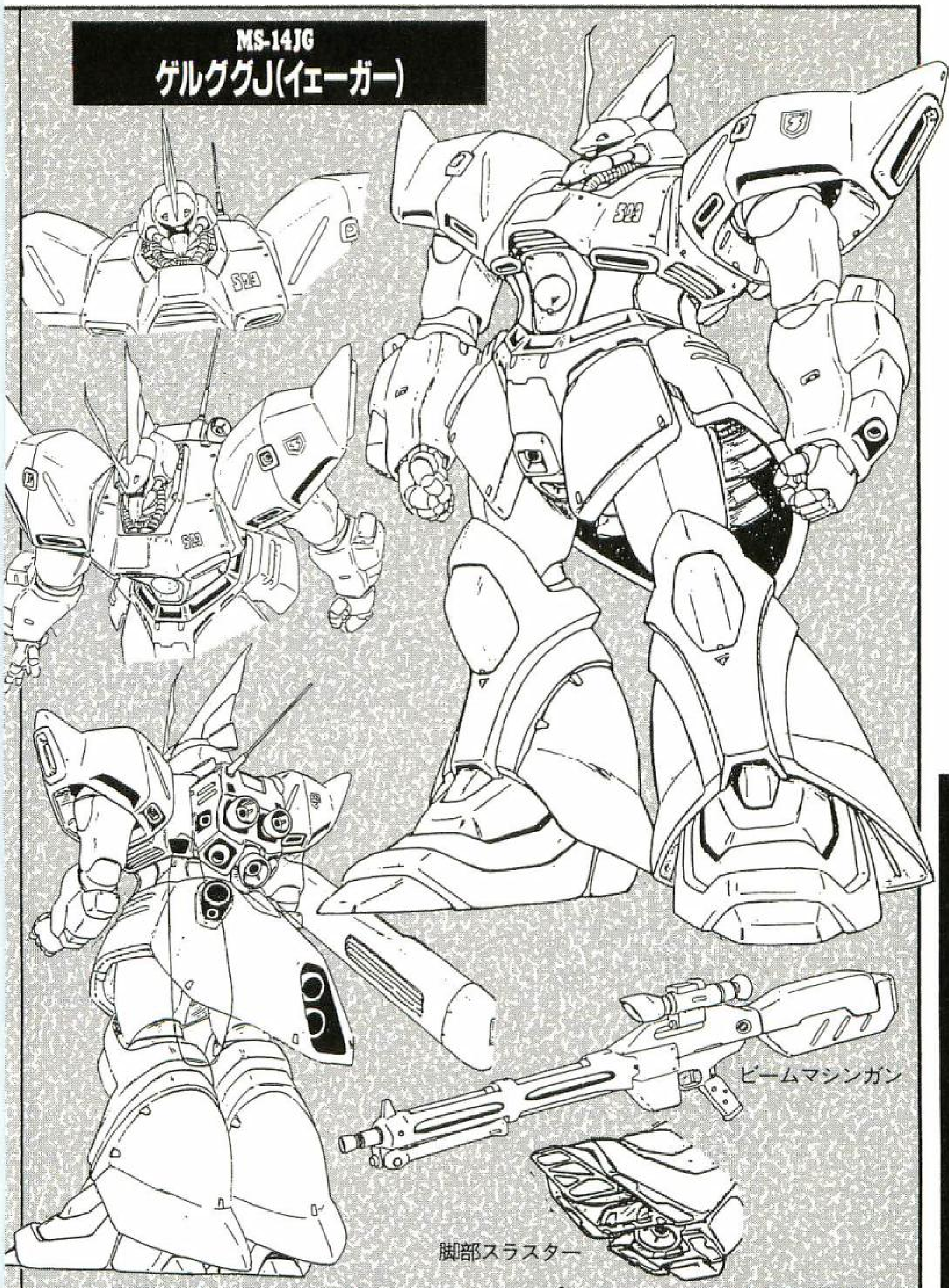
MS-09RII
リック・ドムII(ツヴァイ)



MS－09Rは、大戦の中期以降に大量生産されたモビルスーツで、それぞれの局地戦に応じた改造機も多く生産されている。この機体もそうしたバリエーションのひとつで、性能も従来機より向上している。後のAMX－009の設計母体となった機体もこの機体と同型である。

MS-14JG

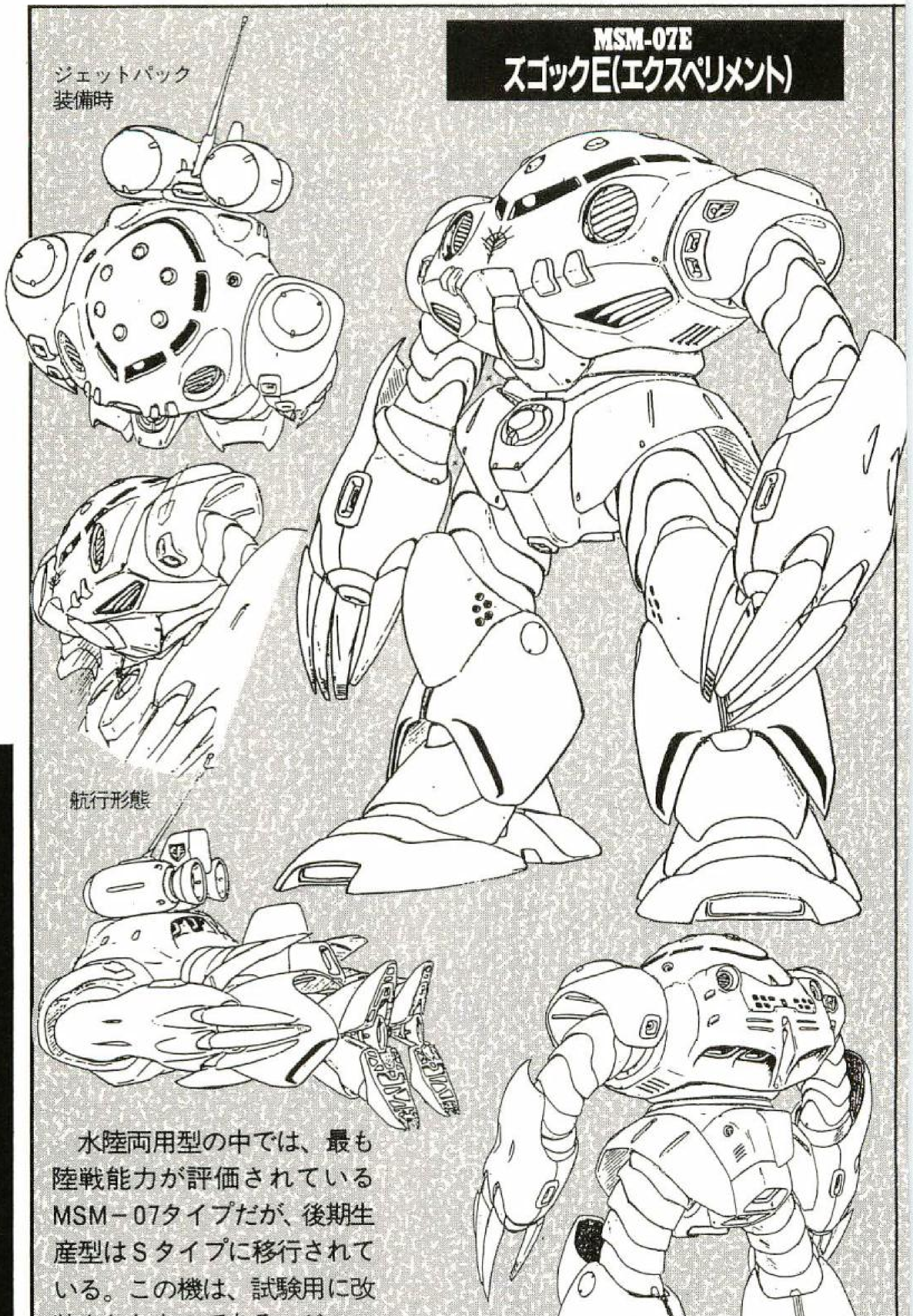
ゲルググJ(イェーガー)



連邦軍のRXシリーズを超えるべく設計されたMS－14シリーズは、それぞれの装備等に応じて、A、B、Cタイプとして分類されているが、この機体は装備に特別な仕様の違いは認められない。しかし、バックパックにプロペラントタンクが装備され、ビームライフルの形状も異なっている。このビームライフルは精度が高く、これを装備したＪＧ型は、ゲルググ狙撃型と呼ばれる最終量産タイプで、生産台数も少ない。

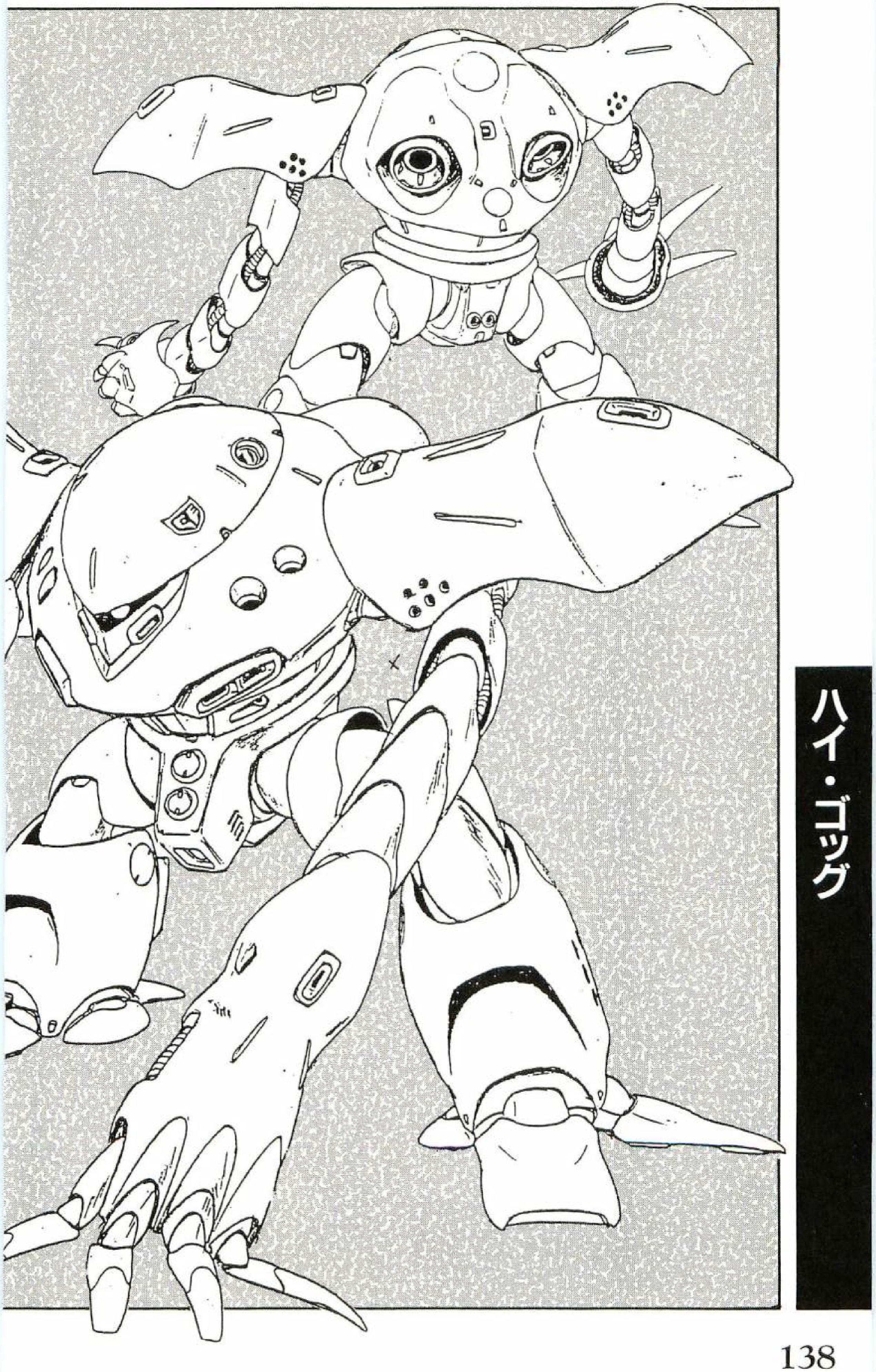
MSM-07E
ズゴックE(エクスペリメント)

ジェットパック
装備時



航行形態

水陸両用型の中では、最も陸戦能力が評価されているMSM－07タイプだが、後期生産型はSタイプに移行されている。この機は、試験用に改装されたものである。ジェットパックを装備することにより、水中航行速度が向上し、航続距離も延長されている。

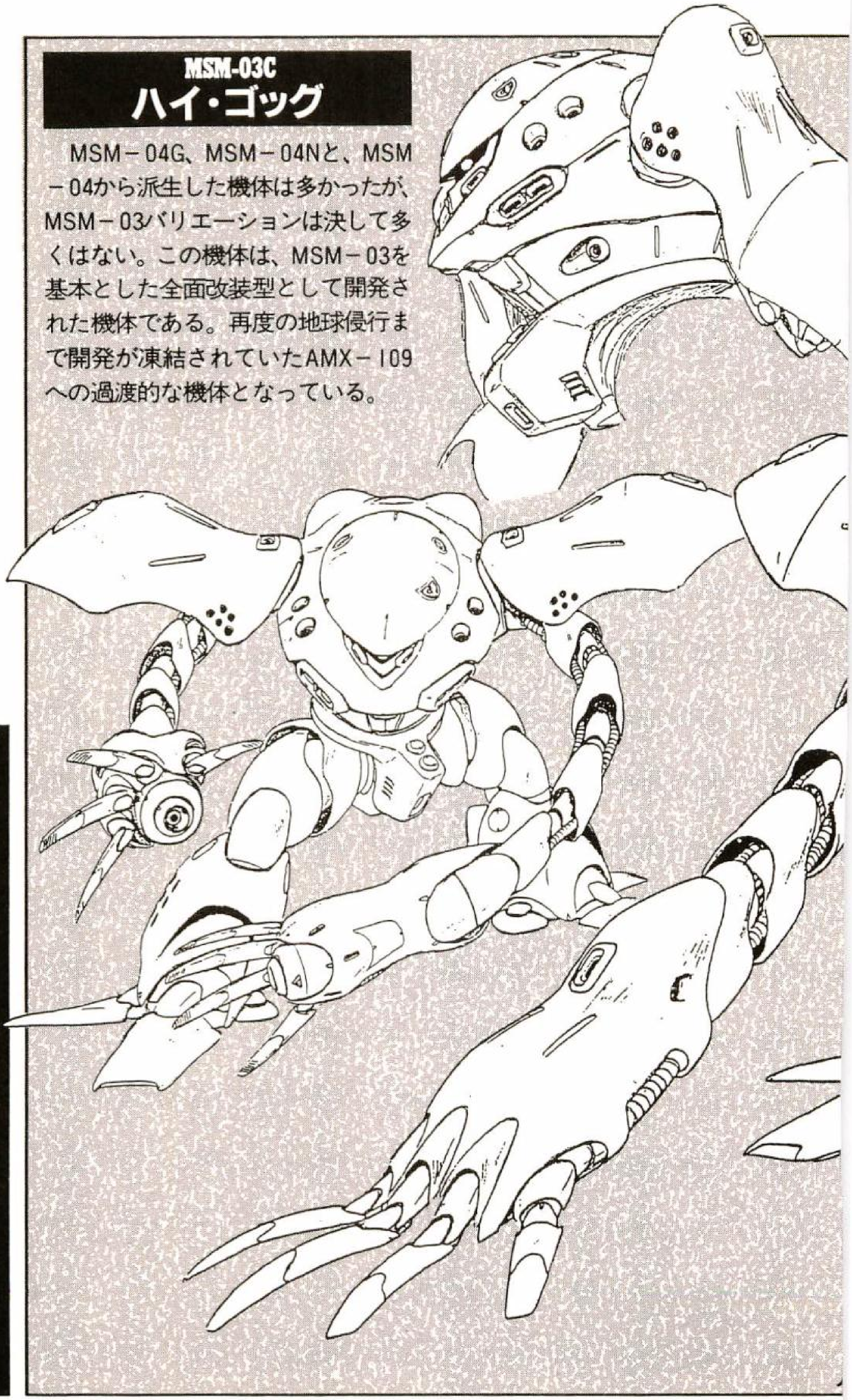


ハイ・ゴッグ

MSM-03C

ハイ・ゴッグ

MSM－04G、MSM－04Nと、MSM－04から派生した機体は多かったが、MSM－03バリエーションは決して多くはない。この機体は、MSM－03を基本とした全面改装型として開発された機体である。再度の地球侵行まで開発が凍結されていたAMX－109への過渡的な機体となっている。



ハイ・ゴッグ

ミサイルカバー

ハイ・ゴッグ

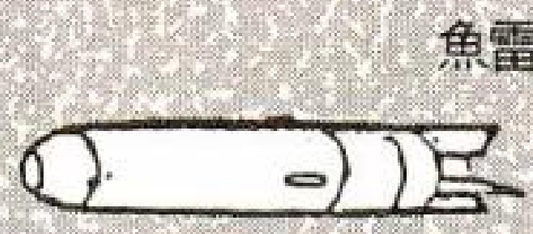
ジェットパック装着

モノアイカバー

航行形態

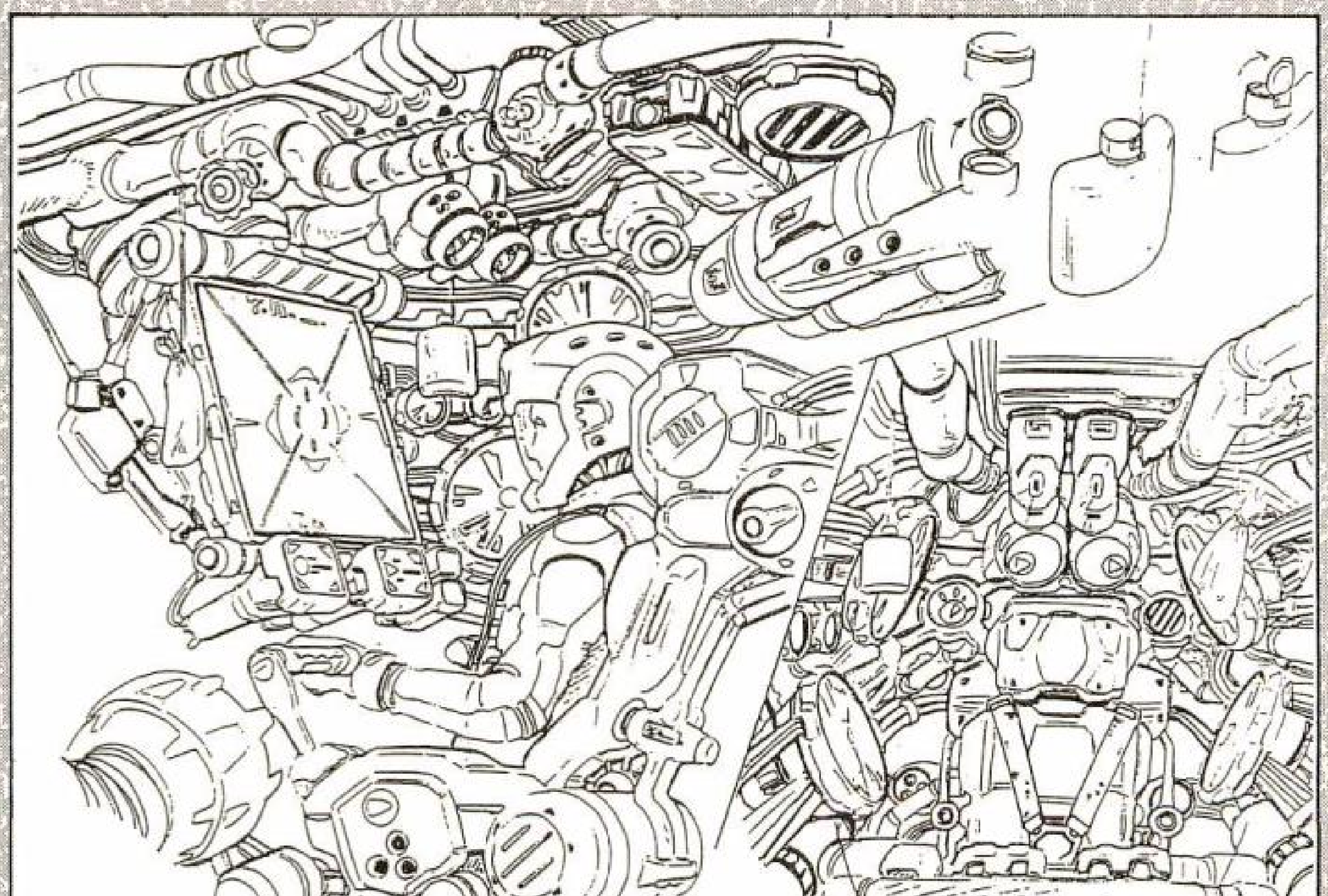
この機体では特に水中航行時の形態が改善されており、MSM－03との決定的な違いとなっている。さらに、MSM－07Eと同様に、コクピットまわりの改修と、水中ジェットパックが装備されている。

それまでの水陸両用モビルスーツでは存在しなかった専用武装も開発されている。ハンドミサイルユニットがそれで、モビルスーツが装備するミサイルとしては極めて大型であり、水中航行に支障が出ないように、カバーも含めての装備となっている。それ以外の武装は、基本的にMSM－03と大きな差は存在しない。





ズゴック、ゴック改コクピット



サ行

サイコミュ 90
サラミス 68
ザンジバル 77
シールド 60
Gアーマー 108
Gスカイ 109
Gファイター 73、108
Gブル 109
ジッコ 79
ジェットパック 60
ジャブロー 75
スキウレ 79
スパイクアーマー 60
スペースコロニー 88
セイバーフィッシュ 72
ソーラシステム 12、71
ソーラレイ 13、79
ソドン 79
ソロモン 12、77

タ行

対ザク用タンク型自走砲 75
耐熱フィールド 60
太陽発電衛星 90
ダブデ 81
チベ 76
TINコッド 72
デブロップ 73
ドダイYS 80
ドップ 80
トリアーエズ 73
ドロス 78
ドン・エスカルゴ 73

ナ行

南極条約 66
ニュータイプ 90
熱核推進システム 60
熱核反応炉 60

ハ行

ハイドボンブ 121
ハイパーバズーカ 106
ハイパーハンマー 106
パゾク 78
パプア 78
パブリク 69
バルカン砲 60
ヒートホーク 60、118
ヒートロッド 60、120
ビームサーベル 60
ビームライフル 93
ビット 59、94、126
ビッグトレー 74
ヒマラヤ 75
ファットアンクル 80
ファンファン 75
V作戦 46
フライマンタ 73
ブリティッシュ作戦 4
プロペラントタンク 94、99
ホワイトベース 69

マ行

マグネットコーティング 94
マゼラアタック 55、81
マゼラン 68
マッドアングラー 81
マニピュレータ 94
ミサイルランチャーバギー 74
ミデア 73
ミノフスキー粒子 90
ミノフスキー・クラフト 91
ムサイ 76
メガ粒子砲 92
モノアイ 94

ヤ行

ユーコン 81

ラ行

ルウム戦役 6、66
ルッグン 80
ルナII 69
61式M.B.T. 74
60㎜バルカン重装甲車 74

PF−78−1	パーフェクトガンダム	19、
RB−79	ボール	16、49、112、
RGC−80	ジムキャノン	18、114、
RGM−79	ジム	15、49、52、
79D	ジム寒冷地仕様	19、49、115、
G	ジム・コマンド	19、49、116、
GS	ジム・コマンド宇宙用	19、52、117
(L)	ジム・ライトアーマー	18、
(SC)	ジム・スナイパーカスタム	18、114、
RMV−1	ガンタンクII	17、49、54、113、
RX−75	ガンタンク	15、47、55、111、
RX−77−1	ガンキャノン	15、47、54、110、
77−3	ガンキャノン重装型	17、113、
77−4	ガンキャノンII	17、49、
RX−78−1	プロトタイプガンダム	16、46、
78−2	ガンダム	15、47、52、106、
78−3	G−3ガンダム	16、46、
TGM−79	ジム・トレーナー	18、
YMS−07	プロトタイプグフ	26、
YMS−09	プロトタイプドム	27、
09D	ドム・トロピカルテストタイプ	28、

兵器&用語

ア行

アナハイム・エレクトロニクス 36
アーマー 50
ア・バオア・クー 13、77
アポジモーター 50
一週間戦争 4
一年戦争 4
衛星ミサイル 79
エネルギーＣＡＰ 94
オールレンジ攻撃 50
オデッサ作戦 10

カ行

ガウ 80
核融合炉 50
ガトル 78
ガンペリー 71
寒冷地用Ａ.Ｐ.Ｃ 75
キャリフォルニアベース 40
ギャロップ 81
キュイ 54、81
クラッカー 50
グラナダ 78
グレネイド 50
グワジン 76
コア・ファイター 72、107
コア・ブースター 72、107
コアブロックシステム 50
コムサイ 77
コロニー落し 65
コロンブス 69

S	ザクII（指揮官用強化型）	20、23、119、
V	ザクタンク	24、128、
W	一般作業用ザク	25、
Z－3	サイコミュシステム試験用ザク	26、
MS－07B	グフ	20、26、39、54、
C－3	グフ重装型	26、
C－5	グフ試作実験機	27、
H	クブ飛行型	27、39、129、
H－4	グフ飛行型	27、
MS－09	ドム	21、39、54、120、
09G	ドワッジ	⇨「MS大図鑑2」
H	ドワッジ改	⇨「MS大図鑑2」
R09	リック・ドム	21、52、120、
09RII	リック・ドムII(ツヴァイ)	34、35、43、52、135、
MS－10	ペズン・ドワッジ	32、130、
MS－11	アクト・ザク	32、43、131、
MS－12	ギガン	32、54、130、
MS－13	ガッシャ	33、54、130、
MS－14A	ゲルググ	21、43、52、121、
B	高機動型ゲルググ	28、52、
C	ゲルググキャノン	28、
JG	ゲルググ J(イェーガー)	34、43、52、136、
S	ゲルググ（指揮官用強化型）	20、
MS－15	ギャン	21、52、121、
MS－17A	ガルバルディα	33、43、131、
B	ガルバルディβ	⇨「MS大図鑑2」
MSM－03	ゴッグ	22、41、57、122、
03C	ハイ・ゴッグ	34、41、56、138、
MSM－04	アッガイ	22、41、56、123、
04G	ジュアッグ	29、56、
N	アッグガイ	29、56、
MSM－07	ズゴック	22、41、57、122、
07E	ズゴックE(エクスペリメント)	34、41、56、137、
S	ズゴック（指揮官用強化型）	22、122、
MSM－08	ゾゴック	29、56、
MSM－10	ゾック	23、41、56、
MSN－01	サイコミュシステム高機動試験用ザク	28、
MSN－02	ジオング（パーフェクトジオング）	32、45、59、
MSX－03	アッザム	31、127、

MS大図鑑PART.1「一年戦争編」

索引

INDEX

●「機動戦士ガンダム」のTV版、劇場版、「MSX」、「MS－X」、「機動戦士ガンダム0080～ポケットの中の戦争」に登場した主要MS・MA、及び主要兵器と主要用語をアルファベット・50音順にまとめました。見出しの単語を選び、記されているページ数を見て下さい。その単語が解説、あるいは関連する事項がわかるようになっています。なお、MS・MAに関しては型式番号をアルファベット順に検索できるようになっています。

MS&MA

EMS－05	アッグ	29、
FA－78－1	フルアーマーガンダム	17、
FA－78－2	ヘビーガンダム	16、
MA－04	ザクレロ	30、125、
MA－05	ビグロ	30、45、59、124、
MA－08	ビグ・ザム	31、45、59、126、
MAM－07	グラブロ	30、45、58、124、
MAN－03	ブラウ・ブロ	30、45、58、125、
MAN－08	エルメス	31、45、59、126、
MS－05	ザクⅠ	20、37、52、118、
MS－06A	ザクⅡ（初期量産型）	38、
C	ザクⅡ（前期量産型）	38、
D	ザク・デザートタイプ	24、54、
E－1	ザク強行偵察型	25、129、
E－3	ザクフリッパー	25、
FZ	ザク改(後期量産型)	20、43、52、118、132、
FS	ザクⅡ（格闘戦性能強化型）	23、
J	陸戦用ザク	39、55、57、119、
K	ザクキャノン	25、39、54、129、
M	ザク・マリンタイプ	24、39、56、128、
R－1A	高機動型ザク（黒い3連星タイプ）	24、52、
R－2	〃（ジョニー・ライデンタイプ）	23、

機動戦士ガンダム MS大図鑑 PART.1

目次

CONTENTS

「一年戦争編」

MS戦史 M.S. War History. ……4

MS名鑑 M.S. Catalog. ……15

MS開発史 M.S. Development History. ……35

MS性能比較 An abiliy symmetry of M.S. ……54

ガンダム・オフィシャル・レポート GUNDAM Official Report. ……61

1.歴史 History. ……62

2.通常兵器 Weapon. ……68

3.機動兵器 Mobile Weapon. ……82

4.先端技術 High-Technology. ……88

MS操縦マニュアル M.S. Pilot Manual. ……95

MS設定資料集 M.S. Design collection. ……105

MS用語事典 M.S. Giossary. ……50、60、94

索引 Index ……145

■発行日　1989年2月20日初刷　1990年3月30日八刷
■発行人　山科　誠
■編集人　加藤　智
■発　行　株式会社バンダイ
■印刷・製本　共同印刷株式会社
■編集・構成　伸童舎
■協力　サンライズ
■定価はカバーに表示してあります
〒111東京都台東区駒形2-5-4
（営業）東京都新宿区新宿1-26-6 加藤ビル6F
（営業TEL）03-5379-1911

ISBN4-89189-006-1

EB
ENTERTAIMENT
BIBLE

エンターティメント
バイブルシリーズ

スペシャリティな世界を
追求するエンタティナー
それがＥ・Ｂシリーズ！

No2

ガンダム大図鑑Part2
グリプス戦争編



好評発売中

COVER IIIUSTRATION KENICHI ISHIBASHI

ENTERTAINMENT BIBLE .1
機動戦士ガンダム
MS大図鑑
【PART.1 一年戦争編】



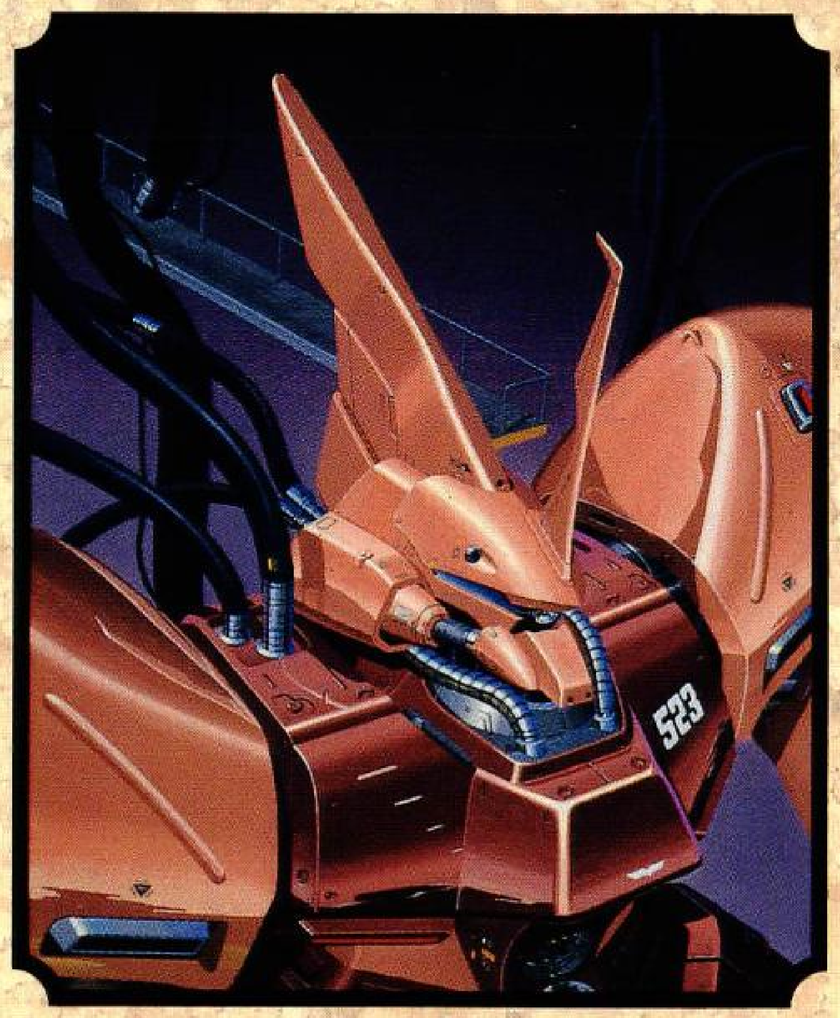
EB
ENTERTAINMENT BIBLE

EB
ENTERTAINMENT BIBLE
1
機動戦士ガンダム
MS大図鑑
【PART.1 一年戦争編】
BANDAI

機動戦士ガンダム

MS大図鑑

【PART.1一年戦争編】



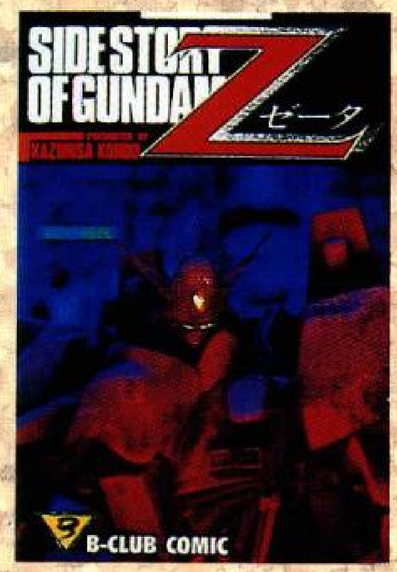
【Mobile Suit GUNDAM.】
【Mobile Suit Variation.】
【Mobile Suit -X(pezh)】
【Mobile Suit GUNDAM 0080】
【～War in the pocket.～】

定価700円
（本体680円）

ISBN4-89189-006-1 C0276 P700E

近藤和久

GUNDAM COMIC



Z（ゼータ）

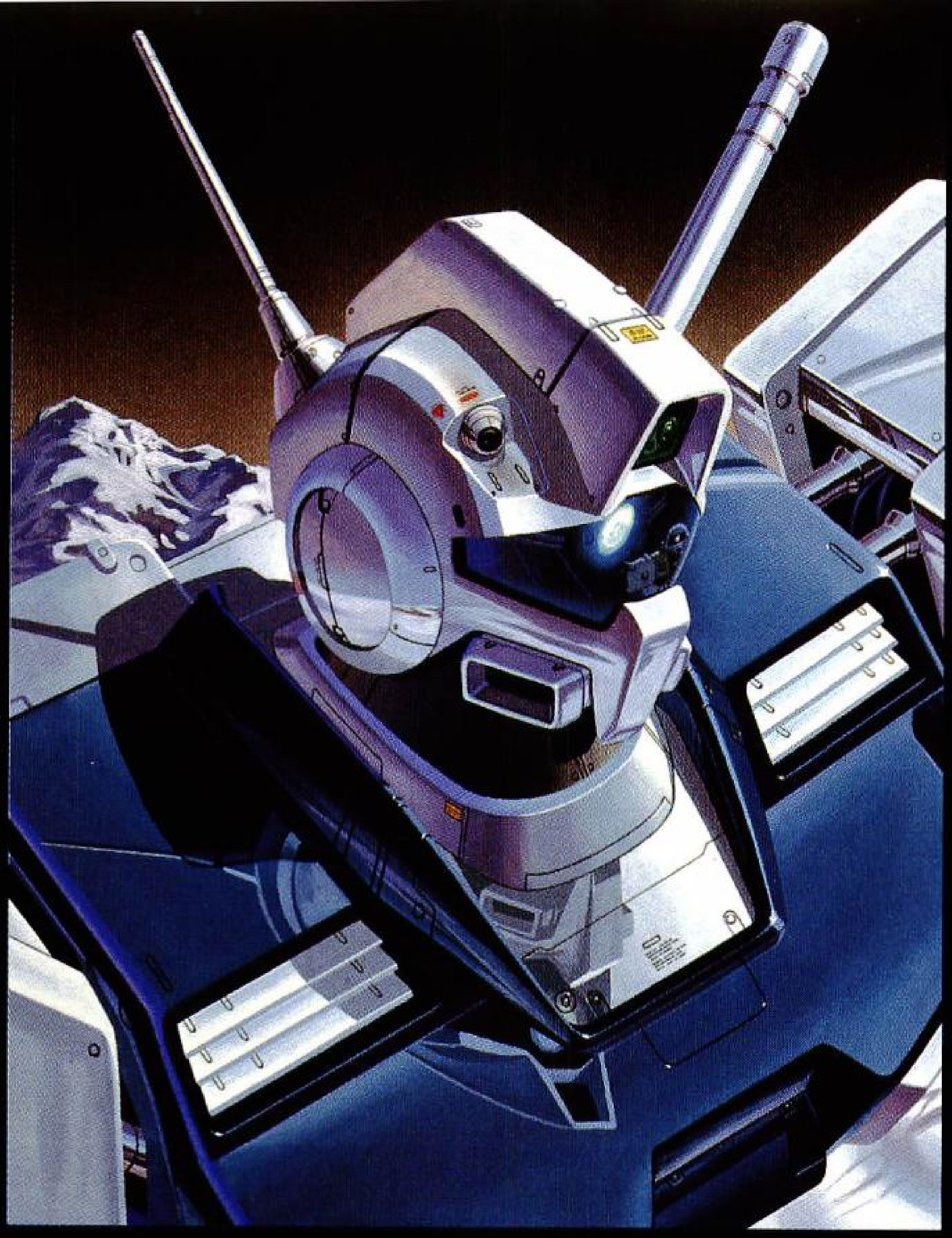


MS戦記



新MS戦記

好評発売中 各巻780円



機動戦士ガンダム

モビルスーツ

MS大図鑑

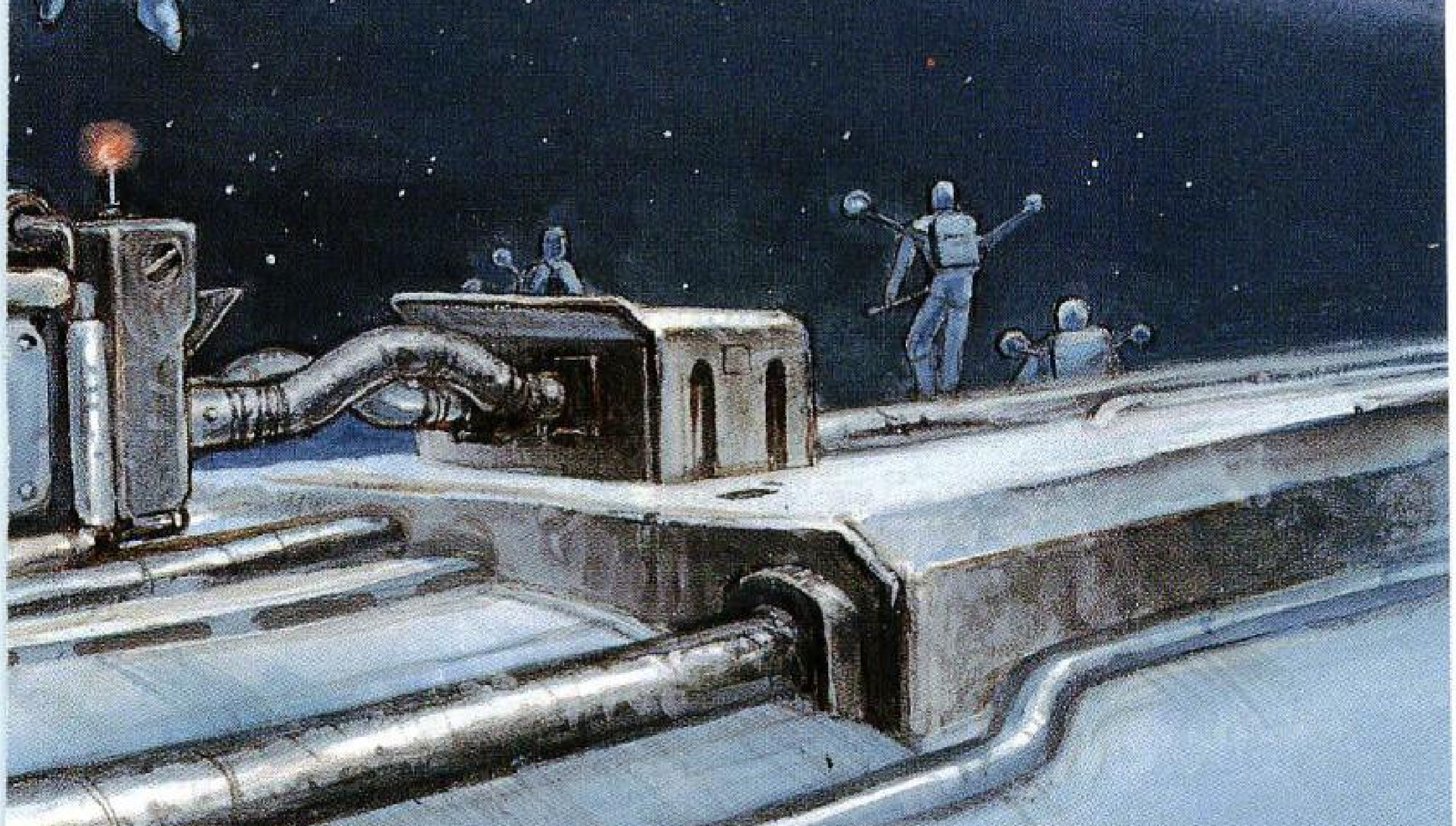
1

【一年戦争編】

Illustration by Kenichi Ishibashi

GUNDAM WAR HISTORY

……【ガンダム戦史】



1.開戦 ～一週間戦争～

宇宙世紀（ユニバーサル・センチュリー）0079年1月3日、地球から最も離れたスペースコロニー〝サイド3〟は、ジオン公国を名乗り地球連邦政府に対して独立戦争を挑んだ。（独立宣言は0069年。詳しくは62ページの年表を参照のこと）

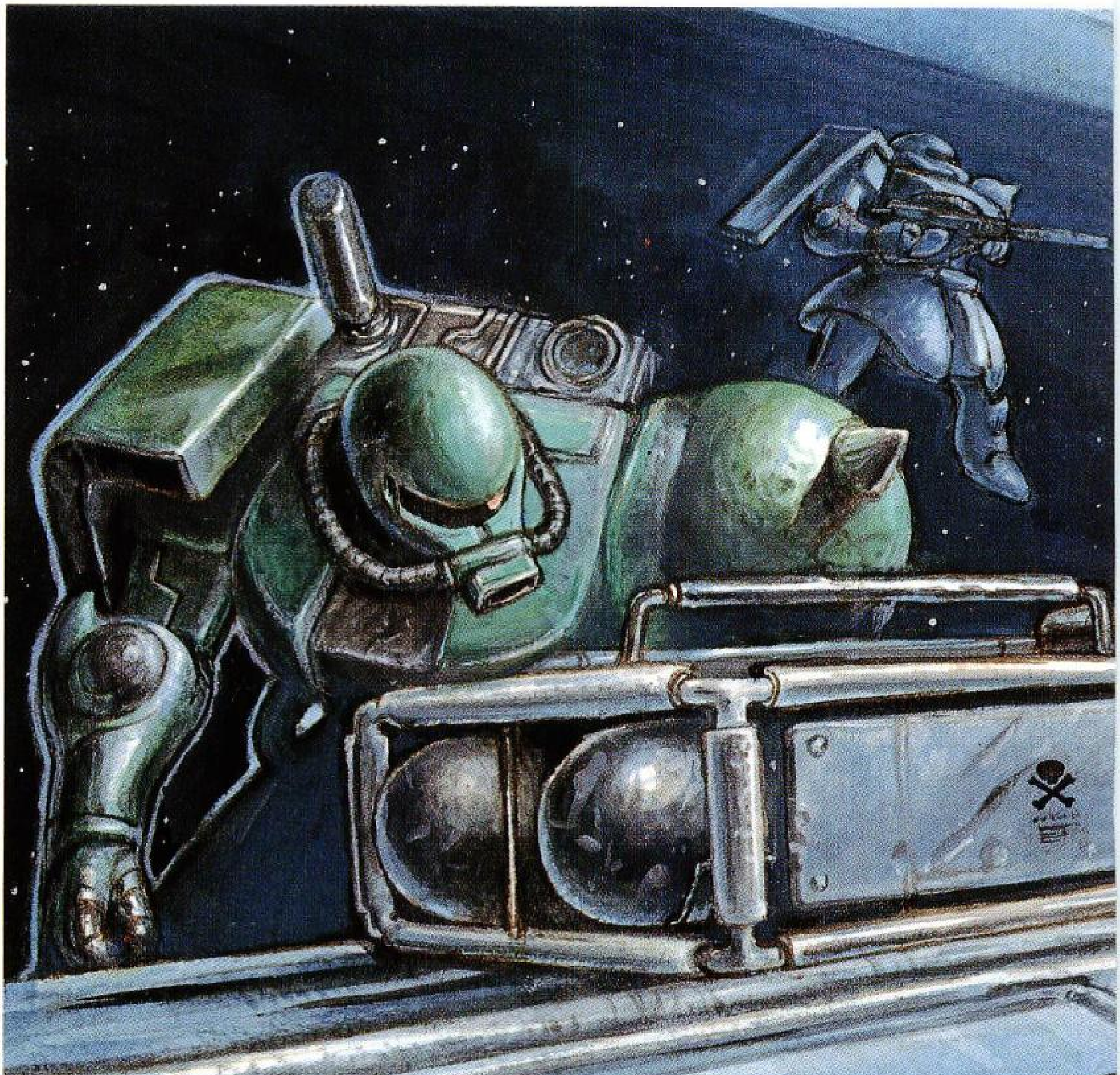
ジオン公国軍は、一方的な宣戦布告と同時にサイド1、2、4に奇襲攻撃を敢行し、BC兵器、熱核兵器により30億人を虐殺した。

さらにコロニー攻撃と平行して行われた〝ブリティッシュ作戦〟では、サイド2のコロニー1基が熱核ロケットによりラグランジェポイントか

一週間戦争において公国軍は、〝ザクを使用し、コロニー内にＧ３ガスを注入して〟大量殺戮を行った。また、コロニーを地球に向けて落下させる〝コロニー落し〟を決行した。

【第一章『一年戦争』】

イラスト 草彅 琢仁

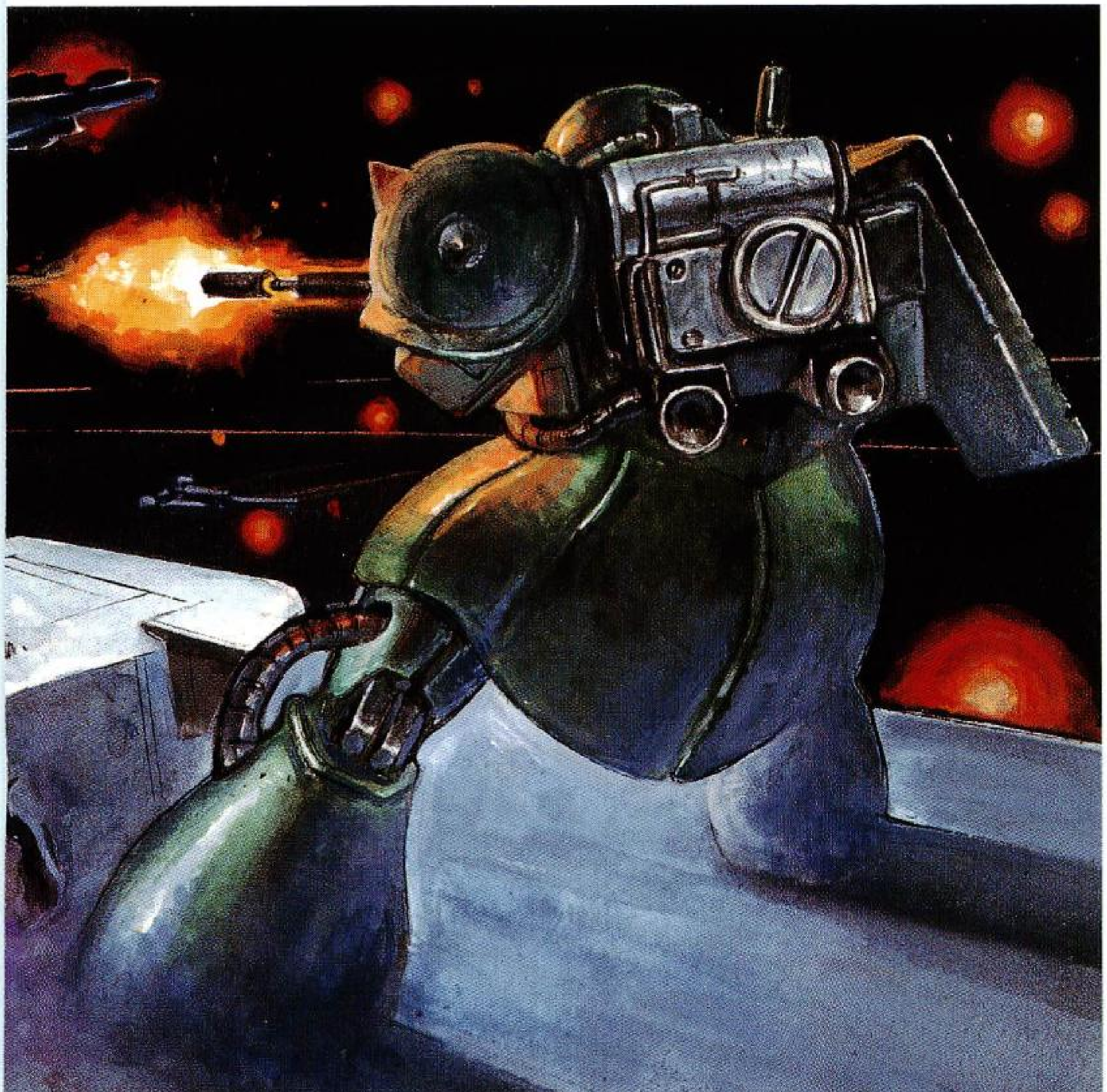


ら離され、地球南米に位置する連邦軍総司令本部〝ジャブロー〟に向けて落下させた。だが、大気圏突入時にコロニーの軌道がそれ、オーストラリア大陸のシドニーに落下し大陸の3分の1が、また落下中に分離したコロニーの破片により北米大陸の4分の1が壊滅した。第一次被害による死傷者、行方不明者は3億2千万人、気象変動などの第2次被害は地球上で20億人に至った。

この一週間戦争（1月3日から10日までの戦闘）において、公国軍は初めてモビルスーツ（以下MS）を投入。その高い作業能力を生かし、コロニー内へのガス注入、熱核ロケットの設置などを行った。MSの戦闘能力が発揮されるのは次のルウム戦役だった。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンダム戦史】

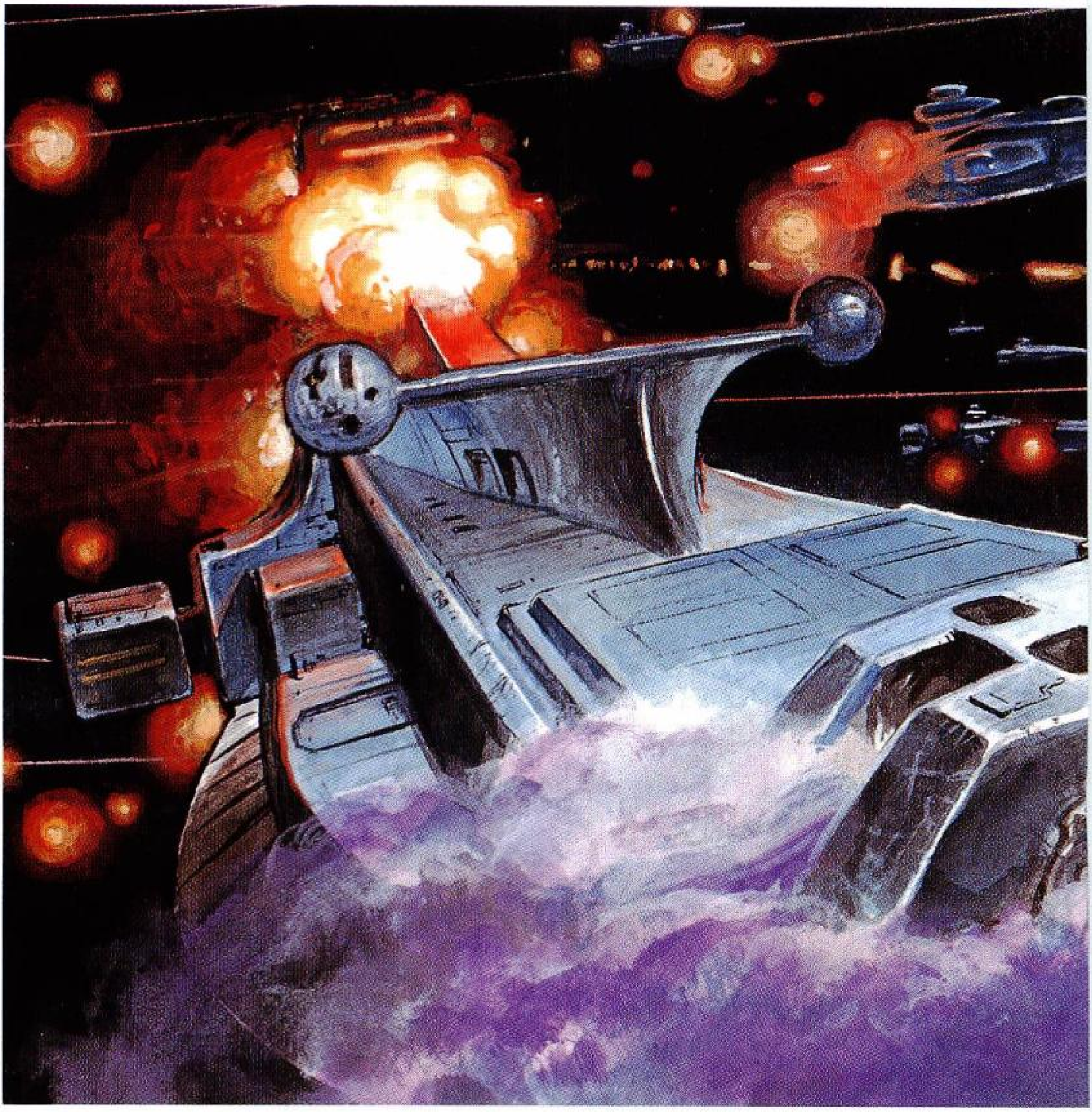


2.史上最大の宇宙艦隊戦
～ルウム戦役～

同年1月15日。サイド5（ルウム）宙域において艦隊戦が繰り広げられた。連邦軍のマゼラン級戦艦×12、サラミス級巡洋艦×61、補給艦他中小艦艇×201に対し、公国軍側はグワジン級戦艦×3、ティベ級重巡洋艦×12、ムサイ級軽巡洋艦×39、ドロス級空母×1、中小艦艇×87と、戦力差は歴然であった。だが、公国軍にはMS－05ザクIとMS－06ザクIIからなるMS部隊があった。

てのミノフスキー粒子下においてMSは、連邦軍の艦艇の弾幕を容易にかいくぐるだけの運

ルウム戦役においても新兵器〝モビルスーツ〟の活躍はめざましかった。公国軍のザク・パイロットの中には、この戦闘だけで5隻の戦艦を沈没させた者もいた。



動性を有していた。しかも、MSには核弾頭付のバズーカが装備されており、その威力たるや一発でマゼラン級戦艦を撃沈するものであった。(離脱が間に合わず爆発に巻き込まれたMSも多い)

このMSの多大なる戦果により、連邦軍艦隊は壊滅状態となり、艦隊司令のレビル将軍が捕虜となった。だが、勝利をおさめた公国軍側も多くの艦艇とMSを失い、次に予定されていた連邦軍唯一の宇宙基地〝ルナII〟の攻略を見送らざるを得なかった。

このルウム戦役の勝利によって、公国軍は制宙権を掌握した。そして、無傷であったサイド6は連邦軍政府に対する信頼を失い、同年1月17日に中立宣言を行った。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンタム戦史】



3.地球侵攻

同年2月7日。南極条約調印のわずか1週間後、公国軍は地球侵攻作戦を開始した。ムサイ級軽巡から離脱したHRSL（降下用カプセル）が北米、ヨーロッパ、アフリカ、東アジア世界各地の主要都市、連邦軍基地に降下した。カプセルから出現したのは、ルウム戦役で活躍したMSだった。条約によって核は使用できなかったが、ミノフスキー粒子の大量散布により、連邦軍のレーダーシステムは壊滅し、通信もままならない状況下で連邦軍の迎撃も個別につぶされていった。

地球侵攻作戦において公国軍はHRSLを用いて直接各地に降下部隊を送り込んだ。制宙権を失った段階で、連邦軍は丸裸になっていたのだった。(イラストはニューヨーク市に出現したザク部隊)



特にMSは移動力こそ低かったが、その攻撃力と防衛力は連邦軍の在来兵器を凌駕した。このMSを主軸とした第1次降下部隊の活躍により、2月18日には地球攻撃軍の本隊である第2次降下部隊が難なく降り立つことができた。

第2次降下部隊は、ガウ空母を主力とする航空部隊、Uコン級潜水艦を主力とする海洋部隊、ダブデ陸戦艇、マゼラ・アタック型戦車を主力とした陸上部隊を地球に降ろした。

2月から3月の間に公国軍は、全大陸の3分の2を勢力下におさめた。だが、この早急な侵攻作戦によって公国軍の消耗も著しく、伸び切った補給路を維持するのもやっとであった。ここにおいて戦局は膠着(こうちゃく)状態となる。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンダム戦史】

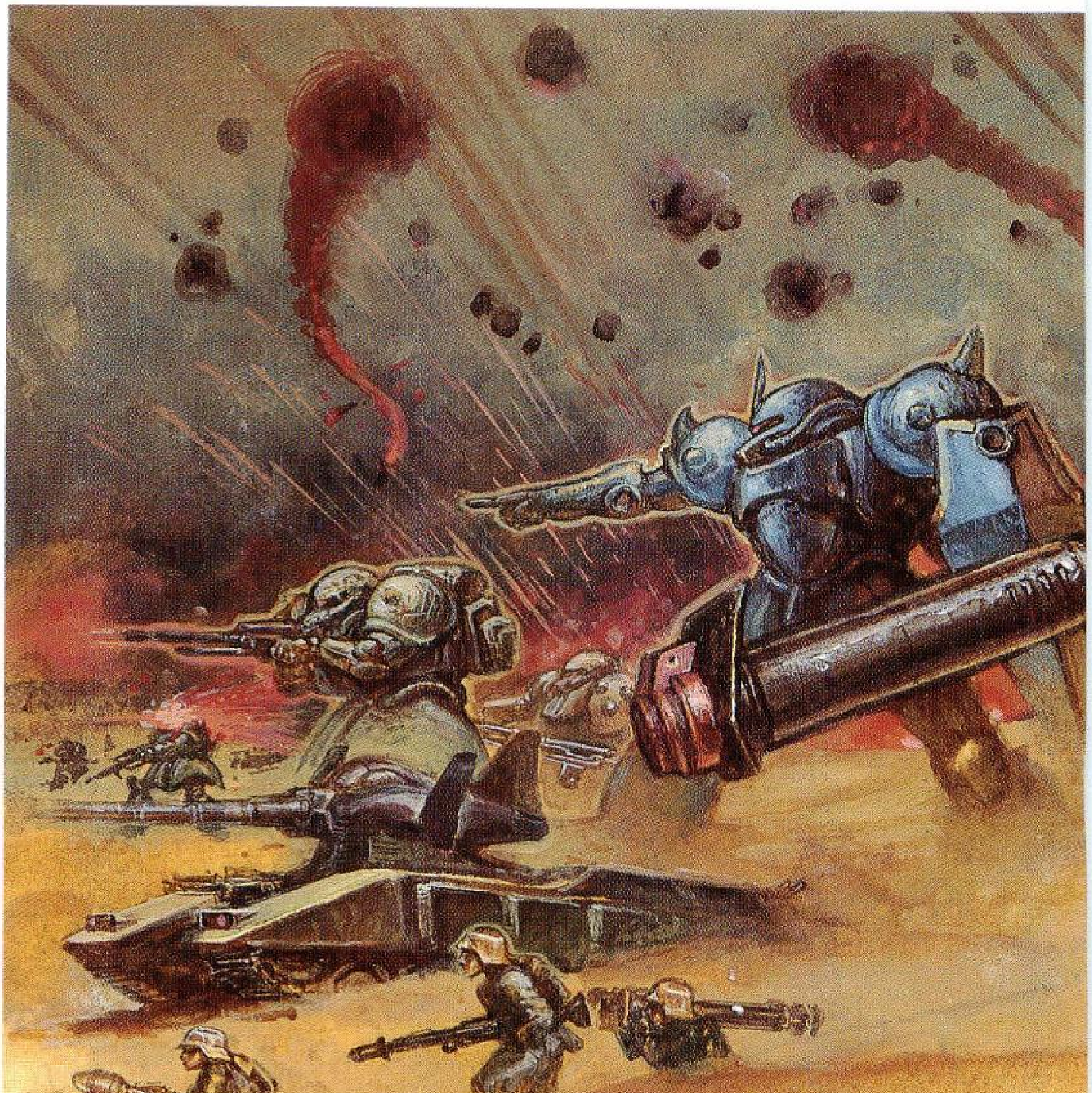


4.連邦軍反撃
～オデッサ作戦～

戦局の膠着状態から8カ月後、11月7日に連邦軍は〝オデッサ作戦〟を開始する。目的はユーラシア大陸黒海沿岸の公国軍基地を壊滅させ、地球からの鉱物資源の打ち上げを断つことであった。連邦軍はこの作戦に陸上兵力のおよそ3分の1を投入した。

この一大反抗作戦を可能としたのは、地球攻撃軍司令官、ガルマ・ザビの死であった。ジオン公国を支配するザビ家の末弟であるガルマは、同年9月にニューヨークにおいて連邦軍のホワイトベース隊と交戦し、ガウ攻撃空母とも

連邦軍のオデッサ作戦に対し、公国軍は新型陸戦用MS〝グフ〟と〝ドム〟を投入した。だが、連邦軍の侵攻を食い止めることはできず、一敗地にまみれた。

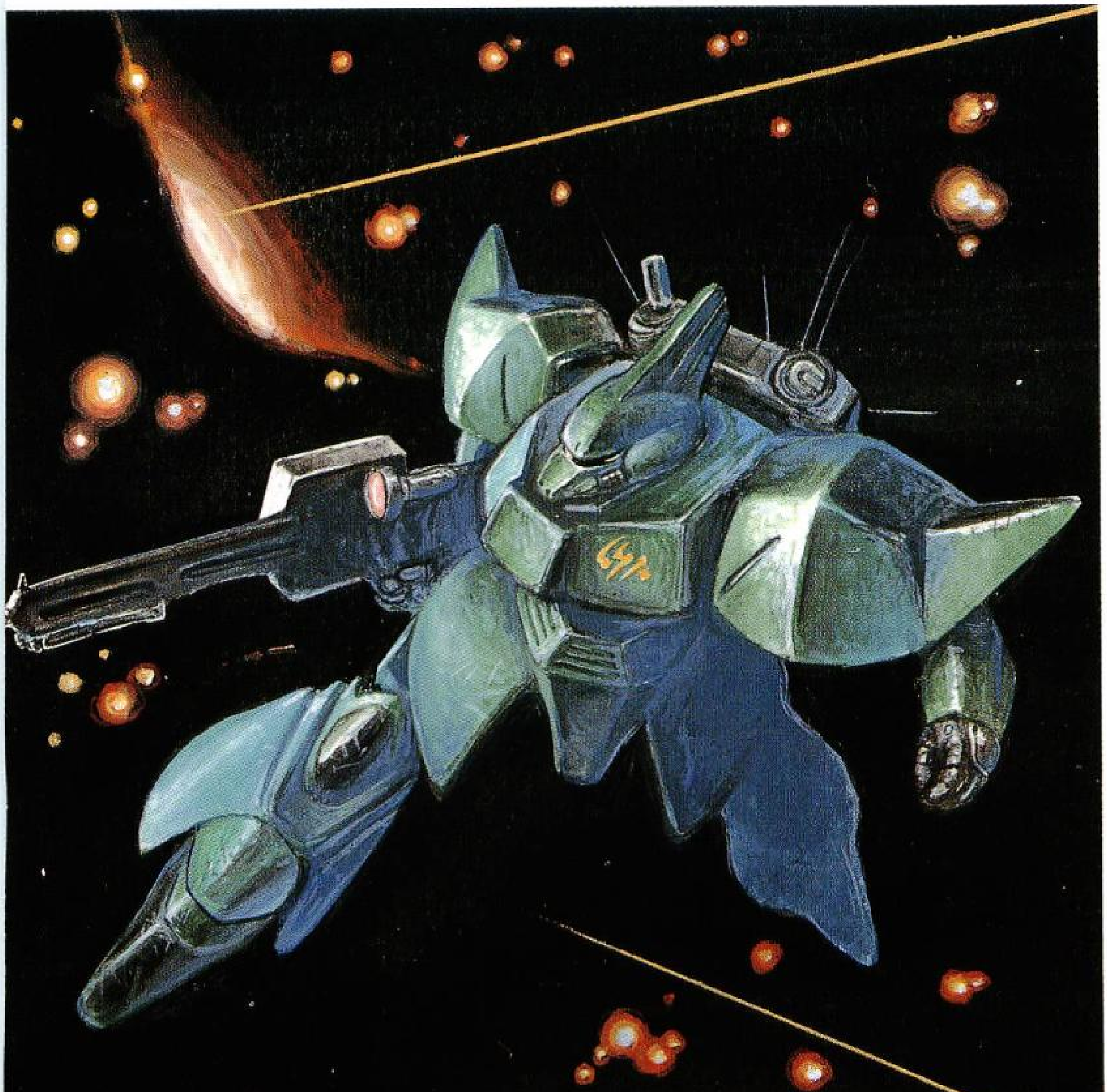


に戦死した。これによって、地球攻撃軍は指揮系統が混乱し、連邦軍の動きに対応できなかったのである。

3日間の激戦ののち連邦軍は勝利を治めた。この戦いを契機として、連邦軍は各地で反抗に転じ、ミリタリーバランスは一挙に連邦軍側へと傾いていった。また、公国軍は11月30日に連邦軍総司令本部基地〝ジャブロー〟の攻撃を敢行し、北米の拠点〝キャリホルニアベース〟の戦力の大半を消耗する結果となった。そして、12月にはこの重要拠点を失うこととなった。公国軍の中で最後まで抵抗したのはアフリカ方面軍であった。だが、翌年1月1日の公国軍の無条件降伏とともに、抵抗を止め、武装解除された。

GUNDAM WAR HISTORY

【ガンダム戦史】



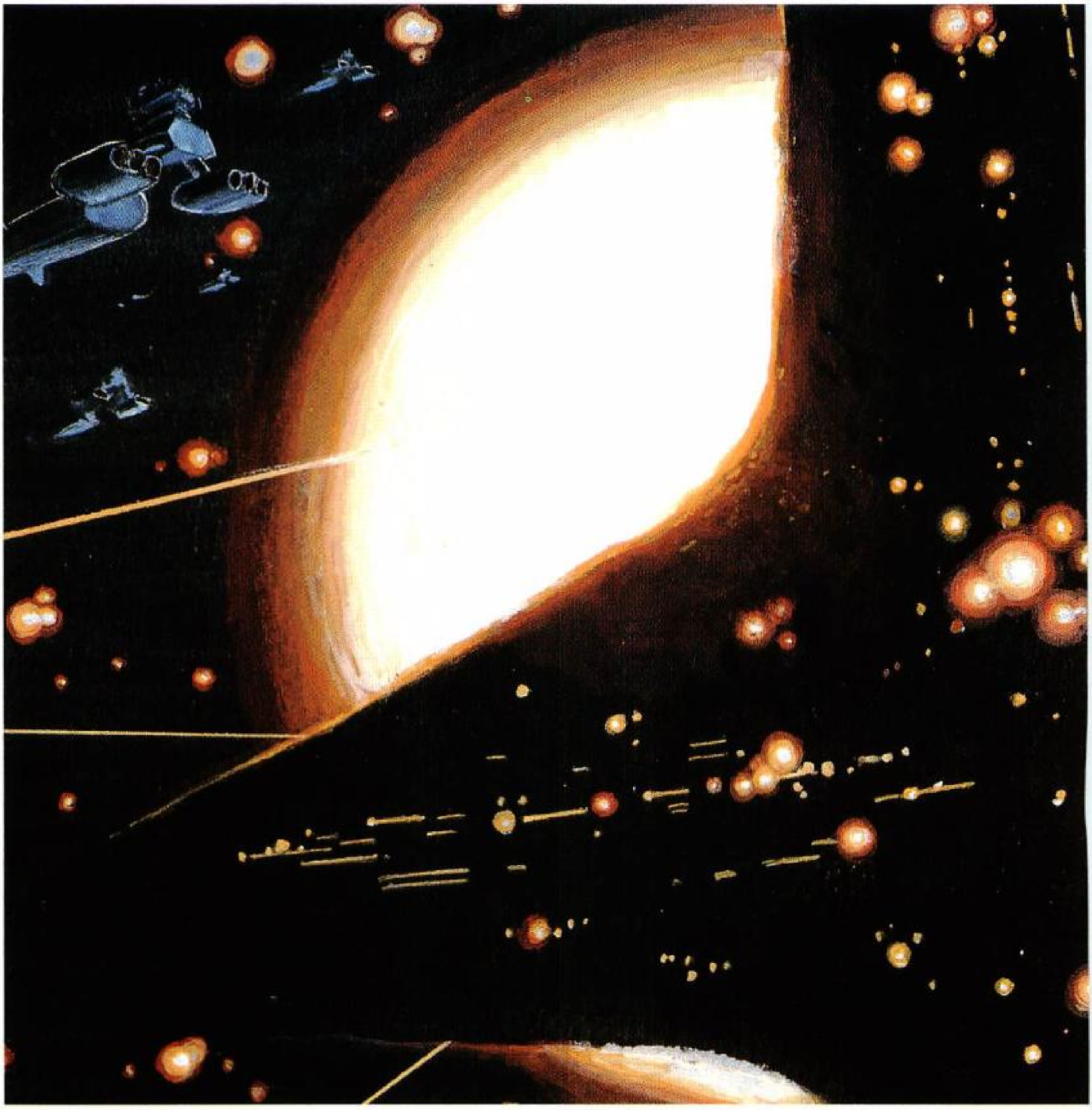
5.ジオン公国軍の敗北

～星一号作戦～

12月4日、公国軍の攻撃部隊を退けたジャブロー基地から多数の宇宙艦艇が打ち上げられた。宇宙においての大反抗作戦〝星一号作戦〟の発動である。地球から発進したレビル、ティアンム両艦隊は、ルナII艦隊と合流し、公国軍の宇宙要塞〝ソロモン〟に進路を向けた。この艦艇の中には連邦軍製のMS、RGM-79ジムが満載されていた。

12月27日、連邦軍はソロモンに攻撃を開始した。連邦軍は新兵器〝ソーラ・システム〟を投入し、集束された太陽光線により要塞の3分の1を焼きつくした。この戦いは9時

ソロモン攻略戦において連邦軍は、初めて〝ソーラ・システム〟を使用した。連邦軍側が〝ジム〟及び〝ボール〟を大量投入したことで戦力差は縮まり、結局はこの新兵器が勝敗を決した。



間で終了し、ソロモンは陥ち、ドズル・ザビ中将率いる宇宙攻撃軍は壊滅した。これによって、連邦軍の宇宙戦力は20%、公国軍は35%を消耗した。

12月30日、和平交渉におもむいたレビル艦隊が公国軍の新兵器〝ソーラ・レイ〟により消滅した。この攻撃でレビル将軍とジオン公国の前公王デギン・ザビが戦死。連邦軍の艦隊は作戦当初の40%に戦力が落ちた。

12月31日、公国軍の最終防衛ラインの一角をになう宇宙要塞〝ア・バオア・クー〟に対し、連邦軍艦隊は戦火を開いた。だが、レビル艦隊を欠いたことで劣勢はまぬがれず、要塞内に少数のMS部隊を突入させるのがやっとであった。

だが、公国軍側の指揮系統を混乱させる事件が生じた。

ア・バオア・クーの敗北により公国軍は事実上壊滅した。

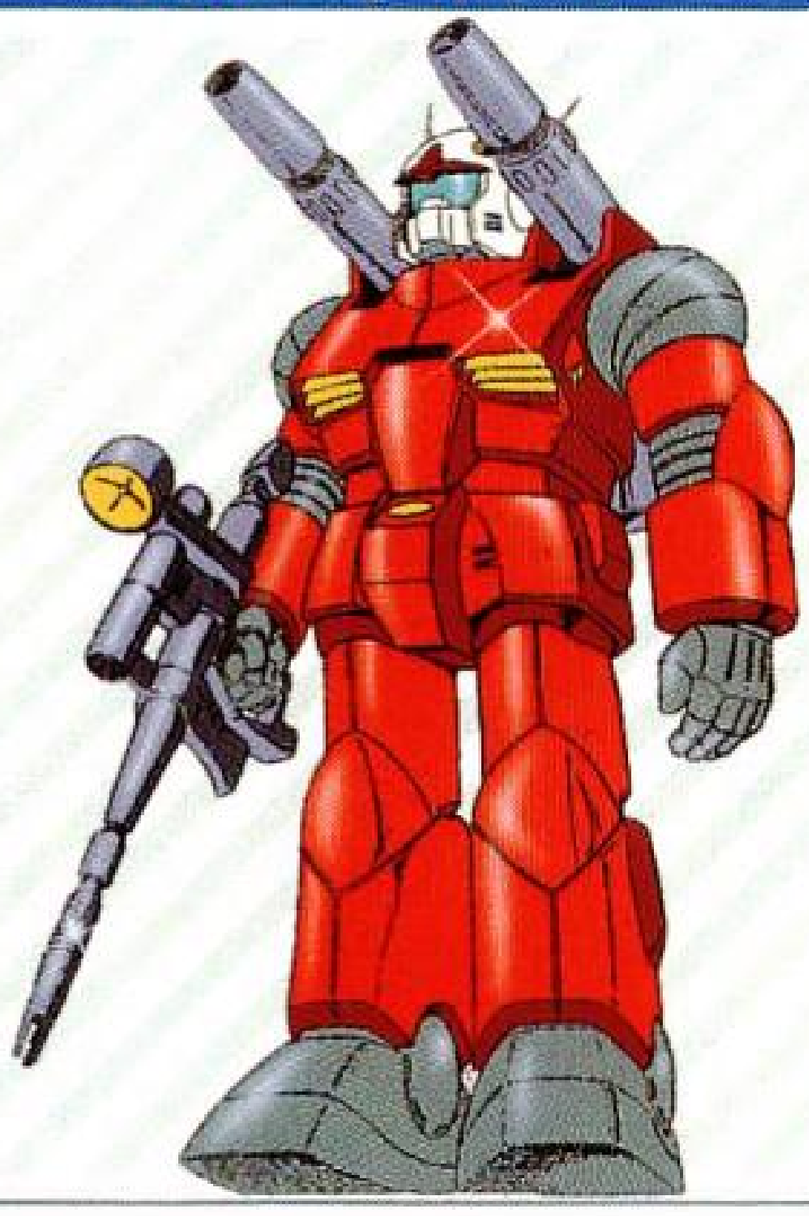


ア・バオア・クーを指揮していたギレン・ザビ総帥が戦死し、その直後、突撃機動軍司令キシリア・ザビが指揮を引き継いだ。だが、その隙をついて連邦軍の艦艇、ＭＳが次々に防衛ラインを突破し、要塞に直接攻撃をかけた。戦力を分断されたことで、キシリアは脱出を計るが、出港直後に艦が撃沈されてしまった。

ザビ家の滅亡により、ジオン公国のガルシア首相は議会を動かし、共和制へ移行させた。そして、００８０年１月１日、月面のグラナダにて連邦政府との間に終戦協定を結んだ。

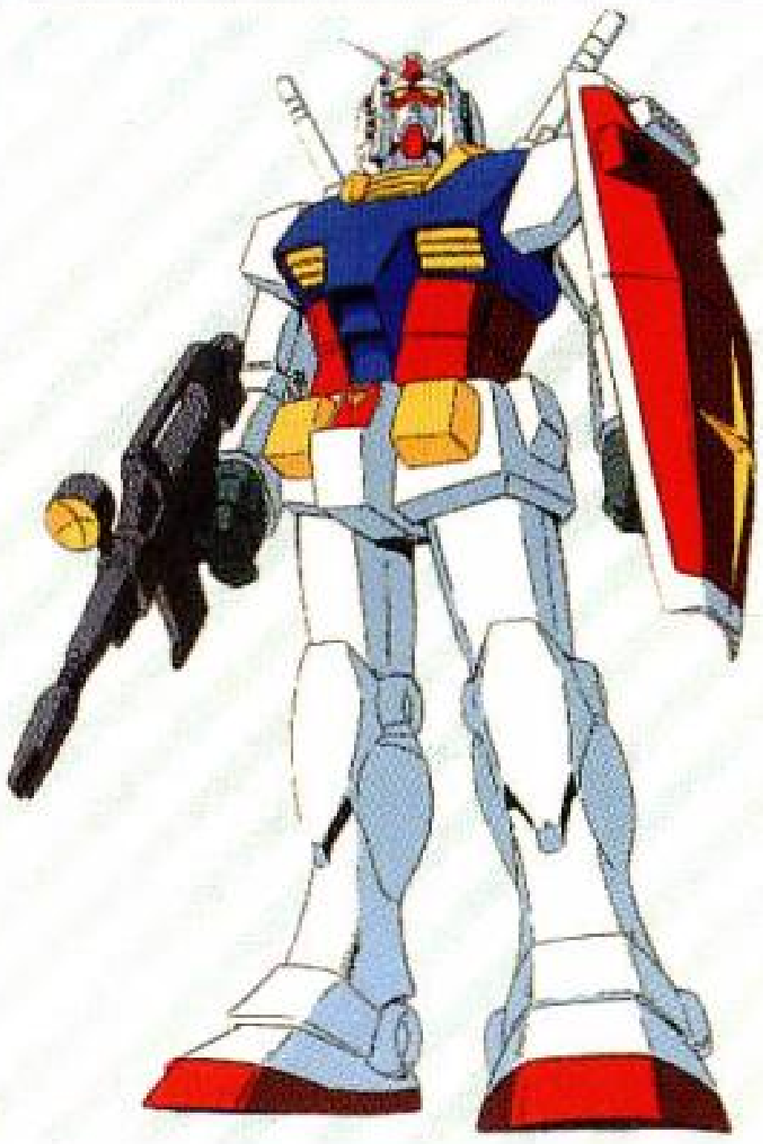
MS名鑑

RX-77-1 ガンキャノン



①砲撃戦用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144 1/250

RX-78-2 ガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/72 1/100 1/144 1/250

RGM-79 ジム



①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/144 1/100

RX-75 ガンタンク



①砲撃戦用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/144 1/250

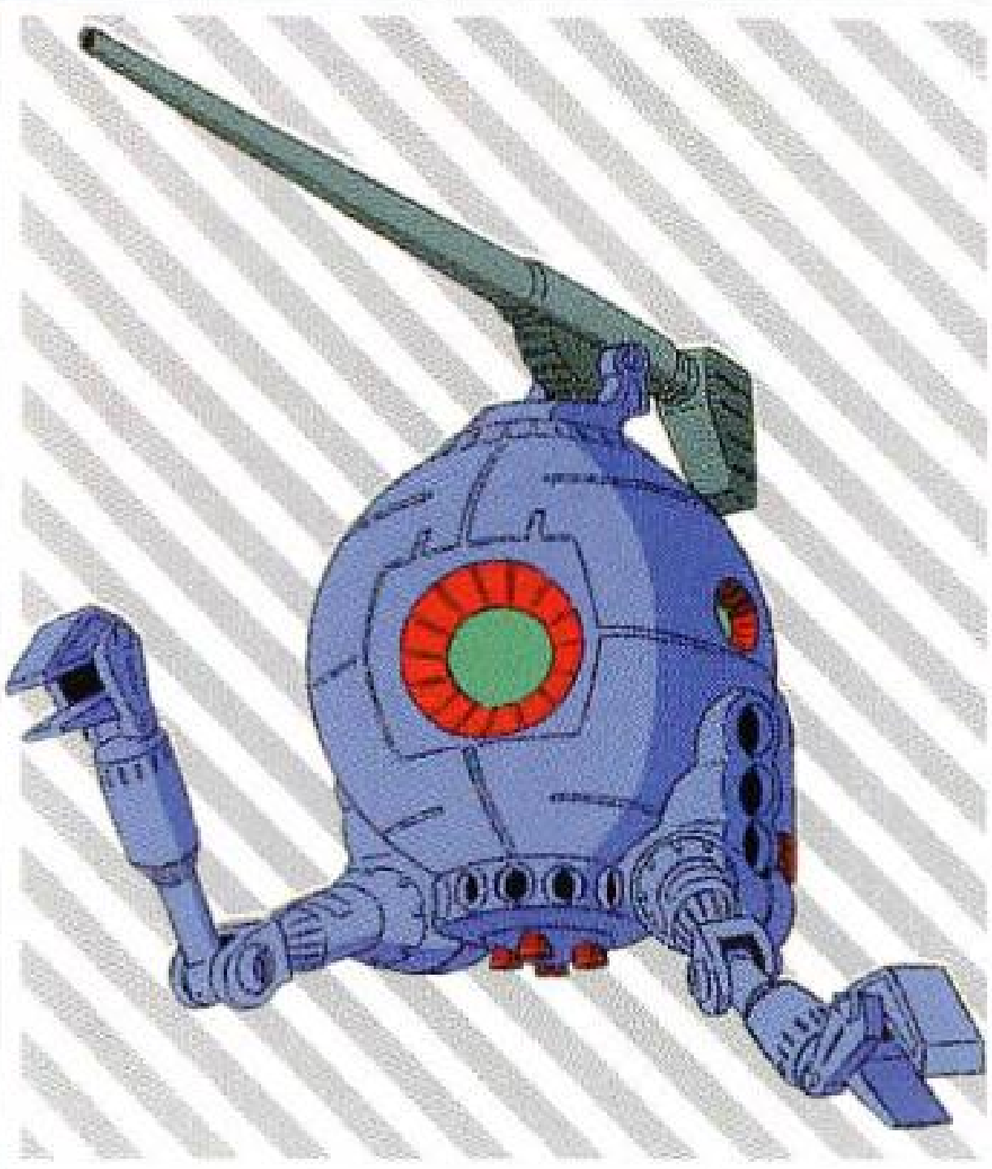
①分類、②所属、③登場シリーズ、④模型対応表

FA-78-2 ヘビーガンダム



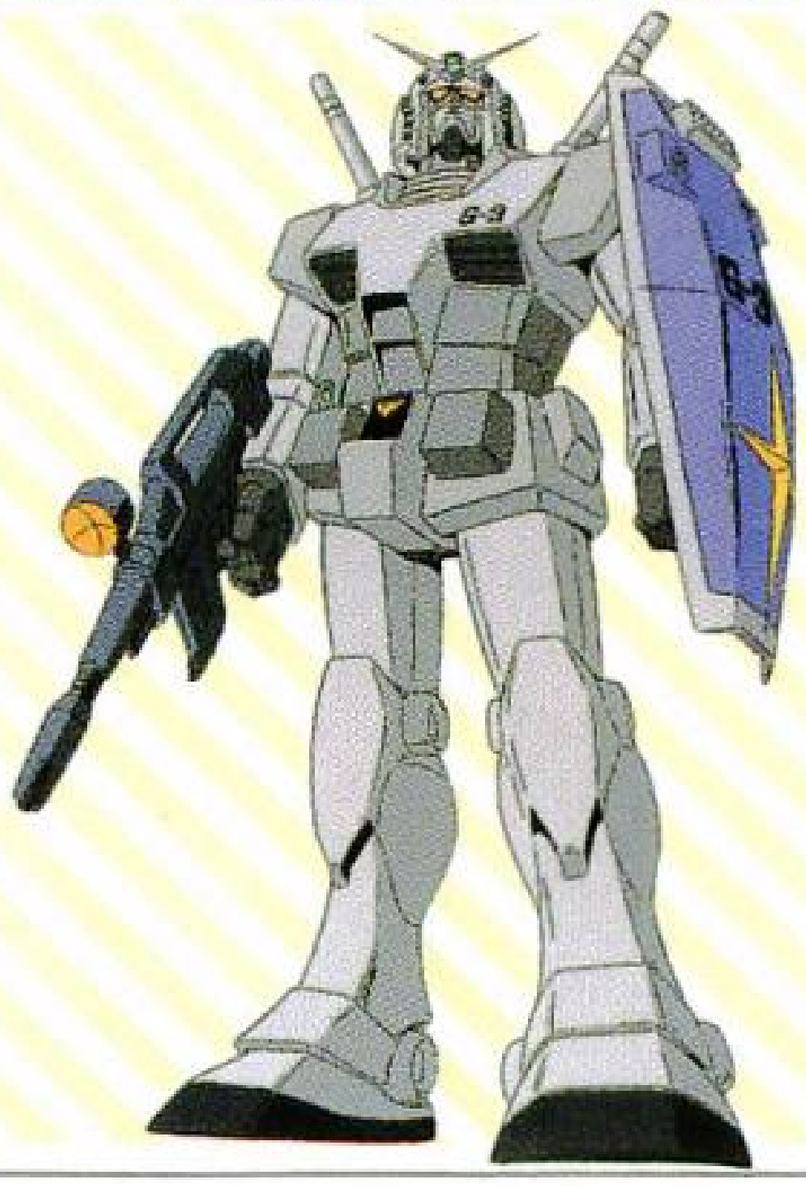
①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MS-X
④——

RB-79 ボール



①量産型モビルポッド
②連邦軍
③機動戦士ガンダム
④1/144

RX-78-3 G-3ガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

RX-78-1 プロトタイプガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

RX77-3 ガンキャノン重装型



①砲撃用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

FA-78-1 フルアーマーガンダム



①汎用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/60 1/100 1/144

RMV-1 ガンタンクII



①砲撃用量産型モビルビーグル
②連邦軍
③MSV
④——

RX-77-4 ガンキャノンII



①砲撃用試作型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

TGM-79 ジムトレーナー



①訓練用モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

RGM-79(L) ジムライトアーマー



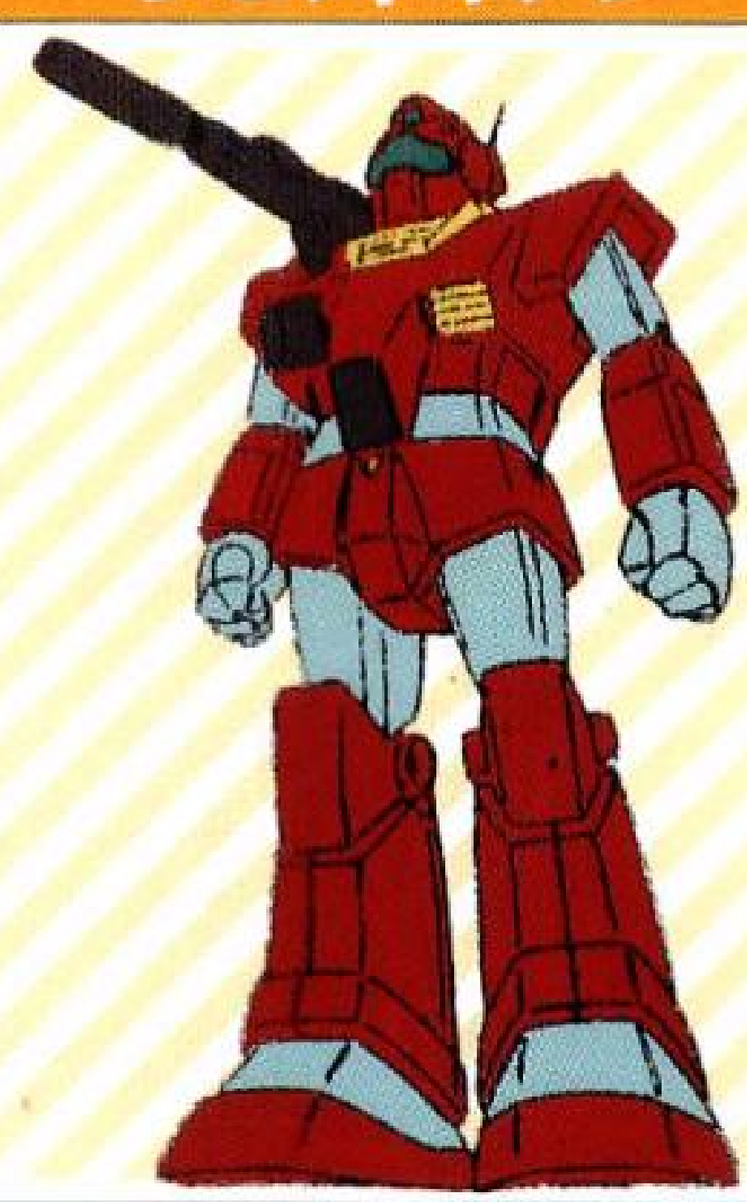
①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④——

RGM-79(SC) ジムスナイパーカスタム



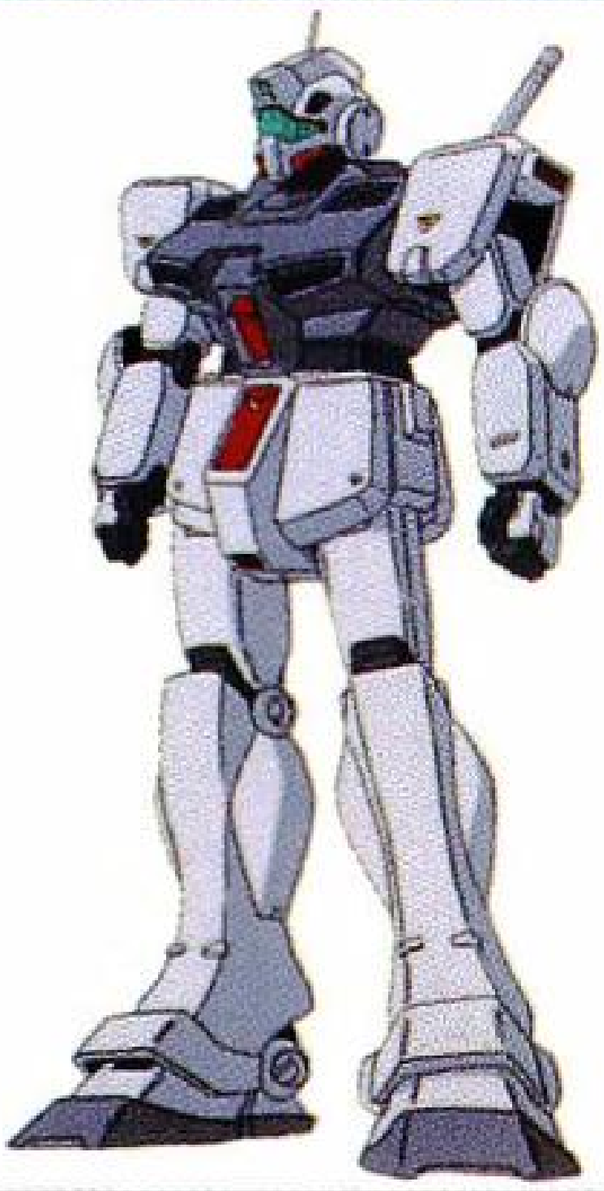
①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

RGC-80 ジムキャノン



①砲撃用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV
④1/144

RGM-79D 寒冷地戦用ジム



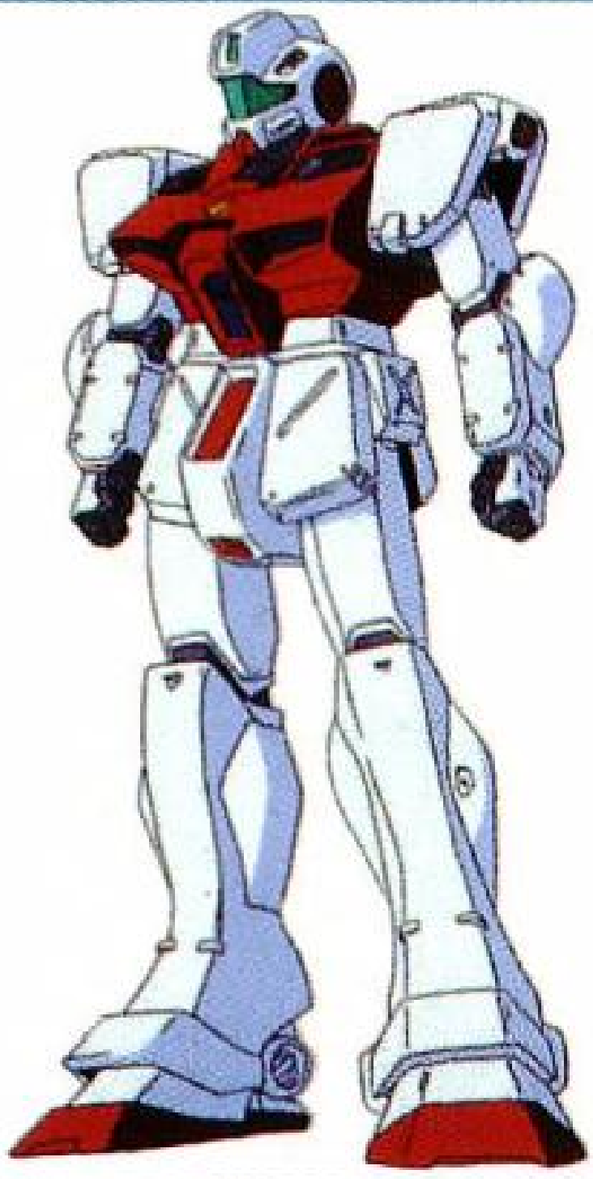
①寒冷地戦用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③ポケットの中の戦争
④ 未定

PF-78-1 パーフェクトガンダム



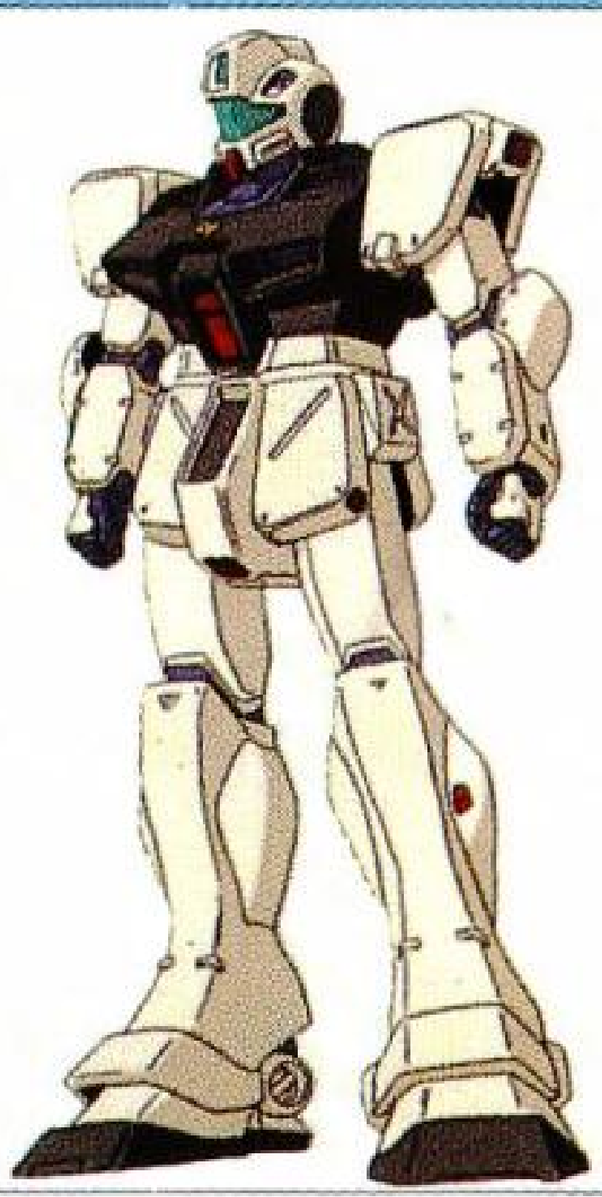
①汎用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③MSV プラモ狂四郎
④1/100 1/144

RGM-79G ジムコマンド(コロニー戦仕様)



①コロニー防衛用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

RGM-79GS ジムコマンド(宇宙戦仕様)



①宇宙戦用量産型モビルスーツ
②連邦軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-06F
ザクII



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144 1/250

MS-05
ザク(旧ザク)



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MS-07B
グフ



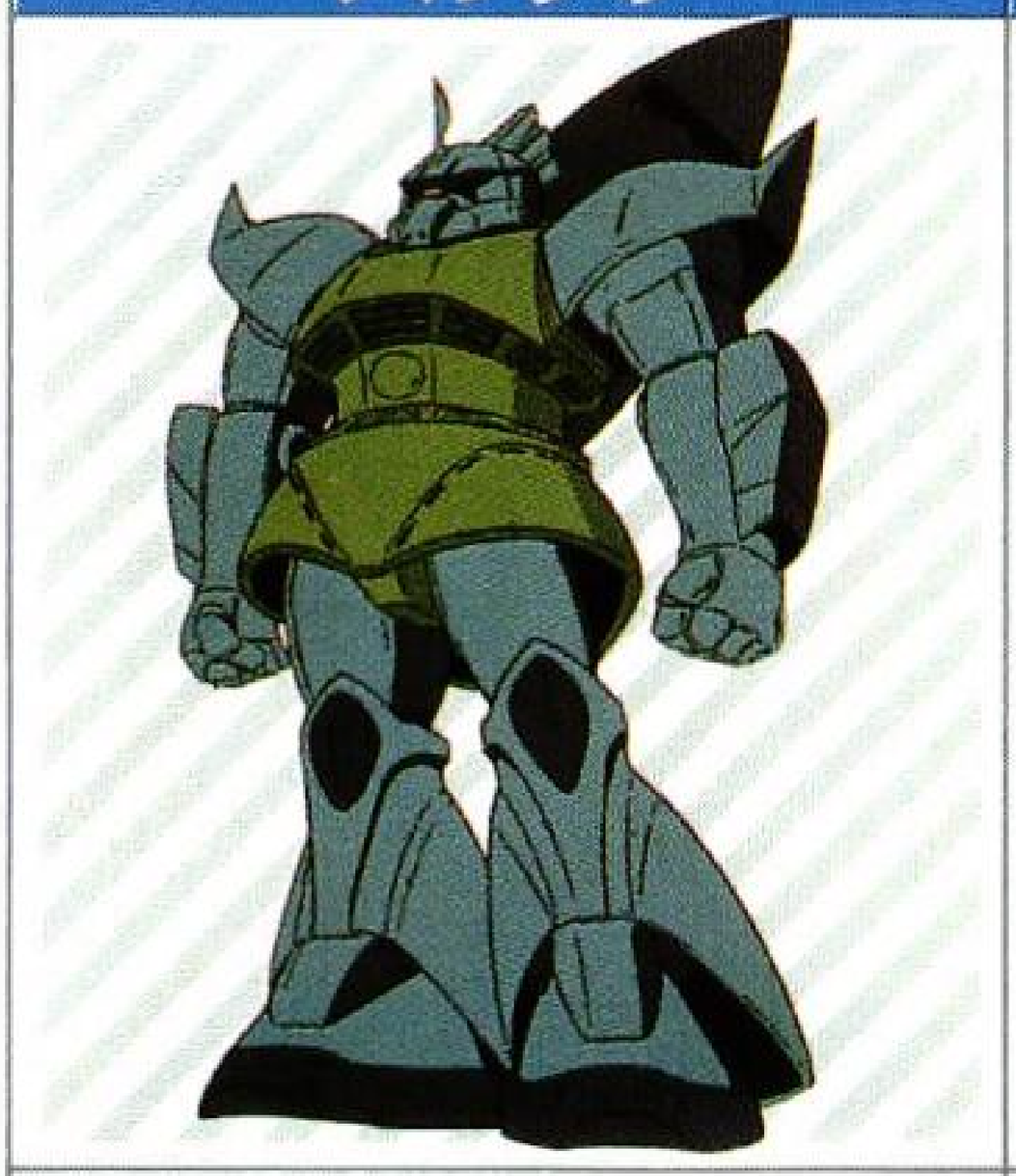
①陸戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144 1/250

MS-06S
ザクII(シャア専用)



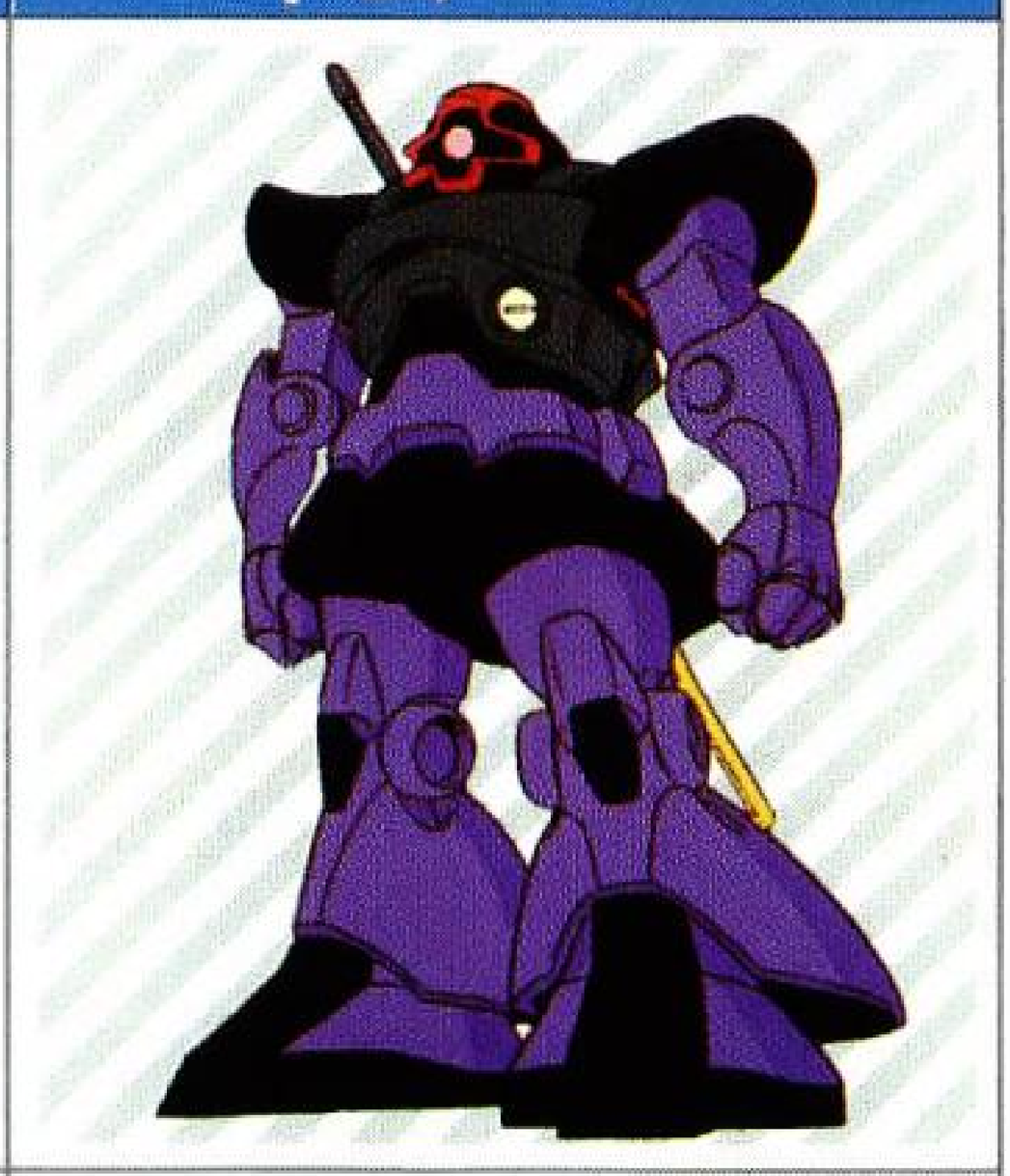
①汎用高性能量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/72 1/100 1/144 1/250

MS-14A ゲルググ



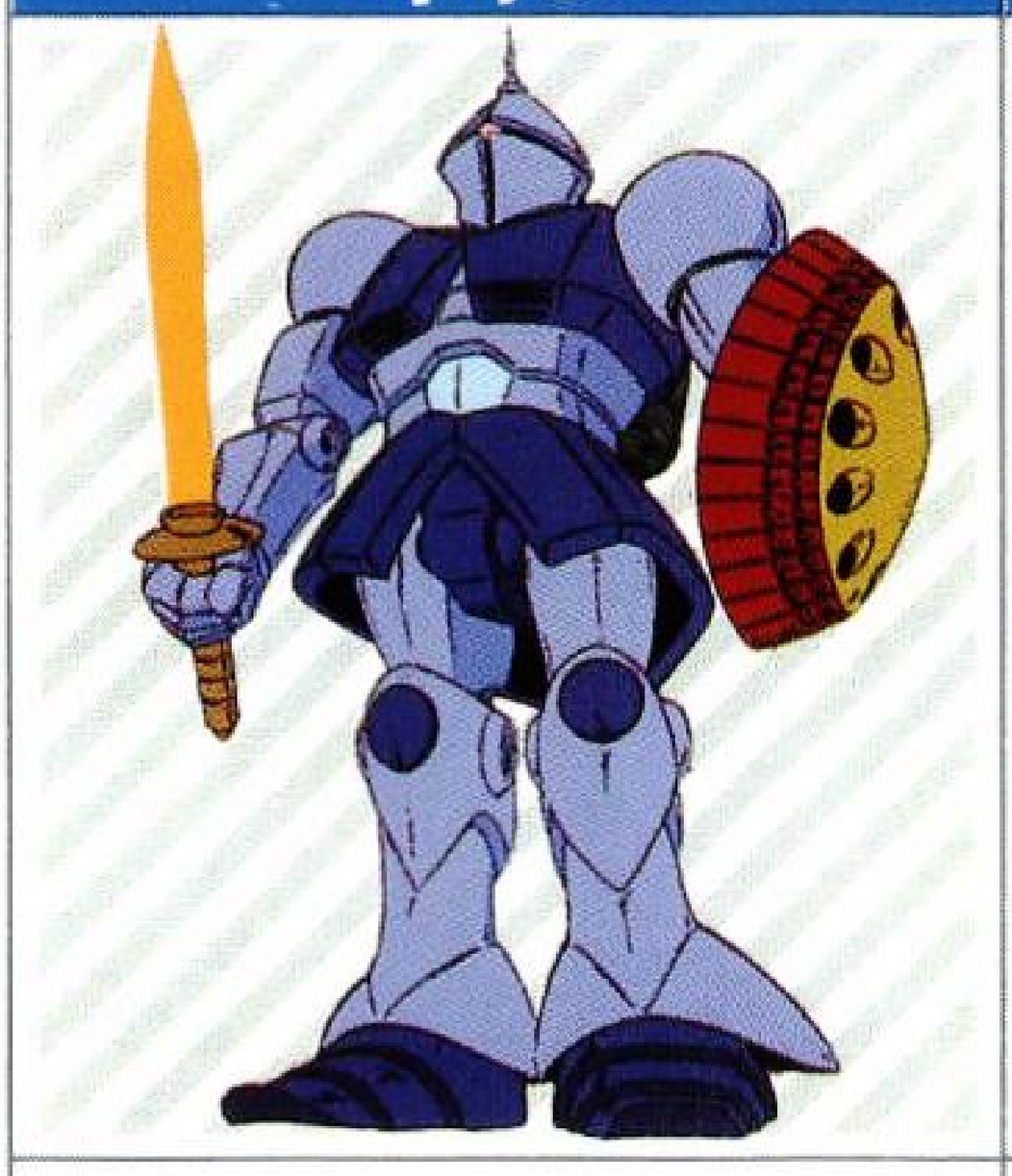
①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144

MS-09(MS-R09) ドム（リック・ドム）



①陸（宇宙）戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144

MS-15 ギャン



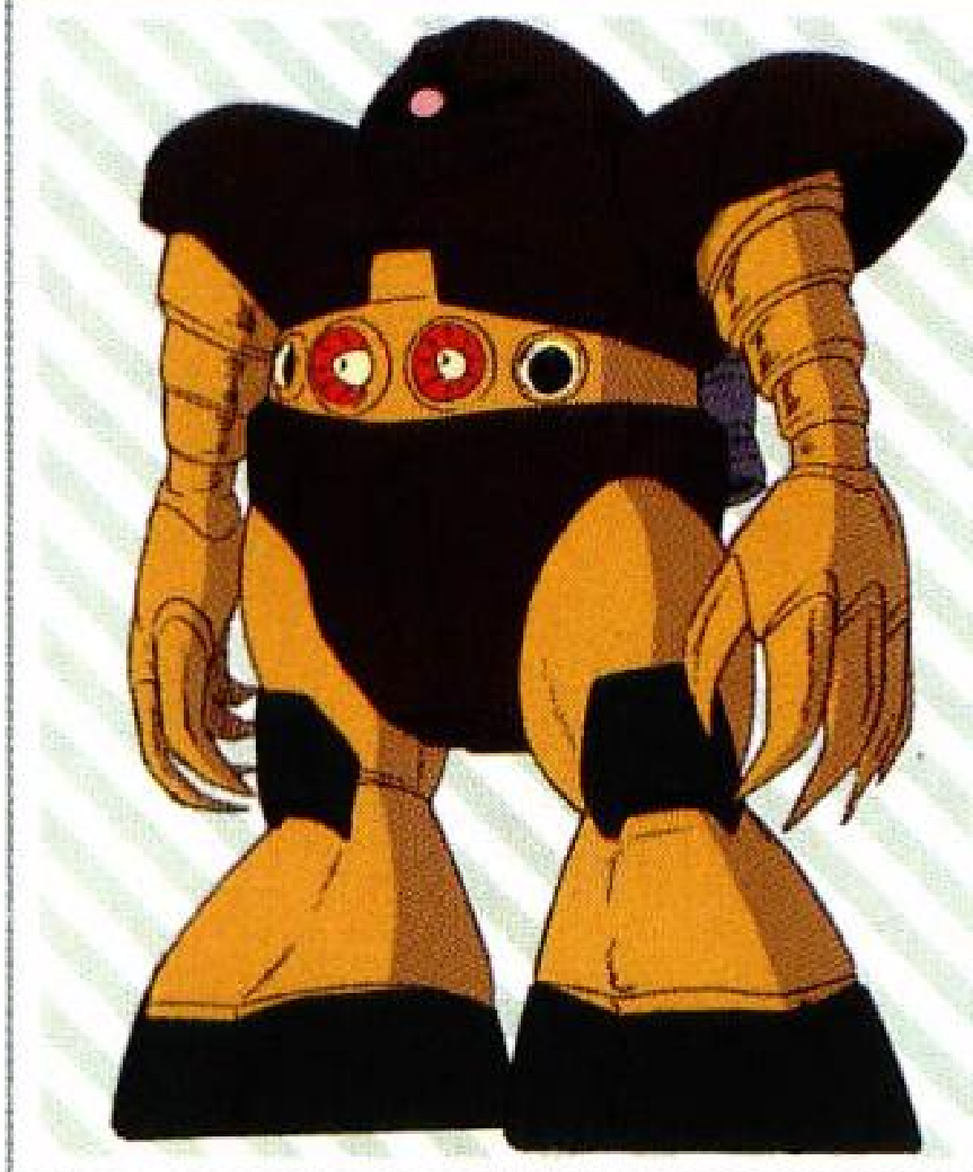
①汎用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MS-14S ゲルググ（シャア専用）



①汎用高性能量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/60 1/100 1/144

MSM-03 ゴッグ



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MSM-07 ズゴック



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MSM-04 アッガイ



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MSM-07S ズゴック(シャア専用)



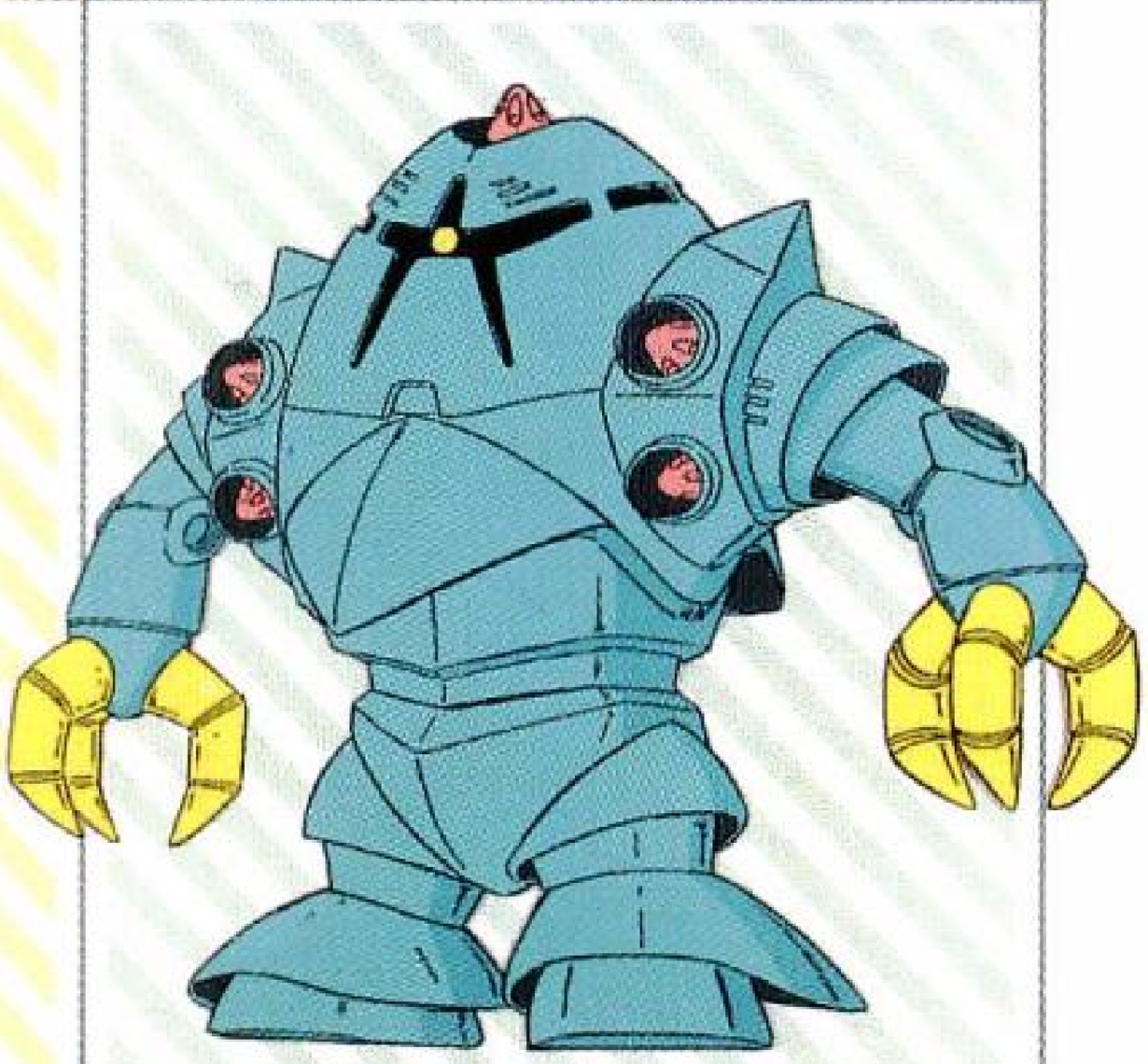
①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/100 1/144

MS-06S
ザクII（ドズル専用）



①汎用高性能量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MSM-10
ゾック



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/144

MS-06R-2
高機動型ザク（J・ライデン専用）



①宇宙戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/60 1/100 1/144

MS-06FS
ザクII（ガルマ専用）



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-06D
サク・デザートタイプ



①砂漠戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06R-1A
高機動型ザク(黒い三連星)



①宇宙戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-06V
ザクタンク



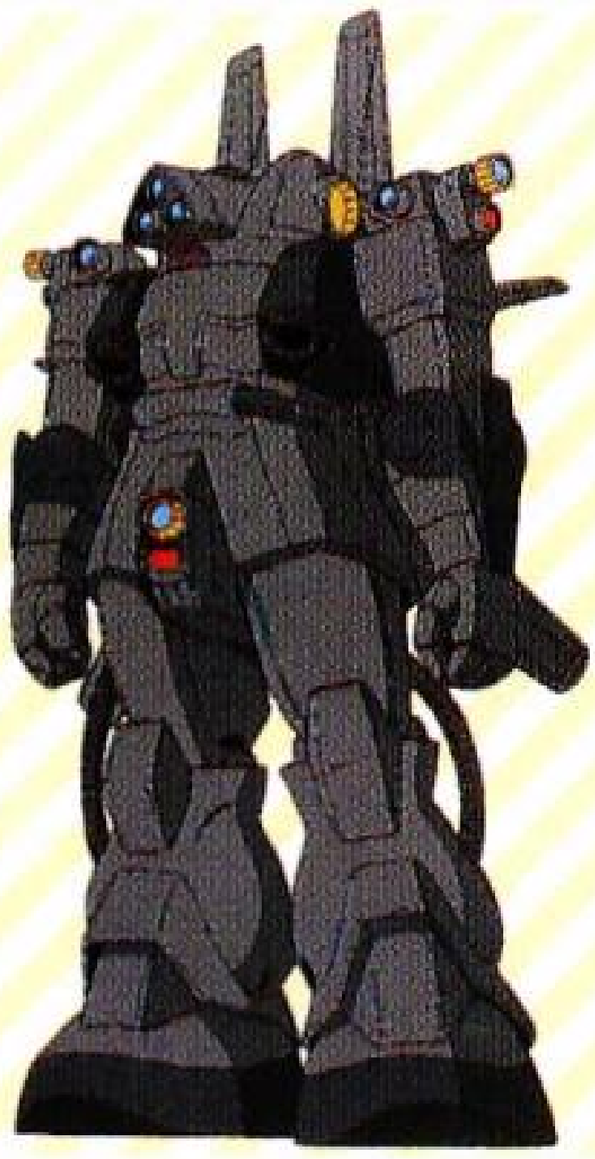
①作業用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06M(MSM-01)
サク・マリンタイプ



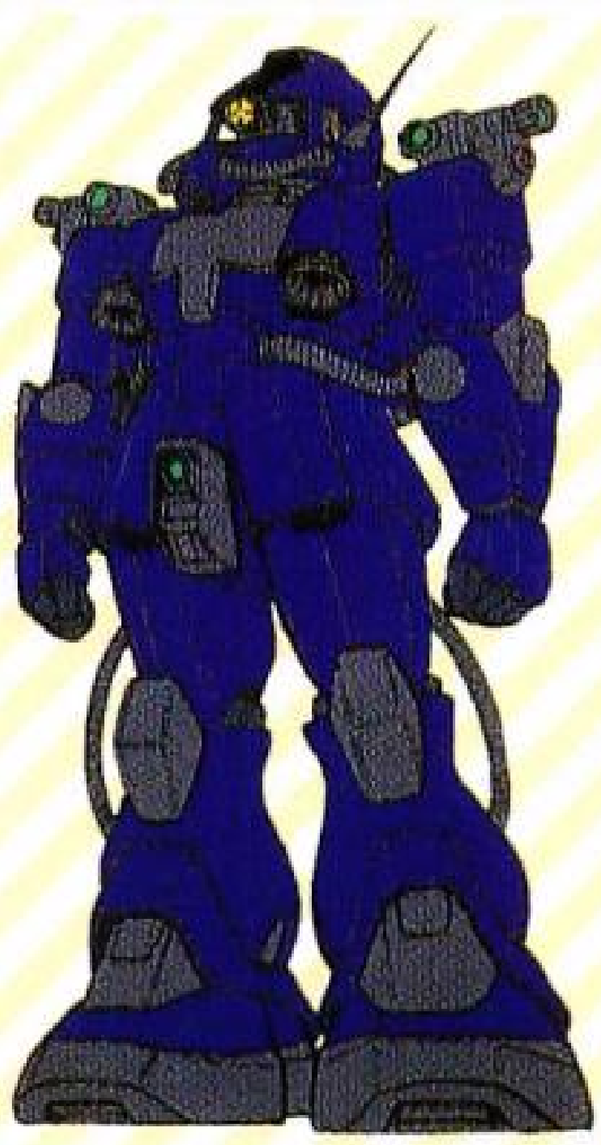
①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06E-3
ザクフリッパー



①偵察用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06E-1
ザク強行偵察型



①偵察用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-06K
サクキャノン



①砲撃戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/100 1/144

MS-06W
一般作業用ザク



①作業用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

YMS-07 プロトタイプグフ



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-06Z-3 サイコミュ試験用ザク（Zタイプ）



①試験用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-07C-3 グフ重装型



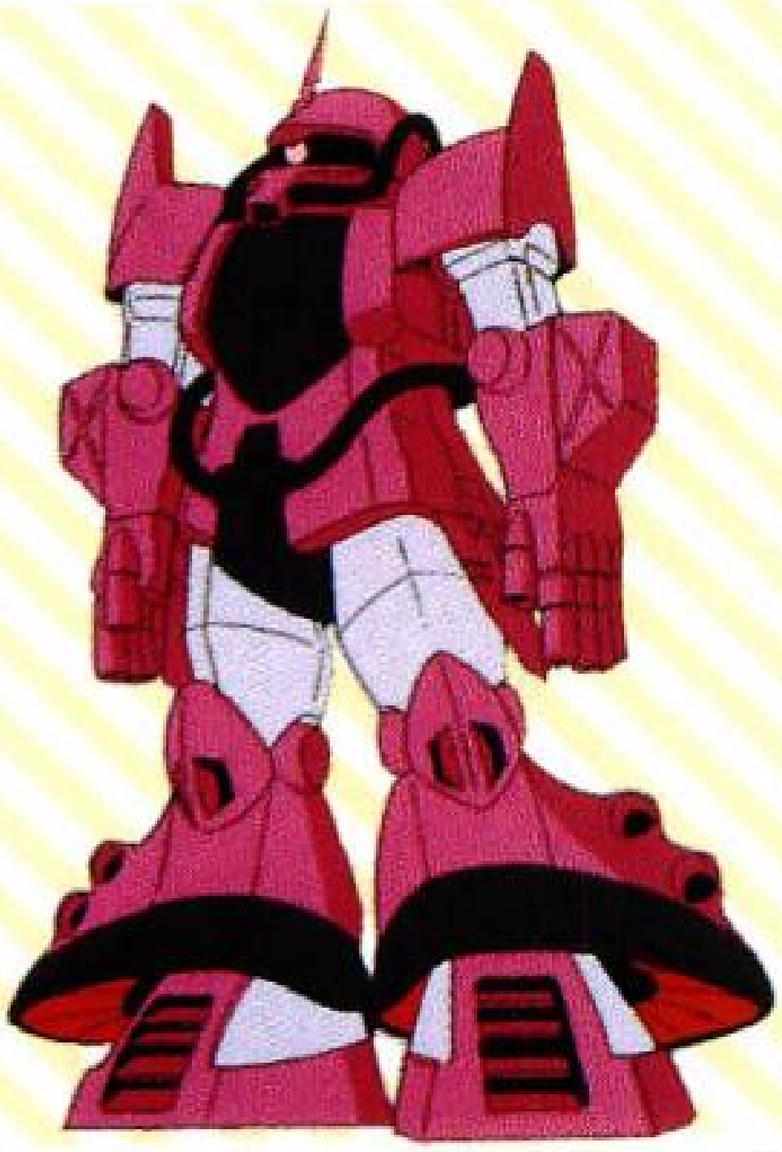
①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-07B グフ（マ・クベ専用）



①陸戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-07H-4 グフ飛行型



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-07H グフ飛行型



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

YMS-09 プロトタイプドム



①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/100 1/144

MS-07C-5 グフ試作実験機



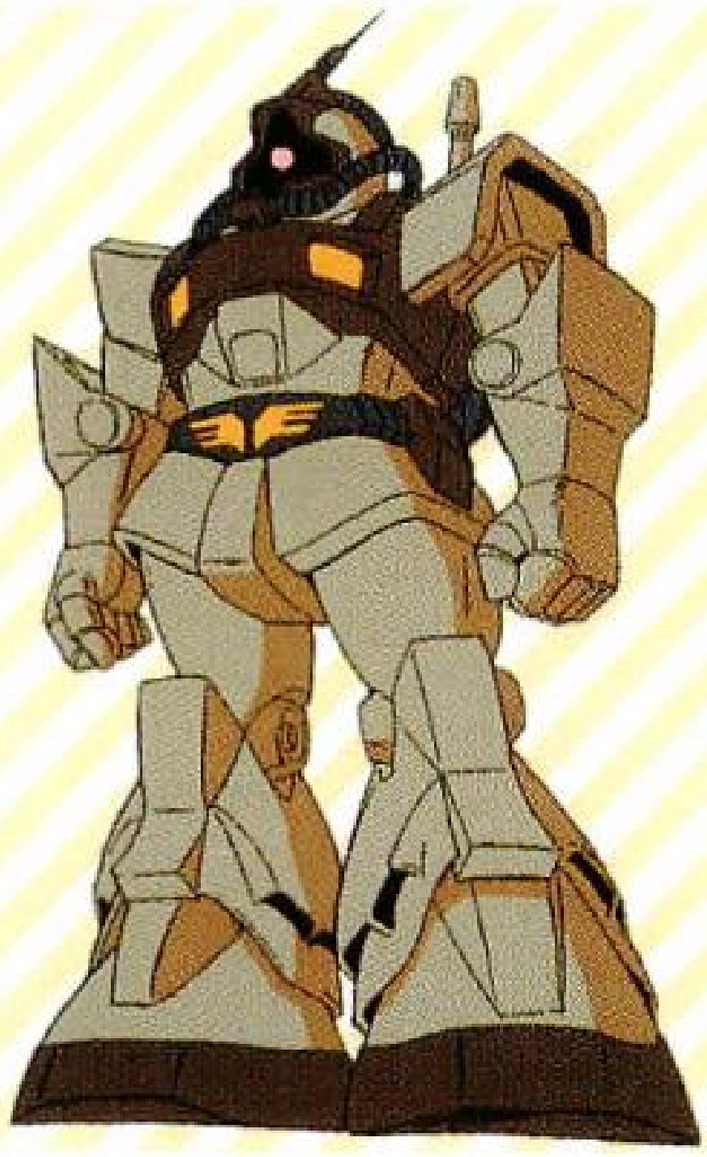
①試験用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④——

MS-14C
ゲルググキャノン



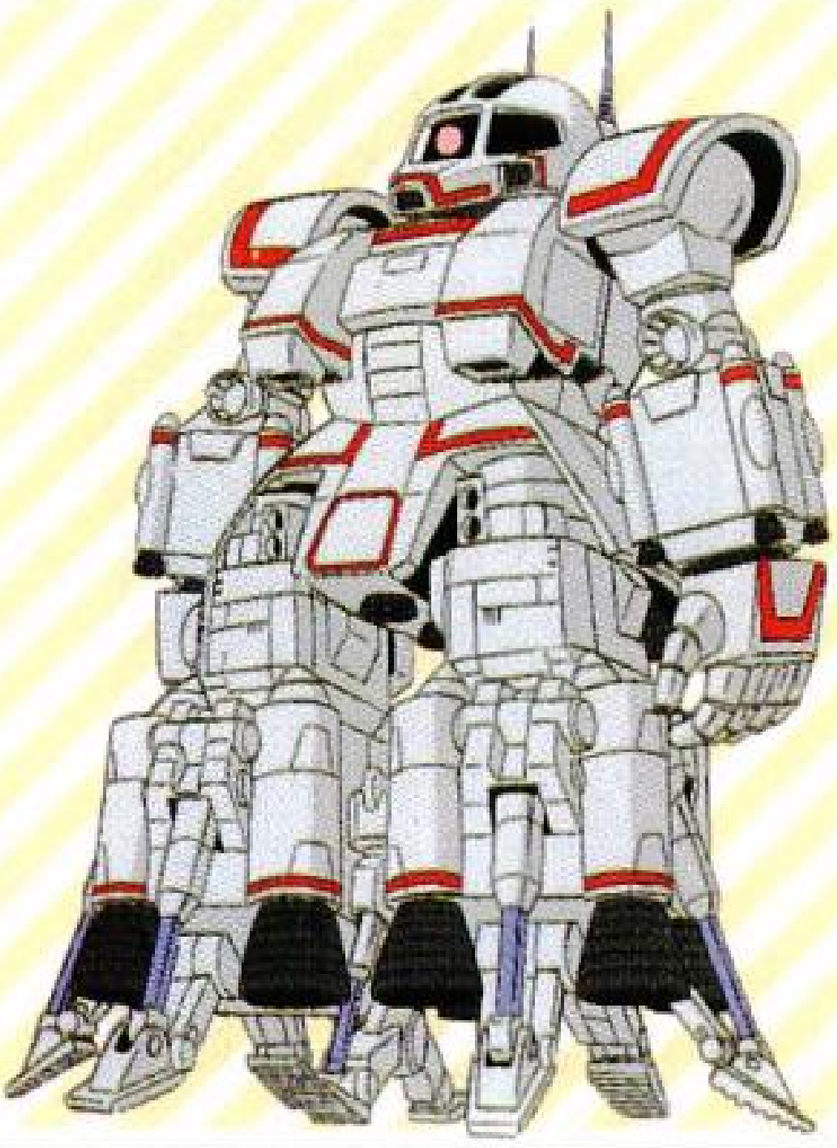
①砲撃戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/60 1/144

YMS-09D
ドム・トロピカルテストタイプ



①熱帯地仕様試作型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/100 1/144

MSN-01
サイコミュ高機動試験用ザク



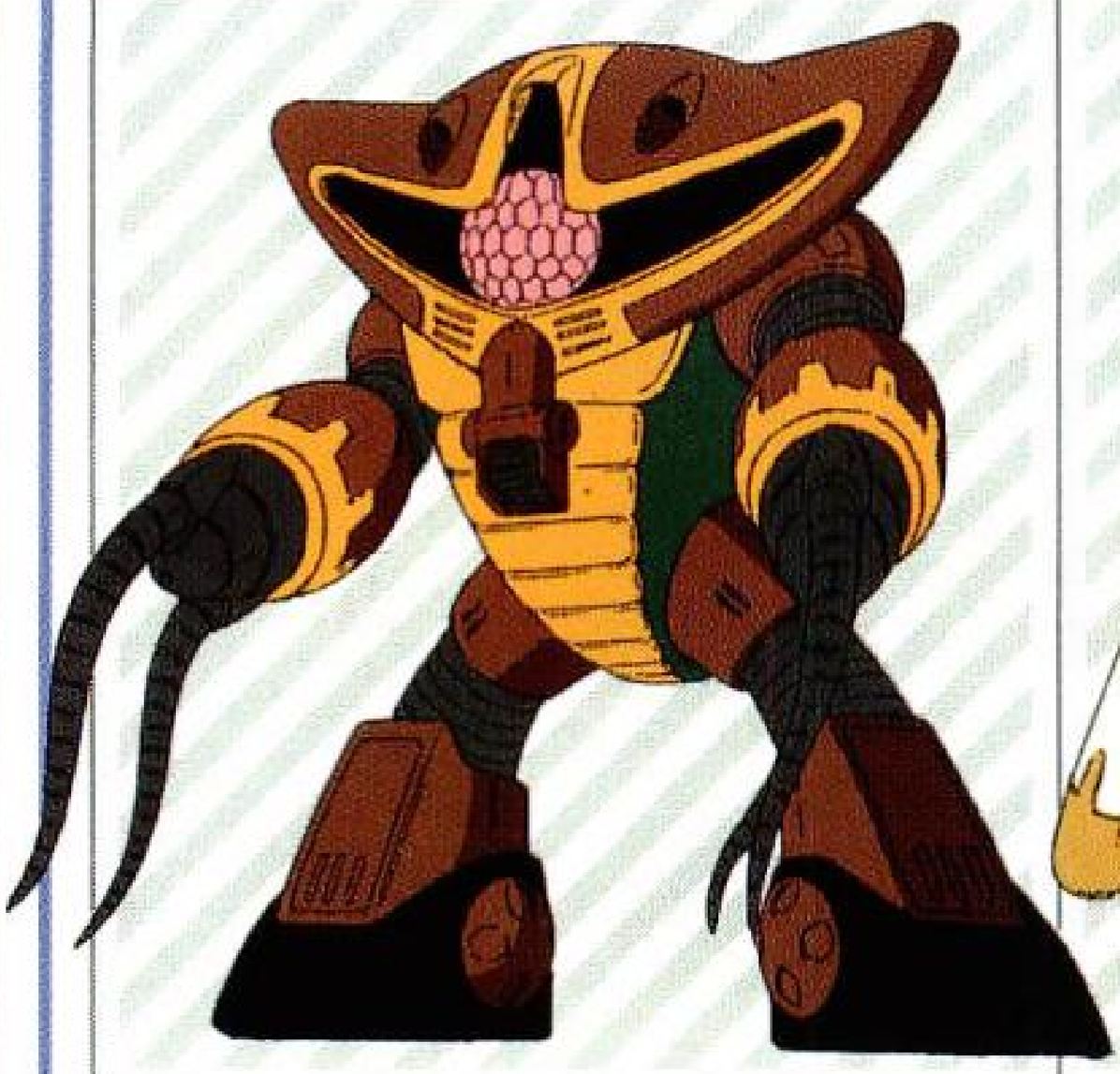
①試験用モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MS-14B
高機動型ゲルググ（J・ライデン専用）



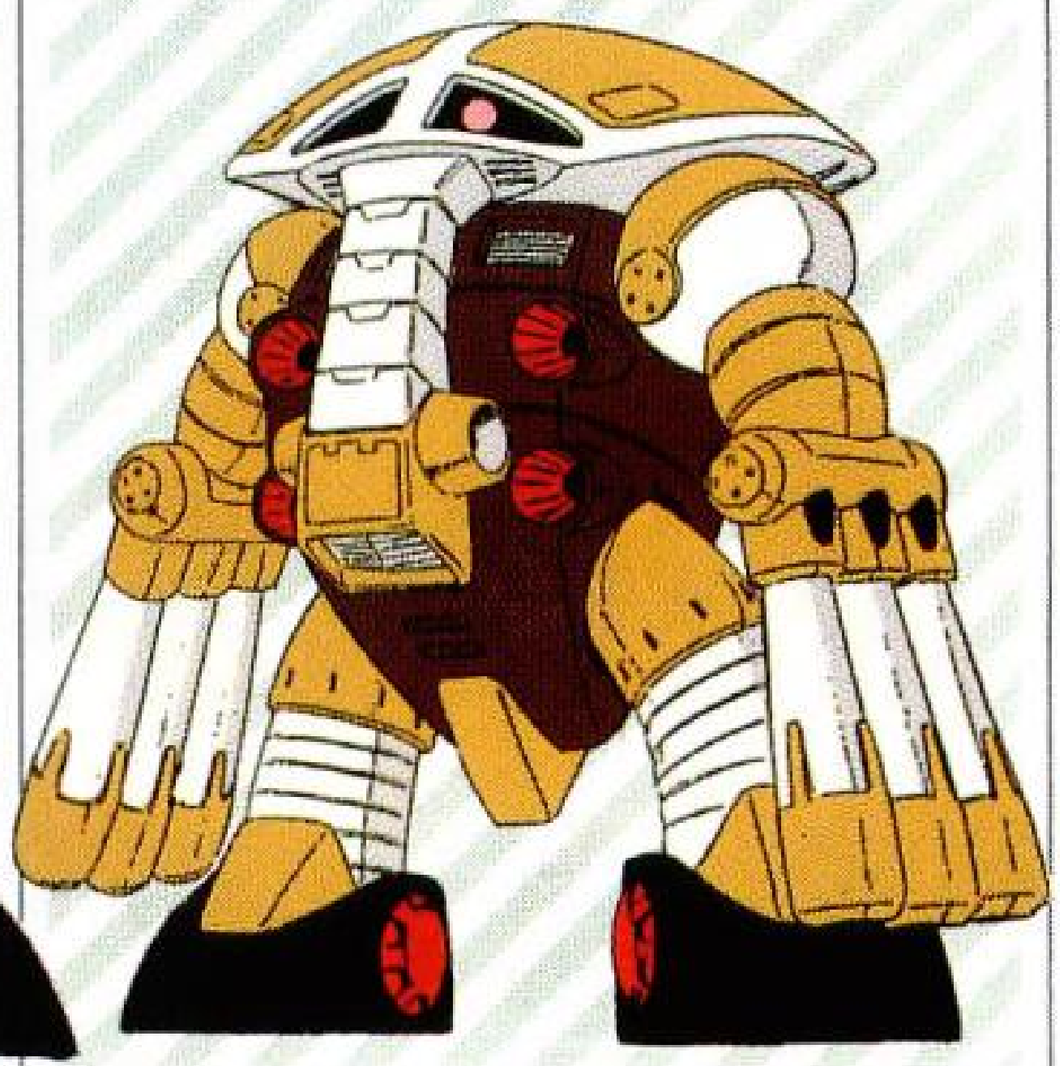
①宇宙戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MSV
④1/144

MSM-04N アッグガイ



①水陸両用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/100 1/144

MSM-04G ジュアッグ



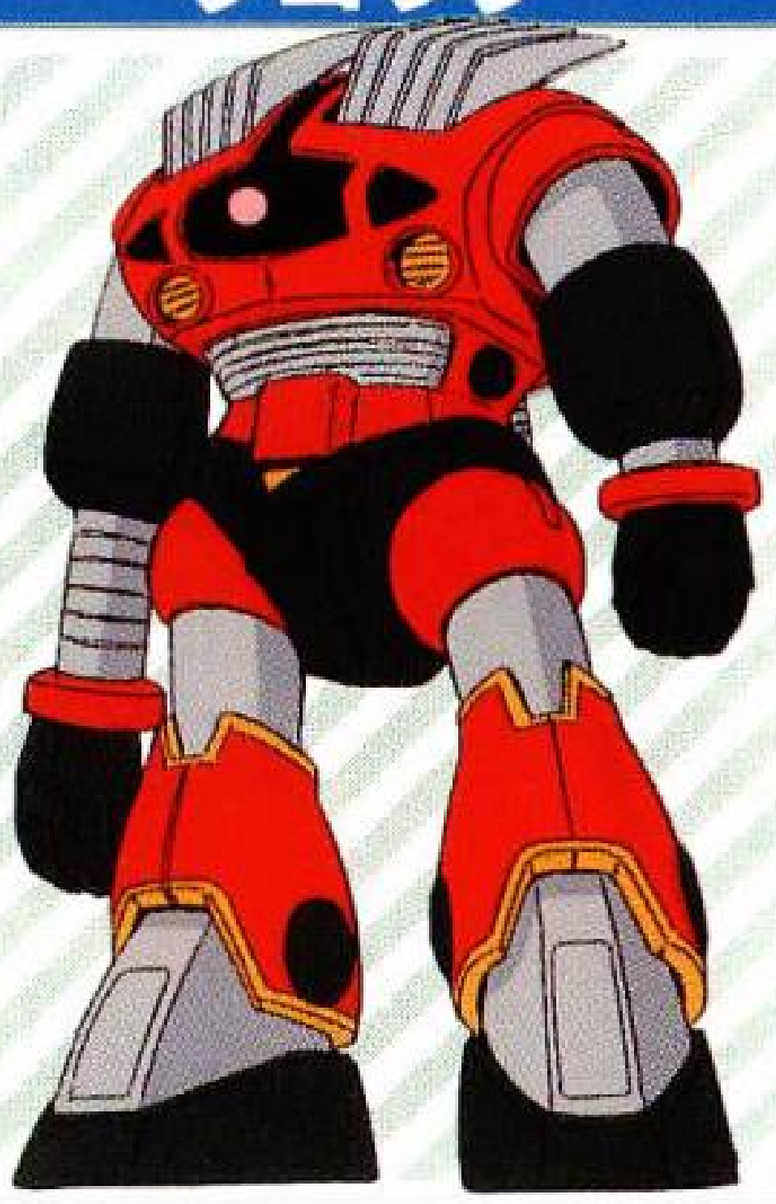
①水陸両用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/144

EMS-05 アッグ



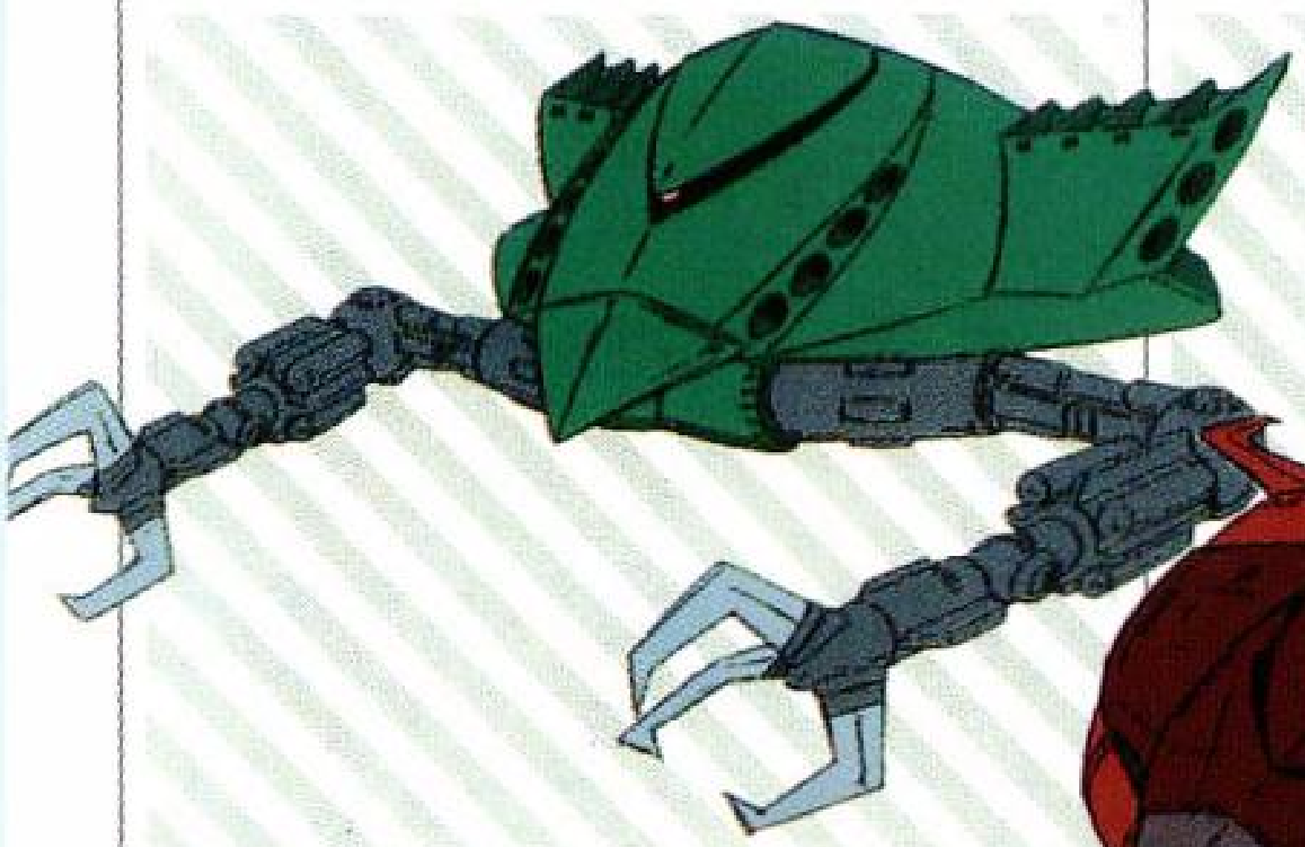
①特殊工作用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/100 1/144

MSM-08 ゾゴック



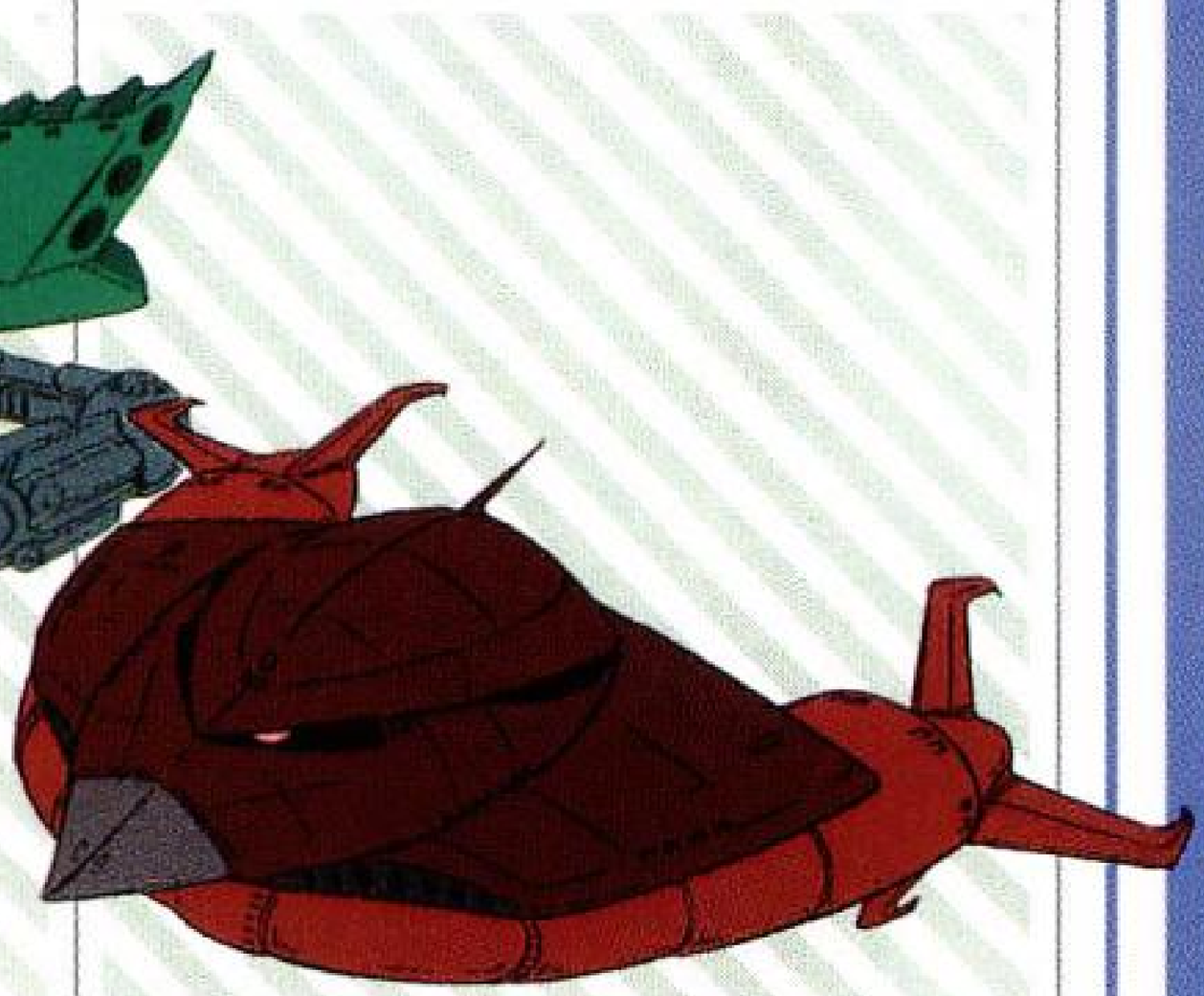
①水陸両用試作型モビルスーツ
②公国軍
③機動戦士ガンダム（未登場）
④1/100 1/144

MA-05 ビグロ



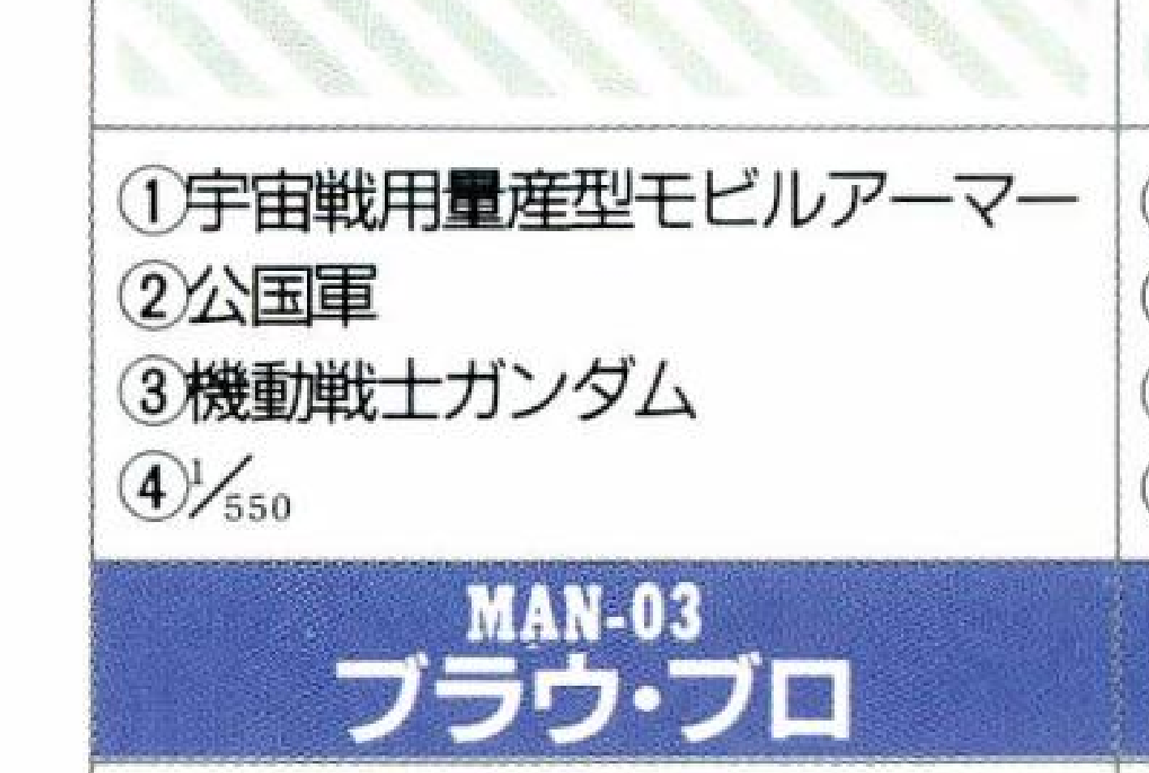
①宇宙戦用量産型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAM-07 クラブロ



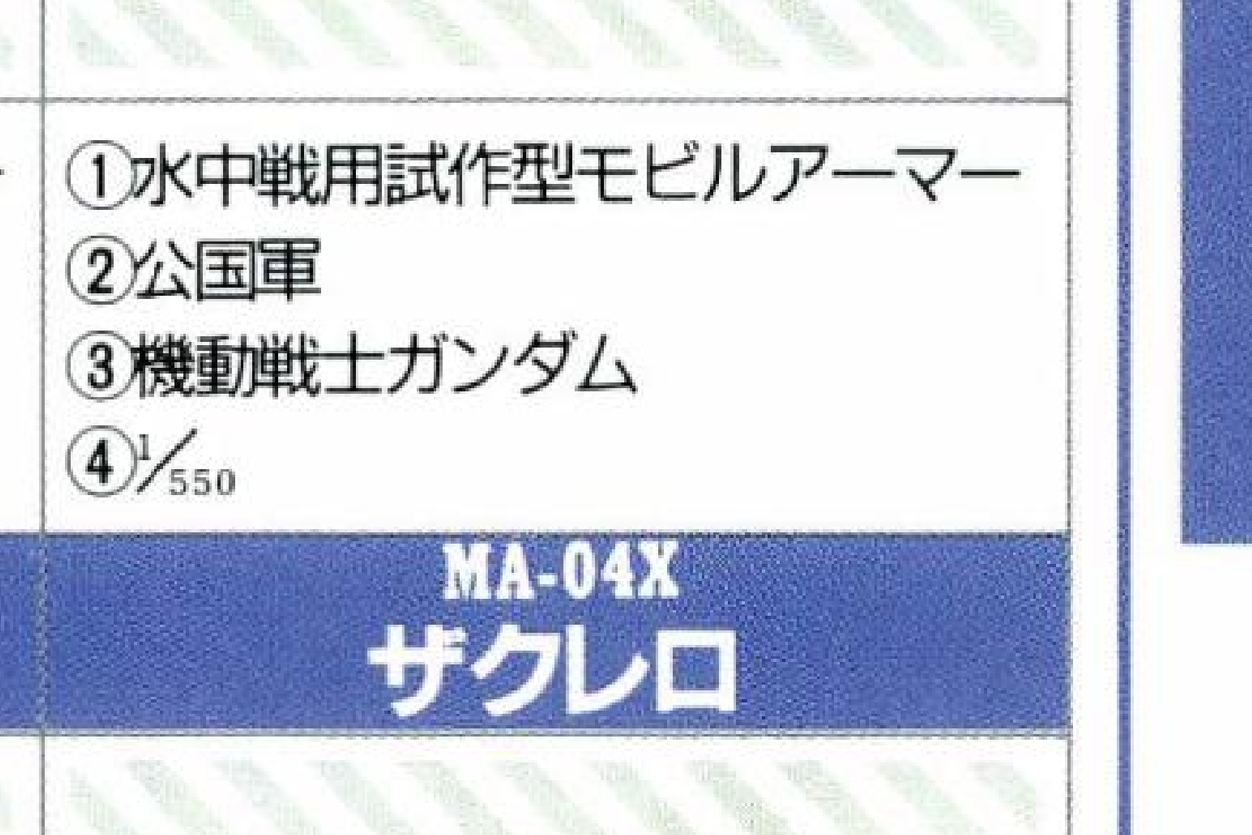
①水中戦用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAN-03 ブラウ・ブロ



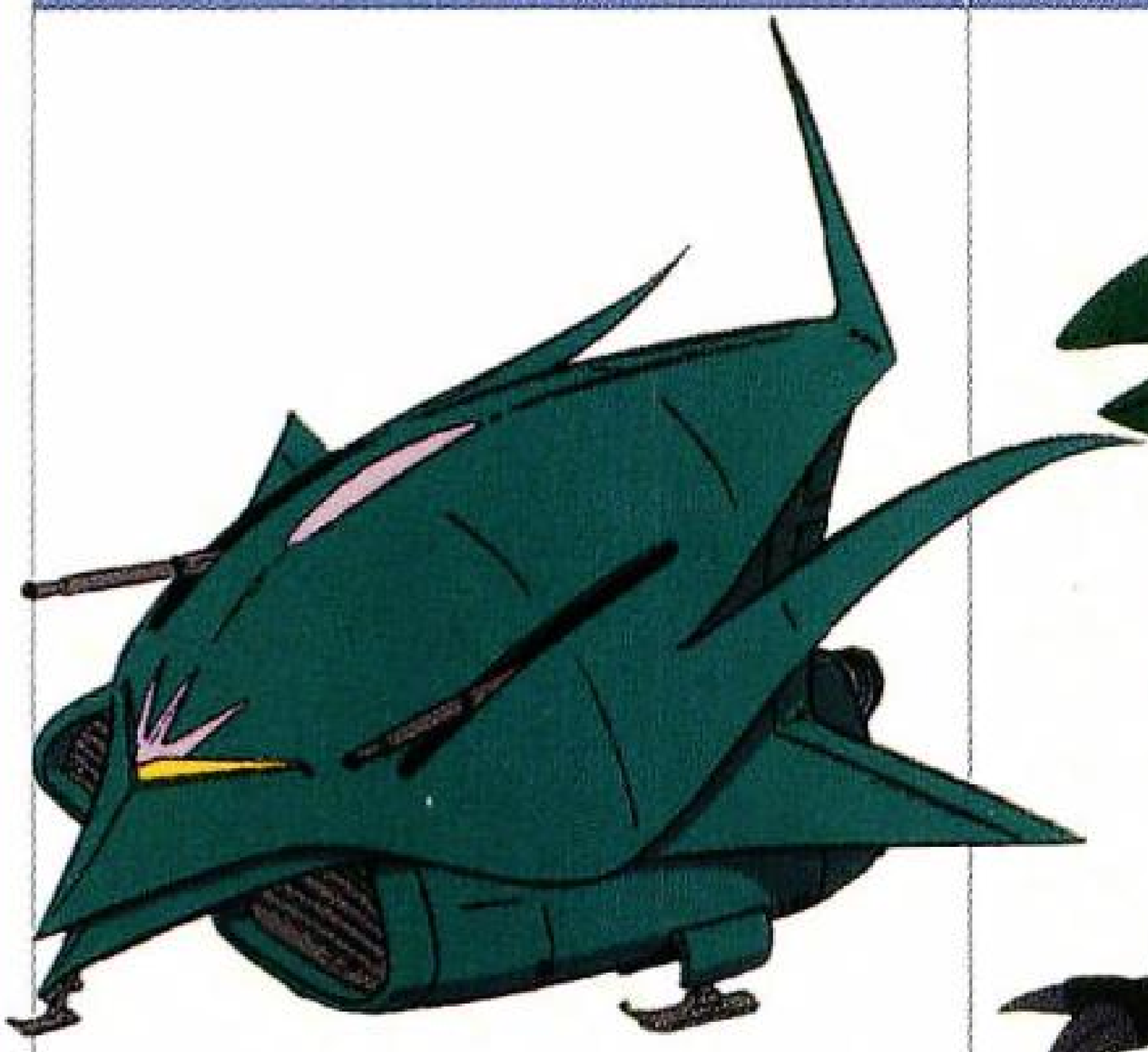
①NT（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MA-04X ザクレロ



①宇宙戦用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAN-08 エルメス



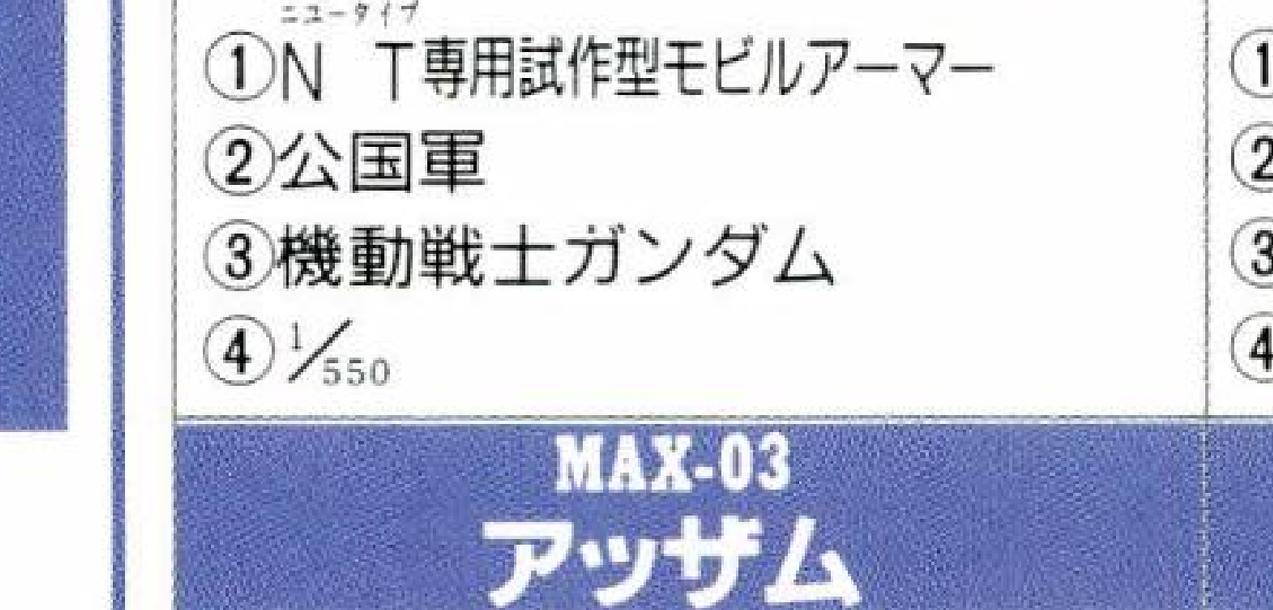
①NT（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MA-08 ビグ・ザム



①対艦／対要塞戦用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MAX-03 アッサム



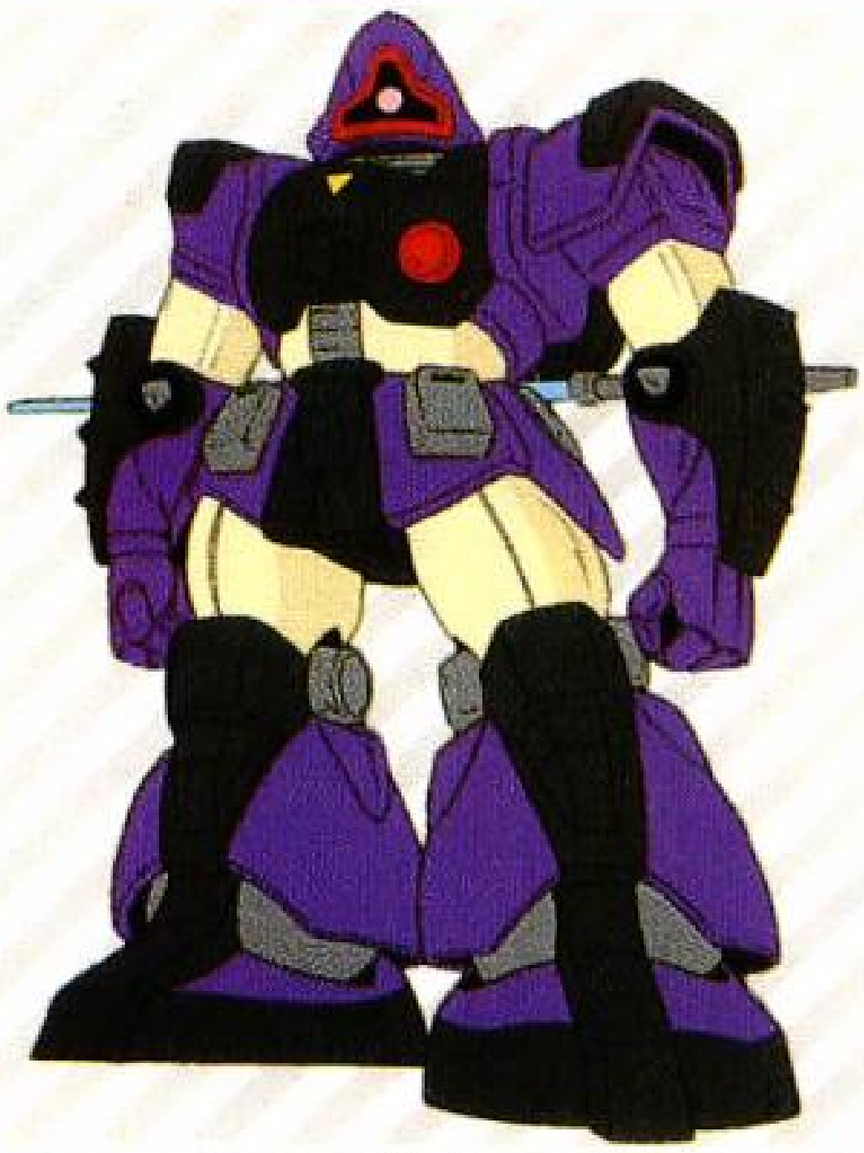
①試作型機動砲座
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/550

MSN-02 ジオング



①NT（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③機動戦士ガンダム
④1/144

MS-10 ペズン・ドワッジ



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MSN-02 ジオング（完成機）



①N T（ニュータイプ）専用試作型モビルアーマー
②公国軍
③MSV
④1/250

MS-12 ギガン



①砲撃戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-11 アクト・ザク



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-17 ガルバルディα



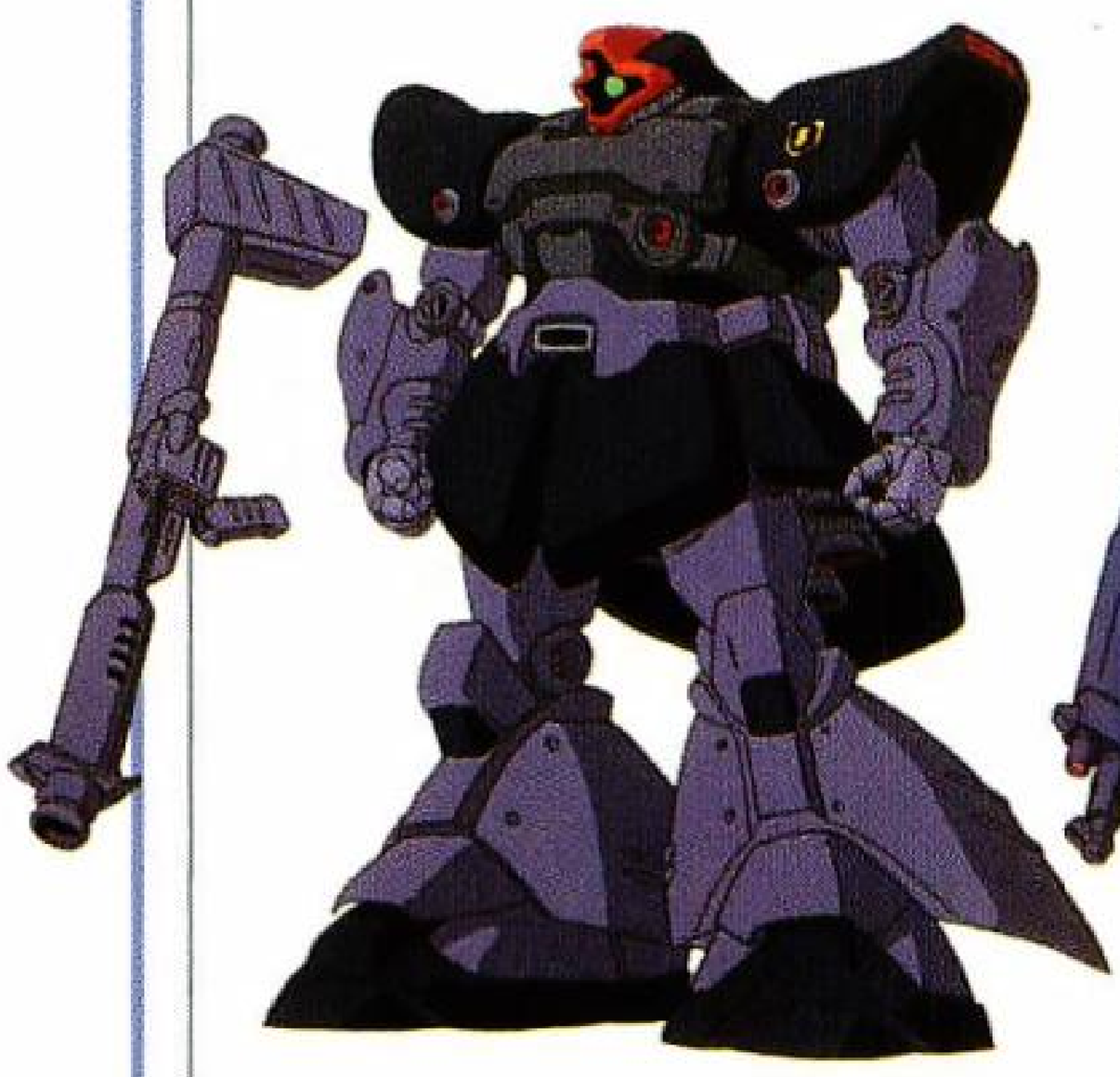
①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-13 ガッシャ



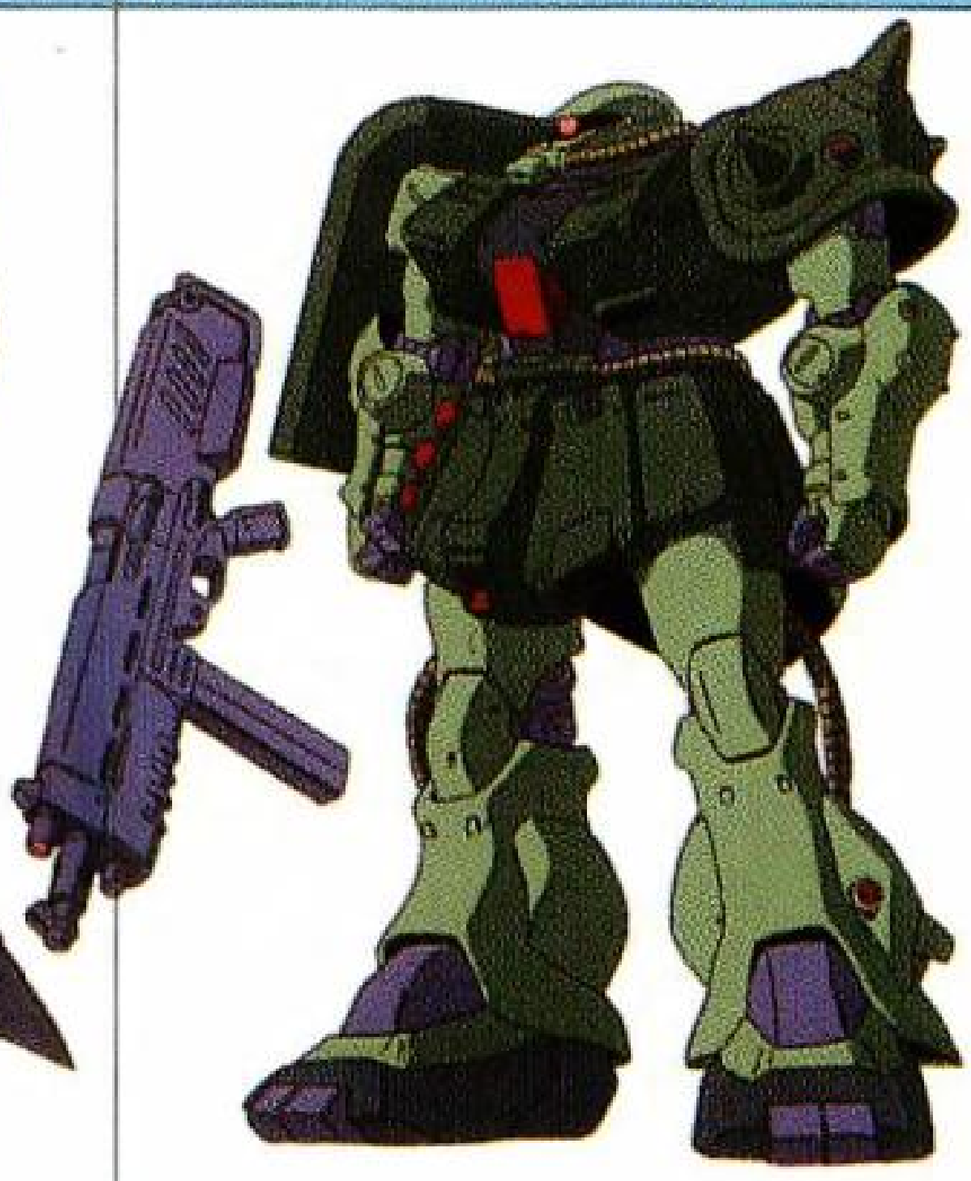
①陸戦用試作型モビルスーツ
②公国軍
③MS-X
④——

MS-09R II リック・ドムII



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-06FZ ザク改



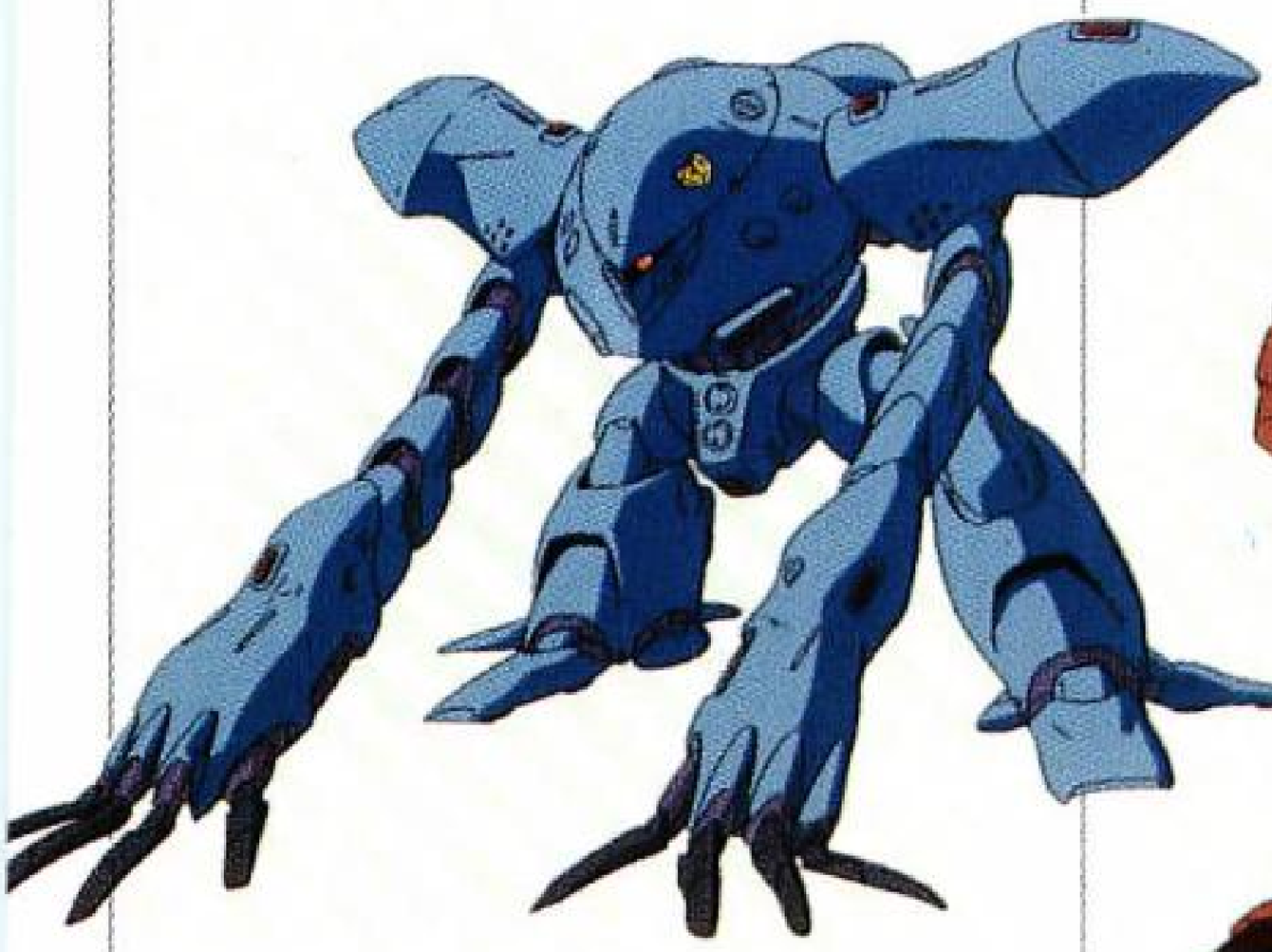
①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-14JG ゲルググJ



①汎用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MSM-03C ハイ・ゴック



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MS-09R II リックドムIIコロニー戦仕様

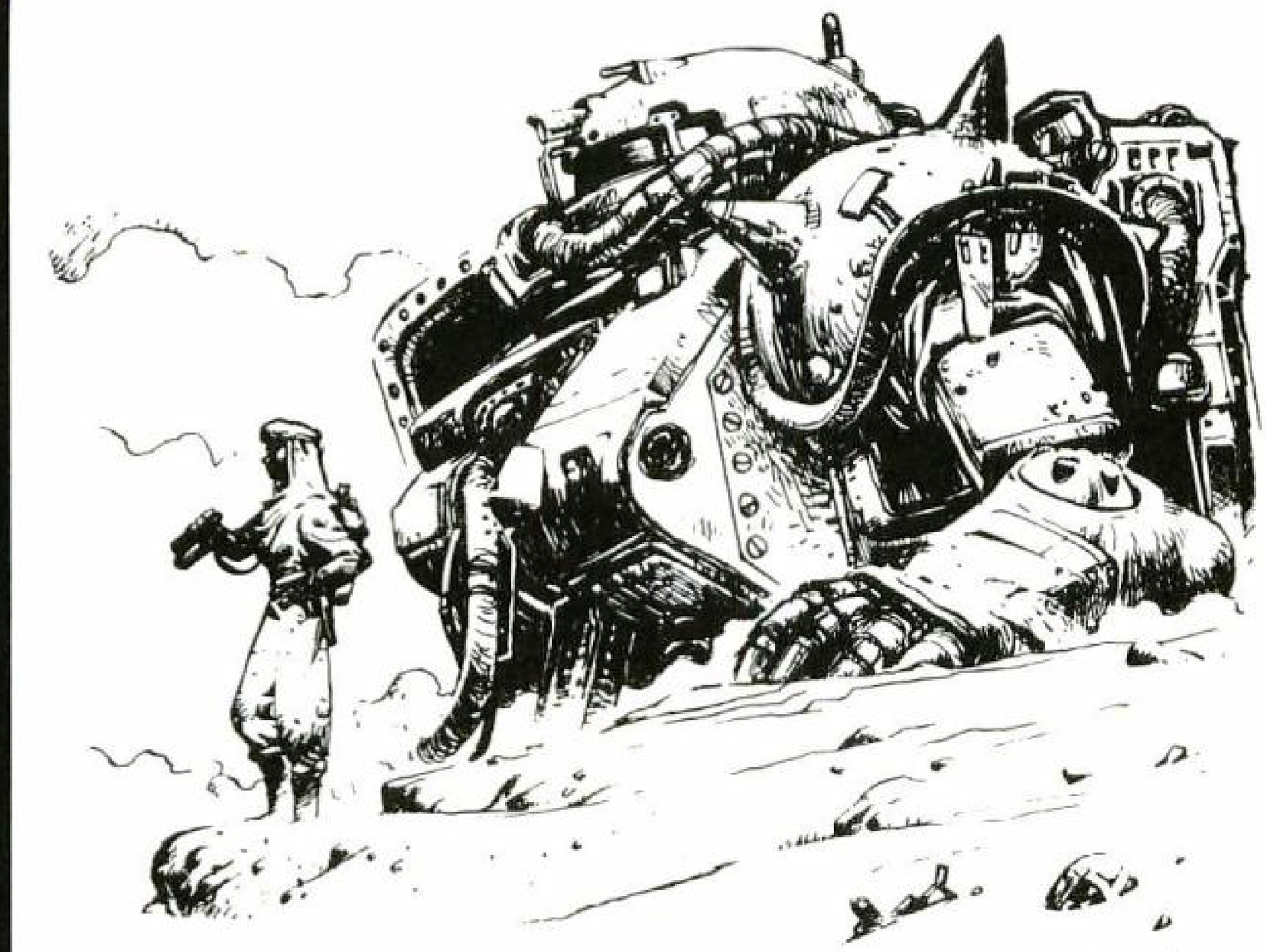


①陸戦用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144

MSM-07E ズゴックE



①水陸両用量産型モビルスーツ
②公国軍
③ポケットの中の戦争
④1/144



MS開発史

MS Development History

●一年戦争に登場した主要MS（モビルスーツ）は、およそ10機種。だが、細かいバリエーション、試作機だけの機体を合わせれば80機種を超える。ここでは、MS・MA（モビルアーマー）の開発経由を解説していく。

Illustration by Takuhiko Kusanagi

1.モビルスーツの誕生

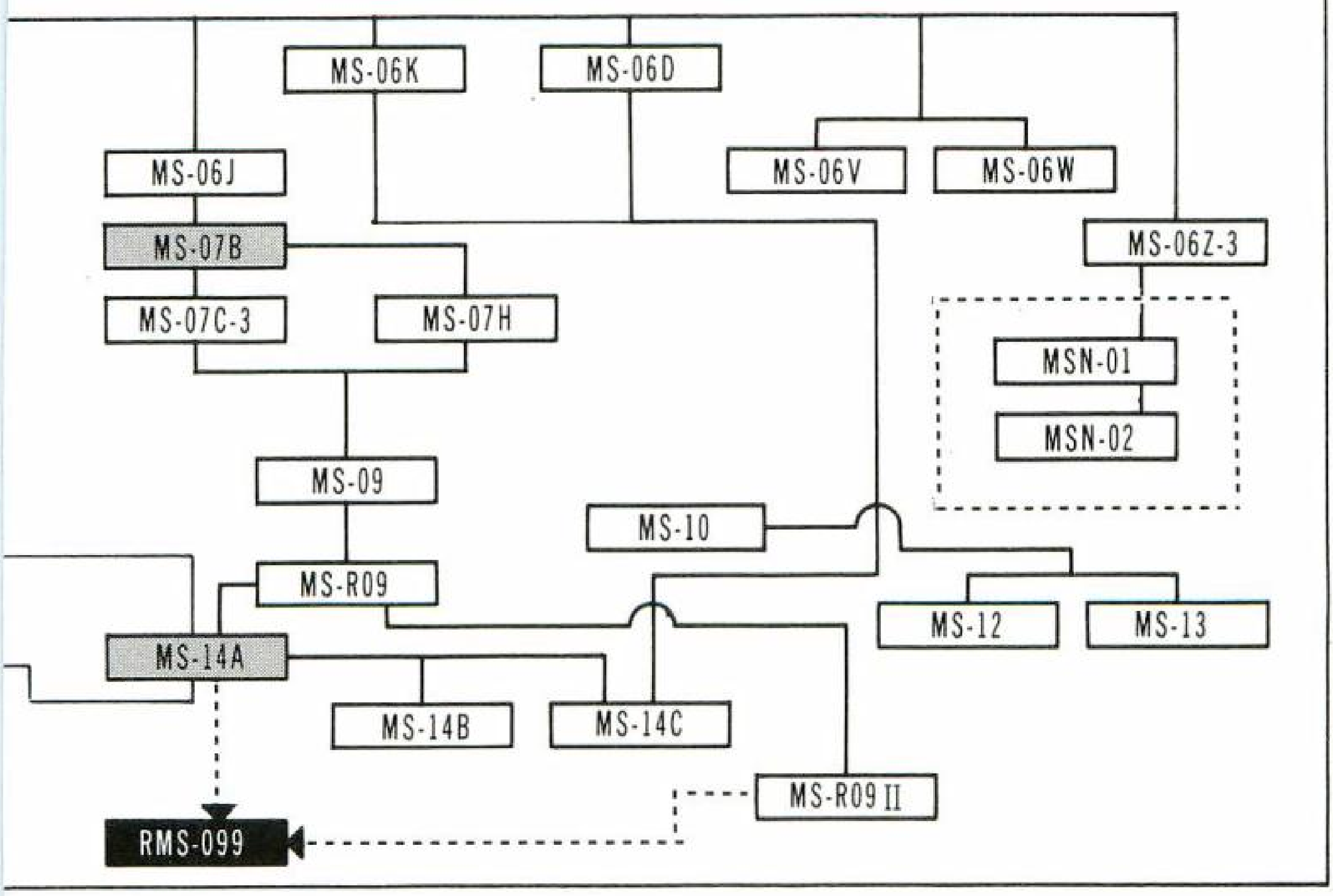
一年戦争においてジオン公国が、国力において地球連邦にほぼ互角に戦うことができたのは、MS（モビルスーツ）の存在があったればこそである。特に大戦初期にはMS機動部隊の活躍が、公国軍に一方的勝利をもたらした。

MSとは、MOBILE SUIT（Space Utility Instruments Tactical）＝戦術汎用宇宙機器、つまり宇宙空間においてのあらゆる戦術目的に使用できるように開発された兵器のことである。当然のことながら、この兵器はミノフスキー粒子とは切り離すことはできない。

ミノフスキー粒子は007年にジオン公国でその存在が確証された素粒子である。この粒子が散布されたフィールド内では電磁波の伝達が著しく阻害され、レーダーの精度が低下し、遠距離の無線通信も不可能となる。また、高濃度のミノフスキー粒子下では、電子回路にも機能障害が生じる。当然、平行して保護システムも開発されたが、非常に高価で重量もかさむため、ミサイルクラスの誘導兵器に搭載することは不可能だった。この粒子は在来兵器を一挙に過去のものにしてしまったのだ。

ジオン公国国防省は、月面アンマン市に本拠を置く、アナハイム・エレクトロニクス社と協力し、MSの開発を開

ジオン公国軍製モビルスーツ開発経路



MS Development History


MS-05ザクー

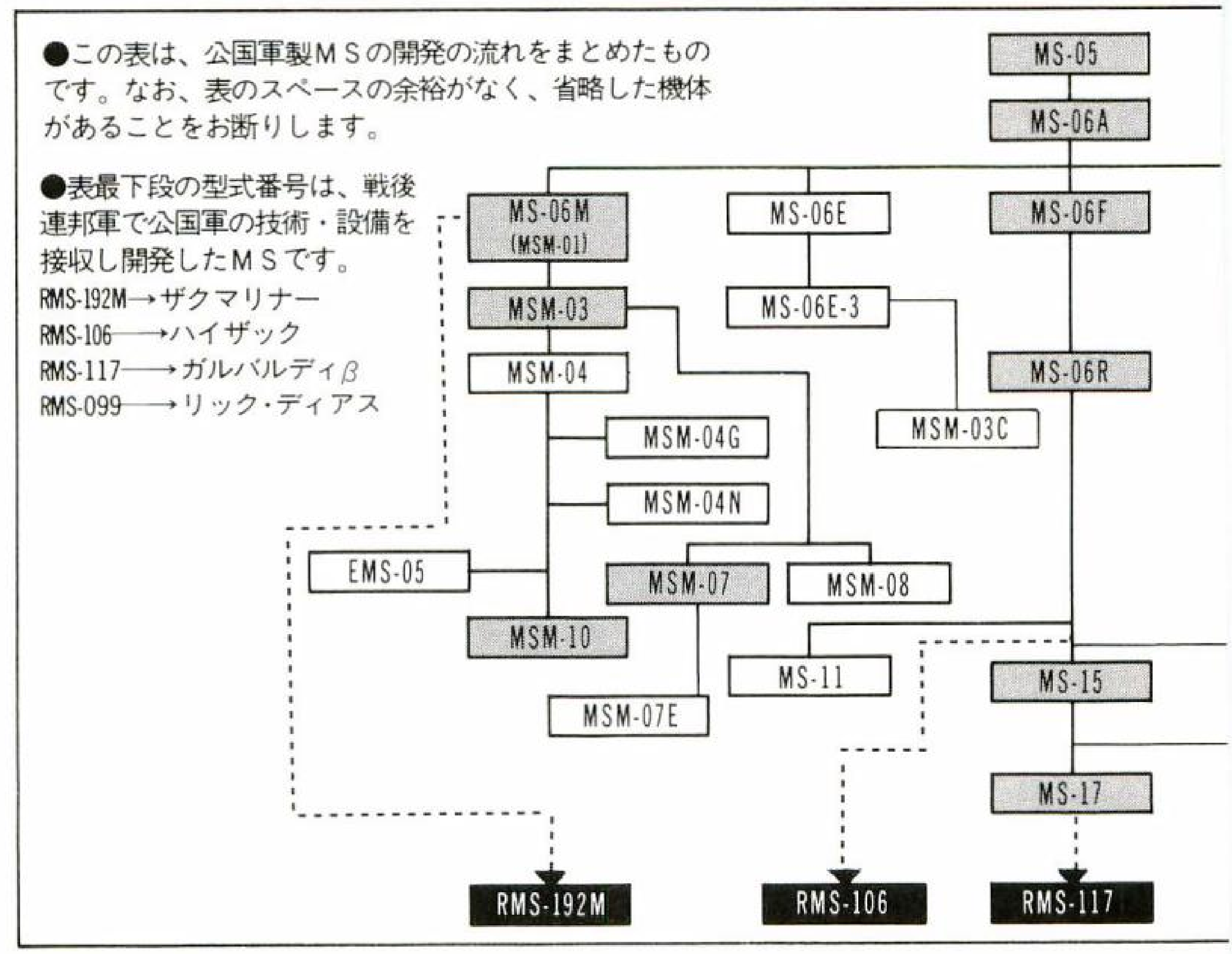
始した。もちろん表向きは非戦闘用の宇宙作業機としてである。

MS開発史上、初の量産機MS-05ザクーが生まれるまでさまざまな技術的困難があった。特に主機として採用が決定していた核融合炉は、小型軽量化が難しく、稼動時に生じる熱を機外に処理する問題も残されていた。しかし、当時開発されたミノフスキー物理学を応用した新型超小型核融合炉を搭載することにより、国防省が提示した要求性能にかろうじて達し、0075年7月に量産が決定した。

そして、同年11月にはキシリア・ザビ大佐（当時）の指導による実験的MS部隊、教導機動大隊が編成された。この部隊は、パイロットの育成と同時にMSの運用、戦術を確立させたのである。

●この表は、公国軍製MSの開発の流れをまとめたものです。なお、表のスペースの余裕がなく、省略した機体があることをお断りします。

●表最下段の型式番号は、戦後連邦軍で公国軍の技術・設備を接収し開発したMSです。
RMS-192M→ザクマリナー
RMS-106→ハイザック
RMS-117→ガルバルディβ
RMS-099→リック・ディアス



2.公国軍の陸戦用モビルスーツ

MS－05の運用テスト、及びパイロットの育成と平行して、公国軍はさらなる改良機の開発を急いだ。MSの基本設計はほぼ確立していたものの、有視界戦闘に欠くことのできないモノアイの精度、主機の出力、流体パルスモーター式アクチュエータの出力など実戦に投入するには、まだまだ性能向上を計らねばならないと判ってきたためだ。

そして、0077年8月には、MS－06Aザク?の試作機がロールアウトした。この06A型は、大戦中最も製造台数が多かったF型と形状が似ていたが、両肩がスパイクのない球状のアーマーで、左肩のシールドも装備されていなかった。武装はMS－05の105ミリマシンガンより破壊力の大きい120ミリマシンガンに240ミリバズーカが用意された。基本性能はMS－05よりはるかに高く、量産がすぐに決定されたが、キシリア・ザビ大佐より連邦軍が対抗兵器としてMSを開発した場合を想定し装備の見直しを命じたため、急きょ量産を一部中断し、再設計に入ったのだ。そしてC型である。C型は、地球の表面積の7割を占める海での運用を考えた水陸両用型をベースに各種の局地戦用機が平行で開発された。

まず、冷却剤（エーテル）を必要としない空冷式冷却システムに換え、さらに宇宙戦用装備の一切を除去したJ型が生まれ、陸戦用機として新設計されたMS－07グフが作られることになる。また、対空砲を装備したK型、砂漠戦用のD型、水中用のM型などが続けて完成している。一方、宇宙戦専用機の研究も行われ、高機動戦闘用のR型、強行偵察用のE型など数多くのバリエーションが生まれた。事実、大戦中期まで開発されたMSは、全て〝ザク〟系の機体だったのだ。

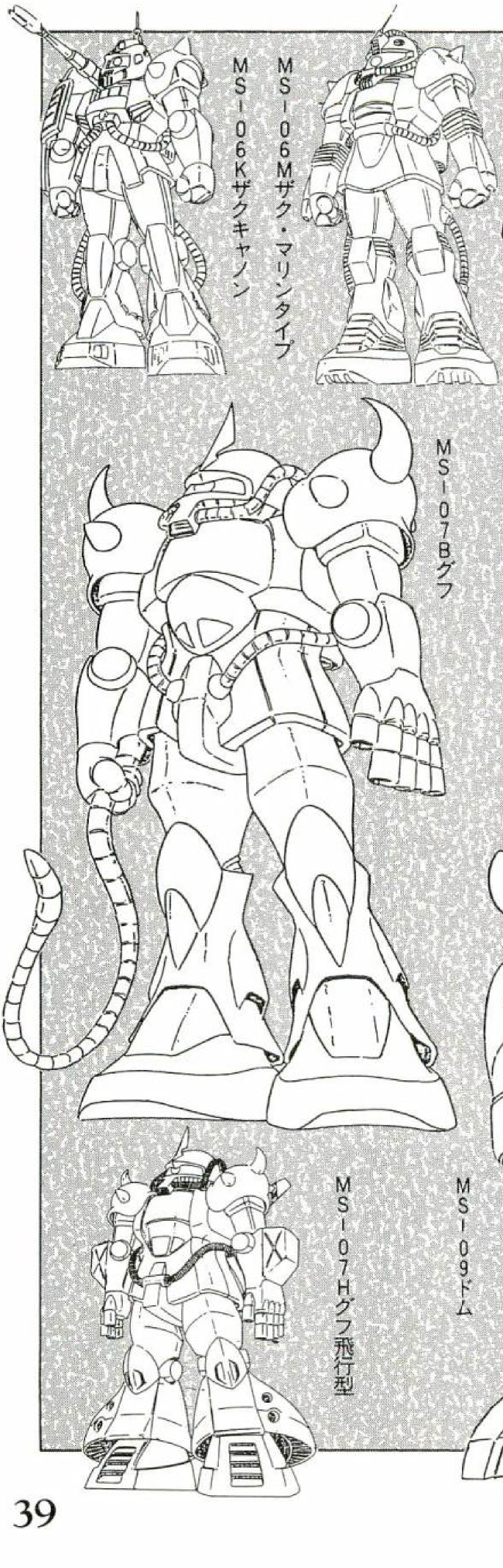
この設計から初めて離れた機体がMS－09ドムである。このMSは、脚部に熱核ジェット推進器（スラスター）を搭載し、J型やC型の欠点であった地上移動力をホバー走行によって補った画期的な機体であった。

と移行していった。

0076年12月に国防省は地球侵攻作戦用の局地戦用MSの開発をアナハイム・エレクトロニクスに命じている。本来MSは地球重力下の陸戦にも対応するように設計されており、事実、月面やコロニー内でも模擬戦闘でも充分な性能を発揮している。だが、生産性を考えるなら、宇宙用の装備は高価で地上ではデッドウェイトになるため、局地戦仕様機はぜひ必要だった。

そして、C型の量産がスタート。公国軍はこの時点より本格的な戦時体制へ

MS Development History



MS-06Mザク・マリンタイプ

MS-06Kザクキャノン

MS-07Bグフ

MS-06J陸戦用ザク

MS-07Hグフ飛行型

MS-09ドム

3.公国軍の水陸両用モビルスーツ

ザク系の派生型のひとつである水中戦用のMS-06Mは、MS-09ドムとは別系統の機体を生み出した。それがMシリーズと呼ばれる水陸両用MSである。

MS-06Mは、ただ単にC型の改造機であり、宇宙戦用装備を除き、水流ジェットエンジンを内蔵したバックパックを搭載している。水中用MSの利点は、機外の水を冷却剤として使えるため、機体容積の大きい冷却システムを簡素化できることだ。その分の空間には代りにバラストタンクが設けられ、機体の浮沈や姿勢制御が行われる。問題点は防水処理であった。外装を流面形に近づけ、各関節にシールドを施したが、MS-06の構造そのものが耐圧性にとぼしく、100メートル程度の潜水で浸水が見られた。結果としてM型は河川や水深の浅い湾岸での運用に限定され、量産化には到らなかった。

だが、水冷式冷却システムにより高出力大型核融合炉の搭載が可能と判り、新たにMシリーズMS(水陸両用MS)の開発が始まった。MS-06Mは、MSM-01の型式番号が与えられ、実験機として地球侵略作戦の第3次降下部隊とともに地球のキャリホルニアベースに送られた。

キャリホルニアベースは、元は連邦軍の基地であったが、第2次降下部隊がほぼ無傷で制圧し、地球攻撃軍の最大基地となった。ここは軍港、空軍基地、シャトル打ち上げ場、各種兵器開発研究・試験場、生産工場などが集約された北米最大の軍事施設であった。ここが地球で運用されるMSの開発・生産基地となった。

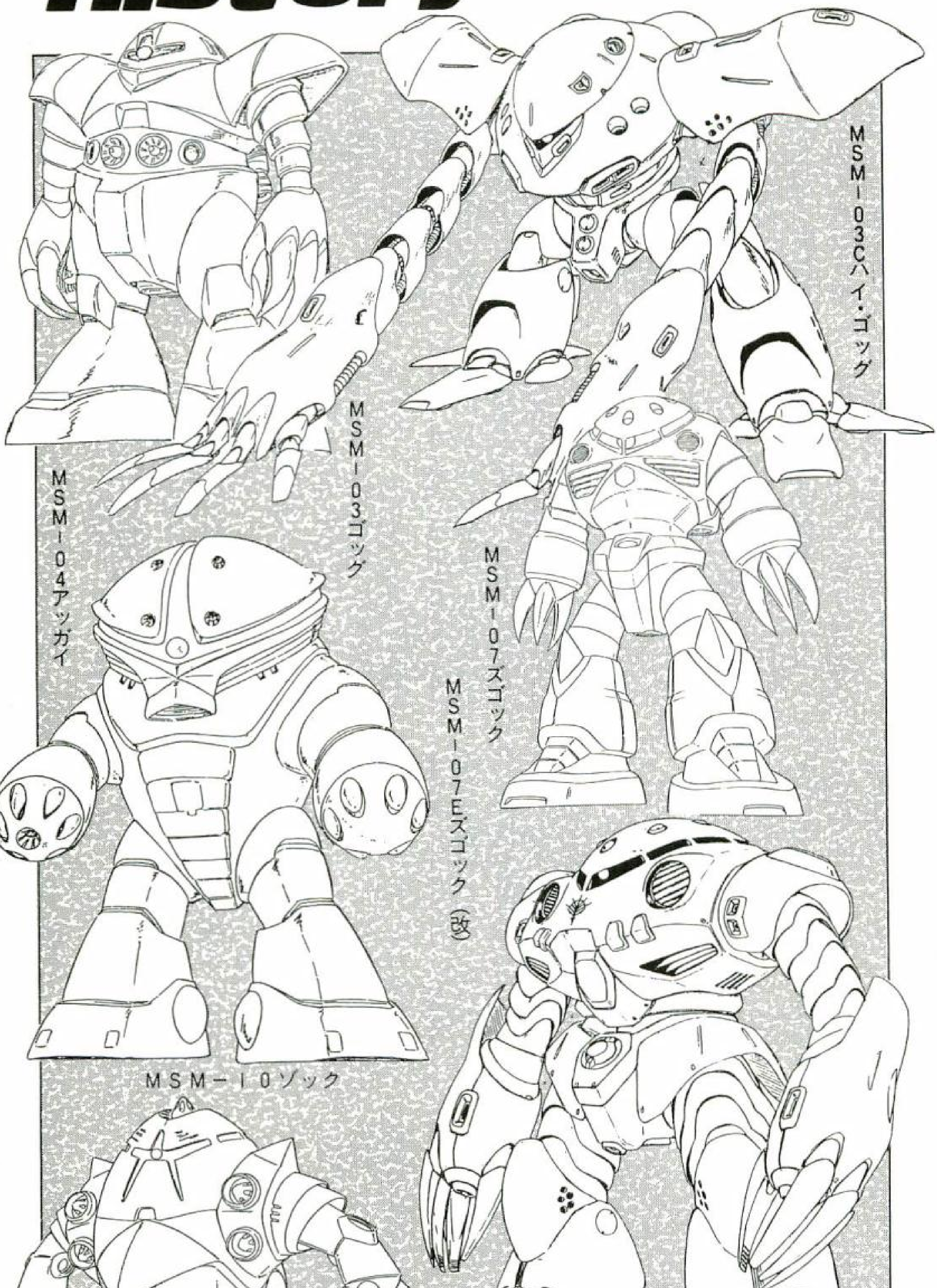
さて、Mシリーズ初の量産機は、MSM-03ゴッグである。この機体は高出力核融合炉を搭載したおかげで、公国軍初のメガ粒子砲を搭載したMSとなった。欠点は冷却上の制限から陸上の作戦行動時間は短いが、上陸作戦では多大なる戦果をもたらしている。

MSM-03とほぼ同時期にMSM-04アッガイ、MSM-07ズゴックが実戦配備されている。MSM-04は、簡易量産型というべき機体で、MS-06から部品を多く流用している。また、ステルス性が重んじられ、外装の塗料は電波及び赤外線吸収材が使用され、機体の廃熱も少なくなっている。さらにシンプルな形状のためソナーでは鯨と見分けがつかなかった。

MSM-07は、陸戦能力に主眼を置いた機体で、水冷式と空冷式ラジエータを併用している。また、熱核水流ジェットと共にジャンプ用の化学燃料ロケットを装備していた。

Mシリーズ最後の機体がMSM-10ゾックである。メガ粒子砲を計9門も搭載し、熱核ホバーのみで陸上を移動するという、MSとMA(モビルアーマー)の中間的存在となった。

MS Development History



4.公国軍の宇宙戦用モビルスーツ

地球上では陸戦用、水陸両用のMSの開発が進められたが、宇宙でもMS－06Cザクll以上の性能を持つ機体の研究が続けられた。まず、開戦初期の主力機であったザクIIのC型に代わり、改良機であるF型の量産が開始された。脚F型は中期から後期まで量産され、最も生産数が多い。宇宙戦用のR型は、その高い運動性が評価されていたが、操縦が極めて難しく、生産数は少ない。だが、脚部に大推力スラスターを搭載するというコンセプトは、のちの汎用MSに強い影響を与えた。

ザクIIに代わる主力汎用機の開発は遅れた。F型の完成度が高く、技術者の思考がそこから離れられなかったためだ。開発の遅れに業を煮やした国防省は、陸戦用に開発されたばかりのMS－09ドムを宇宙戦用に改修するように命じた。課題を与えられた技術者たちは、文字通り寝食を忘れてこのMSに熱中し、わずか2ケ月でMS－R09リック・ドムを作り上げた。脚部及び腰部スカート内の熱核ジェット推進器をロケット換装し、冷却システム他の宇宙用装備を加えていったMSは、高度のコンピュータを搭載し、パイロット観そのものは陸戦用と変らなかったが、増えた装備の分、推進剤の積載量は減り、自重が増して運動性が低下した。

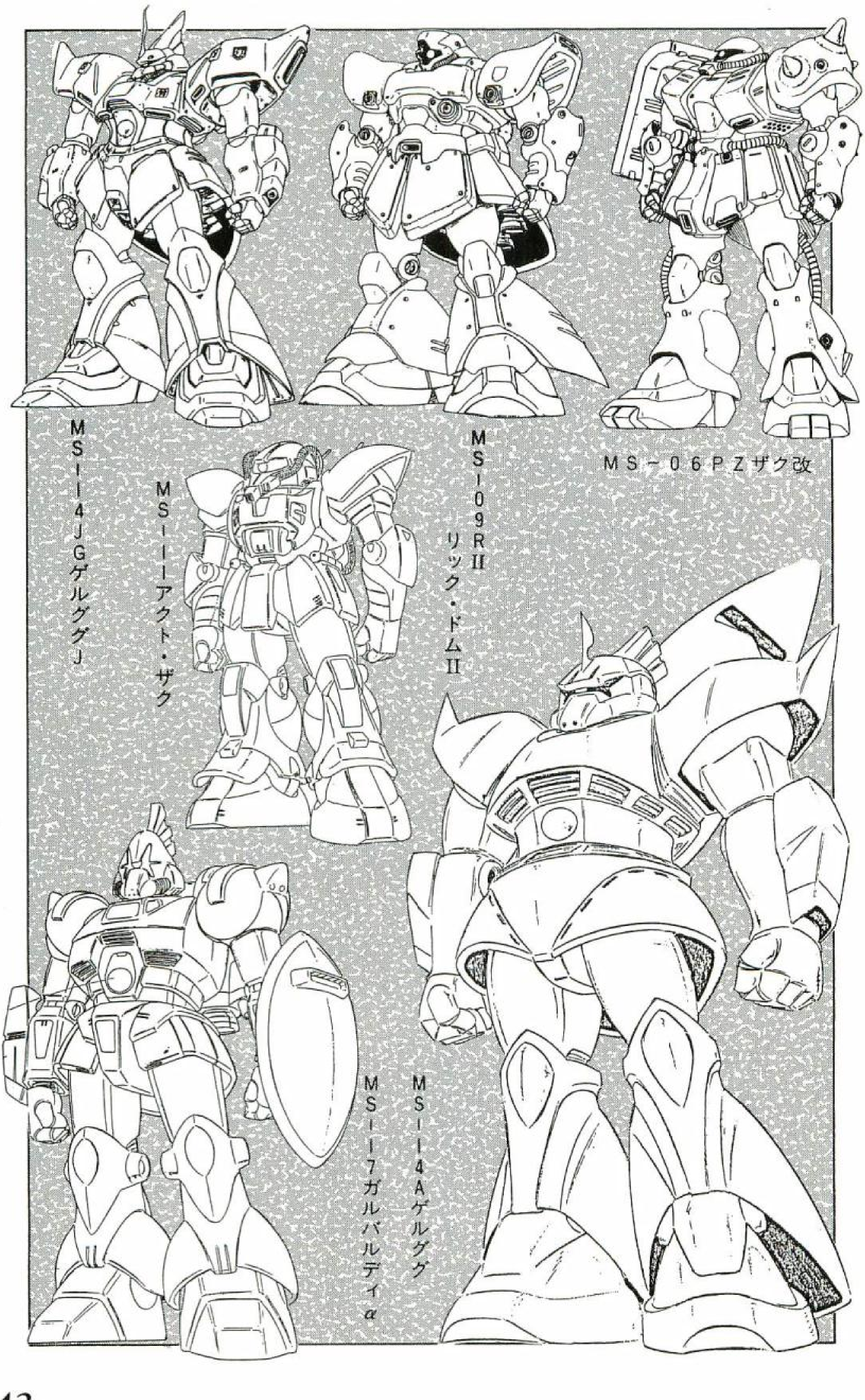
だが、それでもMS－06Fより高性能であった。

暫定的にMS－R09の量産が進められたが、新型の開発はさらに続行された。その後生まれた機体は――MS－10ペズン・ドワッジ、MS－11アクト・ザク、MS－14ゲルググ、MS－15ギャン、MSN－17ガルバルディα――である。それぞれ、特長のあるMSだが、連邦軍に遅れて開発されたエネルギーCAP技術を投入し、ビーム兵器を標準装備化したMS－14が次期主力汎用機に決定した。

だが、テンポの早い新鋭機の登場は、戦場において多くの混乱をまねいた。部品の大半は規格がまったく合わず、前線においては整備不良のため稼動できず、放置されるMSも多かった。また、パイロットにしても操縦システムが機体ごとにバラバラなため、新鋭機への転換に相当苦労したという。そのため、大戦末期には、MS－06F、MS－R09、MS－14の3機種を全面的に改修した機体を再生産型と呼ぶ。（地球でも水陸両用MSのMSM－03とMSM－07を改修している）

大戦後期に連邦軍もMSを開発したが、公国軍側のMSに性能的に劣っていた。だが、連邦軍製MSは、高度のコンピュータを搭載し、パイロットの経験不足を補っていた。それに対し、公国軍は熟練パイロットの多くを、ルウム戦役で失い、新鋭機を操る肝心の人材がいなかった。

MS Development History



5.モビルアーマーの登場

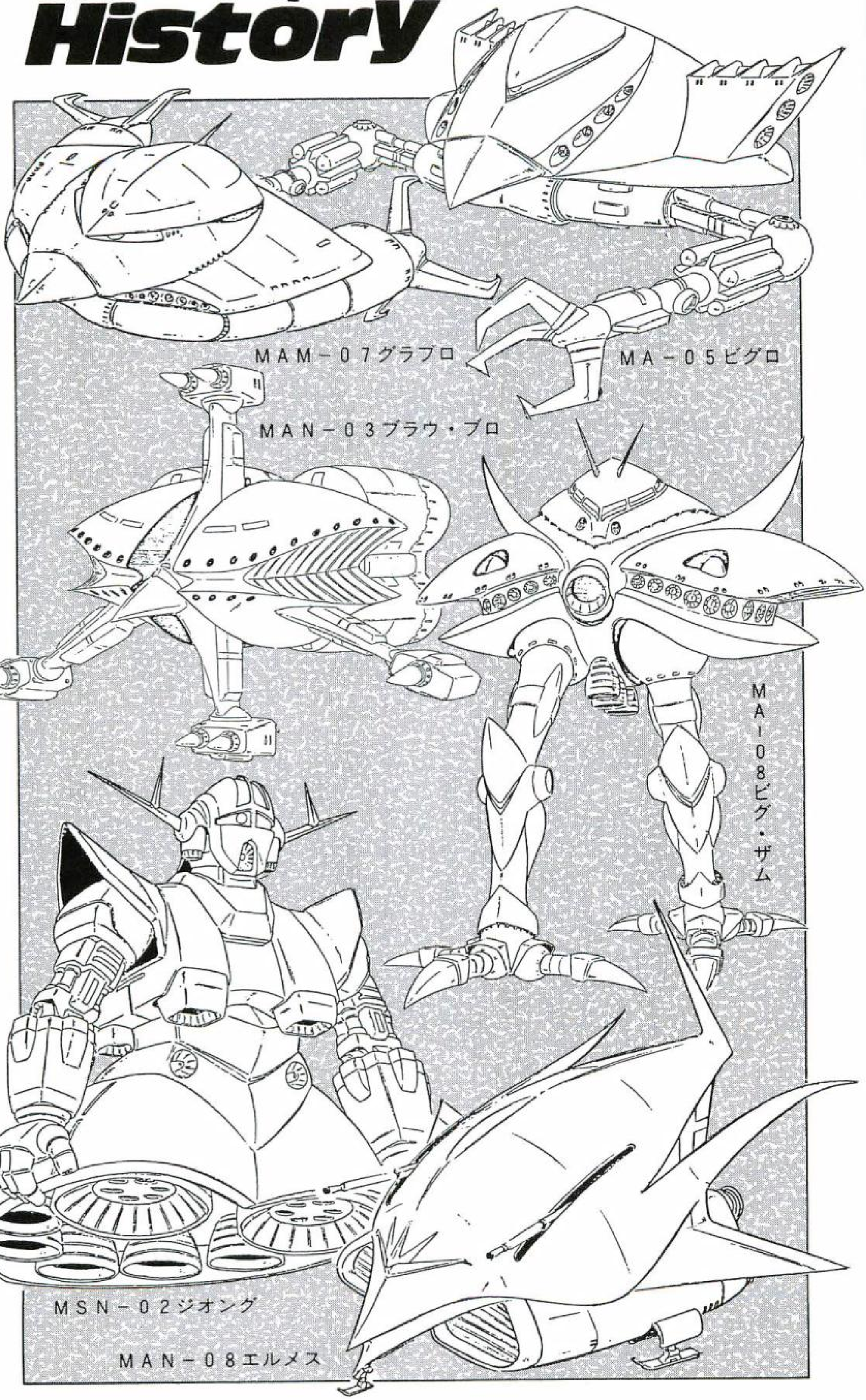
MSはその高い汎用性を持って今次大戦の公国軍の優勢を築いた。だが、戦局の進展と共に局地戦が多様化するにつれ、汎用兵器であるがゆえに状況に対応しきれないという事態が発生した。その解決策として汎用機の局地戦対応化（いわゆるMSV）があるが、この他に新たな支援兵器の開発が提唱された。

そこで開戦以前に検討されたMA（モビルアーマー）案が再浮上した。MAとは人型の形状に限定されない大型機動兵器のことで、試作第1号機は高速宇宙艇にマニピュレータが装備され、威力は低かったがメガ粒子砲までが搭載されていた。当時は汎用性、作業能力が強く望まれ、MA案はMS案に敗れた形になったが、戦局の変化と共に見直しが行われるようになった。

MAが生まれたもうひとつの背景としてサイコミュ・システムの存在があげられる。この装置はフラナガン機関と呼ばれるNT（ニュータイプ）研究所で開発されたマン&マシーン・インターフェイスである。簡単に解説すれば、機械が人間の思考を読み取り、端末である他の機械に伝達するという原理だ。脳波によって直接制御するだけに伝達速度は極めて速い。それが、MAN-05ビグロと呼ばれる宇宙戦用MAの完成後、このサイコミュを搭載した、MA-03ブラウ・ブロが開発される。まだ、実験機の域を出なかったが、有線制御式メガ粒子砲を4基装備し、通常3名の乗員を必要とするが、NT（ニュータイプ）パイロットとサイコミュによって1名で全ての砲を操作することができた。

さらにサイコミュ研究からNT（ニュータイプ）の影響（サイコウェーブ）をまったく受けない感（サイコ）応波である。その他、水中用のMA-07グラブロ、要塞防衛用でNT専用機のMA-08ビグ・ザムなどが登場したが、大戦末期で公国軍には量産する力が残っておらず、さらに訓練飛行も行わず、次々に出撃し、連邦軍のRX-78ガンダムに撃墜された。

MS Development History



6.V作戦発動！（RXシリーズの開発）

0079年3月、連邦軍はMS開発とその運用のための新造宇宙艦の建造を目的としたV作戦を発動させた。計画では、試作機の開発をサイド3から最も遠隔地にあるサイド7で行い、量産機はルナIIとジャブローで作られることになっていた。

連邦軍のMSは当初、格闘戦用機動歩兵、中距離支援用機動砲兵、遠距離支援用機動戦車の3タイプを開発・量産する予定であった。各タイプの部品はできる限り互換性を持たせ、操縦システムも共通にさせた。コア・ブロックは3タイプの完全共通ユニットで、操縦席と制御コンピュータのブロックに脱出機構を持たせ、脱出後は変形しコア・ファイターと呼ばれる汎用軽戦闘機となる画期的システムであった。問題は1機当りのコストがMS－06ザクIIの3倍近くかかる点で量産バージョンには採用されなかった。

また、ビーム兵器の標準装備が目標とされ、RX－78ガンダム、RX－77ガンキャノンにはエネルギーCAP技術による携帯式小型メガ粒子砲、通称ビームライフルが、RX－78のみに格闘戦用のビームサーベルが装備された。これはもちろん公国軍より優秀な核融合炉の搭載によって可能とされた。

3タイプの試作機は、装甲にガンダリウム合金を使用した3重（ハイブリッド）ハニカム装甲（アーマー）が採用された。耐弾性が高く、MS－06の120ミリ弾の直撃に耐えるが、主原料であるルナチタニウムが希少で、加工しにくいという欠点もあり、これも量産機には不採用となった。

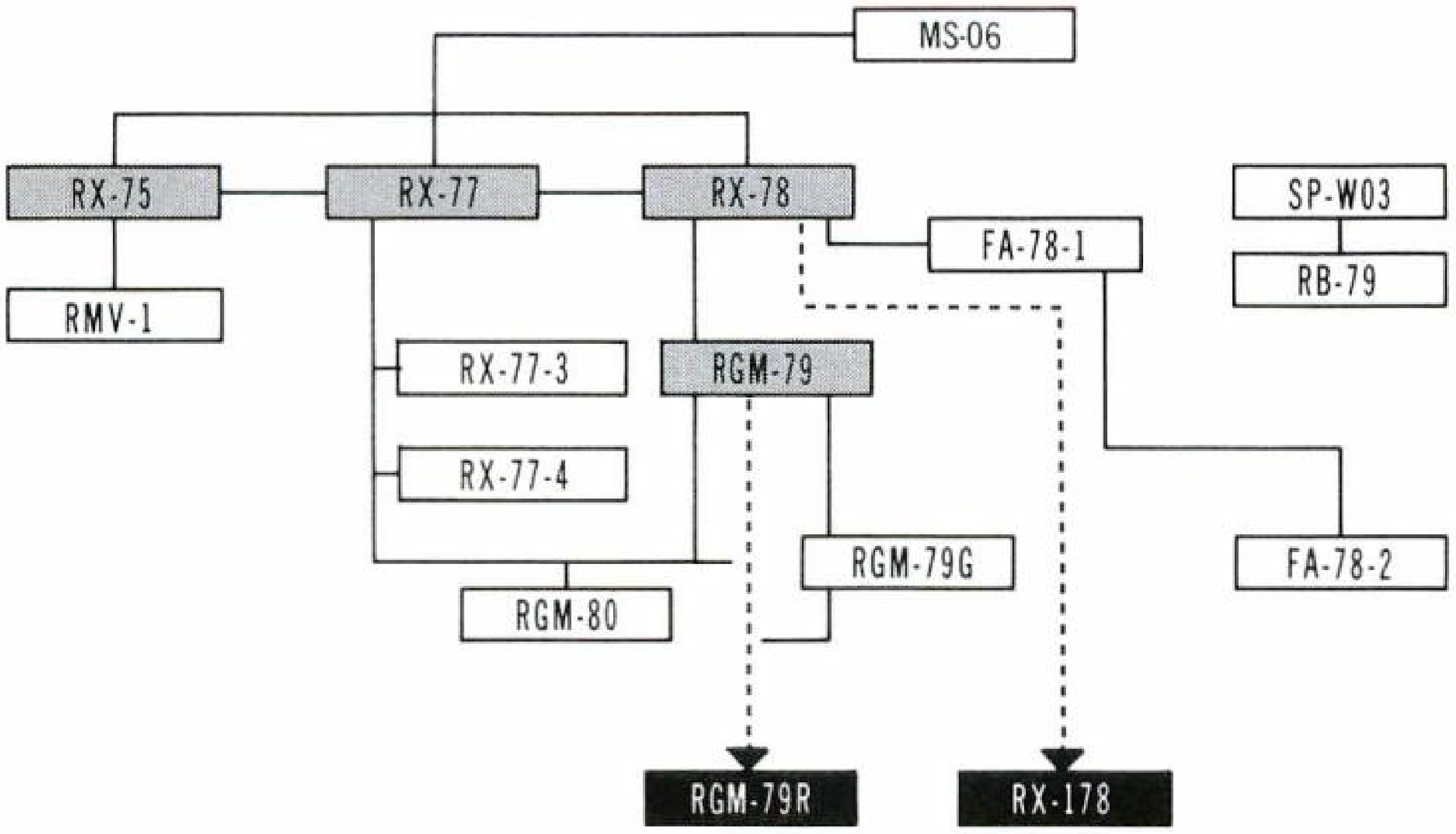
試作機のもうひとつの特長として、高性能自己学習型コンピュータの搭載が掲げられる。これはパイロットの養成が難しいという状況を打開するために考えられた策で、歩行、戦闘、作業といったさまざまなプログラムをケースに応じてコンピュータが独自に判断し、改良を加えていく。データが充分に蓄積されたプログラムを移植すれば新兵が操縦しても、ベテランパイロット並みに扱うことができた。

開発が最も早かった機体は、RX－75ガンタンクで、核融合炉の搭載に失敗した場合を想定し、駆動系はガスタービンエンジンと燃料電池を採用している。後はRX－77、RX－78という順で、それぞれ3機ずつ試作された。だが、公国軍のサイド7強襲により、RX－78－1（プロトタイプガンダム）が大破、RX－78－3（G－3）も小破、他の2機種も1機ずつ残して破壊された。

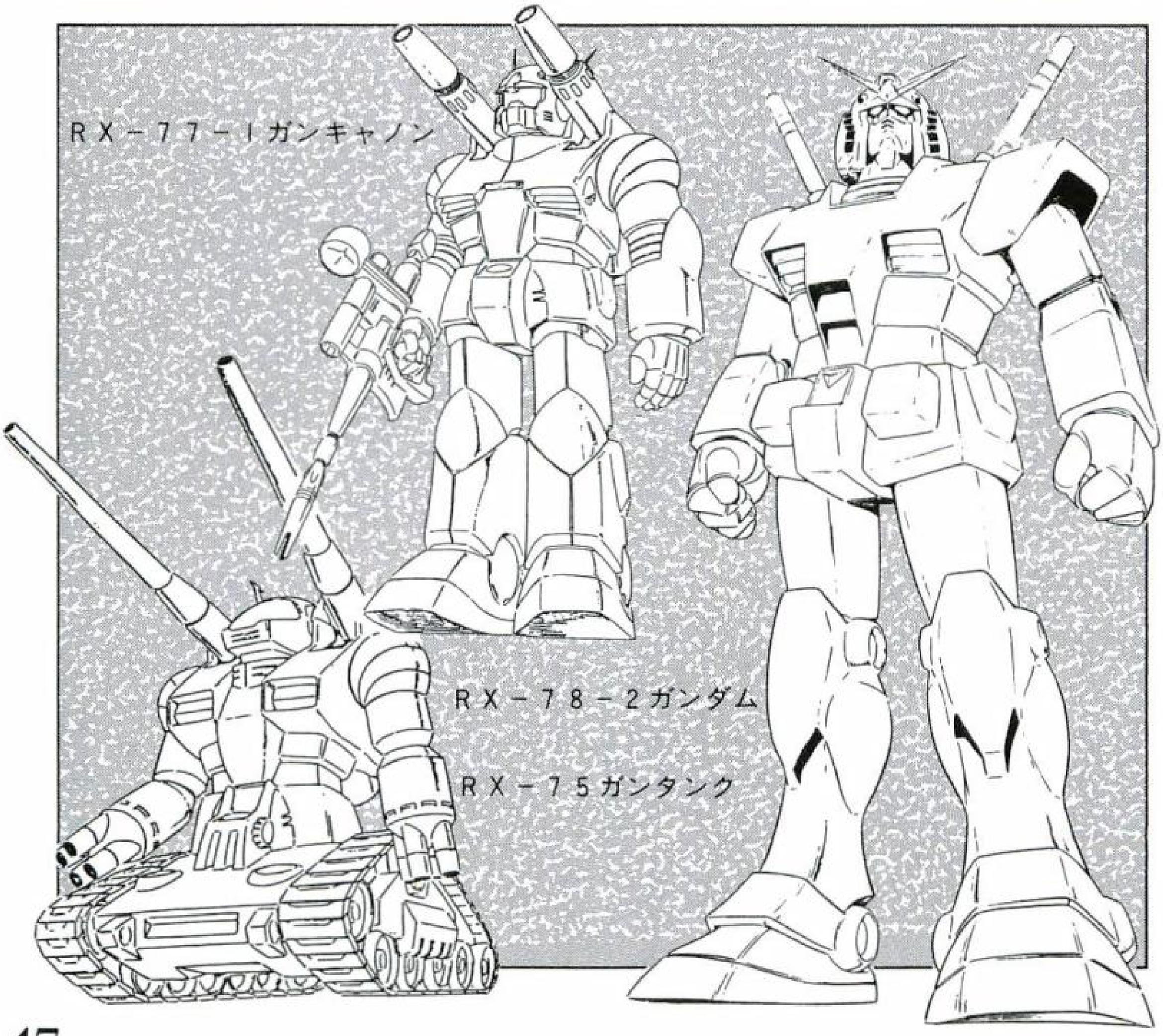
RXシリーズの残った3機は、追撃を退けながら、そのデータを地球の連邦軍基地に届け、同年12月には星一号作戦に参加した。また、破損が軽微だったRX－78－3は、途中のルナII基地に残され、MAC（マグネット・コーティング）実験機となった。

MS Development History

地球連邦軍製モビルスーツ開発経路



●表最下段の型式番号は、戦後連邦軍で開発された機体です。
RGM-79R——→ジムII　RX-178——→ガンダムMK-II



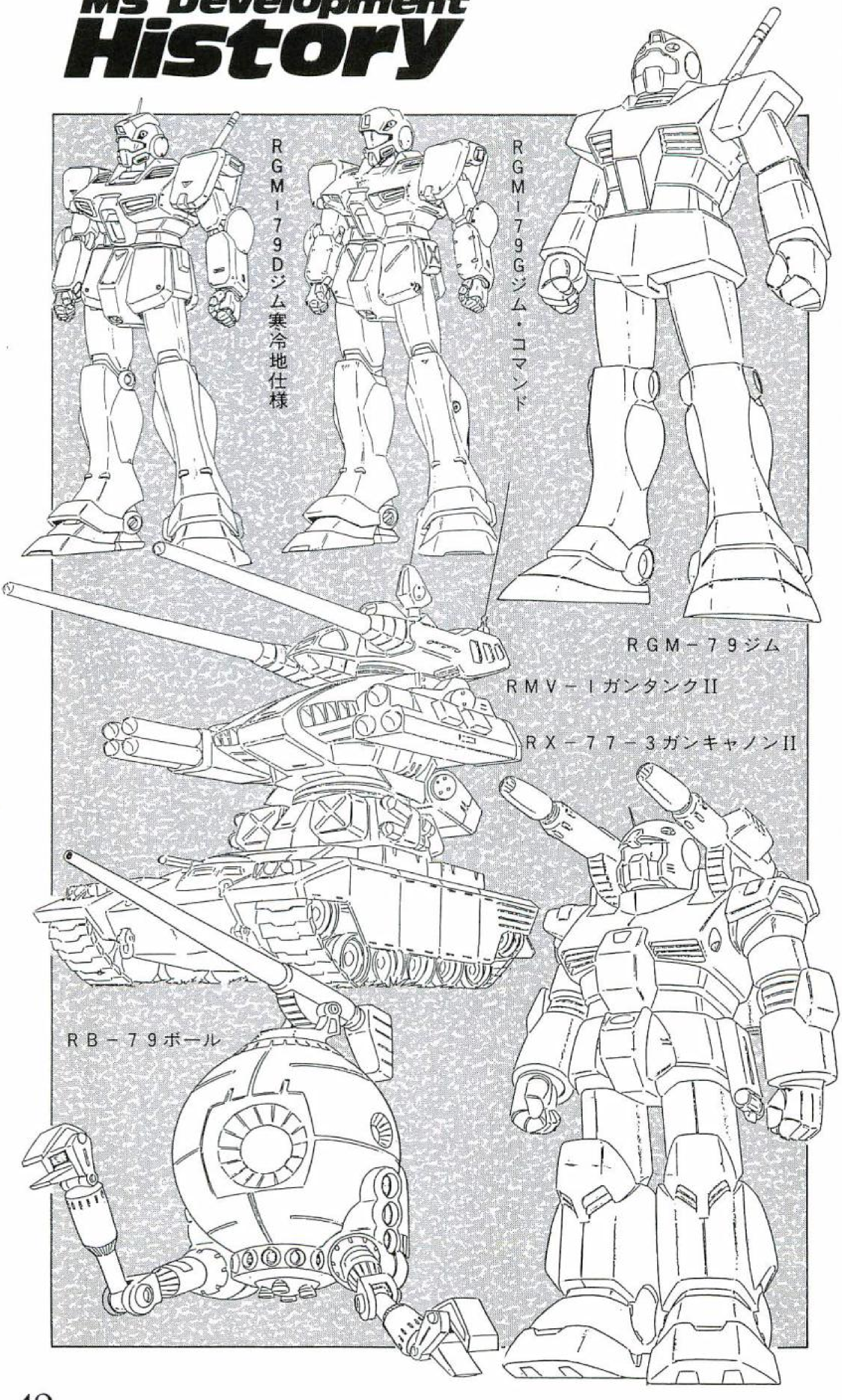
7.連邦軍の量産型モビルスーツ

0079年11月、RXシリーズの3機は、南米のジャブロー基地に到着した。だが、戦闘データ及び機体データは、その2ケ月前には、補給部隊を通じて届けられていたため、この時点では量産計画はすでに達成されていた。

連邦軍の量産型MSは、当初の予定から大きく変更され、格闘戦用機動歩兵、RGM-79ジムに主力を置いていた。これはRX-78の異常に高い戦績によるもので、宇宙戦での支援兵器は、戦闘ポッドのRB-79ボールが決定していた。なお、陸戦用としてはRX-77-3ガンキャノン重装型、RMV-1ガンタンクIIの量産もすでに開始されていた。

さて、RGM-79は、公国軍のMS-06シリーズ並みに局地戦仕様機が生み出されている。配備は大半が大戦末であり、大きな戦績はなかったが、0080年に入り、公国軍が無条件降伏した後、地球及び宇宙での残存部隊の処理に役立った。代表的な機体を掲げると、寒冷地戦仕様のD型、コロニー戦用のTGM-79ジム・トレーナーなどがあり、RX-77(ジムコマンド)、さらに宇宙戦用のバックパックによ

MS Development History



MS【MS用語辞典①】

アーマー〜コアブロックシステム

アーマー【armor】 装甲。MSの装甲は高張チタン合金の間にセラミックスをサンドイッチした複合装甲（ハイブリッドアーマー）が主流である。MS－05やMS－06の初期型（スペースド・アーマー）は超高張力鋼を用いた多重空間装甲であったが、耐弾性の向上と軽量化のため前者に転換された。RX－78の装甲材に使用されたガンダリウムは、ルナチタニウムと呼ばれる希少金属（レアメタル）を用いた超硬合金である。この合金で作られた3重ハニカム装甲は、他の装甲よりはるかに耐弾性が勝るが、材料がとぼしく、加工が難しいため量産性が低いという欠点がある。そのためRGM－79では採用されなかった。

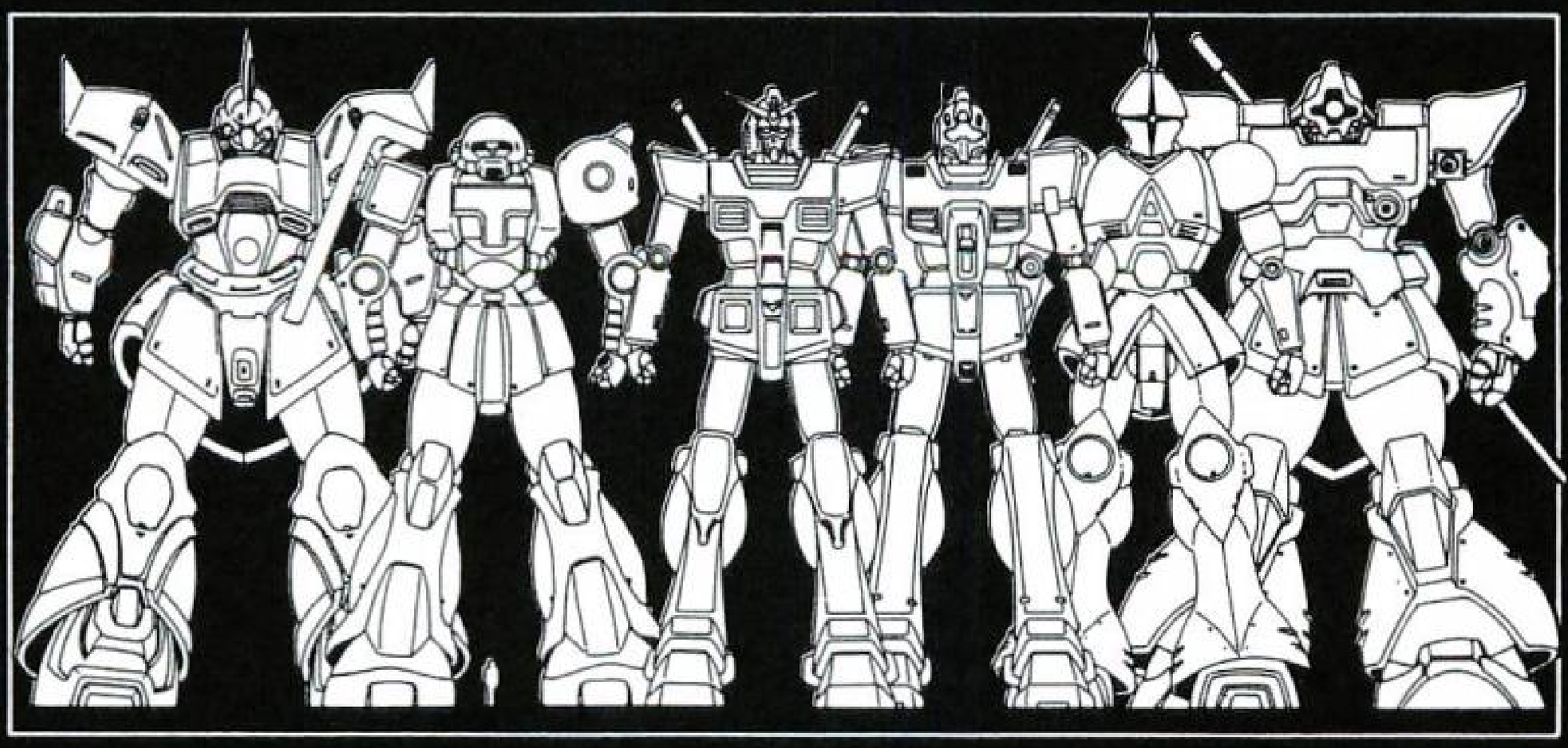
アポジモータ【apogee motor】 MS、宇宙船などに組み込まれているロケットモータのこと。姿勢制御の補助に用いられている。公国軍の初期型MSでは固体モータが用いられていたが、後期型では液体ロケットによる高性能の推進系に変わっている。同バーニア

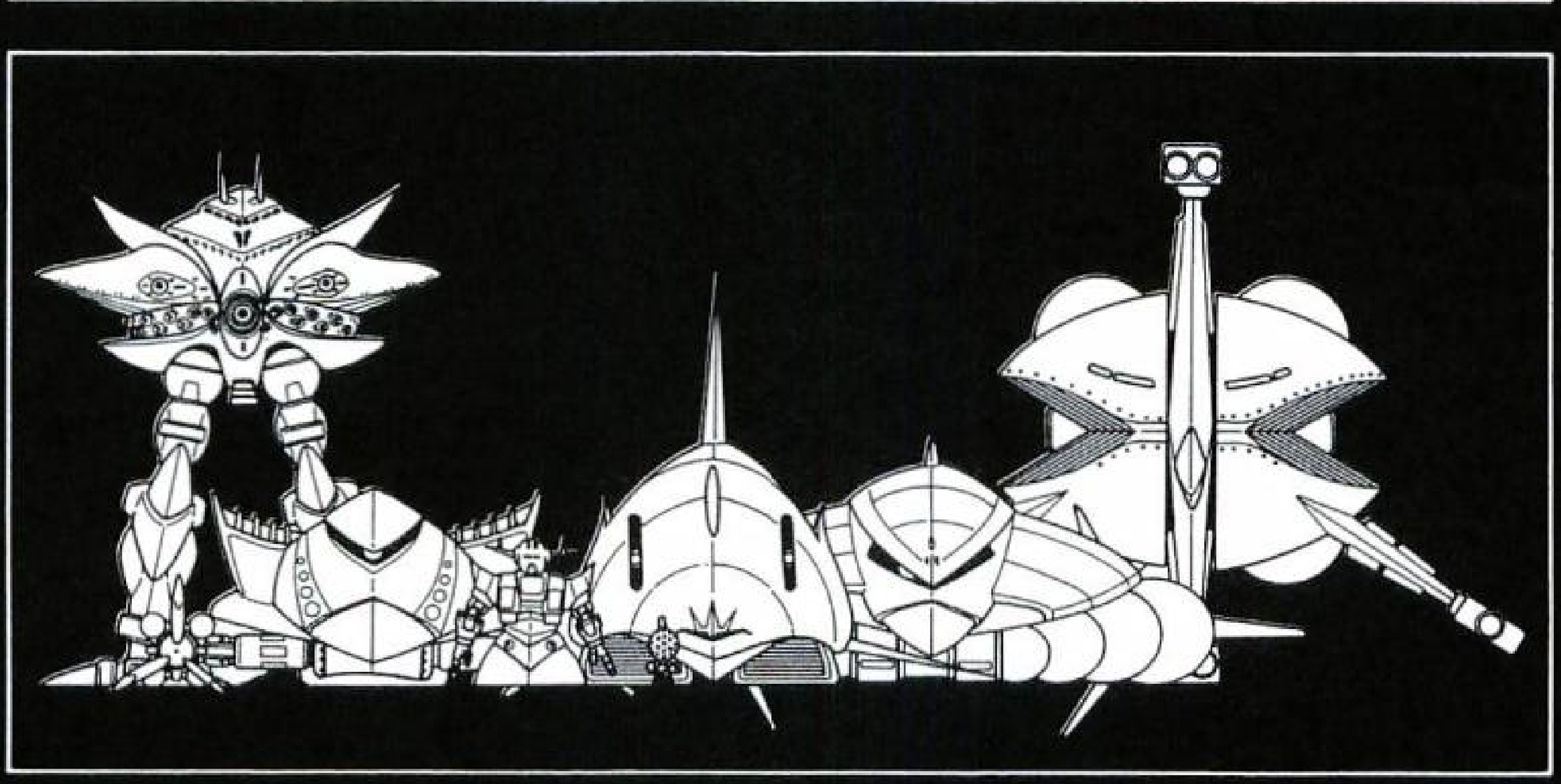
オールレンジ攻撃【all range attack】 ニュータイプ専用MAだけが可能とする特殊戦術。サイコミュによって同時に複数の攻撃ユニット（有線メガ粒子砲、ビット）を操作し、標的の全周囲から攻撃する。

核融合炉【nuclear tusion reactor】 この世界ではミノフスキー物理学の応用により実用化された。MSを初め各種艦艇の主動力源として用いられている。MSでは単にジェネレータと呼称することが多い。

グレネイド【grenade】 通常は歩兵用の手榴弾（しゅりゅうだん）をさすが、MSの武器としても用いられる。それ自体に推進力はなく手投げ（ハンドグレネイド）、もしくは銃床にマウントされたランチャーの炸薬（さくやく）の爆発力で飛ばされる。また、中にはクラッカーと呼ばれる分裂弾頭型の手投げ弾もある。

コアブロックシステム【core block system】 RXシリーズに採用された脱出システム。コクピットブロックを含む胴体部が本体と切り離され、脱出ポッドになる。しかも、ポッドは変形してコア・ファイターと呼ばれる汎用戦闘機となる。移動力と攻撃力が付与された分、パイロットの生残性が高まったが、コストが非常に上がり、RGM－79では採用されていない。RX－78の強化システムであるGアーマーはこの発展応用版といえよう。





MS性能比較

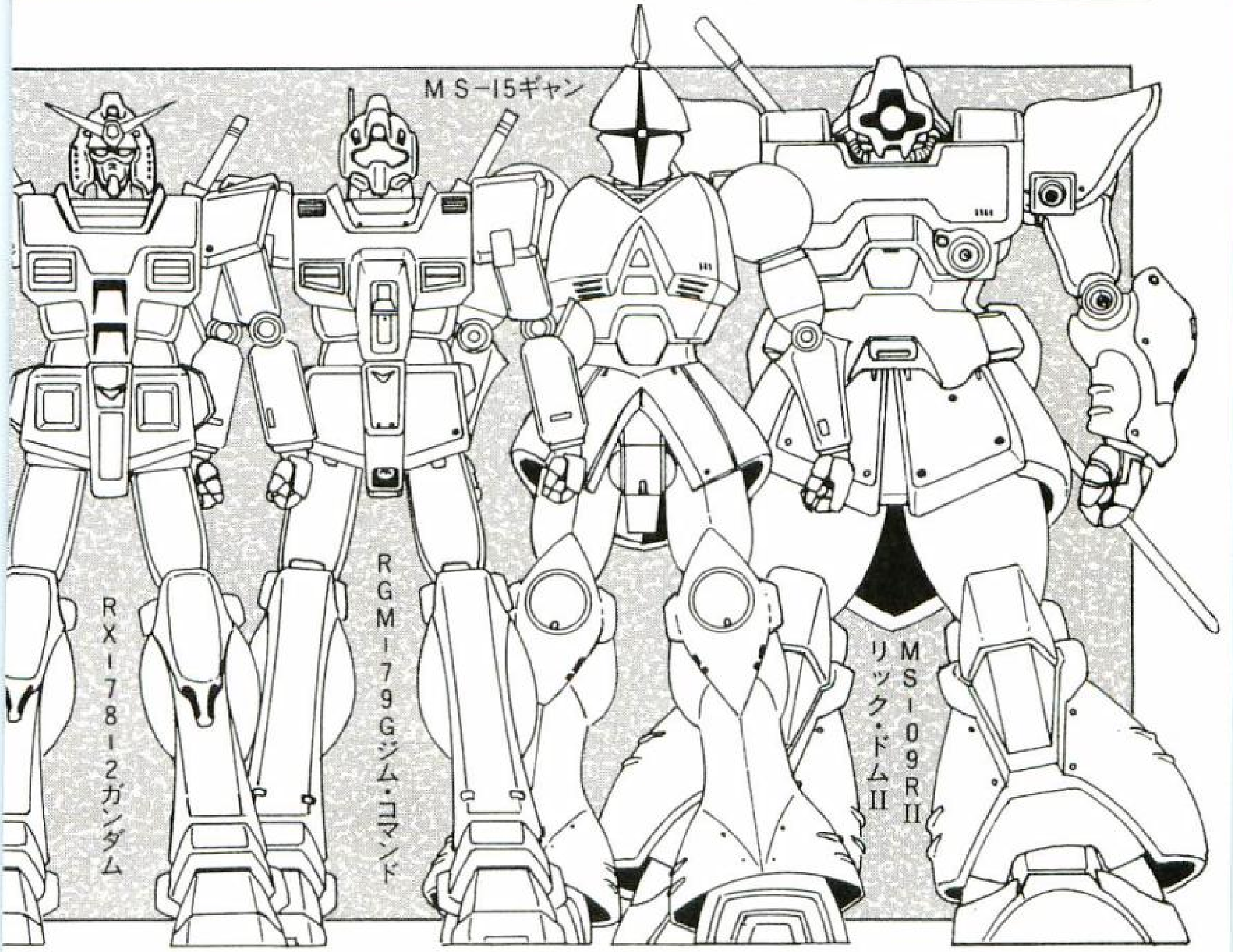
An abiliy symmetry of M.S.

●一年戦争時代のMS・MAは、これまで詳細な性能データスペックが発表されていなかった。編集部はサンライズの旧データ表、および各種資料から、ここに主要MS・MAの新データスペックを発表する。

Illustration by Hideki Hoshino.

1.汎用(宇宙戦用)モビルスーツ

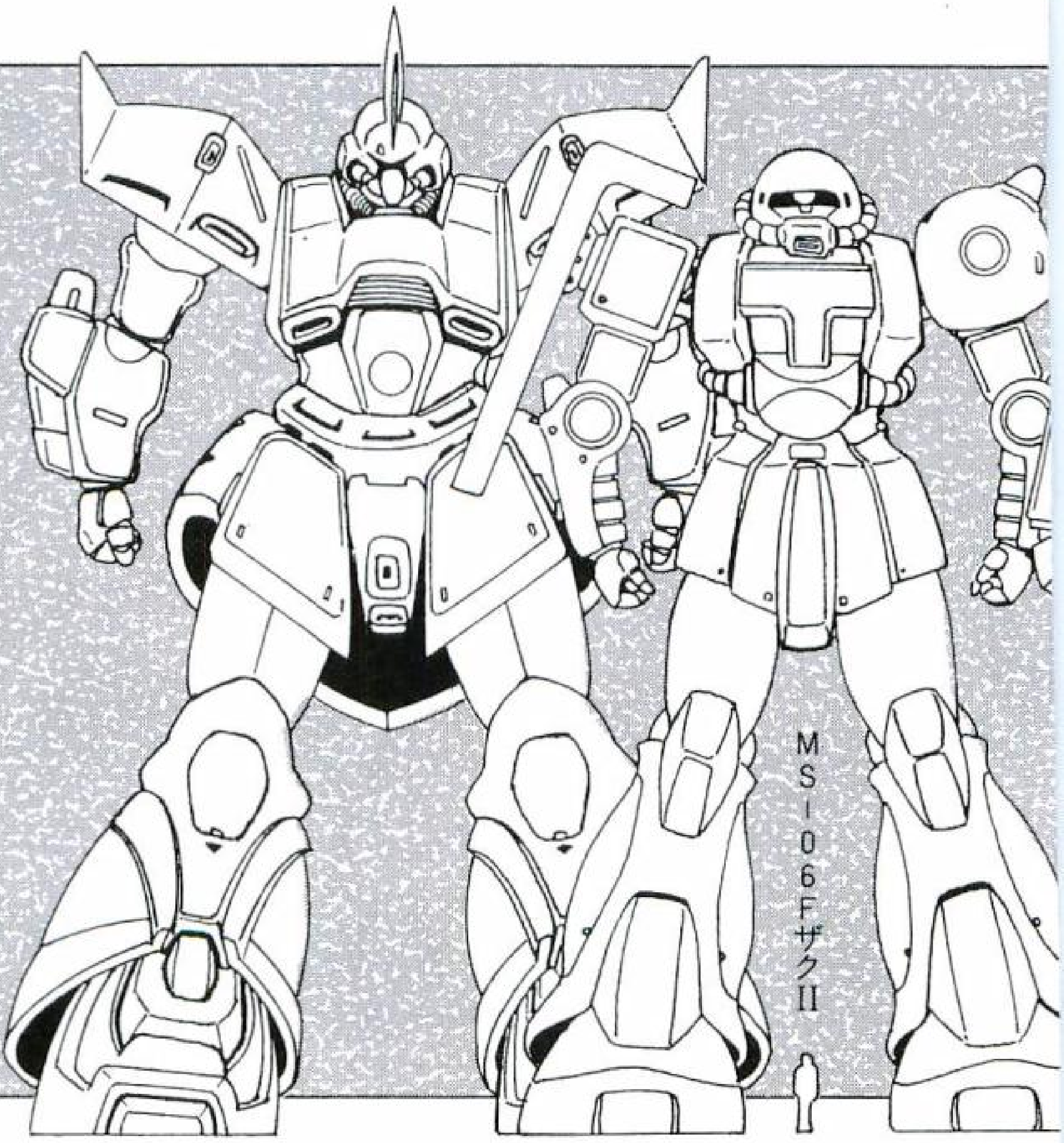
	スラスター総推力 (kg)	センサー有効半径 (m)	武　　装
	40,700	2,900	105mmマシンガン、他
	43,000	3,200	120mmマシンガン、240mmバズーカ、ヒートホーク、他
	79,500	3,200	120mmマシンガン(グレネイドランチャー付)ハンドグレネイド×3、他
	49,800	3,200	120mmマシンガン、240mmバズーカ、ヒートホーク、他
	53,000	5,400	360mmバズーカ、ヒートサーベル、他
	110,000	5,400	360mmバズーカ、拡散ビーム砲×1、スツルムファウスト、他
	61,500	6,300	ビームライフル、ビームソード、他
	79,900	6,300	ビームライフル、ビームソード、他
	178,500	6,300	大口径ビームマシンガン、他
	56,200	4,400	ビームサーベル、シールド(ミサイル×56、ハンドボンブ×12)
	55,500	5,700	ビームライフル、ビームサーベル、270mmバズーカ、60mmバルカン砲×2、他
	55.500	6.000	ビームスプレーガン、ビームサーベル、60mmバルカン砲×2、他
	74,000	6,000	ビームガン、ビームサーベル、60mmバルカン砲×2、他



MS・MA性能比較

愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)	
ザクⅠ（旧型ザク）	MS-05	17.5	17.5	50.3	65.0	899	
ザクII（ザク）	MS-06F	18.0	17.5	58.1	73.3	951	
ザク改	MS-06FZ	18.0	17.5	56.2	74.5	976	
高機動型ザク	MS-06R-1A	18.0	17.5	61.8	76.8	1,012	
リック・ドム	MS-R09	18.6	18.6	43.8	78.6	1,199	
リック・ドムII	MS-09RII	18.6	18.6	45.6	79.9	1,219	
ゲルググ	MS-14A	19.6	19.2	42.1	73.3	1,440	
高機動型ゲルググ	MS-14B	19.6	19.2	53.5	76.8	1,440	
ゲルググイェーガー	MS-14JG	19.2	19.2	40.5	80.3	1,490	
ギャン	MS-15	19.9	19.9	52.7	68.6	1,360	
ガンダム	RX-78-2	18.0	18.0	43.4	60.0	1,380	
ジム	RGM-79	18.0	18.0	41.2	58.8	1.250	
ジム・コマンド（宇宙戦仕様）	RGM-79GS	18.0	18.0	44.6	76.5	1,390	

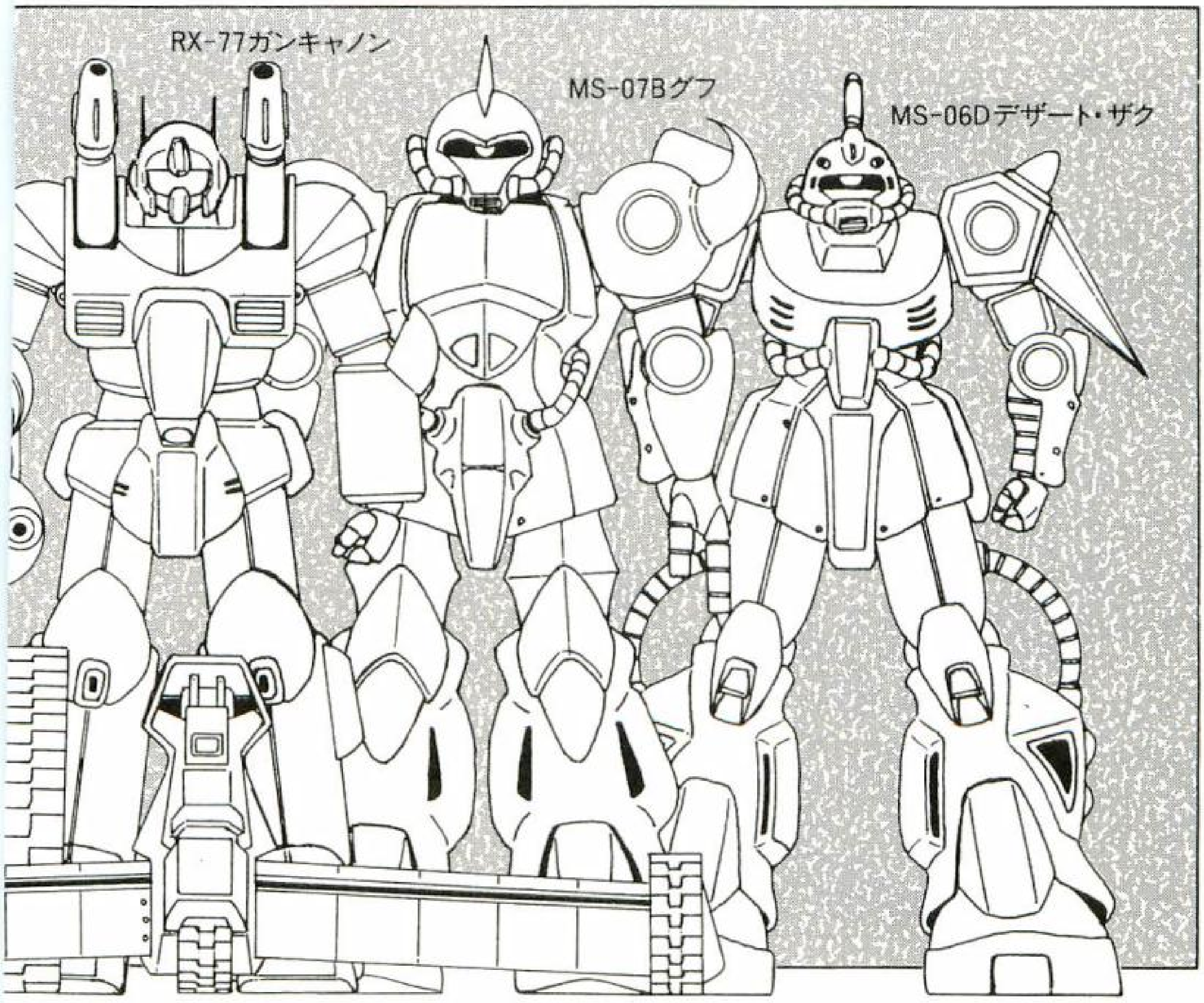
汎用MS対比図



イラスト／星野秀記

2. 陸戦用モビルスーツ

	スラスター総推力 (kg)	地上最高速度 (km/h)	武　　装
	45,400	85	120mmマシンガン、240mmバズーカ、3連装ロケット弾ポッド、他
	42,900	80	105mmマシンガン、3連装ロケット弾ポッド、クラッカーポッド、他
	41,000	73	180mmキャノン砲、2連装スモークディスチャージャー、2連装ロケットランチャー×2
	40,700	99	5連装75mm機関砲、ヒートロッド、ヒートサーベル、他
	58,200	90(240)	360mmバズーカ、拡散ビーム砲、他
	48,000	90	180mm無反動砲、4連装120mm機関砲
	42,900	55	4連装180mmミサイルランチャー、特殊ハンマーガン、他
	51,800	78	240mmキャノン×2、ビームライフル、60mmバルカン砲×2、他
	62,200	69	240mmキャノン×2、ビームライフル、60mmバルカン砲×2、他
	88,000	70	120mm低反動キャノン×2、40mm 4連装ガンランチャー×2
	——	75	120mmライフル砲×2、180mm 4連装ロケット弾ポッド、3連装ミサイルランチャー
	63,500	83	240mmキャノン、ビームライフル、60mmバルカン砲×2、他

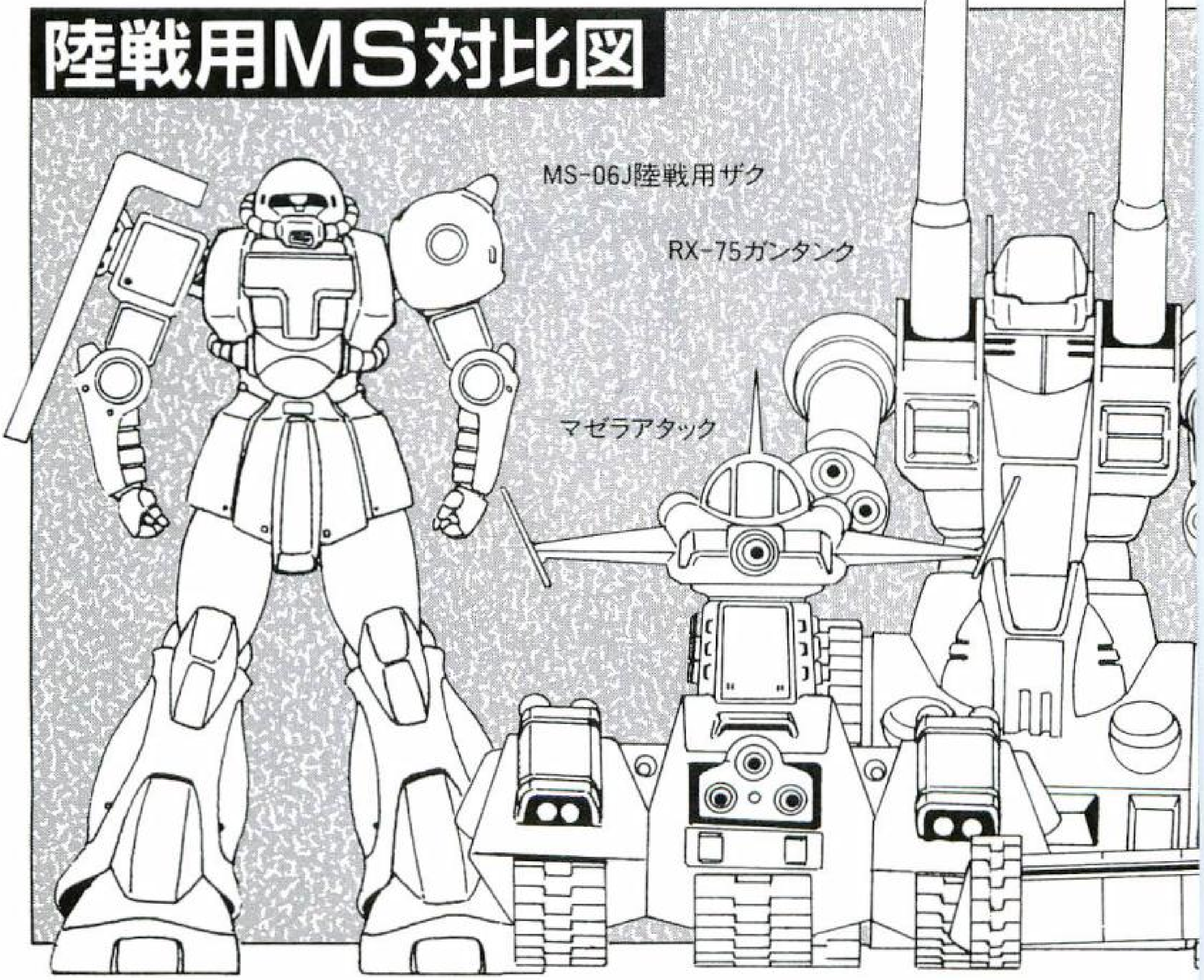


キュイ

MS・MA性能比較

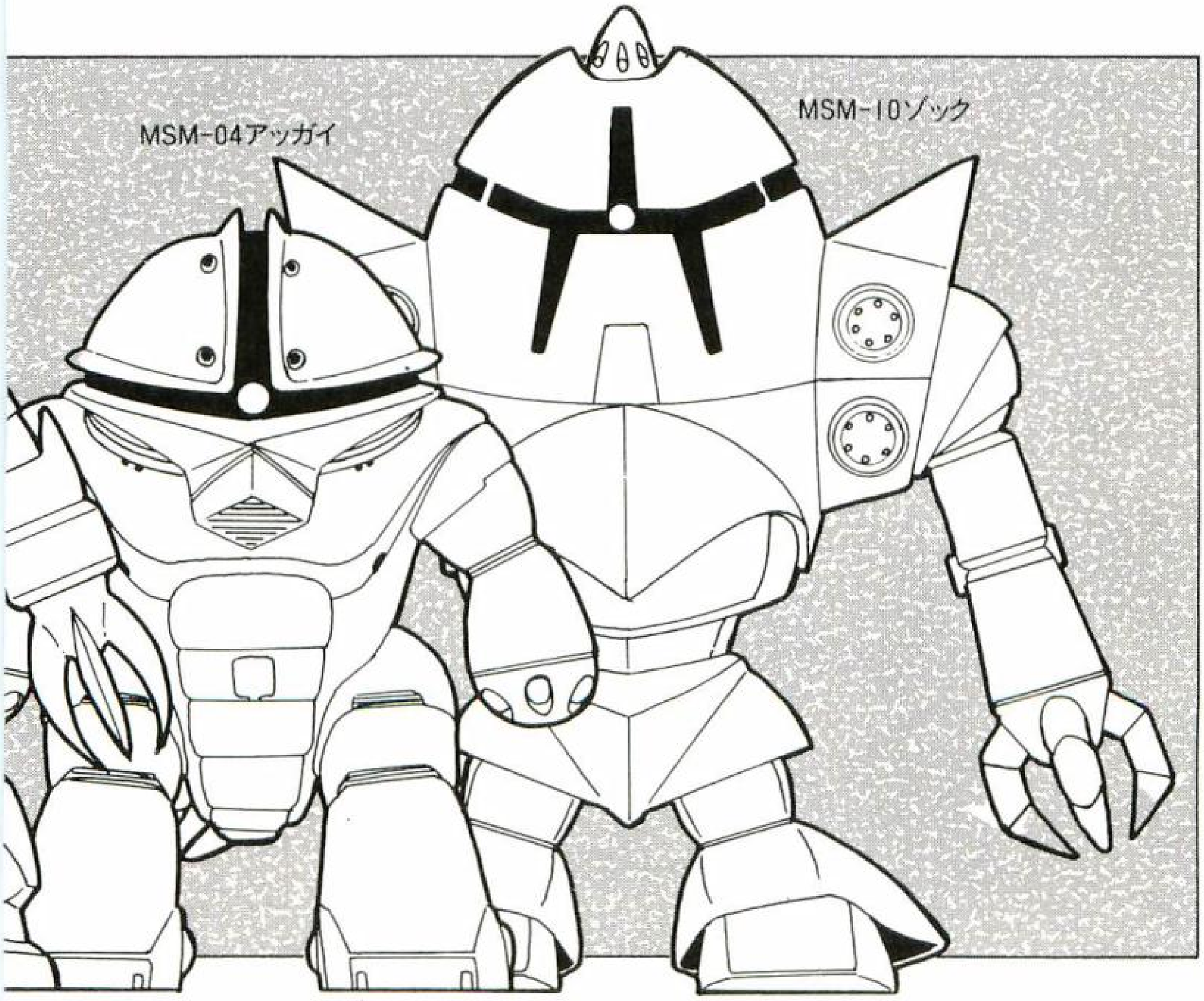
愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)	
陸戦用ザク	MS-06J	18.0	17.5	49.9	70.3	976	
ザク・デザートタイプ	MS-06D	18.2	17.5	61.3	79.4	976	
ザクキャノン	MS-06K	18.4	17.7	59.1	83.2	976	
グフ	MS-07B	18.7	18.2	58.5	75.4	1,034	
ドム	MS-09	18.6	18.6	62.6	81.8	1,269	
ギガン	MS-12	16.2	13.9	71.1	101.3	736	
ガッシャ	MS-13	17.5	15.1	89.7	116.5	1,076	
ガンキャノン	RX-77-2	18.1	17.5	51.0	70.0	1,380	
ガンキャノン重装型	RX-77-3	18.1	17.5	58.6	79.1	1,380	
ガンタンク	RX-75	15.6	15.0	56.0	80.0	878	
ガンタンクII	RMV-1	16.9	15.2	98.4	123.7	211	
ジムキャノン	RGC-80	18.4	17.8	49.9	65.3	976	

陸戦用MS対比図



3.水陸両用モビルスーツ

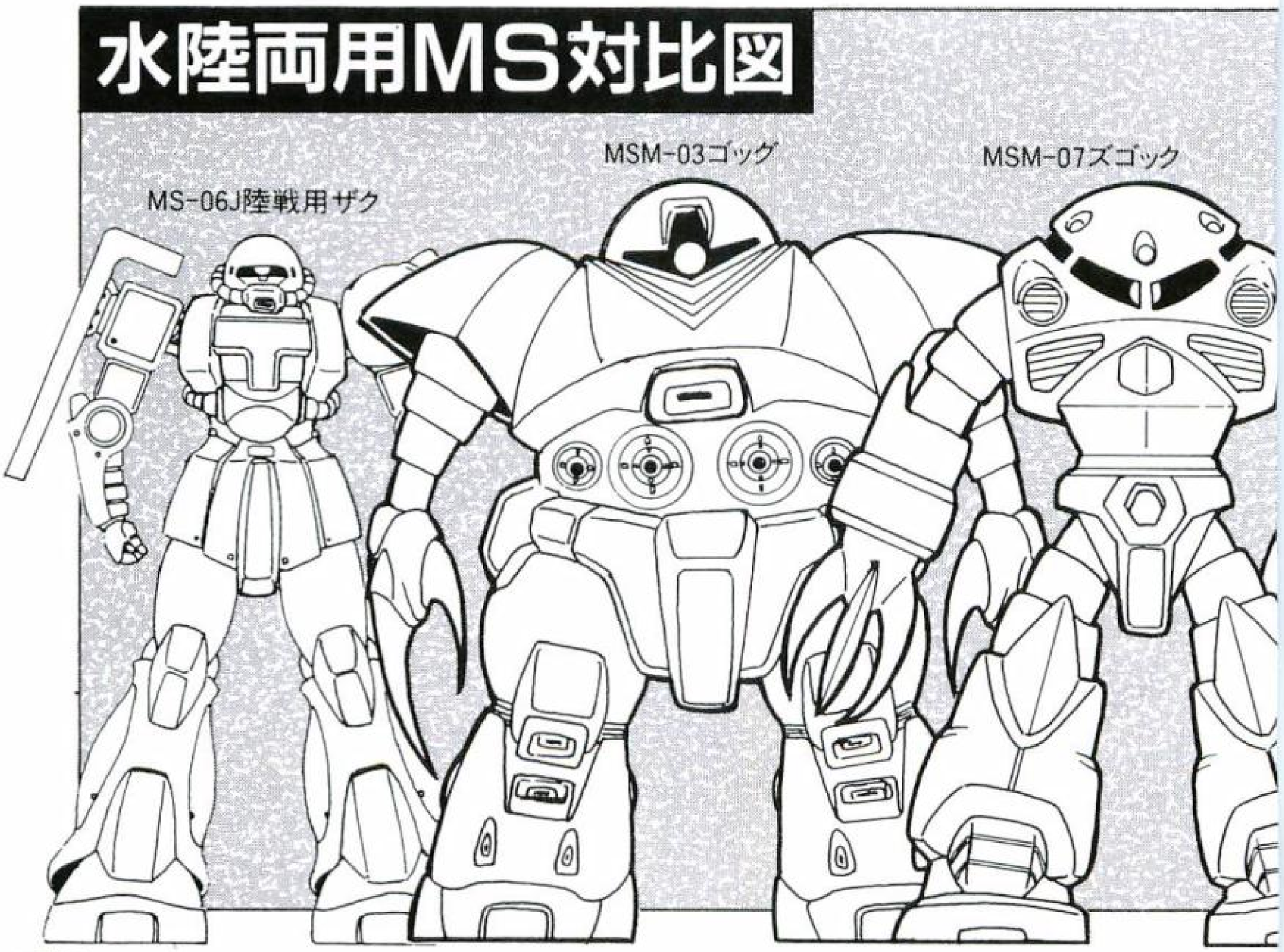
	スラスター総推力 (kg)	水中最高速度 (kt)	武　　装
	66,000	45	240mm4連射ロケット弾ポッド、サブロックガン
	121,000	75	メガ粒子砲×2、魚雷発射管×2
	86,000	89	ビームカノン×2、魚雷発射管×4、ハンドミサイルユニット
	109,600	53	105mmバルカン×4、ロケット弾ランチャー
	97,900	55	3連装320mmロケット弾ランチャー
	109,000	50	ヒートロッド×4
	83,000	103	240mmロケット弾×6、メガ粒子砲×2
	112,000	118	ビームカノン×2、魚雷発射管×6
	97,400	47	ワイドカッター×10
	253,000	63	フォノンメーザー砲、メガ粒子砲×8



MS・MA性能比較

愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)	
ザク・マリンタイプ	MS-06M (MSM-01)	18.2	17.5	43.3	60.8	951	
ゴッグ	MSM-03	18.3	18.3	82.4	159.4	1,740	
ハイ・ゴッグ	MSM-03C	15.4	15.4	54.5	79.2	2,735	
アッガイ	MSM-04	19.2	19.2	91.6	129.0	1,870	
ジュアッグ	MSM-04G	17.4	17.4	137.3	198.7	2,660	
アックガイ	MSM-04N	19.0	19.0	113.7	171.6	2,010	
ズゴック	MSM-07	18.4	18.4	65.1	96.4	2,480	
ズゴックE	MSM-07E	18.4	18.4	69.5	88.9	2,570	
ゾゴック	MSM-08	18.8	18.2	77.4	107.3	1,688	
ゾック	MSM-10	23.9	23.9	167.6	229.0	3,849	

水陸両用MS対比図



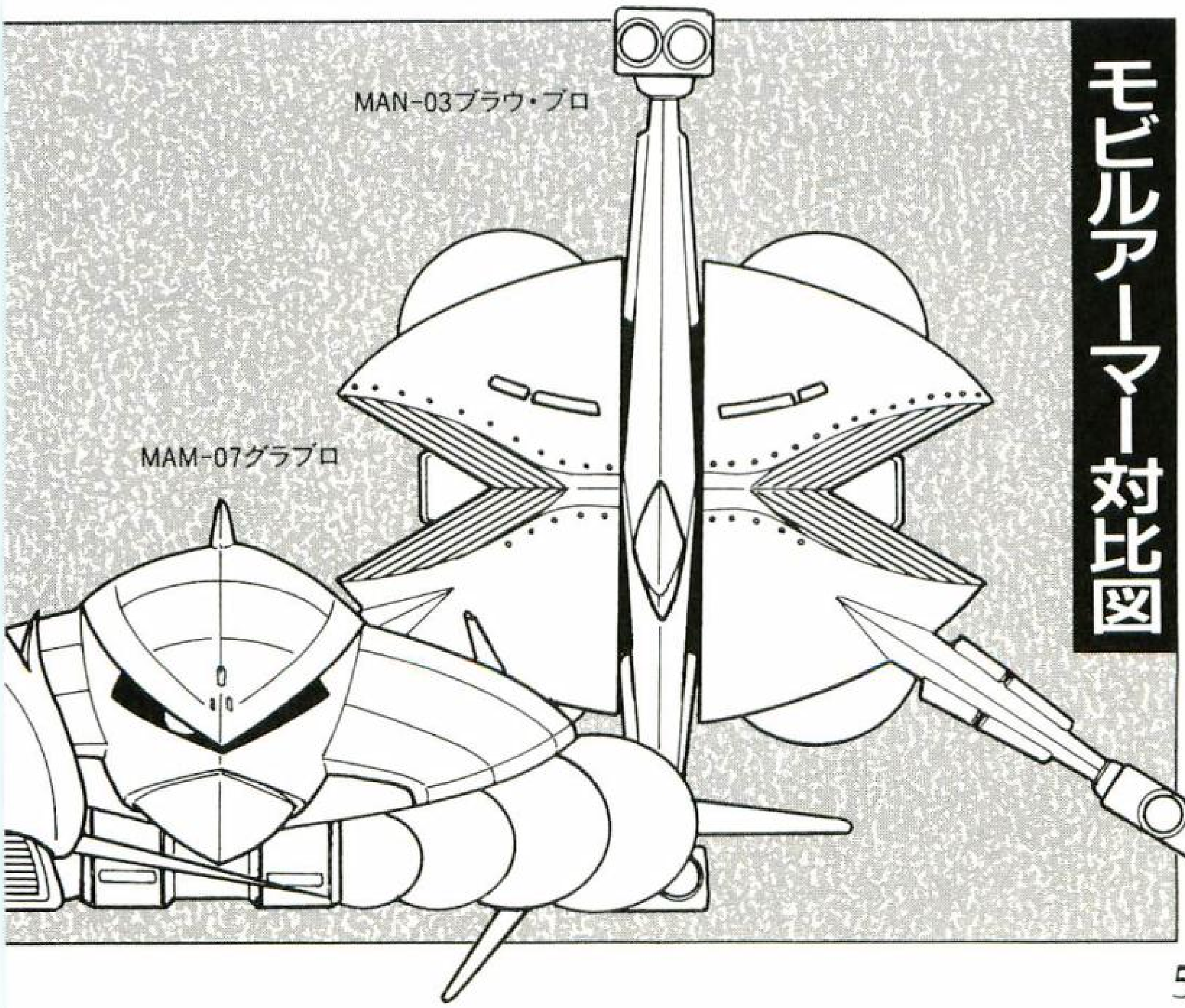
4.モビルアーマー

	スラスター総推力 (kg)	センサー有効半径 (m)	武　　装
	――	――	6連装水中ミサイルランチャー×2、対空・対艦ミサイルセンチャー×2
	136,100	111,000	大型メガ粒子砲、4連装ミサイルランチャー×2
	580,000	134,000	大型メガ粒子砲、対空メガ粒子砲×28、105mmバルカン×2
	1,760,000	156,000	有線制御式メガ粒子砲×4
	645,200	245,000	メガ粒子砲×2、ビット
	187,000	81,000	有線制御式メガ粒子砲×2、メガ粒子砲×3

スペックリスト解説

1、型式番号／公国軍のMS
はモビルスーツの、MAはモビ
ルアーマーの略号。先頭につく
Yは実験機を、末尾につくMは
水陸両用を、Nはニュータイプ
専用であることを示す。連邦軍
はRが連邦軍製MSであるこ
とを示し、試作型はその後にX
を入れ、量産型は愛称の略字
を入れる。（例、ジムキャノン＝
GC）
2、全高／アンテナ、頭飾を含
む高さ。
3、頭頂高／アンテナなど付属
物を除いた本体の高さ。
4、本体重量／武器、推進剤、
潤滑剤、その他の付加物を除い
た重さ。
5、全備重量／右の付加物全
てを含む重さ。一般に本体重量
が軽く、全備重量が重い機体

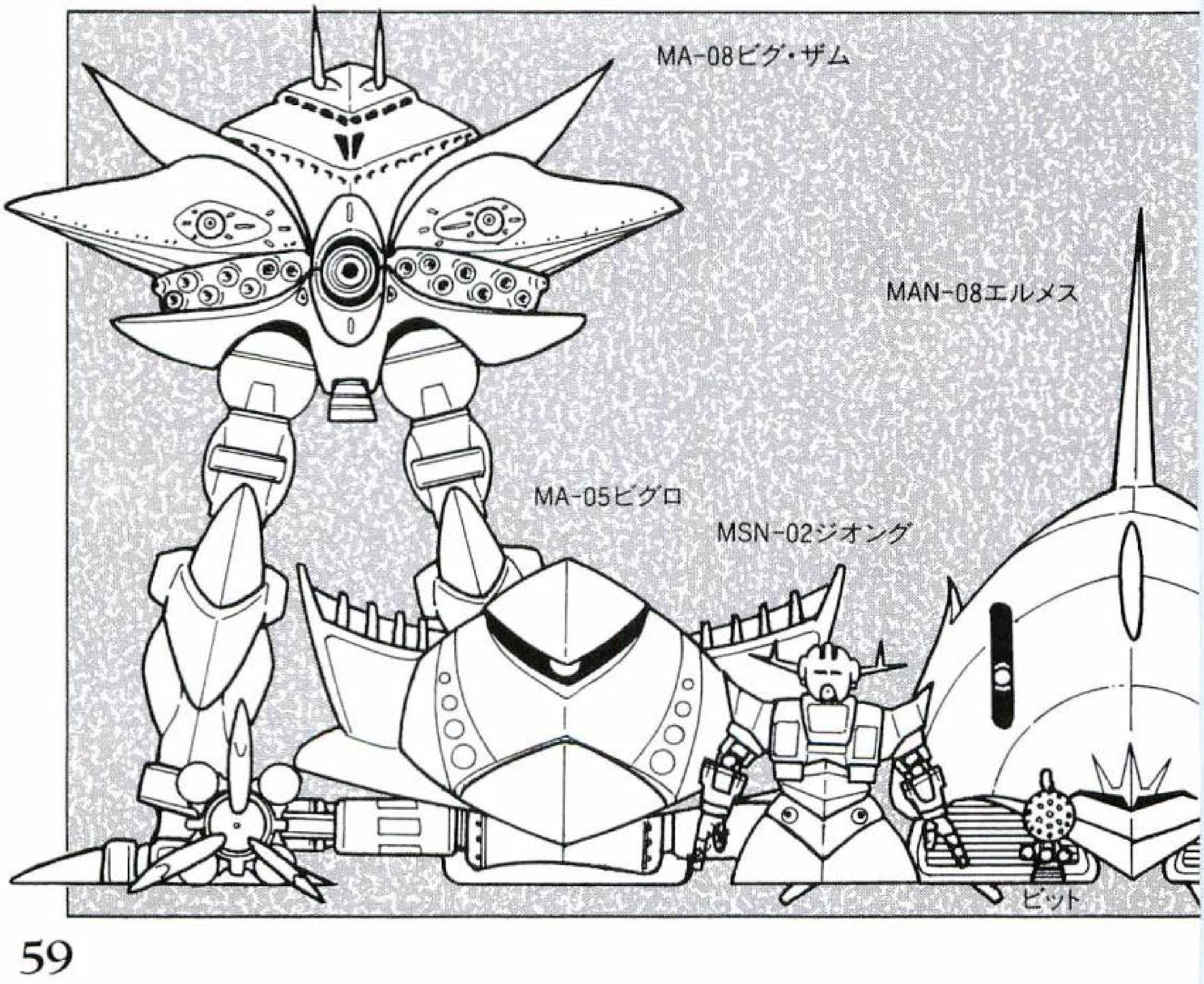
モビルアーマー対比図



MS・MA性能比較

愛　称	型式番号	全　高 (m)	頭頂高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレータ出力 (kw)
グラブロ	MAM-07	26.1	40.2	324.1	793.7	11,000
ビグロ	MA-05	23.6	45.5	125.5	229.8	17,800
ビグ・ザム	MA-08	59.6	——	1,021.2	1,936.0	140,000
ブラウ・ブロ	MAN-03	62.4	60.2	1,735.3	2,602.6	74,000
エルメス	MAN-08	47.7	85.4	163.7	291.8	14,200
ジオング	MSN-02	17.3	——	151.2	231.9	9,400

が高性能といえる。
6、ジェネレータ出力／核融合炉の最大発電力。
7、スラスター総推力／推進力の最大値。ただし、値が大きいからといって優秀とはいえない。第2期生産型のMS、（ザクII、リック・ディアス、ゲルグの改修型）は最大値が旧型の倍近いが、CMP（戦闘最大推力）時間は半分である。
8、センサー有効半径／メインカメラの索敵限界距離を示す。大気圏内では極端に低下している。
9、陸上（水中）最高速度／わざわざ解説の必要もないが、Kはノットのこと。ゴックの7.5ノットは時速138・9キロのこと。
武装／装備可能な武器のこと。専用武器が多い。



MS【MS用語辞典②】

シールド～ヒートロッド

シールド【shield】 この場合はMS用の盾をさす。原始的なようだが、パイロットの熟練度によっては効果的な防御装備となる。装甲が厚い（＝防御力が高い）MSは装備しない。

ジェットパック【jet pack】 水陸両用MSであるMSM－03CとMSM－07Eに装備されている離水および滑空用の補助推進器。化学燃料式ロケットで使用後切り離される。

スパイクアーマー【spike armmer】 公国軍製MSに多いトゲ付きのショルダーアーマーのこと。体当りで敵の装甲を破壊する格闘戦用の装備。

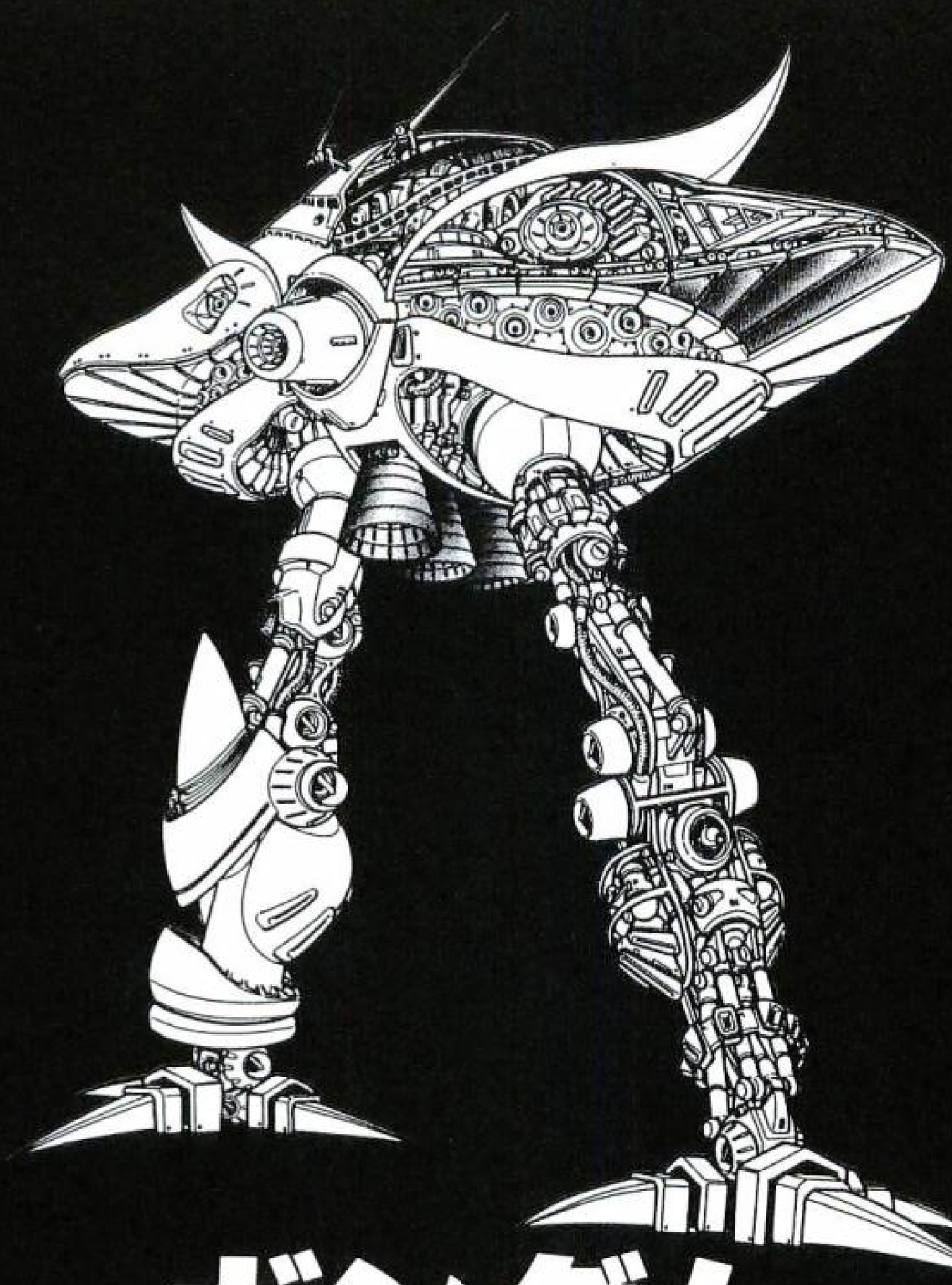
耐熱フィールド【heatproof field】 RX－78だけが装備する大気圏突入時の摩擦熱をエアフィールドによって遮断する装置。バリュートの原理と同じである。ただし、熱の遮断は完全ではなく、同時に機体冷却が必要だ。

熱核推進システム【thermonuclear react thruster system】 MSや各種艦艇に用いられる推進システム。核融合炉（同）熱核反応炉【thermonulear reactor】の熱エネルギーを利用して推力を得る。宇宙用の熱核ロケット、大気圏内用の熱核ジェット、水中用の熱核水流ジェットといった3方式がある。熱核推進のメリットは従来のシステムと比較して大推力が得られ、かつ推進剤の消費量を抑えられるという点にある。汎用（宇宙戦用）MSは、MS－R09以降化学燃料ロケット方式からこのシステムに転換している。

バルカン【vulcan】 MSや戦闘機が装備する機関砲のこと。単銃身だが複数の薬室を持ち、回転する薬室内に弾頭と液体炸薬が別々に送り込まれ、発射される。MSの場合60㎜口径が一般的。RX－78は装弾数が600発と少なく1分弱の連射で撃ちつくしてしまう。対MS戦用火器としては威力も弱く、命中精度は低い。近接防御あるいは索制用と見るべきだろう。

ヒートホーク【Heat hawk】 MS－06用の格闘戦用装備。刃を高熱化させ、敵を切断する。同様の兵器としてMS－07用のヒートサーベル、MS－09用のヒート剣などがある。

ヒートロッド【Heat rod】 MS－07用の格闘戦用装備。通常は右腕内に収納されている。最長時で17・5mまで伸びて、敵に高圧電流による衝撃を与える。



ガンダム オフィシャル レポート

GUNDAM Ofticial Report

●〝ガンダム・ワールド〟にはさまざまなSF用語・軍事用語が続出している。また、TVや劇場のスクリーンには出てはいないが、歴史上の事実として存在する事柄も多くある。このコーナーでは、〝ガンダム〟を深く理解できるように分野別に解説する。

Illustration by Hideki Hoshino.

ガンダム・オフィシャル・レポート.1

歴史

History

U.C.0001~0080

宇宙時代

人類は宇宙移民開始と共に宇宙世紀（ユニバーサルセンチュリー）に移行した。

すでに地球の総人口は90億を突破し、50年後には110億に達すると予測されていた。しかも地球は大気汚染と化石燃料の長年に渡る消費により砂漠化が進行し、近い将来地球の生態系は熱死するという結論がでていた。これを防止するには人類の少なくとも9割を宇宙へ送り出すしかなかった。

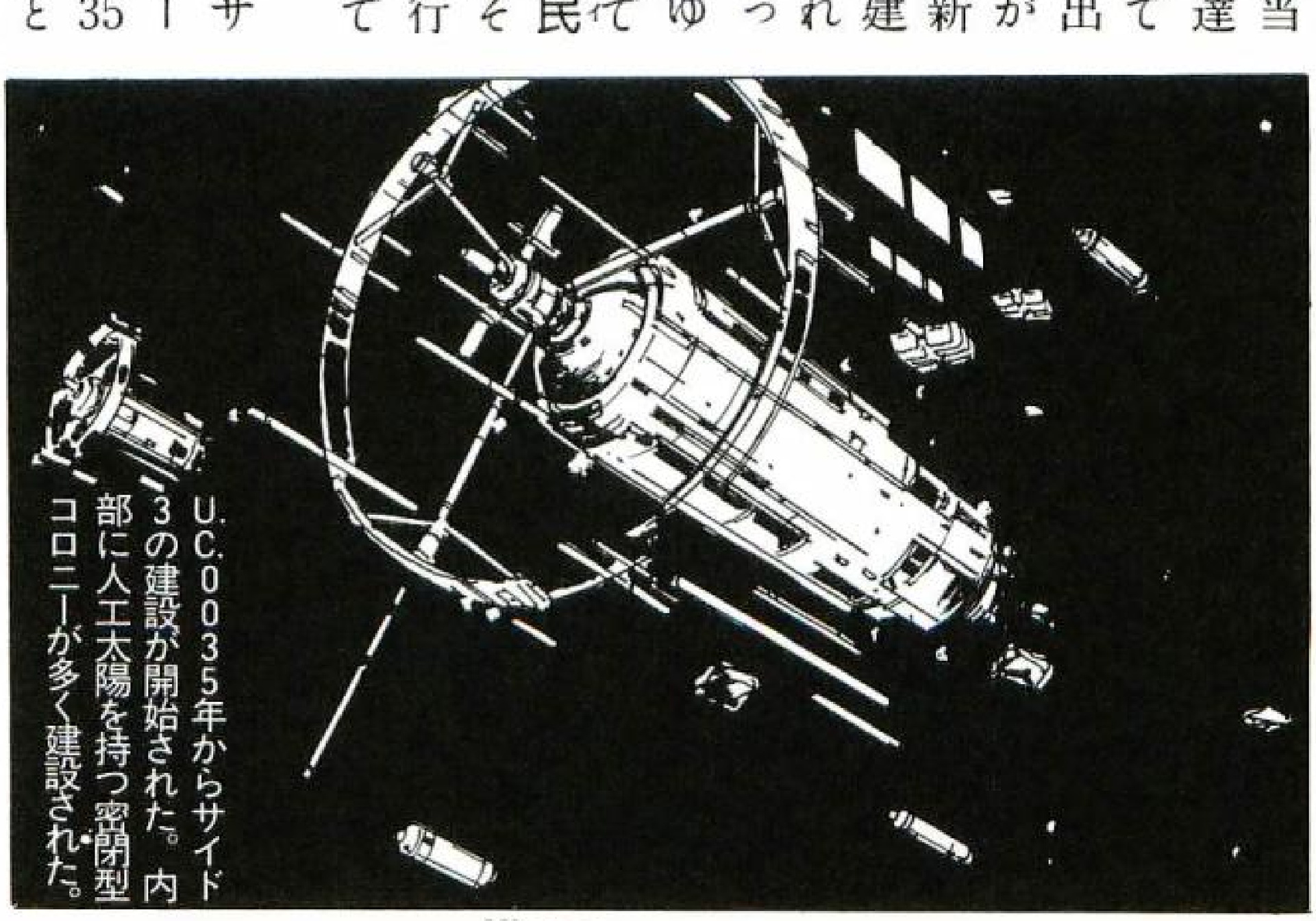
方法が残されていなかった。

宇宙植民地の建設がキリスペースコロニー

ト歴21世紀後半から開始されU.C.0050年までに20余りの円筒型人工天体が建造され、90億人が移住を完了した。また、月面にも多くの恒久都市が築かれ、約10億人が居住するようになった。

だが、計画当初の目標数が達成された時点で地球から送り出される移民者が急速に減り、新たなコロニー建設も中断された。地球に残った人々はいわゆるエリート上流階級層であり、宇宙移民者（ドム）から見ればそれは、裏切り行為以外の何物でもなかった。

この頃からサンバーをつけイド（コロニーに地球を聖地の行政単位。35～40基を1群として建設順にナンバーをつける）の国家主義という考えが合体し、コントリズムという思想が生まれ、急速にスペースノイド間に広まっていった。



U.C.0035年からサイド3の建設が開始された。内部に人工太陽を持つ密閉型コロニーが多く建設された。

イラスト／福地 仁

歴　史

ガンダム年表 I　A.D. 1961～U.C. 0078

年・月・日	事　　柄
AC1961・10・4	人類初の人工衛星、打ち上げに成功(ソ連)
1969・7・20	アポロ11号、月面着陸に成功(アメリカ)
1969	アメリカのプリンストン大学教授、G・K・オニール博士らのグループが、スペースコロニー構想を発表
1993	世界各地で局地戦争多発。第3次世界大戦の危機感が強まる。
1999	地球連邦政府樹立。人類宇宙移民計画発表。
2005	太陽発電衛星第1号機の打ち上げに成功。
2009	地球連邦軍設立。
2026	木星エネルギー船団、月軌道上より発進。
2045	第1号コロニーの建造が開始される。
UC0001	宇宙移民開始をもって宇宙世紀に移行。地球総人口、90億突破。
0027	初の月面恒久都市、フォンブラウン市が完成。
0040	総人口の40%(約50億人)が、宇宙への移民を完了。
0045	小惑星ユノー(後のルナII)、月軌道上に定着。サイド3にミノフスキー物理学会設立。
0050	総人口は110億に達し、そのうち90億が宇宙に移民。
0062	ジオン・ズム・ダイクン、サイド3独立宣言。ジオン共和国樹立。サイド3国防隊発足。
0063	連邦政府、サイド3に対して経済圧力を加える。
0064	連邦軍、60年代軍備増強計画発動(特に宇宙艦隊の統制に力を注ぐ)。ルナIIの軍事基地化が行なわれる。
0067	ジオン国防隊、国軍へ昇格
0068	ジオン・ズム・ダイクン死亡(暗殺の可能性あり)。次期首相はデギン・ソド・ザビ。
0069・8・15	ジオン公国宣言。デギン・ソド・ザビ、初代公王に。ザビ家独裁体制のため、ジオン派は追放。
0070・3	公国軍、ミノフスキー粒子散布による電波妨害などの特殊効果～ミノフスキー効果～確証実験に成功。
0070・5	公国軍、メガ粒子砲を完成。
・9	連邦軍、70年代軍備増強計画によるサラミス、マゼラン級の新型宇宙鑑艇就役。
・12	サイド7建設のため、ルナIIを月軌道の反対側へ移動。
0071	ジオン公国軍兵器開発局、ミノフスキー粒子散布における新型兵器の開発に着手。ミノフスキー物理学応用による小型核融合炉の1号機完成。
0072	ジオン公国、アステロイドベルトに小惑星基地アクシズを建設。目的は鉱物資源の採掘と地球圏に宇宙要塞となる小惑星を移動させるため。
0073	公国軍、新型兵器1号機完成。MS-01の形式番号と、モビルスーツ(MS)という呼称を与えられる。
0074・2	公国軍、ミノフスキー型核融合炉搭載のMS-05ザクIの試作型ロールアウト。
0075・5	公国軍、MS-05ザクIの実戦型ロールアウト。
7	公国軍、ムサイ級軽巡洋艦の一番艦就役。
0076・12	公国軍、地球侵攻作戦を前提とした局地戦用MSの開発に着手。
0078・1	公国軍、ザクの強化型、MS-06ザクIIの量産を開始する。
5	サイド7第1号コロニー(グリーンノア)、未完成ながら移民が開始される。
10	ジオン公国、国家総動員令発令

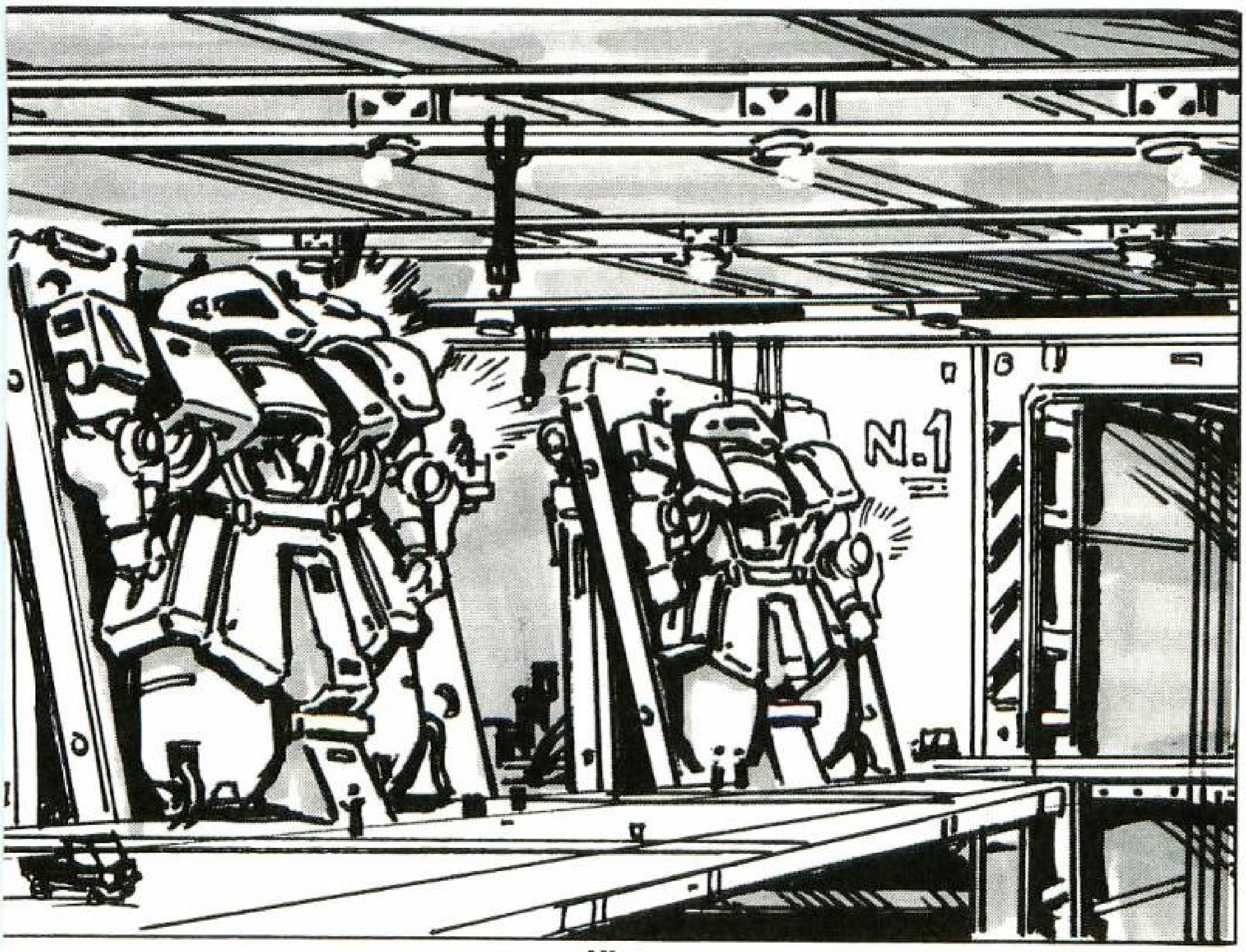
独立運動

コントリズムの提唱者、ジオン・ズム・ダイクンは、0052年にサイド3に渡り自らの理論の実践を開始した。そして、0062年サイド3は独立を宣言。ジオン共和国を樹立した。同時に他のサイドにおいても地球連邦政府からの離反の動きが活発化した。

連邦政府はただちにサイド3に対して経済圧力を加え、さらに連邦宇宙軍の軍備増強、ルナIIの軍事基地化などの武力圧力も加え始めた。サイド3も独立宣言時に設立した国防隊を国軍に昇格させ、また、月の企業に協力を取り付けるなど水面下の政治・経済的攻勢に転じた。だが、初代首相であるジオン・ダイクンはあくまでも外交によって共和国を承認させ、連邦議会の参政権を得、最終的にはスペースノイド全体の自治権を獲得しようとしていた。

0068年、突然ジオン・ダイクンが病死する。次期首相にはデギン・ソド・ザビが就任した。この政権交代劇は暗殺説も出たが、真相は判らずじまいであった。しかし、デギン・ザビはジオン派の政治家を追放してザビ家による独裁体制に乗り出し、翌年には公国制へと移行させた。さらに武力による独立を求める、これまでとは180度方向を転じた軍事国家建設を開始した。

また、連邦もジオン・ダイクンの死の混乱に乗じ、政治的ゆさぶりをかけ、サイド3の孤立化を計った。両国の関



歴　史

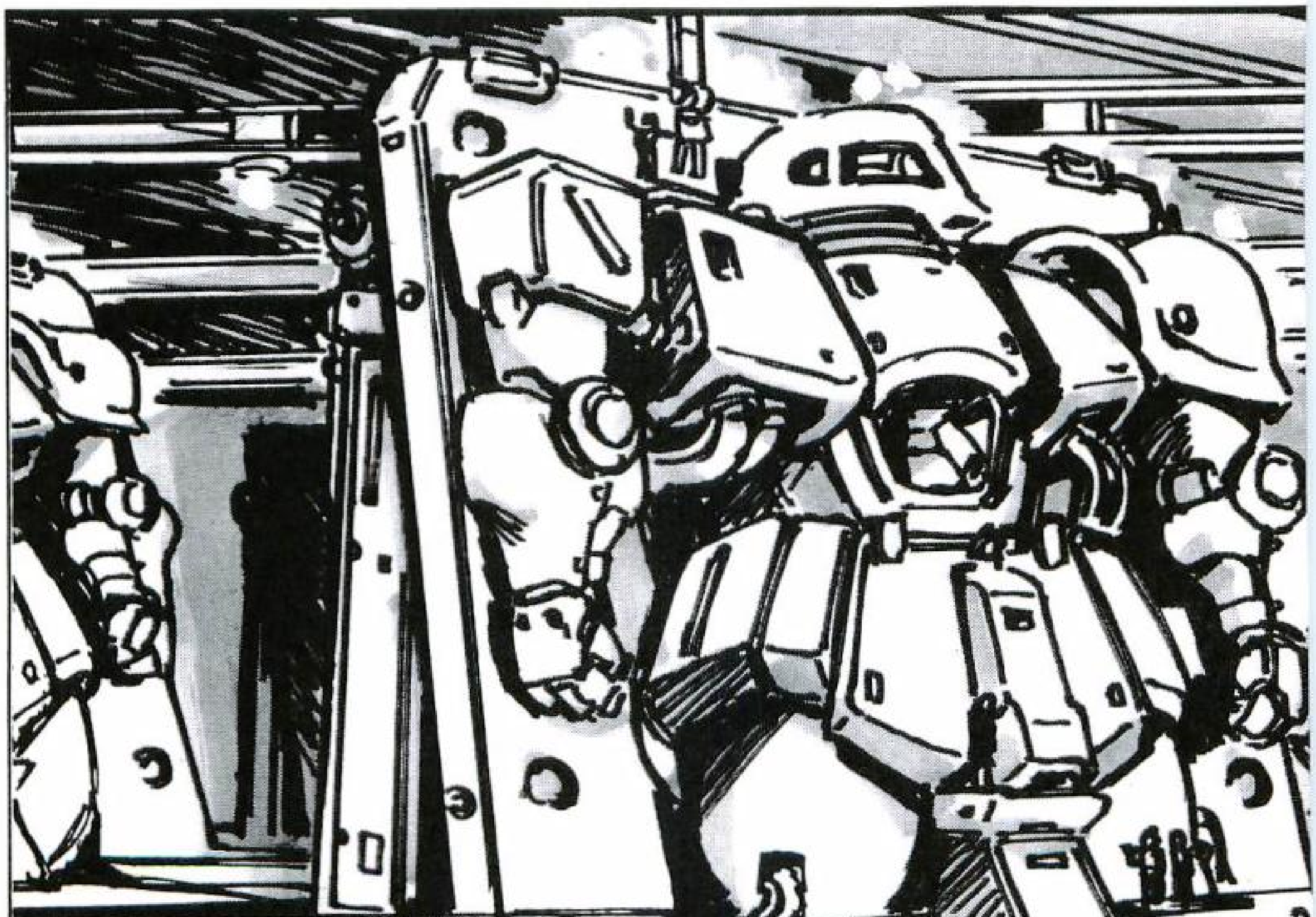


人類史上最大の愚挙と呼ばれる0079年の〝コロニー落し〟。オーストラリア大陸の地形を変え、23億人以上の被害者を生み出した。

0075年5月から翌年2月までに史上初の量産MSザクIの大量生産が続けられた。この兵器こそが国力で劣るジオンを開戦に踏み切らせた〝力〟そのものであった。

係は急速に悪化し軍事的衝突はもはや避けられない情勢であった。だが、連邦側は国力の劣るジオン公国が開戦に踏み切るとは思わず、他のサイドが呼応しないようにコロニー警備を命目とした駐留艦隊を各サイドに配備した。

だが、ジオン公国は、秘密兵器であるミノフスキー粒子（モビルスーツ）とMS（モビルスーツ）の開発に総力をかけていたのだった。



大戦勃発

ザビ家の長男、ギレン・ザビは老いた父親に代わり実権を掌握し、総師の地位を得た。彼はジオン・ダイクンのコロニーのスペースノトリズムを歪め、スペースノイドによる地球管理の正統性を説き、国民に選民思想を植えつけた。彼にとっては連邦に荷担する他のサイドも敵であった。

0079年1月3日、ジオン公国は、連邦政府に対し宣戦を布告し、同時に待機させていた宇宙艦隊にサイド1、2、4の攻撃を命じた。この一週間戦争において、公国軍はMSを投入し、BC兵器や熱核兵器によってコロニー住民を大量虐殺した。さらに太陽発電衛星を破壊し、地球への送電を断った。加えてサイド2のコロニーを熱核ロケットで本来の軌道から引き離し、地球に落下させた。このわずか1週間の戦闘で総人口の5割に当たる55億人が死亡、地球圏の居住システムの基盤がいかにもろいものなのかを全人類に知らしめた。

同年1月15日、ルウム戦役によって公国軍は連邦軍の宇宙艦隊を壊滅させ、戦場となったサイド5の住民を虐殺した。

残ったサイド6は1月17日に中立宣言を行い、難を逃れた（開戦以前にジオン公国府との間に密約が結ばれていたといわれる）。また、月面都市群は元よりジオン公国に好意的で直接的に参戦はしなかったものの物資面で協力した。

同年1月31日、南極連邦基地において、ジオン公国は初めて対等の立場で連邦と同じテーブルについた。名目は講和会議であったが、事実上ジオン公国の降伏勧告であった。会議におもむいたギレン・ザビ総師は、連邦政府の高官に対し「必要ならばコロニーをいくつでも落とす」とおどしをかけた。だが、会議は物別れに終り、公国軍は2月7日より地球侵攻作戦を開始したのである。

0079年1月3日。連邦軍の南極基地で開戦後初めて今次大戦に関する条約が締結された。当初、公国軍側が軍事的優勢を背景に連邦軍の降服をせまるが、ルウム戦役のおり捕虜となった連邦軍のレビル将軍が希跡的に脱出生還し、有名な〝ジオン に兵なし〟という連邦軍の徹底抗戦を訴える演説を行ったことで、両軍の兵器使用制限などをとり決めた軍事条約にとどまった。



歴　史

ガンダム年表２　U.C. 0079～ 0080

年・月・日	事　柄
0079・1・3	一年戦争勃発。ジオン公国、地球連邦政府に対し独立戦争をしかける。 宣戦布告と同時に、サイド1、2、4へ奇襲攻撃。BC兵器と熱核兵器の無差別投入、さらにコロニーを地表に落下させ、大規模な気象変動をもたらす。 （1・3～1・10までの戦闘を一週間戦争と呼ぶ。この期間の戦闘で総人口の5割に相当する55億人が死亡）
1・15	ルウム戦役。連邦軍宇宙艦隊の敗北に終わる。公国軍は艦隊司令のレビル将軍を捕虜とする。サイド5 壊滅。
1・17	サイド6 中立宣言。
1・31	南極条約締結。
2・7	公国軍、地球侵攻作戦開始。北米、中米、東アジア、ヨーロッパの各都市に衛星軌道上から直接降下部隊を送り込む。 （2～3月の期間に公国軍は前大陸の3分の2を勢力下に置く。だが、両軍ともに戦力衰退。戦局は膠着状態に陥る）
3	公国軍、占領した地域の施設を使い戦力を増強。
4	連邦軍、新型ＭＳと専用強襲母艦の開発・建造を目的としたＶ作戦、失われた宇宙鑑艇の量産を目的としたビンソン計画を同時に発動させる。
6	公国軍、宇宙要塞ア・バオア・クー、ソロモン、月面基地グラナダを結んだ本土防衛ライン完成。フラナガン機関の設立。
7	連邦軍、ビーム兵器の小型化に成功。連邦軍の新造艦ホワイトベース（ＷＢ）進宙。RX-78ガンダム試作第１号機、サイド７内の開発工場でロールアウト。
8	連邦軍製試作型ＭＳ、サイド７で最終テスト開始。北米オーガスタ連邦軍基地において、RX-78-NT-1の開発が開始。
9・18	公国軍の特務部隊、サイド７を強襲。コロニー内部で史上初のMS同士の戦闘が行なわれる。WB、破壊を免れたMSを収容し南米のジャブロー基地に向けて出港。
9・20	ニューヨーク市において地球攻撃軍司令官ガルマ・ザビ大佐、戦死。
9・22	ギレン・ザビ、全地球規模の大演説を展開。
10	連邦軍の各工場でMSの量産体制が始まる。公国軍、連邦軍のMSに対抗するための新型機を次々に実戦配備。 MS用ビームライフル、公国軍側でも実用化に成功。 フラナガン機関、サイココミュニケーターシステムの試作型を開発。
11・7	連邦軍、オデッサ作戦始動。3日間の戦いの末、連邦軍の勝利に終わる。これによって地球上のミリタリーバランスは一変する。 （連邦軍、11月後半から量産型MS、RGB-79ジムの実戦配備を開始する）
11・30	公国軍、ジャブローを攻撃するが失敗に終わる。これを機に、ジオン軍地上戦力の崩壊に拍車がかかる。
12・15	連邦軍、アフリカ、北米で公国軍掃討戦を展開。
12・21	公国軍、連邦軍北極基地襲撃。
12・27	連邦軍、星１号作戦発動。ソロモン攻略。公国軍敗退。宇宙攻撃軍司令官ドズル・ザビ中将戦死。
12・30	デギン公王、自国のソーラ・レイ・システムによって死亡。連邦軍はレビル艦隊を失う。
12・31	ア・バオア・クー攻防戦。要塞内において、ギレン・ザビ総帥、キシリア・ザビ少将ともに戦死。連邦軍の勝利に終わる。
0080・1・1	一年戦争終結。同日、月面のグラナダにて終戦協定が結ばれる。

ガンダム・オフィシャル・レポート、2

通常兵器

Weapon

U.C.0079~0080

連邦軍の宇宙戦力

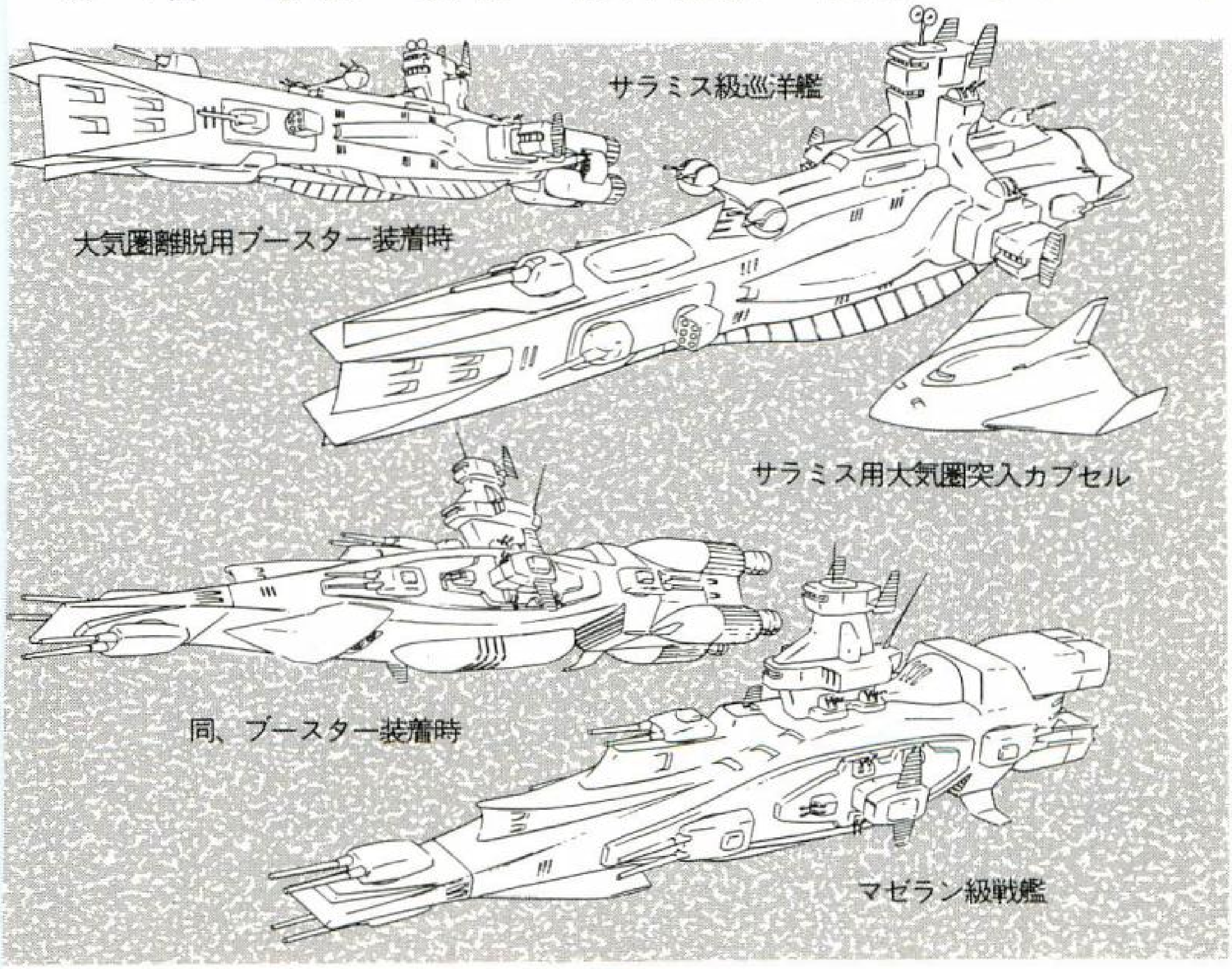
地球連邦軍は0059年にコロニー建設によって拡大した地球圏の治安維持を目的とした宇宙軍を設立した。

60年代に建造された初期の軍用艦艇は、プラズマ推進を巡航用に、化学燃料ロケットを戦闘機動用にした併用推進方式を採用していた。兵装はミサイルが中心で、他に対空用として機銃を装備する程度であった。

建造は宇宙空間にある通称浮きドックで行われ、地球大気圏突入・離脱能力はなかった。艦載機は小型のランチ程度で戦闘機などは搭載されなかった。

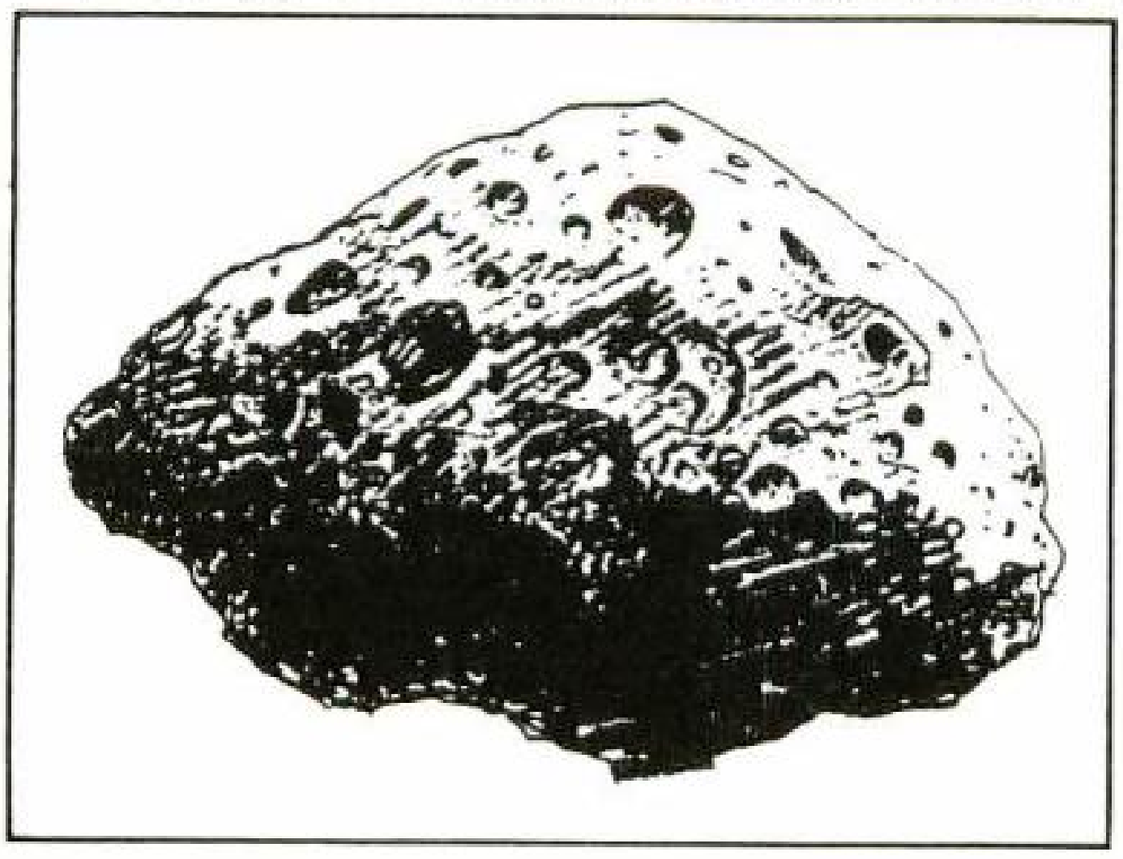
70年代に入り、軍用宇宙艦艇は新技術の導入が行われ、全面的に刷新された。すなわ

連邦軍 宇宙戦力



通常兵器

一年戦争中、唯一の連邦軍宇宙基地だった〝ルナⅡ〟



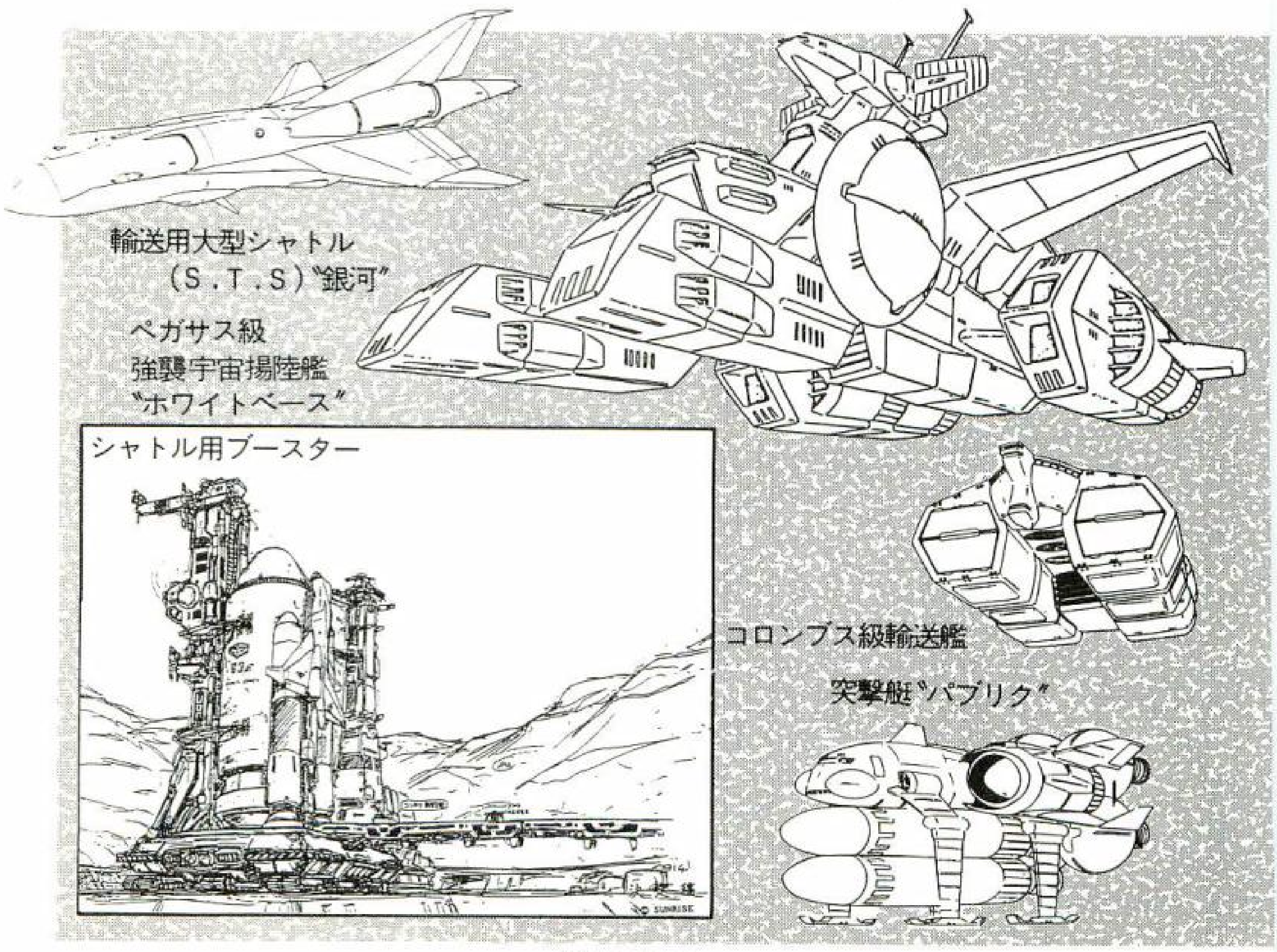
ちミノフスキー物理学応用による熱核ロケット推進と、メガ粒子砲である。熱核ロケット推進は、プラズマ推進に比べ高い推力を持ち、化学燃料ロケットに比べて推進剤の消費量が少なくてすんだ。また、メガ粒子砲は、従来のレーザー砲に比べてエネルギーロスも廃熱も少なく冷却効率が悪い宇宙での運用に適していた。

しかも、ミサイル防御用にアランクス・システム（コンピュータ制御によってミサイルを機銃で迎撃するシステム）が導入されていたため、主砲として採用が決定した。

こうして建造されたのが、サラミス級巡洋艦とマゼラン級戦艦であった。両艦は無補給で各サイドを回るだけの巡航能力を有していた。

だが、一年戦争が始まり史上最大の艦艇数では公国軍のウム戦役の際、新造艦サラミス、マゼランを擁する連邦軍宇宙艦隊は、公国軍に大敗を喫した。艦隊戦といわれるルの戦力を有していたものの、ミノフスキー粒子散布下の戦術に対応できず、公国軍のMSを中心とした機動戦に敗れたのだ。

このルウム戦役で連邦軍の

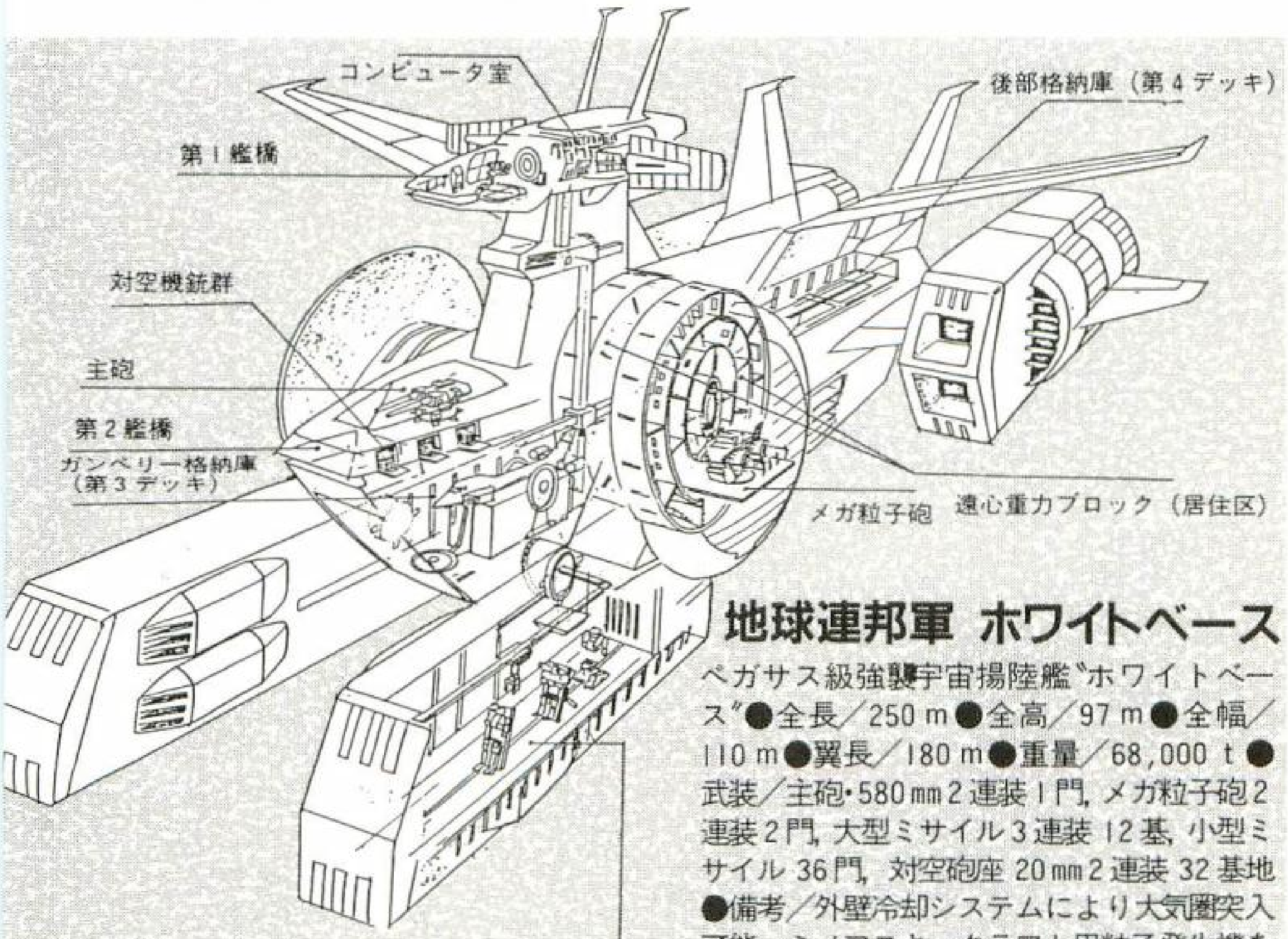


宇宙戦力は激減し、ルナIIの連邦軍基地を守護する艦隊のみとなった。

0079年4月、連邦軍はMS開発とそれを運用する新造艦を建造するV作戦と、失われた宇宙艦艇を再建造するビンソン計画を発動させた。両計画ともに公国軍のMSを中心とした機動戦に対抗したもので、特にV作戦で開発されたペガサス級は、これまでの艦艇とは一線を画す斬新な設計思想が導入されていた。

また、ビンソン計画では大艦巨砲主義の反省から、各種艦載機の開発が行われた。そのひとつがRGM-79ジムの支援機となったRB-79ボールである。この機体は宇宙作業用ポッドSP-WO3をベースに戦闘ポッドとして開発したもので、化学燃料ロケットを推進システムに採用し、180ミリ低反動砲を搭載していた。

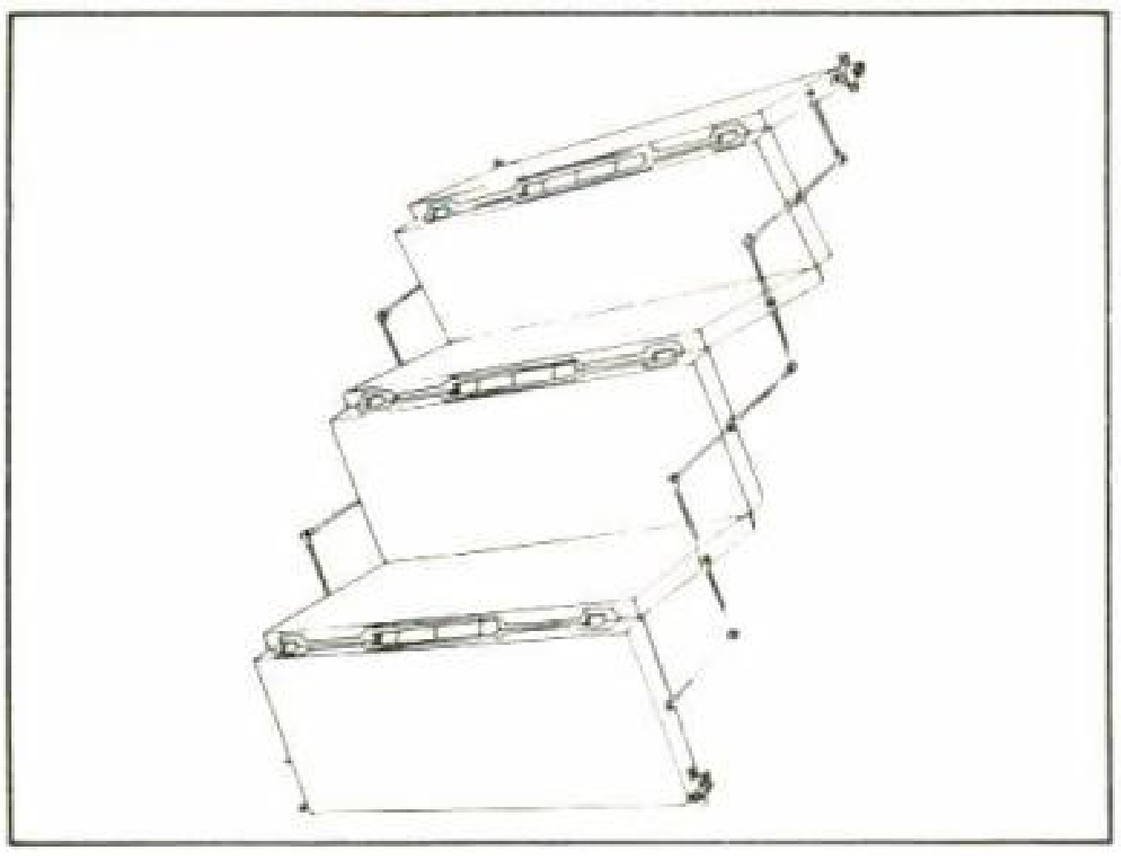
両計画は、ルナIIとジャブローの2つの基地で同時にスタートし、0079年12月にはレビル、ティアンム、ルナIIの3艦隊を再建した。もちろん、連邦軍製MSであるRGM-79と支援兵器RB-79を満載していた。さらに公国軍の2大宇宙要塞であるソロモンとア・バオア・クーを攻略するために2つの兵器を用意した。1つはビーム攪乱幕を形成する特殊ミサイルを4発搭載した突撃艇、パブリクである。もう1つはアポジモーターを装備した400万枚のミラーによって太陽光を集光するソーラーシステムである。このソーラ兵器は原始的であったが、ソロモンの



地球連邦軍 ホワイトベース

ペガサス級強襲宇宙揚陸艦〝ホワイトベース〟●全長／250m●全高／97m●全幅／110m●翼長／180m●重量／68,000t●武装／主砲・580mm2連装1門，メガ粒子砲2連装2門，大型ミサイル3連装12基，小型ミサイル36門，対空砲座20mm2連装32基地●備考／外壁冷却システムにより大気圏突入可能。ミノフスキークラフト用粒子発生機を2基搭載

連邦軍〝ソラーシステム〟用ミラー

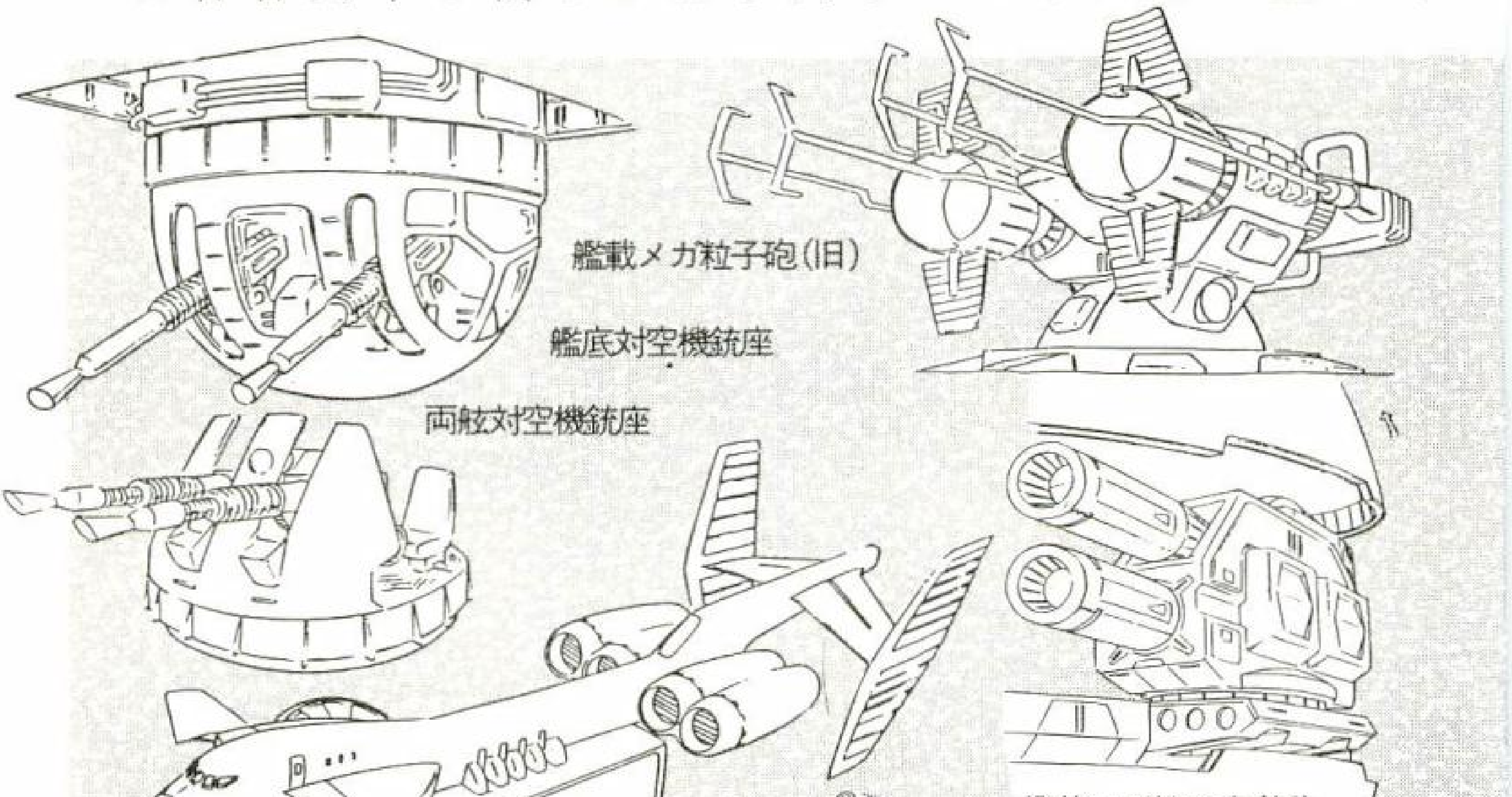


公国軍の衛星ミサイルに破壊され、ア・バオア・クー戦では投入できなかった。

●ホワイトベース

V作戦の一環として建造されたペガサス級強襲宇宙揚陸艦の1番艦。公国軍はその形状から「木馬」というコードネームをつけていた。

艦体は戦術・戦略に応じて武装・推進器を換装するという設計思想に基き、分離が可能であった。前足はMSデッキで発進カタパルトの他、整備用のベッドを備えていた。後足は熱核ロケット方式による主推進ユニットで、ミノフスキー・クラフトとの併用で大気圏離脱・突入能力がある。胴体には遠心重力ブロック、艦載機用デッキ、整備工場などがあり、主砲である火薬式2連装大型砲1門とメガ粒子砲2門が搭載されていた。翼は太陽電池板で、頭には艦橋がある。艦載機は大気圏内MS輸送機であるガンペリー1機と、移動用のランチ2隻、さらに汎用戦闘機コア・ファイターG機である。MSは最大3個小隊（各タイプ3機、合計9機）で、艦載機全てを合わせた総合戦力は機動大隊に匹敵した。



連邦軍の航空戦力

連邦軍の航空戦力の中核に
コア・ファイターがあった。
この戦闘機の歴史は、００５
０年代に始まる。当時は宇宙
への軍事拡張が始まり、空軍
体系も宇宙空間まで含むよう
になった。そのため、宇宙戦
闘機、高々度戦闘機の開発が
必要となり、最終的にはそれ
ら全てを含めた汎用戦闘機の
開発が行われることになる。

●ＴＩＮコッド（ティン）

防空用に開発された高々度
戦闘機で、００６２年に試作
機がロールアウトしている。
武装は２５ミリ機関砲４門に
空対空ミサイル２基を装備し
た。

●セイバーフィッシュ

００７１年に完成した汎用
戦闘機。宇宙では化学燃料ロ
ケットを、大気圏内ではジェ
ットエンジンを用い、さらに
高々度戦闘時にはブースター
としてロケットを使用する。
武装は２５ミリ機関砲を４
門、内装式３連装ミサイルラ
ンチャーを４基装備する。当
初はマゼラン級宇宙戦艦の艦
載機として開発されたが、宇
宙軍側が反発したため、高々
度戦闘機として用いられた。

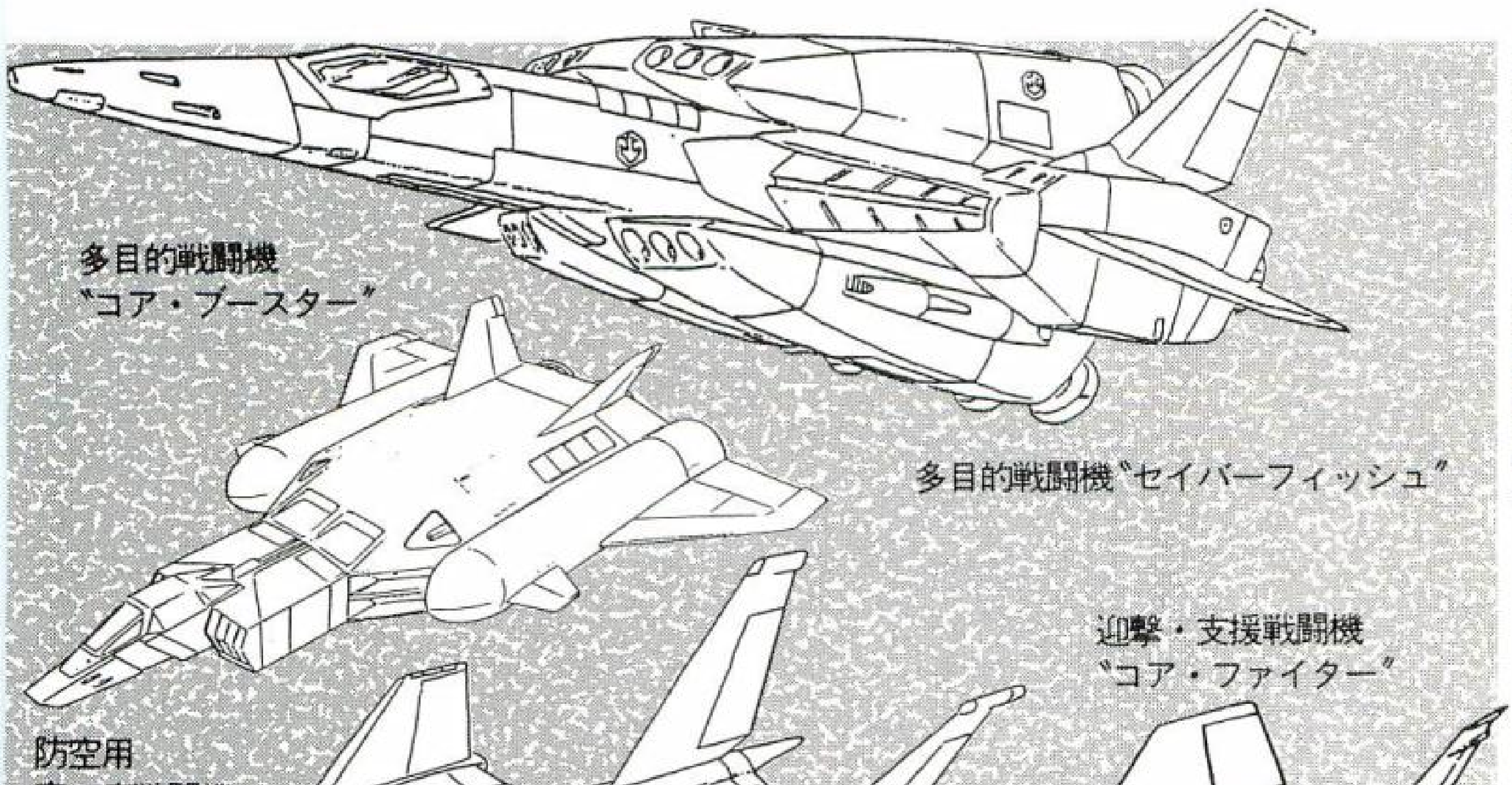
●トリアーエズ

空軍と宇宙軍初の共同開発
機。小型の汎用戦闘機で、宇
宙ではルナⅡやサイド駐留軍
に配備された。武装は２５ミ
リ機関砲２門と貧弱であった。

●コア・ファイター

一年戦争時に開発された高
性能汎用戦闘機。本来はＶ作
戦によるＭＳ開発にあたっ
てパイロット保護のため組み
こまれた脱出カプセルを、戦

連邦軍 航空戦力



闘機として運用できるように改修したものだ。この機体は軍の垣根を越えた特別編成スタッフにより開発が行われた。開発当初はRGM－79にもコア・ブロックシステムが採用される予定で、支援戦闘機として運用されるはずであったが、生産数の製造に回したため、生産性の問題から不採用になり、さらに工場をMS用になり、さらに工場をMSは少なかった。

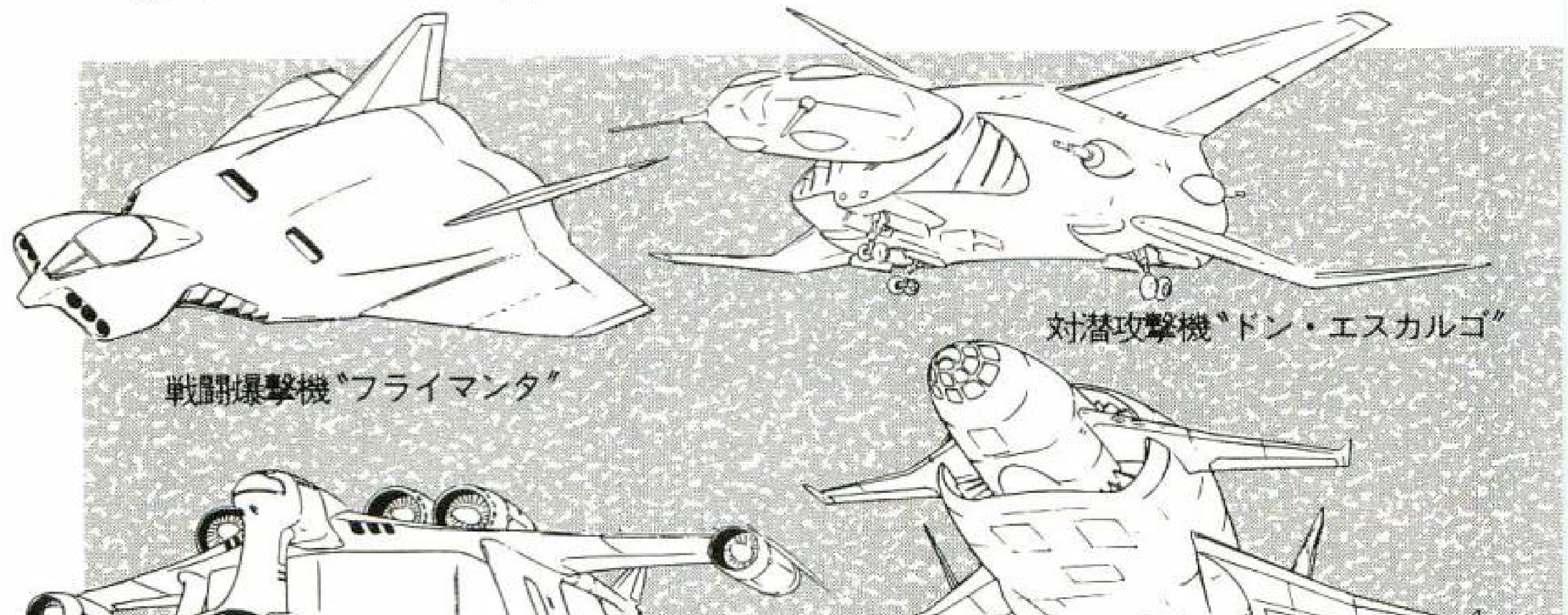
武装は25ミリ機関砲4門に内装式ミサイルランチャー2門と小型機としては重武装であった。また、ミノフスキー粒子散布下の使用に対応しており、コンピュータ他の電子回路には全て光伝達方式が採用されていた。

●Gファイター

RX－78のサポートシステムとして開発された汎用戦闘機。初めて核融合炉が搭載され熱核ロケット推進が導入された。機体を2ブロックに分割し、RX－78をはさみこんで輸送するシステムであった。また、RX－78のブロック機構を応用して、Gカイ（重戦闘機）、Gブル（機動戦車）といった2種類の兵器に分けることもできた。ビーム砲が搭載されていたが、システムとしての無駄も多く、量産戦闘力は高かったためか採用されていない。

●コア・ブースター

Gファイターの運用・設計データを元に開発されたコア・ファイター用のブースター。熱核ロケットが採用され、メガ粒子砲が2門搭載されている。この機体の完成によって真の汎用戦闘機と呼べる兵器が生まれたといえる。



連邦軍の陸上・海上戦力

連邦軍の陸上戦力は、公国軍のMSに対抗できなかった。頼みの航空戦力が、ミノフスキー粒子散布下の影響でその威力を封じられ、誘導兵器も近距離用有線誘導型しかできなかった。

●ビッグトレー

一年戦争中に開発された陸戦艇。陸上戦艦とも呼ばれ、熱核ホバーで水上も移動可能だった。砲は火薬式で、その長大な射程によりMSの接近を許さなかった。艦橋には作戦司令部が置かれている。

●61式戦車（M.B.T.）

150ミリ2連装砲を備えた連邦軍の主力戦車。MSに対しては火力が不充分で、オデッサ作戦では残存機は2割以下であった。

●60ミリバルカン重装甲車

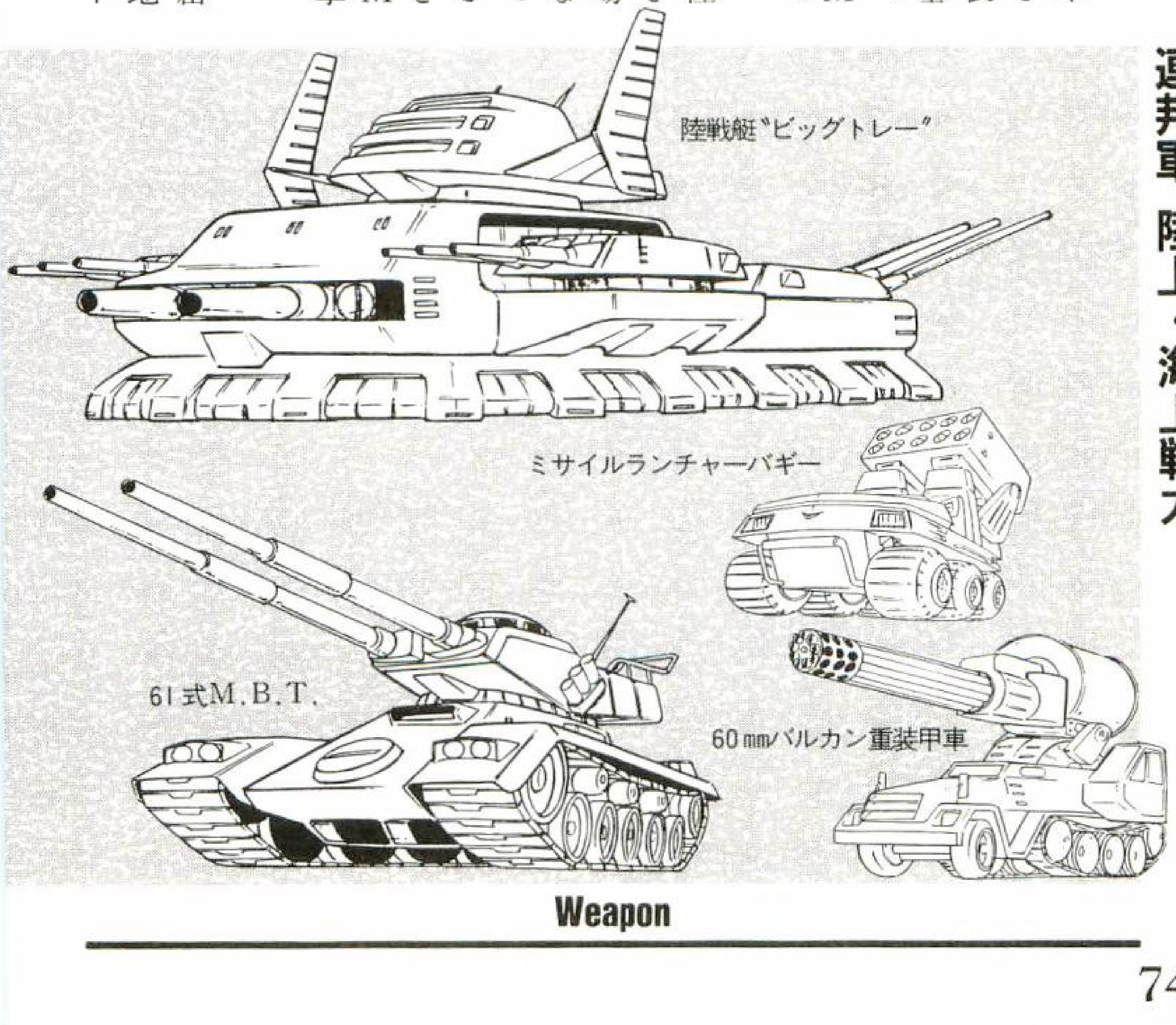
対空用に開発された車両であるが、MS-06ザクの装甲を破壊する威力があり、基地防衛用に配備された。だが、公国軍の重装甲の水陸両用MSに対しては効果がなかった。

●ミサイルカー

陸上用とコロニー用の2種類がある。前者の方が大型で射程も長い。コロニー用の場合、排ガスで大気を汚染しないようにバッテリー駆動のモーター車であり、車体も小さく搭載火器も小型である。どちらにしろ、機動力が高いMSに対しては、たいした攻撃力を持たない。

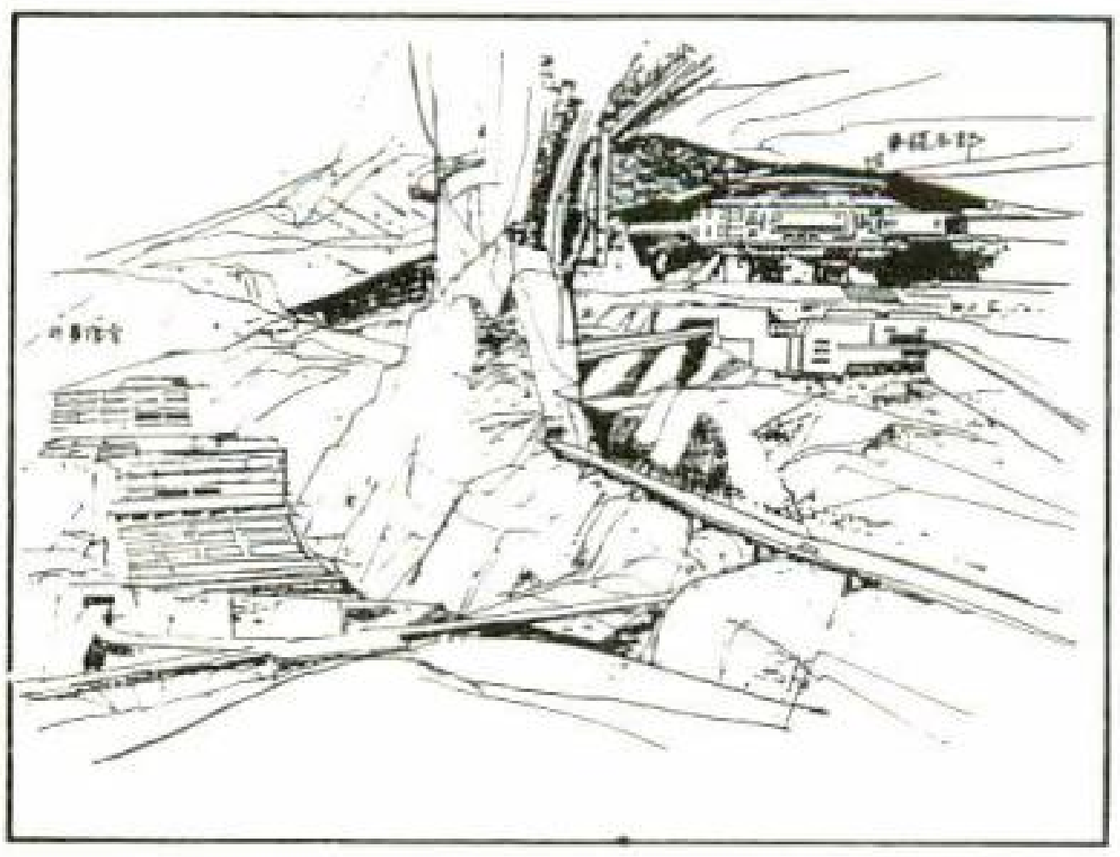
●ファンファン

南米アマゾン川の地下洞窟に建設されたジャブロー基地の防衛用に開発されたホバー



通常兵器

地球連邦軍総司令本部〝ジャブロー〟

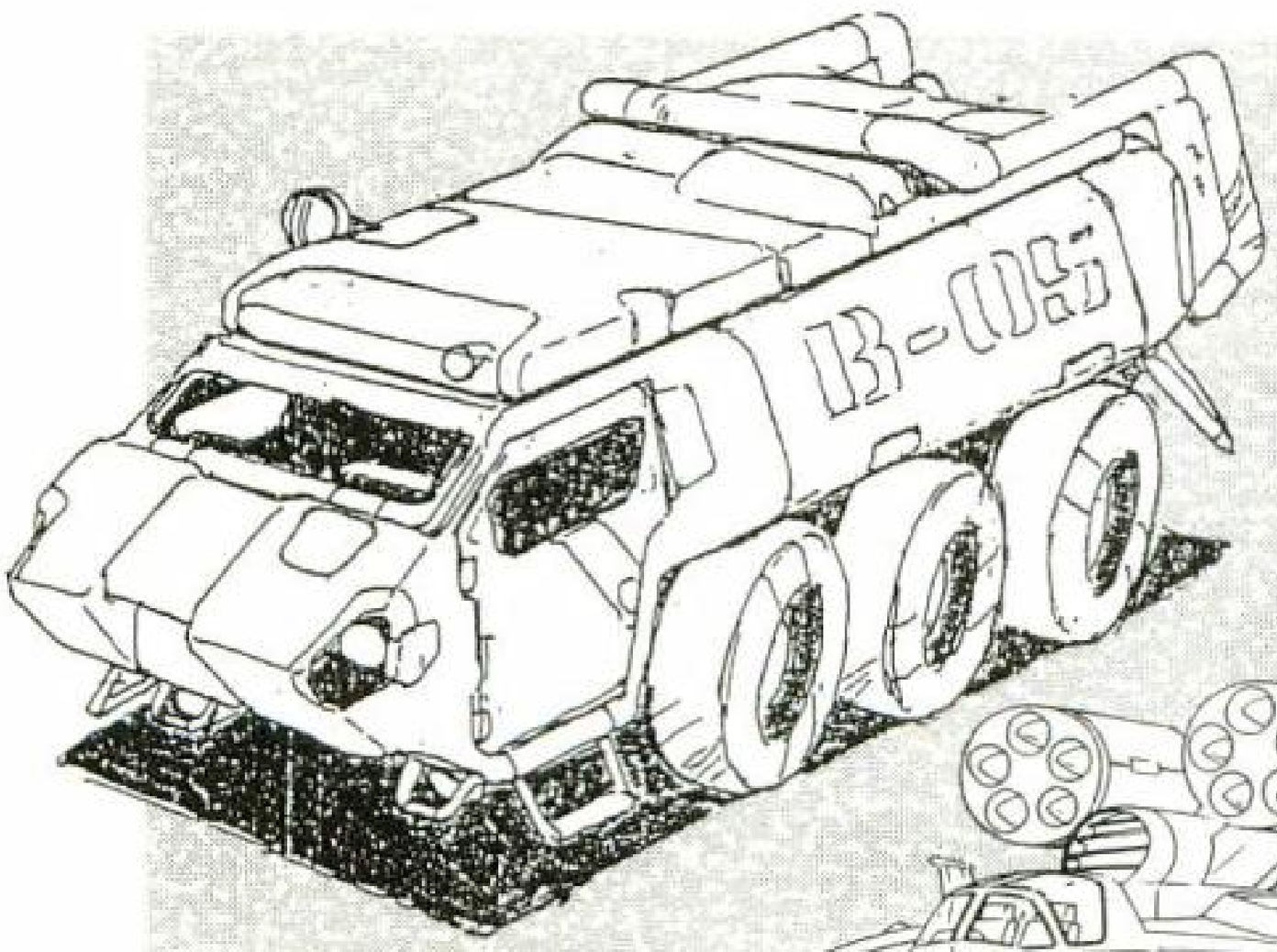


へり。基地内に潜入した敵を攻撃する。戦車など戦闘車両より、移動力が高く、武装として4連装ミサイルランチャー2基が装備されていた。ジャブロー内ではミノフスキー粒子が散布されていないので、誘導兵器が使用できた。

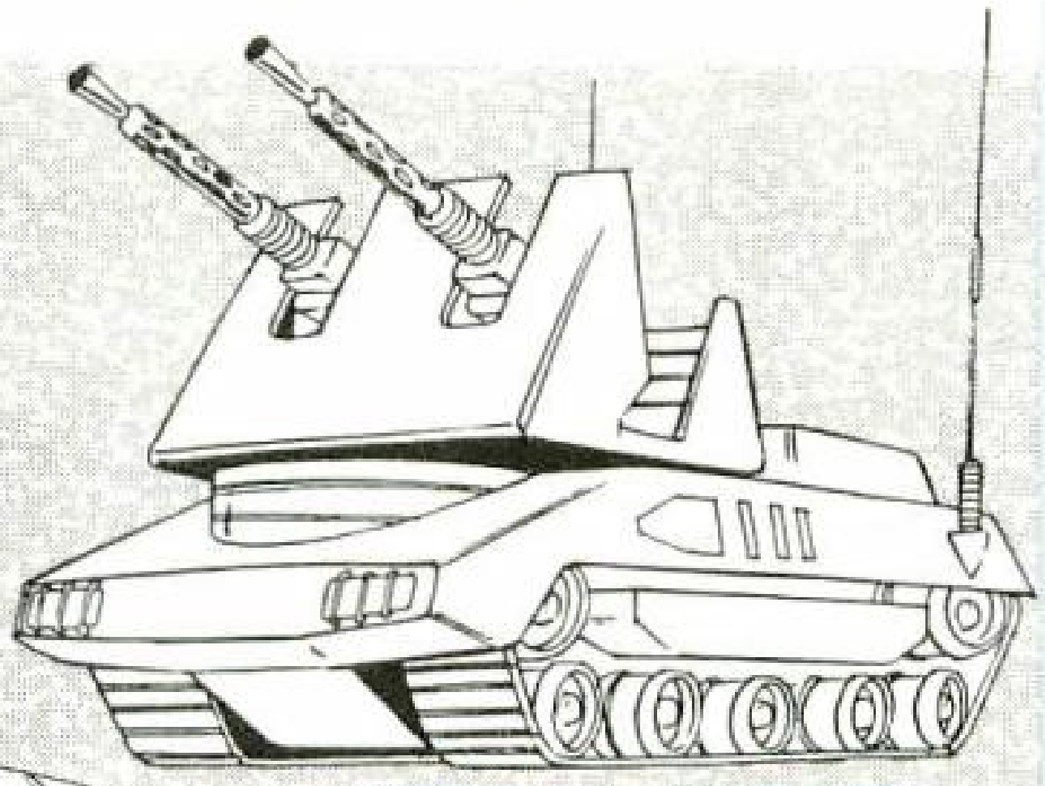
☆

海上戦力は大戦当初、連邦軍の方が上だった。コロニーには海がなく、有効な兵器を開発することは困難だったからだ。しかし、公国軍はキャリホルニアベースを無傷で制圧し、連邦軍の次期主力潜水艦であったユーコン級とマドアングラー級をおさえ、さらに水陸両用MSを開発し投入したことで、その立場はほぼ互角とされてしまった。

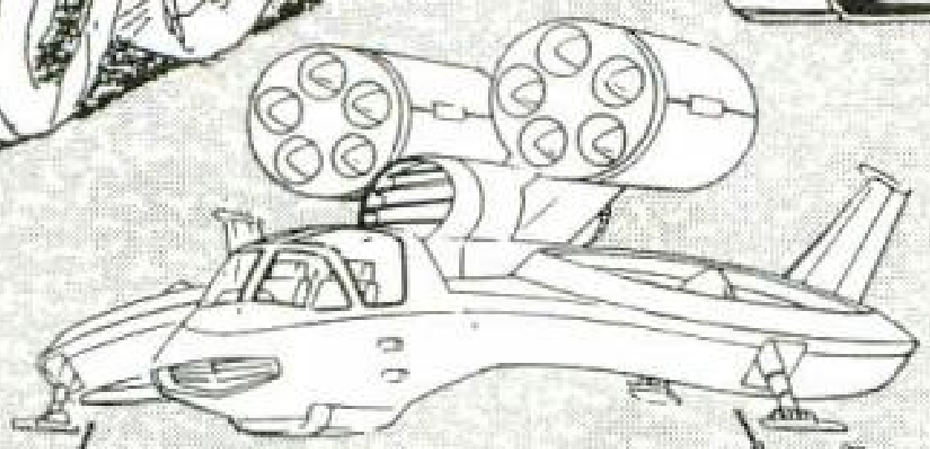
連邦軍の主力は、対潜哨戒機ドン・エスカルゴを艦載機とする戦闘空母であった。対潜哨戒機に対して、MSM－03ゴッグなどは、よい標的となった。そのため、公国軍はMSM－07ズゴックに長い射程のメガ粒子砲を、MM－07グラブロに対空ミサイルを装備させた。



寒冷地用A.P.C.
(Type B)

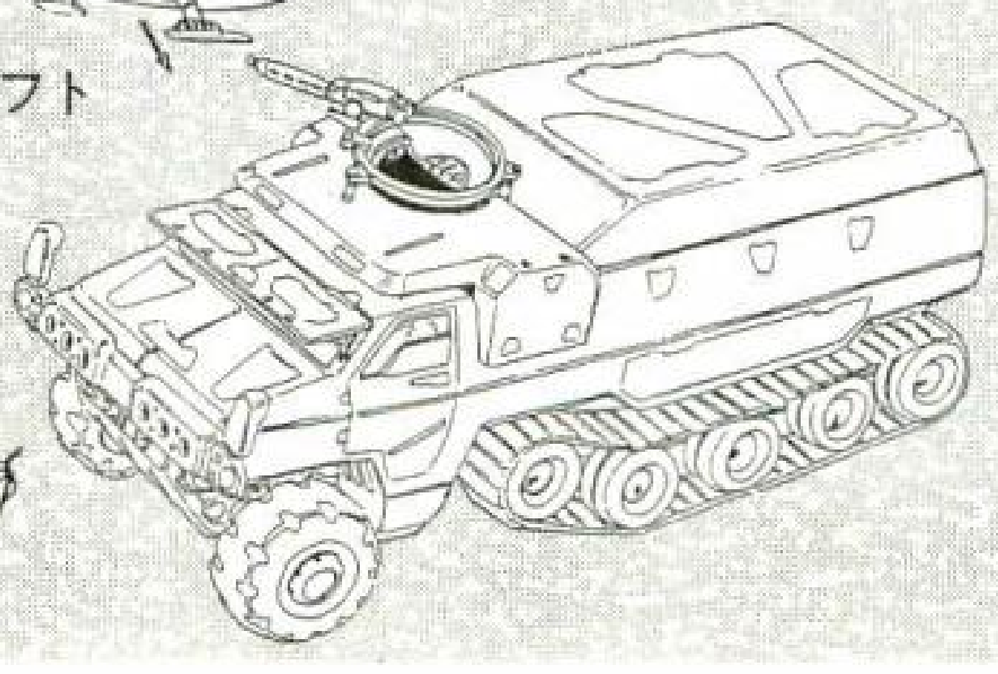


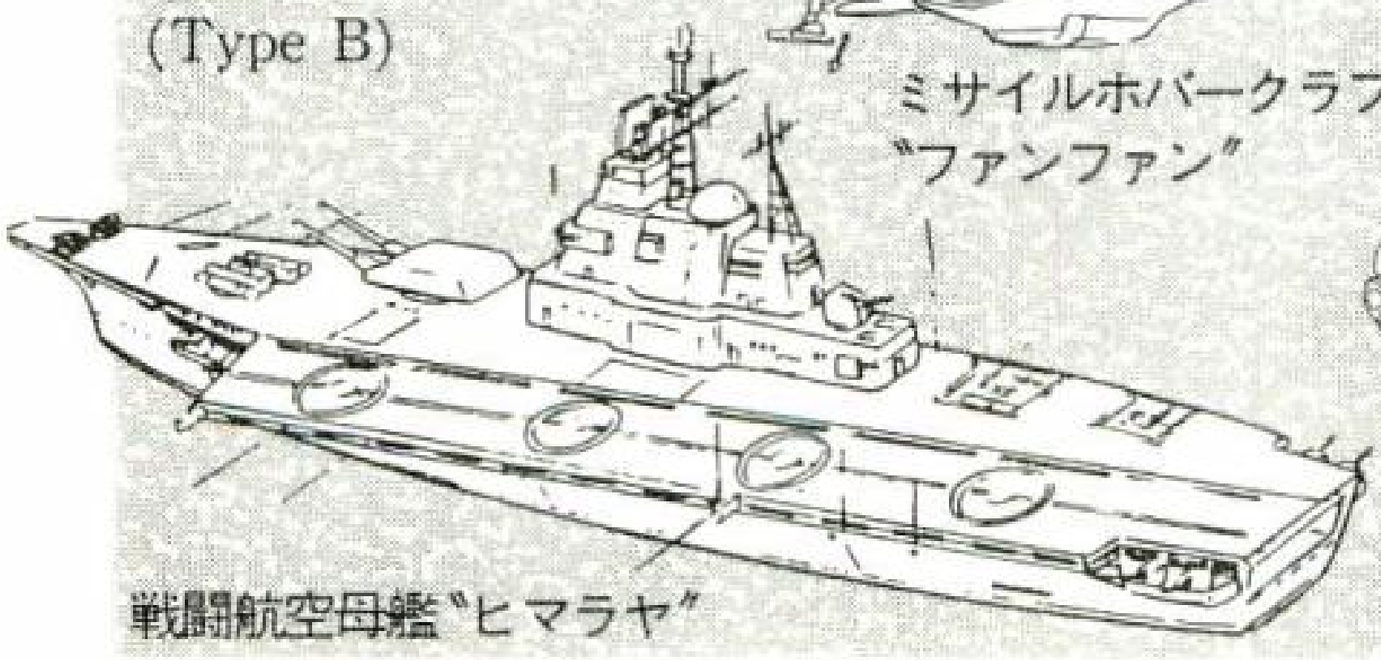
対ザク用タンク型自走砲
（コロニー内迎撃用）



ミサイルホバークラフト
〝ファンファン〟

寒冷地用A.P.C.
(Type A)





戦闘航空母艦〝ヒマラヤ〟

公国軍の宇宙戦力

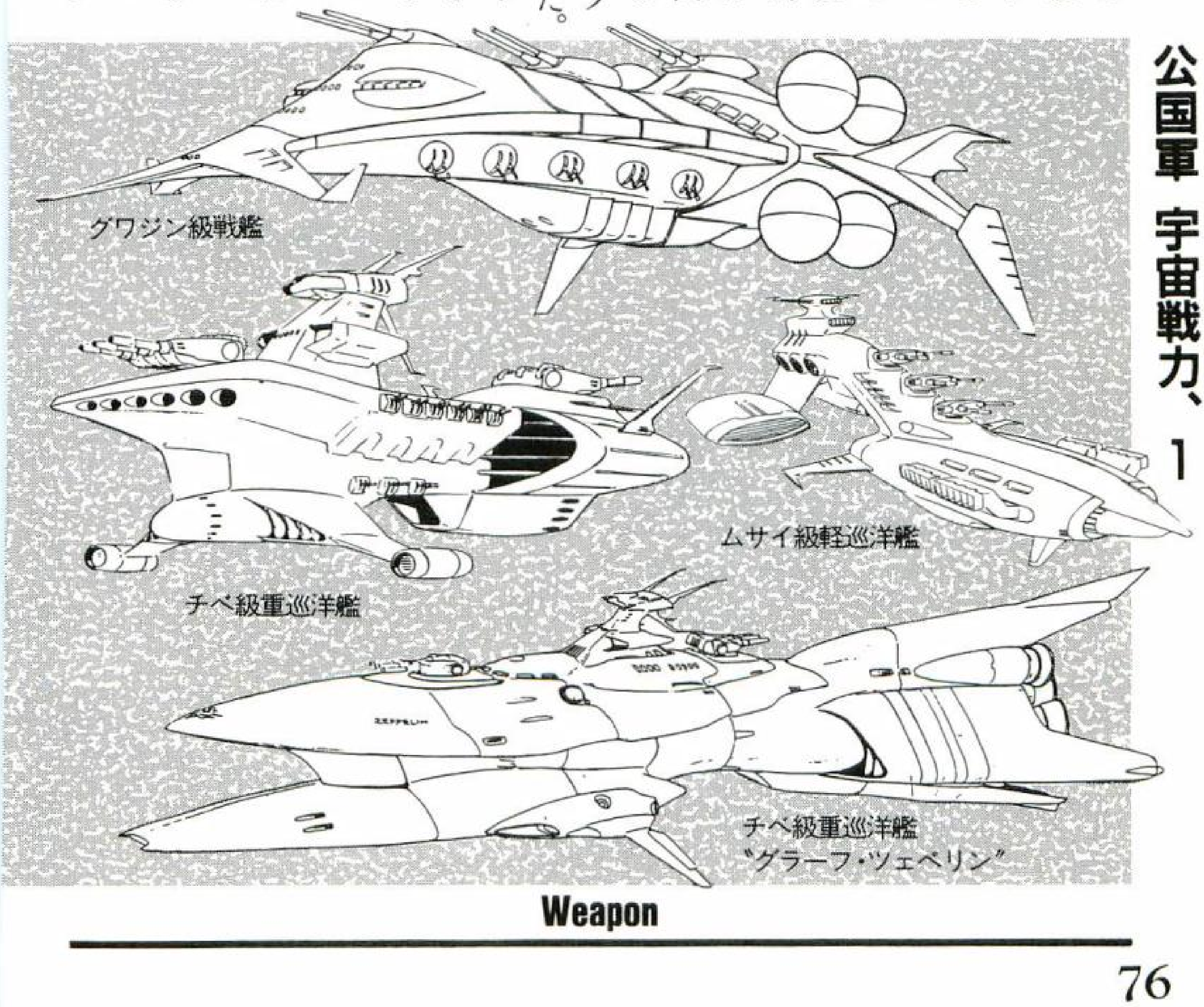
宇宙艦艇に関しては、公国軍の方が勝っていた。ジオン共和国の樹立と同時に国防隊が組織され、チベ（あるいはティベ）級重巡とパプア級補給艦を建造した。だが、当時MSを中心とした機動戦の構想はなく、推進システムも旧式の化学燃料／プラズマ併用式で、砲も火薬式であった。

0070年代に入り、ジオン公国ではミノフスキー物理学とその応用技術が長足の進歩をとげ、MSと宇宙艦艇の開発に導入された。さらに、0074年にMS-05ザクIが開発に成功するとともに、機動戦構想が生まれ、宇宙艦艇もMSの搭載を前提とした設計となった。

ムサイ級軽巡洋艦は、その構想にのっとり、MS5機を搭載運用できる初の宇宙艦艇となった。また、推進システムを熱核ロケット、主砲に2連装メガ粒子砲3門となった。さらにレーダーを無力化するミノフスキー粒子発生器を装備していた。地球侵攻作戦用に開発された大気圏再突入カプセルを推進モジュールの間に装備可能で、艦首にはMSを搭載可能な小型再突入カプセル、コムサイを装備していた。

ルウム戦役では、このムサイ級、チベ級の両巡洋艦は、大戦末期に近代化したチベ級が主力艦であった。

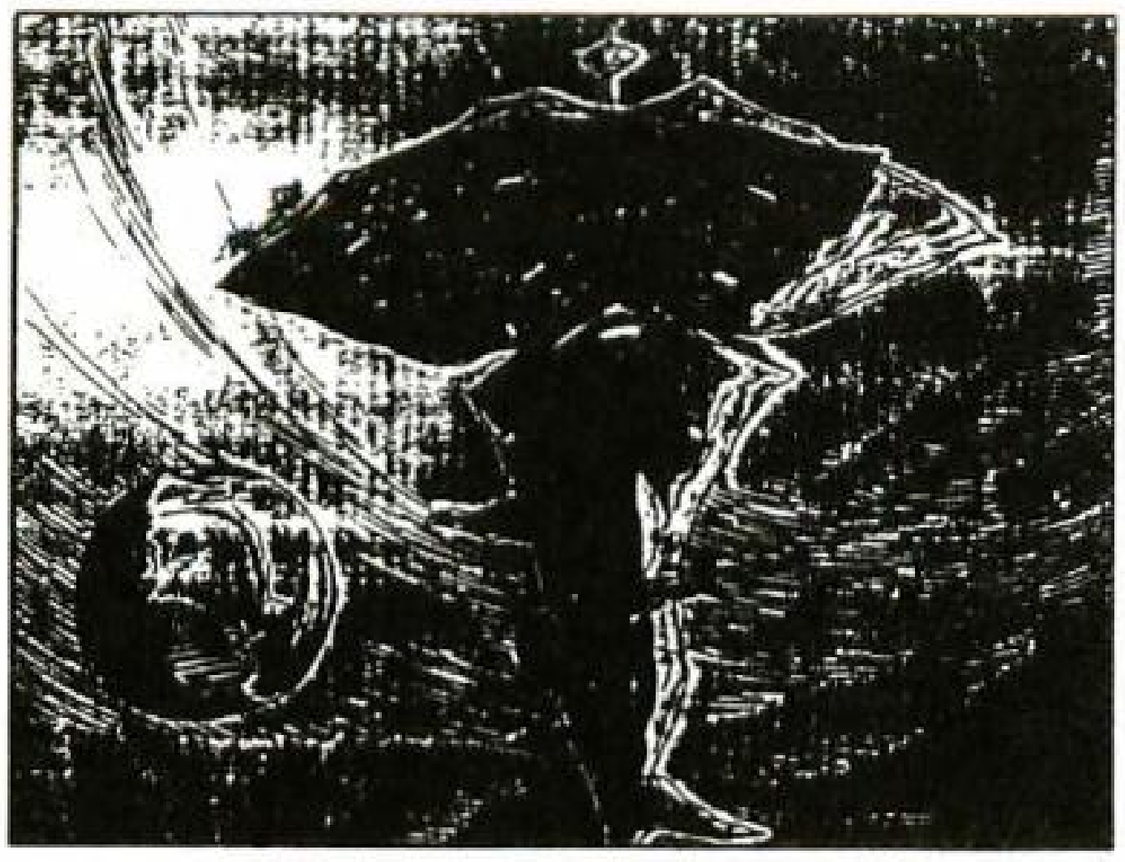
なお、このムサイ級重巡洋艦の新型艦として再設計された。そのムサイ級重巡洋艦の第1番艦がジークフリート、チベ級戦艦の第1番艦がグラーフ



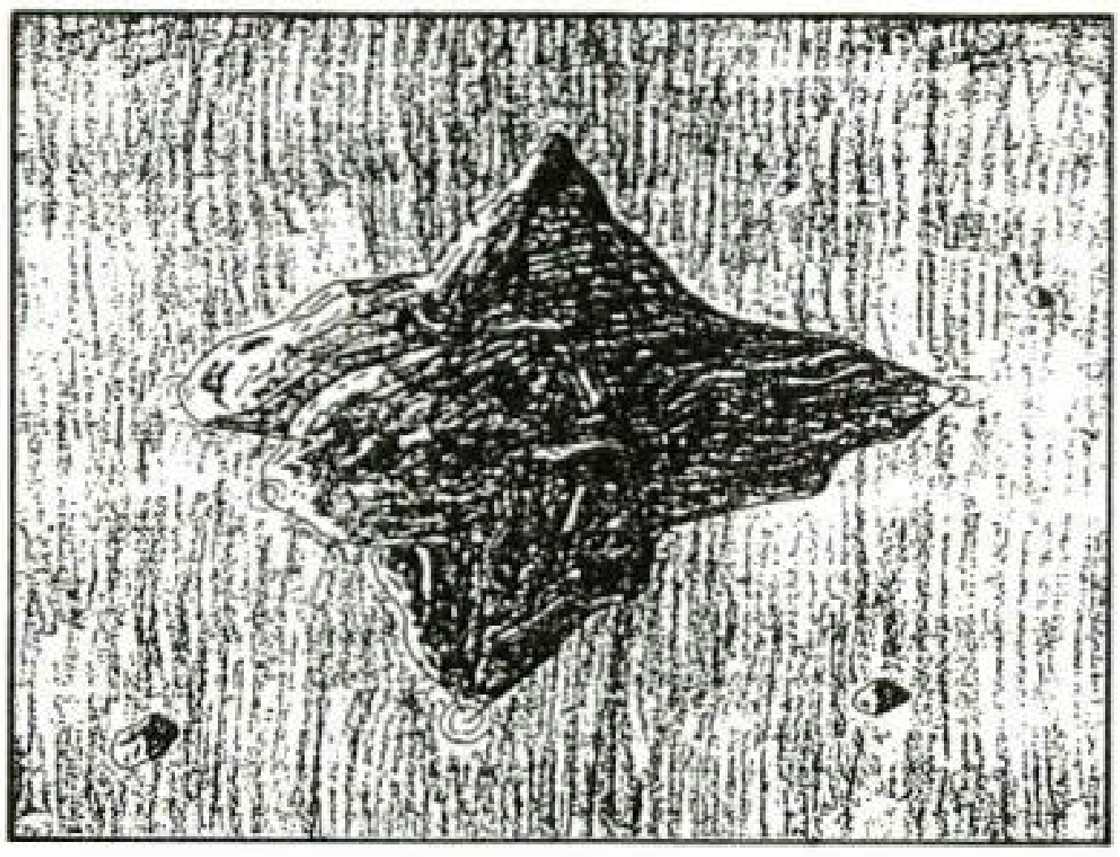
公国軍 宇宙戦力、1

通常兵器

ジオン公国軍宇宙要塞〝ア・バオア・クー〟

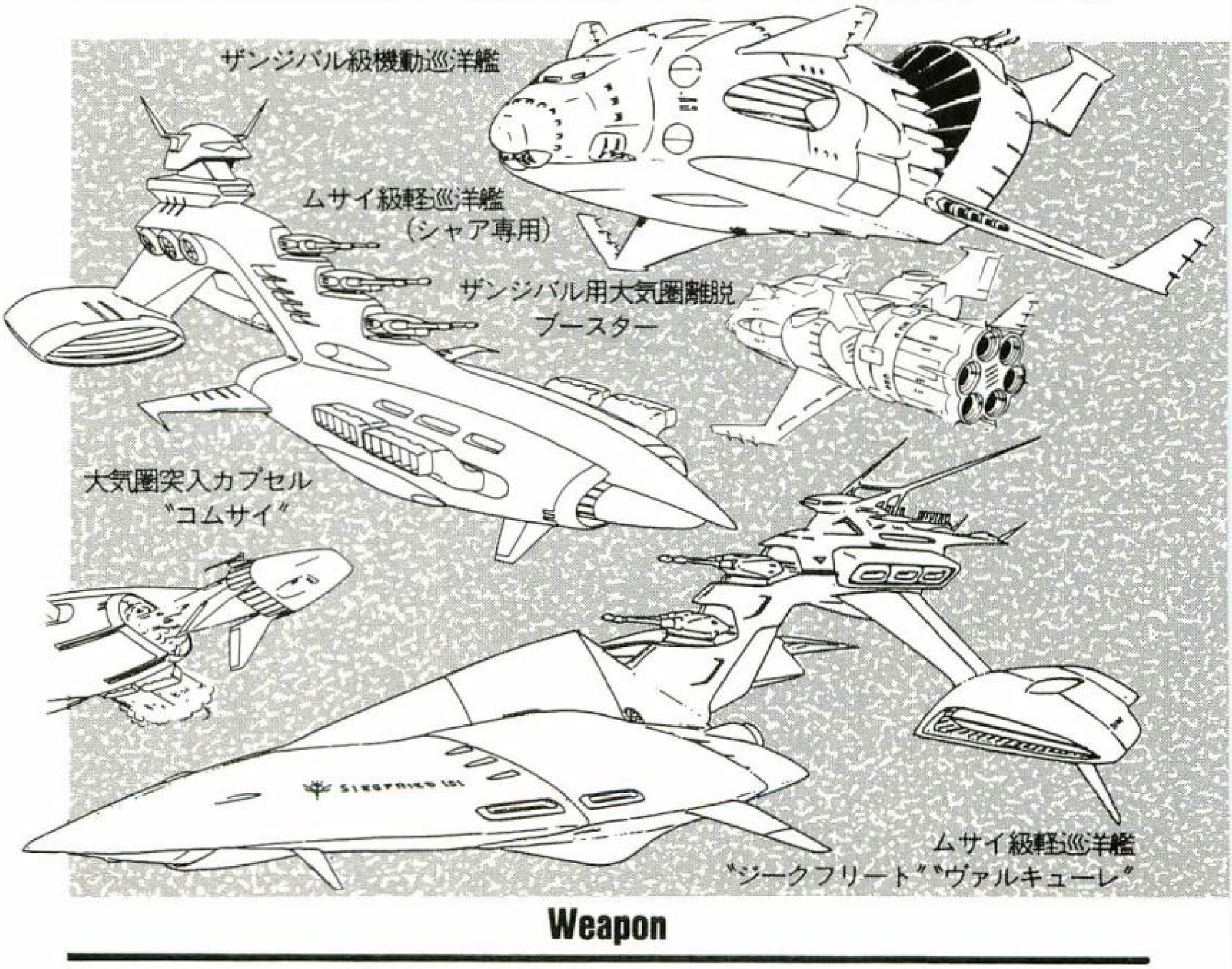


ジオン公国軍宇宙機動要塞〝ソロモン〟

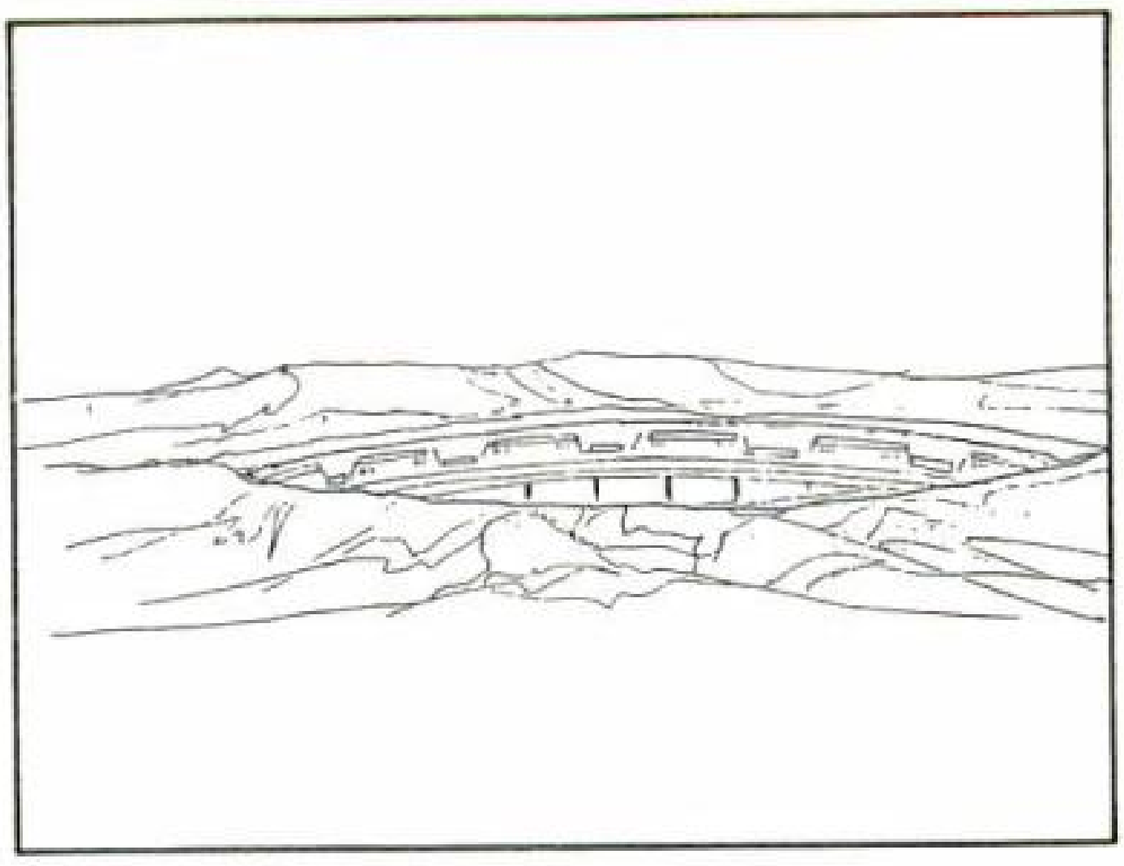


ツエッペリンであった。いずれも大型化してMS搭載数も増大したが、末期のことでもあり、戦果は少なかった。

公国軍はキリシア・ザビ少将が指揮する突撃機動軍と、ドズル・ザビ中将が指揮する宇宙機動軍があった。そして、デギン・ザビ公王直轄の親衛隊を含めて3軍にそれぞれ旗艦となる大型戦艦が建造された。これが連邦軍のマゼラン級に匹敵するグワジン級戦艦である。火力も強力であったが、最悪のケースを予測して、火星と木星の中間にある小惑星帯までたどり着くだけの巡航能力を持たせた。この3隻のうち、デギン公王の乗った1番艦グレート・デギンは、友軍の放ったソーラ・レイにより誤って沈められ、キリシ



ジオン公国軍月面要塞〝グラナダ〟



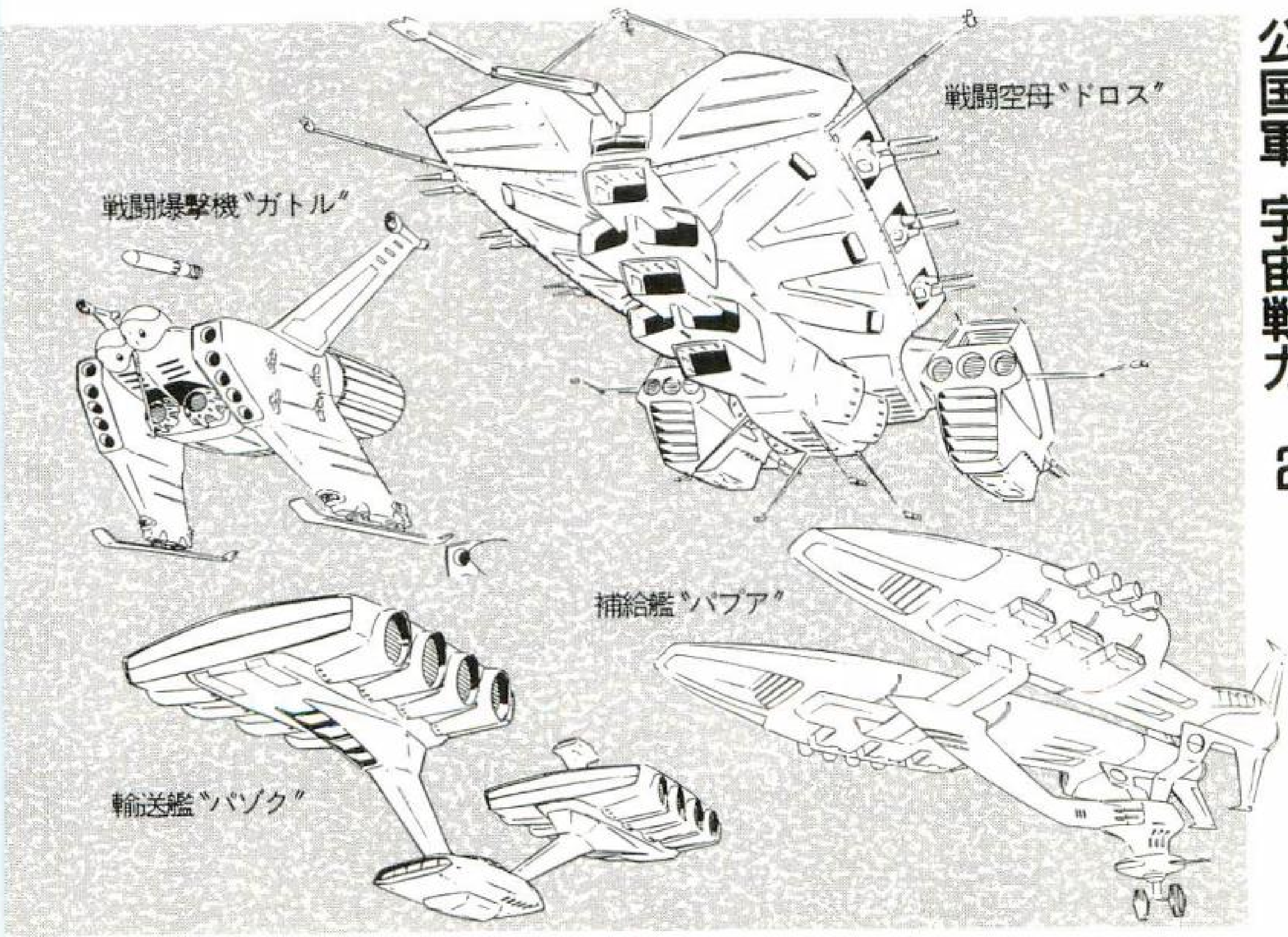
ア少将の3番艦もア・バオア・クー戦で撃沈された。なお、2番艦は行方不明である。（小惑星基地アクシズに逃げたという説もある）

地球侵攻作戦の成功により公国軍はサイド3～地球という長大な補給線を維持せざるを得なかった。そこで、大気圏突入能力を持つ機動戦艦が必要となった。そこで建造されたのがザンジバル級である。この艦はリフティングボディを採用し、大気圏内の航続性能も高かった。大気圏離脱時には化学燃料ロケットによる1段式ブースターを使用した。

また、公国軍はMS機動戦構想の最終段階として、ドロス級超大型宇宙空母を建造した。全長は492メートルに達し、搭載MS数は182機であった。武装は2連装メガ粒子砲が6門で、戦力もバカにはできなかった。同時に7機のカタパルト発進が可能であった。

その他、小型機として宇宙戦闘機ガトル、突撃艇ジッコが開発された。これらは艦載機ではなく、ア・バオア・クーやソロモン、グラナダといった公国軍最終防衛ライン上の要塞の防空用である。ジッコは連邦のパブリクと同じよ

公国軍 宇宙戦力、2



うに対ビーム攪乱用の特殊爆弾を3発装備していた。

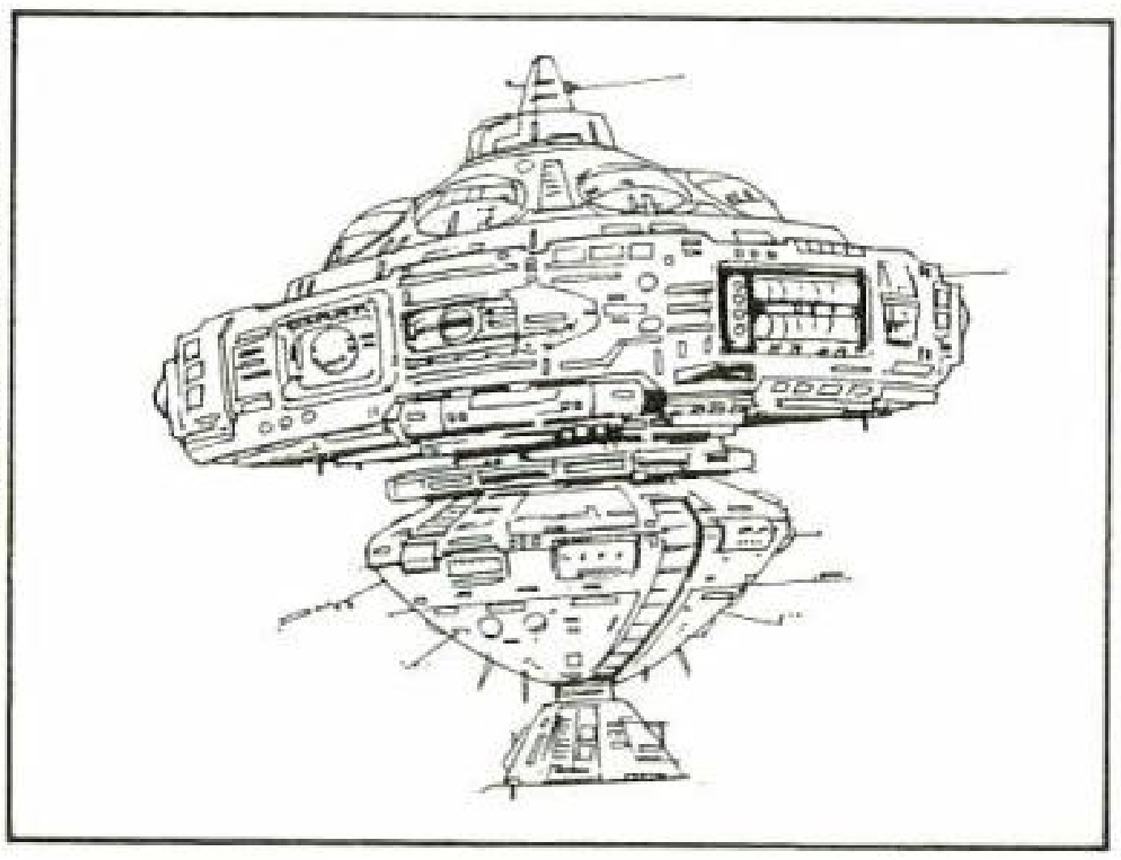
また、変り種としては、MS用の浮遊砲座スキウレがある。MA－05ビグロのメガ粒子砲を搭載し、下面のスラスターノズルによって月面でも使用できた。グラナダ防衛用に開発されたが、結局使われなかった。

☆

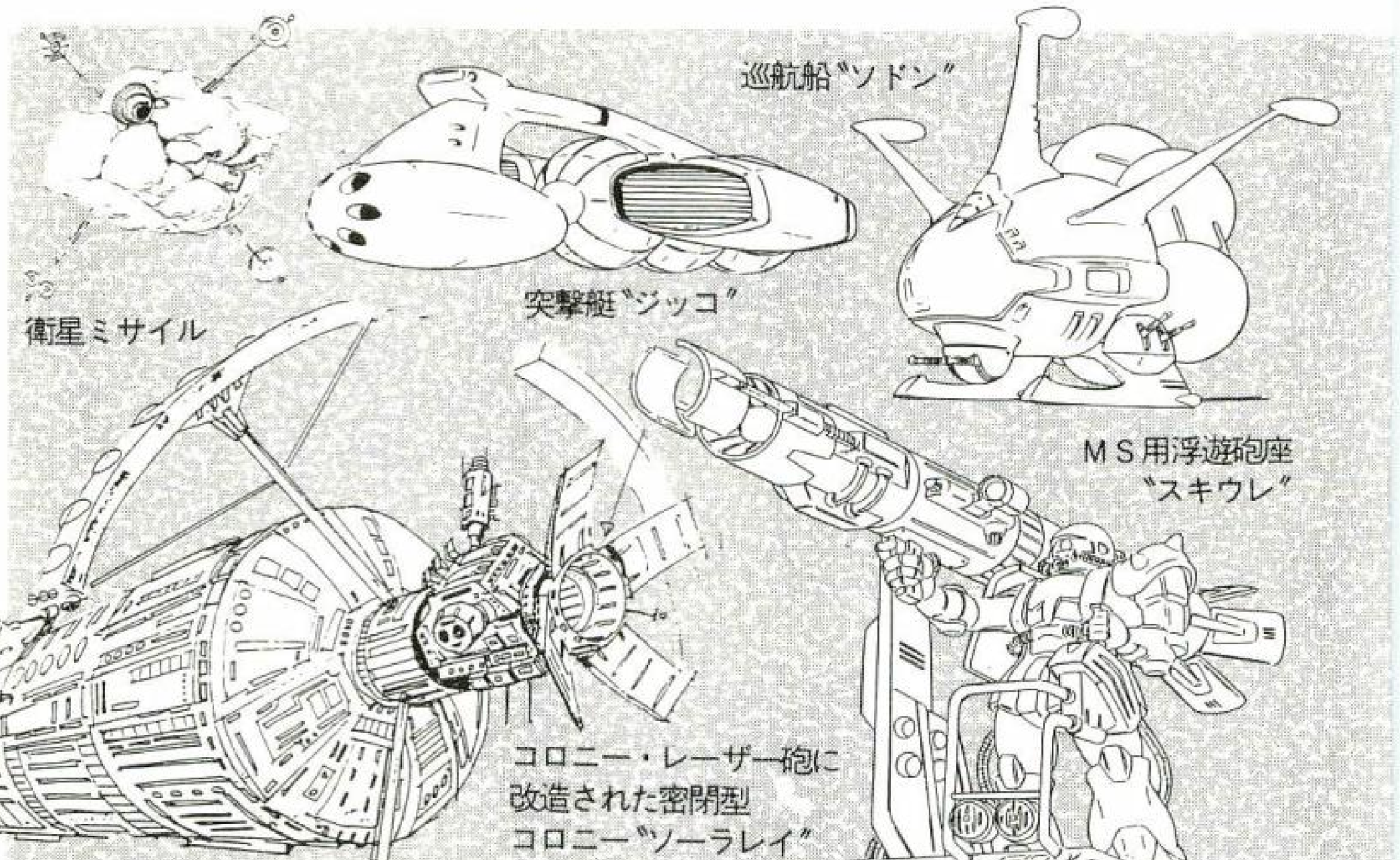
南極条約によって使用が禁じられた核兵器の代わりに2つの超兵器が開発された。

その1つが衛星ミサイルである。これは直径30メートル程度の岩塊にスラスターを装備したという原始的なものだったが、迎撃ができず、直撃すればマゼラン級戦艦すら撃沈できた。

もう1つが究極兵器と呼ばれるソーラ・レイだ。これは密閉型コロニー1基をレーザー砲にしてしまうというもので、直径6・5キロメートルのレーザーがわずか3秒間の照射で連邦軍のレビル艦隊を全滅させた。ただし、エネルギー消費量が膨大で、サイド3の全電力を数時間要し、さらに発射後、冷却のために最低1週間が必要なため、結局1度の使用で終った。



ジオン公国軍前進基地



公国軍の航空戦力

公国軍が地球で使用した航空機は、全て在来機のデータをもとにコンピュータ・シミュレーションして設計された。これはコロニー内では充分な飛行テストができない、サイド3の特別な事情によるものだが、そのためか在来機にない特殊な形状の機体が多い。理論のみが先行した結果、実際の飛行時には、さまざまな欠陥が生じたが、公国軍は宇宙技術を導入することでそれに対処した。

●ガウ

陸上での移動力が低いMS輸送に運用された攻撃空母。3機のMSと8機のドップを搭載可能であった。武装は2連装メガ粒子砲3門で、熱核ジェットエンジンも搭載していた。あまりの重量のため揚力の30パーセントを下方ジェット噴射に頼っていた。

●ドップ

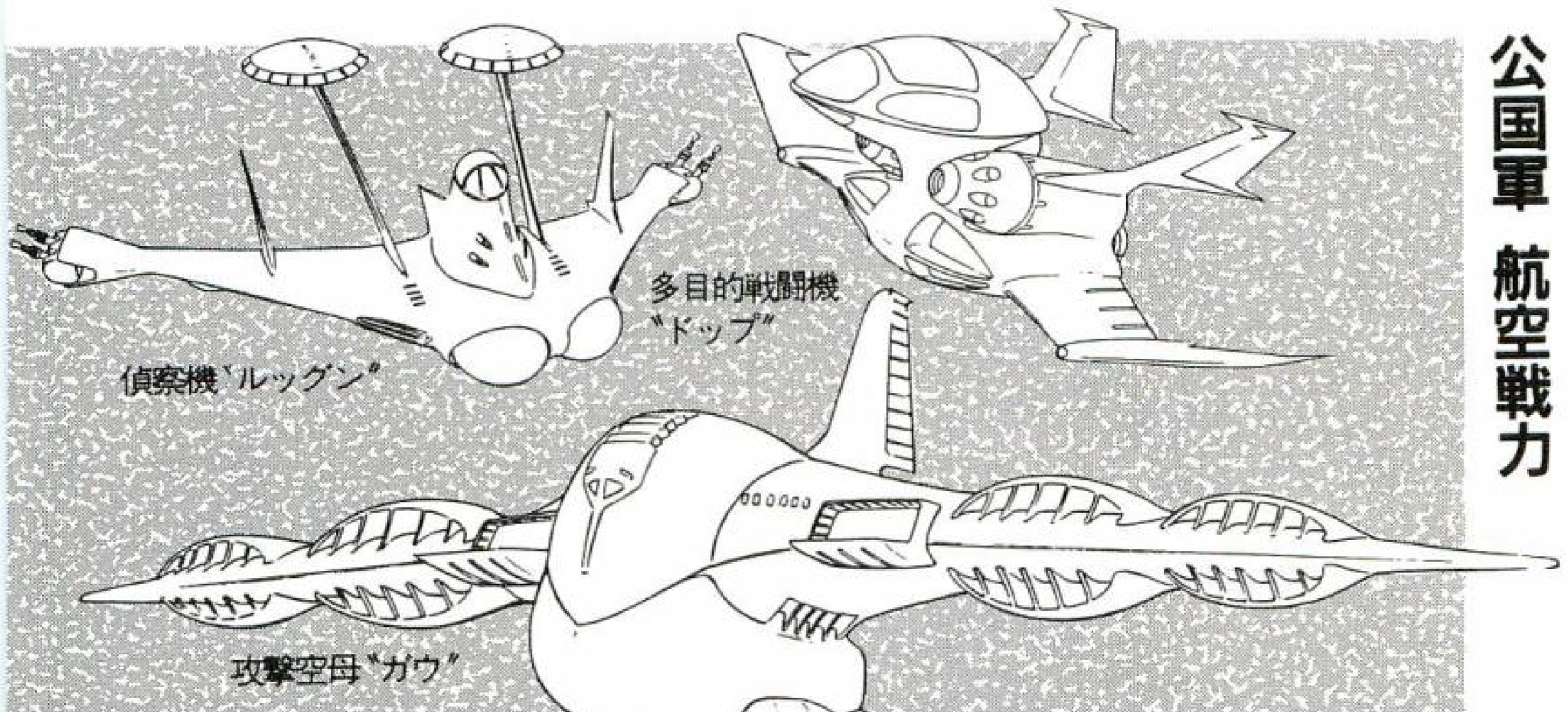
大気圏内戦闘機。運動性を高めるため、MS同様にアポジモーターを併用していた。全長9・2メートル、全幅12・1メートルと小型なのも運動性を重視した結果であった。

●ルッグン

偵察機。円形型レーダー2基を備えているが、ほとんど乗員の視認に頼っていたといわれている。

●ドダイYS

爆撃機として開発されたものだが、熱核ジェットの推力にかなりの余裕があり、MSを乗せて飛行することが可能であった。武装は8連装空対地ミサイルランチャー。



公国軍 航空戦力

公国軍の陸上戦力

公国軍の陸上兵力は、MSに依存していたため種類は少ない。MSの輸送も大半は、ガウにまかせ一部を陸戦艇やトレーラーが受け持っていた。

●ダブデ

陸戦艇。地上走行速度は遅いが、2連装大型砲を2門備えている。連邦軍のビッグレー同様に移動司令部として運用された。

●ギャロップ

小型陸戦艇。火力よりも移動速度やMSの輸送を主眼としていた。熱核ホバーで浮上し、ジェットエンジンで推進する。搭載MSは3機。

●マゼラアタック

公国軍の主力戦車。上部が分離飛行する能力を持つが、175ミリ無反動砲の精度が極端に低下するため、戦後の評価悪い。飛行時間も5分程度と短かった。MSの後方支援に用いられた。

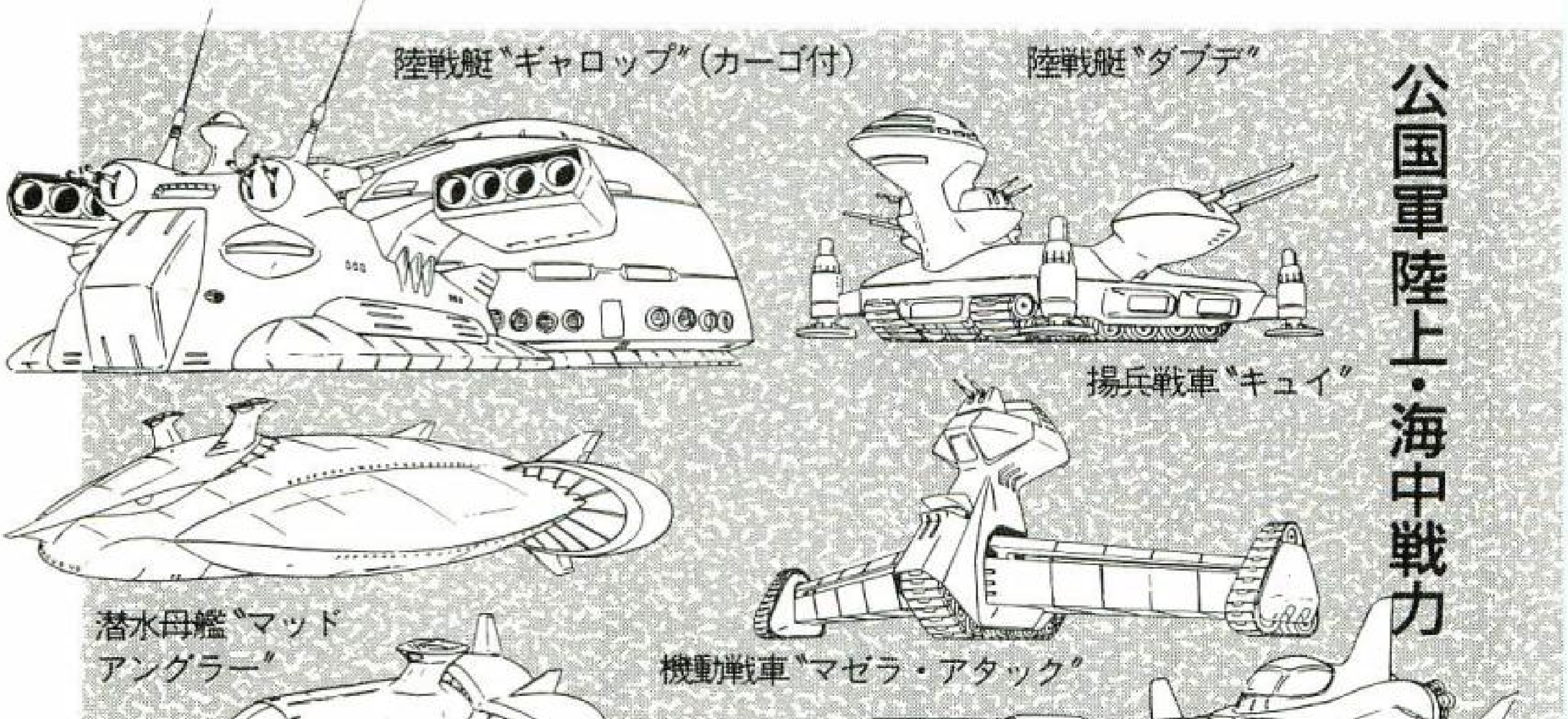
●キュイ

揚陸戦車。パーソナルジェットを装備した歩兵を輸送する目的で作られたが、はっきりいって無駄。

☆

海中戦力に関しても、ほとんどを水陸両用MSに頼っていた。マッドアングラー級、ユーコン級も連邦軍製潜水艦を改装して使用している。改装点は、大陸間弾頭弾のスペースを水陸両用MSの格納庫としたことで、ユーコン級でMSM-03ゴックを3機、MSM-07ズゴックを1機搭載できた。

公国軍陸上・海中戦力



ガンダム・オフィシャル・レポート、3

機動兵器

Mobile Weapons

U.C0079～0080

汎用モビルスーツ

MSの駆動系は流体パルスシステムを採用している。これは核融合炉から発生したエネルギーをパルス・コンバータでパルス状圧力に変換し、流体チューブによって各部のアクチュエータに伝達される。MS－06は流体チューブを数千本束ねた動力パイプを部分的に露出させている。

冷却システムは、He（ヘリウム）を冷却剤に使用し、推進時に放出してしまう。陸戦用のJ型は空冷式ラジェータを併用しているため、冷却剤の量は少なくてすむ。

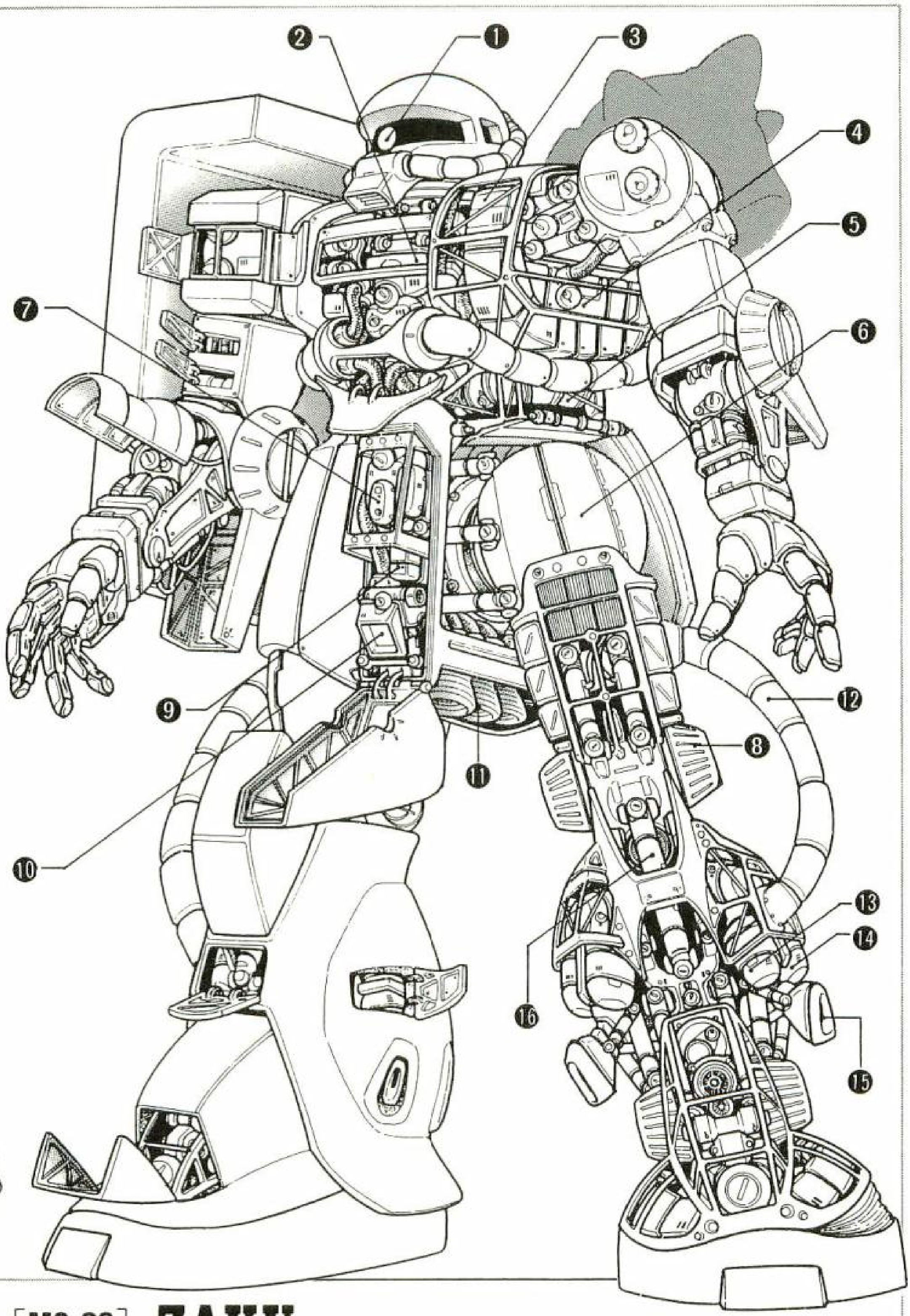
推進システムは、化学燃料ロケットで、MS－09以降は熱核ジェット、もしくは熱核ロケットが採用されている。後期の機種ほどロケットモーターの性能は向上し、最大推力及びCMP（戦闘最大出力）時間はよくなっていった。

また、姿勢制御用のアポジモーターは機種によって異なるが、6～12基搭載されている。複雑な動きを可能とするMSとしては少なく思われがちだが、各間接の自由度が高く、四肢を動かすことによって質量移動させ、姿勢制御を行っているため、アポジモーターは少なくてすむのだ。

装甲は公国軍の場合、チタン（アーマー）系の超硬合金による多重空（スペースド）間装甲で、初期型であるMS－06Cは、その装甲の隙間に放射線遮断液が充塡されている。これは核弾頭のバズーカを使用することから用意された対放射線対策だが、南極条約の締結後は、より耐久度が高く、軽量な装甲が求められた。

探知システムは、モノアイに組み込まれたレーザー及び赤外線センサーで、ミノフスキー粒子散布下であっても、正確な射撃が可能であった。また一応レーダーも装備されていたが、反対にミノフスキー粒子の濃度をチェックするために用いていたといわれる。（濃度が薄い空域ではMSは不利であった）メインカメラは首の回転を含めて左右薬2 60度の走査が可能で、機種によっては上下の旋回機能もあった。また、モノアイだけでは死角が多いため、機体の各部に10数基のサブカメラが設置されていた。

以上が公国軍製汎用MSの構造概念である。連邦軍製MSも構造的には大きな違いはない。



イラスト／星野秀記

[MS-06] ZAKU

【各部名称】❶モノアイ❷コクピットブロック❸補助装甲❹バッテリーパック❺超小型核融合炉❻三自由度アクチュエータ❼ジャイロバランサー❽ロータリーアクチュエータ❾燃料電池❿サブカメラ⓫スラスターノズル⓬動力パイプ⓭H2タンク⓮O2タンク⓯アポジモーター⓰リニア・アクチュエータ

Mobile Weapon

水陸両用モビルスーツ

水陸両用MSは陸戦用機などと比べ、汎用機と構造が大きく異なっている。機体の形状は突起物が少なく、全体的に流線形になっている。これは水の抵抗を少なくするためだ。MSM－03ゴックは水中航行時には腕部と脚部を格納し、さらに抵抗軽減をはかっている。腕部のマニピュレータは、伸縮式のフレキシブルアームで、多重関節構造だ。

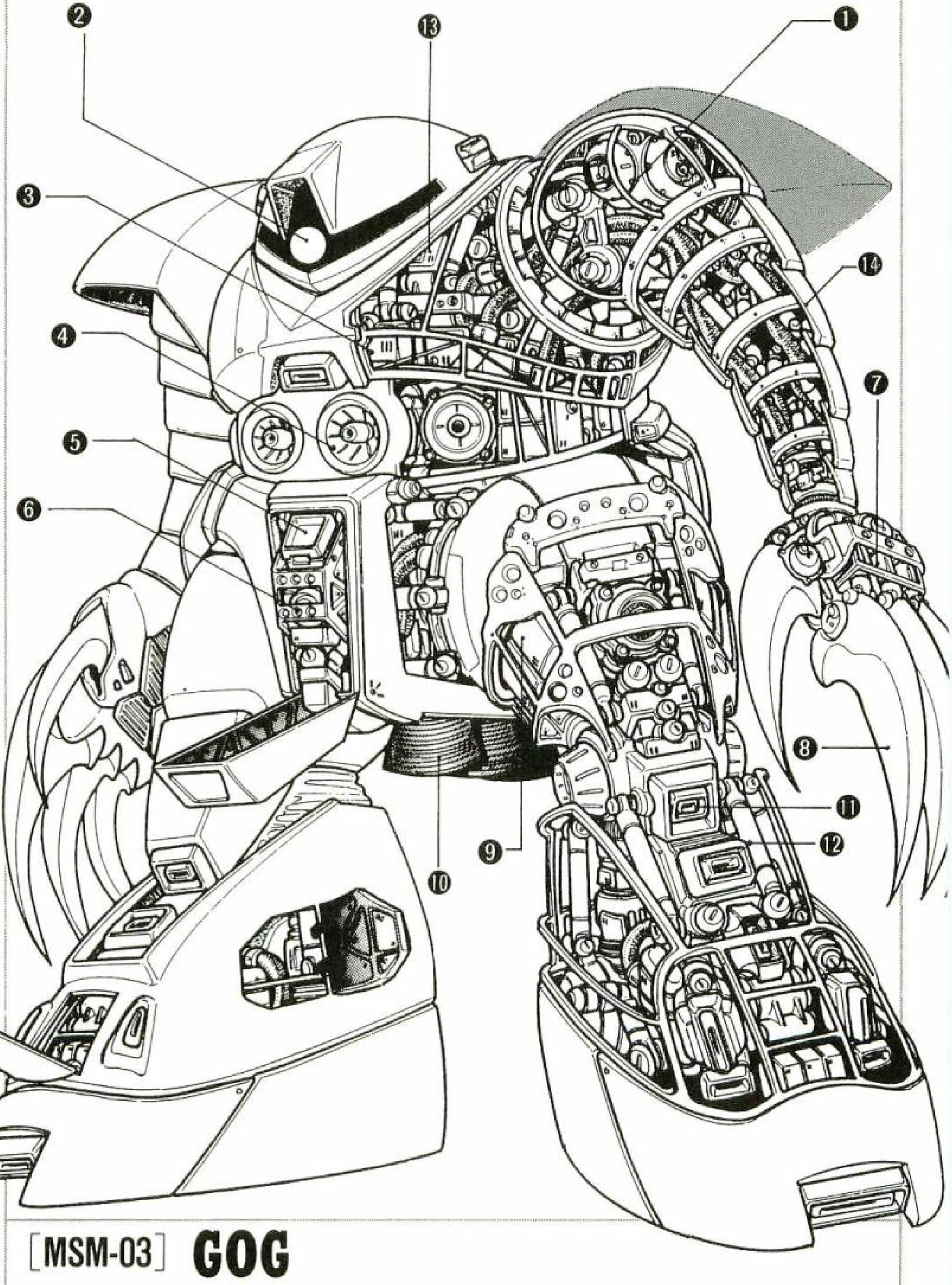
核融合炉は汎用機に比べ大型で出力も高い。これは冷却が機外の水を冷却水として吸入する水冷ラジェータを採用しているためだ。ただし、陸戦時には機内のバラストタンクに取り込んだ水を使っているため、1～2時間しか活動できない。だが、その代わり核融合炉の大出力によってメガ粒子砲を稼動することができる。MSM－03は腹部にメガ粒子砲を2門搭載している。エネルギーCAP技術を応用せずにMSにビーム兵器を搭載した初めての機体だった。

推進システムは、熱核水流ジェットである。航続距離は極めて長く、作戦行動半径は水中行動が可能ならば陸戦用機とは比べものにならないほど広かった。また、化学燃料ロケットを陸戦時のジャンプ用に装備するが、陸上での運動性は陸戦用機に劣っていた。MSM－07ズゴックは、高出力メガ粒子砲を両腕に装備しており、ビーム集束度も高く、低空で飛ぶ航空機を海上から撃墜した例も多く見られる。しかし、最も特異な機体は、MSM－10ゾックである。頭頂部に大型フォノンメーザー砲、両肩前後に計8門の偏向メガ粒子砲を搭載するという砲撃戦主体の超重MSだった。(水陸両用MSには、MSM－04アッガイもあったが、MS－06ザクIIの低出力核融合炉を流用しているため、メガ粒子砲を稼動させる出力はなく、主砲はロケット弾ランチャーであった)

武装は前出の通りメガ粒子砲が主砲となっているが、機種によって性能にバラつきがあった。MSM－03は偏向メガ粒子砲で稼動に要する出力は高かったが、MS用バズーカ弾程度の威力しかなかった。MSM－07ズゴックは、高出力メガ粒子砲を両腕に装備しており、ビーム集束度も高く、低空で飛ぶ航空機を海上から撃墜した例も多く見られる。しかし、最も特異な機体は、MSM－10ゾックである。頭頂部に大型フォノンメーザー砲、両肩前後に計8門の偏向メガ粒子砲を搭載するという砲撃戦主体の超重MSだった。(水陸両用MSには、MSM－04アッガイもあったが、MS－06ザクIIの低出力核融合炉を流用しているため、メガ粒子砲を稼動させる出力はなく、主砲はロケット弾ランチャーであった)

また、水陸両用MSの共通の武装はアイアンネイルと呼ばれる格闘戦用の爪である。アクチュエータのパワーが高く超硬合金製の爪は、厚い空母の艦底をも容易に裂いたといわれる。その他、古典的な魚雷なども搭載されている。

探知システムは、やはりモノアイだが、頭部の回転機構を省略した機種が多く、また、あっても回転範囲が狭いため、大半の機種はカメラのターレットの可動範囲は広く設計されている。



[MSM-03] GOG

【各部名称】❶ロータリーアクチュエータ❷モノアイ（ＪＦＭ－３型）❸コクピットブロック❹偏向メガ粒子砲（2.8ＭＷ３門）❺サブカメラ❻サブソナー（頭部内にメインソナー）❼ハイパワーアクチュエータ❽アイアンネイル❾バラストタンク❿熱核水流ジェットエンジン用ノズル⓫熱交換システム⓬リニアクチュエータ⓭ジャイロバランサー

機動兵器

モビルアーマー

MA（モビルアーマー）は規格が存在しないため、共通項を見い出しにくい兵器である。機種によって運用場所も、サイズもまちまちで性能を比較しにくい。マニピュレータも歩行システムも絶対的条件ではなく、必要としない機種は全て省略されていた。その理由は、この兵器がMSのような汎用性を捨て、それぞれの目的に合わせた機体として開発されたためである。MS開発史で記述されている通り、MAの原型は宇宙戦闘艇であり、MSと違い人型の形状にまったくこだわっていない。NT（ニュータイプ）専用機であるMAN－03ブラウ・ブロやMAN－08エルメスなどは特異な形状だが宇宙艇そのものである。

あえて共通項を掲げるなら、MSをはるかに上回る大型核融合炉を搭載し、水中戦用のMAN－08を除けば、高出力のメガ粒子砲を持ち、さらにそれぞれの運用場所（りょうが）でMSを含む在来兵器を凌駕する機動力を有するという点であろう。もちろん、開発にはMSから生まれた新技術ノウハウが投入され、ある意味でMSの発展版、あるいは大型版といえなくもない。

ではMAの1機種に絞って機体構造を解説しよう。要塞防衛要に開発されたMA－08ビグ・ザムである。この機体は、円盤状の胴体に2本の歩行ユニットが付いている。脚部は質量移動による姿勢制御システムの一部だが、緊急離脱時には切り離すことも可能だ。

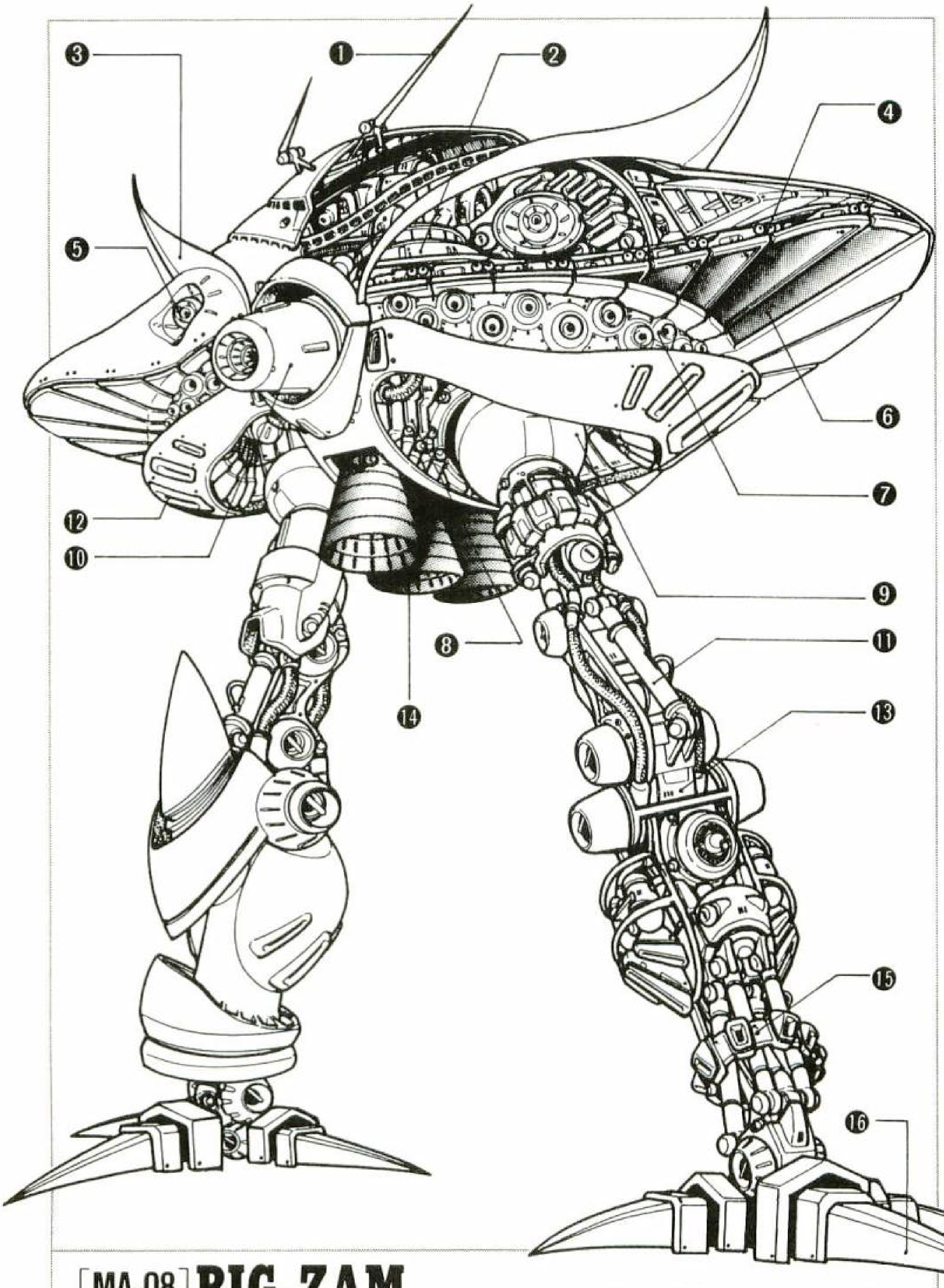
主砲は胴体前面に突き出た大型偏向メガ粒子砲で、一撃でマゼラン級戦艦を撃沈する威力がある。また、胴体全周に対空用偏向メガ粒子砲が並び、MSの接近を拒む。特筆すべき点は、強磁界（エフイールド）により敵のビームを偏向させる防御バリアーを搭載していたことだ。これらの砲を稼動させるために出力35000キロワットの大型核融合炉を4基搭載していた。だが、高出力のメガ粒子砲を全て稼動するには、ミノフスキー物理学を応用したメガコンデンサーに充填する必要があり、さらに冷却の問題から全力戦闘の継続時間は20分以下であった。

コクピットブロックは胴体上部にあり、操縦手1名、索敵手1名、射撃手1名、計3名を必要としたが、コンピュータの補佐により1名でも戦闘は可能だった。

MA用の装備として、サイコミュ・システムと、それに付随する有線制御式メガ粒子砲、さらに無人随伴攻撃機（ニュータイプ）ビットがある。これらはNT専用MAだけに搭載された新機軸の攻撃システムである。事実上対抗手段がなく、究極兵器とさえいわれた。

なお、MAは宇宙戦用が多かったが、ミノフスキー・クラフトを搭載すれば、大気圏内での運用も充分可能で、MA－08やMSN－02ジオングなどは量産型では陸戦仕様機の開発も検討されていた。また、ミノフスキークラフトを搭載した例としては、MAX－03アッザムという、重移動砲座があった。

Mobile Weapon



[MA-08] BIG-ZAM

【各部名称】❶オールレンジアンテナ❷核融合炉❸放熱板❹全周アポジモーター❺メガ粒子砲（4.8ＭＷ２門）❻ビーム偏向フィールド発生システム❼対空メガ粒子砲（2.1ＭＷ 44門）❽スラスターロケットエンジン❾三自由度アクチュエータ❿メガ粒子砲（13.9ＭＷ１門）⓫リニアアクチュエータ⓬アポジモーター⓭ロータリーアクチュエータ⓮ロケットノズル⓯アポジモーター兼投棄用化学ロケット⓰対空防御ミサイル

先端技術

High-Technology

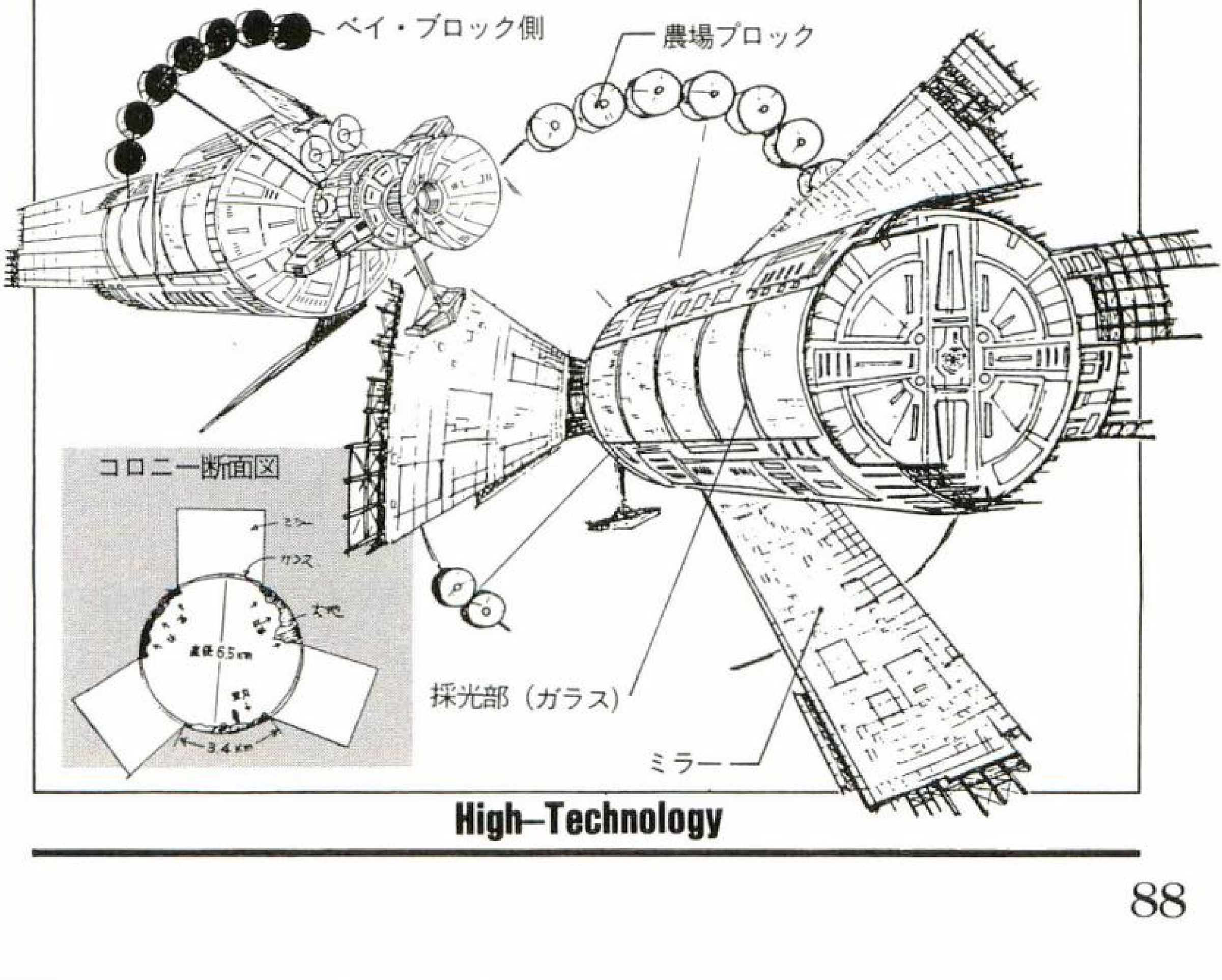
U.C.0001〜0080

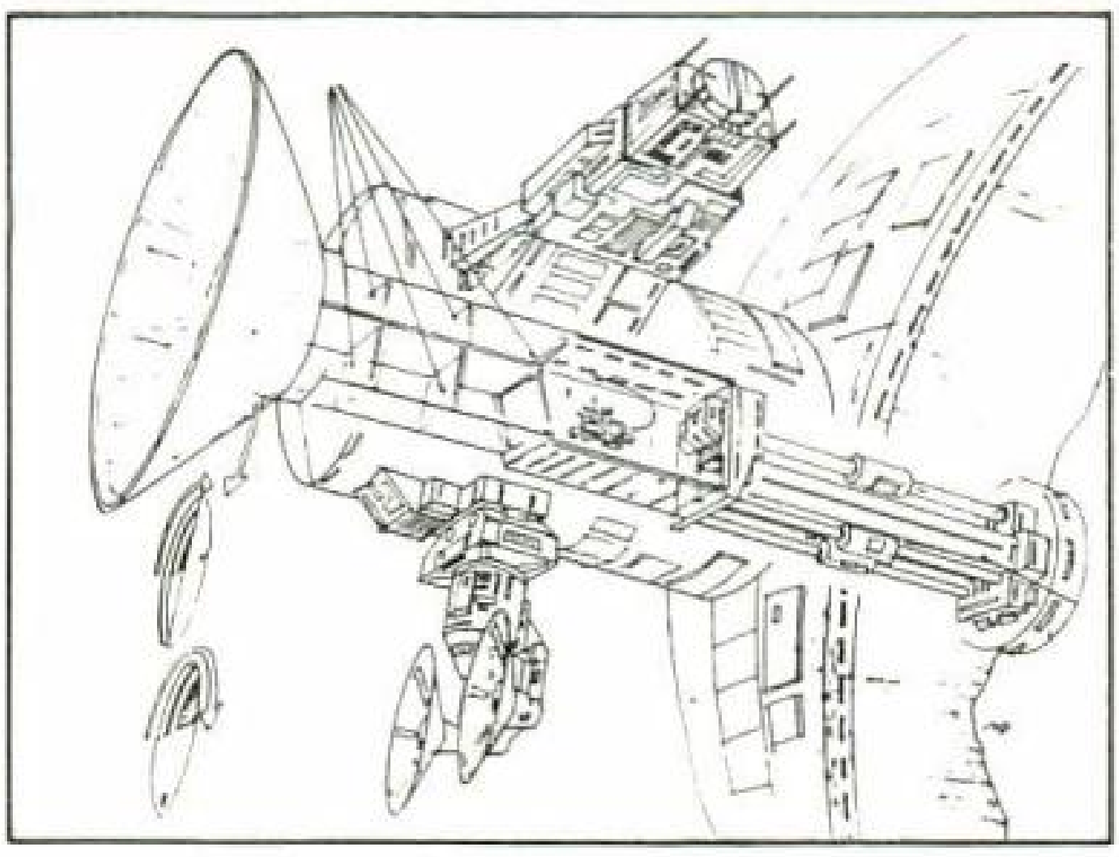
スペースコロニー

宇宙植民地（スペースコロニー）は地球と月のラグランジェ点に建設された人工天体である。一般的な解放型コロニーは、全長32キロメートル、直径6、3キロメートルの円筒の中に3600万人を収容できる人工の居住空間が作られている。円筒には巨大な鏡（ミラー）が付けられ、太陽光を内部に注ぎ込む。コロニーは2分間に1回転して遠心力による人工重力を生み出す。農場ブロックは円筒外に設置されている。

密閉型コロニーは、採光面も鏡もなく、代わりに太陽電池板を周囲に配置し、マイクロウェーブに変換されたエネルギーを再び電気にして、円筒内に設置された人工太陽を稼動させている。この型は開

開放型スペースコロニー





放型に比べて建設コストがかかるが、採光面がないため、敷地面積を多く取れ、収容人数が倍になる。

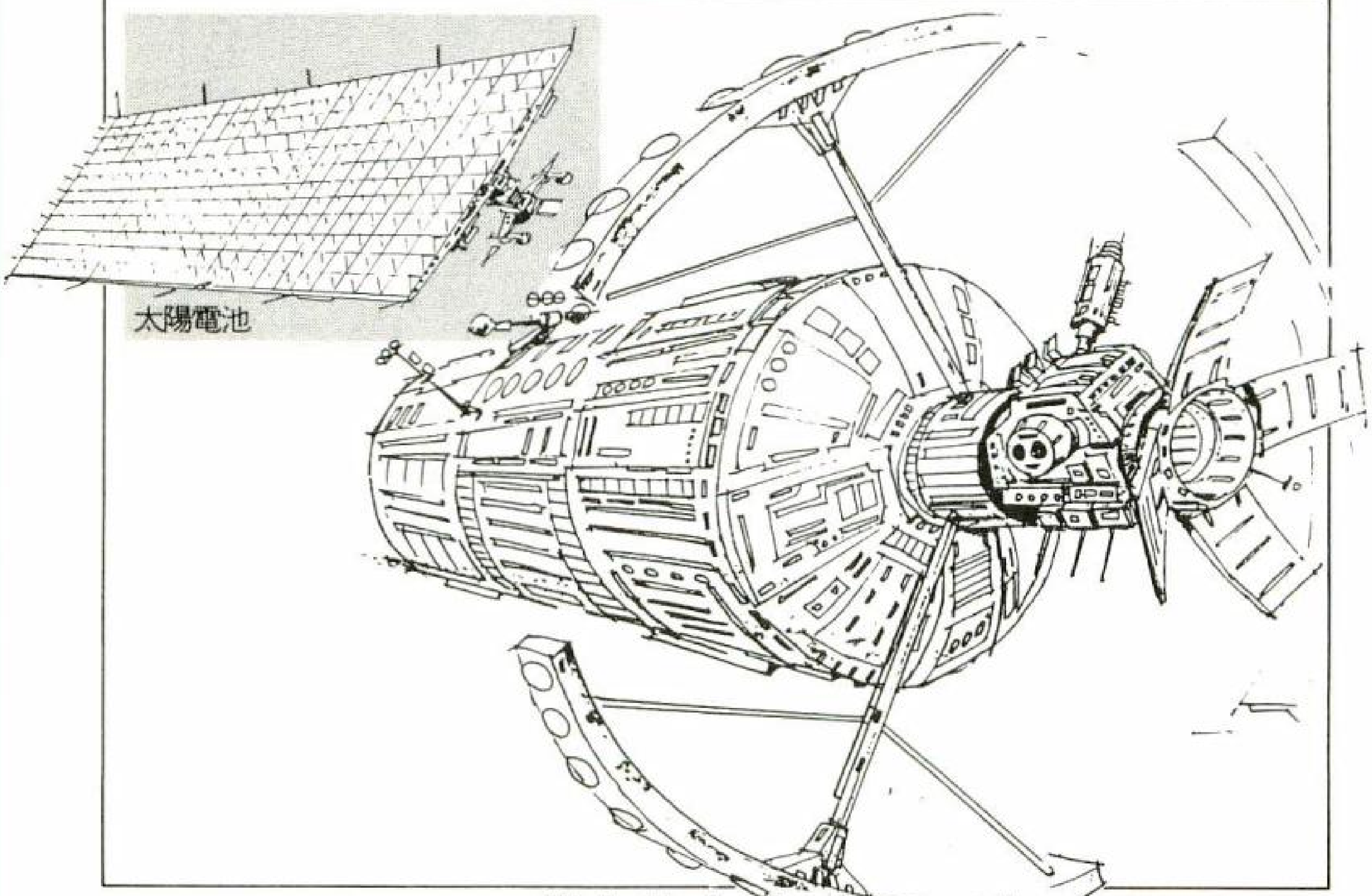
両型共に太陽光のエネルギーに依存した自給自足が可能だ。1コロニーは1バンチとして36～40バンチでサイドには13億昇格する。1サイドには建設が中人が居住する。

コロニーの建設は月の資源が使用される。月には原材料となる岩塊をマスドライバー（電磁カタパルト）によって建設宙域まで打ち出される。また、サイド7以降の建設のため小惑星帯から核パルス推進によって直径680キロメートルの小惑星が運ばれ、資源用の衛星ルナIIとなった。

なお、サイド7は建設が中断され第1号バンチ（しかも完成していない）のみがあるだけで、正式にはサイドではない。

最後にサイドの名称を記す。サイド1／ザーン、サイド2／ハッチ、サイド3／ムンゾ、サイド4／ムーア、サイド5／ルウム、サイド6／リア、サイド7／ノア。なお、コロニーごとに個有名がつけられる場合もある。㊟サイド1第1号バンチ→シャングリラ。

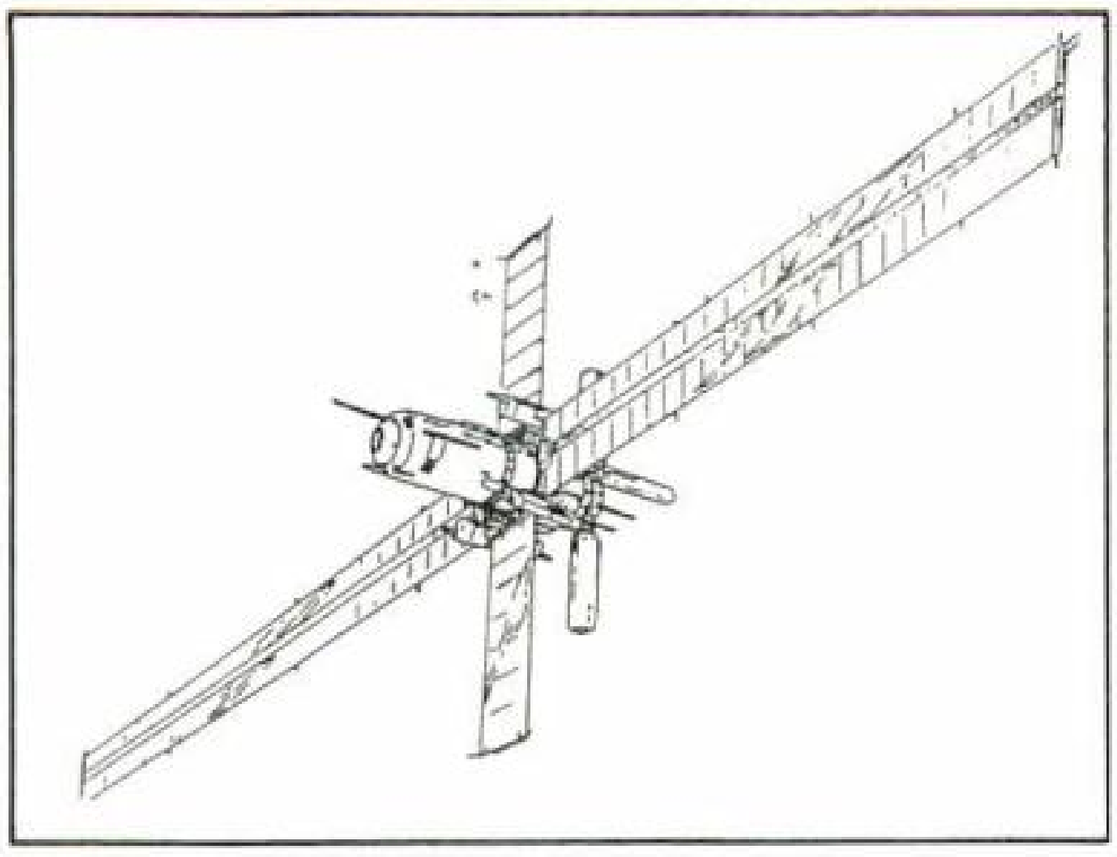
密閉型スペースコロニー



太陽発電衛星

地球上で消費される電力の大半は、衛星軌道上に設置された太陽発電衛星によってまかなわれている。太陽光を太陽電池によって直接電気エネルギーに変え、マイクロウェーブに転換し地上の受信施設に送り、再び電力に変えるというシステムだ。

太陽発電衛星



ニュータイプ

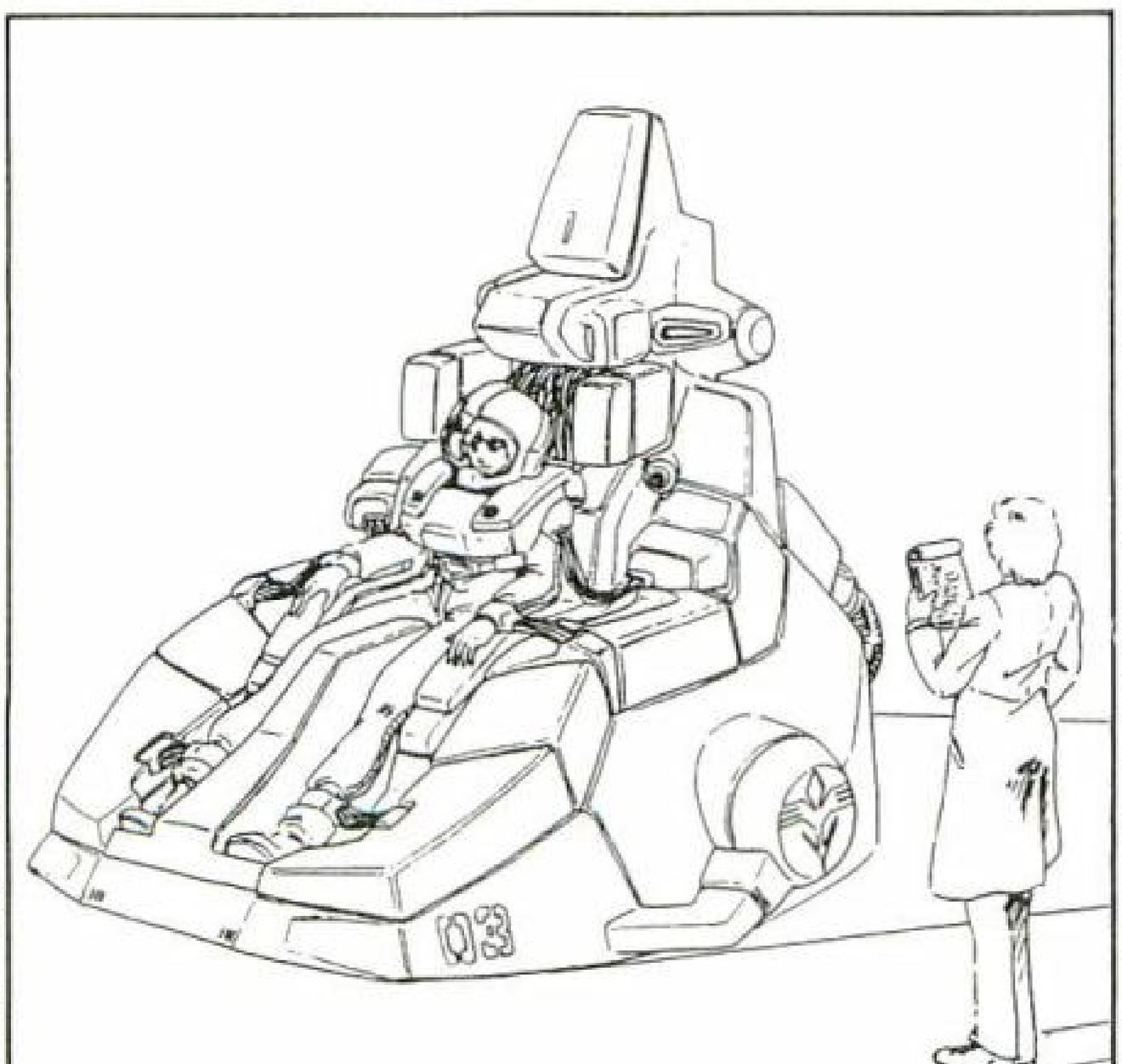
人が宇宙で生活するスペースノイドとなった時、宇宙空間での生活に適応するための柔軟な思考力や、より広い認識力が必要となる。このような宇宙への対応した人類の進化を予言したのが、ジオン・ズム・ダイクンである。それゆえ、彼は人類の宇宙への移住を提唱した。

具体的にはニュータイプとは相手の意志や感情を認識する洞察力が常人よりも優れている人々を指す。ジオン公国ではMSパイロットの中に異常に高い戦績、生還率を持つ者が確認され、フラナガン機関でその特性が科学的に証明された。戦闘時の緊張が引き金となって、能力が異常に高くなり、一種の予知も行われる。

サイコミュ

サイコミュは正式にはサイコ・コミュニケーターという。フラナガン機関がニュータイプの研究中に被験者の脳から感応波が検出されたことからこの装置の開発が始まった。

感応波（サイウェーブ）を原理としてはこの感応波をコンピュータ言語に翻訳するインターフェイスである。考えたことをダイレクトにマシンへ伝達するため、反応速度が極めて速く、試験的にMAに搭載した結果、従来の操縦方式よりも機体を円滑に操ることができた。また、同時に多数の機器を操作可能で、有線制御式メガ粒子砲と無線誘導方式の無人随伴攻撃機、ビットを多数操り、オールレンジ（全周囲）攻撃が可能となる。



サイコミュ連動システム〝据え置き型試作第3号機〟

イラスト／星野秀記

ミノフスキー粒子

この粒子は静止質量がほとんどゼロの正か負に帯電した素粒子で、立方格子状に整列し、フィールドを形成するという特性を持つ。発見者はミノフスキー物理学の祖、トレノフ・Y・ミノフスキーである。ミノフスキー物理学は、ミノフスキー粒子の物理学とその応用技術で、核融合炉の実用化、電波妨害、メガ粒子砲、反重力（ミノフスキー・クラフト）など軍事技術の発展を促した。

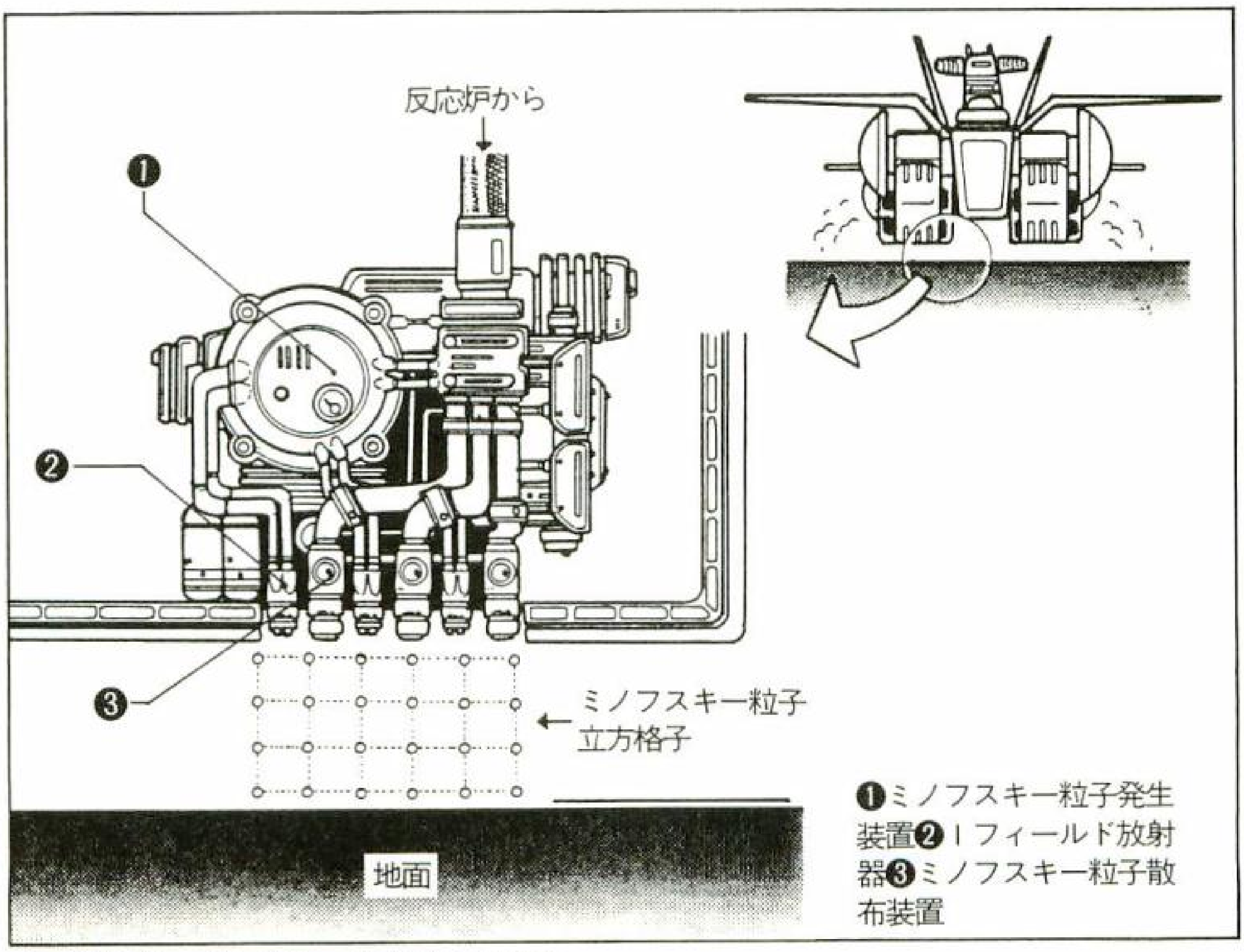
サイド3のミノフスキー物理学会で応用技術が研究されたが、0072年ミノフスキー氏は戦争を防止するため、連邦に亡命し、その技術を伝え、さらにエネルギーCAP技術などを開発した。

ミノフスキー・クラフト

ミノフスキー物理学の応用技術による暫定的反重力システムである。ミノフスキー粒子が形成する立方格子の場（Iフィールド）に対する反発場によって空中浮揚を可能とする。兵器に使用された例としては公国軍のMAX-01、3アッザムと連邦軍の強襲揚陸艦ホワイトベースがある。まだ、完成された技術ではなく、通常の推進システムの併用が不可欠である。

ホワイトベースはこの反重力推進システムにより、単独で大気圏突入・離脱が可能であった。

システムの欠点としては、ミノフスキー粒子発生装置が小型化できないことでMSクラスの機体では搭載不可能だ。



ミノフスキー・ジェネレータ（クラフト用）

ビーム兵器

従来の荷電粒子兵器（PBW;Particle Beam Weapon）に変わる強力な新兵器が、ミノフスキー粒子兵器（MBW;Minovsky Beam Weapon）である。

MBWにはメガ粒子砲、ビームサーベル、電波攪乱、ミノフスキークラフト等々多数知られているが、中でも最も典型的な攻撃兵器であるメガ粒子砲について、その原理を構造と照らし合わせながら解説すると、次のようになる。

メガ粒子砲は大別して発生区間、蓄積区間、成長区間、射出区間の部分から成り、その発射過程を構造と対応させながら解説すると次のようになる。

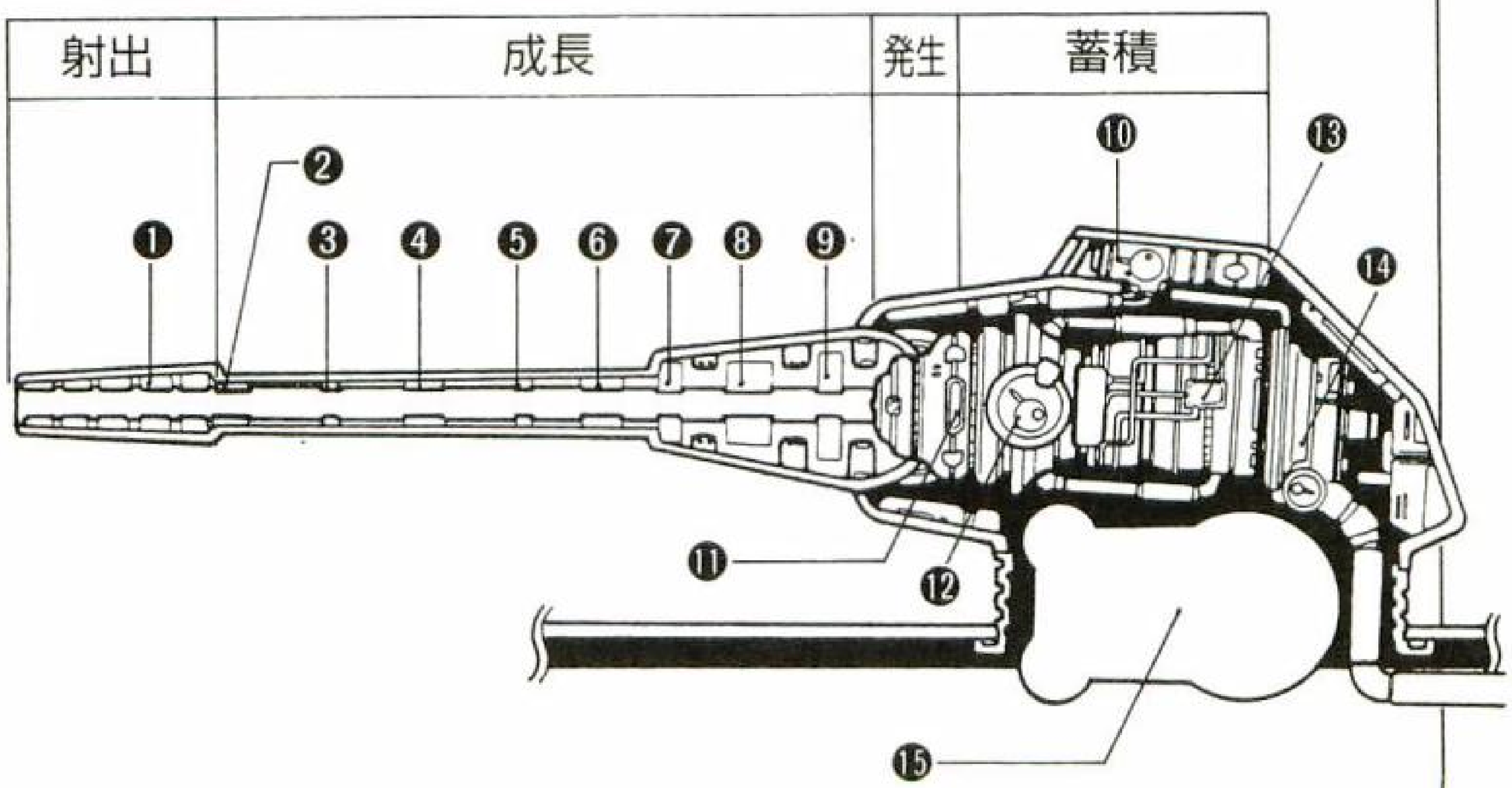
発射の信号が、本体CPMから腕部のコネクタを通してビーム砲内CPMに送られると、エネルギーコンデンサで強力なIフィールドにより、発生区間でミノフスキー粒子は圧縮され縮退・融合してメガ粒子となる。その際に、その質量の一部が運動エネルギーに変化する。

高エネルギー状態となったメガ粒子は蓄積区間へ送られ一定値になるまで貯えられる。その値を越えたメガ粒子はビーム発生装置へ送られ開放される。

その結果ビーム状態となったメガ粒子は、成長区間で数個の加速リングと収束リングを通過する過程で、到達地点で最大の破壊力を発揮できるように調整されていく。

そして発射区間で弾道が安定するよう調整され目標に向

艦載メガ粒子砲（ムサイ・タイプ）



❶ガイドライン❷第1加速リング❸第1収束リング❹第2加速リング❺第2収束リング❻第3加速リング❼第3収束リング❽第4加速リング❾第4収束リング❿照準用光学センサー⓫ビーム発生装置⓬メガ粒子発生装置⓭エネルギー：コンデンサー⓮動力コネクター⓯砲塔動力系

けて発射される。
これがメガ粒子砲の構造原理概論である。
このようなしくみを持つメガ粒子砲は、種々の大掛かりな装置を必要とするため、エネルギーCAP(Energy Capacitor)が開発されるまでは戦艦の主砲などにしか用いることができなかった。
エネルギーCAPとは、Iフィールドにより圧縮され高エネルギー化したミノフスキー粒子を発生させるエネルギーコンデンサーを省略でき、MSに装備しうる大きさまで小型軽量化が可能となった。
ちなみに、ミノフスキー粒子をメガ粒子に縮退させるためのエネルギーは主部のコネクターを通して本体より供給されるシステムをとっている。
ビームサーベルやビームジャベリンの原理は、メガ粒子の直接放出時に出る熱エネルギーを用いたものである。これにも小型メガ粒子砲と同様に、エネルギーCAPが用いられ同一原理でメガ粒子を発生している。

対ビーム・バリア

ミノフスキー粒子の極性を応用した防御兵器。機体の周囲に強力なIフィールドを発生し、それによってビームの弾道を変え、機体への直撃を回避するものだ。
膨大なエネルギーと大規模な装置を必要とするため、あまり広くは用られていない。

MS用メガ粒子砲（RX－78タイプ）

❶ガイドライン❷第1加速リング❸第1収束リング❹第2加速リング❺第2収束リング❻第3加速リング❼第3収束リング❽照準用光学センサー❾ビーム発生装置❿メガ粒子発生装置⓫エネルギーCAP⓬補助動力系コネクター⓭制御系コネクター⓮補助センサー⓯補助グリップ駆動用モーター

MS【MS用語辞典③】

9 Mossary

ビット〜モビルスーツ

ビット【Bit】 MAN-08に装備された無人随伴攻撃機。サイコミュと増幅されたニュータイプ・パイロットの感応波によって遠隔操作される。機体内にジェネレータを搭載し、メガ粒子砲を稼動させている。

プロペラントタンク【propellant tank】 燃料（推進剤）タンクのこと。ここでは外部取り付け式のものをさす。主にMSの行動範囲や戦闘時間を延長するため付加的に装備される。タンクは2層構造で推進剤と冷却剤が入っている。

マグネットコーティング【magnet coating】 RX-78-2の駆動系（主にアクチュエータ）の摩擦抵抗を軽減するために施した磁気被膜処理のこと。これによって機体の反応速度は従来の3倍に向上した。

マニピュレータ【manfpulate-】 広義な意味では人工の腕。ここではMSの腕をさす。本来、MSは搭乗者の能力を拡大する宇宙用強化服という概念があった。汎用MSに見られる高い作業性はまさにその具現化といえる。MSのマニピュレータは人間の腕と変わりない動きを再現できると同時に、各所に触覚センサーを備え、コンピュータとの相互フィードバックにより精密作業も可能となった。

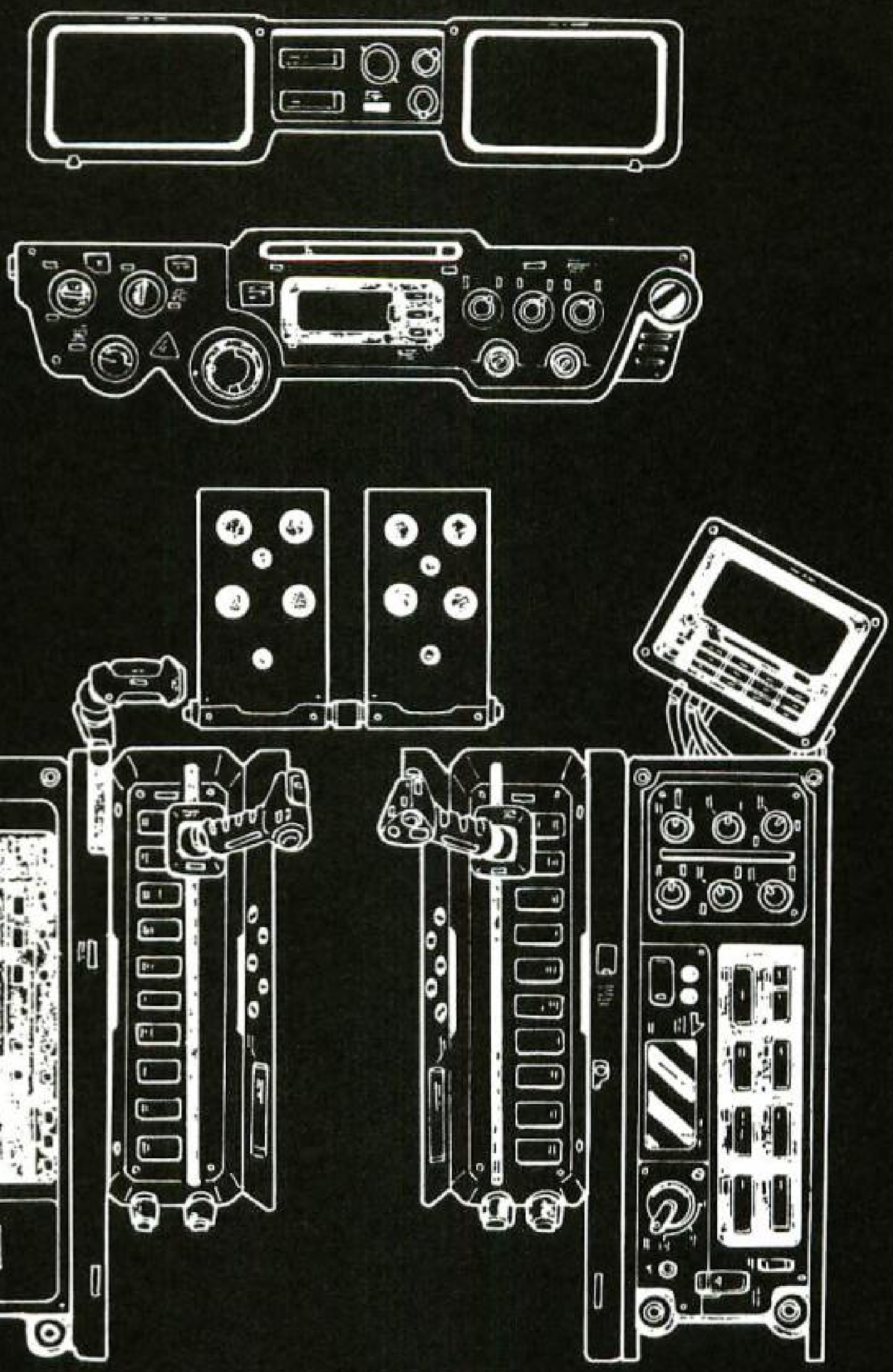
メガ粒子砲【Mega particle beam gun】 この世界のビーム兵器の主流を占める。開戦当時は宇宙艦艇の主砲として用いられていたが、RX-78からMSにも装備可能となった。この兵器の欠点はエネルギー消費量が激しいため、在来砲のような連射ができず、また一度炉の出力を落とすと砲の再射撃まで時間がかかるという欠点がある。だが、エネルギーCAP【Energy Capacitor】を採用したビームライフルではその欠点が補われつつある。

⬇P92『メガ粒子砲』

モノアイ【Mono eye】 公国軍製MS、MAのメインカメラ。電子光学カメラを中心にレーザー系、赤外線系センサーを周囲に配した複合センサーである。このモノアイ以外にも外部カメラが機体各所に装備されている。なお、RX-78のメインカメラはツインアイと呼ばれている。

モビルアーマー【Mobile armmer】 ⬇P44『モビルアーマーの登場』

モビルスーツ【Mobile suit】 ⬇P36『モビルスーツの誕生』



MS操縦マニュアル

M.S. Pilot Manual

●このコーナーは正確な意味での"マニュアル"ではない。500とも1000ともいわれるパイロットワークの全てを少ない紙面で説明することは不可能だ。そこで基本的な操縦の概念を伝えるだけにとどまった。だが、それだけでもMSに新たな魅力を憶えるだろう。

Illustration by Hitoshi Hukuchi.

MS操縦マニュアル

1. コンソール解説

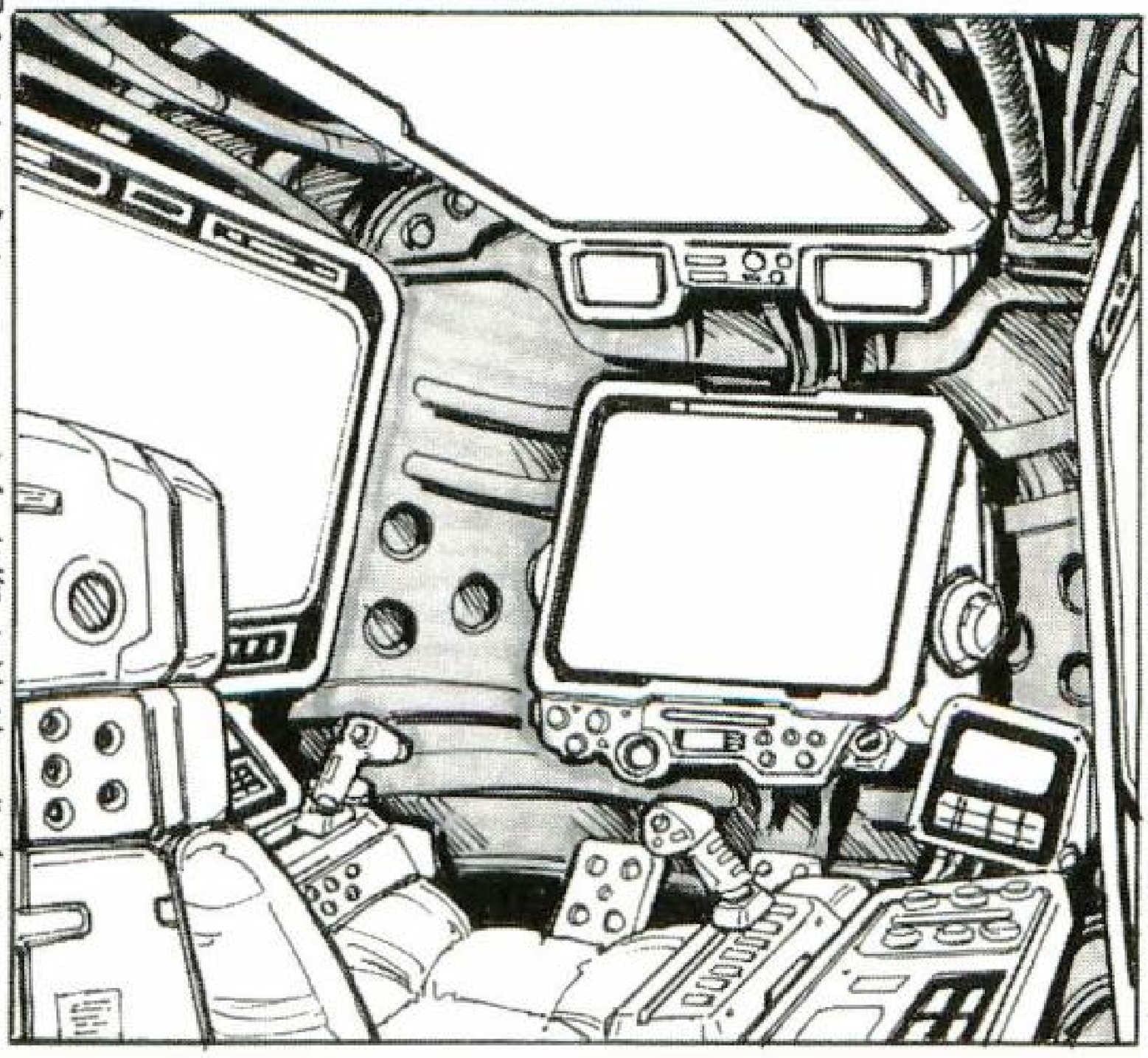
今、君が座っている場所はMS（モビルスーツ）のコックピットだ。機体はジオン公国軍製MS、型式番号MS－14JG、愛称〝ゲルググJ（イエーガー）〟である。まぎれもなく公国軍最新鋭機だ。

君が目の前にしている数々のモニターとコンソールは、第2期生産型MSの共通操縦装置だ。もし、君がこのゲルググを乗りこなすことができるならば、MS－06FザクII、MS－R09IIリック・ドムにも乗れるということだ。

では初めに操縦装置の役割を教えよう。まず、4方向にあるモニター。頭部のモノアイを始めとする機体12ヵ所にあるカメラが機体外部の映像を写し出してくれる。カメラの視点はMSの頭に設定されているから、コクピットよりずっと上にあるということだな。通常戦闘の場合は気にしないでよいが、MSとの格闘戦の場合、つい正面にくる敵の武器を避けようとMSの腕を上げてしまう。間違えるなよ。君のいる位置は頭より下なんだ。最も重要な場所はコクピットだということを忘れちゃいかんぞ。

トップモニター（頭の上）の下に2つの小さなモニターがある。右が通信用で左が後方警戒用だ。母艦の格納庫内（そら）ならいざ知らず、宇宙に出たらミノフスキー粒子のせいで、近距離でも映像など届きはしない。音声だけでがまんしろ。後方用のモニターは、敵が後方に回り込むと警戒音を出して教えてくれる。機外のカメラを切り換えたい時は、左サイドコンソールの⑭のスイッチを使え。戦闘でカメラが壊れた場合は自動で切り換わるぞ。

次は操縦装置の中で使用頻度が高いスティックとフットペダルだ。まずスティックは機体の飛行方向を制御する役割がある。同時に戦闘時のトリガー、武器セレクターがついている重要な装置だ。フットペダルは右がスロットル、左が逆噴射及びブレーキだ。MSは動作の大半をコンピュータが代行している。従って、基本操縦は戦闘と変らない。このスティックとペダル操作を誤らない限り、小学生でも動かすことはできるぞ。



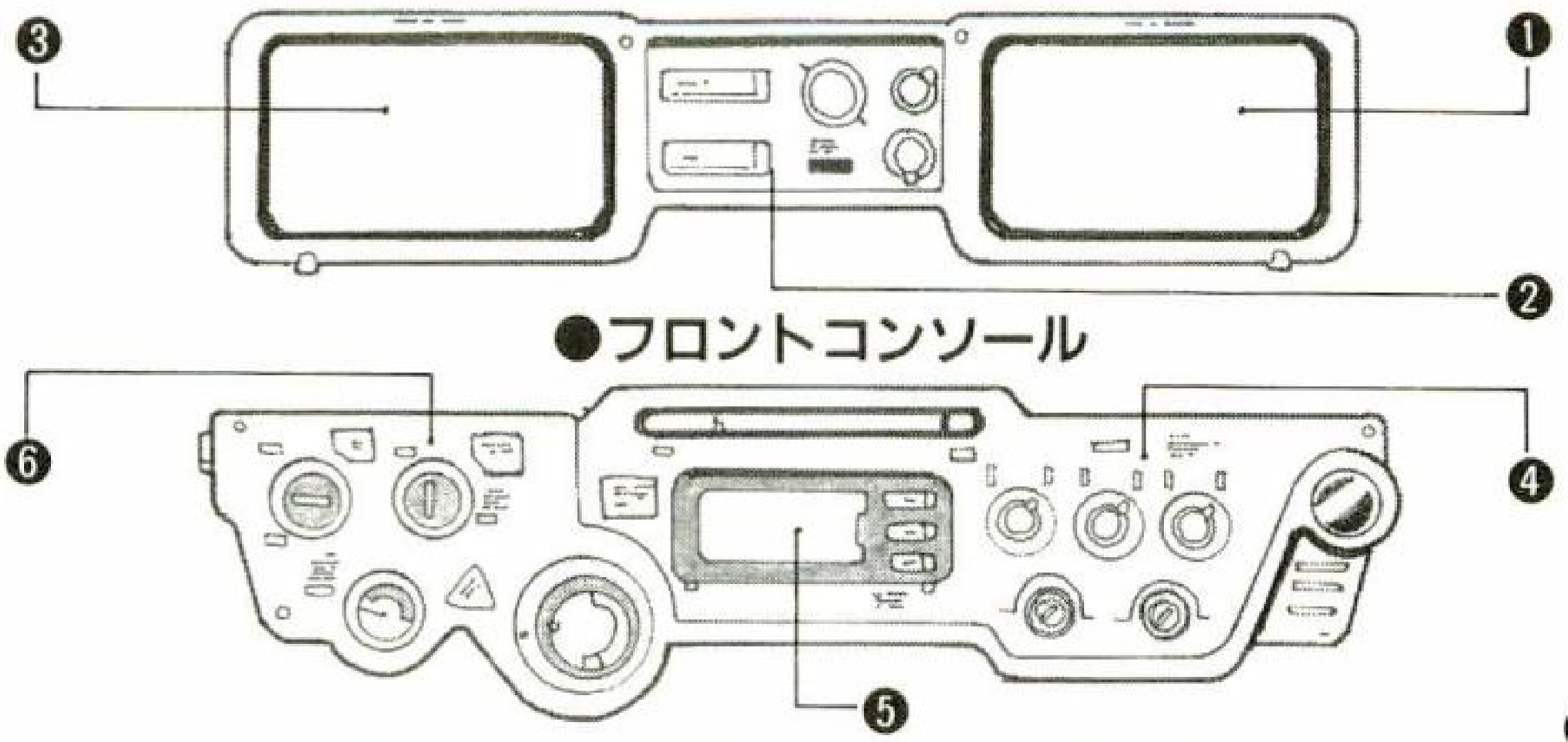
コクピット

イラスト／福地 仁

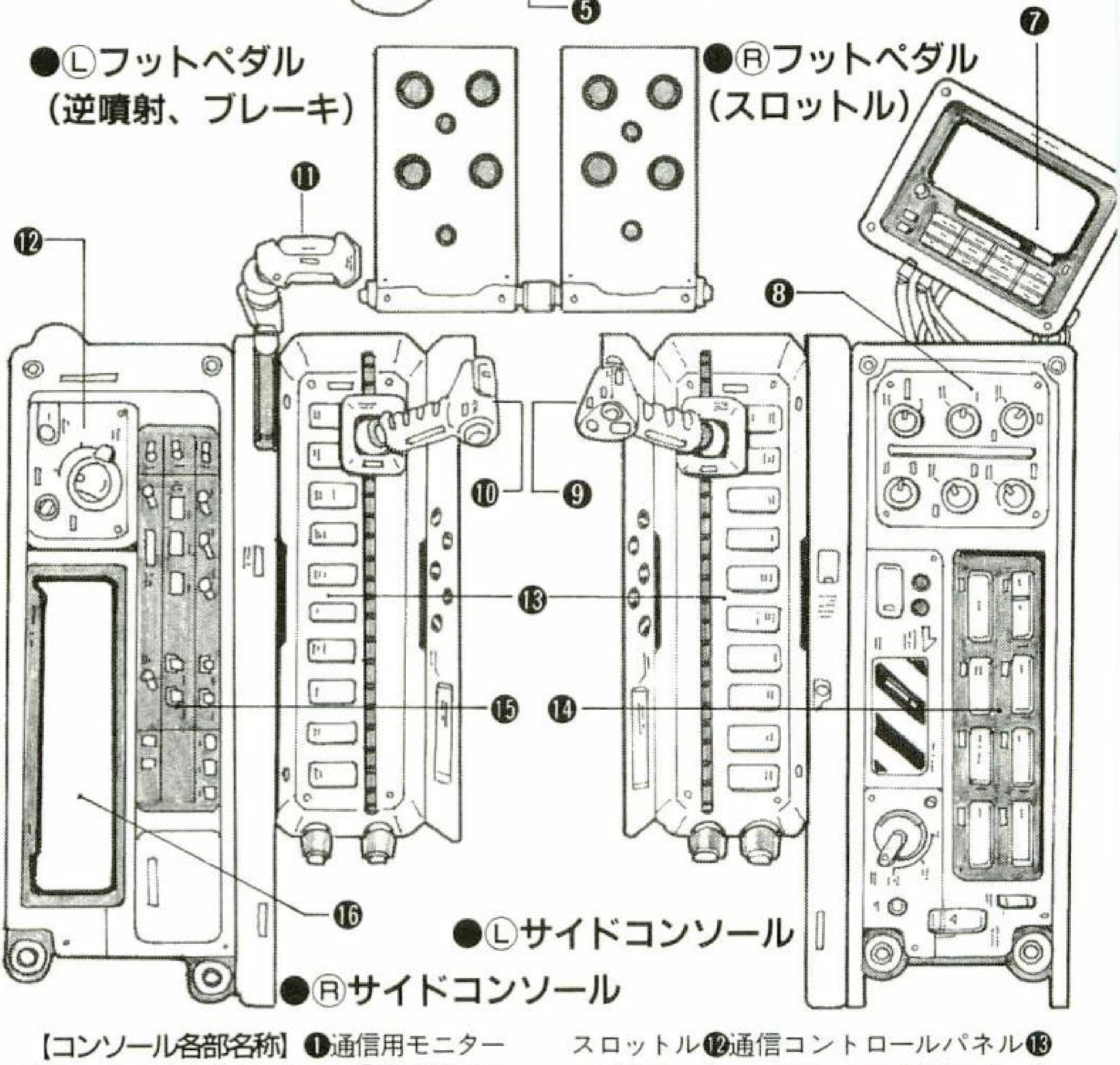
MS.PILOT MANUAL

パネル＆コンソール展開図

●トップコンソール



●フロントコンソール



【コンソール各部名称】❶通信用モニター❷センサーモードセレクター❸後方警戒モニター❹モニター切り換えスイッチ類❺脅威警戒パネル❻ジェネレータ起動系❼インデックス・サブコンソール❽駆動系・燃料系モードセレクター❾Ⓡコントロールスティック❿Ⓛコントロールスティック⓫スロットル⓬通信コントロールパネル⓭アポジモーター・マニュアル超動スイッチ⓮ワーニングモニター⓯外部モニター用モードセレクター⓰予備パネル（機体ごとに異なる）

2. 発進シークエンス

さて君たちには実際にMSを操縦して宇宙に出てもらおう。君の発進は一番最後にする。

☆

よし、君の機体は良好な状態にある。⑧の駆動系モードセレクターを『歩行』に合わせて、右フットペダルをゆっくり踏み込め。機体が前に歩き出す。強く踏むと走り出してしまうぞ。オペレーターの指示に従いカタパルトに向かえ。方向転換はスティックで、止まる時は右ペダルを戻し、左ペダルを踏め。

カタパルトに接続したら、スラスターのアイドリングを開始しろ。⑧の駆動系・燃料系モードを共に『カタパルト射出（シュート）』に合わせ、⑪のスロットルレバーのロックを解除し、アイドリング位置（ポジション）に合わせる。この段階でもう一度ワーニングモニターをチェックしろ。燃料系はアイドリング状態でないとチェックが充分ではないぞ。

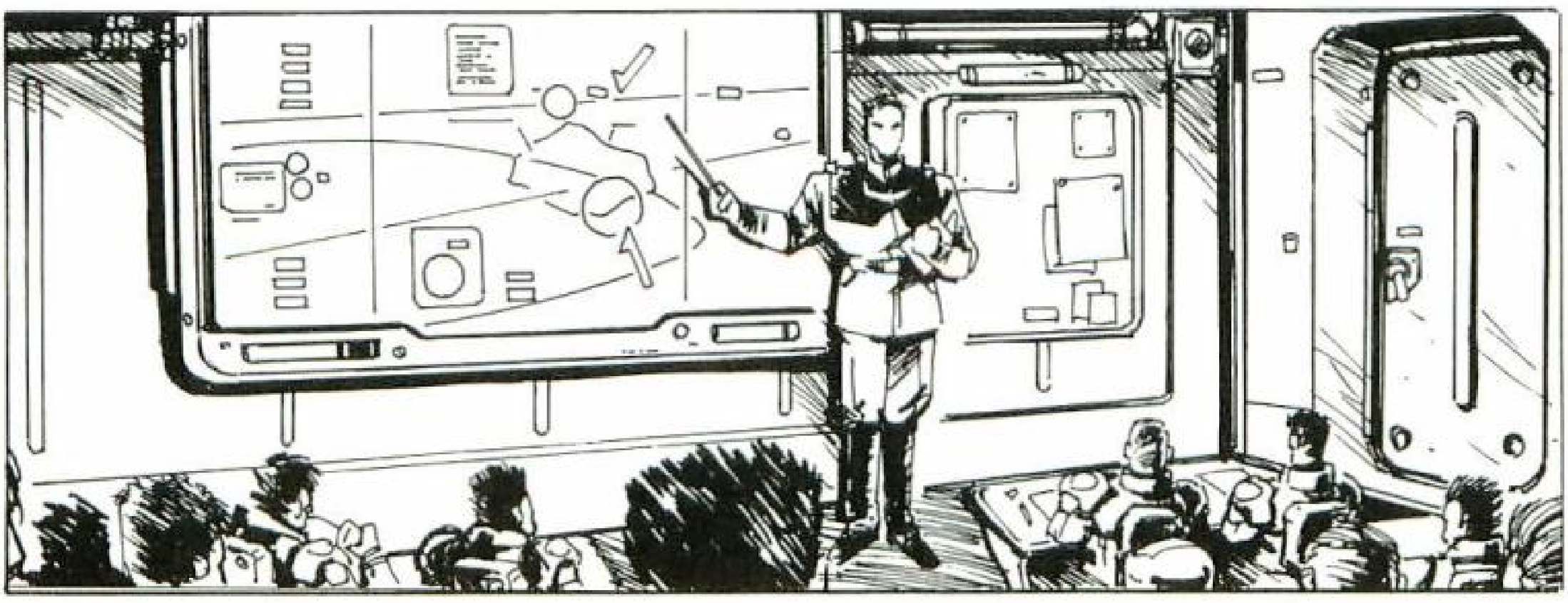
次はスロットルをタキシング位置（ポジション）へ。カタパルトを使った発射の場合、スラスターは使わないが、緊急時はカタパルト始動と共にスロットルを押し込むように。

カタパルト発進はオペレーターの指示を待つ。発進許可が降りたら左ブレーキを解除。するとカタパルトが作動し、宇宙へ射出される。

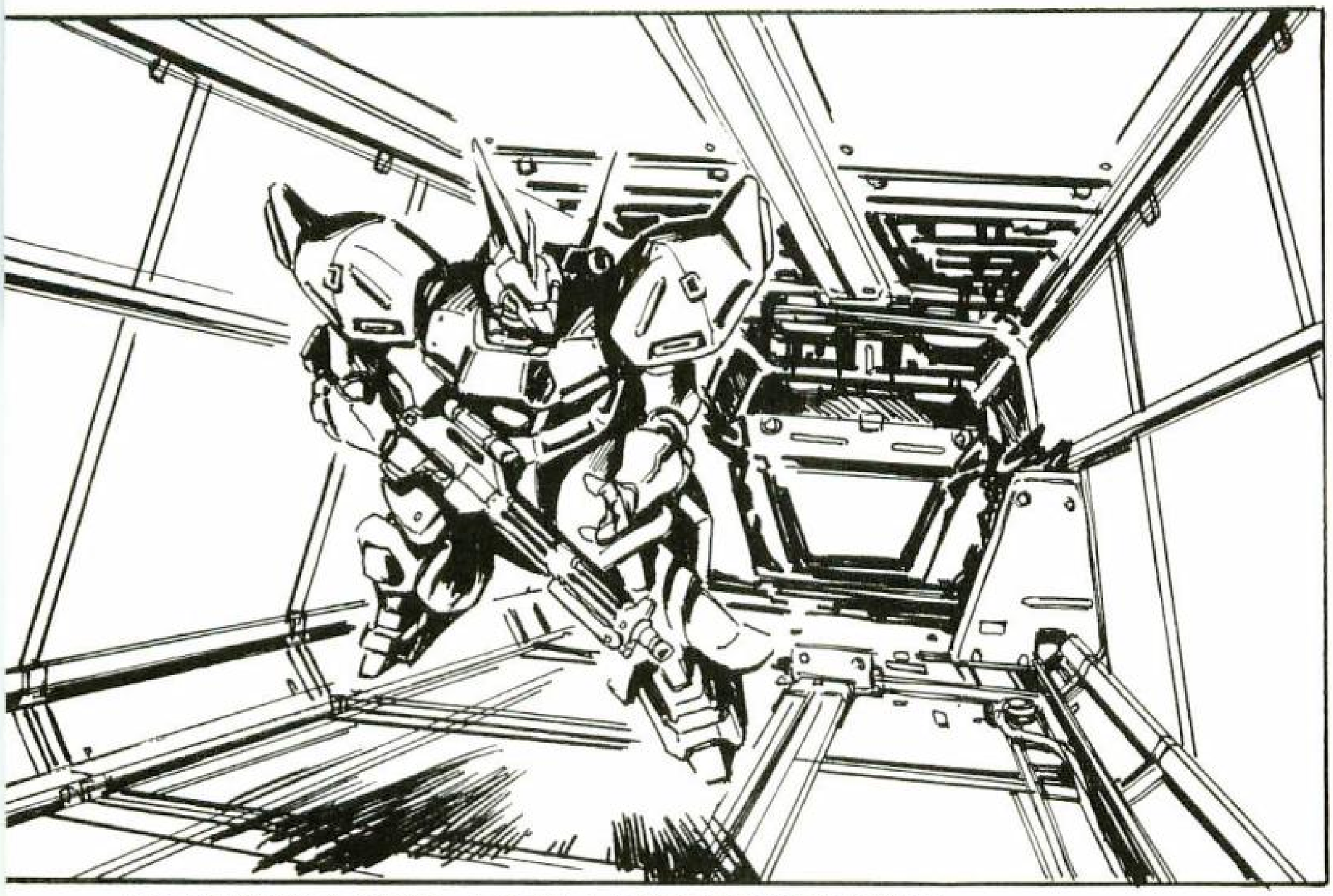
「いきまーす」なんていってると舌を噛むぞ。

スティックを使って機体の方向を設定し、修正機とフォーメーションを組む。機体の慣性を利用し、スラスターはで

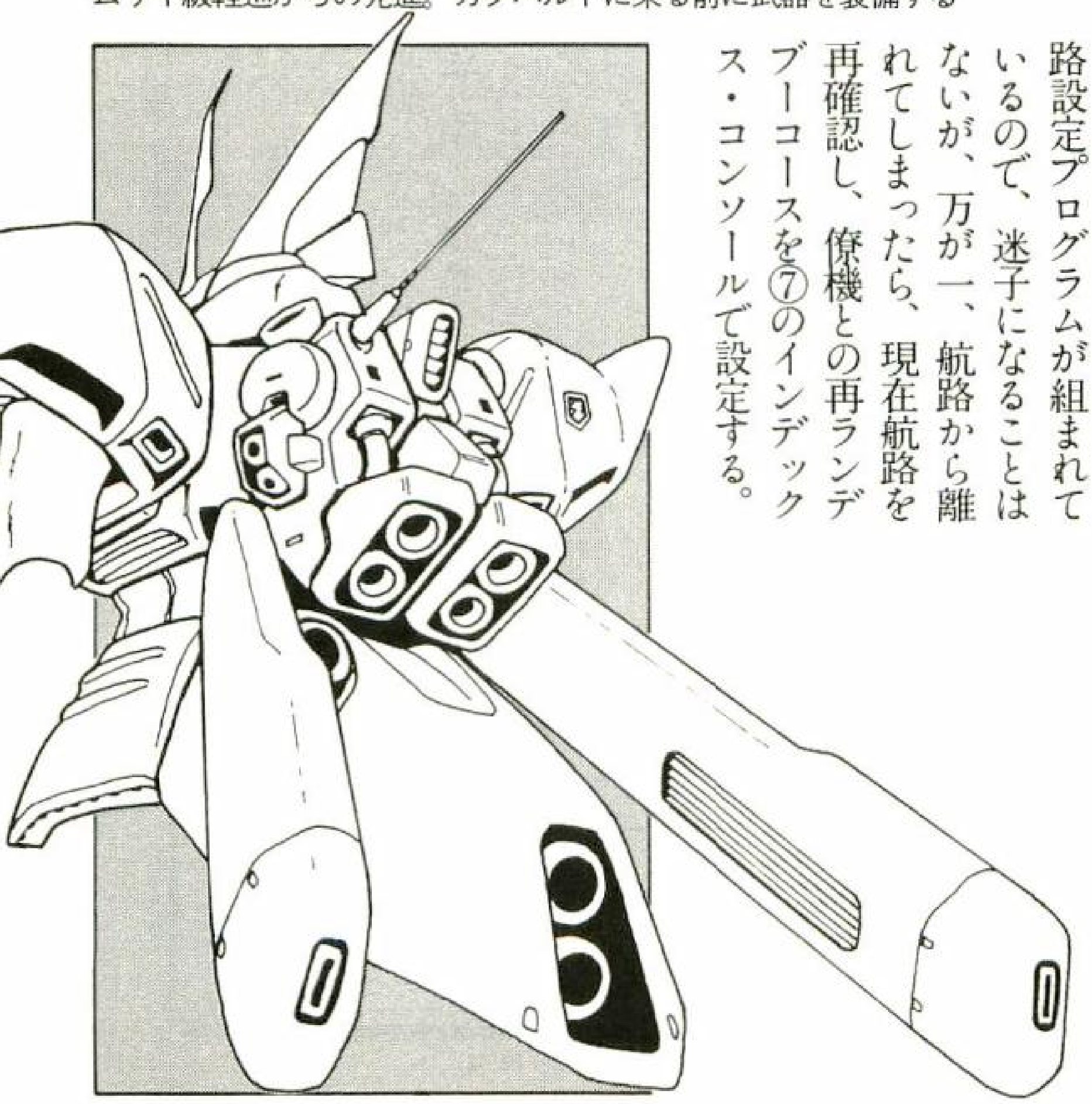
プリフライト・ブリーフィング風景



MS.PILOT MANUAL



ムサイ級軽巡からの発進。カタパルトに乗る前に武器を装備する



きる限り使用しない。僚機の位置は友軍のビーコン光を探してつかむ。無線はあてにしてはいけない。

通常のミッションでは、航路設定プログラムが組まれているので、迷子になることはないが、万が一、航路から離れてしまったら、現在航路を再確認し、僚機との再ランデブーコースを⑦のインデックス・コンソールで設定する。

作戦によってはプロペラントタンクの追加装備を必要とする

3. 戦闘シークエンス

⑤の警戒パネルにある小モニターが点灯しているぞ。モノアイの赤外線センサーがロケットの噴射光をキャッチしたのだ。②のセンサーモードを『索敵（スキャン）』に変えろ。モノアイが自動的に敵を求めて施回するぞ。

再度、警戒パネルがシグナルを出したな。捕捉した敵影がメインモニターに拡大して写し出されるはずだ。

友軍機ではない――連邦のジムだ！

戦闘経験（クルージング）のない君では無理だ。『巡航』モードから『戦闘機動（バット）』モードに切り換え、敵の射程から全力で脱出しろ。逃げるのは嫌だって!?

しかたない。サポートしてやるからしっかりやれ！

☆

駆動系・燃料系モードセレクターを確認しろ。『戦闘機動』だぞ。右スティックにある戦闘モードセレクターを『射撃戦』モードへ。トリガーロックを解除すると同時に、メインモニターにレティクル（照準）が表示される。センサーは敵機の発する噴射熱をとらえ続け、シンボル表示している。レティクルとシンボルを重ね合わせるようにスティックを動かすのだ。

ロックオン！

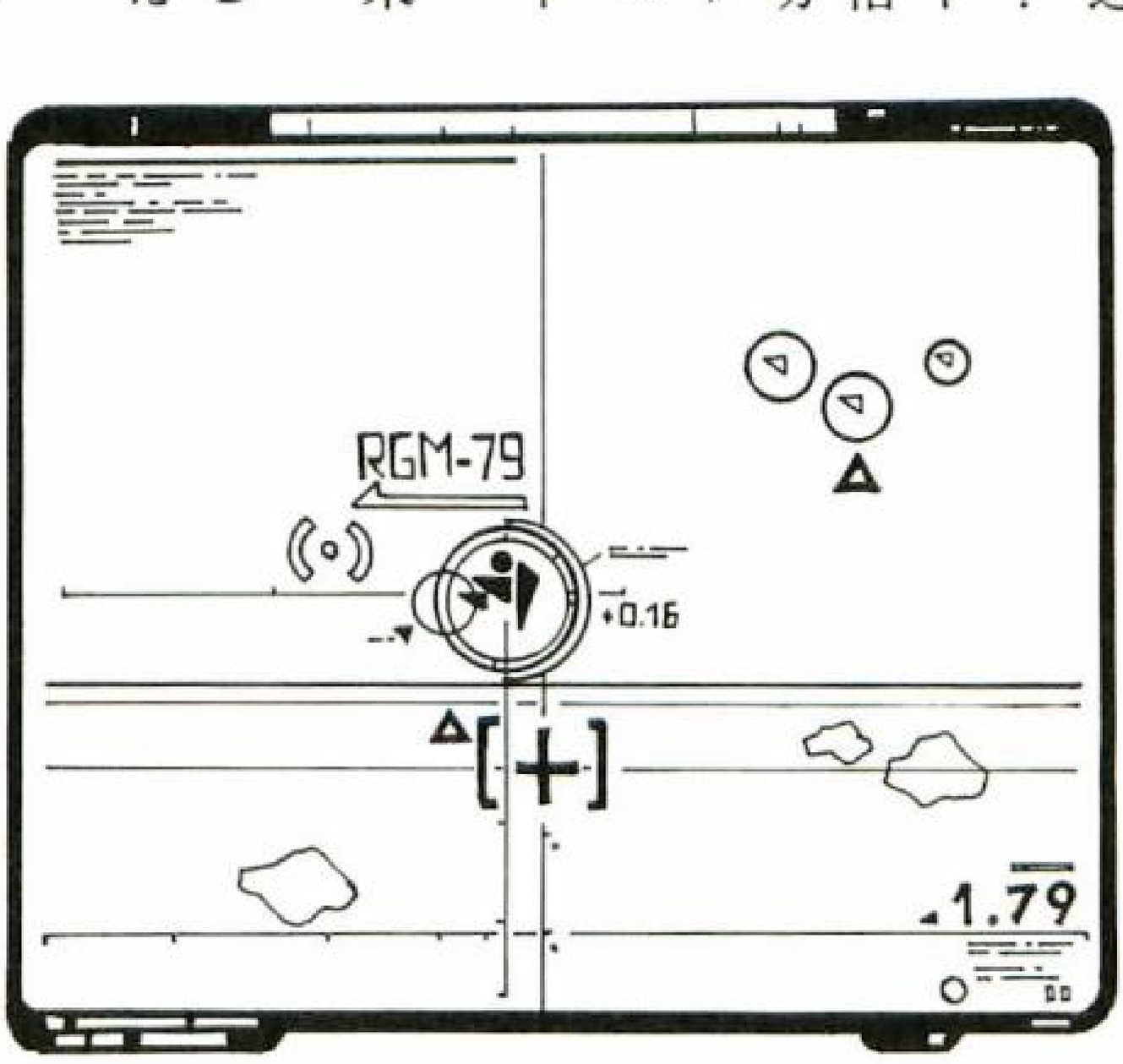
トリガーを引け！

☆

大丈夫か？　敵の先制攻撃をくらったな。機体チェックと敵機の位置の確認を同時にやれ。右マニピュレータが肩から消えているようだな。他には異常なしと……。敵機が接近してくるだと！　すぐに戦闘モードセレクターを『格闘戦』モードに切り換え、インデックスコンソールで、アームズセレクト面を呼び出して、ビームソードの条件設定を変えろ。それで左腕でもビームソードが使える。

よし、スロットル全開（フル）！　3秒でいい！　噴かし過ぎると推進剤がなくなる。

格闘戦モードでは、右ステイックのトリガーがビームソードの打ち込みスイッチになる。



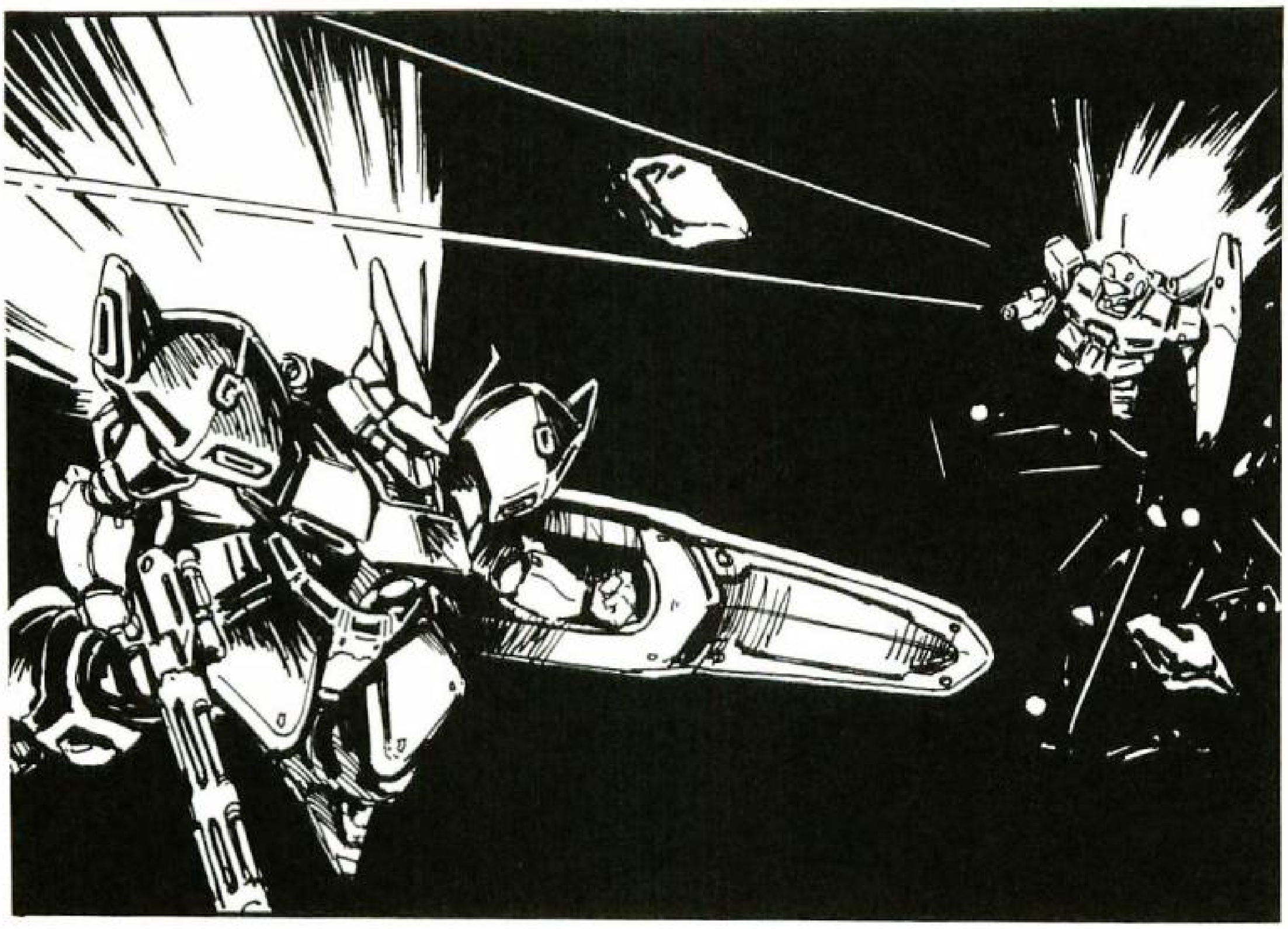
メインモニターに表示されるレティクル（照準）

敵機もビームサーベルを抜いた。超高速ですれ違う際に、トリガーを引け。

よし！　敵機の左腕を飛ばした。止めをさせ。機体を反転させ、フルスロットル。追撃しろ。

MS.PILOT MANUAL

ドッグファイト！　CMPを多用するとあっという間に推進剤が底をつく



警戒（ワーニング）！

スティックを引いて上昇しろ！　60ミリバルカン砲だ。

☆　☆

バカ者！　スロットルを踏み込みすぎだ。高Gによってお前は数秒だが気絶していたのだ。狙い撃ちされなかったのは幸運だった。

ジムは逃げていった。早く減速して、航路設定をやり直せ。モードを『巡航』に戻し、推進剤の残量チェック。機体損傷チェック。やることは山ほどあるぞ。

アポジモーター2基が不調だと？　⑬のマニュアル起動スイッチを押して見ろ。正常に作動すれば青いランプがつく。しなければ赤いランプだ。

1基は完全に故障しているな。あきらめろ。他のアポジモーターで補正できるだろう。

航路プログラムが修正できたら、再発進だ。推進剤が少ないのでスロットルは50パーセントまで。

センサーモードは『警戒（ワーニング）』へ。まだ、先程の敵がどこかに潜んでいるかもしれんからな。

巡航速度に達したら慣性飛行に移る。スロットルをアイドリングに。

先程の戦闘だが、敵機はビームガンを持っていなかった。別の戦闘で失ったのだろう。先制攻撃はバルカンの直撃弾をちょうど肩のジョイントに受けた。ゲルググの装甲は強固だが、無装甲部の着弾では耐えられるものではない。お前も狙うならジョイントにしろ。

4. 脱出シークエンス

では脱出について教えよう。機体の損傷が激しく、操縦不能になった場合は、脱出装置によって機外にシートごと射出される。

ではその手順を解説する。

まずシート下のボックスを開き、内部の脱出リングを引く。今までの例ではコンピュータによる自動システムで射出されることが多いが、あまり機械に依存してはいかん。機械は常に故障する危険性があるのだ。

リングを引くと腹部の装甲がはね上り、宇宙ではコクピット内の空気が一挙に放出される。ヘルメットのバイザーをいつも閉めておく習慣を身につけておくように。また、減圧する時間がないので、装甲が開くと同時にコクピット中の空気が一挙に放出される。

脱出装置が作動して0・2秒でシートが射出される。この時の最大加速度は16Gで、シートのロケットモーターは最長30秒間作動を続ける。射出5秒後には機体から1キロは離れるため、搭乗機の爆発に巻き込まれる心配はほとんどないぞ。

戦闘宇域からの脱出後は、減速して友軍の作戦行動半径から離れ過ぎないようにする。

シートにはアポジモーターが装備されスティックの操作で点火される。生命維持装置や救難信号用の通信器やビーコンはバッテリーとシート下の太陽電池板によって稼動する。また、シートにはエアーボンベ、食品、飲料水、信号

脱出パターン．1／強制装甲排除

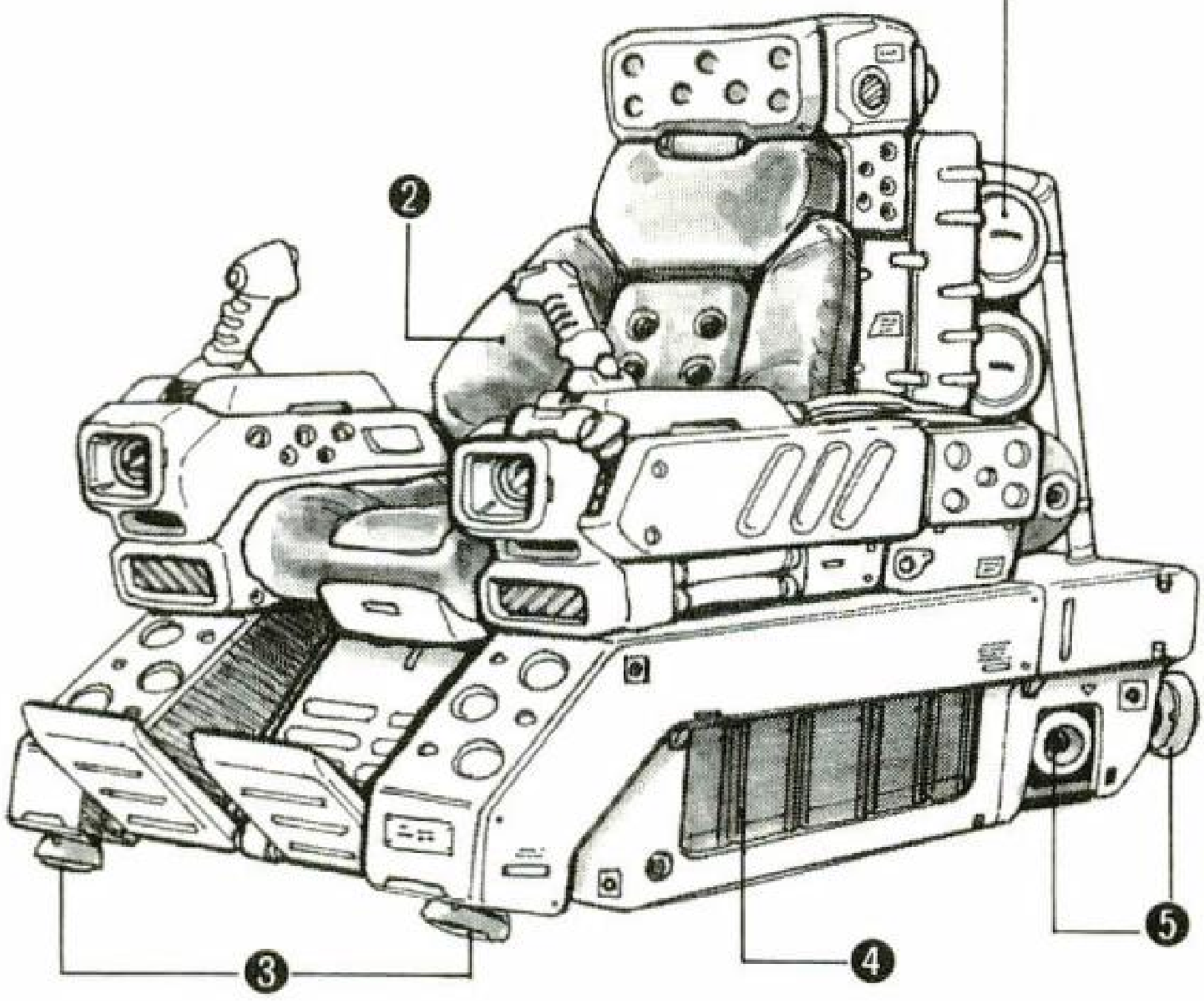


MS.PILOT MANUAL

ジオン公国軍第2生産型MSイジェクションシート／各部名称

❶エアーボンベ
❷耐Gシート
❸アポジモーター
❹太陽電池パネル

●単独の宇宙機として使用できる脱出シート。パイロットの生命にかかわるため、エアボンベ、食料、飲料水は1ヶ月ごとに交換、チェックが義務付けられている。



銃、ワイヤー射出機などが装備されている。

脱出後は救難信号を出し続け、ひたすら待つしかない。空気が5日分、食料と水が3日分しかないが、友軍が必ず助けに来ると信じて待て。

友軍が救助に来たら、おちついて対処しろ。アポジモーターの推進剤が残っていればゆっくりと接近して救助隊の指示に従え。たとえ空気の残量が少なくてもあわててはいかん。彼らはなすべきことを理解しており、最短の時間で君を救助しようと努力しているのだ。

また、敵軍が来た場合も同じように救助を受けろ。生存者の救出は敵味方を問わず義務づけられている。捕虜の扱いは南極条約で決められており、虐待を受けることは少ない。

☆

ここまでは宇宙空間での脱出方法を述べたが、コロニー内、月面、地球でもこの脱出システムは作動する。

まず、コロニー内は回転軸に近いほど人工重力は低くなる。従ってMSの空中戦は可能だ。その際、脱出する場合はシートのアポジモーターの推力で着地する。可能ならば回転軸にそってシートを射出することで飛行距離を稼ぐことができる。宇宙と違って空気の抵抗があり、下手をすると爆発にまきこまれる危険性もあるからな。

月面、地球では着地したあとシートから出て全力で逃げ遮蔽物を探し隠れろ。シートの移動能力は低いから、機外への脱出程度に考えるのだ。

☆

5. 帰投・着艦シークエンス

さて任務は完了した。君は傷付いた機体を何とか母艦まで持っていくことができた。機体の異常を伝えるワーニングランプは点灯しっぱなしだ。通信も音声なら通りそうだ。オペレーターに現状を伝えて1番に着艦させてもらえ。

そうか、ダメだったか。仕方ない。炉を停止させて、救助を待て。なに！　絶対自力帰還するって。強情な奴だ。

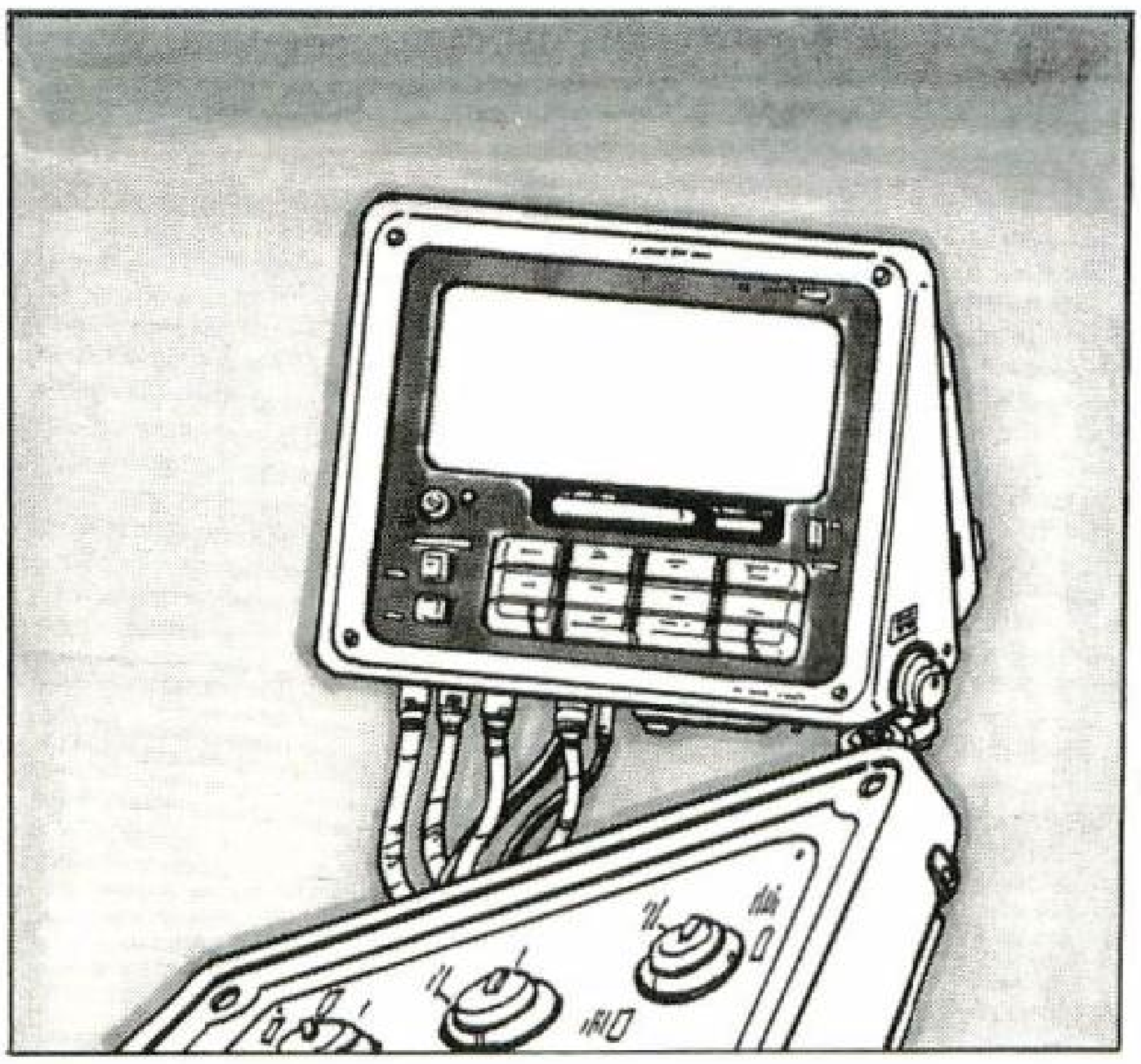
☆

甲板に接地後、脚部のマグネットをONにして、固定する。スロットルはアイドリングに戻し、『歩行』モードに換える。

ハンガーについたら、モードを『整備』へ。これで自動的にスラスターは停止し、各

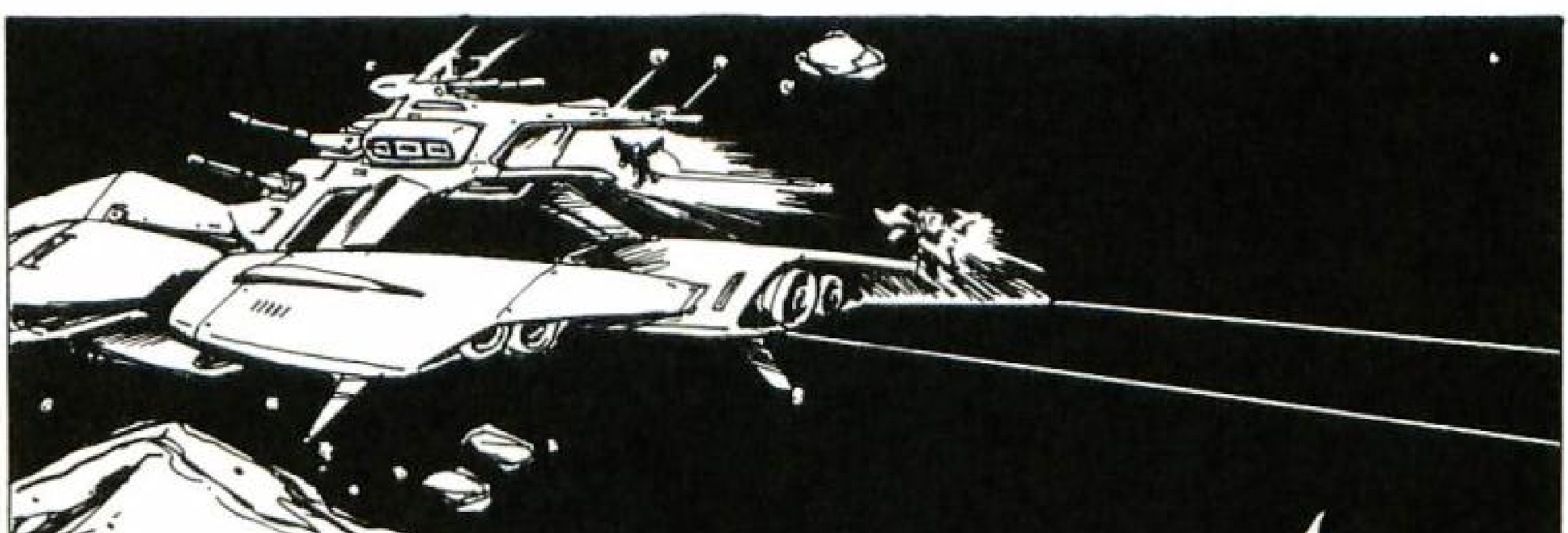
駆動系はロックされる。最後にジェネレータを停止させて機外に出ろ。

生還おめでとう。君はよくがんばった。



帰還時にはインデックス・サブコンソールを引き出し、航路設定する

着艦時には艦管制官の指示に従い、着艦コースに乗る



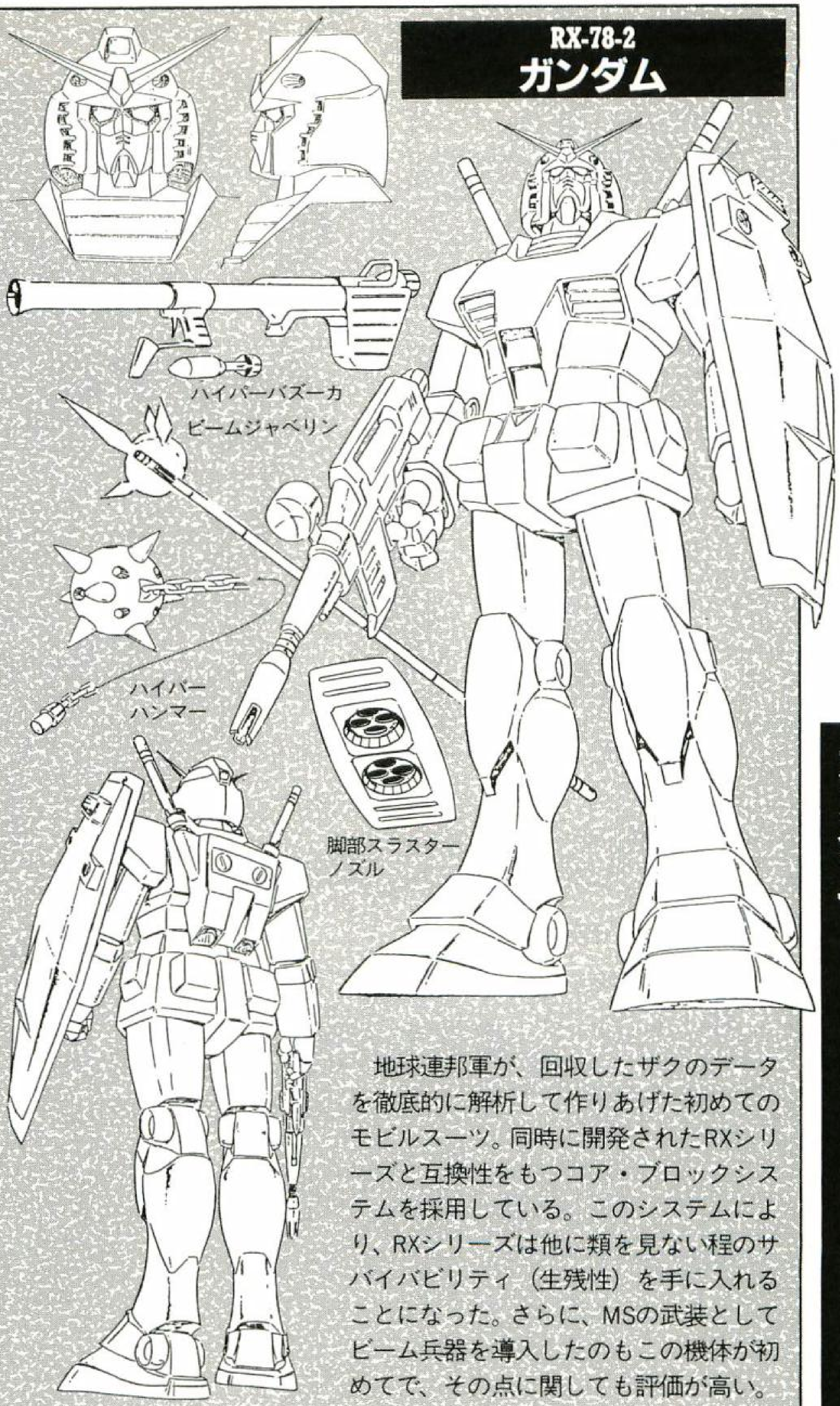


MS設定資料集

M.S. Design collection.

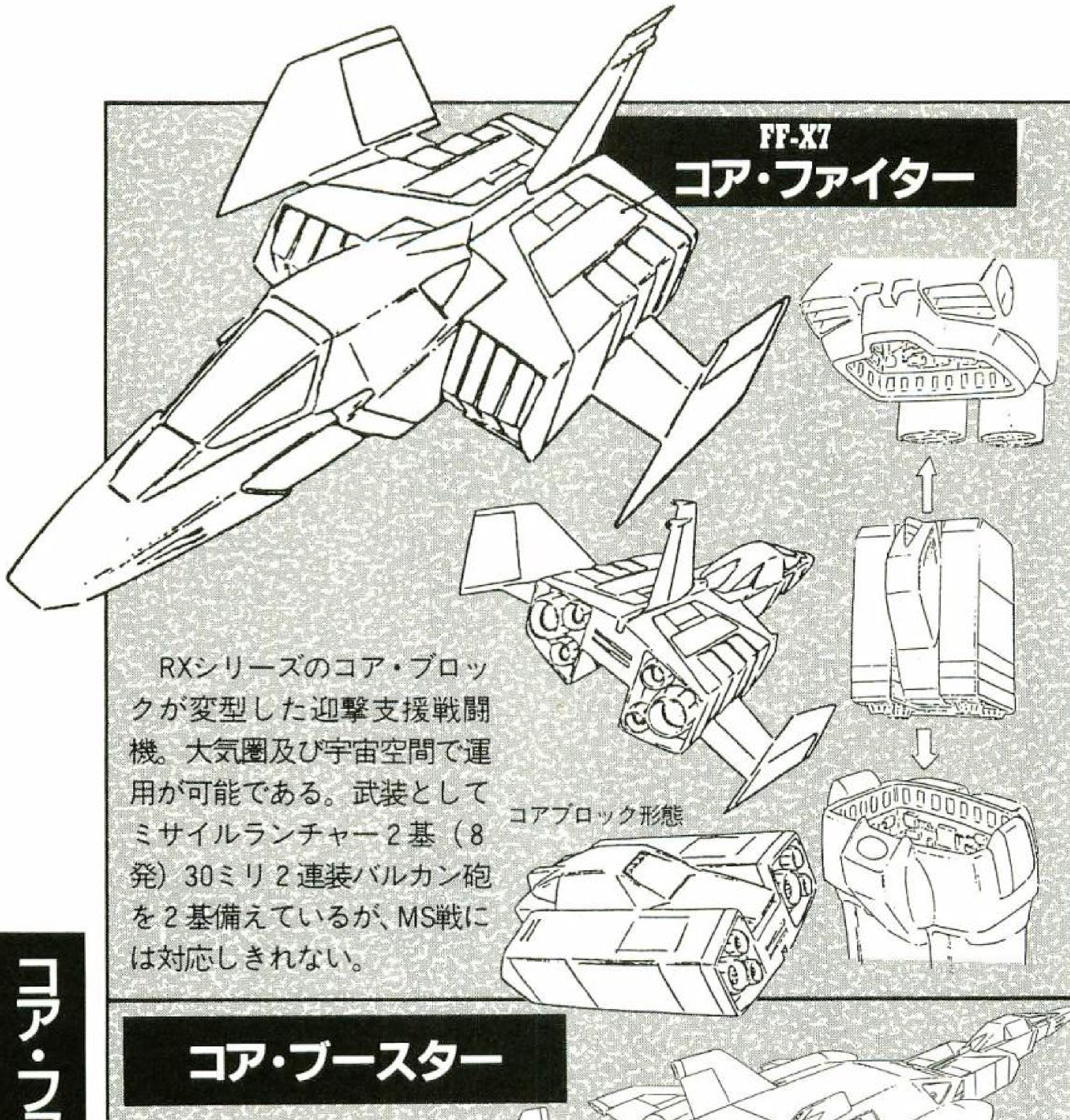
●「機動戦士ガンダム」、MSV、MS-X、「機動戦士ガンダム0080～ポケットの中の戦争」に登場するMS・MAのデザイン画を解説付きで紹介する。

RX-78-2 ガンダム



地球連邦軍が、回収したザクのデータを徹底的に解析して作りあげた初めてのモビルスーツ。同時に開発されたRXシリーズと互換性をもつコア・ブロックシステムを採用している。このシステムにより、RXシリーズは他に類を見ない程のサバイバビリティ（生残性）を手に入れることになった。さらに、MSの武装としてビーム兵器を導入したのもこの機体が初めてで、その点に関しても評価が高い。

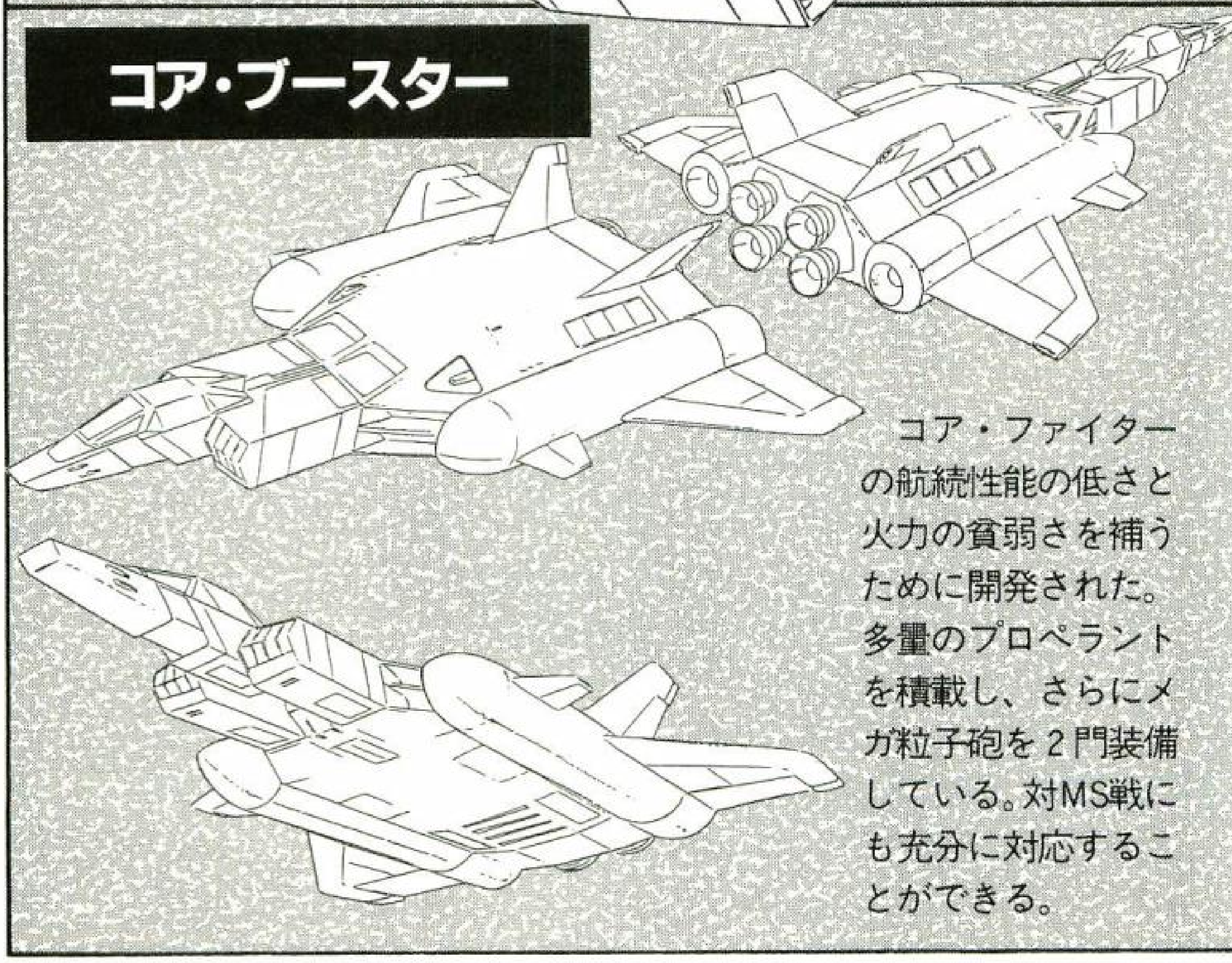
FF-X7
コア・ファイター



RXシリーズのコア・ブロックが変型した迎撃支援戦闘機。大気圏及び宇宙空間で運用が可能である。武装としてミサイルランチャー2基（8発）30ミリ2連装バルカン砲を2基備えているが、MS戦には対応しきれない。

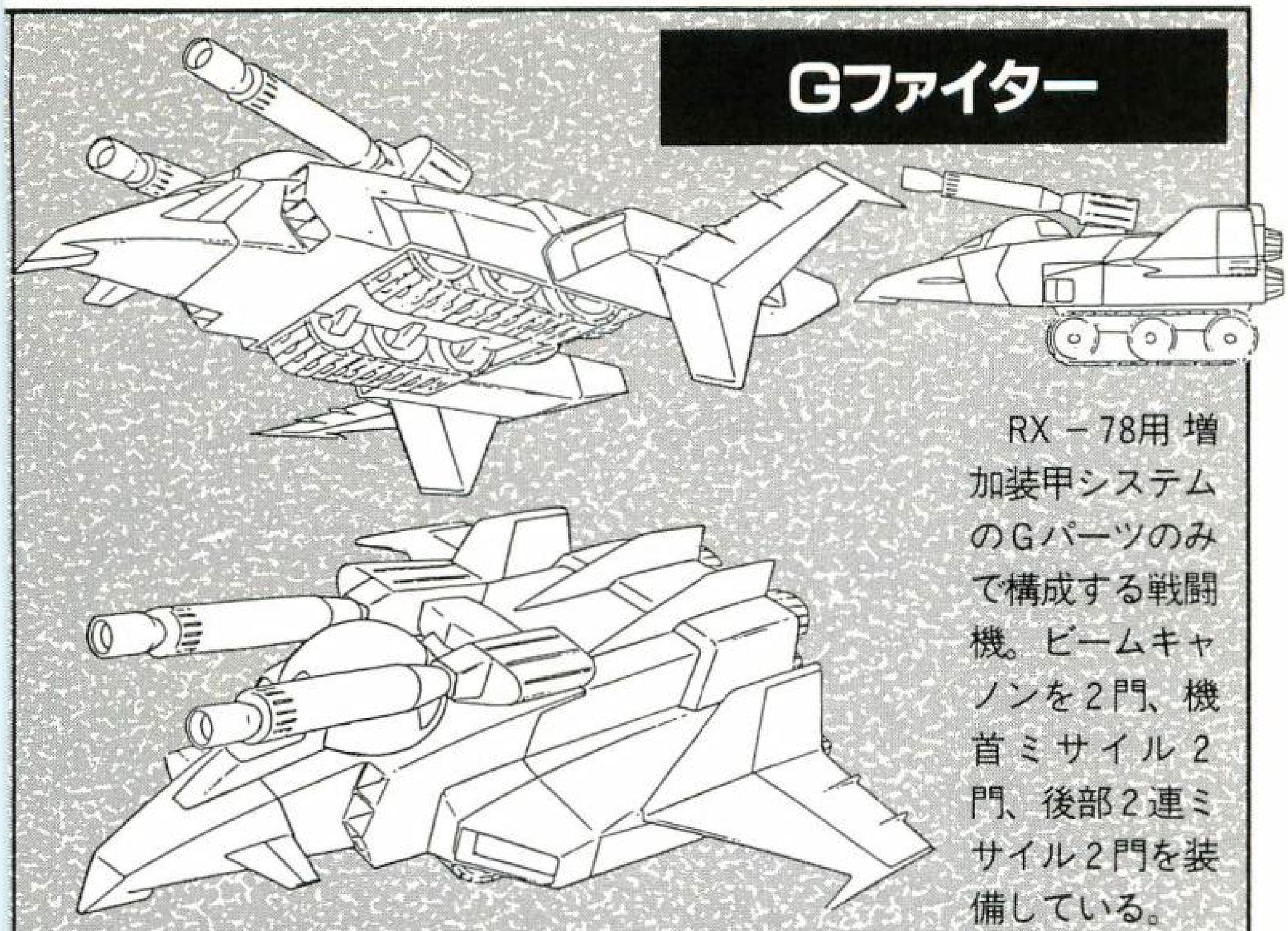
コアブロック形態

コア・ブースター



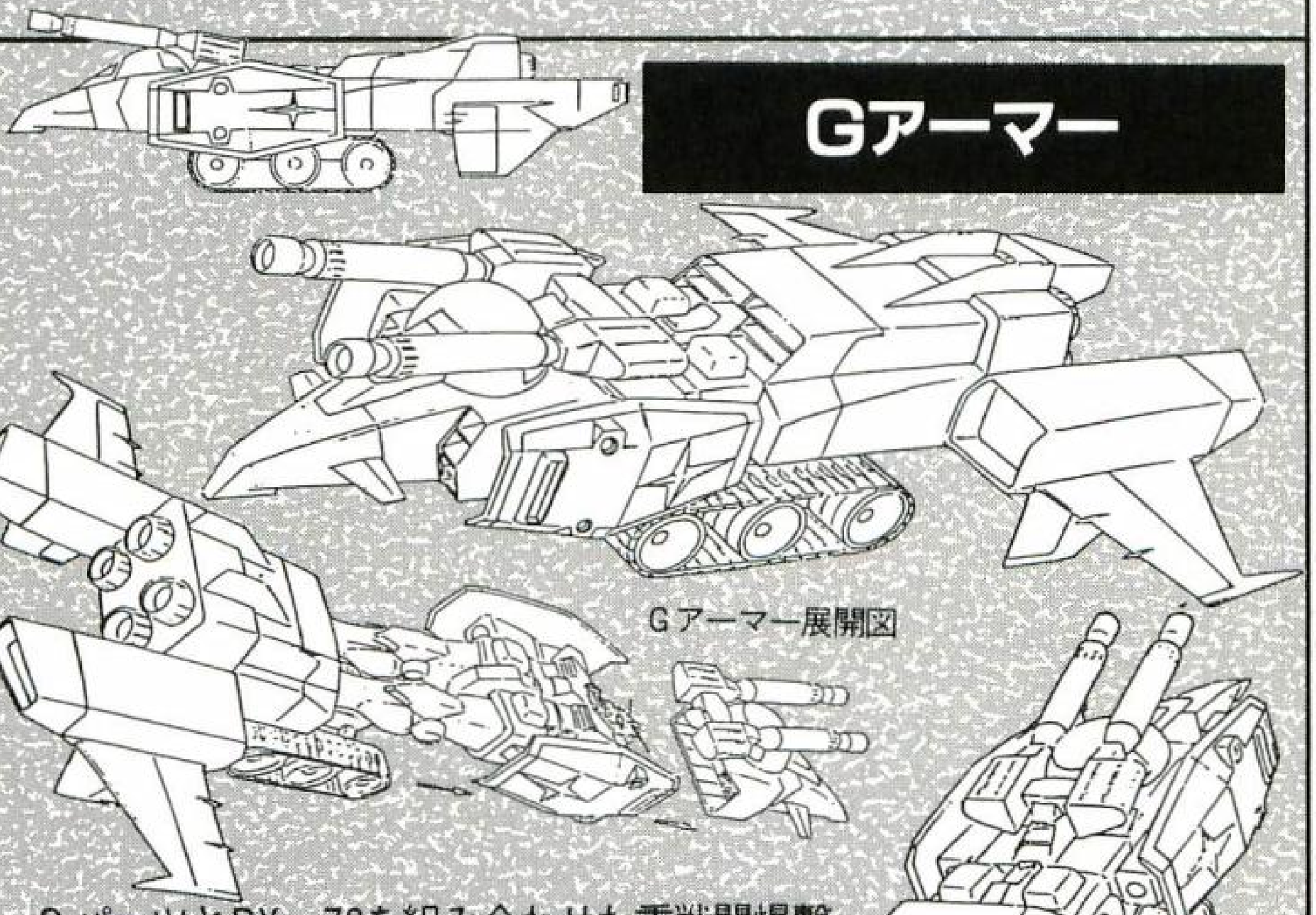
コア・ファイターの航続性能の低さと火力の貧弱さを補うために開発された。多量のプロペラントを積載し、さらにメガ粒子砲を2門装備している。対MS戦にも充分に対応することができる。

Gファイター



RX－78用 増加装甲システムのGパーツのみで構成する戦闘機。ビームキャノンを2門、機首ミサイル2門、後部2連ミサイル2門を装備している。

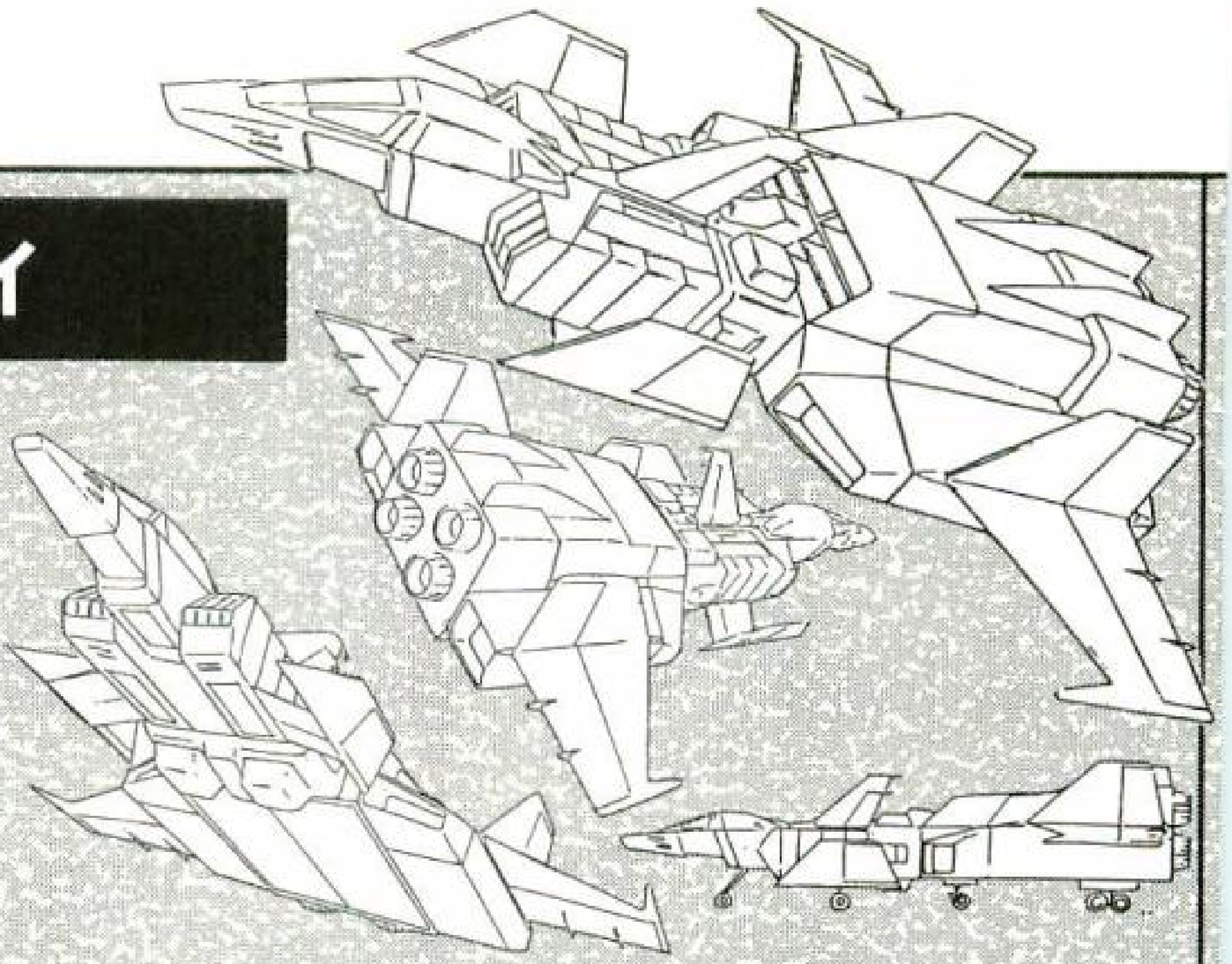
Gアーマー



Gアーマー展開図

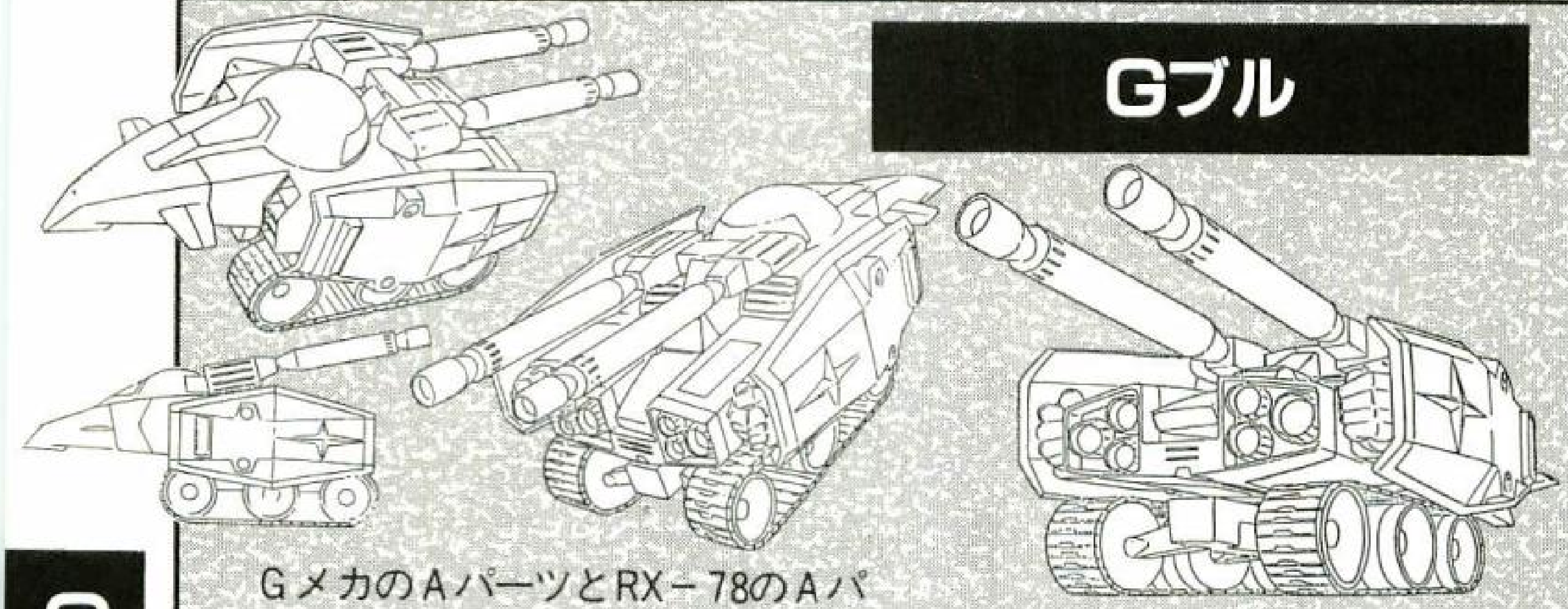
GパーツとRX－78を組み合わせた重戦闘爆撃機。これにより、RX－78の機動力は飛躍的に向上する。コア・ブロックシステムの規格に準じているので、戦況に応じた柔軟さを発揮し、RX－78を充分にバックアップした。

Gスカイ



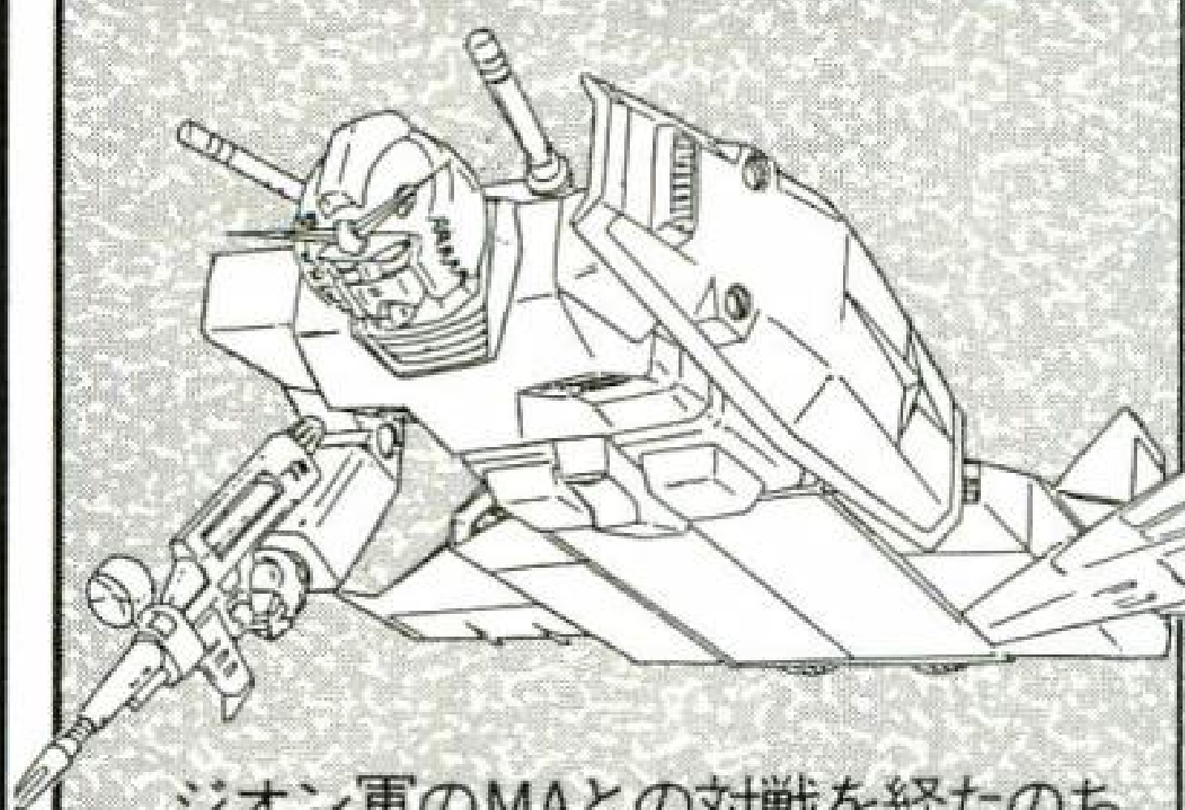
Gメカの Bパーツと RX－78の Bパーツ、コアファイターで構成される支援戦闘機。この形態での武装は、Gメカの後部ミサイルを除けばコアファイターと大差がない。

Gブル



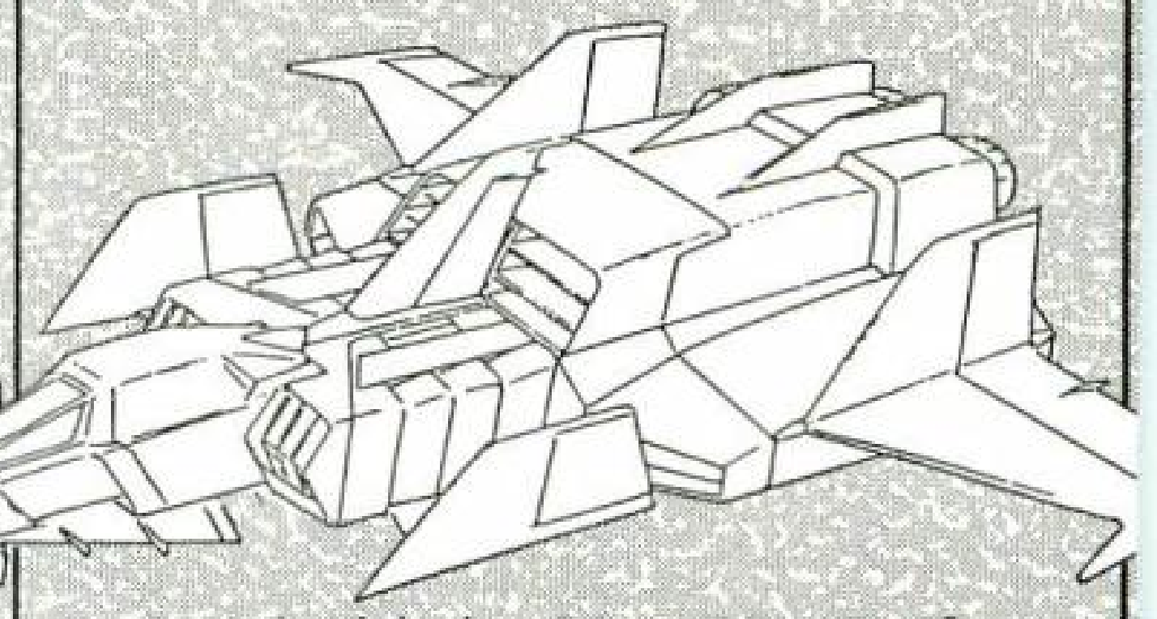
Gメカの Aパーツと RX－78の Aパーツ、コア・ファイターで構成される重戦車。この場合のコクピットはコア・ファイターに、武装はビームキャノンのみとなる。

ガンダム MA（モビルアーマー）モード



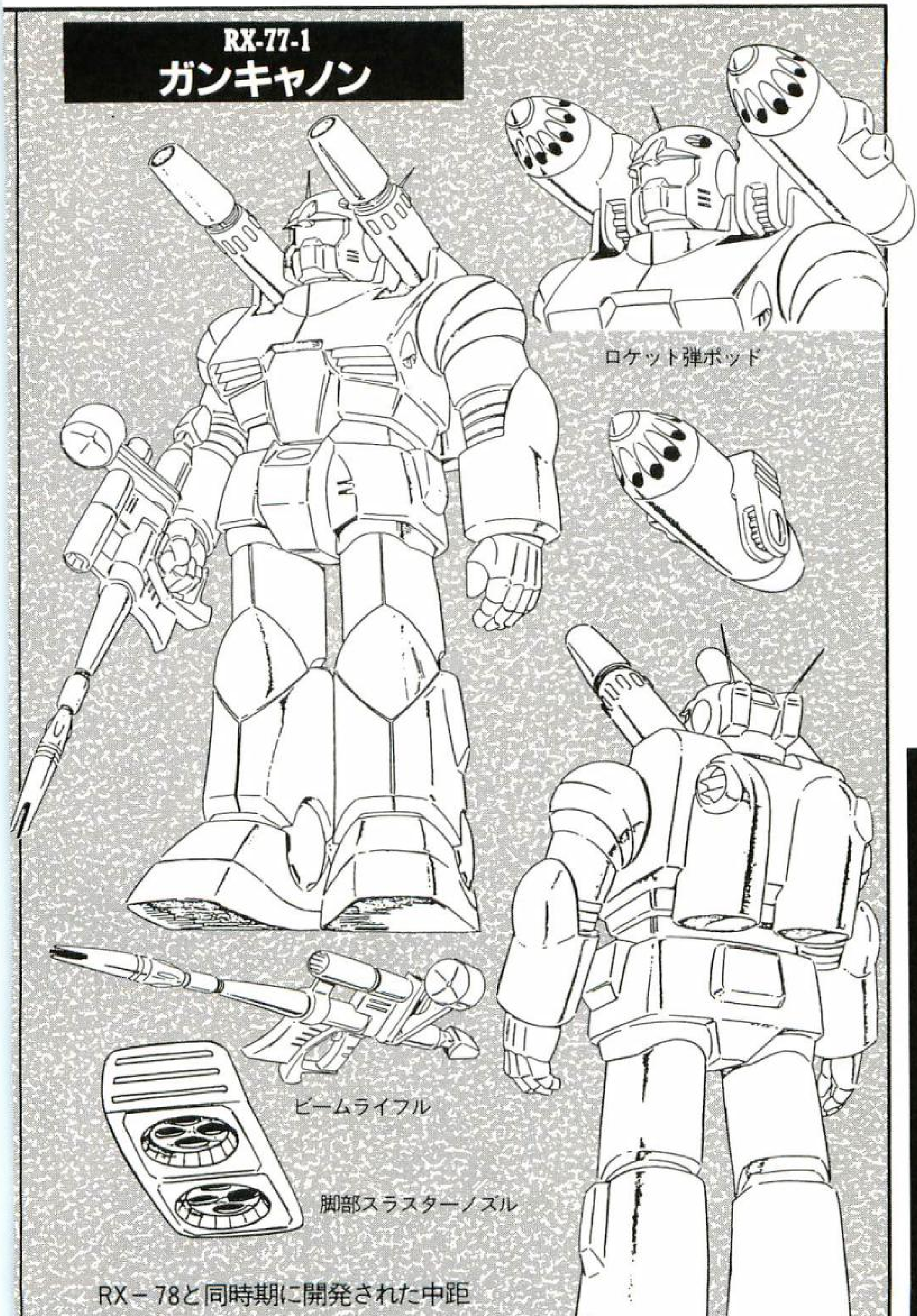
ジオン軍のMAとの対戦を経たのちに考案され、試験的に使用された形態である。MSとしての戦闘力を保ちながら、MAクラスの機動力を得ることができる。

Gスカイ・イージー



Gスカイから、RX－78の Bパーツを除いたものが、この機体である。Gパーツのフレキシビリティを物語るもので、RX－78の稼動状況に影響を与えずに行動することが可能となった。

RX-77-1 ガンキャノン



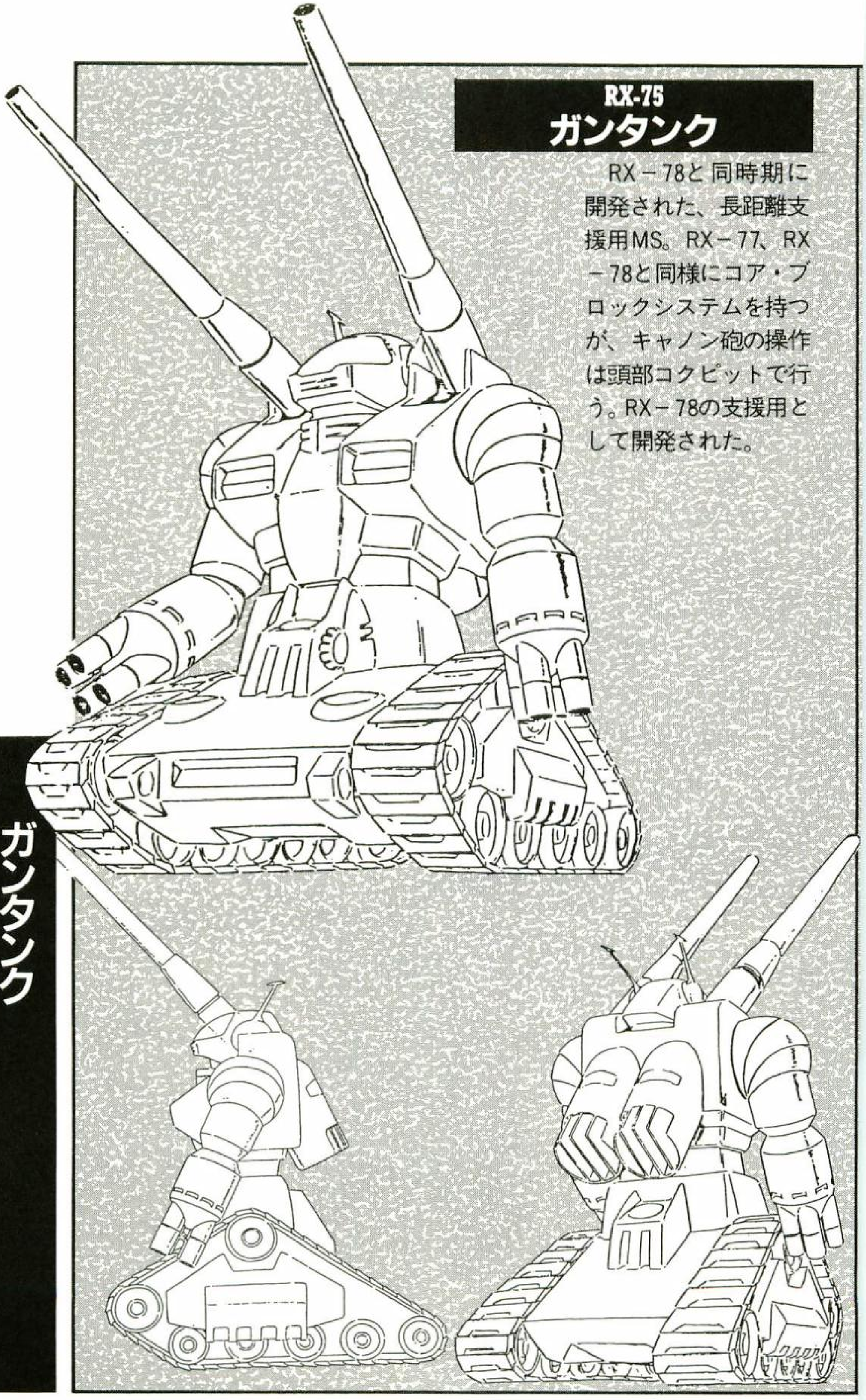
ロケット弾ポッド

ビームライフル

脚部スラスターノズル

RX－78と同時期に開発された中距離支援用MS。この機体もコア・ブロックシステムを採用している。運動性はRX－78に劣るものの、装甲が厚く、シールドを必要としない。

ガンキャノン

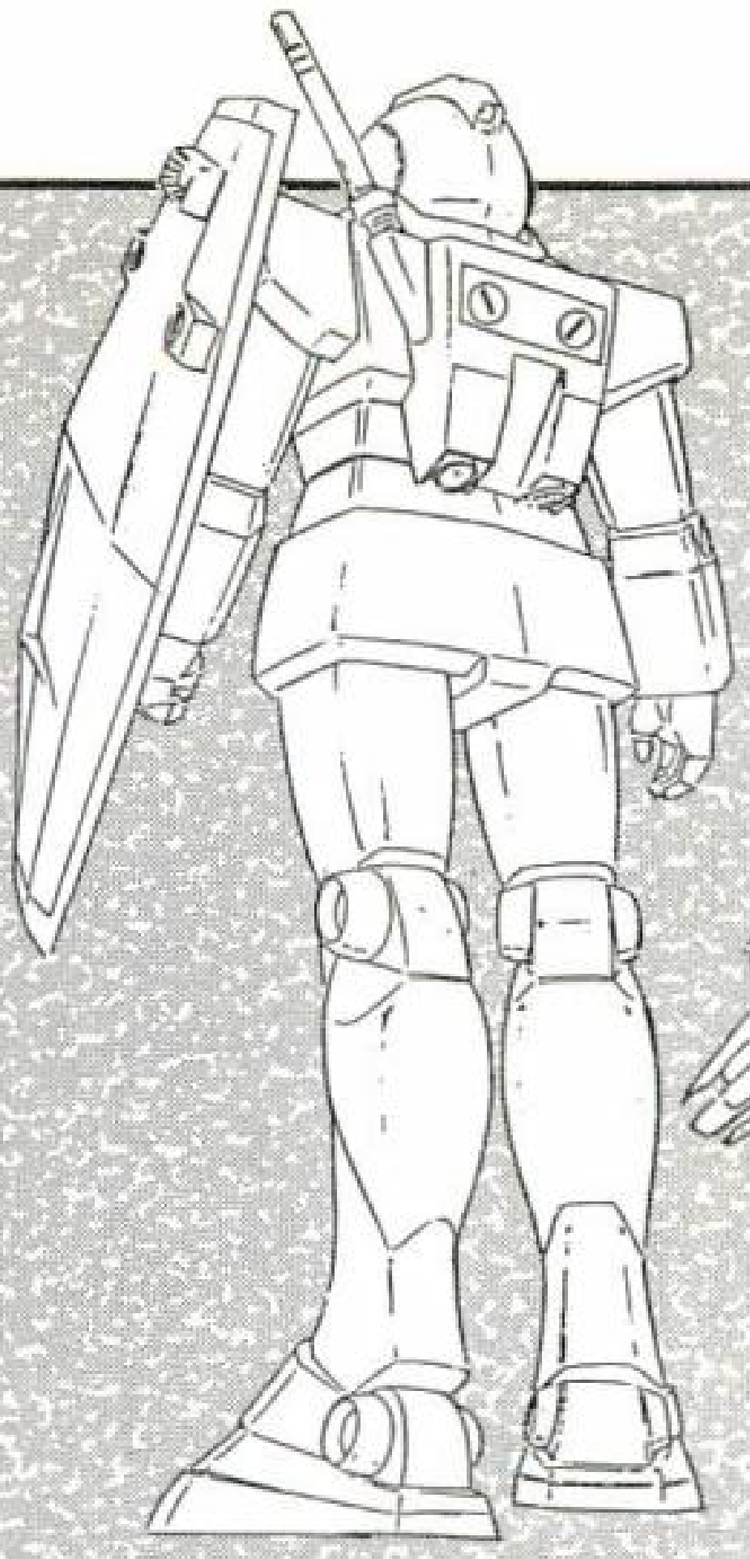


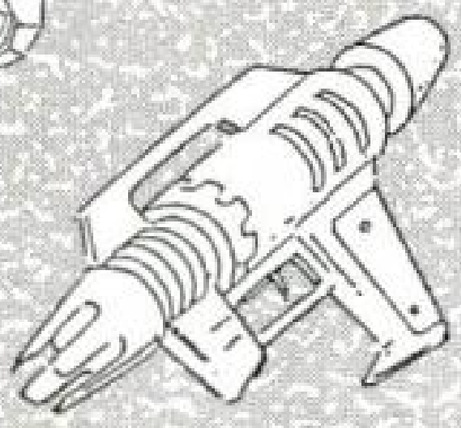
RX-75
ガンタンク

RX－78と同時期に開発された、長距離支援用MS。RX－77、RX－78と同様にコア・ブロックシステムを持つが、キャノン砲の操作は頭部コクピットで行う。RX－78の支援用として開発された。

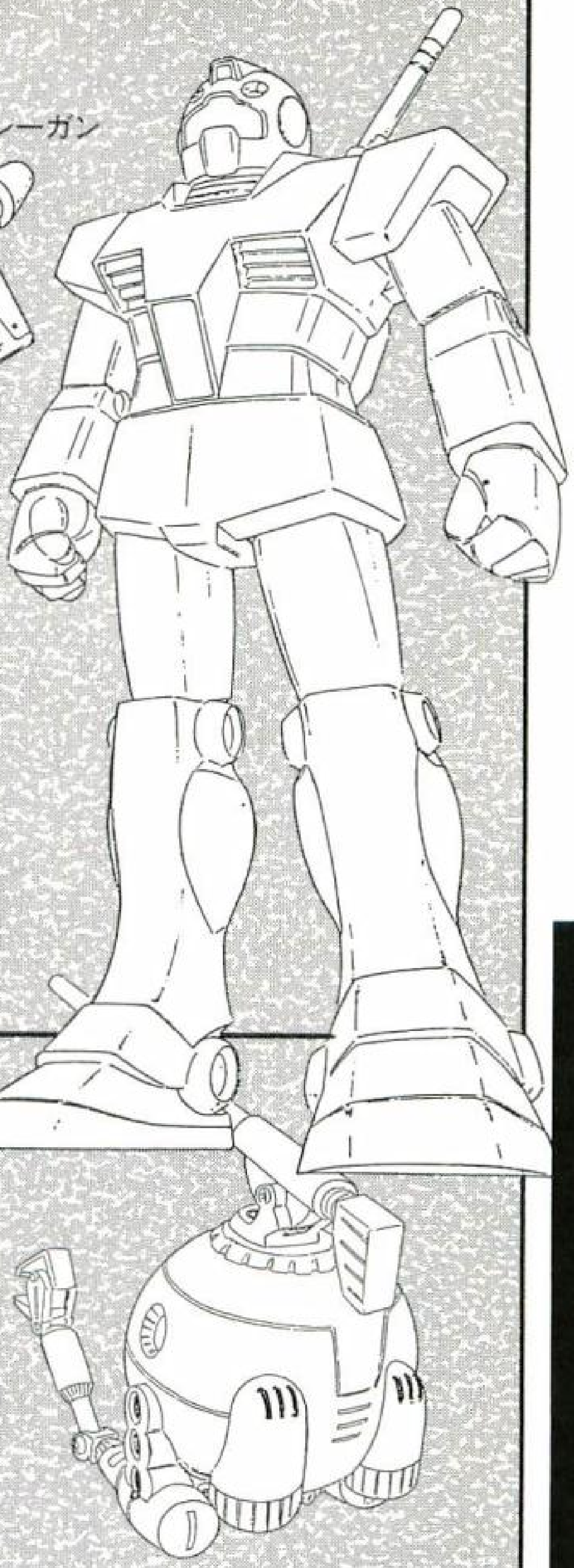
ガンタンク

RGM-79
ジム



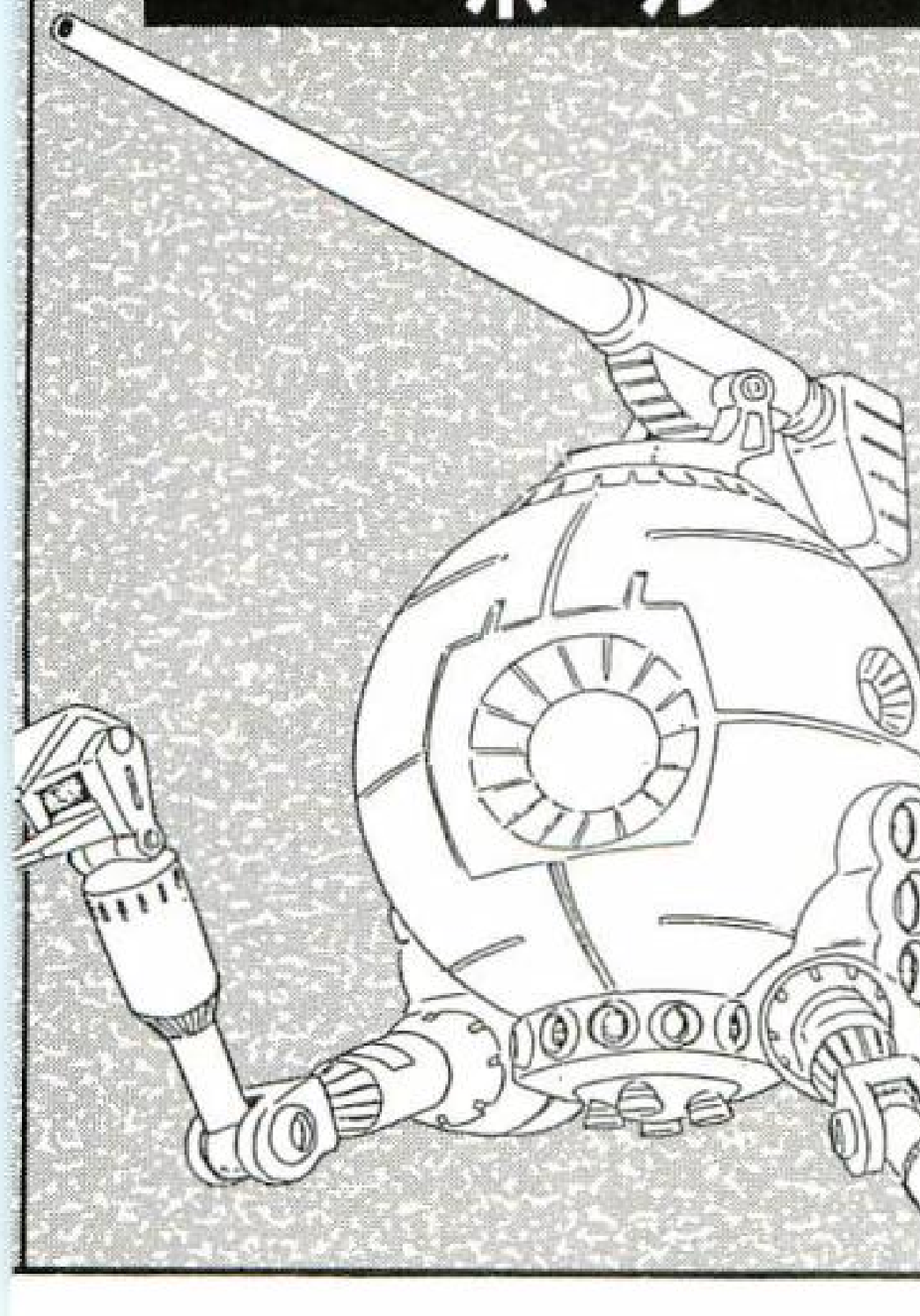


ビームスプレーガン



RX－78の量産型。コア・ブロックは、RXシリーズによる基礎的な情報収集が完了したことと、構造が複雑でコストが高くなることによりとり除かれている。RX－78の基本的な性能をコンスタントに受け継いでおり、後に様々なバリエーションを生み出す佳作機といえる。

RB-79
ボール

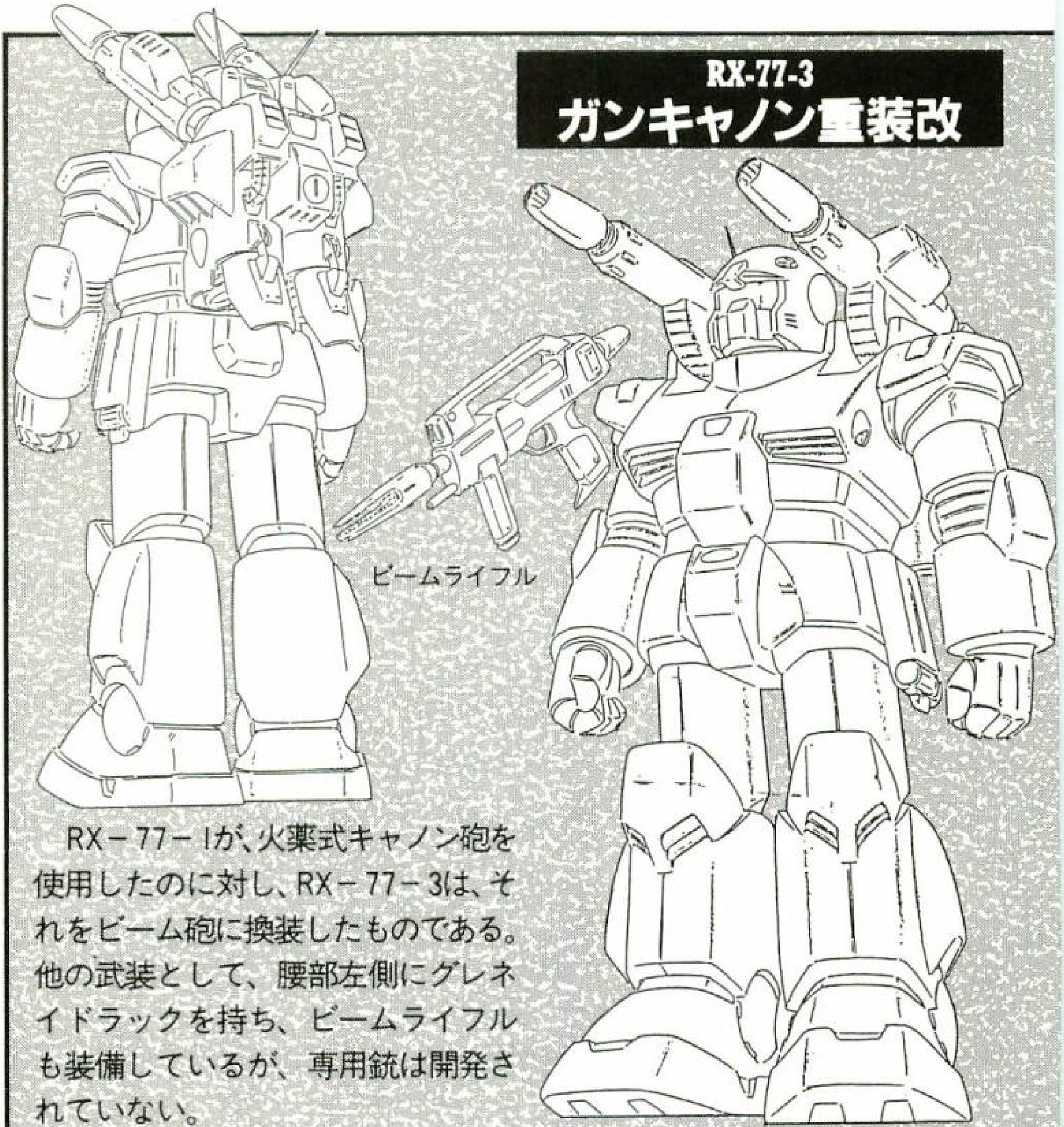




RGM－79の支援用に量産された戦闘ポッド。軍、民間で使用されていた一般作業用のスペースポッドSP－W03の装甲に手を加え、RX－75の主砲を改修して搭載した。

ジム～ボール

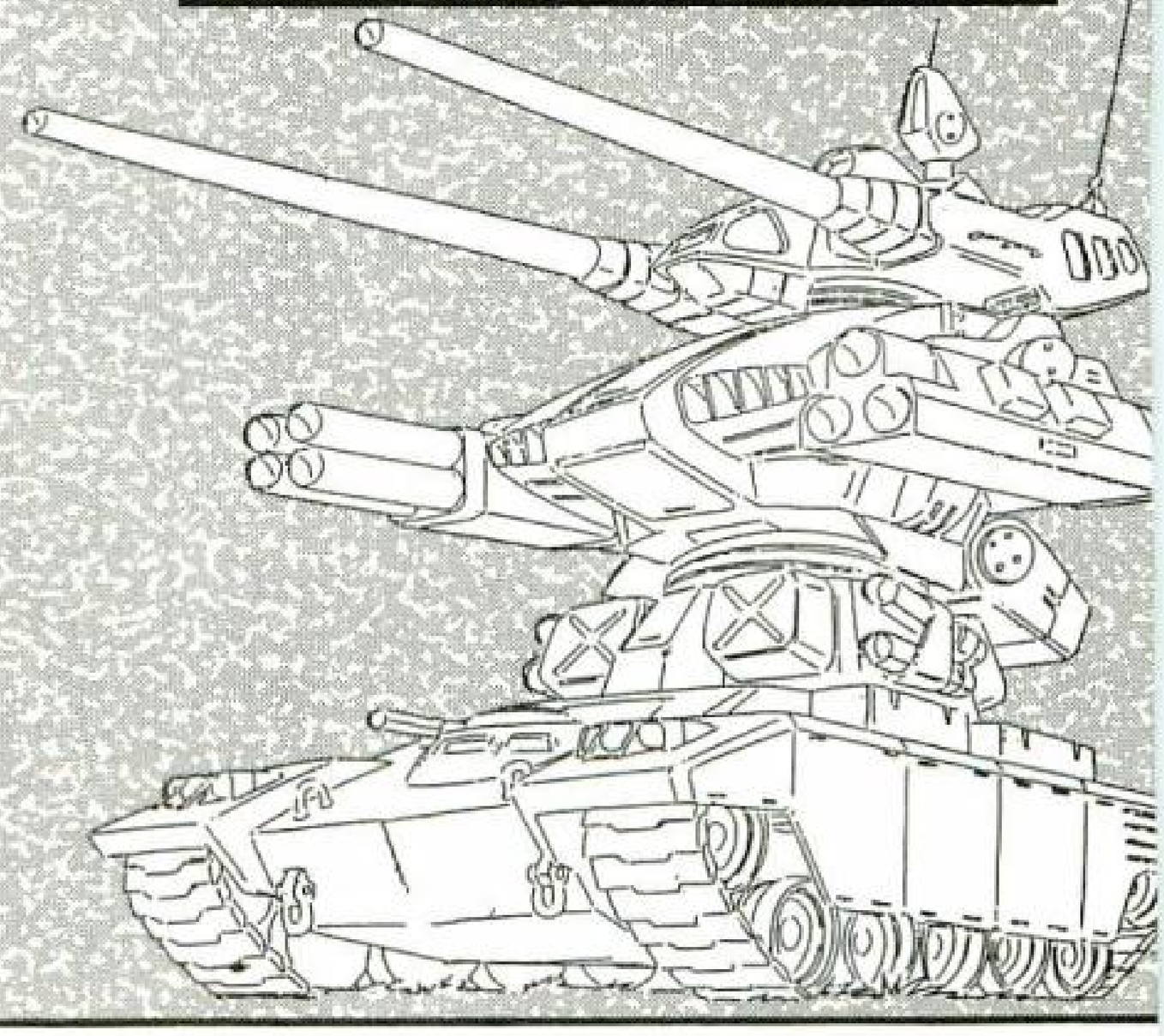
RX-77-3
ガンキャノン重装改



RX－77－1が、火薬式キャノン砲を使用したのに対し、RX－77－3は、それをビーム砲に換装したものである。他の武装として、腰部左側にグレネイドラックを持ち、ビームライフルも装備しているが、専用銃は開発されていない。

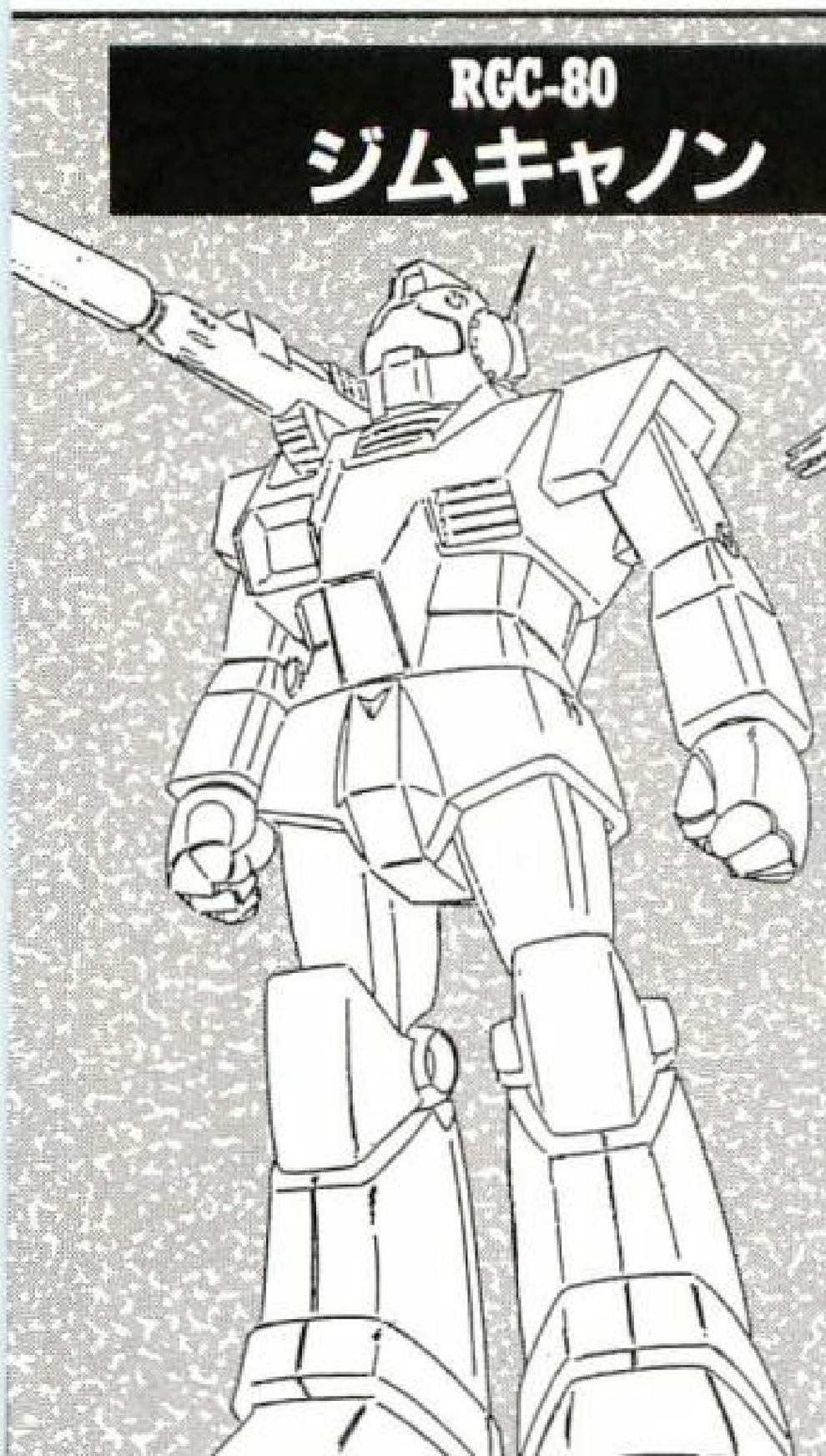
ガンキャノン重装型～ガンタンクII

RMV-1
ガンタンクII



MSとしては問題の多いRX－75を、局地防衛用戦闘車両として再開発した機体。戦闘車両に徹したことで問題点も少なく、ただちに量産が決定した。武装はRX－75より強力で、120ミリライフル砲2門、180ミリ4連装ロケット弾ポッド、3連装ミサイルランチャー、80ミリ機関砲、2連装スモークディスチャージャー2基。乗員は操縦者と砲手の2名。

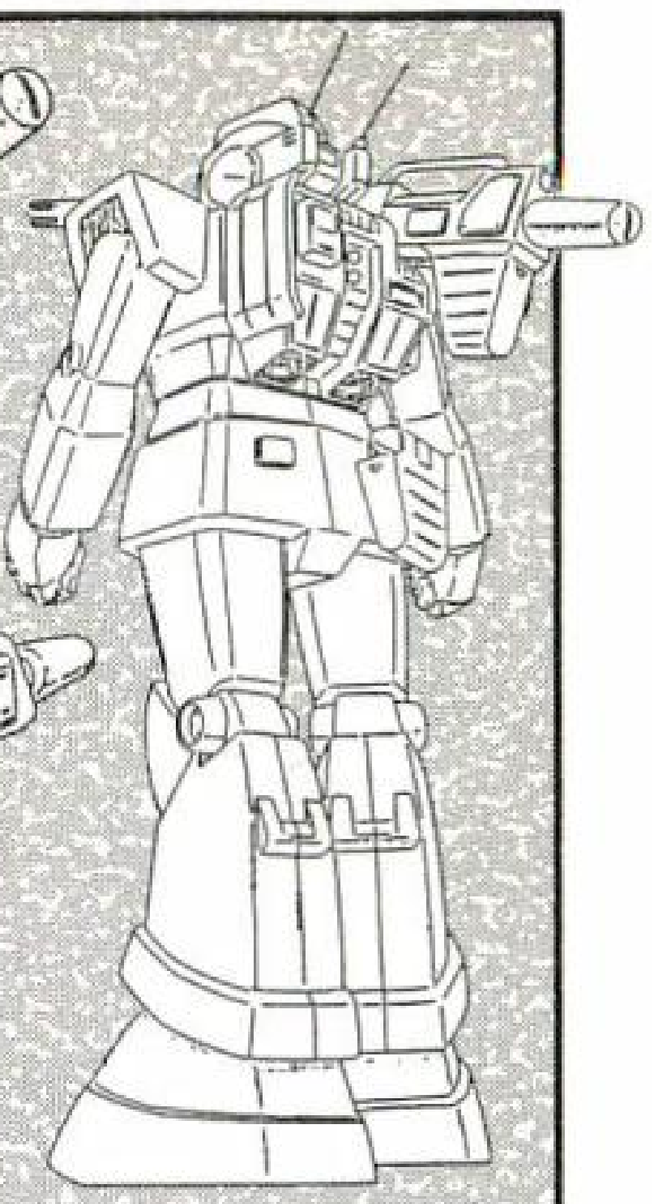
RGC-80 ジムキャノン





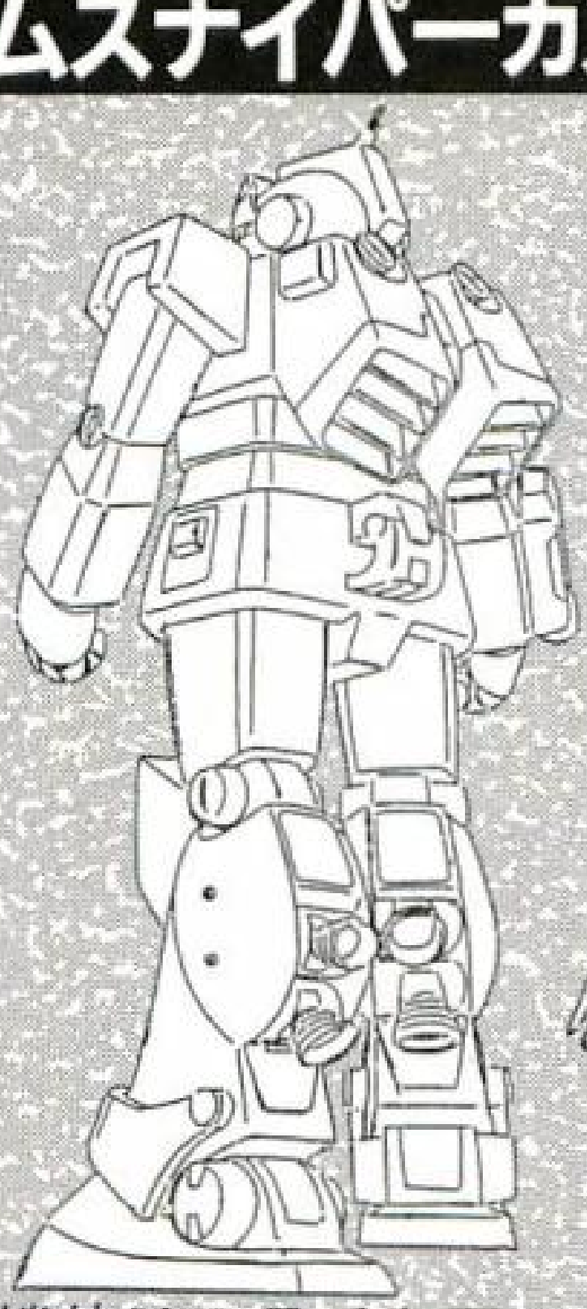
キャノン砲

ビームライフル

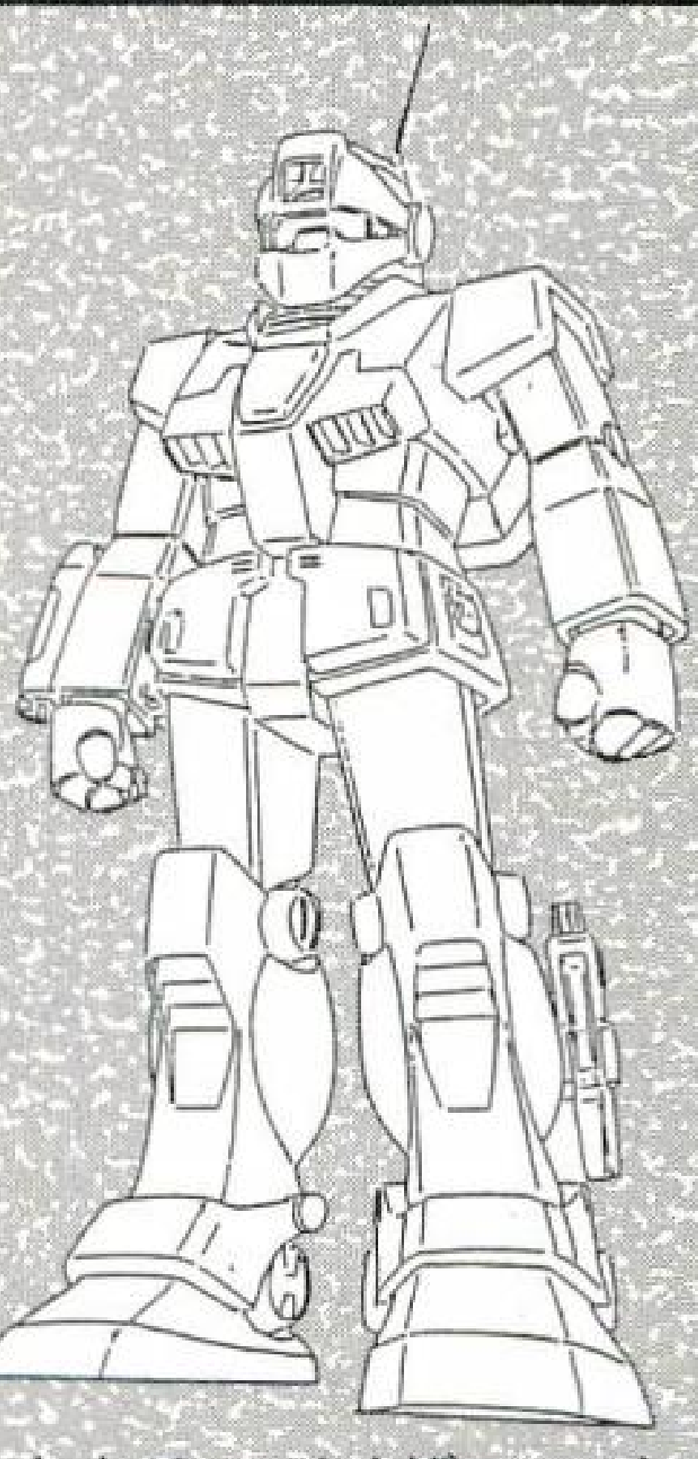


RGM－79をベースに、砲撃戦仕様として再設計された機体。右肩にキャノン砲を装備し、装甲を強化している。本来、砲撃戦用の量産機はRX－77－３型とされていたが、当時の物資や開発期間等の問題により、このRGC－80が量産機となった。

RGM-79(SC) ジムスナイパーカスタム



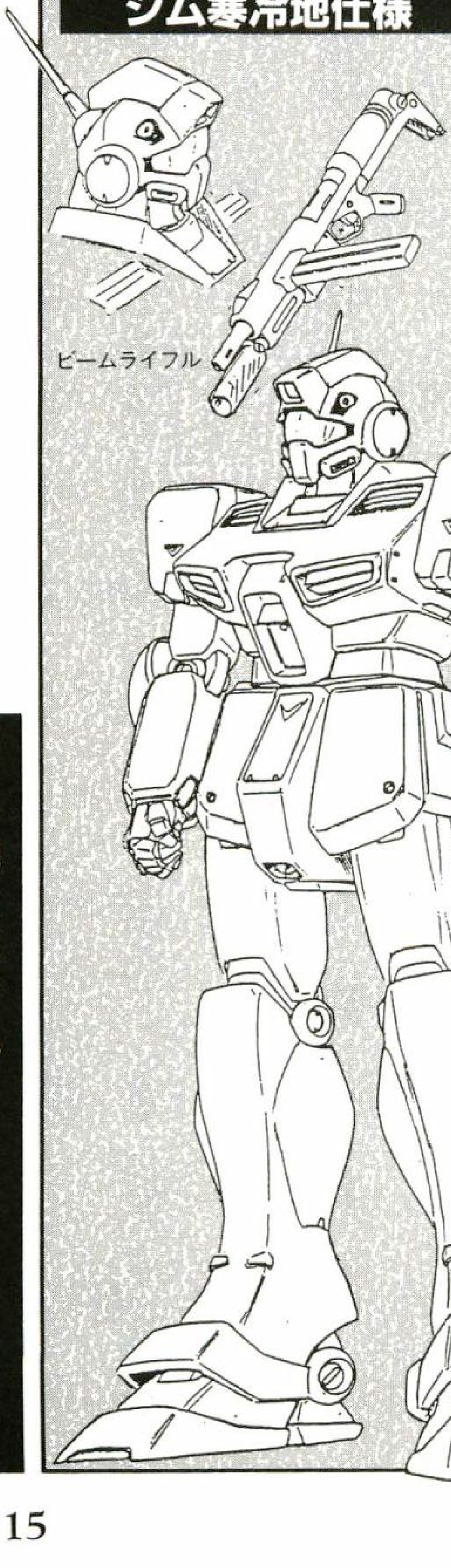




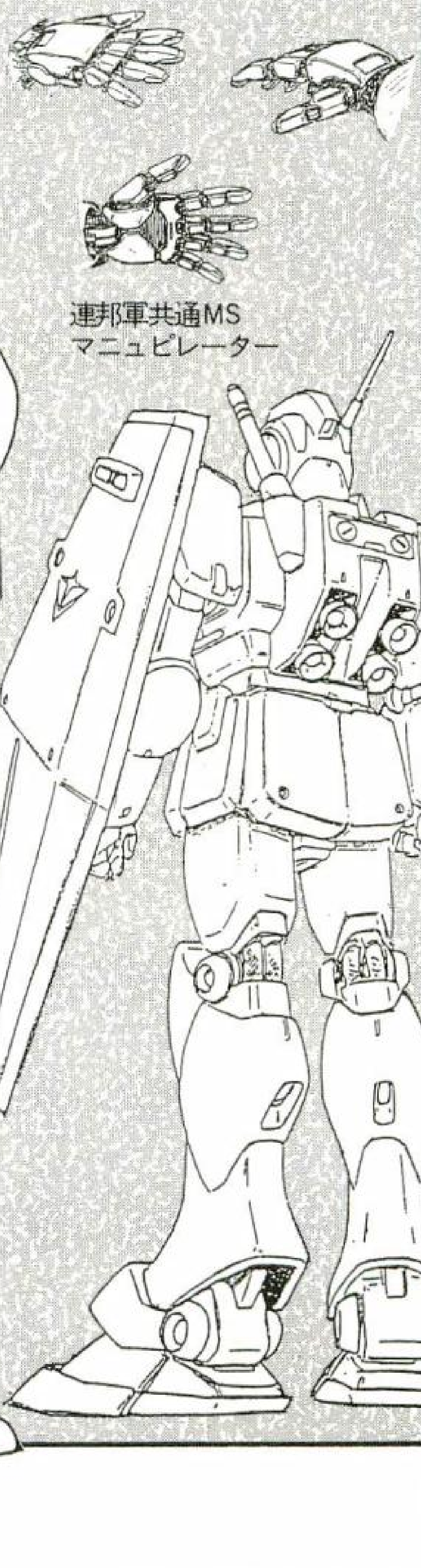
この機体は、ライトアーマーと同様に、熟練パイロット用として開発された。ライトアーマーが軽量化により機動力をあげたのに対し、総合性能を向上させ、バイザー、バックパック強化、バーニア、スラスターの追加等が行なわれた。武装もRX－78と同程度の火力をもつ。

RGM-79D
ジム寒冷地仕様

この機体は、RGM－79の生産も後期に入ってからのもので、技術的にはRGM－179とMSA－003に分派する直前の機体である。性能的には通常のRGM－79と大きな差はなく、寒冷地に対応したパーツとの換装を行った程度で、武装をマシンガンに変えてあるのが主な特徴である。



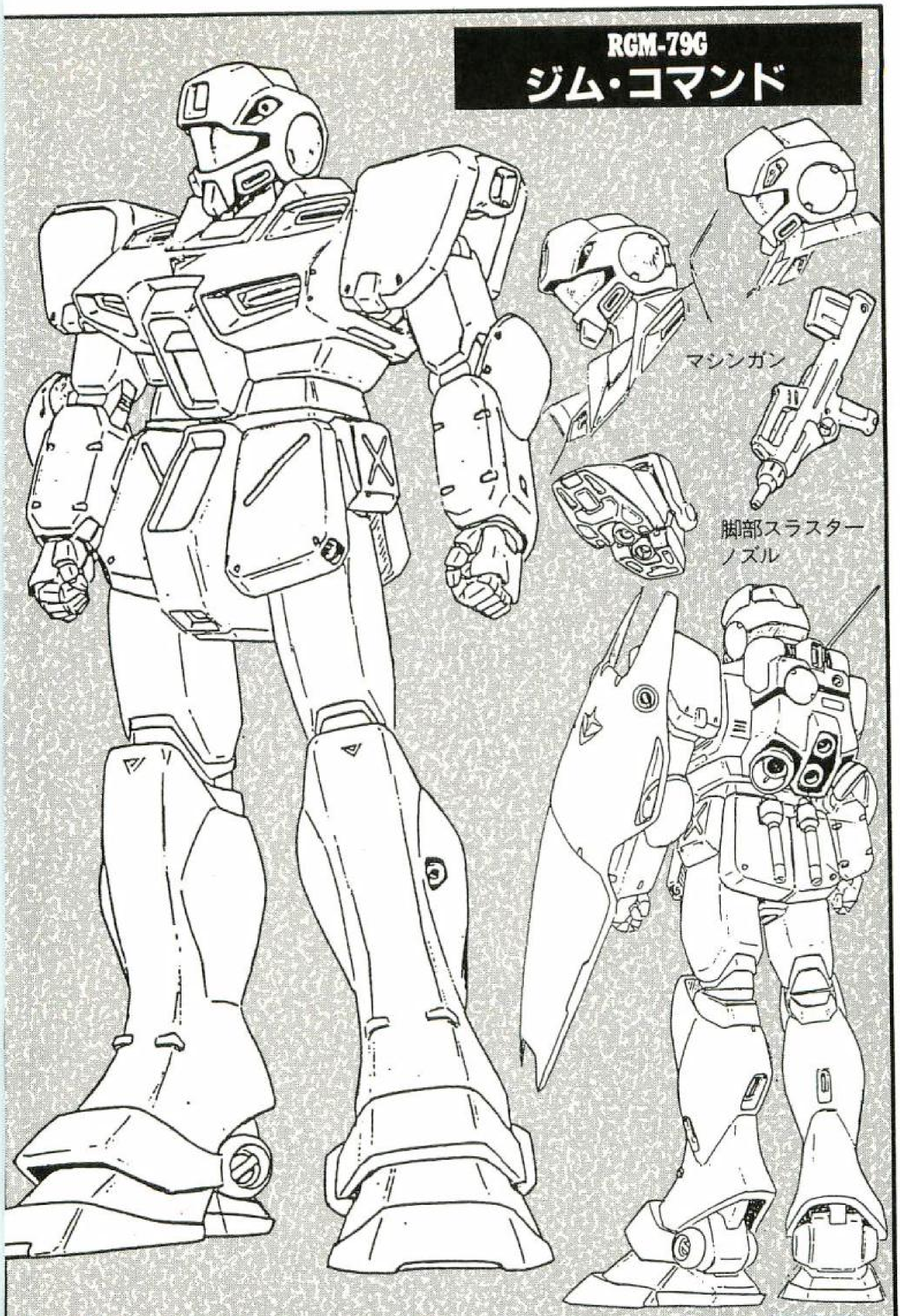
ビームライフル



連邦軍共通MS
マニュピレーター

寒冷地仕様ジム

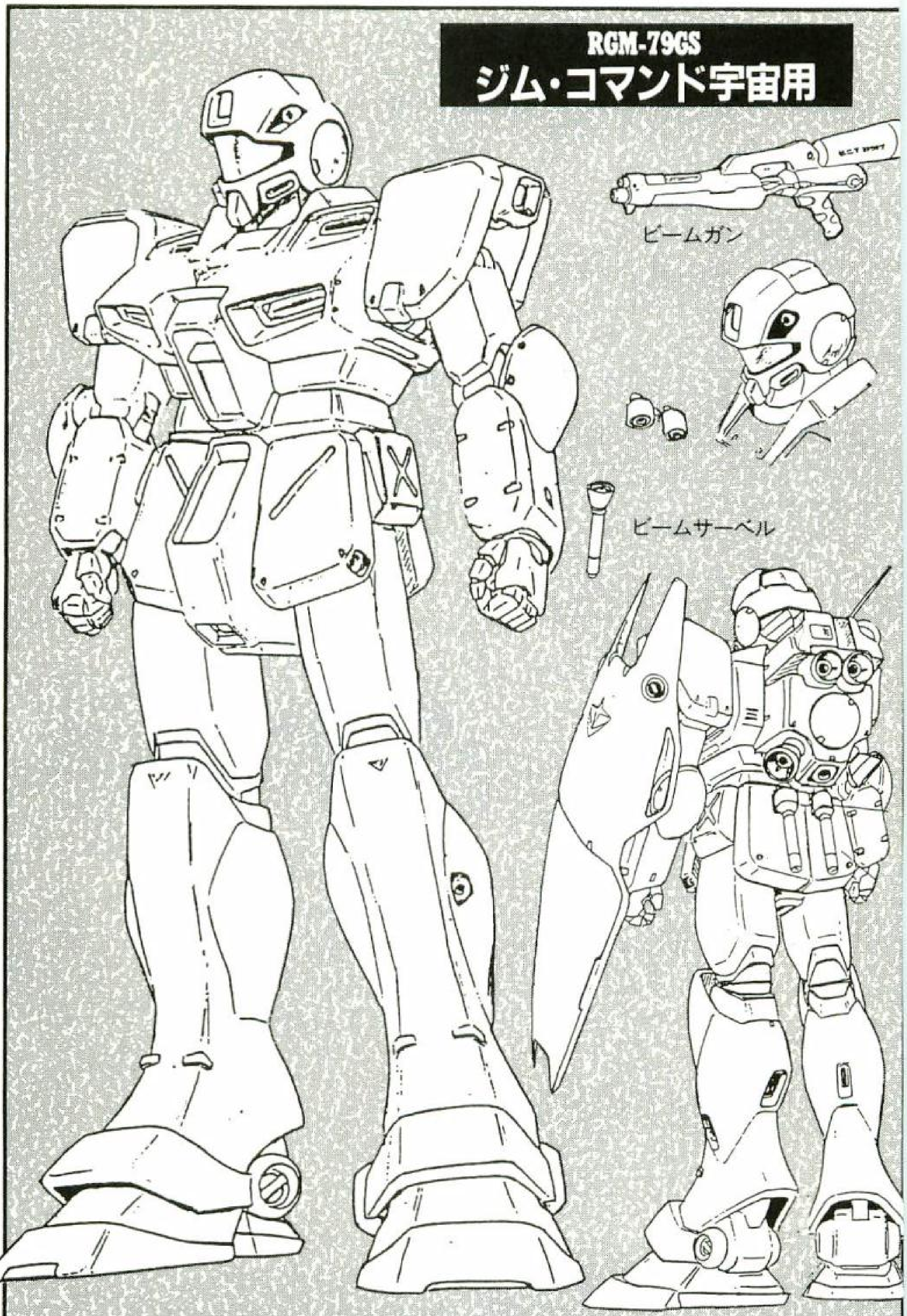
RGM-79G
ジム・コマンド



量産型のRGM－79系のMSは、汎用性にすぐれていたため、多様な任務に対応することができた。この機体はコロニー戦用の装備を施してあるだけで、性能等に決定的な差はない。

しかし、RGM－79シリーズ自体がかなりのバリエーションを生み出していた時期と重なるため、本来のノーマルバージョンとは仕様、外観、武装等が異なる。

RGM-79GS
ジム・コマンド宇宙用

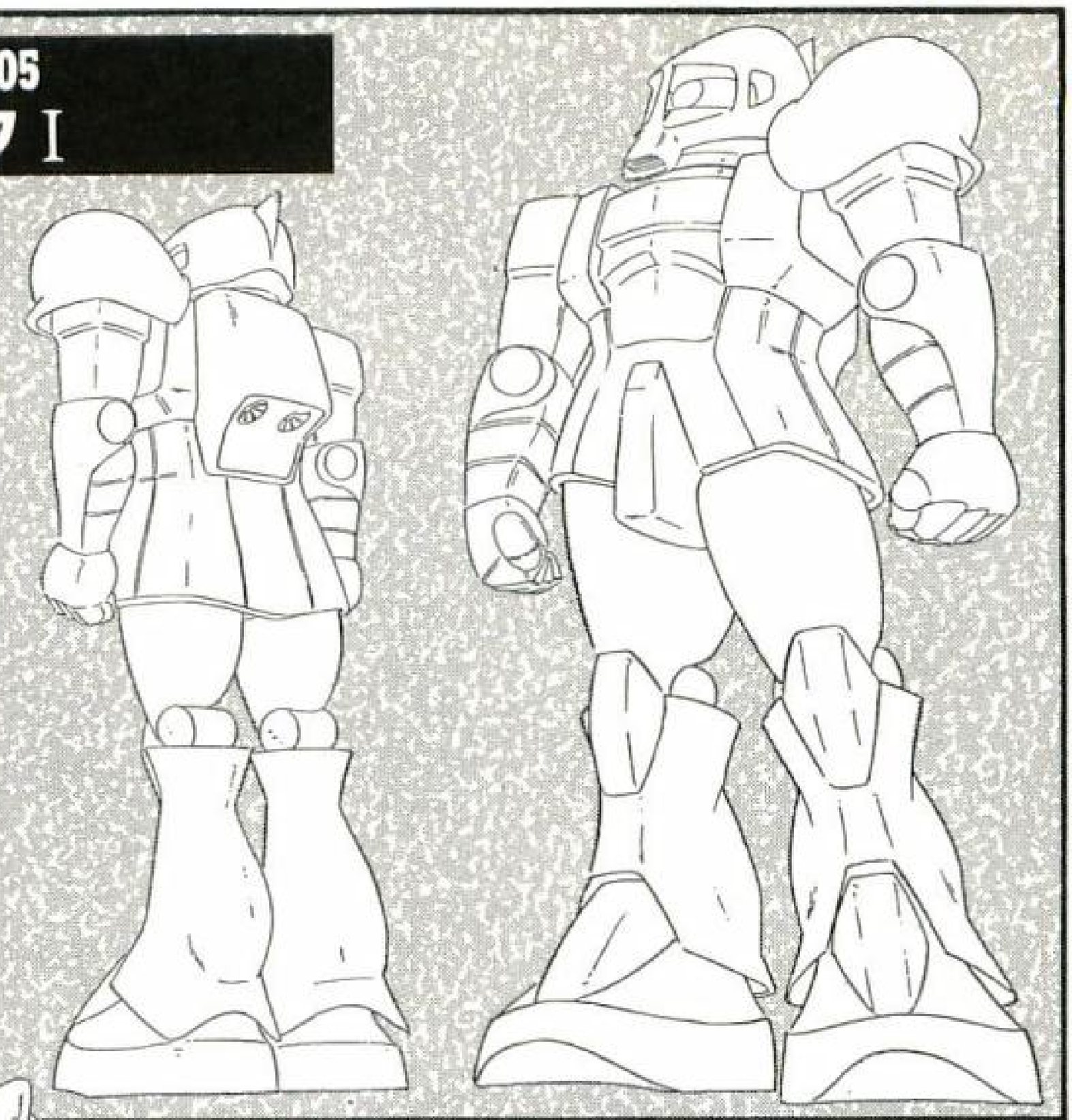


ジム・コマンド宇宙用

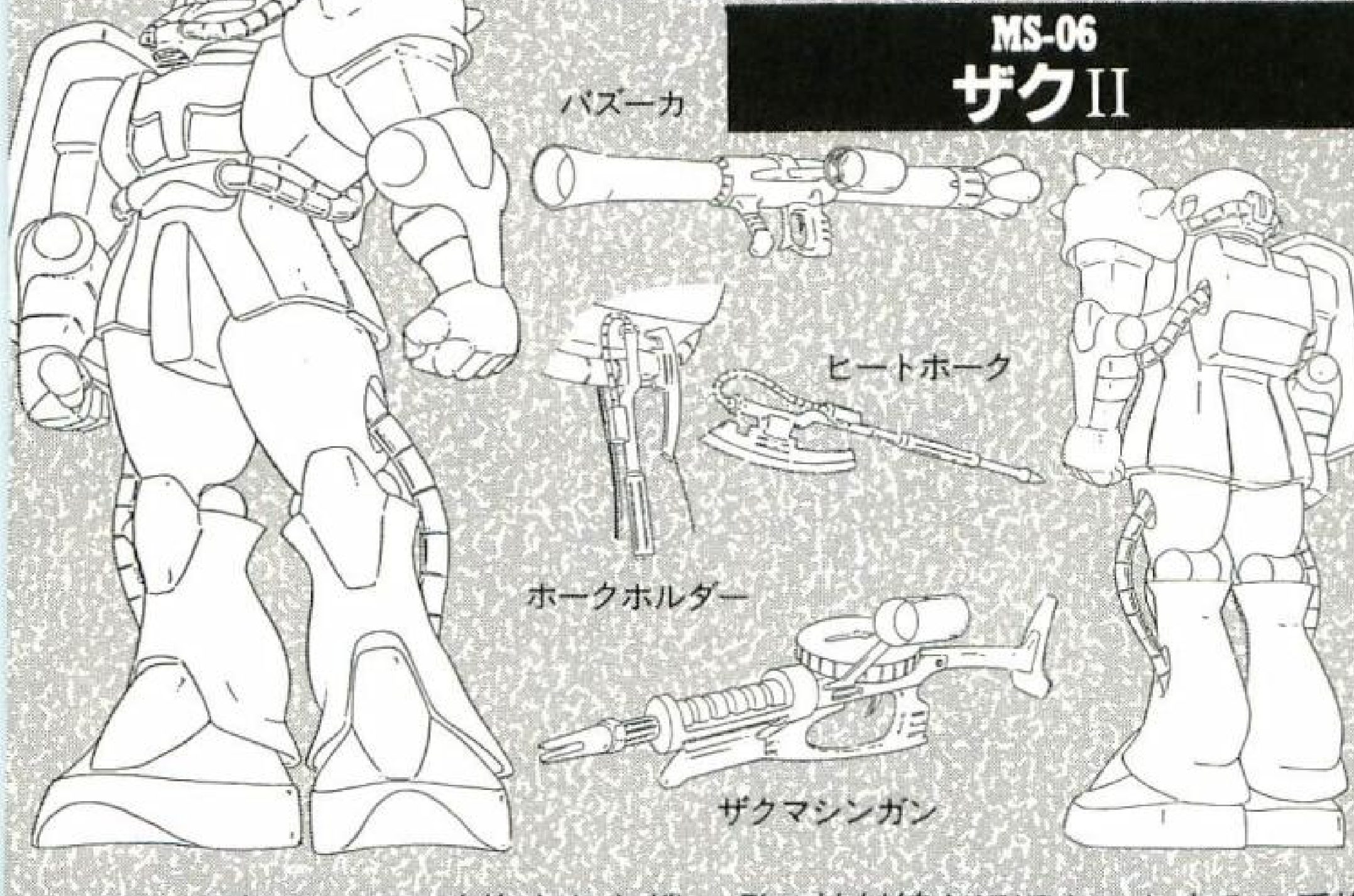
このRGM－79GSは、RGM－79の性能向上機で、ライトアーマー、スナイパーカスタムのように特定の機能や装備を追求したものではなかった。この時期には、バリエーションに対応するためのノウハウも確立され始めており、この機体においても、宇宙戦用の装備を施しただけで、武装と外観以外に特別な改修は受けていない。

MS-05 ザクⅠ

公国軍初の量産型MS。大戦初期のブリティッシュ作戦で活躍した。だが、MS－06の量産が進むにつれ前線から退き、輸送隊へ配属されていった。

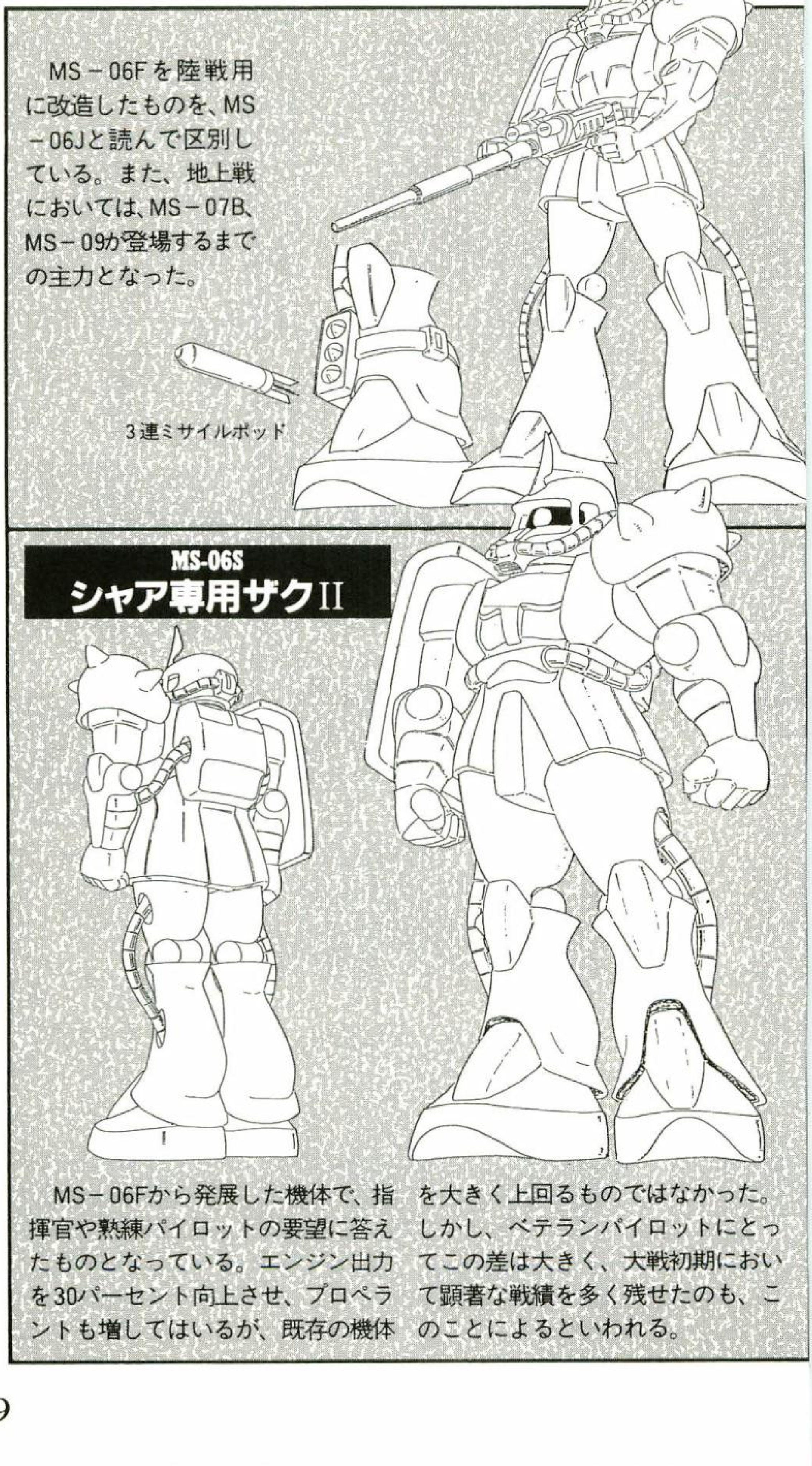


MS-06 ザクⅡ



MS－05をベースに改修された機体。バリエーションを含めた生産台数は両軍を通じて最も多い。連邦軍のRXシリーズもこの機体を参考に開発した。武装は120ミリマシンガンで、大戦初期の作戦では核弾頭の240ミリバズーカも使用した。装甲は核爆発の放射線をほぼカットする3重複合装甲で、そのため自重は72tに達した。南極条約締結後に製造されたF型は放射能対策が設計から外され、装甲を軽量化し、ジェネレータも高出力型に換装した。このF型がザクⅡの中で最も生産台数が多い。

MS－06Fを陸戦用に改造したものを、MS－06Jと読んで区別している。また、地上戦においては、MS－07B、MS－09が登場するまでの主力となった。



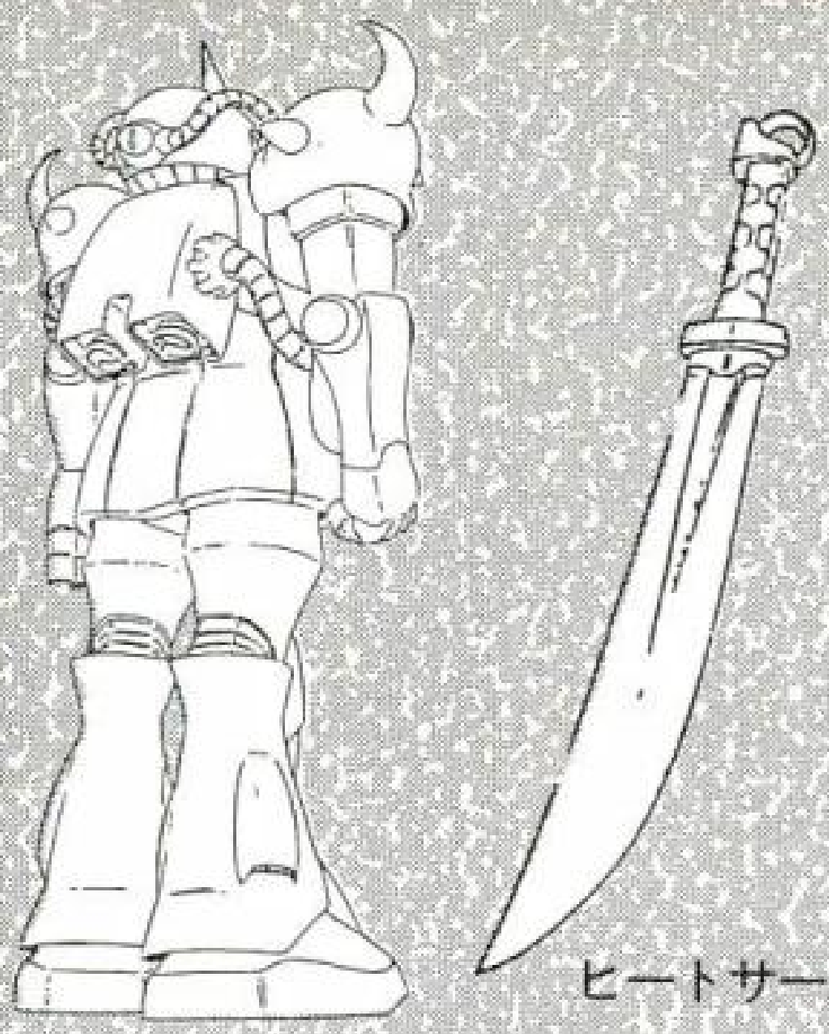
3連ミサイルポッド

MS-06S
シャア専用ザクII

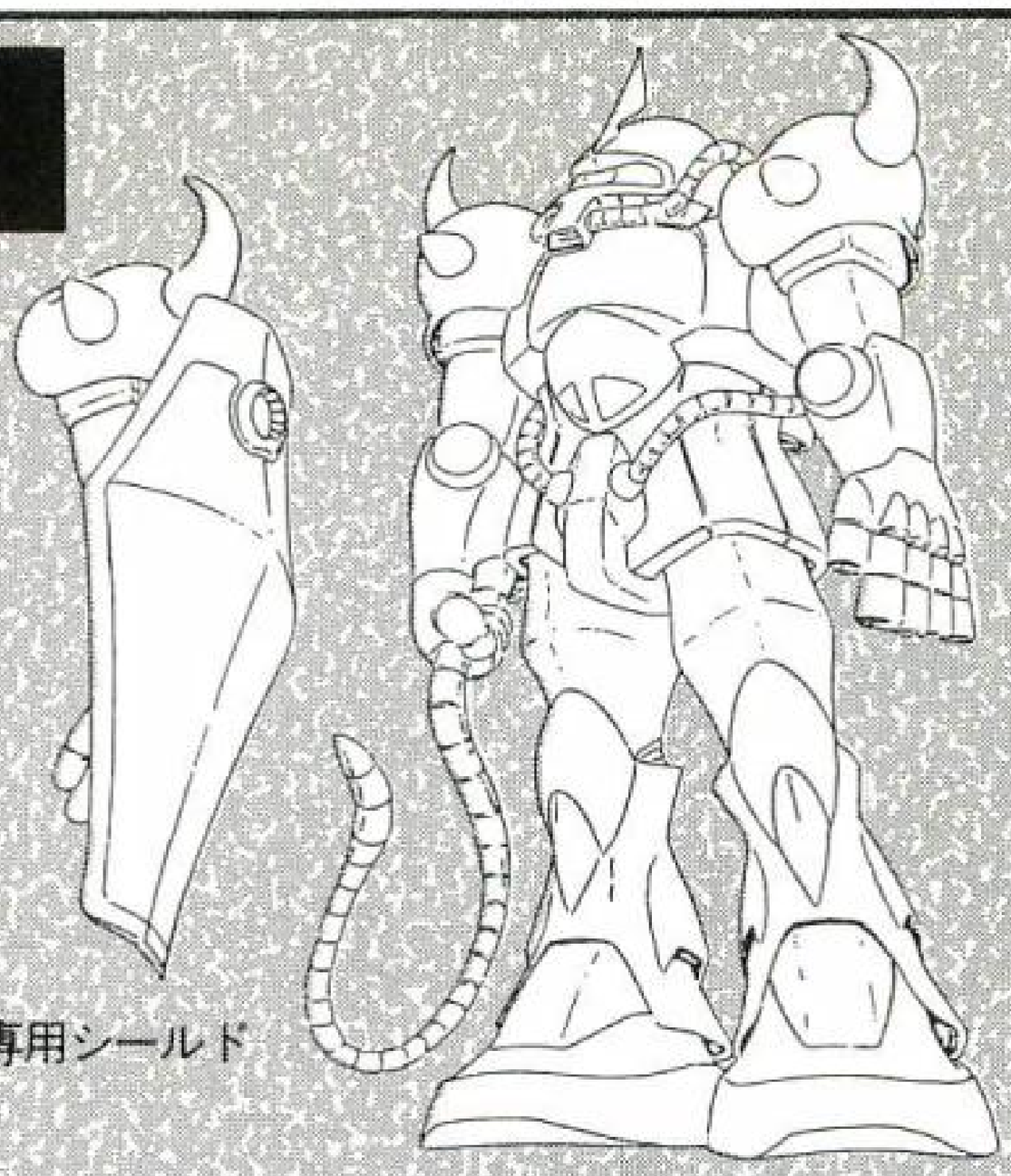
ザクII～シャア専用ザクII

MS－06Fから発展した機体で、指揮官や熟練パイロットの要望に答えたものとなっている。エンジン出力を30パーセント向上させ、プロペラントも増してはいるが、既存の機体を大きく上回るものではなかった。しかし、ベテランパイロットにとってこの差は大きく、大戦初期において顕著な戦績を多く残せたのも、このことによるといわれる。

MS-07B グフ



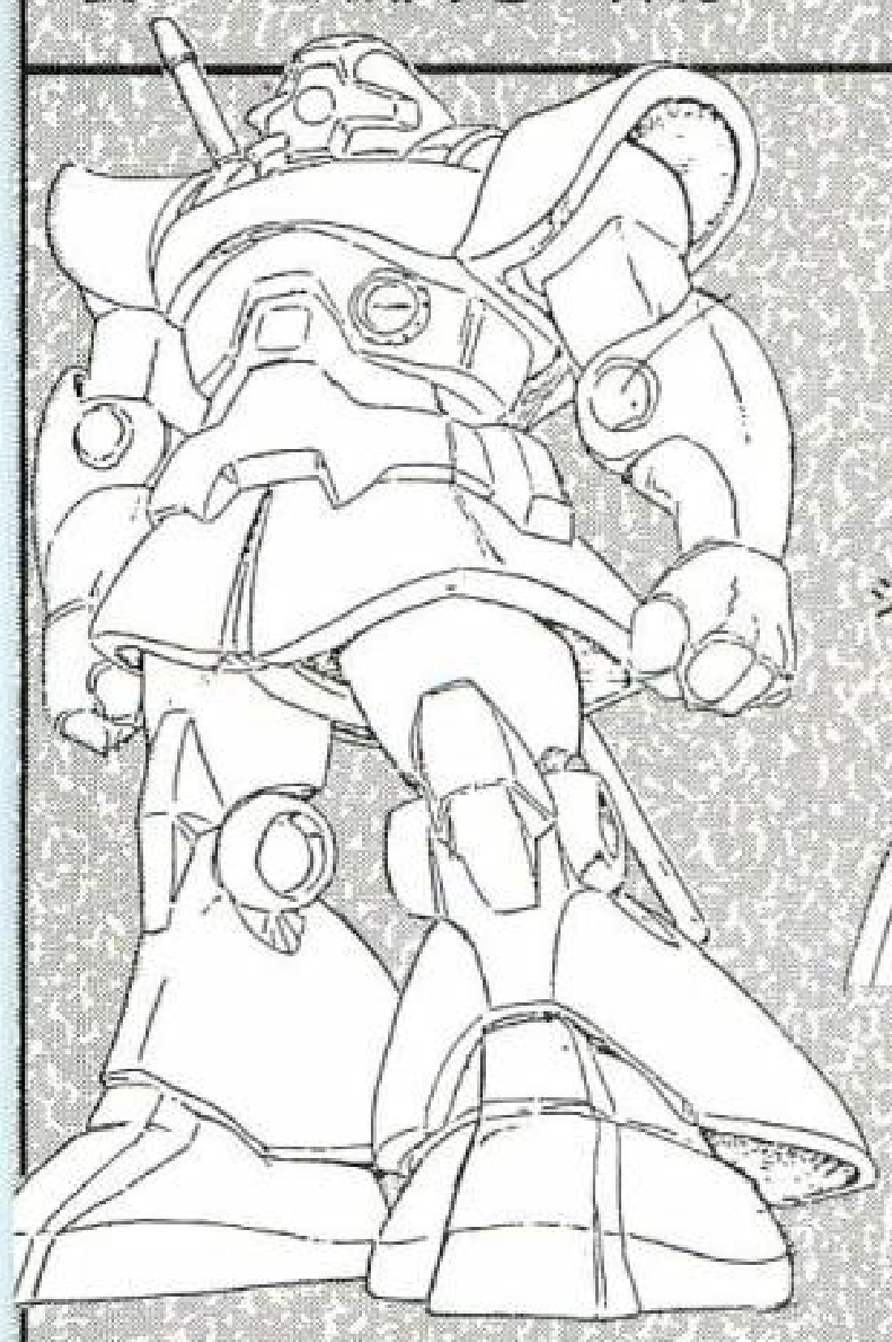
ヒートサーベル



専用シールド

陸戦用ザクII（J型）の後継機として開発された機体である。公国軍側は大戦の後期に連邦軍もMSを開発することを予測しており、この新型機を対MS戦仕様とした。左腕の5連装75ミリ機関砲と右腕のヒートロッドが固定武装となり、格闘戦用のシールドとヒートサーベルも装備された。また、バックパックのスラスターも大型化し、機動性・運動性とも に向上している。ザク程ではないが、改造型も多く確認されている。

MS-09(R09) ドム(リック・ドム)



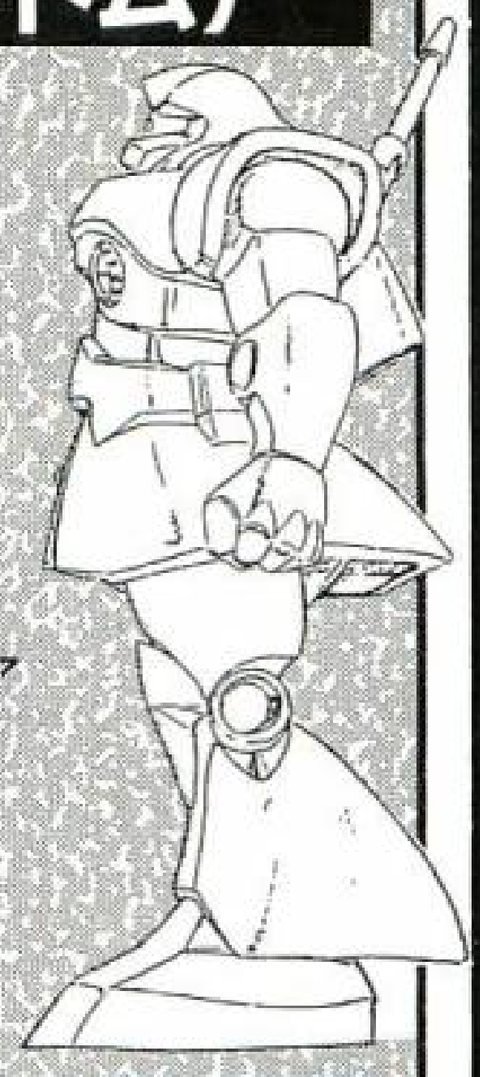


ジャイアント・バズーカ

リック・ドム
腰部バーニア



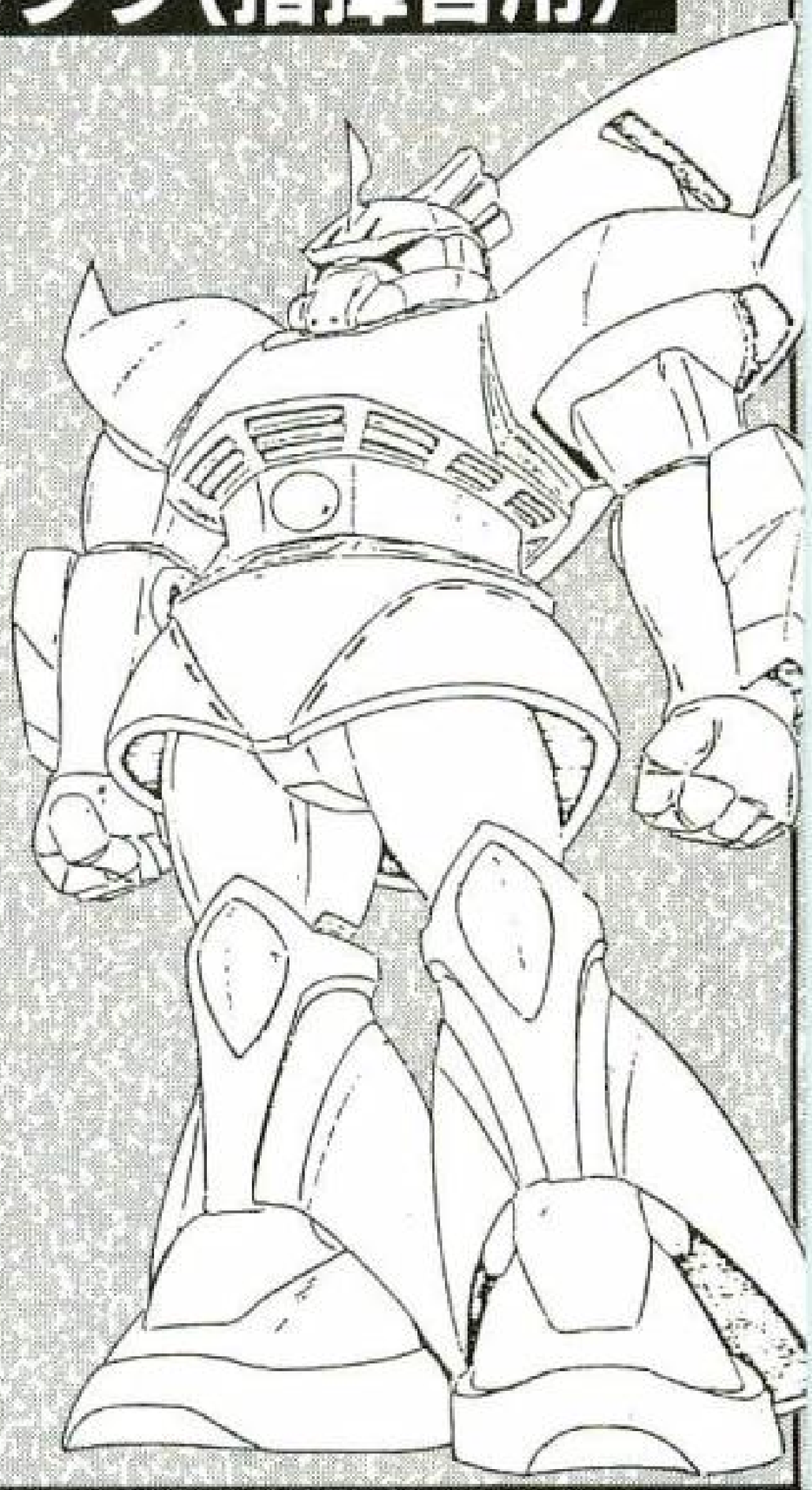
脚部バーニア

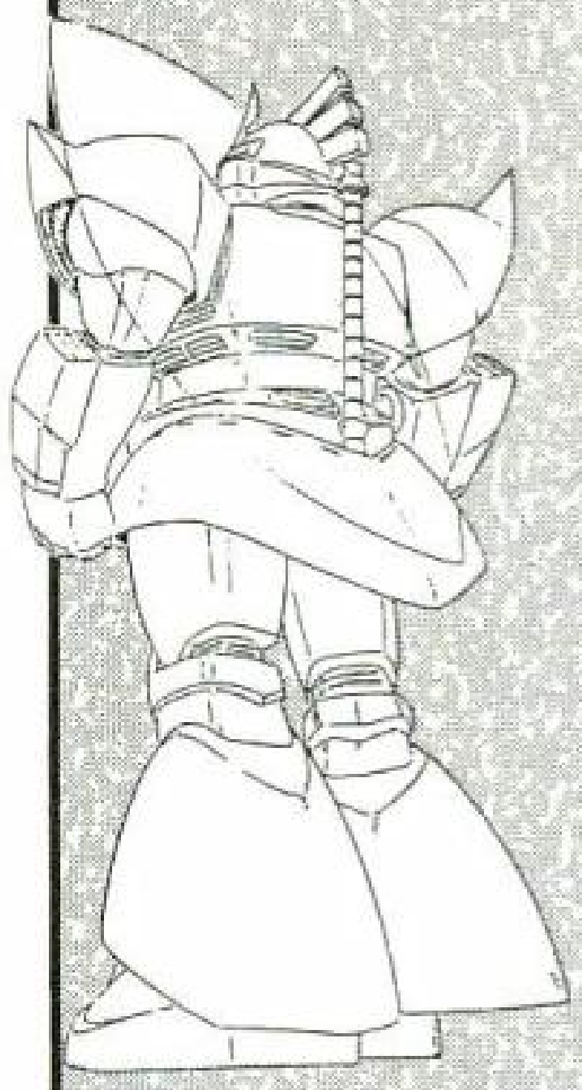


MS－07Bまでのモビルスーツの最大の問題点である地上での移動能力を解決した機体である。熱核ジェットと化学ロケットの複合推力でホバー走行し、MS単独での行動半径を飛躍に向上させた。さらに、地球攻略のためにおくれていた宇宙用MSの開発の空白をうめるためこの機体を改修し、MS－R09リック・ドムとして、MS－14Aが量産されるまで暫定的に主力モビルスーツとして活躍した。

MS-14A
ゲルググ（指揮官用）

大戦末期に登場した汎用機。水陸両用MSを含めた全てのMSのノウハウが結集し、公国軍初の携帯式ビーム兵器を搭載した機体となる。MS－R09以上の大型機となるが、運動性は機体の追従性、アポジモーターの推力向上によりむしろ向上している。

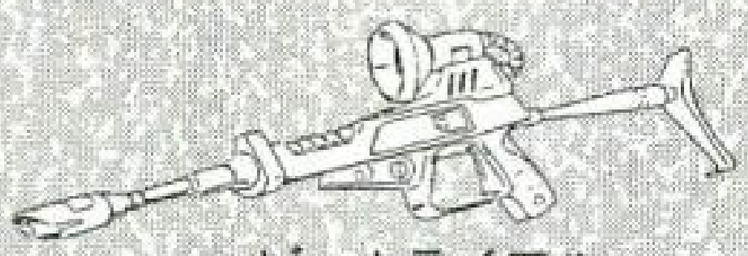






専用シールド

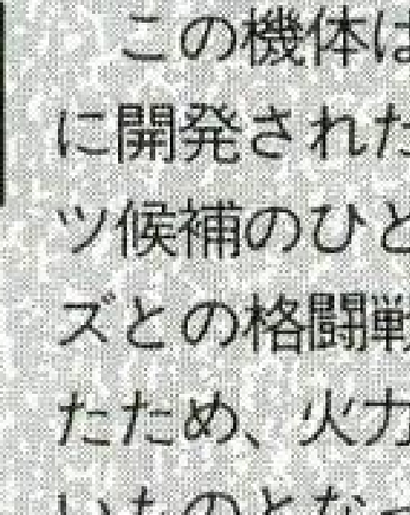
ビームソード



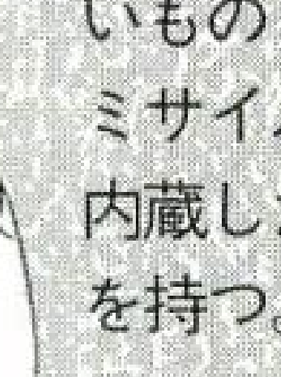
ビームライフル

MS-15
ギャン

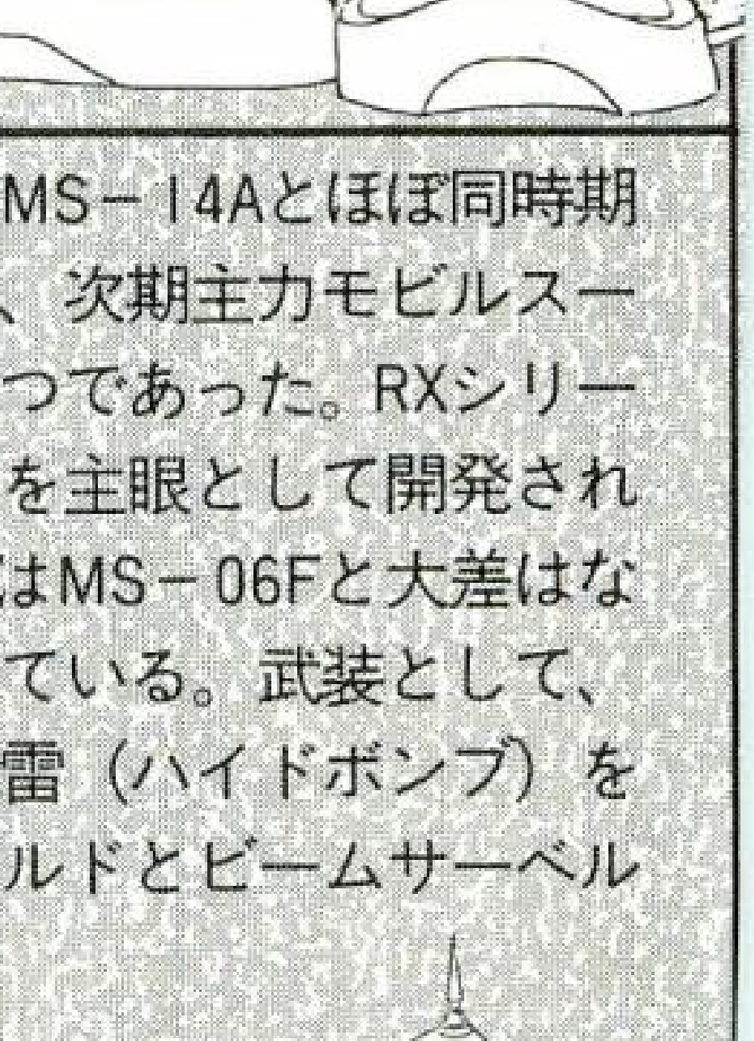
この機体はMS－14Aとほぼ同時期に開発された、次期主力モビルスーツ候補のひとつであった。RXシリーズとの格闘戦を主眼として開発されたため、火力はMS－06Fと大差はないものとなっている。武装として、ミサイルや機雷（ハイドボンブ）を内蔵したシールドとビームサーベルを持つ。



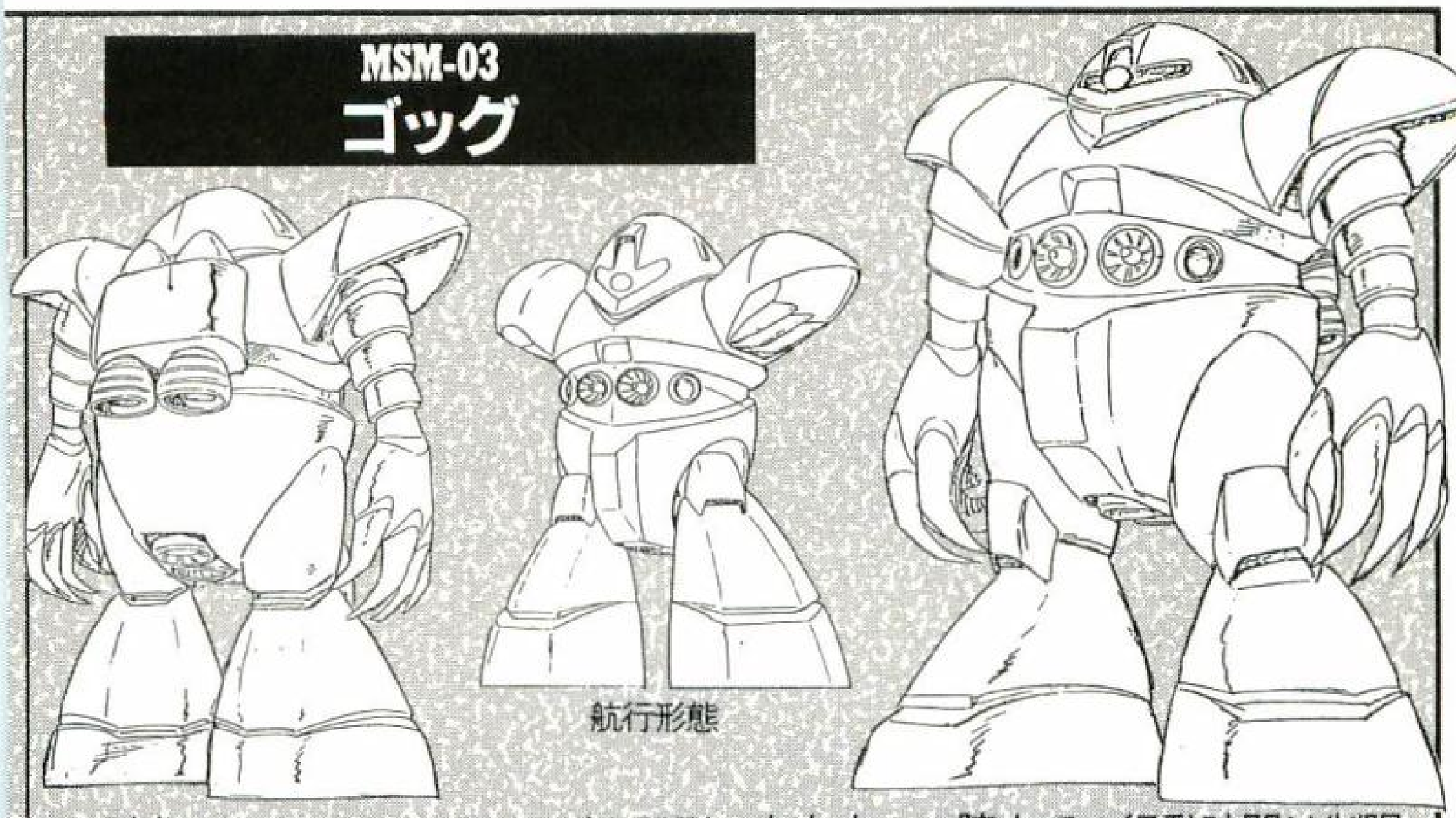
シールド内ミサイル



ハンドボンブ

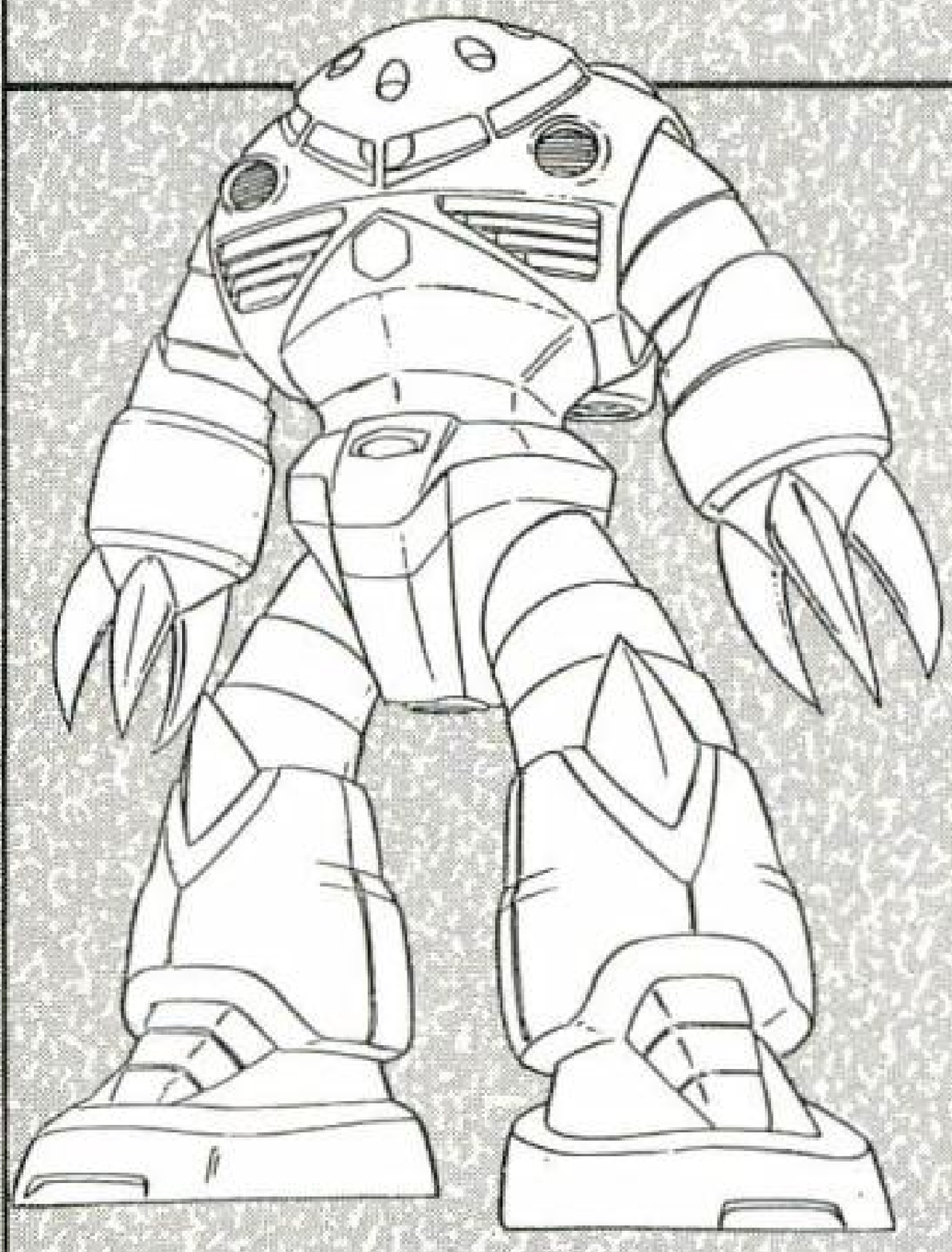


MSM-03
ゴッグ

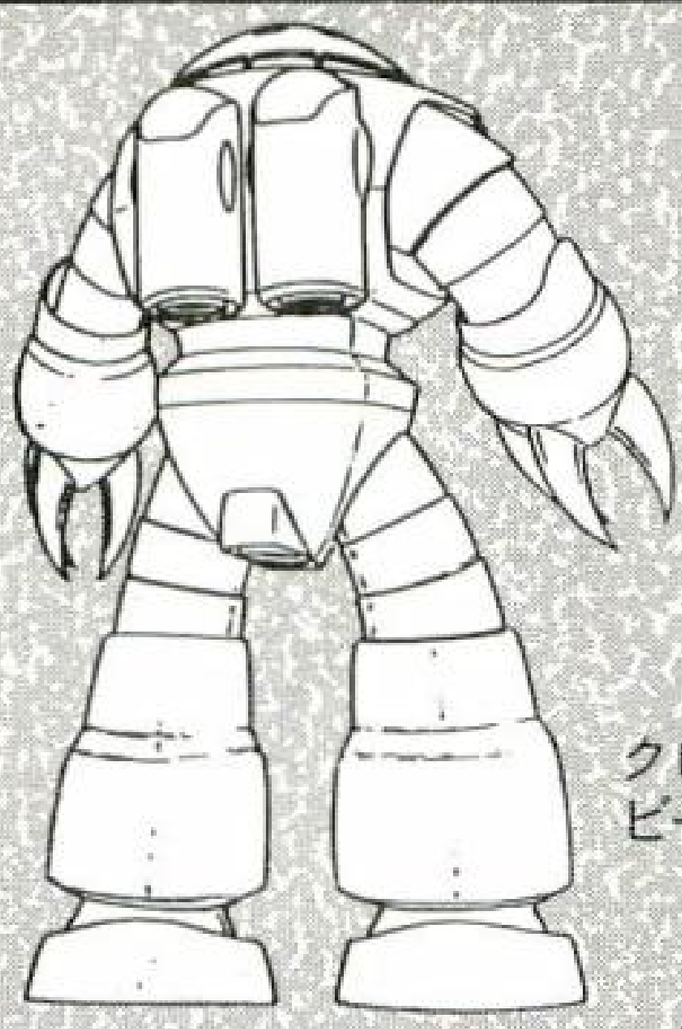


航行形態

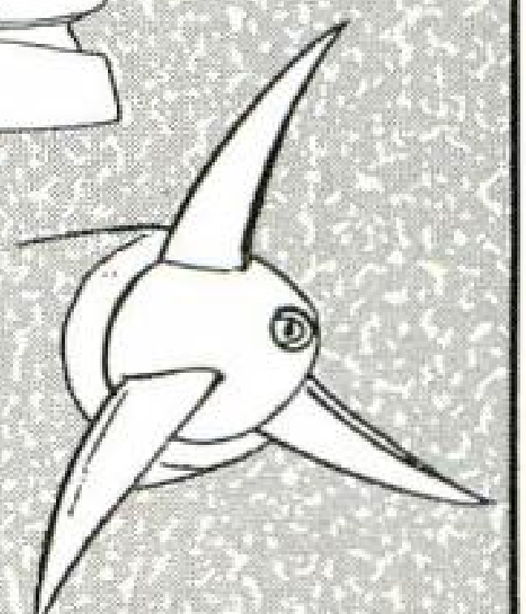
試作されたMS－06Mは、ザクII型モビルスーツを水中用として改造したものだったが、性能的な問題を解消できず、中止されてしまった。その後を受けて開発されたのがこの機体である。水陸両用機として開発されたものの陸上での行動時間は制限されていた。しかし、フリージーヤードによる対潜兵器の無力化と2門のメガ粒子砲と2基のミサイルランチャーを装備したこの機体は、上陸作戦等で多くの戦績を残している。



MSM-07(07S)
ズゴック(シャア専用)

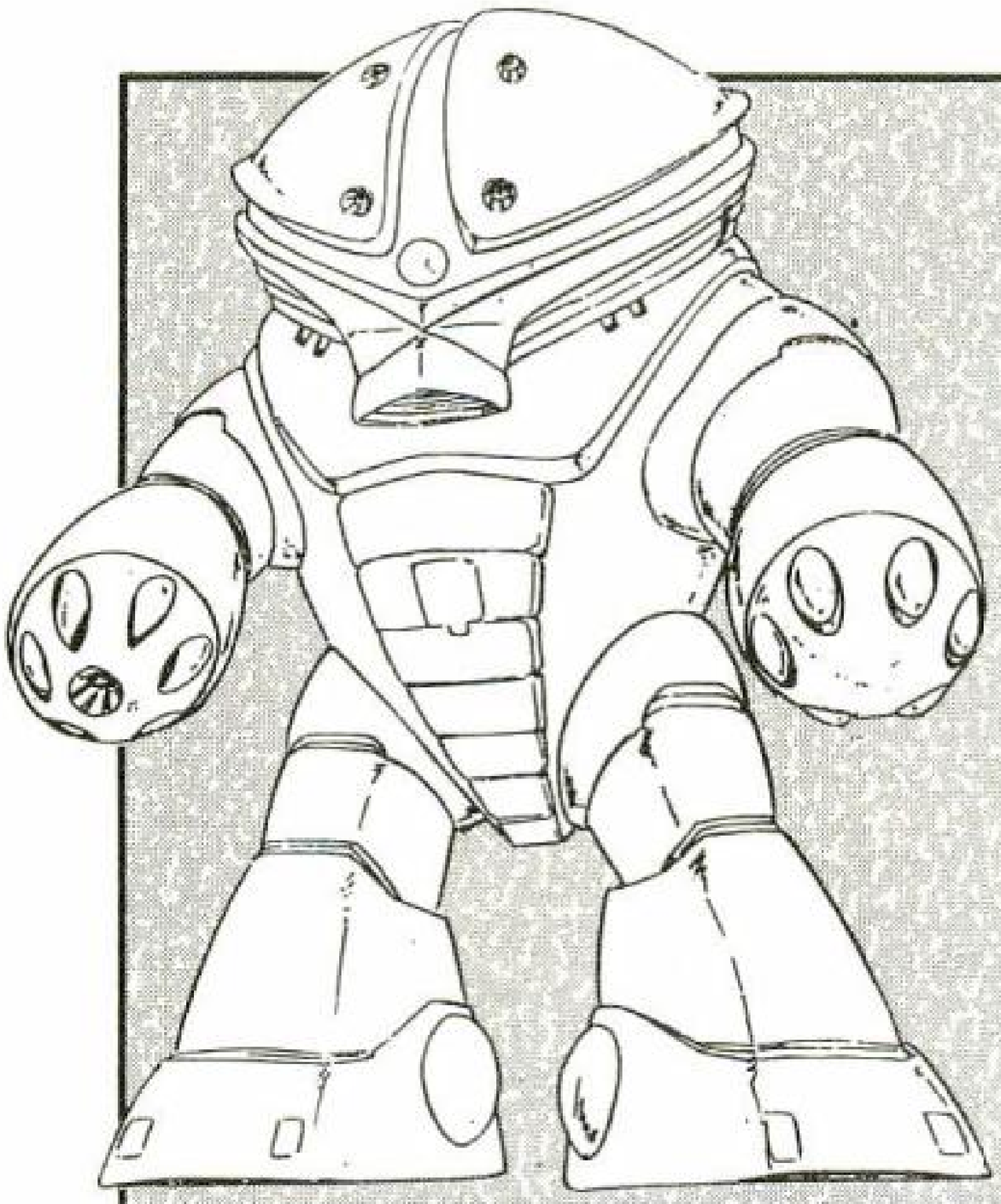


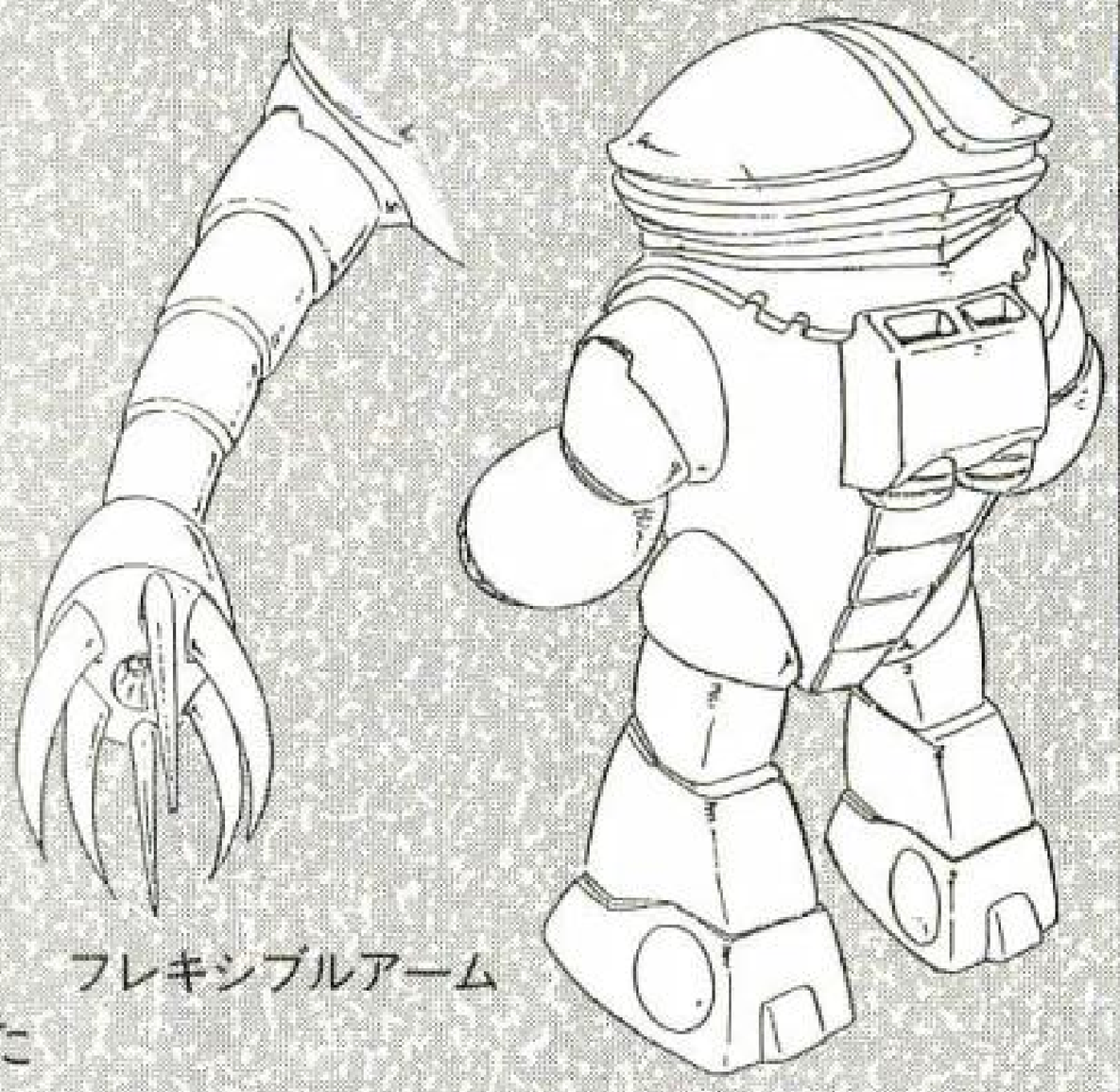
クローバイス
ビーム砲



この機体は水陸両用型として開発されたものだが、陸戦能力も極めて高く、武装もメガ粒子砲2門、ロケット砲6門、格闘戦用クローと充実している。さらにこの改良型のMSM－07Sは反応炉の出力、運動性、装甲の材質等が改善されていて、指揮官用のみならず後期生産時にはすべてS型にきりかえられている。

MSM-04
アッガイ

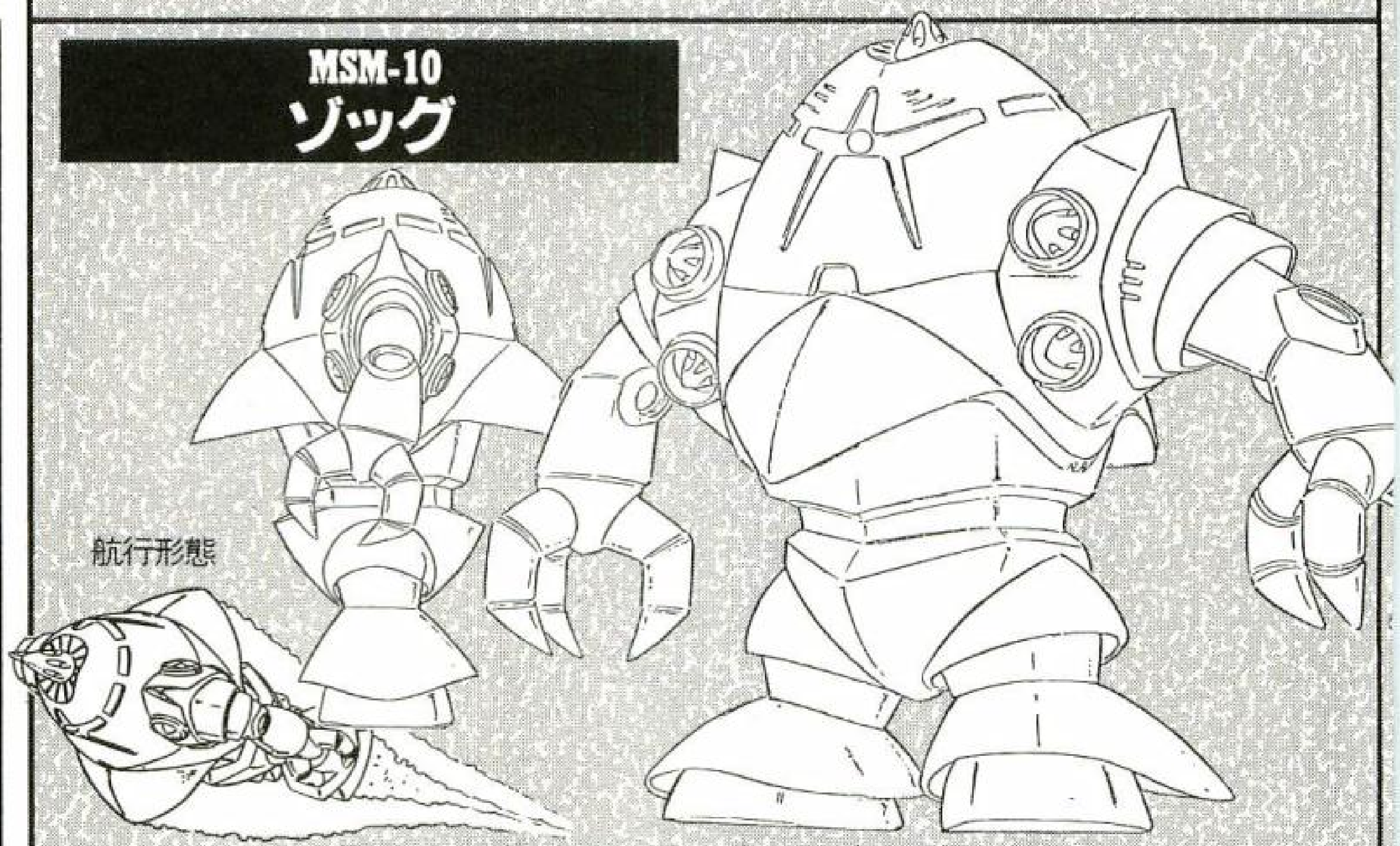




フレキシブルアーム

MSM－07の後に開発が開始されたが、同機が改良を重ねている間に、MS－06シリーズのパーツの流用が可能だったせいもあって完成にこぎつけ、実戦配備された機体である。この機体は放出する熱量が少なかったために、装甲等にも手を加えてステルス性を向上させ、隠密作戦や偵察にも多用された。フレキシブルアーム、両腕のクロー、右腕のメガ粒子砲が装備されている。

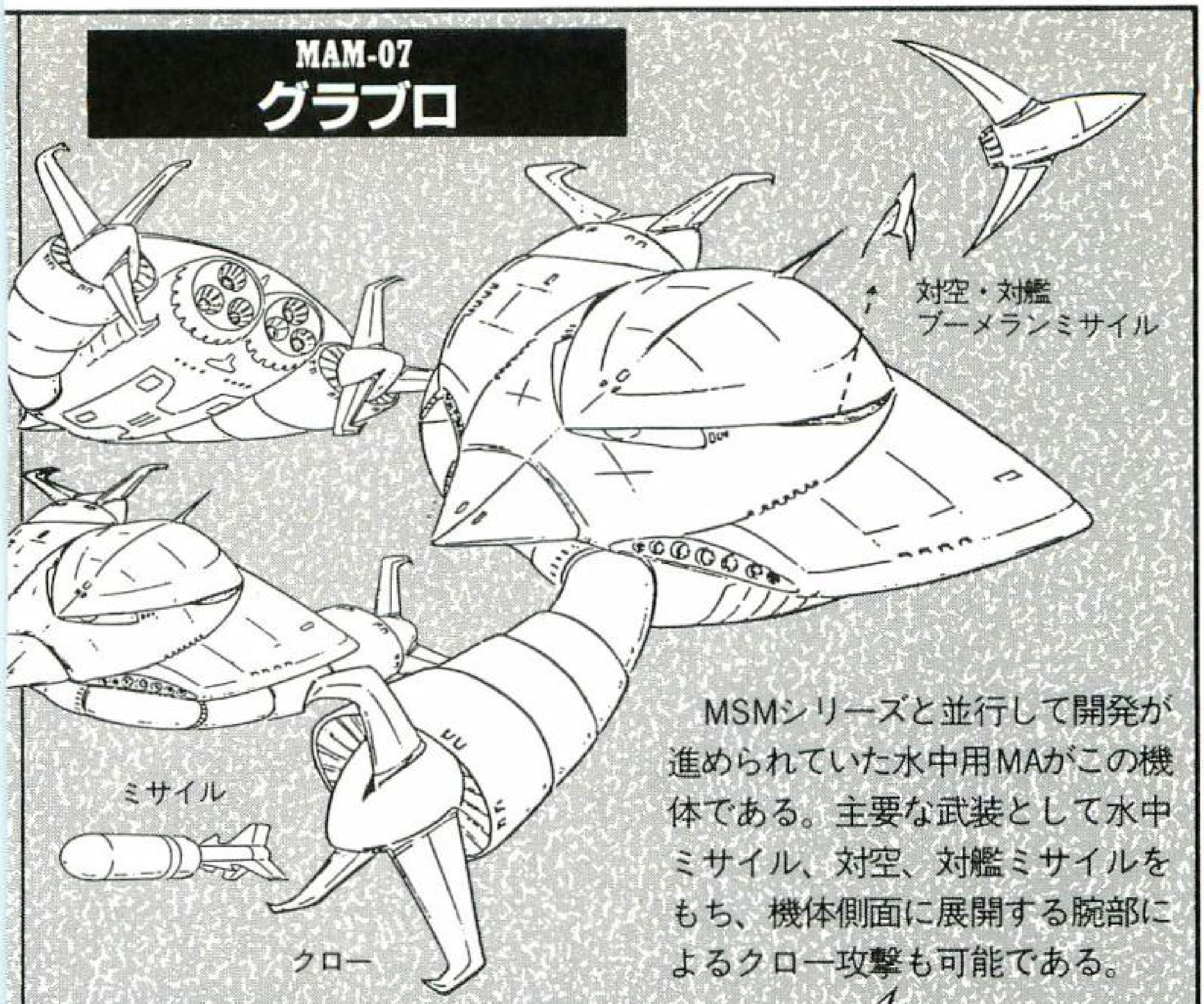
MSM-10
ゾッグ



航行形態

この機体は公国軍の水陸両用モビルスーツの中でも特異な存在で、モビルスーツとモビルアーマーの過渡期に制作されたため、独特の形状をしている。脚部も歩行が不可能な構造で、陸上の移動はロケットエンジンで行うというものだった。通常の2～3倍の出力の反応炉をもち、9門あるメガ粒子砲を連射するという移動砲座並みの火力を誇る。

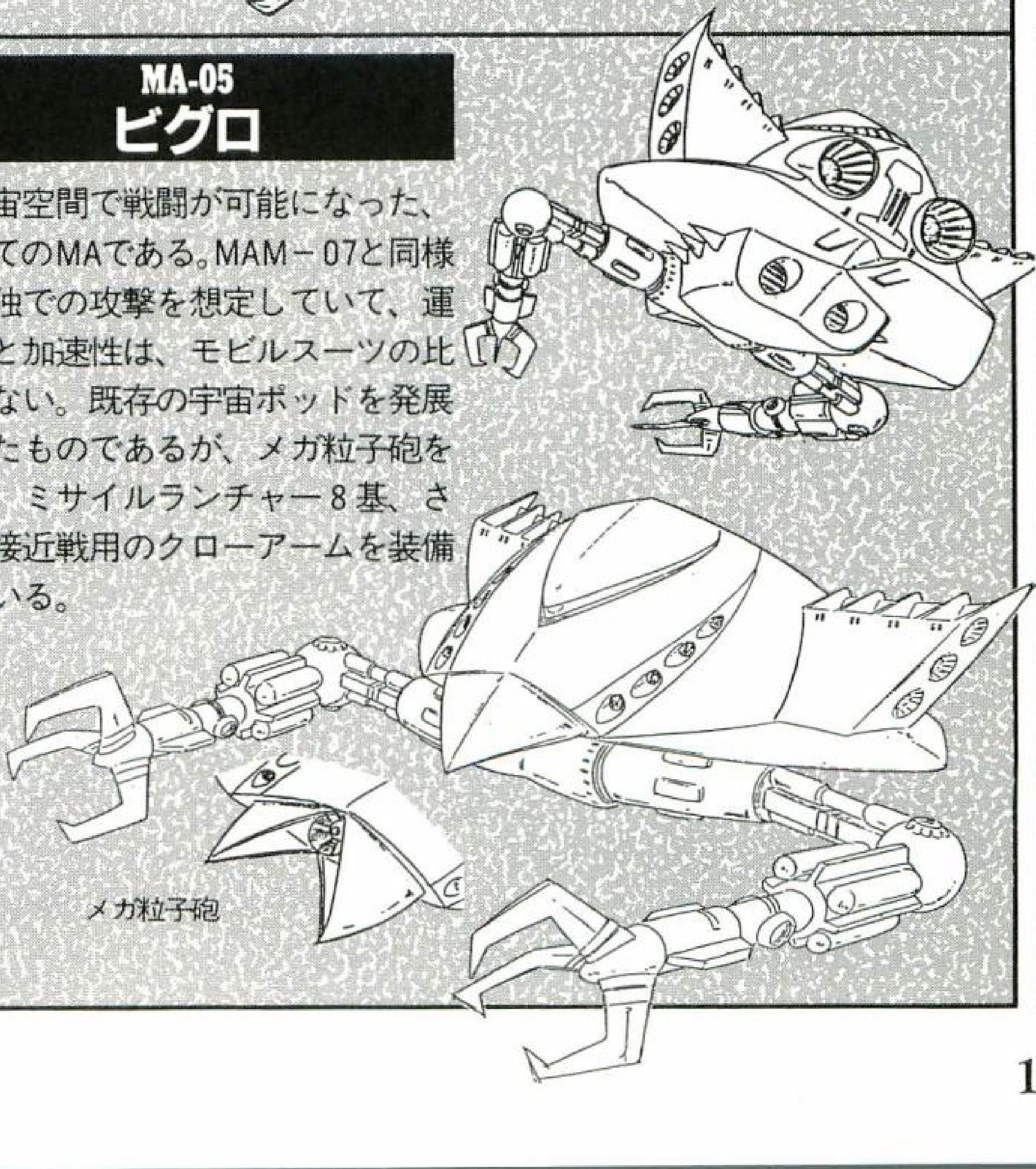
MAM-07 グラブロ



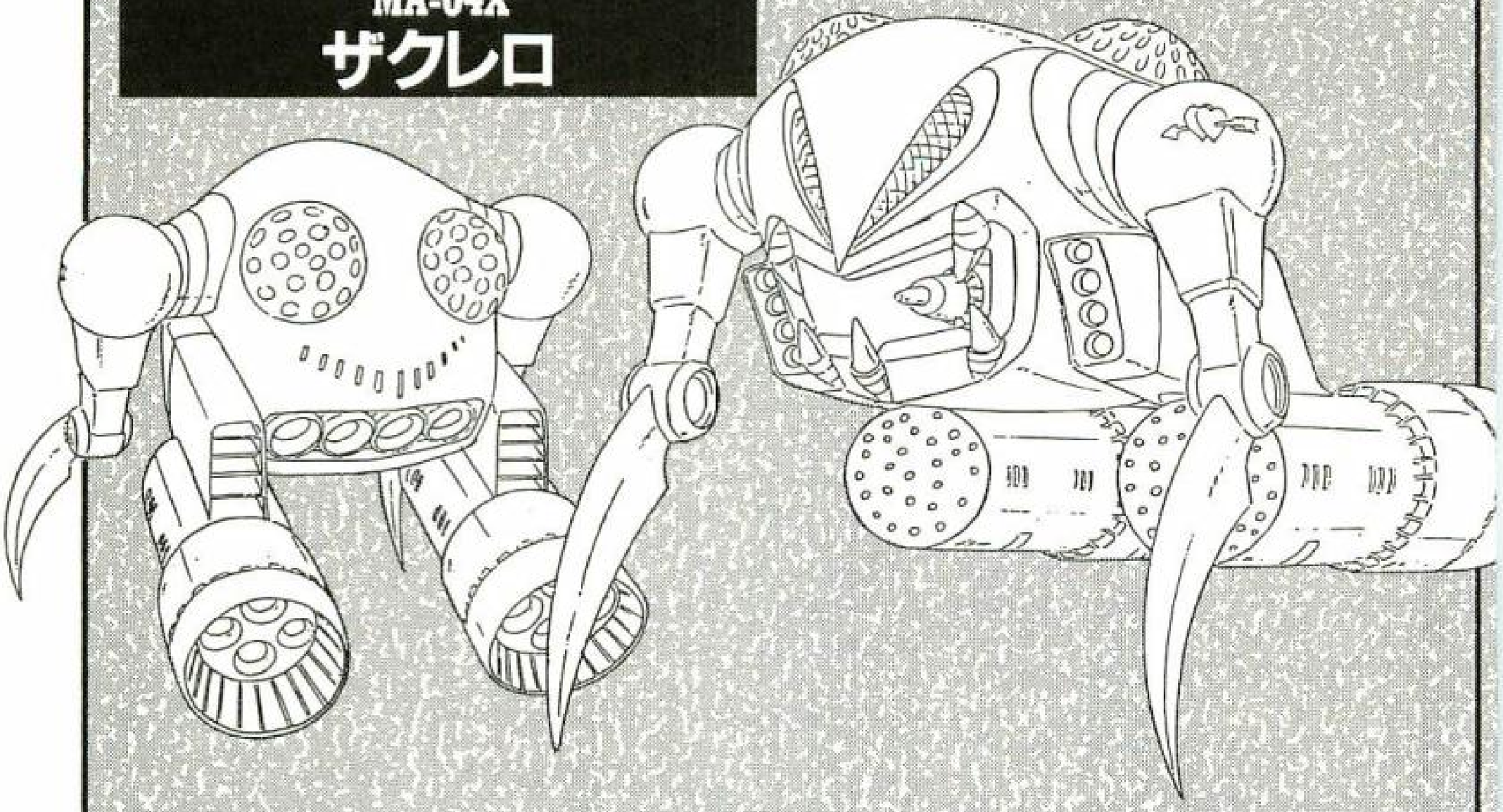
MSMシリーズと並行して開発が進められていた水中用MAがこの機体である。主要な武装として水中ミサイル、対空、対艦ミサイルをもち、機体側面に展開する腕部によるクロー攻撃も可能である。

MA-05 ビグロ

宇宙空間で戦闘が可能になった、初めてのMAである。MAM－07と同様に単独での攻撃を想定していて、運動性と加速性は、モビルスーツの比ではない。既存の宇宙ポッドを発展させたものであるが、メガ粒子砲を1門、ミサイルランチャー8基、さらに接近戦用のクローアームを装備している。

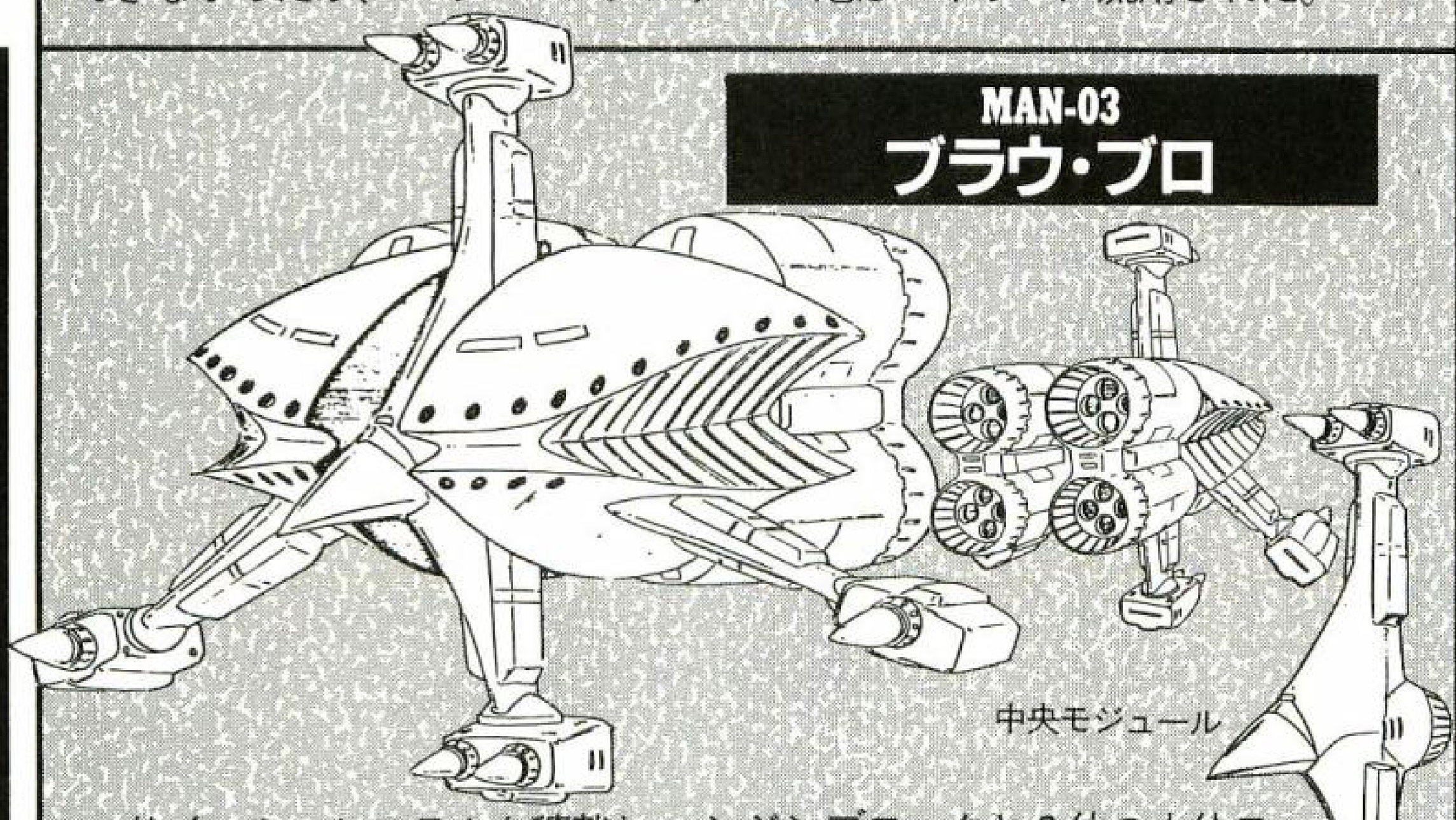


MA-04X
ザクレロ



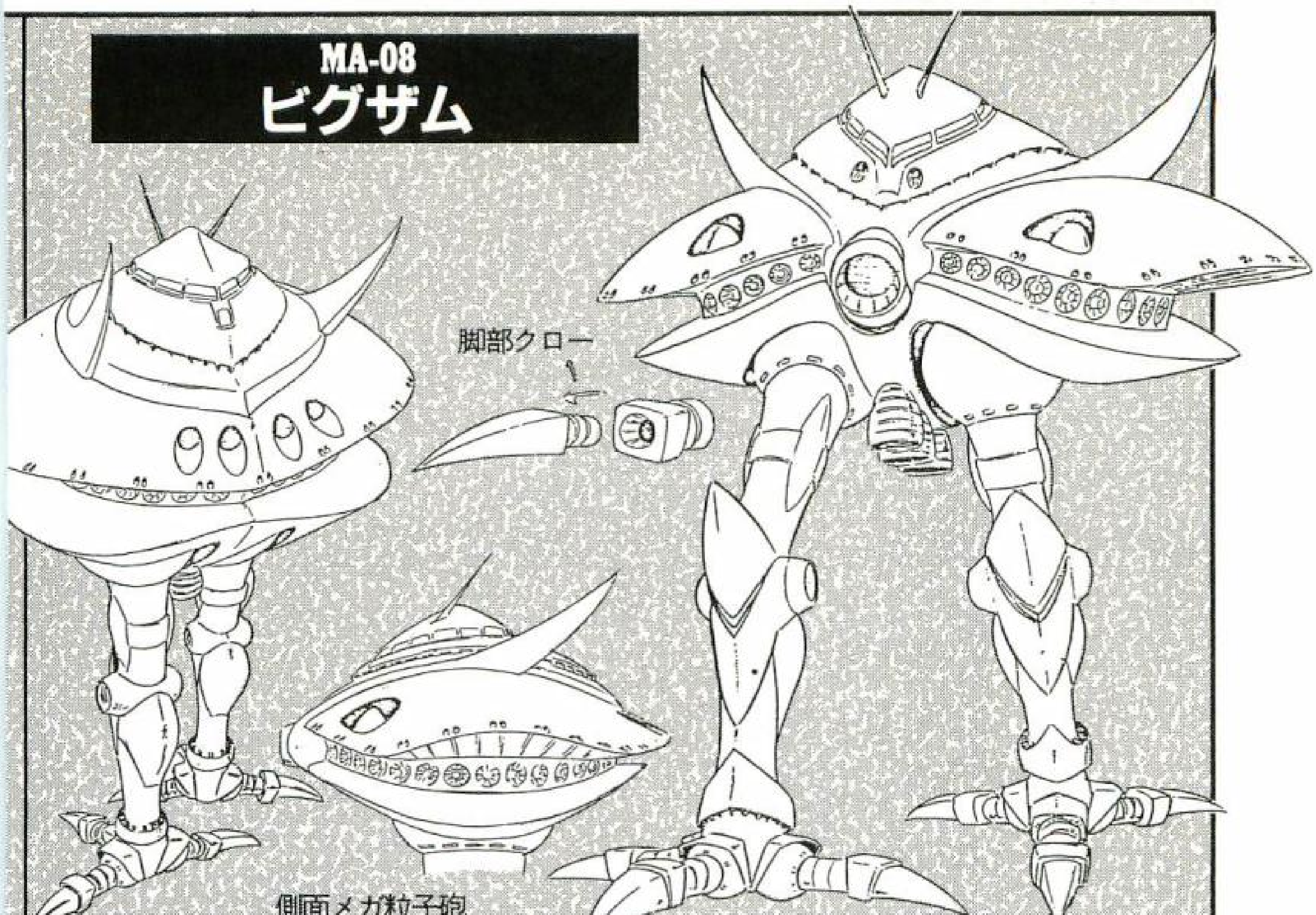
この機体はMAM－07やMA－05以前に開発が始まっていたものの、中途で放棄されたものである。運動性や加速性能で計画通りのものを達成できなかったが、パワーコンデンサーは良好で、ビーム兵器の長時間使用に耐えられる。拡散ビーム砲の搭載が大きな特長であり、これだけでもこの機体の価値がある。このビーム砲はスキウレに流用された。

MAN-03
ブラウ・ブロ



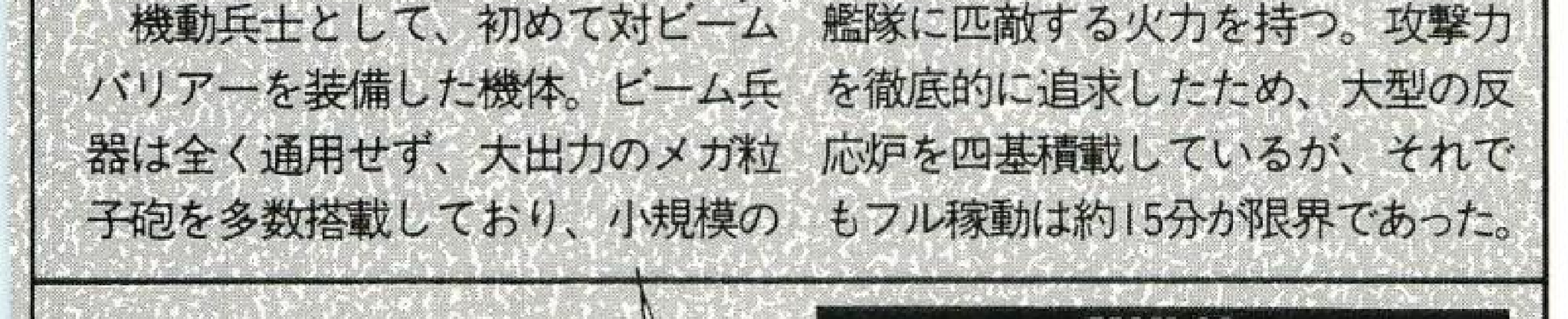
サイコミュシステムを積載しているため、本体は大型の突撃艇なみの大きさをもっている。サイコミュ兵器としても初めてのものであり、MAN－08やMSN－02はこの機がなければ開発できなかったとされる。２基のエンジンブロックと３体の本体モジュールで構成され、２連装２門、単装２門の有線サイコミュ式メガ粒子砲を使ったオールレンジ攻撃が可能。本体モジュールは、それぞれが各個に航行戦闘できる。

MA-08 ビグザム



機動兵士として、初めて対ビームバリアーを装備した機体。ビーム兵器は全く通用せず、大出力のメガ粒子砲を多数搭載しており、小規模の艦隊に匹敵する火力を持つ。攻撃力を徹底的に追求したため、大型の反応炉を四基積載しているが、それでもフル稼動は約15分が限界であった。

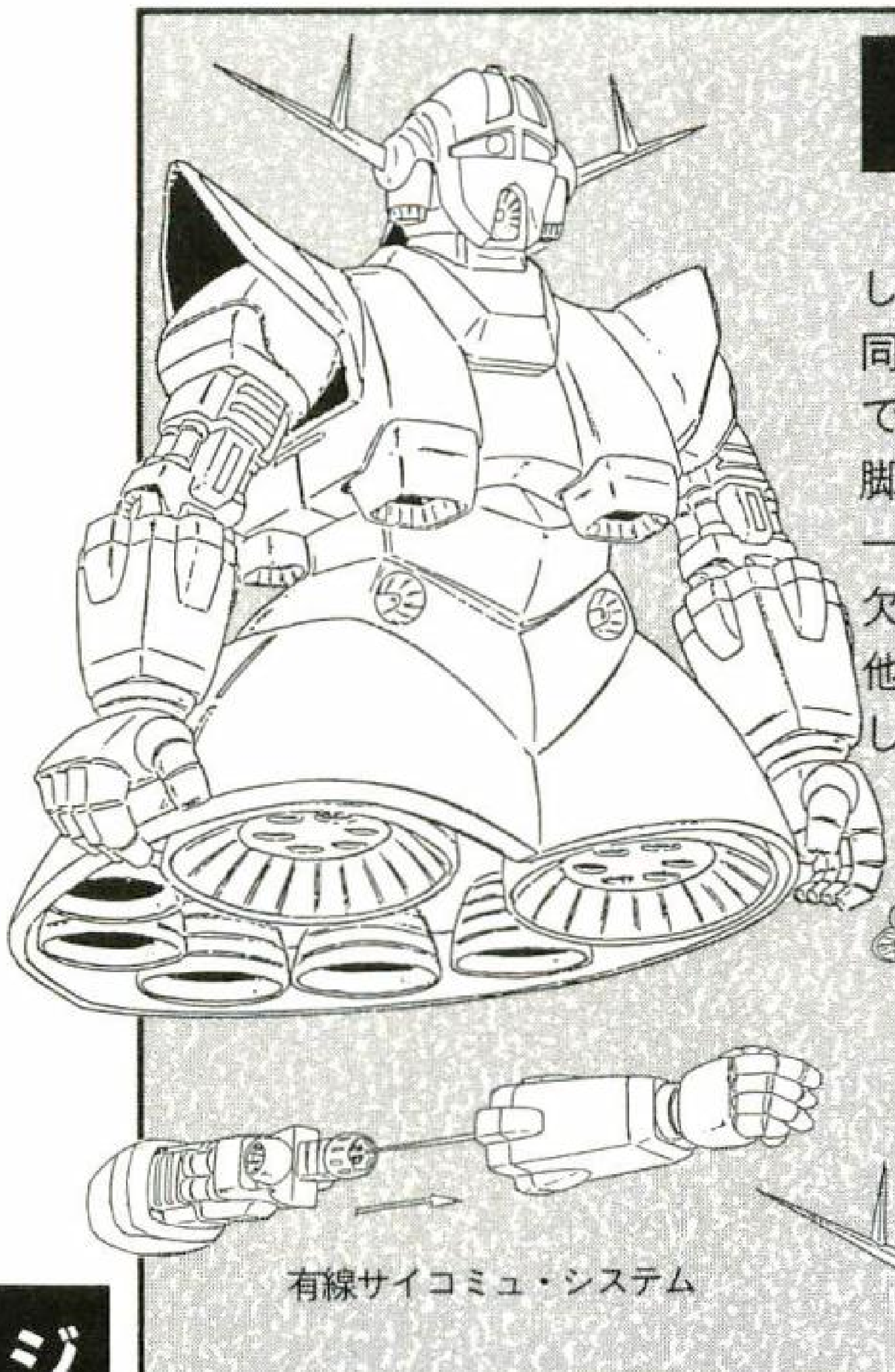
MAN-08 エルメス



ほとんどの操作をサイコミュで行なう、本格的なニュータイプ専用MA。本体に2門のメガ粒子砲を搭載しているが、攻撃の主体は本体から射出される無人随伴攻撃機“ビット”である。ビットは機体の後部に10機搭載されており、モノアイが装備されている。距離や電波状態の干渉を受けずに遠隔操作によるメガ粒子砲での攻撃が可能である。

MSN-02
ジオング

有線制御式メガ粒子砲を2基搭載したニュータイプ専用MA。MAN－02同様に機体を分離させ個別に戦闘ができるように設計されていた。だが、脚部の完成が遅れ、ア・バオア・クー戦では脚なし、腕部装甲の一部を欠いたまま出撃した。メガ粒子砲は他にも腹部に2門、頭部に1門搭載している。

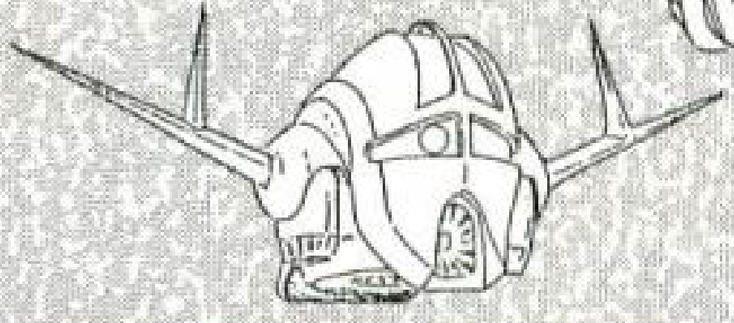


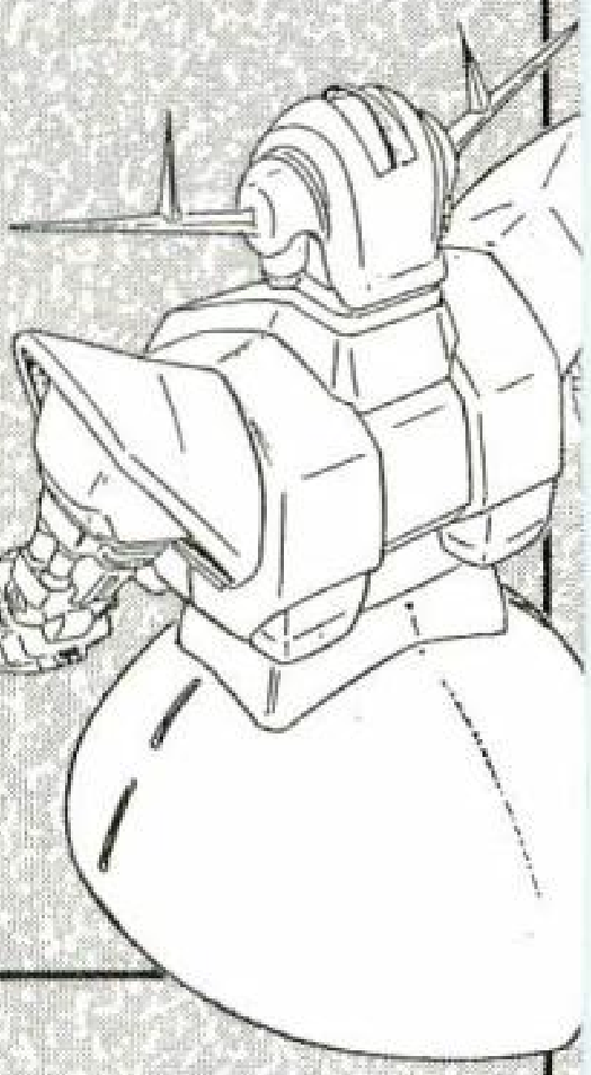
腕部5連装ビーム砲



有線サイコミュ・システム

頭部モジュール

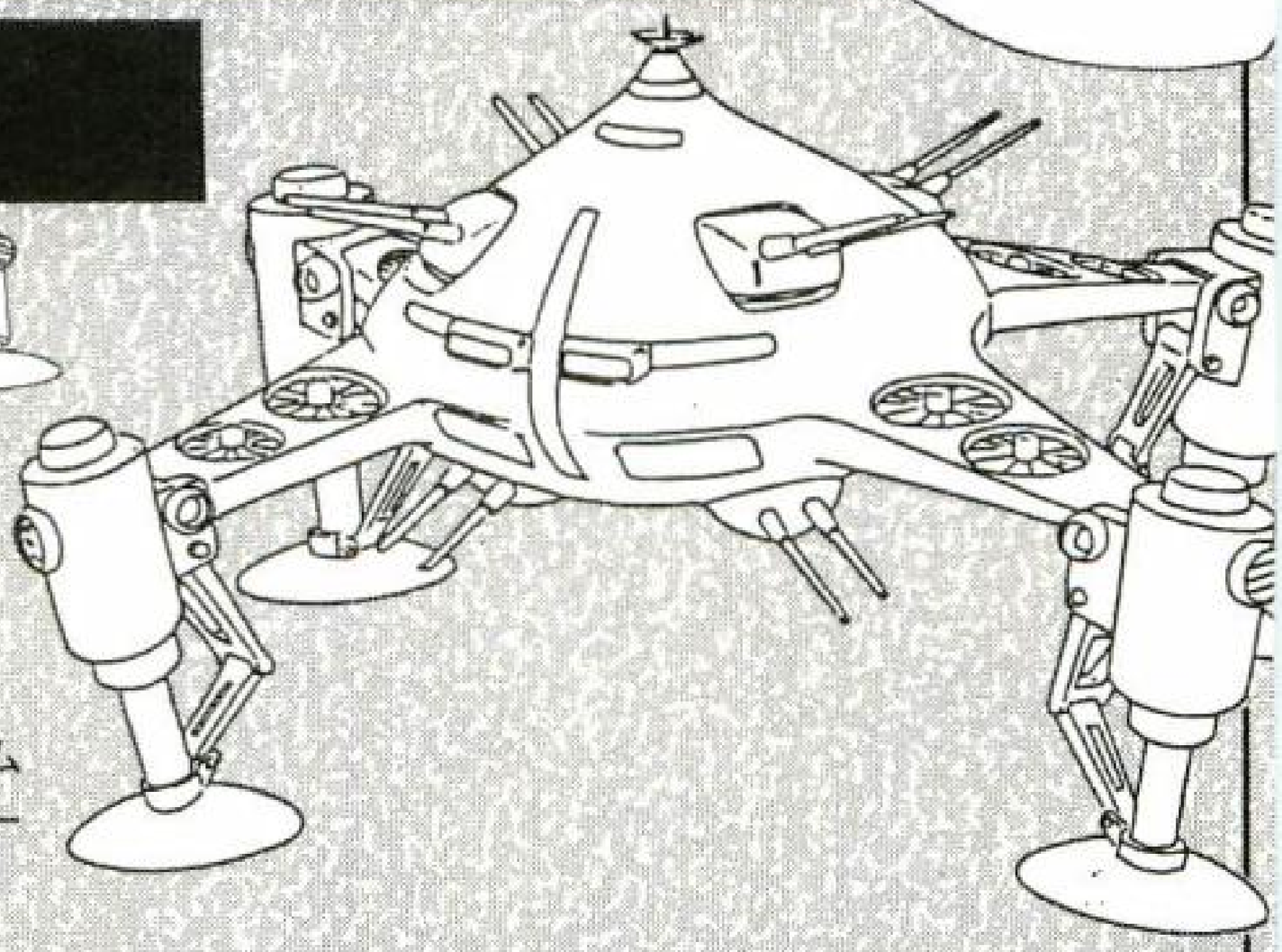




MAX-03
アッザム



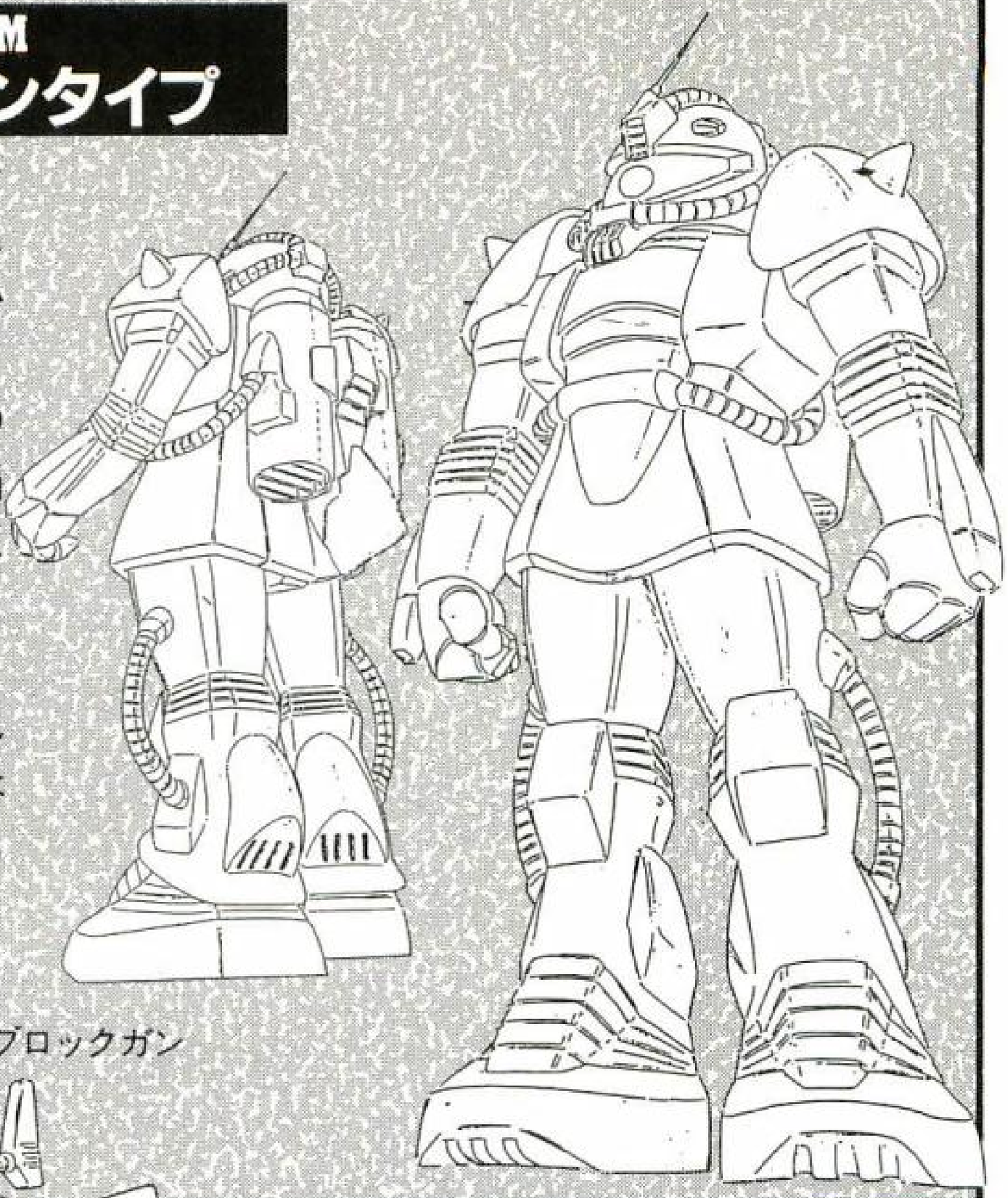
アッザム
リーダー

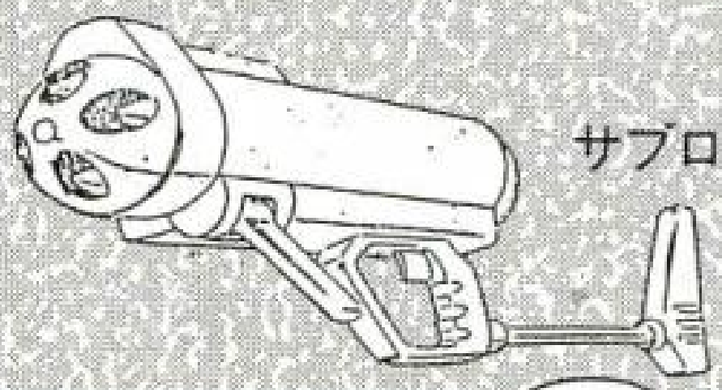


モビルアーマーという概念が確立する以前の機体。便宜上試作機といえないこともないが、原型機である移動式対地攻撃兵器G87ルナタンクを地球用に改造し、武装を改修しただけなので、移動砲座の域は出ていない。短時間のミノフスキークラフトによる飛行が可能で、2連装メガ粒子砲2門、さらに敵に触某を散布し、高周波による高熱でダメージを与える特殊兵器アッザムリーダーを装備している。

MS-06M
ザク・マリンタイプ

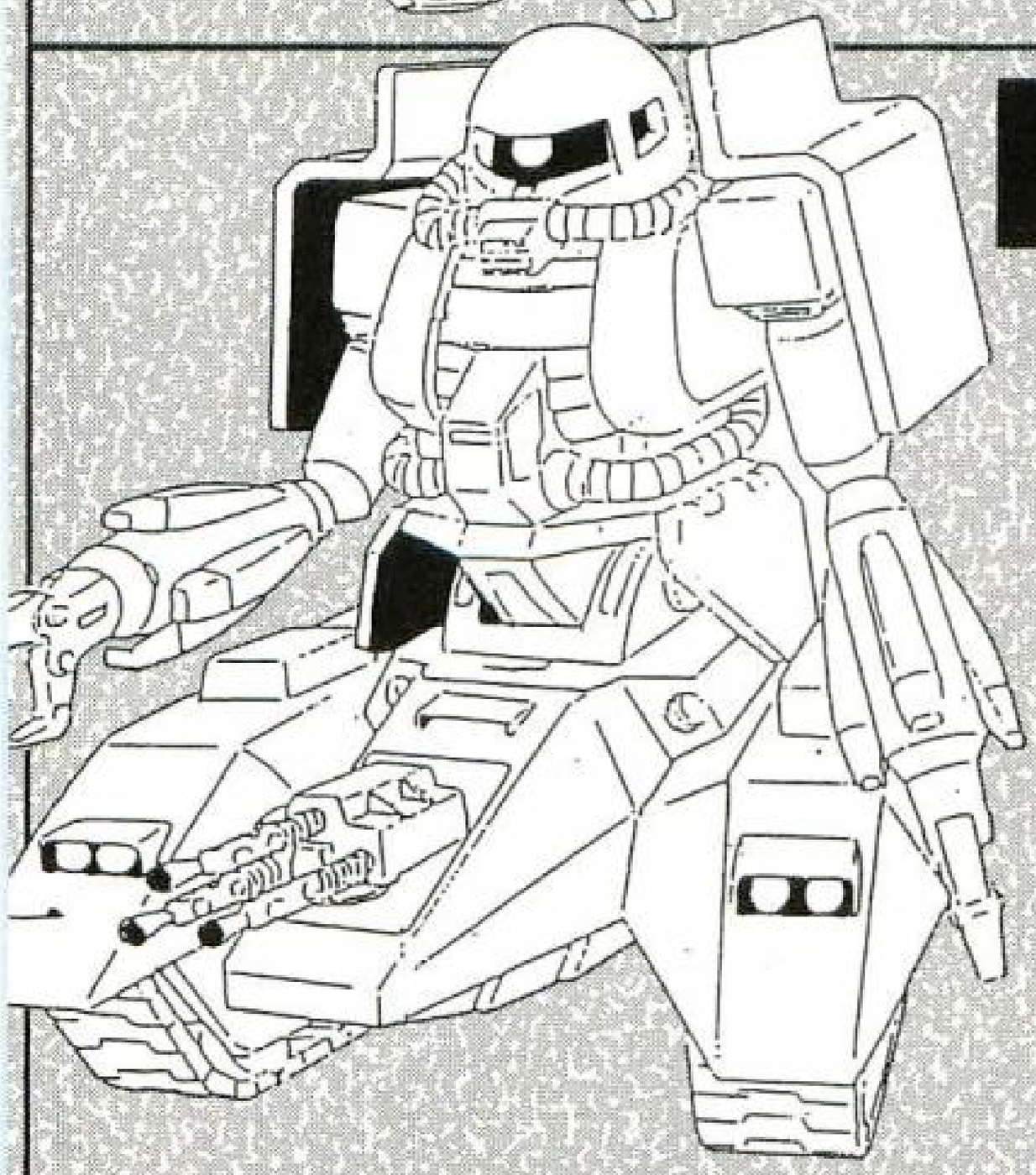
MS－06Fタイプをベースに開発された水中用MSである。いわゆるザクⅡのバリエーションのうちのひとつであるが、当初期待されていたほどの性能は得られず、新型水中用モビルスーツ開発が着手されたこともあり、数体が作られただけである。

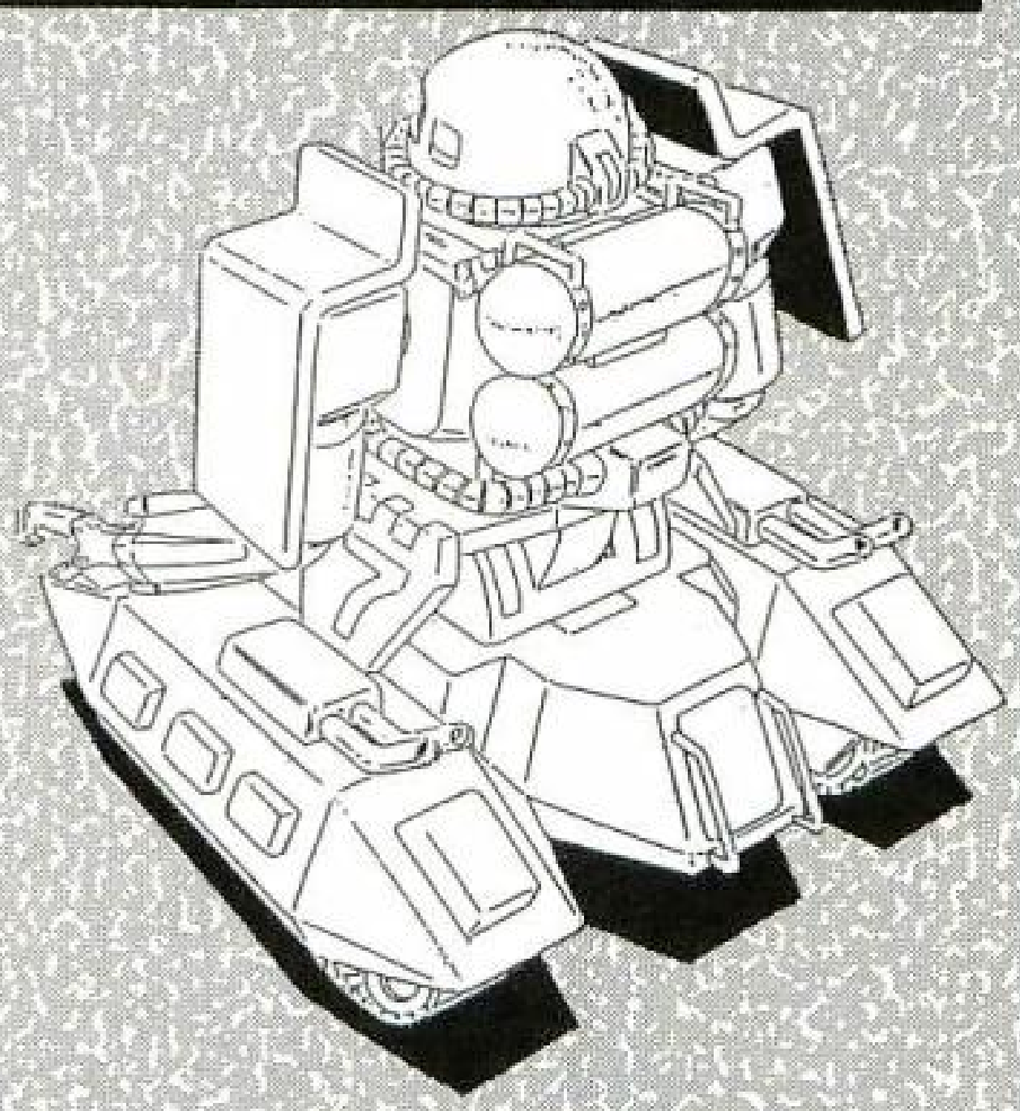




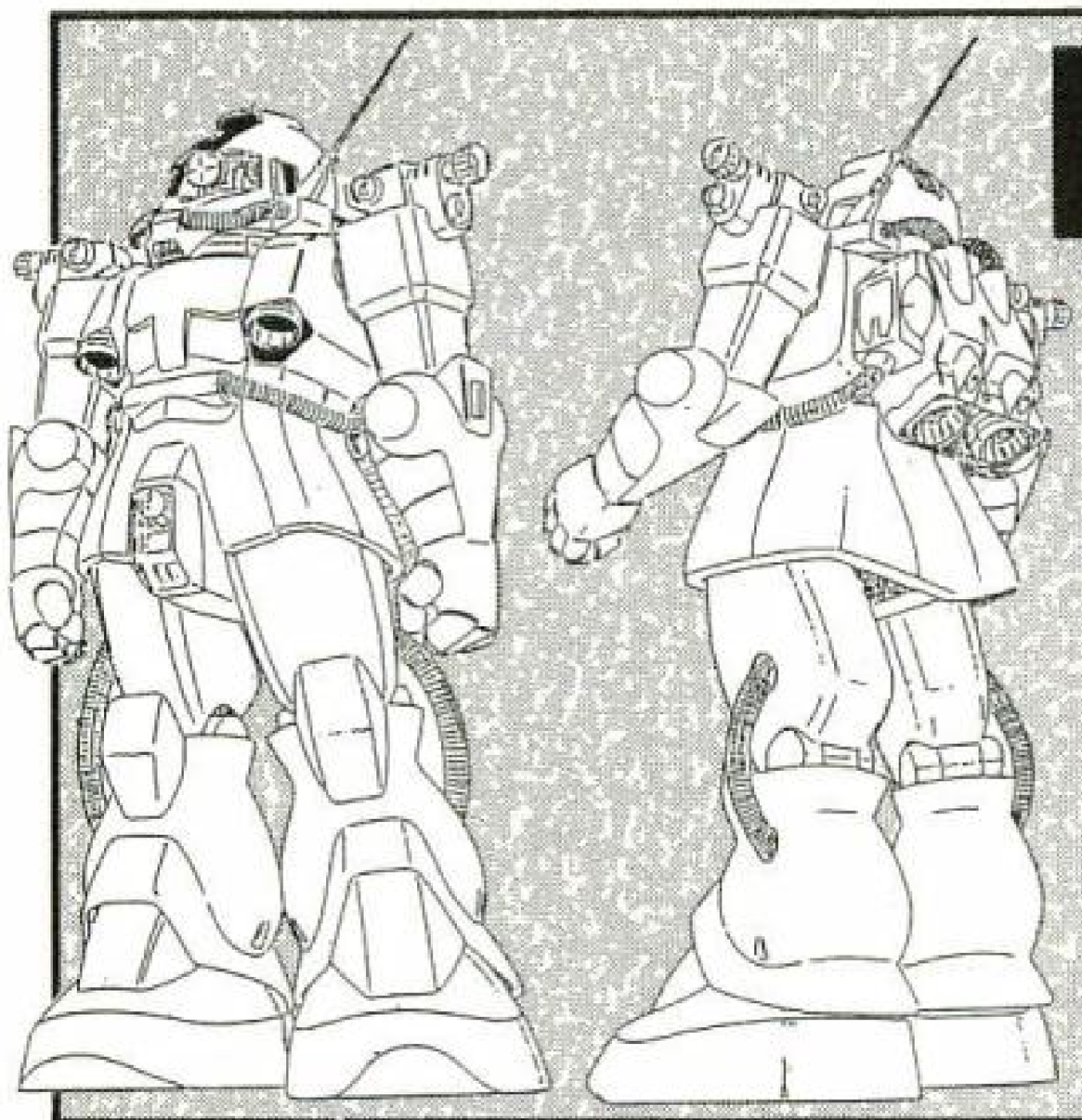
サブロックガン

MS-06V
ザク・タンク





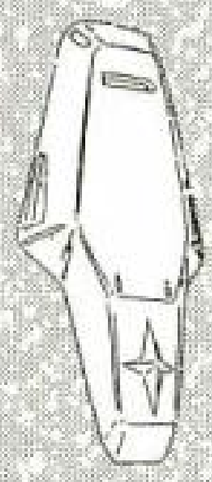
最前線ではMSはおろか消耗部品の補給すら間に合わなかった。そのため、破損をまぬがれた部品を組み合わせた再生機が多かった。このV型はマゼラベースを脚部としたもので偶然だが連邦軍のRX－75に似たものとなった。さまざまな武装を施し実戦に投用した部隊も多かったものの、基本的に作業用として分類されている。



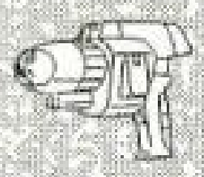
MS-06E
ザク強行偵察型

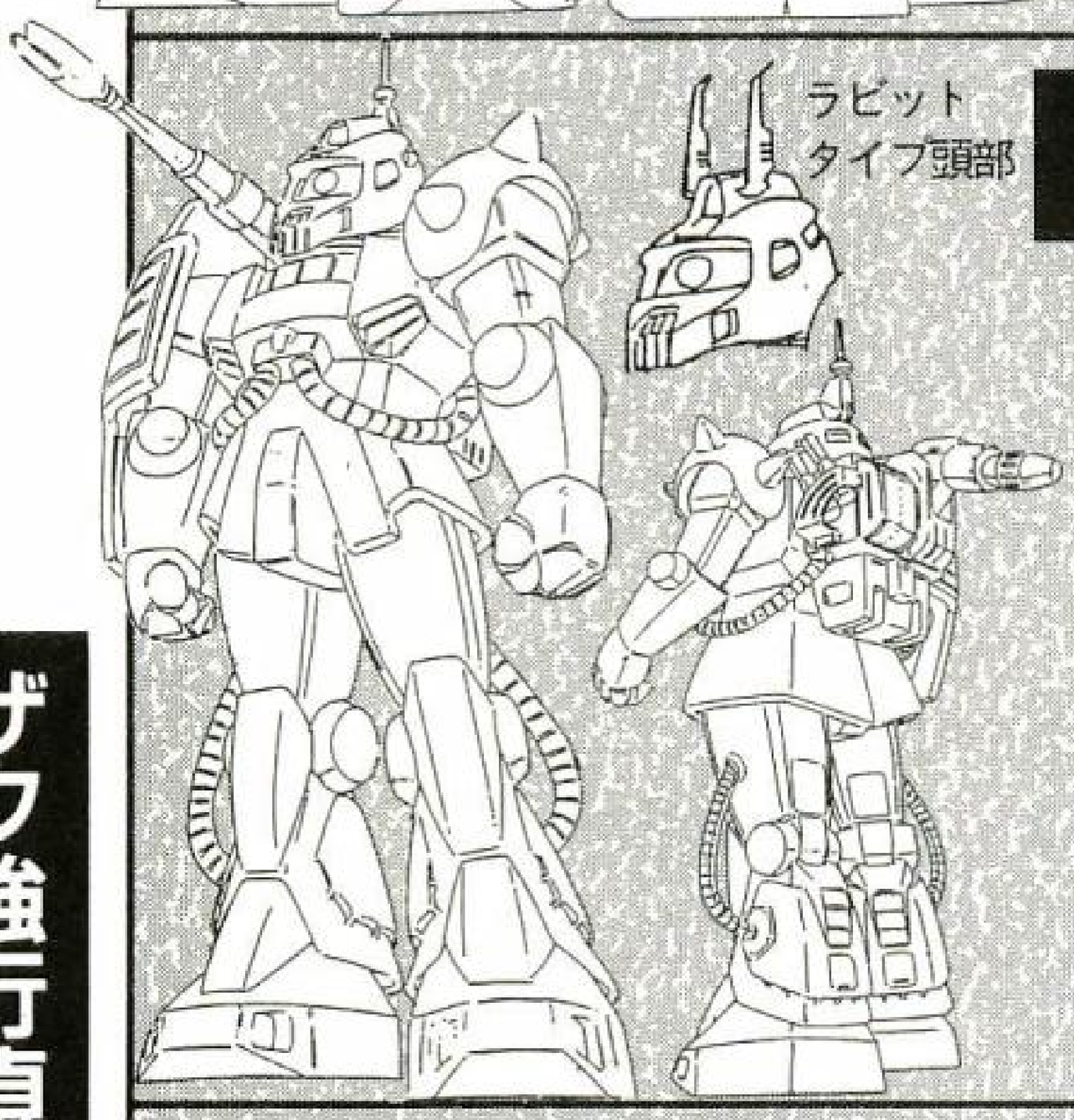
強行偵察機としてMS－06Fを改造した機体。改造点としては頭部モノアイの可動範囲を拡げ、サブカメラも増設、さらに緊急離脱用スラスターを装備させている。目的はあくまで偵察であり、戦闘には参加しない。

シールド



カメラガン





ラビットタイプ頭部

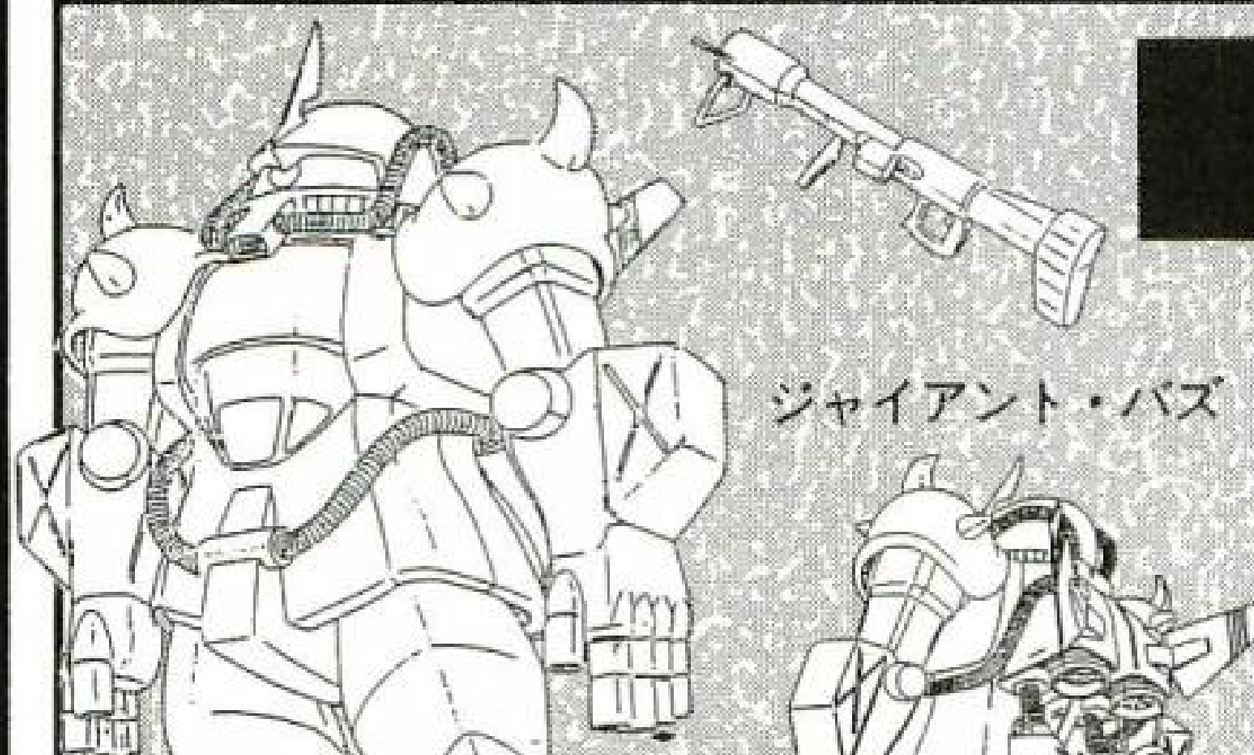
MS-06K
ザク・キャノン

この機体は当初対空防御用として開発されていたが、連邦軍のRX－77タイプの情報を得たことにより、対MS戦の支援用として再設計されたものである。その過程において、モノアイは全周型となり、オプション装備として考えられていたキャノン砲もランドセルと一体化され、他の機体への換装も可能となっている。

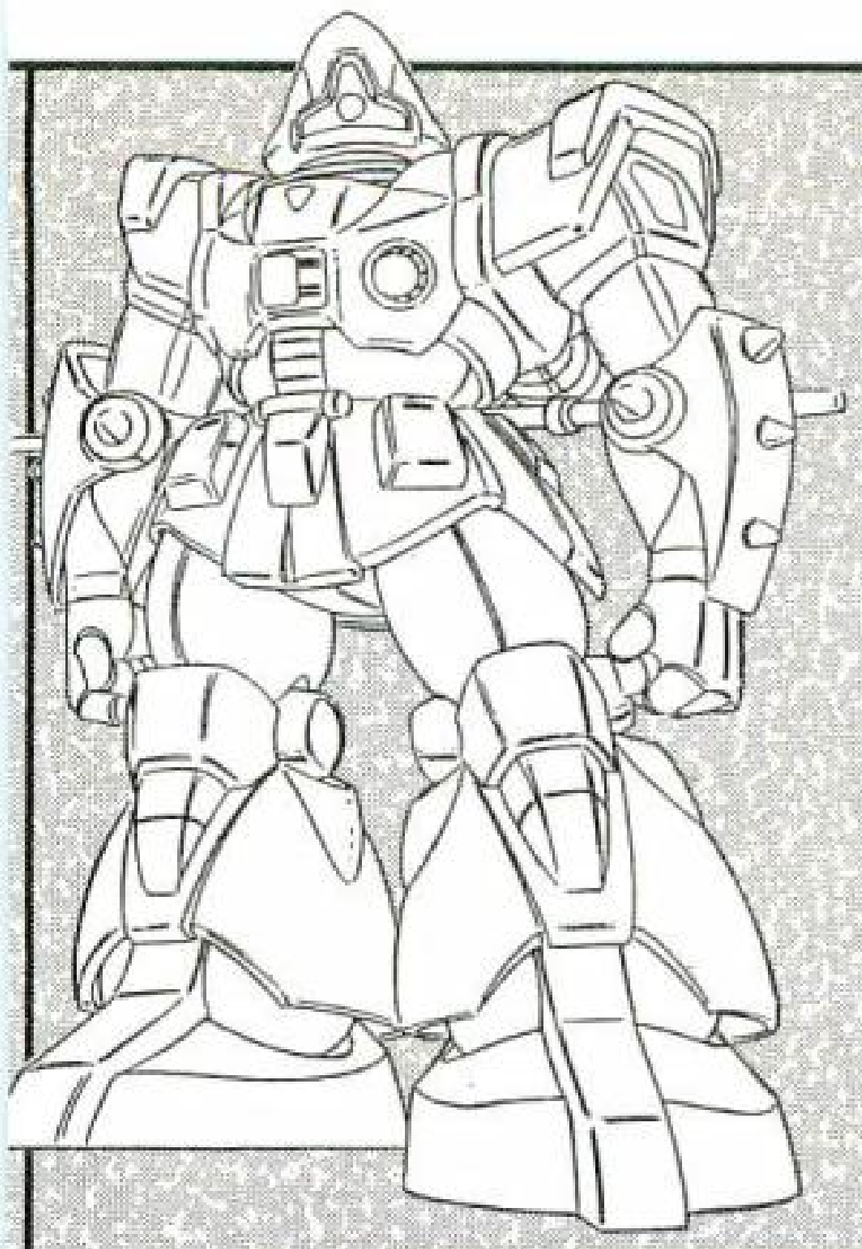
ジャイアント・バズ

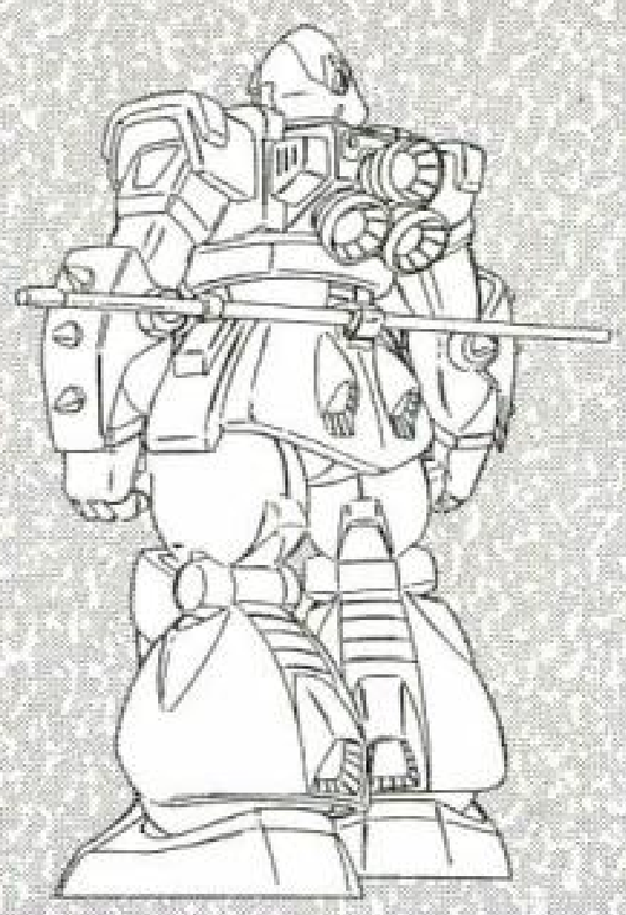
MS-07H
グフ飛行試験型

陸戦用MSに飛行能力を持たせるために試作された実験機。MS－07Bをベースに徹底的な軽量化と熱各ジェットエンジンの搭載が行われた。だが、推力が根本的に不足しており、4号機が失敗した段階で計画を断念している。だが、その副産物としてMS－09のホバー走行が生み出された。



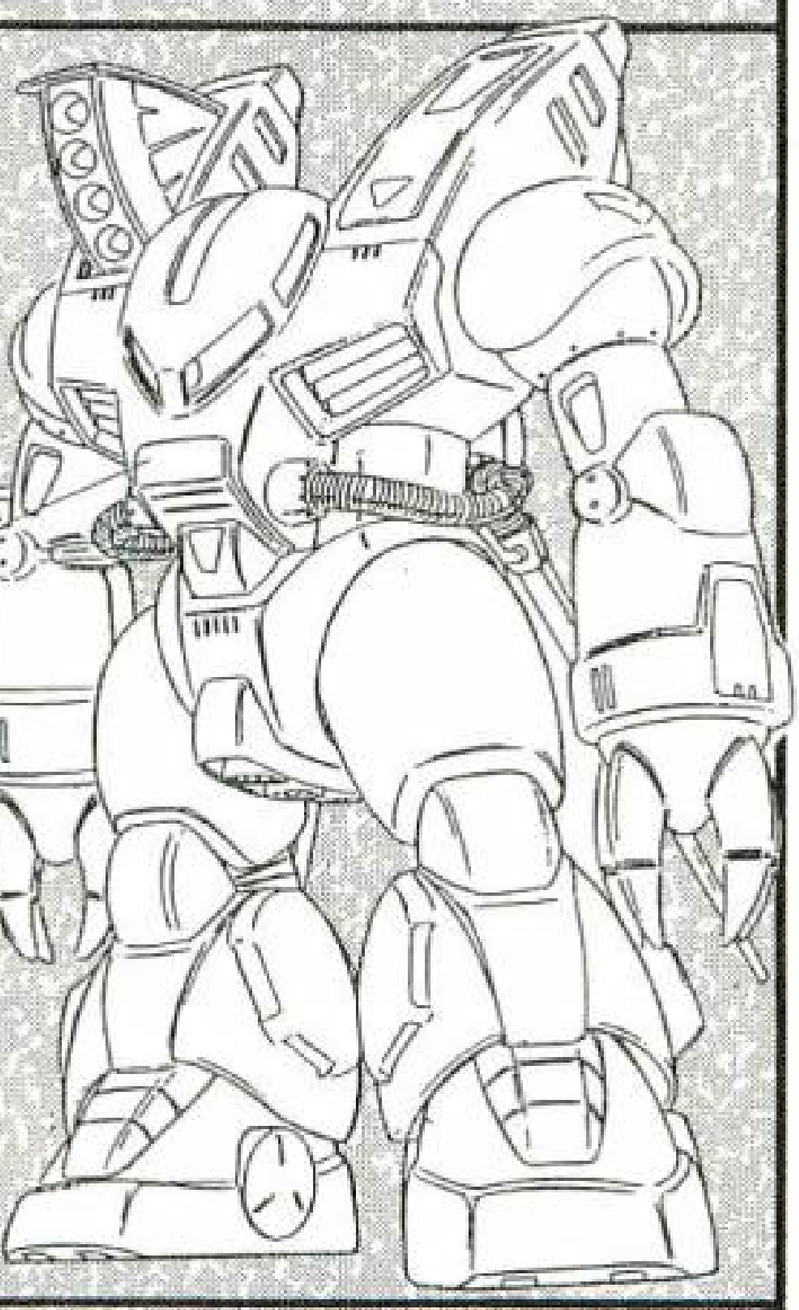
MS-10
ペズン・ドワッジ

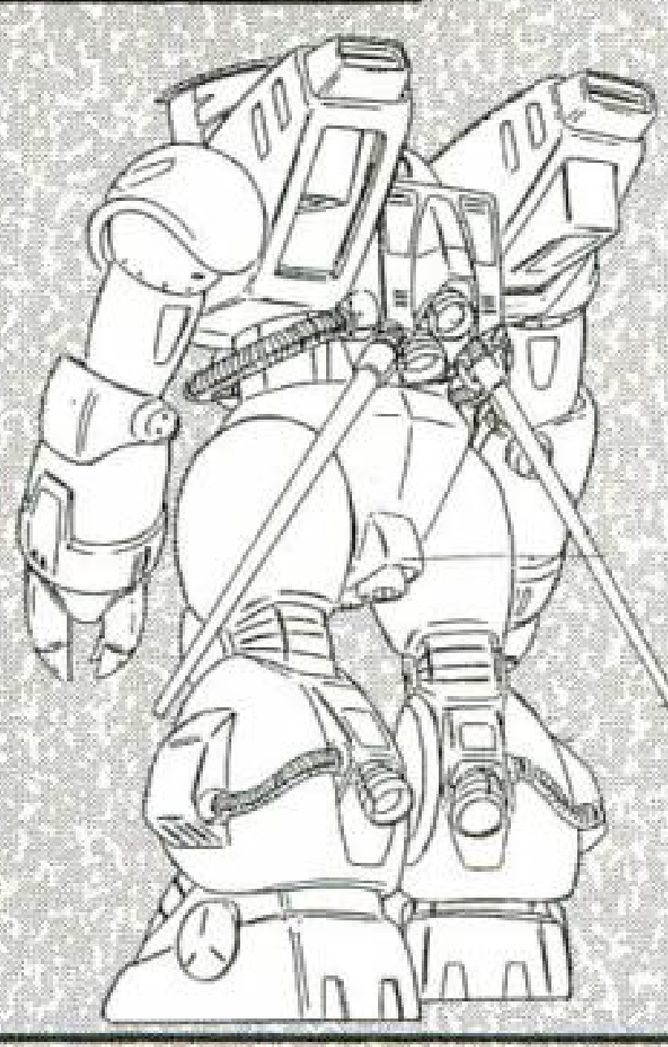




MS－09をベースにした発展型。局地戦用MS開発計画により作られた機体である。ホバー走行が可能で、改造型ジャイアントバズ、ヒートサーベルを装備している。

MS-13
ガッシャ





汎用型のモビルスーツにMSM－07のコンセプトを導入した機体である。クローに準じたコンバットネイル、４連装収能式ミサイルポッド２基、背面には２本の対地センサーを装備している。

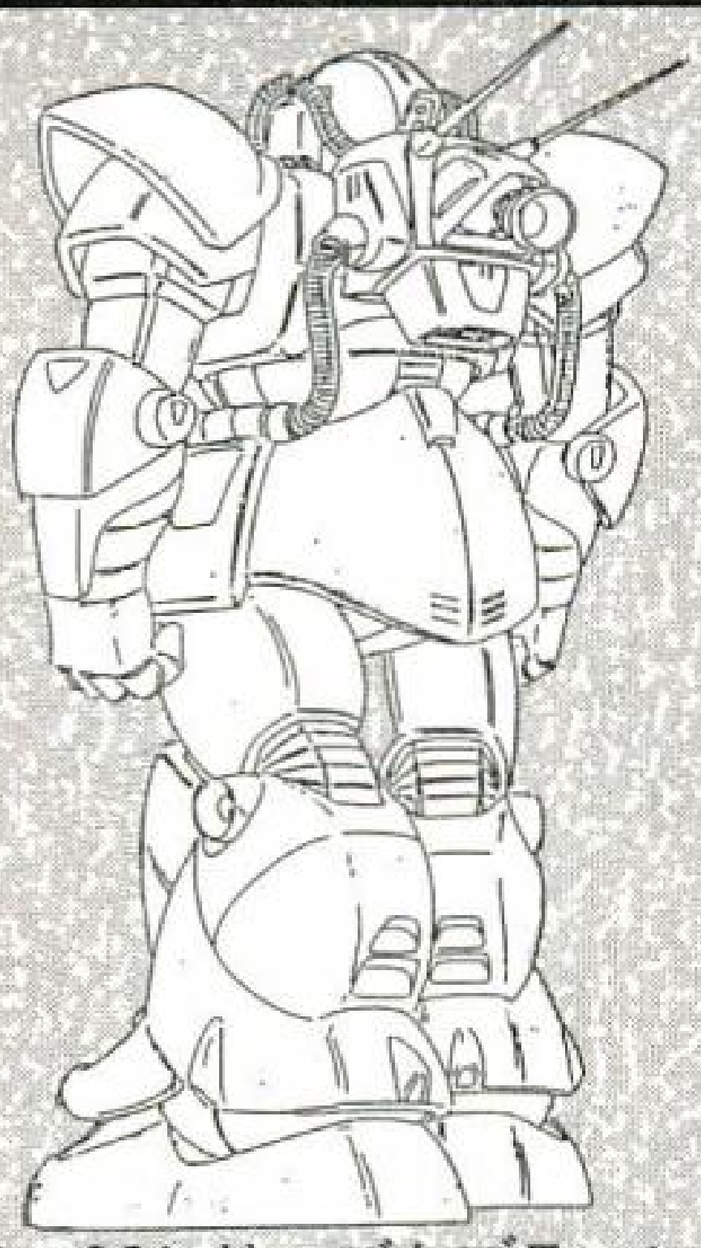
MS-12
ギガン

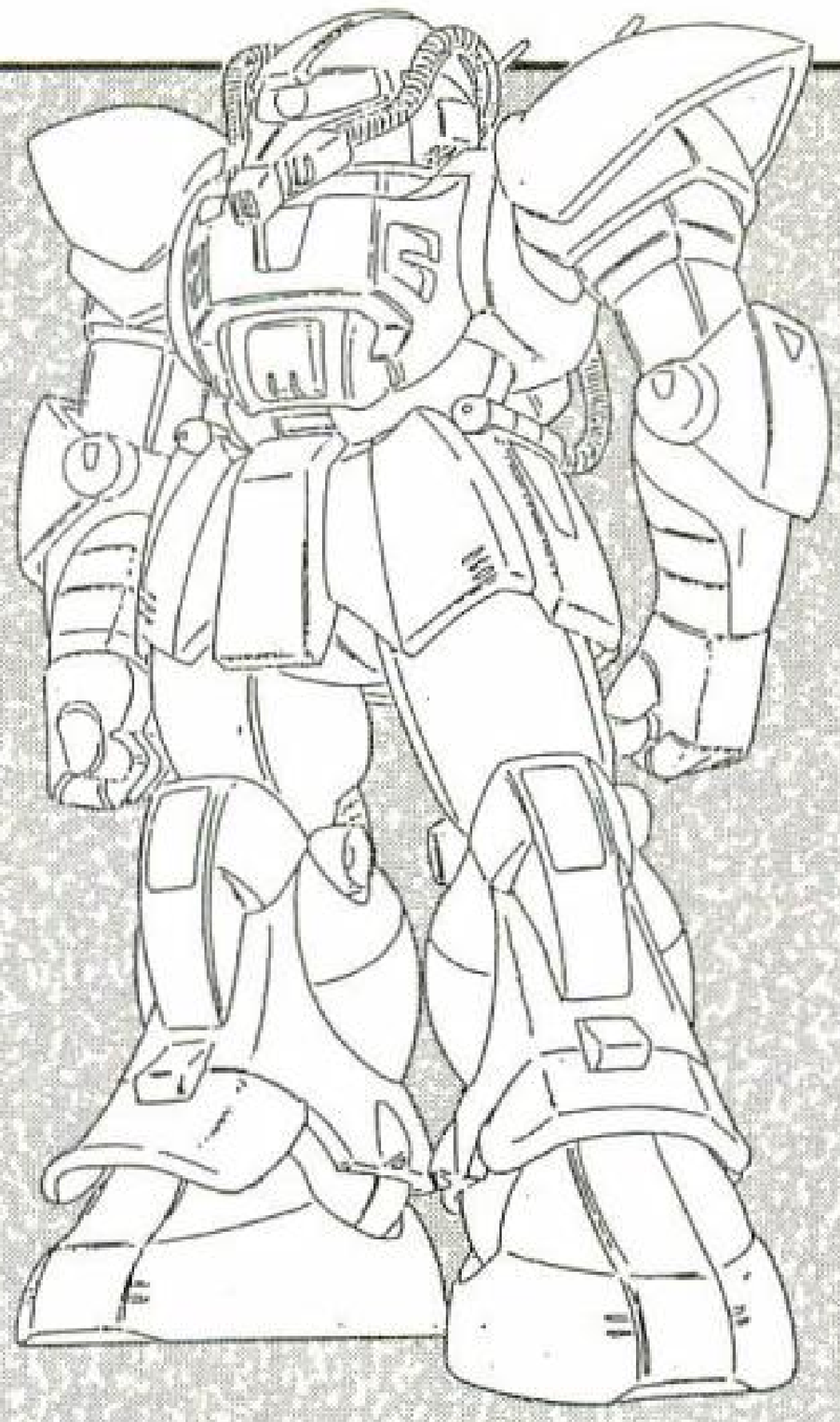




この機体は、対空防衛用として開発されたMSである。走行ユニットはなく、３輪の走行ユニットと４基のサポートスラスターによって移動する。180ミリ無反動砲と４連装120ミリ砲を装備している。

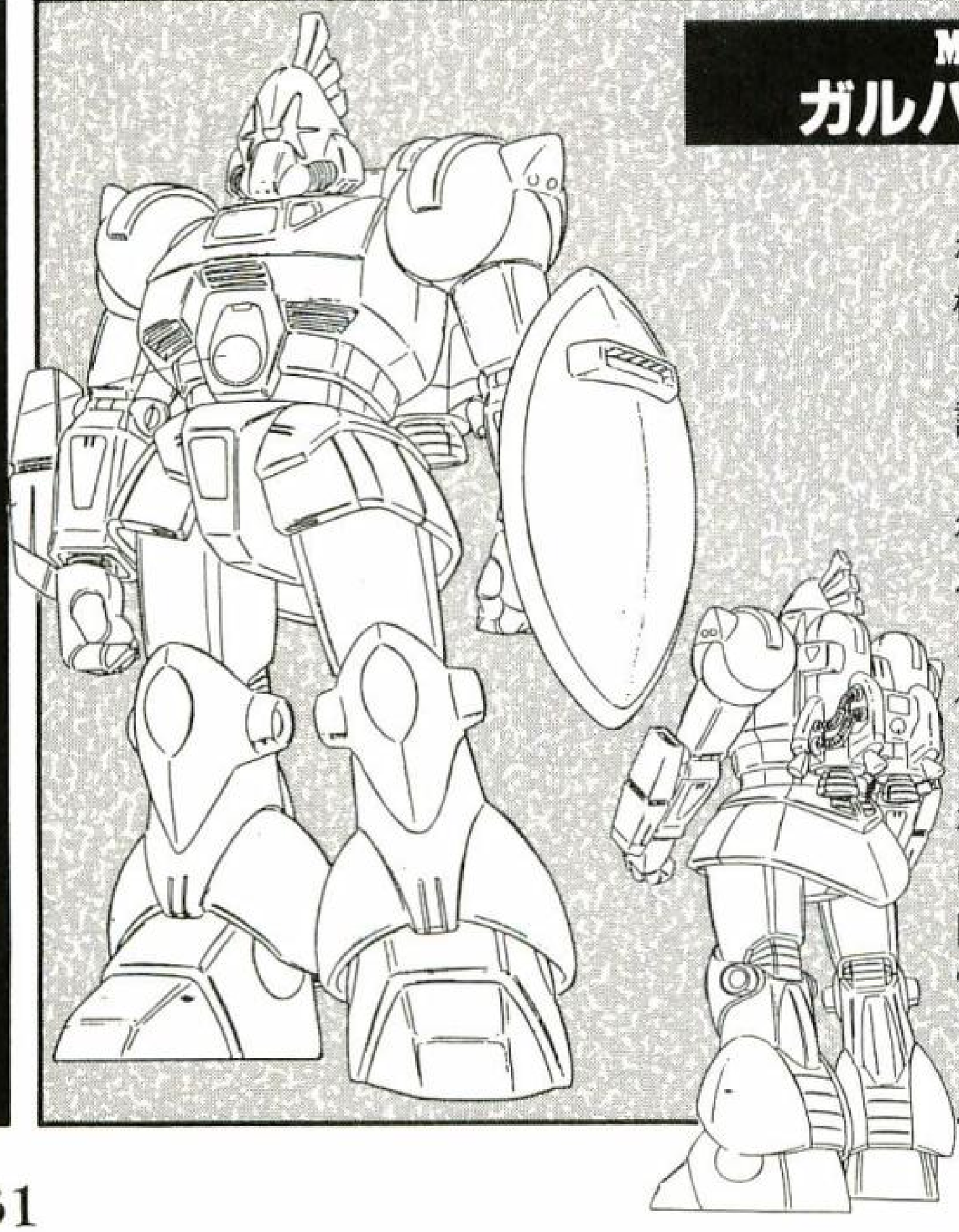
MS-11
アクト・ザク





MS－06シリーズをブラッシュアップし、総合的な運動性の向上を目的として設計された機体。実験的だが、関節部にマグネットコーティング処理を施しており、その優秀な性能のため、大戦終結後に、施設を押収した連邦の手で量産されることになる。

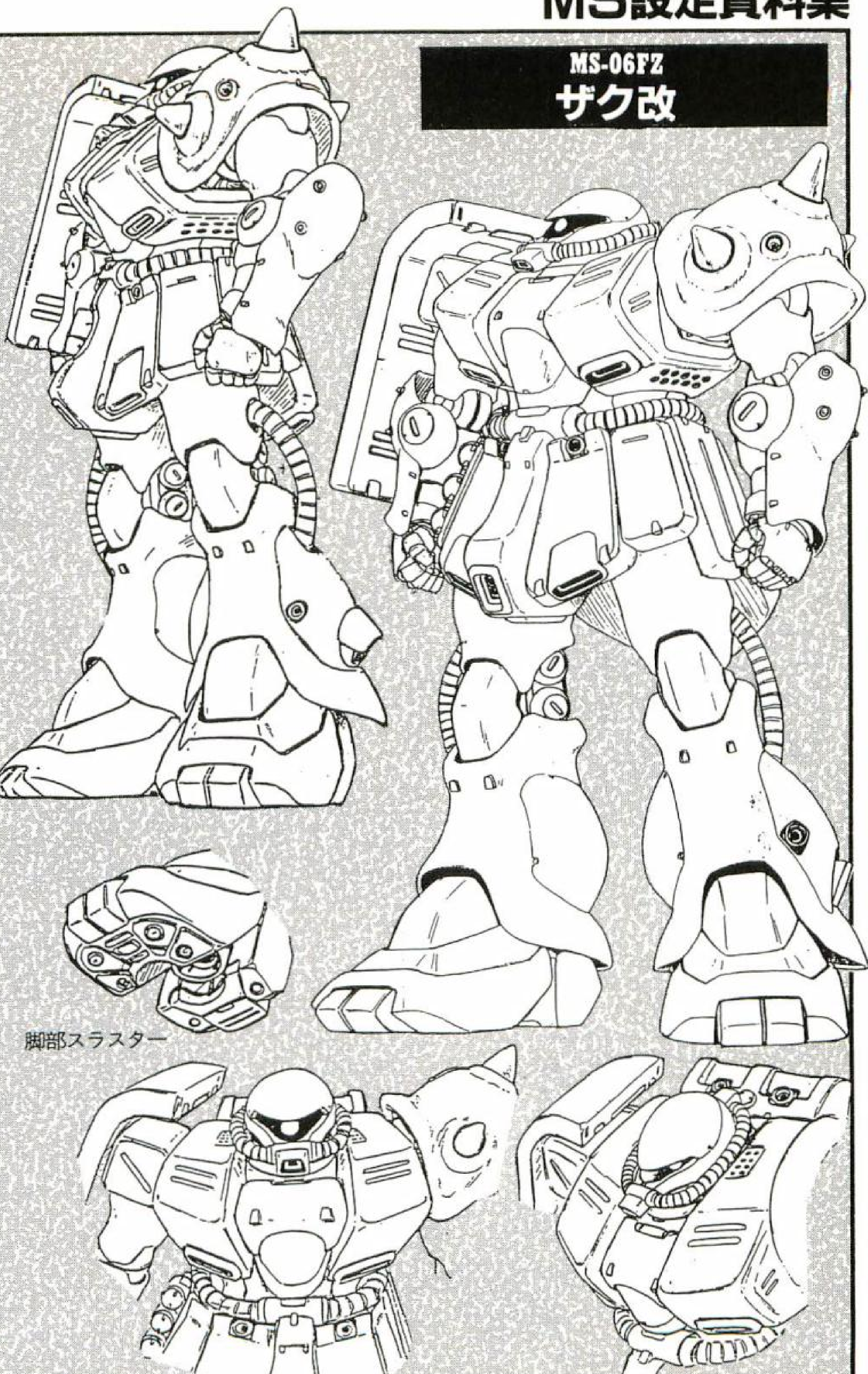
MS-17A
ガルバルディα



格闘戦用に開発されたMS－15の後継機であるが、MS－14との中途妥協的な設計といえよう。中断していた大気圏内飛行能力を実現させるべく、機体の軽量化、スラスターの大推力化、腕部の熱核ジェットエンジンの増設が行われたが、結局は失敗した。だが、開発は続行され、宇宙戦専用のＢ型が生まれた。

MS-06FZ

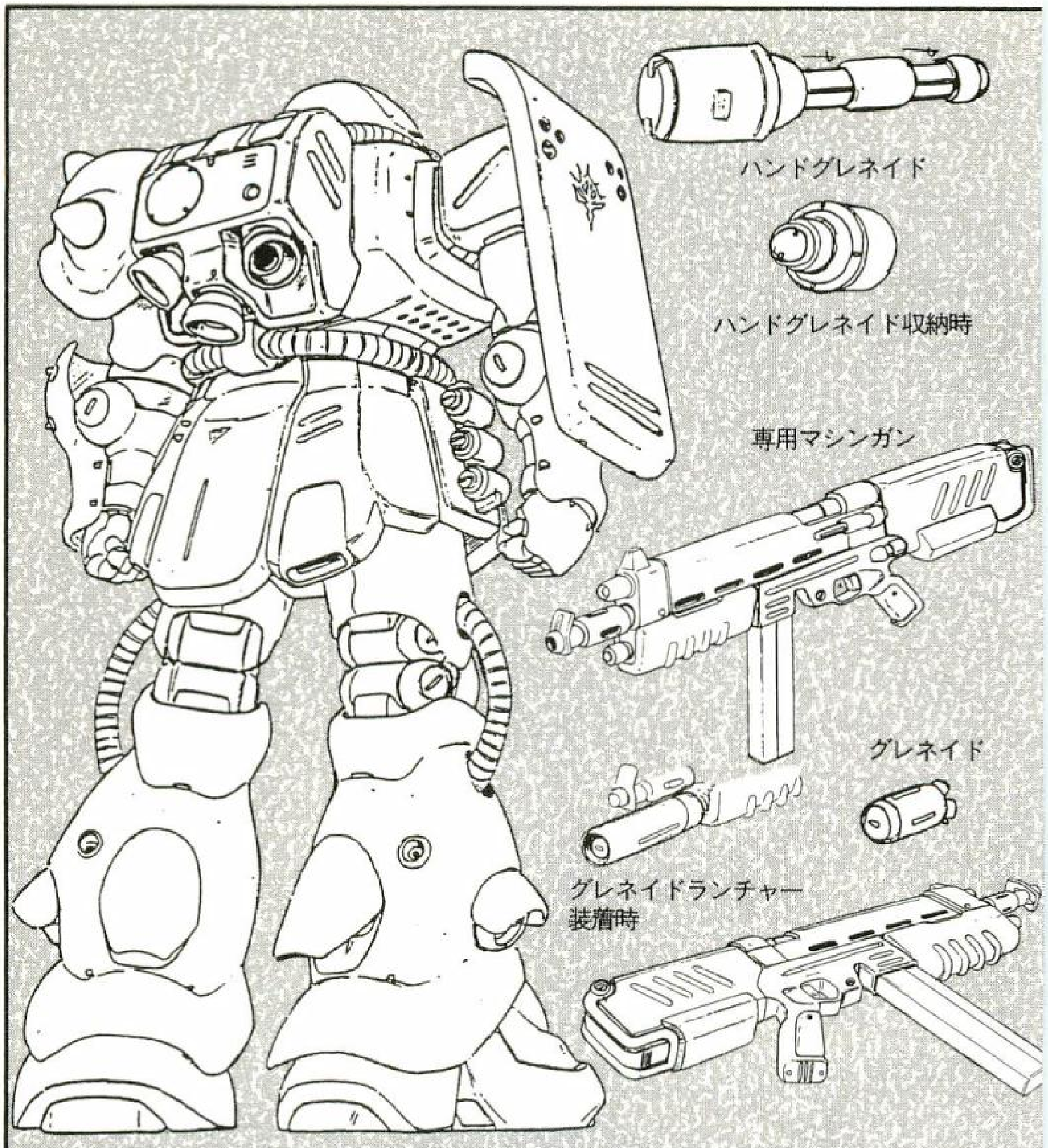
ザク改



脚部スラスター

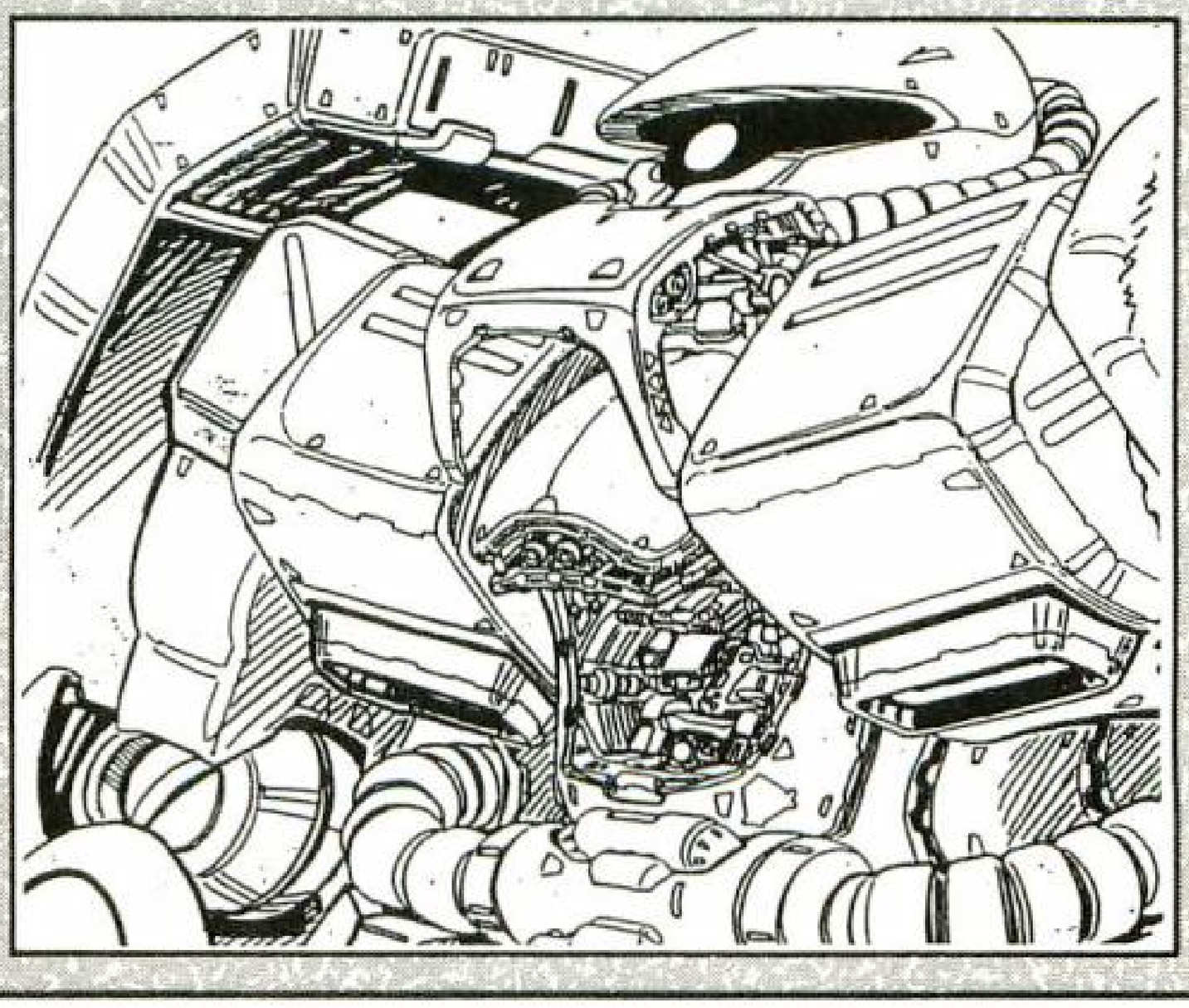
この機体はMS－09RII、MS－14Dと同様に統合整備計画により改修された第2期生産型MSである。だが、他の機種と異なり製造台数が多かったので、全て改修機で型式番号も変更されていない。

ザク改



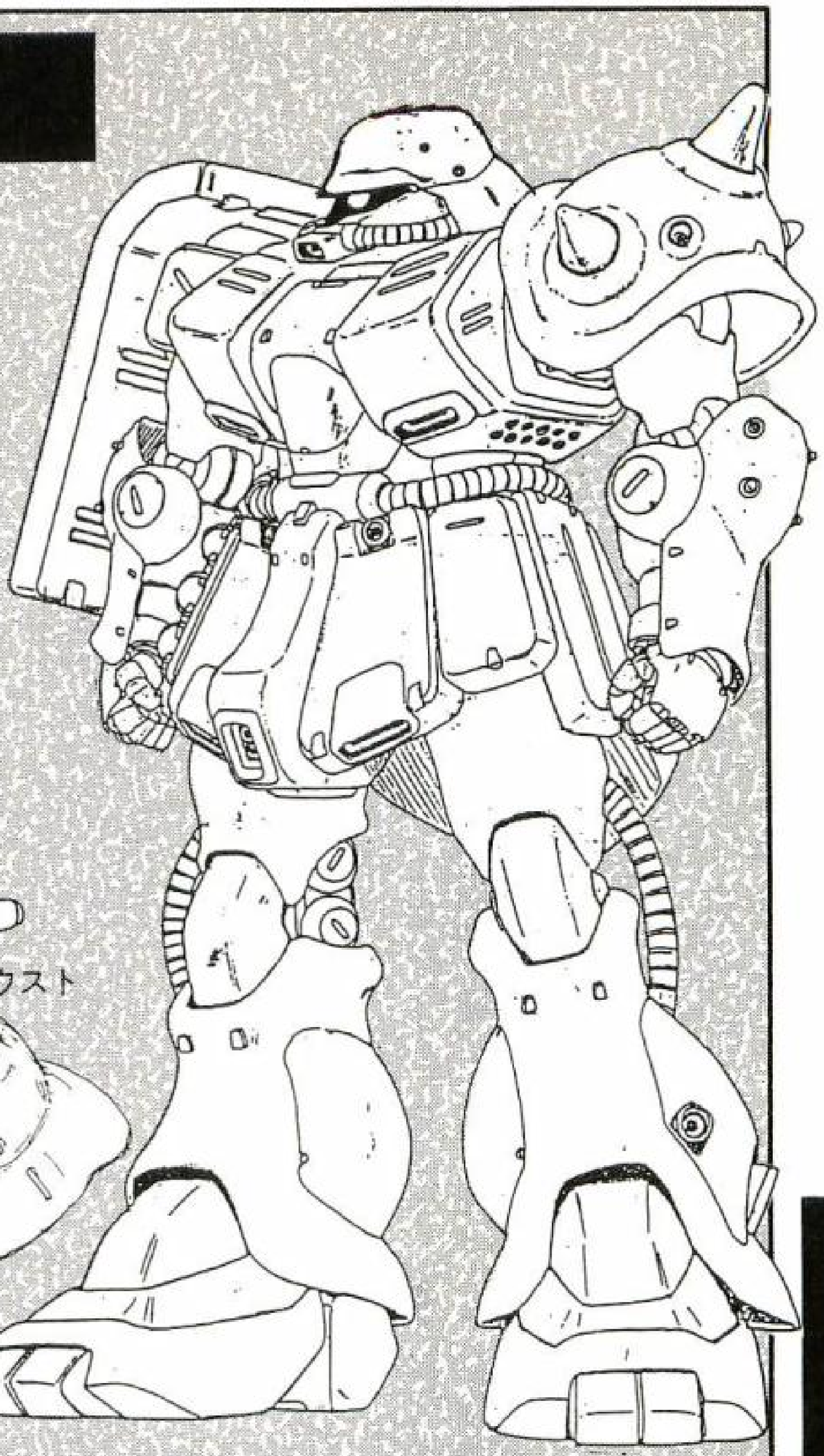
改修点はコクピットの他に機体各所のアポジモーターを大型化し、バックパックのスラスターも大型化させた。総推力は改修前より70%増しになっているが、推進剤の総量は変らず、戦闘最大推力時の限界時間は半分に落ちている。また、武装も一新され、連邦軍のRGM－79に遅れをとることはない。

ザク・コクピットハッチ

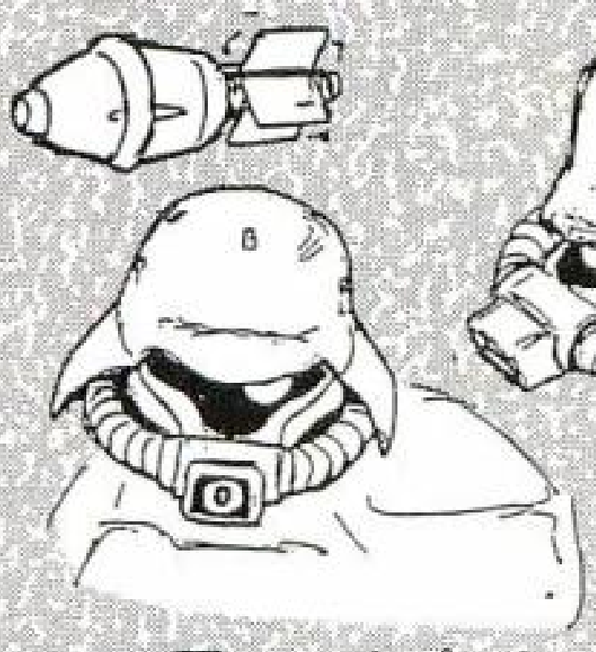


MS-06FZ
サクタイプB

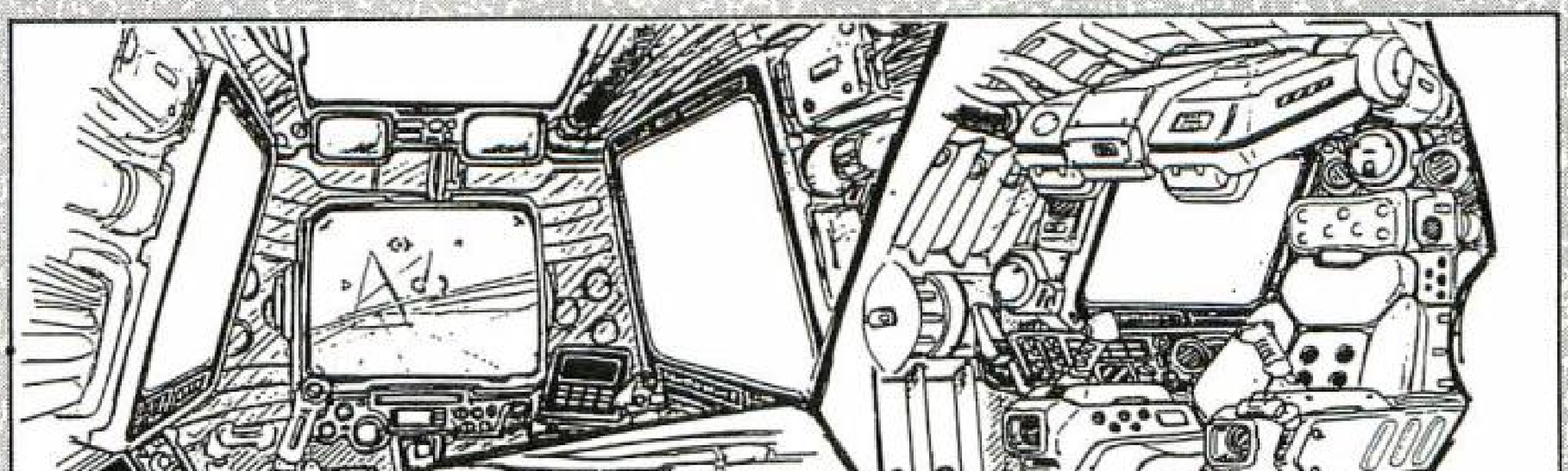
この機体は、現地での修理、あるいは改造の際に、パイロット等の要請による設計を受け入れたものである。大戦末期、機体に明らかな支障をきたさない限りは、マーキングやディテールアップ等は、各部隊の責任で行なわれていた。逆にその結果、MS－06シリーズは数々のバリエーションを生み出し得たと言える。



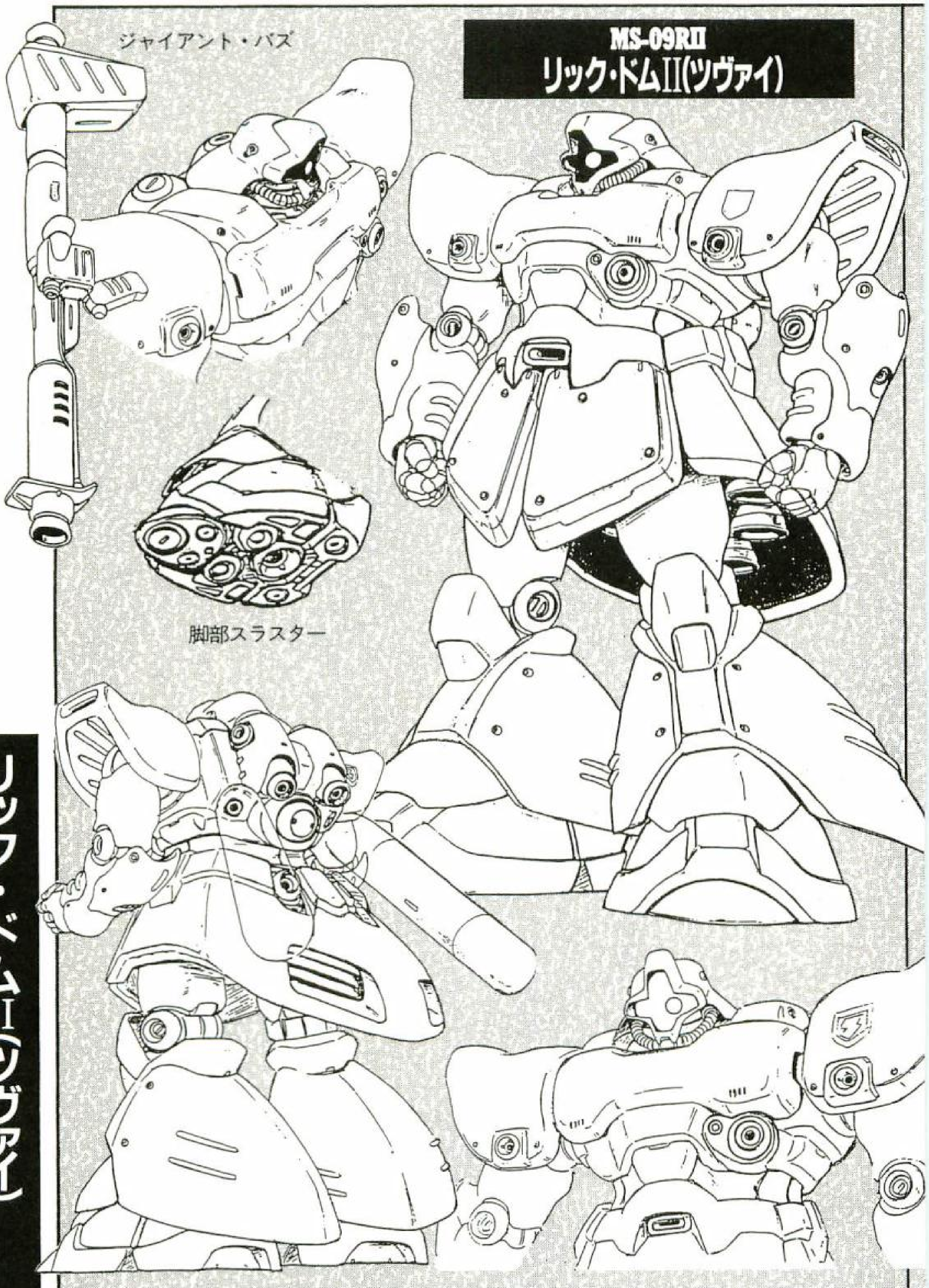
スツルムファウスト



ジオン軍MSコクピット



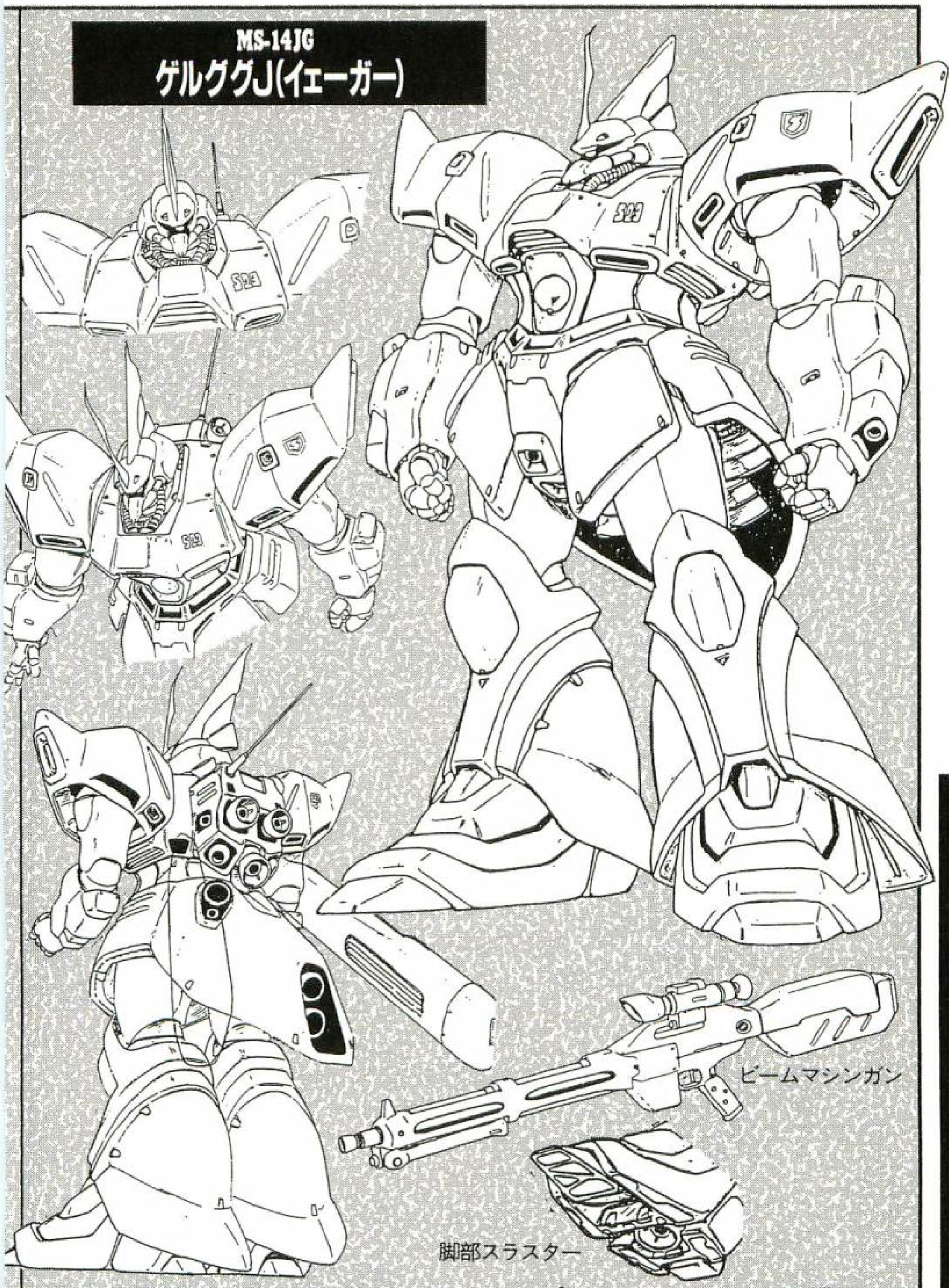
MS-09RII
リック・ドムII(ツヴァイ)



MS－09Rは、大戦の中期以降に大量生産されたモビルスーツで、それぞれの局地戦に応じた改造機も多く生産されている。この機体もそうしたバリエーションのひとつで、性能も従来機より向上している。後のAMX－009の設計母体となった機体もこの機体と同型である。

MS-14JG

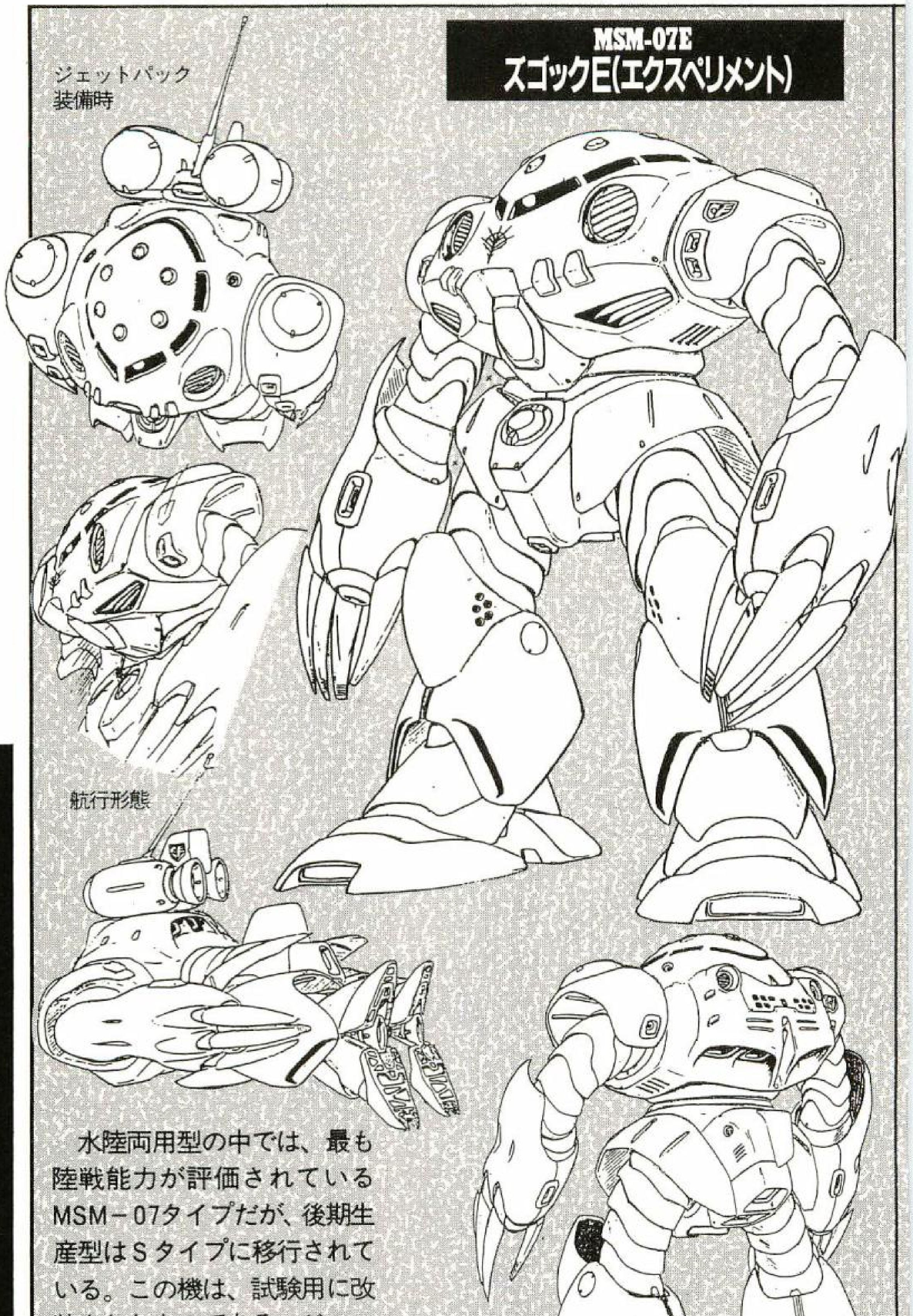
ゲルググJ(イェーガー)



連邦軍のRXシリーズを超えるべく設計されたMS－14シリーズは、それぞれの装備等に応じて、A、B、Cタイプとして分類されているが、この機体は装備に特別な仕様の違いは認められない。しかし、バックパックにプロペラントタンクが装備され、ビームライフルの形状も異なっている。このビームライフルは精度が高く、これを装備したＪＧ型は、ゲルググ狙撃型と呼ばれる最終量産タイプで、生産台数も少ない。

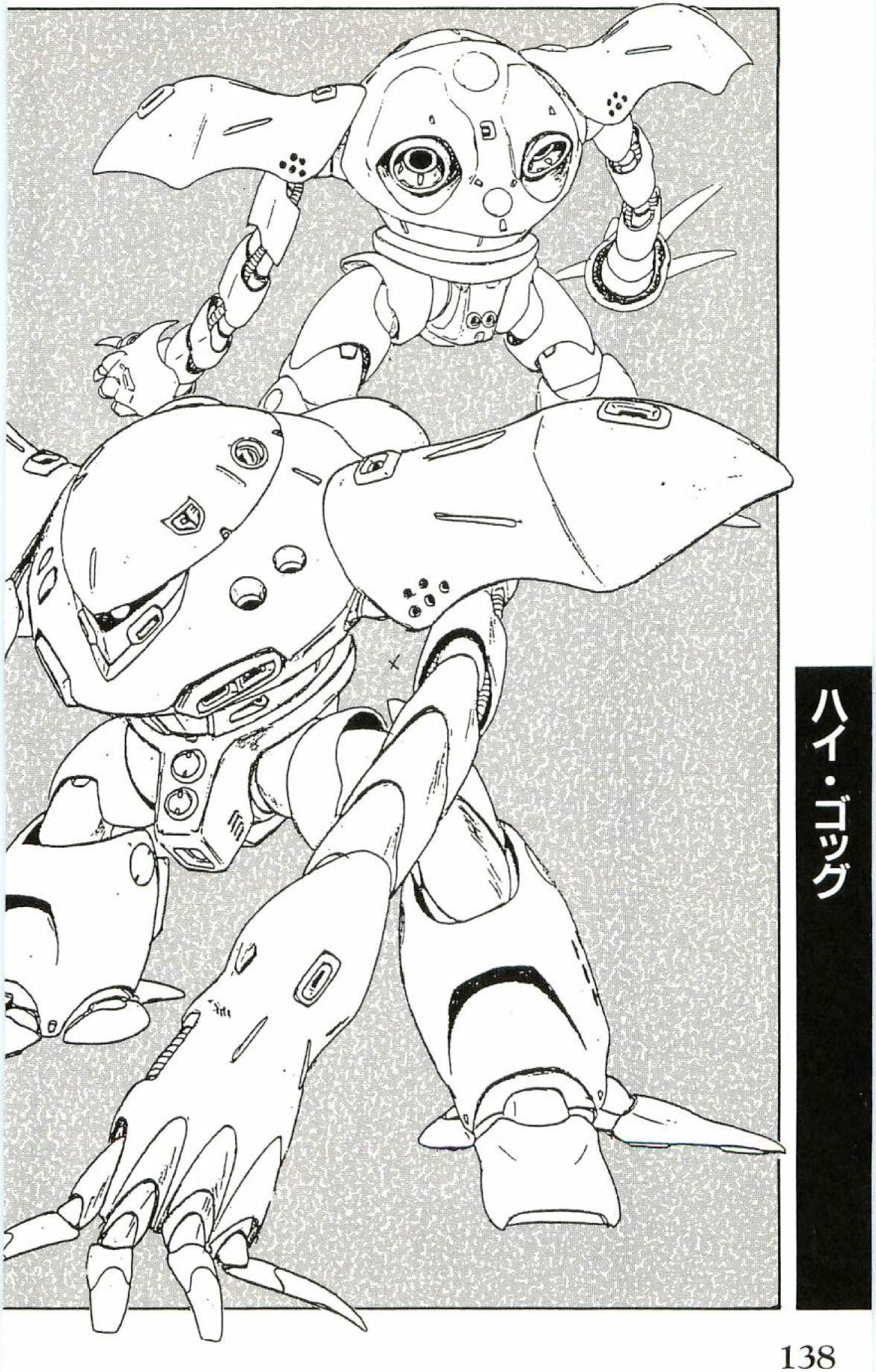
MSM-07E
ズゴックE(エクスペリメント)

ジェットパック
装備時



航行形態

水陸両用型の中では、最も陸戦能力が評価されているMSM－07タイプだが、後期生産型はSタイプに移行されている。この機は、試験用に改装されたものである。ジェットパックを装備することにより、水中航行速度が向上し、航続距離も延長されている。

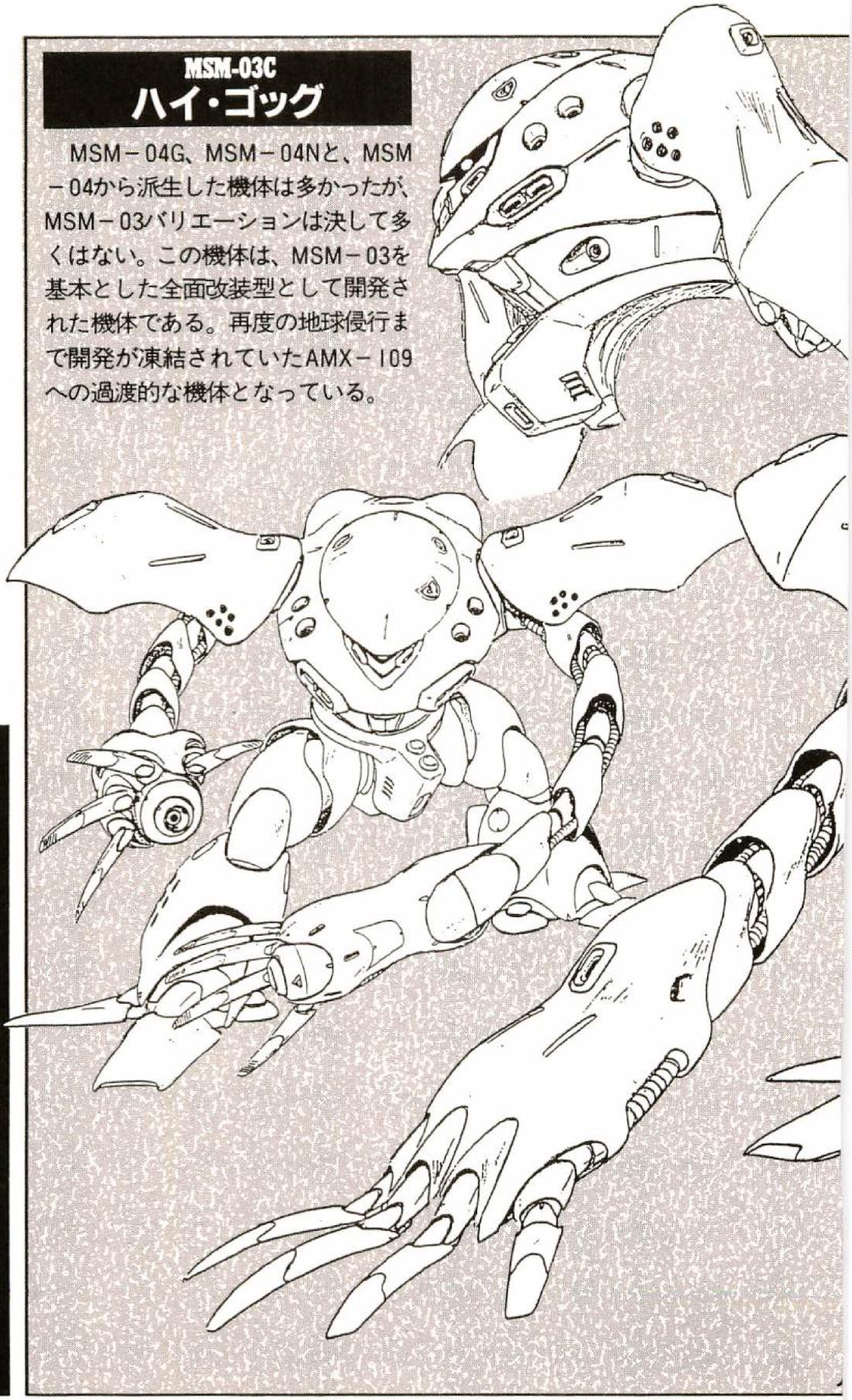


ハイ・ゴッグ

MSM-03C

ハイ・ゴッグ

MSM－04G、MSM－04Nと、MSM－04から派生した機体は多かったが、MSM－03バリエーションは決して多くはない。この機体は、MSM－03を基本とした全面改装型として開発された機体である。再度の地球侵行まで開発が凍結されていたAMX－109への過渡的な機体となっている。



ハイ・ゴッグ

ミサイルカバー

ハイ・ゴッグ

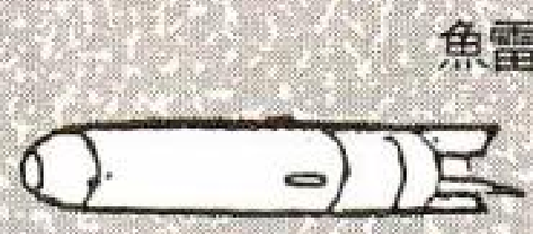
ジェットパック装着

モノアイカバー

航行形態

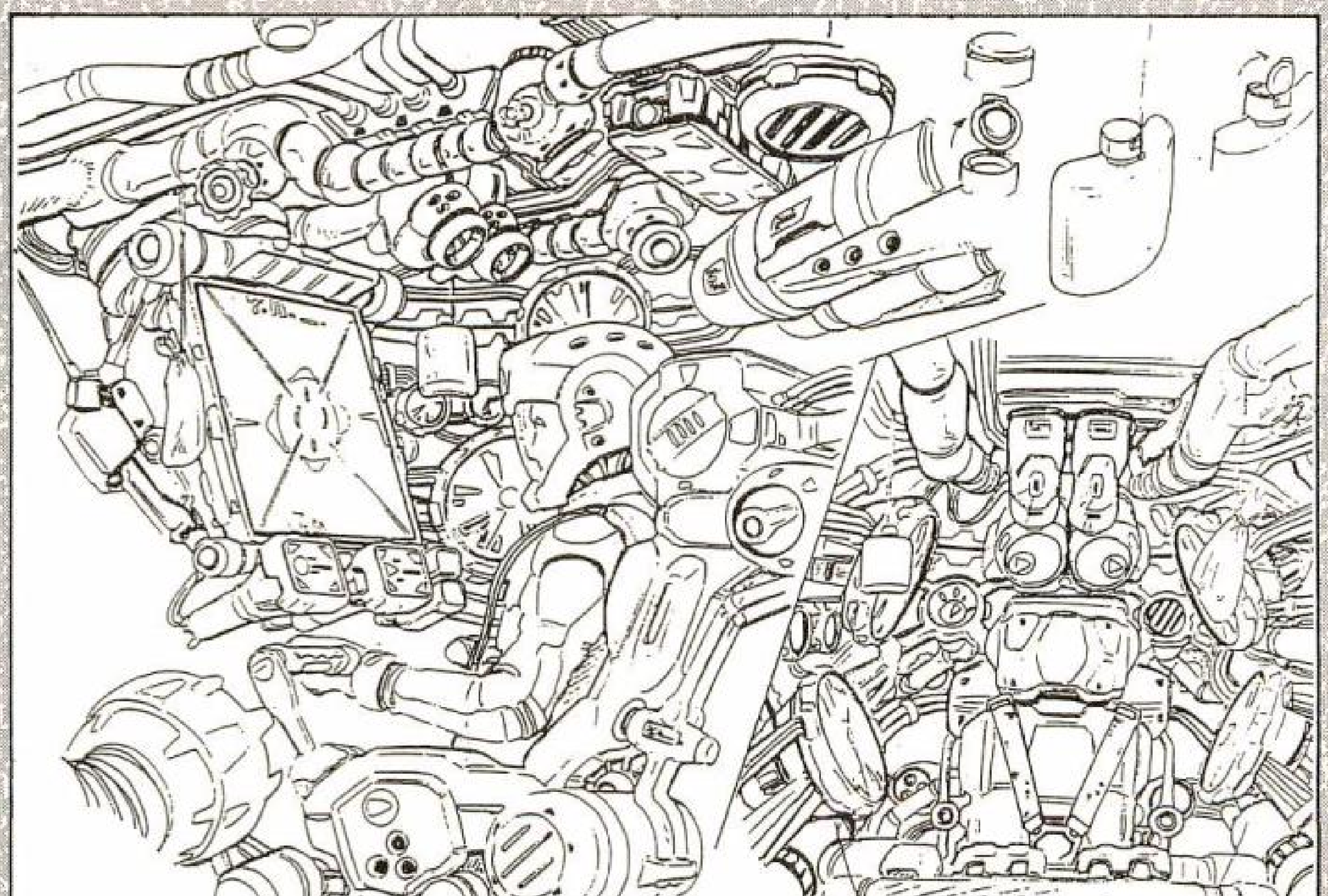
この機体では特に水中航行時の形態が改善されており、MSM－03との決定的な違いとなっている。さらに、MSM－07Eと同様に、コクピットまわりの改修と、水中ジェットパックが装備されている。

それまでの水陸両用モビルスーツでは存在しなかった専用武装も開発されている。ハンドミサイルユニットがそれで、モビルスーツが装備するミサイルとしては極めて大型であり、水中航行に支障が出ないように、カバーも含めての装備となっている。それ以外の武装は、基本的にMSM－03と大きな差は存在しない。





ズゴック、ゴック改コクピット



サ行

サイコミュ 90
サラミス 68
ザンジバル 77
シールド 60
Gアーマー 108
Gスカイ 109
Gファイター 73、108
Gブル 109
ジッコ 79
ジェットパック 60
ジャブロー 75
スキウレ 79
スパイクアーマー 60
スペースコロニー 88
セイバーフィッシュ 72
ソーラシステム 12、71
ソーラレイ 13、79
ソドン 79
ソロモン 12、77

タ行

対ザク用タンク型自走砲 75
耐熱フィールド 60
太陽発電衛星 90
ダブデ 81
チベ 76
TINコッド 72
デブロップ 73
ドダイYS 80
ドップ 80
トリアーエズ 73
ドロス 78
ドン・エスカルゴ 73

ナ行

南極条約 66
ニュータイプ 90
熱核推進システム 60
熱核反応炉 60

ハ行

ハイドボンブ 121
ハイパーバズーカ 106
ハイパーハンマー 106
パゾク 78
パプア 78
パブリク 69
バルカン砲 60
ヒートホーク 60、118
ヒートロッド 60、120
ビームサーベル 60
ビームライフル 93
ビット 59、94、126
ビッグトレー 74
ヒマラヤ 75
ファットアンクル 80
ファンファン 75
V作戦 46
フライマンタ 73
ブリティッシュ作戦 4
プロペラントタンク 94、99
ホワイトベース 69

マ行

マグネットコーティング 94
マゼラアタック 55、81
マゼラン 68
マッドアングラー 81
マニピュレータ 94
ミサイルランチャーバギー 74
ミデア 73
ミノフスキー粒子 90
ミノフスキー・クラフト 91
ムサイ 76
メガ粒子砲 92
モノアイ 94

ヤ行

ユーコン 81

ラ行

ルウム戦役 6、66
ルッグン 80
ルナII 69
61式M.B.T. 74
60㎜バルカン重装甲車 74

PF−78−1	パーフェクトガンダム	19、
RB−79	ボール	16、49、112、
RGC−80	ジムキャノン	18、114、
RGM−79	ジム	15、49、52、
79D	ジム寒冷地仕様	19、49、115、
G	ジム・コマンド	19、49、116、
GS	ジム・コマンド宇宙用	19、52、117
(L)	ジム・ライトアーマー	18、
(SC)	ジム・スナイパーカスタム	18、114、
RMV−1	ガンタンクII	17、49、54、113、
RX−75	ガンタンク	15、47、55、111、
RX−77−1	ガンキャノン	15、47、54、110、
77−3	ガンキャノン重装型	17、113、
77−4	ガンキャノンII	17、49、
RX−78−1	プロトタイプガンダム	16、46、
78−2	ガンダム	15、47、52、106、
78−3	G−3ガンダム	16、46、
TGM−79	ジム・トレーナー	18、
YMS−07	プロトタイプグフ	26、
YMS−09	プロトタイプドム	27、
09D	ドム・トロピカルテストタイプ	28、

兵器&用語

ア行

アナハイム・エレクトロニクス 36
アーマー 50
ア・バオア・クー 13、77
アポジモーター 50
一週間戦争 4
一年戦争 4
衛星ミサイル 79
エネルギーＣＡＰ 94
オールレンジ攻撃 50
オデッサ作戦 10

カ行

ガウ 80
核融合炉 50
ガトル 78
ガンペリー 71
寒冷地用Ａ.Ｐ.Ｃ 75
キャリフォルニアベース 40
ギャロップ 81
キュイ 54、81
クラッカー 50
グラナダ 78
グレネイド 50
グワジン 76
コア・ファイター 72、107
コア・ブースター 72、107
コアブロックシステム 50
コムサイ 77
コロニー落し 65
コロンブス 69

S	ザクII（指揮官用強化型）	20、23、119、
V	ザクタンク	24、128、
W	一般作業用ザク	25、
Z－3	サイコミュシステム試験用ザク	26、
MS－07B	グフ	20、26、39、54、
C－3	グフ重装型	26、
C－5	グフ試作実験機	27、
H	クブ飛行型	27、39、129、
H－4	グフ飛行型	27、
MS－09	ドム	21、39、54、120、
09G	ドワッジ	⇨「MS大図鑑2」
H	ドワッジ改	⇨「MS大図鑑2」
R09	リック・ドム	21、52、120、
09RII	リック・ドムII(ツヴァイ)	34、35、43、52、135、
MS－10	ペズン・ドワッジ	32、130、
MS－11	アクト・ザク	32、43、131、
MS－12	ギガン	32、54、130、
MS－13	ガッシャ	33、54、130、
MS－14A	ゲルググ	21、43、52、121、
B	高機動型ゲルググ	28、52、
C	ゲルググキャノン	28、
JG	ゲルググ J(イェーガー)	34、43、52、136、
S	ゲルググ（指揮官用強化型）	20、
MS－15	ギャン	21、52、121、
MS－17A	ガルバルディα	33、43、131、
B	ガルバルディβ	⇨「MS大図鑑2」
MSM－03	ゴッグ	22、41、57、122、
03C	ハイ・ゴッグ	34、41、56、138、
MSM－04	アッガイ	22、41、56、123、
04G	ジュアッグ	29、56、
N	アッグガイ	29、56、
MSM－07	ズゴック	22、41、57、122、
07E	ズゴックE(エクスペリメント)	34、41、56、137、
S	ズゴック（指揮官用強化型）	22、122、
MSM－08	ゾゴック	29、56、
MSM－10	ゾック	23、41、56、
MSN－01	サイコミュシステム高機動試験用ザク	28、
MSN－02	ジオング（パーフェクトジオング）	32、45、59、
MSX－03	アッザム	31、127、

MS大図鑑PART.1「一年戦争編」

索引

INDEX

●「機動戦士ガンダム」のTV版、劇場版、「MSX」、「MS－X」、「機動戦士ガンダム0080～ポケットの中の戦争」に登場した主要MS・MA、及び主要兵器と主要用語をアルファベット・50音順にまとめました。見出しの単語を選び、記されているページ数を見て下さい。その単語が解説、あるいは関連する事項がわかるようになっています。なお、MS・MAに関しては型式番号をアルファベット順に検索できるようになっています。

MS&MA

EMS－05	アッグ	29、
FA－78－1	フルアーマーガンダム	17、
FA－78－2	ヘビーガンダム	16、
MA－04	ザクレロ	30、125、
MA－05	ビグロ	30、45、59、124、
MA－08	ビグ・ザム	31、45、59、126、
MAM－07	グラブロ	30、45、58、124、
MAN－03	ブラウ・ブロ	30、45、58、125、
MAN－08	エルメス	31、45、59、126、
MS－05	ザクⅠ	20、37、52、118、
MS－06A	ザクⅡ（初期量産型）	38、
C	ザクⅡ（前期量産型）	38、
D	ザク・デザートタイプ	24、54、
E－1	ザク強行偵察型	25、129、
E－3	ザクフリッパー	25、
FZ	ザク改(後期量産型)	20、43、52、118、132、
FS	ザクⅡ（格闘戦性能強化型）	23、
J	陸戦用ザク	39、55、57、119、
K	ザクキャノン	25、39、54、129、
M	ザク・マリンタイプ	24、39、56、128、
R－1A	高機動型ザク（黒い3連星タイプ）	24、52、
R－2	〃（ジョニー・ライデンタイプ）	23、

機動戦士ガンダム MS大図鑑 PART.1

目次

CONTENTS

「一年戦争編」

MS戦史 M.S. War History. ……4

MS名鑑 M.S. Catalog. ……15

MS開発史 M.S. Development History. ……35

MS性能比較 An abiliy symmetry of M.S. ……54

ガンダム・オフィシャル・レポート GUNDAM Official Report. ……61

1.歴史 History. ……62

2.通常兵器 Weapon. ……68

3.機動兵器 Mobile Weapon. ……82

4.先端技術 High-Technology. ……88

MS操縦マニュアル M.S. Pilot Manual. ……95

MS設定資料集 M.S. Design collection. ……105

MS用語事典 M.S. Giossary. ……50、60、94

索引 Index ……145

■発行日　1989年2月20日初刷　1990年3月30日八刷
■発行人　山科　誠
■編集人　加藤　智
■発　行　株式会社バンダイ
■印刷・製本　共同印刷株式会社
■編集・構成　伸童舎
■協力　サンライズ
■定価はカバーに表示してあります
〒111東京都台東区駒形2-5-4
（営業）東京都新宿区新宿1-26-6 加藤ビル6F
（営業TEL）03-5379-1911

ISBN4-89189-006-1